

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第115集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

矢田遺跡 II

平安時代住居跡編 (2)

1 9 9 1

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

資料	(財)群馬県埋蔵文化財
98-	
NO.4899	平成10年5月13日

01-321
7
(8)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第115集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

矢田遺跡 II

平安時代住居跡編 (2)



1 9 9 1

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



「物部郷長」の刻字紡錘車

序

上信越自動車道建設工事は、開通に向けて着々と進行しており、矢田遺跡のある吉井インターチェンジ（仮称）付近も景観が変わりつつあります。

本遺跡の発掘調査は、昭和61年度から約5年間、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって本格的に行われてまいりました。

この地域は、国指定史跡の多胡碑や、国の歴史書のひとつである『続日本紀』の関連記事から「上野国多胡郡八（矢）田郷」に当たるのではないかと推定されておりました。発掘調査からも「八田郷」と文字のある紡錘車をはじめ、注目すべき文字資料が出土し、古墳時代から平安時代にかけて大集落があったことが確認されております。

一方、矢田遺跡の整理は平成元年度から7年計画で始まり、既に第1分冊の報告書を刊行し、今回は第2分冊に当たります。今回報告する平安時代住居跡編（2）には、「物部郷長」と刻まれた紡錘車を出土した住居跡も含まれており、全国的な視野の中での考察や、古代の当地域を理解する上で欠かせない歴史的環境にも着目しています。平安時代の集落についても多くの資料を報告しており、既刊・続刊と合わせて、県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、本県の歴史を解明していく一助となることを願っております。

平成3年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「矢田遺跡」の発掘調査報告書である。本書は、平安時代住居跡編(2)で、矢田遺跡の調査成果の分冊の2である。
- 2 矢田遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田の周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用している。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者

- (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年4月1日～平成2年8月27日（一部継続中）
調査担当者 昭和61年度 鬼形芳夫（専門員、昭和62年度以降課長）
中沢 悟（主任調査研究員）
内木真琴（調査研究員、現群馬県立高崎北高教諭）
昭和62年度 中沢 悟（同上）、内木真琴（同上）
春山秀幸（調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭）
昭和63年度 中沢 悟（同上）、春山秀幸（同上）、関口功一（調査研究員）
平成元年度 中沢 悟（同上）、関口功一（同上）、富田一仁（調査研究員）
平成2年度 中沢 悟（同上）、富田一仁（同上）、関口博幸（調査研究員）

- (2) 整 理 整理期間 平成2年4月1日～平成3年3月31日、整理担当者 関口功一

- (3) 事 務 常務理事 白石保三郎（昭和61～63年度）、邊見長雄
事務局長 井上唯雄（昭和61・62年度）、松本浩一
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄
調査研究部長 上原啓巳（昭和61～63年度）、神保侑史
関越道上越線調査事務所所長 井上 信（昭和61～63年度）、高橋一夫
総括次長 片桐光一（昭和61～平成元年度）、大沢友治
次 長 原田恒弘（昭和62年度）、徳江 紀
課 長 長谷部達雄（昭和61年度）、鬼形芳夫
庶務課 係長代理 黒澤重樹（昭和61～63年度）、宮川初太郎
主任 国定 均（昭和63～平成元年度）、笠原秀樹
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、後閑玲子、田中智恵美

- 6 報告書作成関係者

- 編 集 関口功一
本文執筆 第1章 関口功一・関口博幸、第2章 富田一仁・関口功一
第3章 鬼形芳夫・中沢 悟・内木真琴・春山秀幸・関口功一
（分担は、住居跡の事実記載の末尾に明示した）
第4章 第1節 小林昌二、第2節 関 和彦、第3節 矢野建一

第4節 関口博幸・関口功一、第5・6節 関口功一

付篇1 井上 巖、付篇2 陣内主一・菊池 実・関口功一

遺構写真 鬼形芳夫、中沢 悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一

遺物保存処理 関 邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

北爪健二（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員）

小材浩一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員）

遺物写真 佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

遺物観察 関口功一

整理補助 秋元経子、遠藤栄子、黒澤 汎、古賀文江、斎藤文江、高橋幸子、温井久子

委託関係 【航空写真】(株)青高館、【遺構測量、遺構・遺物トレース】(株)測設

【胎土分析】第四紀地質研究所

- 7 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
- 8 報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、50音順）

吉井町教育委員会、新井 仁、井上唯雄、井上 太、岩本次郎、大平 聡、加藤 修、鹿沼栄輔、唐沢保之、川原秀夫、菊池 実、小林昌二、小森紀男、坂口 一、陣内主一、関 和彦、高橋一夫、田熊清彦、津野 仁、東野治之、仲山英樹、野田嶺志、能登 健、橋口尚武、平川 南、前沢和之、前原 豊、松田 猛、宮下健司、宮瀧交二、茂木由行、森田 悌、矢野建一、綿貫鋭次郎







9 発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、(故)新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井 緑、新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚 房、伊倉茂登子、今井 好、浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、栗原 清、黒沢敦子、黒沢京子、小島八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀 大、紫藤カヲル、紫藤 孝、篠崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田 嵩、高田三枝子、高橋千恵子、高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃 満、寺尾克代、中村いち、櫛島静子、櫛島豊統、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、林 敏子、原口葉子、平田 昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ヶ島富二郎、三木時一、宮下憲子、村上繁代、百瀬美子、森 利子、森 基司、矢田部喜代美、山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ子、(故)吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子

（敬称略、50音順）

上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。
住居跡 $\frac{1}{60}$ 、竈・貯蔵穴等付属施設 $\frac{1}{90}$ を原則に、基準としてスケールを配している。
- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。
- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す（国土座標第IX系）。
- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。
土器については、坏・埴・皿等は $\frac{1}{3}$ 、甕・羽釜・甗・壺等は $\frac{1}{4}$ 、瓦 $\frac{1}{4}$ 、紡錘車・土錘 $\frac{1}{3}$ 、砥石・鉄製品 $\frac{1}{3}$ を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。
- 5 遺構及び遺物実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。
(遺構)  遺構下部  焼土  灰  粘土
(遺物)  緑釉・灰釉陶器施釉部分  黒色処理部分
その他の場合はその都度示す。
遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したが、シンボル・マークは下記のことを示す。
● 土器 △ 石 ▲ 鉄製品 ■ 瓦 ★ 石製品 ☆ 鉄製紡錘車 □ 銚帯
- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。
- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。
- 8 住居跡の面積値は、プランメーターで3回計測し、その平均値を用いている。
- 9 住居跡の時期区分の基準となる土器の年代観は、基本的に（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・陣場遺跡』（1981年）に拠る。
- 10 本文中の石材名は、陣内主一氏の鑑定により、分類等は本報告書付篇2に対応する。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
表 目 次
図版目次
抄 録

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	関口博幸・関口功一……	3
第2章 地理的環境及び歴史的環境 —矢田遺跡をとりまく歴史的環境（承前）—	富田一仁・関口功一……	7
第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）	鬼形芳夫・中沢 悟・内木真琴・春山秀幸・関口功一	
第1節 概 要		18
第2節 竪穴住居跡と出土遺物		20
第4章 若干の考察及びまとめ		
第1節 矢田遺跡集落成立の前後	新潟大学 小林昌二……	204
第2節 「物部郷長」の世界	共立女子第二高 関 和彦……	212
第3節 鑄川流域の集落遺跡と貫前（抜鋒）・宇藝神社	立教大学 矢野建一……	219
第4節 物部と石上	関口博幸・関口功一……	227
第5節 出土した文字資料（承前）		237
第6節 小 結		240
付篇1 矢田遺跡出土土器類の胎土分析	第四紀地質研究所 井上 巖……	242
付篇2 矢田遺跡出土の石材の鑑定結果について	陣内主一・菊池 実・関口功一……	251

写真図版
付 図

挿 図 目 次

- 第 1 図 矢田遺跡調査区及びグリッド配置図
第 2 図 矢田遺跡付近の字名
第 3 図 富岡市周辺の字名と条里型方格地割
第 4 図 吉井町長根地区の地割
第 5 図 多胡郡域概念図
第 6 図 矢田遺跡遺構分布図
第 7 図 矢田遺跡周辺図
第 8 図 1号住居跡実測図(1)
第 9 図 1号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 10 図 1号住居跡出土遺物実測図(2)
第 11 図 1号住居跡出土遺物実測図(3)
第 12 図 3号住居跡実測図
第 13 図 3号住居跡出土遺物実測図(1)
第 14 図 3号住居跡出土遺物実測図(2)
第 15 図 4号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第 16 図 4号住居跡出土遺物実測図(2)
第 17 図 4号住居跡出土遺物実測図(3)
第 18 図 12号住居跡実測図
第 19 図 12号住居跡出土遺物実測図(1)
第 20 図 12号住居跡出土遺物実測図(2)
第 21 図 13号住居跡実測図
第 22 図 13号住居跡出土遺物実測図
第 23 図 16号住居跡実測図(1)
第 24 図 16号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 25 図 16号住居跡出土遺物実測図(2)
第 26 図 21号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 27 図 23号住居跡実測図
第 28 図 23号住居跡出土遺物実測図
第 29 図 85号住居跡実測図
第 30 図 85号住居跡出土遺物実測図
第 31 図 99号住居跡実測図(1)
第 32 図 99号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 33 図 99号住居跡出土遺物実測図(2)
第 34 図 109号住居跡実測図(1)
第 35 図 109号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 36 図 113号住居跡実測図(1)
第 37 図 113号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 38 図 115号住居跡実測図(1)
第 39 図 115号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 40 図 118号住居跡実測図(1)
第 41 図 118号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 42 図 124号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 43 図 125号住居跡実測図(1)
第 44 図 125号住居跡実測図(2)
第 45 図 125号住居跡出土遺物実測図(1)
第 46 図 125号住居跡出土遺物実測図(2)
第 47 図 126号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 48 図 130号住居跡実測図(1)
第 49 図 130号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 50 図 130号住居跡出土遺物実測図(2)
第 51 図 130号住居跡出土遺物実測図(3)
第 52 図 132号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 53 図 146号住居跡実測図(1)
第 54 図 146号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 55 図 158号住居跡実測図(1)
第 56 図 158号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 57 図 158号住居跡出土遺物実測図(2)
第 58 図 163号住居跡実測図
第 59 図 163号住居跡出土遺物実測図
第 60 図 177号住居跡実測図
第 61 図 177号住居跡周辺遺構重複関係図
第 62 図 184号住居跡実測図
第 63 図 184号住居跡出土遺物実測図
第 64 図 190号住居跡実測図
第 65 図 203号住居跡実測図
第 66 図 209号住居跡実測図(1)
第 67 図 209号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 68 図 211号住居跡実測図(1)
第 69 図 211号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 70 図 211号住居跡出土遺物実測図(2)
第 71 図 212号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 72 図 216号住居跡実測図(1)
第 73 図 216号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 74 図 216号住居跡出土遺物実測図(2)
第 75 図 218号住居跡実測図(1)
第 76 図 218号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 77 図 218号住居跡出土遺物実測図(2)
第 78 図 219号住居跡実測図
第 79 図 219号住居跡出土遺物実測図
第 80 図 240号住居跡実測図
第 81 図 240号住居跡出土遺物実測図
第 82 図 249号住居跡実測図(1)
第 83 図 249号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第 84 図 257号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 85 図 287号住居跡実測図
第 86 図 287号住居跡出土遺物実測図
第 87 図 288号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第 88 図 289号住居跡実測図(1)
第 89 図 289号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第 90 図 289号住居跡出土遺物実測図(2)
第 91 図 290号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第 92 図 290号住居跡出土遺物実測図(2)
第 93 図 292号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第 94 図 292号住居跡出土遺物実測図(2)
第 95 図 293号住居跡実測図
第 96 図 293号住居跡出土遺物実測図(1)
第 97 図 293号住居跡出土遺物実測図(2)
第 98 図 294号住居跡実測図(1)
第 99 図 294号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第100図 296号住居跡実測図(1)
第101図 296号住居跡実測図(2)
第102図 296号住居跡出土遺物実測図
第103図 297号住居跡実測図
第104図 297号住居跡出土遺物実測図
第105図 298号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第106図 298号住居跡出土遺物実測図(2)
第107図 318号住居跡実測図
第108図 320号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第109図 324号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第110図 334号住居跡実測図(1)
第111図 334号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第112図 334号住居跡出土遺物実測図(2)
第113図 337号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第114図 337号住居跡出土遺物実測図(2)
第115図 339号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第116図 339号住居跡出土遺物実測図(2)

第117図	340号住居跡実測図(1)	第157図	400号住居跡実測図(1)
第118図	340号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)	第158図	400号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第119図	340号住居跡出土遺物実測図(2)	第159図	402号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第120図	343号住居跡実測図及び出土遺物実測図	第160図	403号住居跡実測図
第121図	353号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)	第161図	403号住居跡出土遺物実測図
第122図	353号住居跡出土遺物実測図(2)	第162図	406号住居跡実測図(1)
第123図	354号住居跡実測図(1)	第163図	406号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第124図	354号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)	第164図	406号住居跡出土遺物実測図(2)
第125図	354号住居跡出土遺物実測図(2)	第165図	407号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第126図	355号住居跡実測図(1)	第166図	407号住居跡出土遺物実測図(2)
第127図	355号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)	第167図	408号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第128図	355号住居跡出土遺物実測図(2)	第168図	410号住居跡実測図
第129図	356号住居跡実測図(1)	第169図	410号住居跡出土遺物実測図(1)
第130図	356号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)	第170図	410号住居跡出土遺物実測図(2)
第131図	356号住居跡出土遺物実測図(2)	第171図	415号住居跡実測図
第132図	357号住居跡実測図(1)	第172図	415号住居跡出土遺物実測図
第133図	357号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)	第173図	418号住居跡実測図(1)
第134図	357号住居跡出土遺物実測図(2)	第174図	418号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図
第135図	358号住居跡実測図(1)	第175図	421号住居跡実測図(1)
第136図	358号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図	第176図	421号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第137図	364号住居跡実測図(1)	第177図	421号住居跡出土遺物実測図(2)
第138図	364号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図	第178図	424号住居跡実測図(1)
第139図	367号住居跡実測図(1)及び出土遺物実測図	第179図	424号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)
第140図	367号住居跡実測図(2)	第180図	424号住居跡出土遺物実測図(2)
第141図	372号住居跡実測図	第181図	425号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第142図	372号住居跡出土遺物実測図(1)	第182図	426号住居跡実測図
第143図	372号住居跡出土遺物実測図(2)	第183図	434号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第144図	374号住居跡実測図(1)	第184図	705号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)
第145図	374号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図	第185図	705号住居跡出土遺物実測図(2)
第146図	377号住居跡実測図	第186図	709号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第147図	377号住居跡出土遺物実測図(1)	第187図	12号住居跡と「物部郷長」の線刻のある石製紡錘車
第148図	377号住居跡出土遺物実測図(2)	第188図	大宝2年御野国加毛郡半布里戸籍に見える「石上部」
第149図	379号住居跡実測図及び出土遺物実測図	第189図	富岡市一宮地区の字名
第150図	383号住居跡実測図	第190図	出土文字資料(1)
第151図	383号住居跡出土遺物実測図	第191図	出土文字資料(2)
第152図	384号住居跡実測図及び出土遺物実測図	第192図	三角(A)・菱型(B)ダイアグラム位置図
第153図	386号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)	第193図	(A) Mo、Mi、Hb 三角ダイアグラム
第154図	386号住居跡出土遺物実測図(2)		(B) Mo—Ch、Mi—Hb 菱型ダイアグラム
第155図	391号住居跡実測図	第194図	Qt—PI 相関図
第156図	391号住居跡出土遺物実測図	第195図	X線回析図型

表 目 次

第1表	整理工程表	第47表	324号住居跡出土遺物観察表
第2表	群馬県下の「国（衙）領」「公田」関連地名	第48表	334号住居跡出土遺物観察表
第3表	住居跡一覧表	第49表	337号住居跡出土遺物観察表
第4表	1号住居跡出土遺物観察表	第50表	339号住居跡出土遺物観察表
第5表	3号住居跡出土遺物観察表	第51表	340号住居跡出土遺物観察表
第6表	4号住居跡出土遺物観察表	第52表	343号住居跡出土遺物観察表
第7表	12号住居跡出土遺物観察表	第53表	353号住居跡出土遺物観察表
第8表	13号住居跡出土遺物観察表	第54表	354号住居跡出土遺物観察表
第9表	16号住居跡出土遺物観察表	第55表	355号住居跡出土遺物観察表
第10表	21号住居跡出土遺物観察表	第56表	356号住居跡出土遺物観察表
第11表	23号住居跡出土遺物観察表	第57表	357号住居跡出土遺物観察表
第12表	85号住居跡出土遺物観察表	第58表	358号住居跡出土遺物観察表
第13表	99号住居跡出土遺物観察表	第59表	364号住居跡出土遺物観察表
第14表	109号住居跡出土遺物観察表	第60表	367号住居跡出土遺物観察表
第15表	113号住居跡出土遺物観察表	第61表	372号住居跡出土遺物観察表
第16表	115号住居跡出土遺物観察表	第62表	374号住居跡出土遺物観察表
第17表	118号住居跡出土遺物観察表	第63表	377号住居跡出土遺物観察表
第18表	124号住居跡出土遺物観察表	第64表	379号住居跡出土遺物観察表
第19表	125号住居跡出土遺物観察表	第65表	383号住居跡出土遺物観察表
第20表	126号住居跡出土遺物観察表	第66表	384号住居跡出土遺物観察表
第21表	130号住居跡出土遺物観察表	第67表	386号住居跡出土遺物観察表
第22表	132号住居跡出土遺物観察表	第68表	391号住居跡出土遺物観察表
第23表	146号住居跡出土遺物観察表	第69表	400号住居跡出土遺物観察表
第24表	158号住居跡出土遺物観察表	第70表	402号住居跡出土遺物観察表
第25表	163号住居跡出土遺物観察表	第71表	403号住居跡出土遺物観察表
第26表	184号住居跡出土遺物観察表	第72表	406号住居跡出土遺物観察表
第27表	209号住居跡出土遺物観察表	第73表	407号住居跡出土遺物観察表
第28表	211号住居跡出土遺物観察表	第74表	408号住居跡出土遺物観察表
第29表	212号住居跡出土遺物観察表	第75表	410号住居跡出土遺物観察表
第30表	216号住居跡出土遺物観察表	第76表	415号住居跡出土遺物観察表
第31表	218号住居跡出土遺物観察表	第77表	418号住居跡出土遺物観察表
第32表	219号住居跡出土遺物観察表	第78表	421号住居跡出土遺物観察表
第33表	240号住居跡出土遺物観察表	第79表	424号住居跡出土遺物観察表
第34表	249号住居跡出土遺物観察表	第80表	425号住居跡出土遺物観察表
第35表	257号住居跡出土遺物観察表	第81表	434号住居跡出土遺物観察表
第36表	287号住居跡出土遺物観察表	第82表	705号住居跡出土遺物観察表
第37表	288号住居跡出土遺物観察表	第83表	709号住居跡出土遺物観察表
第38表	289号住居跡出土遺物観察表	第84表	「郷長」関係出土文字資料
第39表	290号住居跡出土遺物観察表	第85表	群馬県下の「物部」氏の分布
第40表	292号住居跡出土遺物観察表	第86表	長根羽田倉遺跡出土滑石製模造品
第41表	293号住居跡出土遺物観察表	第87表	群馬県下の「物部」氏関連地名
第42表	294号住居跡出土遺物観察表	第88表	「新撰姓氏録」の中の「物部」関連氏族
第43表	296号住居跡出土遺物観察表	第89表	群馬県下のミヤケ関連地名
第44表	297号住居跡出土遺物観察表	第90表	胎土性状表
第45表	298号住居跡出土遺物観察表	第91表	胎土分析資料一覧
第46表	320号住居跡出土遺物観察表	第92表	石器類一覧

図版目次

巻頭図版 「物部郷長」の線刻のある石製紡錘車	図版30 374・377号住居跡
付篇2 図版 石材標本(1)	図版31 379・383・384・386号住居跡
付篇2 図版 石材標本(2)	図版32 391・400号住居跡
図版1 第1次調査区空中写真・第2次調査区空中写真	図版33 402・406・408・410号住居跡
図版2 第3次調査区空中写真・1号住居跡	図版34 410・415号住居跡
図版3 3・4号住居跡	図版35 418・421・424号住居跡
図版4 4・12号住居跡	図版36 425・426・434・709号住居跡
図版5 13・16・21号住居跡	図版37 1・3号住居跡出土土器
図版6 23・85・99号住居跡	図版38 4・12号住居跡出土土器
図版7 109・113号住居跡	図版39 12・16・21・23・85・99号住居跡出土土器
図版8 115・118・124号住居跡	図版40 109・113・115・118・124・125号住居跡出土土器
図版9 125・126号住居跡	図版41 126・130号住居跡出土土器
図版10 130・132号住居跡	図版42 130・132・146・158・163・184・211号住居跡出土土器
図版11 132・146・158号住居跡	図版43 216・218号住居跡出土土器
図版12 158・163・184号住居跡	図版44 219・240・249・257・287・288・289号住居跡出土土器
図版13 184・203・209・211号住居跡	図版45 290・292・293・294号住居跡出土土器
図版14 211・212・216号住居跡	図版46 296・298・320・324・334号住居跡出土土器
図版15 216・218号住居跡	図版47 334・337・339・340・343・353号住居跡出土土器
図版16 219・240号住居跡	図版48 354・355・356・357号住居跡出土土器
図版17 240・249・257・287号住居跡	図版49 357・358・364・367・372号住居跡出土土器
図版18 288・289号住居跡	図版50 372・374・377・379・386号住居跡出土土器
図版19 290号住居跡	図版51 386・391・400・402・403・406・407号住居跡出土土器
図版20 292・294号住居跡	図版52 407・408・410号住居跡出土土器
図版21 296・297号住居跡	図版53 415・418・421・424・425・434号住居跡出土土器
図版22 298・318号住居跡	図版54 705・709号住居跡出土土器、瓦(1)
図版23 320・324・334号住居跡	図版55 瓦(2)、羽口、埴輪
図版24 337・339・340号住居跡	図版56 石製紡錘車
図版25 340・343・353・354号住居跡	図版57 砥石等
図版26 355・356号住居跡	図版58 砥石等・鉄製品(1)
図版27 357・358号住居跡	図版59 鉄製品(2)
図版28 364号住居跡	図版60 文字資料
図版29 367・372号住居跡	

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の調査は、昭和62年4月1日から開始され、未買収地部分を除いて平成2年8月27日を以て終了した。鑄川によって生成された東西方向に連なる河岸段丘面は、群馬県下でも有数の遺跡地帯として知られており、本遺跡に隣接する地域にも各時代の遺跡の存在が知られ、徐々にその内容が明らかになりつつある。

これまで本遺跡付近は、北方1.5kmにある「多胡碑」や『続日本紀』との関連から、『和名類聚抄』郷名の「上野国多胡郡八（矢）田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八（矢）田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、集落の時期的展開など当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
竪 穴 住 居 跡	縄文中期	3	加曾利E 3、埋甕（屋外）5、土壌が検出されている
	古墳前期	5	遺物は少量である
	古墳後期～平安	約 740	
掘 立 柱 建 物 跡		約 20	
住 居 状 遺 構		約 30	
溝		約 50	
井 戸		約 20	

この他、土器廃棄場2、粘土採掘場1、小鍛冶2、方形居館址1、ピット多数などがある。また、整理作業の進捗に伴って、総量に若干の上下はあるものと予想される。

◎本報告は、上記のうち平安時代の竪穴住居跡85軒を対象としている。

3 まとめ

吉井町大字矢田の台地上に広がる広い平坦面および緩傾斜面には、縄文時代前期の遺物の散布が知られ、同中期の集落の存在が判明している。調査範囲では、弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。安定的に集落が営まれるのは同後期からで、奈良・平安時代まで継続する。吉井町教育委員会による北側の接続道路部分（椿谷戸遺跡）・南側の圃場整備関連の調査（柳田遺跡）でも同様の所見が得られており、集落の範囲は台地の先端まで広がっていた。

本報告中では、多数の土器をはじめとし、矢田遺跡の集落の具体的な居住者を示唆する「物部郷長」と線刻のある石製紡錘車などの貴重な資料が含まれている。

今後の整理の成果も含め、より詳細な地域史研究にとっての、膨大な基礎資料の一端が提示されるものと期待される。

や た い せき
矢 田 遺 跡 II

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

経緯については、前報告に詳しいので割愛する。

第2節 調査の方法と経過

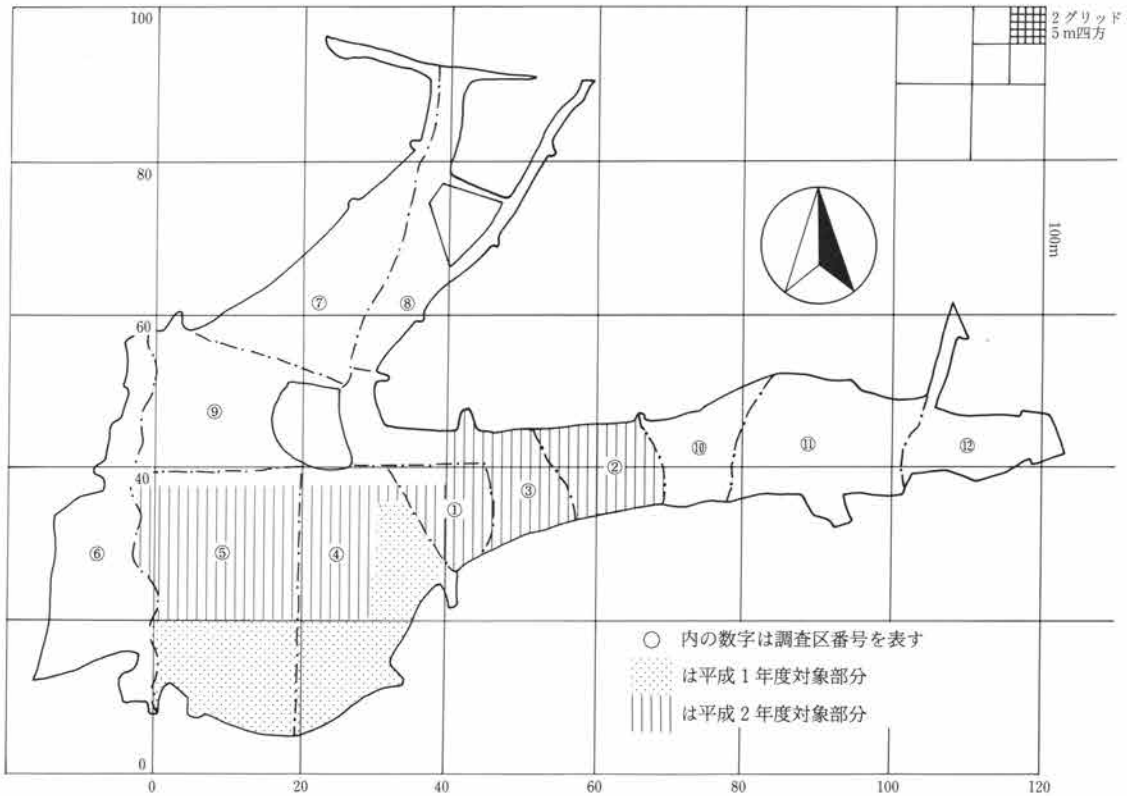
1 調査の方法

本調査区は、吉井インター・チェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のS T A No.106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標 $X = +26,800$ 、 $Y = -75,000$ を原点として5 m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第1次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

2 調査の経過

①発掘調査

発掘調査は1986～90年度の都合五年度に亘って行われたが、未買収地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、中山（多胡蛇黒）遺跡等の調査を行っていた時期などもある。従って、調査自体に丸五年を費やした訳ではないが、「調査日誌」だけでもB5ファイル5冊にもなり、残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌（抄録）」を掲出してみる。



第1図 矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

調査日誌(抄)

◎1986年度の調査

- 5月21日 現場作業の開始、第1次調査区の表土掘削開始。
29日 発掘作業員の雇用を始める。
- 6月2日 第1次調査区の調査を開始する。
27日 国立歴史民俗博物館助教授平川南氏来跡、文字資料についてご教示を頂く。
- 7月1日 第1次調査区と並行して、第2次調査区の調査を開始する。
- 9月10日 第1・2次調査区の空撮を行う。
22日 第4次調査区の調査を開始する。
- 10月6日 第3次調査区の調査を開始する。
17日 埼玉県立さきたま資料館館長金井塚良一氏・作家永井路子氏来跡。
24日 第2次調査区の調査を終了する。
- 12月11日 第3・4次調査区の空撮を行う。
- 1月9日 第4次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 3月12日 第4次調査区の空撮を行う。
14日 現地見学会(～15日)、2日間で1200名程の見学者が訪れる。
25日 1986年度の調査を終了する。

◎1987年度の調査

- 4月15日 1987年度の調査を開始する。
- 5月8日 第4次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
- 6月11日 第4次調査区188号住居跡から「八中寸真」の文字瓦が出土する。
- 10月2日 第4次調査区の空撮を行う。
7日 第5次調査区の調査を開始する。
- 11月6日 吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
- 1月21日 第4次調査区の調査を終了する。
- 2月10日 群馬テレビ取材。
- 3月8日 第5次調査区の空撮を行う。
12日 現地見学会(～13日)、2日間で655人程が見学を訪れる。
25日 1987年度の調査を終了する。

◎1988年度の調査

- 4月15日 1988年度の調査を開始する。
- 6月7日 第6次調査区の調査を開始する。
- 7月5日 文化庁河原純之氏来跡。
19日 第7次調査区の調査を開始する。群馬大学西垣晴次氏・奈良国立文化財研究所木下正史氏他来跡。
- 10月8日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において遺跡見学会を実施する。総数7685名にのぼる見学者が訪れる。また、群馬・日本・フジ・TBS・NHKの各局が取材を訪れる。
27日 第5次調査区の空撮を行う。

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

12月21日 第8次調査区の空撮を行う。

22日 第9次調査区の679号住居跡から「物口（部）・一八」と線刻された石製紡錘車が検出される。

1月8日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。

2月27日 第11次調査区の表土掘削を開始する。

3月9日 第9次調査区の旧石器試掘調査を開始する。

23日 1989年度の調査を終了する。

◎1990年度の調査

4月9日 1990年度の調査を開始する。

5月1日 第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。

11日 第8・10次調査区の空撮を行う。NHKによるハイビジョン撮影を行う。

14日 矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。

16日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。

21日 第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。

6月18日 第11次調査区の空撮を行う。

20日 第11次調査区の旧石器試掘調査を開始する。

21日 第11次調査区の50-88グリッドAT層下から、矢田遺跡で初めて黒耀石製の台形様石器が1点検出される。

7月2日 第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より6日まで調査を行う。AT層下からチャート・安山岩製の台形様石器2点を含む総数14点の石器が検出された。

8月27日 第12次調査区の中空中写真撮影を実施(生活の痕跡無し)。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を一旦中断し、機材を取り纏めて多胡蛇黒(中山)遺跡の調査に入る。

②整理作業

本年度の整理作業は、前年度の作業をうけて平成2年4月1日から、吉井町南陽台の上越線事務所内の整理棟で、担当1名・補助員7名で行われた。その概要は以下の通りである。

4月上旬	整理作業諸準備
4月中旬～6月中旬	遺物の分類・接合及び復元 遺構図面修正 鉄製品保存処理 遺物写真撮影
6月下旬～9月上旬	土器・瓦・石製品・鉄製品実測、拓本 トレース(遺構・遺物)外注 住居跡出土土器類胎土分析外注
9月中旬～10月下旬	レイアウト 図面・写真版下作成 遺物観察表作成 原稿執筆 石材鑑定
11月20日	入札
11月26日	入稿
11月下旬以降	校正・収蔵等諸作業

第2章 地理的環境及び歴史的環境

— 矢田遺跡をとりまく歴史的環境（承前） —

報告書(1)の「歴史的環境」では、主として奈良時代以前の歴史的環境について、遺跡分布の分析から述べた。今回は、矢田遺跡周辺（多胡郡を中心とする）の、主に平安時代の様相の一端について、史料を中心に考えてみたい。

矢田遺跡の所在する多野郡吉井町は、古代の多胡郡（和銅4年設置）のかなりの地域を占めていると考えられる。先ず、そこを含んだ周辺地域の景観的特徴について見るならば、甘楽郡・多胡郡によって構成される鍋川流域地域は、現状の地割で、条里型の方格地割の遺存が顕著に認められることが、しばしば指摘されている⁽¹⁾。そのことが、直ちに律令制下の当地での条里制の施行を裏付ける訳ではないが、ある時期以降の地番の設定→地割りの施工を跡付けていると言えよう⁽²⁾。

矢田遺跡に近接した、吉井町の市街地の北東に当たる地域の現存地割と、小字名・大字名との関係を整理してみると第2図のようになる。

これらのうち、池地区で県道高崎・吉井線の東側の水田は、かなり変形を被ってはいるが、条里型の方格地割が残っている（鍋川流域でも例外的になってきた）。小字名のなかに条里的な呼称を残すものは無く、しかもその範囲は坪単位で二～四坪程度に拡大し、呼称の水準での変形が著しい。

但し、市街地の現行道路などのなかに、地割に規制されたとみられる直線的な例があって、現在見られる以上に当初の地番の設定は徹底したものであった可能性がある。この周辺の小字の範囲は、地形の制約を受けて等高線に平行する場合が多いが、特に大字矢田について、大字池と接する北部では地形の変化によらず、東西方向の人為的区画と思われる直線的な地割りによって区分されている⁽³⁾。

かつて矢田には代官所が設置され、その周辺の地割の起源が古代まで溯らない可能性もなくはないが、少なくとも現況では、明らかに近世の宿場町の地割を残す現在の吉井町の市街地とは異質であり、必ずしも近世の所産であると断定する事は妥当ではないだろう。そうした仮定に基づいて見てみると、矢田川について北流していたものが、この付近で直角に東流する事が注意される。開析が進行して明瞭ではないが、比較的起源の古い人為的な付け替えの可能性もあるのではないか。

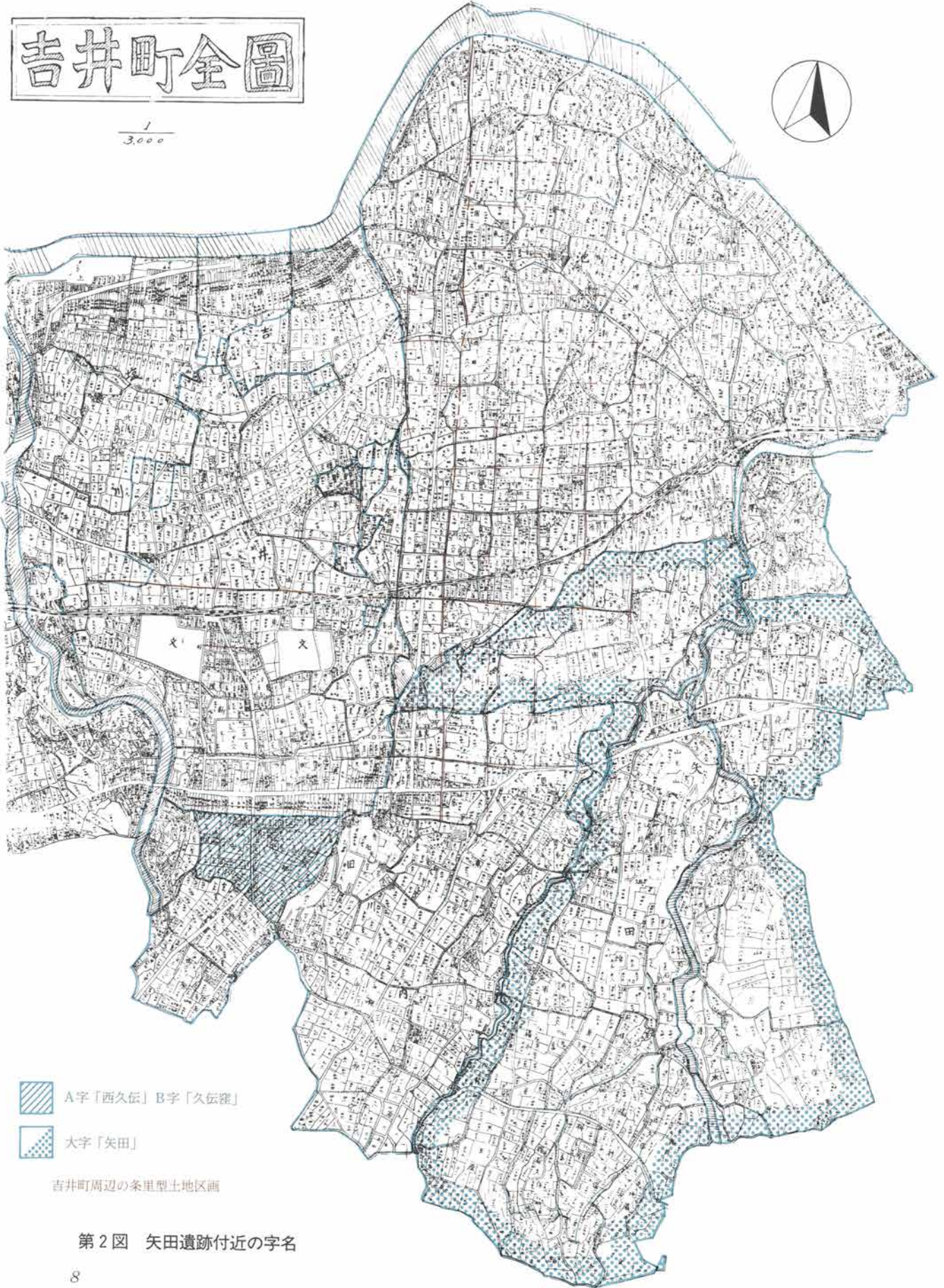
現実には、今回の上越線関連の調査のなかでも谷戸を利用した水田遺構が、調査対象地域のいたるところで確認されつつあり、条里型の方格地割に規制された水田だけで当時の班給田が賄えたとは到底考えられず、谷戸田の経営も活発に行われたことがわかる。また、周辺各地点の出土遺物などにも畑作の存在を窺わせるものがあり、地域内部での畑作にもかなりの比重があったものと想定されるだろう。

平安時代になると、集落遺跡の存在を想定させる遺物の散布は、概して上位段丘面だけでなく下位段丘面にも急速に拡大する傾向にあるが、単に人口の急激な増加があったとみるよりも、不足しがちな耕地面積の拡大の為に、従来開発の対象とならなかったような地点の開発が行われるとともに、予想される生業の分化の進行するなかで、これまで比較的作業地と居住地とが近接していなかったものが、非常に距離的に短い単位の中で完結する傾向が出て来たと想定出来るのではなかろうか。それは、ある意味でかなり不安定な経営形態を示すといえるだろう⁽⁵⁾。

そこでは、一部の例外を除き、かつて存在したような拠点集落の姿が非常に確認しづらくなってきている。堅穴住居跡の変質（規模の縮小・数の増大）のようなものは、様々な要因によるであろうが、ひとつに

吉井町全圖

1
3,000



-  A字「西久伝」 B字「久伝窪」
-  大字「矢田」

吉井町周辺の条里型土地区画

第2図 矢田遺跡付近の字名

第2表 群馬県下の「国（衙）領」「公田」関連地名

郡名	旧村名	小字名
碓氷郡	国衙村	森北、森浦、朝日、中割り、西村、中村、東村、下辻、姥堂、飯塚、名山中、名山谷津、富士山、遠ノ峯、名山、清水、日向、市街道、沖田、久保田、河原田、森下
邑楽郡	除川村	口伝（南口伝、中口伝）
北甘楽郡	別保村	狐東、川北、中沖、舛畑、道添、小谷津、鳥居木、東谷津、山附、大谷津、前棚、中原、堀端
	曾木村	九田
多胡郡	吉井町	久伝窪、西久伝
	神保村	下條（参考）
那波郡	国領	林、東、利根、東向、西向
東群馬郡	三公田村	横手境、不動前、不動後、田中、道祖神、池ノ尻、銭神、北面、熊野、天神、小暮、山王、川端、諏訪、橋島境、尼ヶ橋、天水
	橋島村	公田東（ピリシリ）
南勢多郡	嶺村	西公田、東公田
	北代田	位田
		（国領）

※旧村レベルのものは基本的に所属の小字まで、小字の場合は該当部分のみ示した。「某保」、特に新保などの地名の例は、東・西群馬郡などに多く見られるが、ここでは省略している。

は地域の変質の中で生じた、個々の集落内部での竪穴住居跡の機能の分化にも関係していると考えられる。

こうした動向のなかで改めて注意されるのは、この地域での同時期の具体的な支配構造の変質についてである。現存の地名が、どの程度過去の実態と合致するのかは、個々のフィールドに即した検討の余地が大きく残されるが、この周辺の歴史的な意味を推測させるような小字名で注意されるのは、現在の吉井町の市街地の南に接する「久伝窪」「西久伝」などの小字名である。⁽⁶⁾ いずれも「くでん」と呼ばれているが、現存する条里的方格地割とやや外れている。北端を現在の吉井町の市街地に切られて、本来の広がり是不明であるが、もう少し大きな範囲を持っていたと思われる。群馬県内の「くでん」という音での類例では、前橋市の「(三)公田」が有名である。こうした例は意外に多くないが、群馬県下の類例を整理してみると第2表のようになる（第2表参照）。

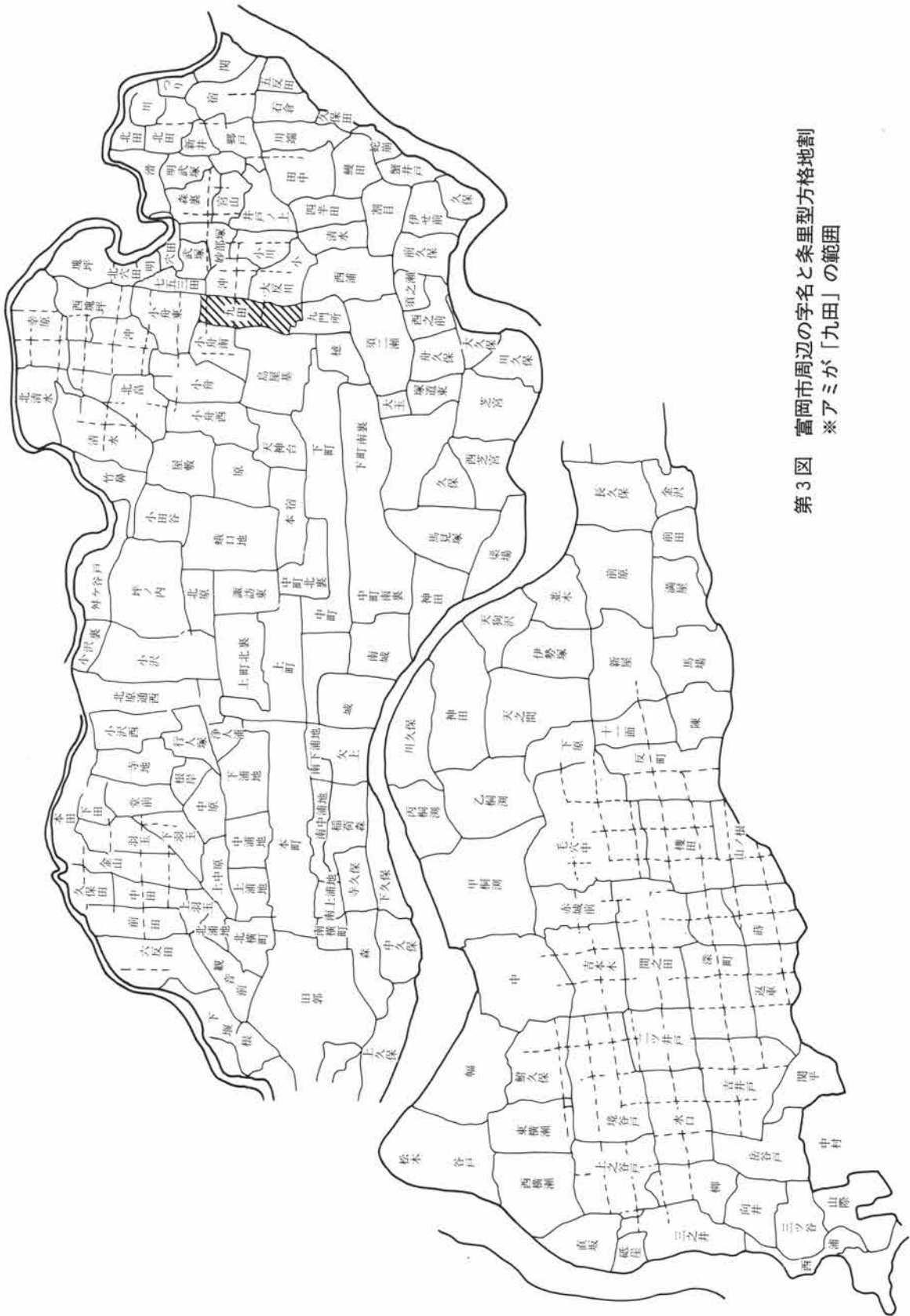
類例は全県下でも五例程度に留まり、必ずしも明瞭な傾向を示す訳ではないが、関連地名も含めたその分布は、旧利根川右岸地域に集中し、国府所在郡としての群馬郡及びその隣接郡までと理解すると、一・二を除きほぼ取り込む形になる。

富岡市曾木地内には「九田」の小字があるが、第3図に見るように、現地表の条里的方格地割の坪単位で二～三単位にまたがっている（第3図参照）。

数詞「九ノ坪」の残存である可能性もあるが、周辺地域ではそうしたものの残存が極めて稀で、これもやはり「くでん」と解するべきであろう。そのように考えて良ければ、その転訛の過程は「公田→九田→久伝・口伝」のようなものであったことになる。上野国の各地域でこれらは、本来「こうでん」ではなく「くでん」と呼ばれていた可能性がある。

この結果は、西上野地域に国衙領が多いとされる従来の研究成果⁽⁷⁾と整合的である。これらは本来国（衙）領・公田に由来するものであったと考えて良いのではないか。なお、吉井町内には「久伝」の南に「下條」といった地名も見られ、⁽⁸⁾ 目下のところ「上条・中条」といった関連地名を近隣に欠く点が気になるが、これらは本来「条里制」に基づくものの、律令に規定されたような典型的な事例とすることは出来ず、平安中期以降徴税単位として変化した「条」に遡及出来るような地名なのではないか。

次に、多胡郡関係の平安時代の史料で問題になるのは、郷名比定などの際しばしば用いられる『和名類聚



第3図 富岡市周辺の字名と条里型方格地割
 ※アミが「九田」の範囲

抄] (以下「和名抄」と略す) 郷名である。諸本によって多少の違いはあるが、その記載によれば、

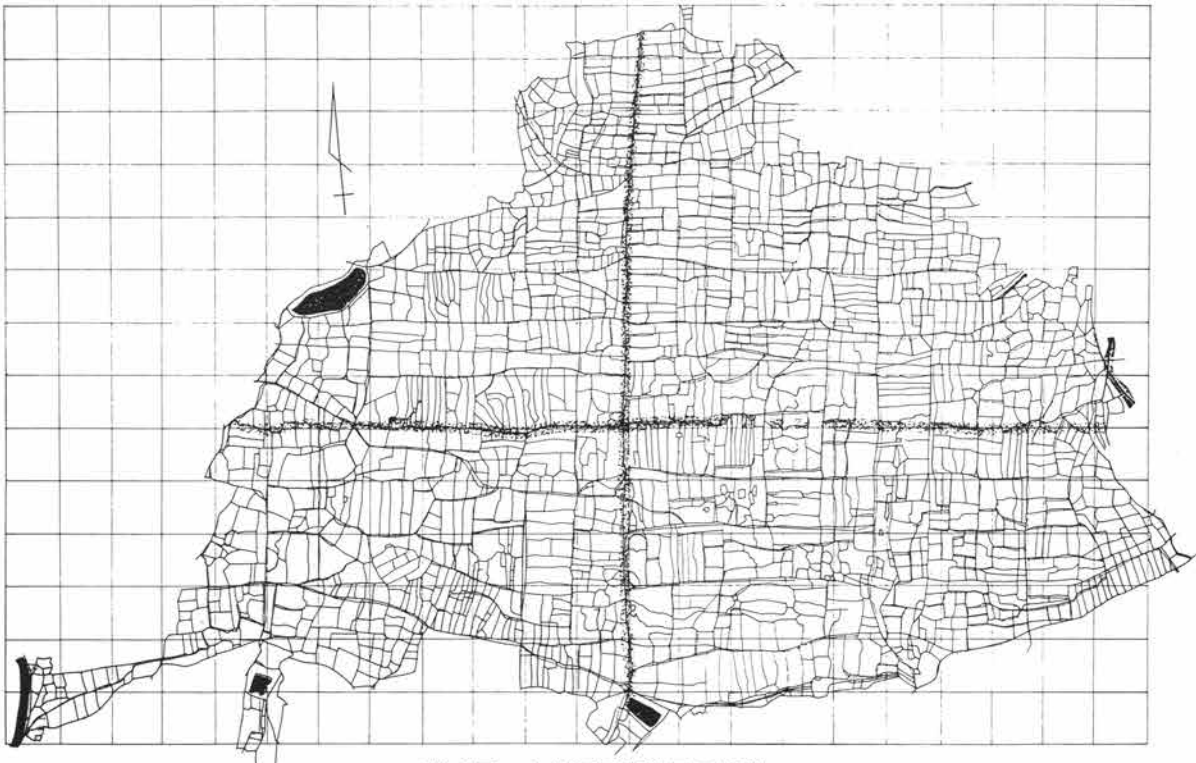
多胡郡：山宗也末奈、織裳於利毛、辛科加良之奈、大家、武美、俘囚、八田 ※元和古活字本による。

この配列順序は、『続日本紀』(以下「続紀」と略す) 和銅四年三月辛亥条に見える郷(里)名の配列順序の「(甘楽郡) 織裳、辛科、八田、大家、(緑野郡) 武美、(片岡郡) 山(部)」とは異なり、この間の違いは「和名抄」の成立年代である十世紀前半前後の実態と関係しているのであろう。少なくとも、「続紀」の記載については、行政区分の上で西から東へと機械的に配列していたと考える。

一般に、これらのうち「山宗(字)」は高崎市山名町、「織裳」「八田」は吉井町折茂・矢田として現存地名に残り、「韓級」は辛科神社という神社名に残るとされる。「大家」「武美」については、現存地名等には残らず、明瞭な伝承も無いまま諸説が出されている状況にある。但し、「大家」を除いては上野国分寺修造瓦の文字に揃って見る事が出来、少なくとも平安期頃迄は機能していた地名(行政区分名)であった事が判明している。⁽⁹⁾

一部に「大家」を郡衙所在の郷として大字池辺りに比定する見方もあるが、学説史的に見れば非常に例外的な見解で、発掘調査などを経っていない現状では、「多胡碑」が存在する以外に、そのように積極的に考えられるような根拠は無いと思われる。近年の研究成果では、オオヤケとは郡衙についても使われることのある大きな概念で、「オオヤケ=郡衙」と単純に考えられるような必要・充分の根拠とはならない可能性が強い。全国的な傾向としての「地域のミヤケ→オオヤケ」という事例がしばしば見られる点に、むしろ注意すべきではなかろうか。⁽¹¹⁾

今回「耕地図」レベルの精度のやや落ちる図面上ではあるが、現存地割や小字の範囲に基づいて方格地割の検出を試みた訳だが、条里型方格地割のなかの二本の地割線が注意される。ひとつは現在の県道高崎・吉井線に交差し断続する南北方向の地割で、もうひとつは現在の「双葉食堂」付近で道路としてこれと交差す



第4図 吉井町長根地区の地割

第2章 地理的環境及び歴史的環境

る東西方向の地割である。これと類似した事例は、長根地区にも見られる(第4図)⁽¹²⁾。この地割は、交通路としてどの程度機能していたかは問題があるが、それぞれ十字路を形成していた可能性がある。

地割そのものの起源や、交通路としての機能など、なお解決されなければならない点は残るが、最近の古代史研究の成果によれば、畿内地域などでこうした地点に、しばしば政治的意味が付与されていたとされる⁽¹³⁾。予想される「郡衙」遺構の探索などに密接に関係すると思われるので、今後の課題として提示しておきたい。

現存地名によって具体的な郷名比定を行うことが、大変危険であることは改めて言うまでもないが、郷名に一致するとされている大字矢田の範囲は、前掲第2図に示した通りである。

現在の大字矢田の範囲は、地形的には段丘崖を挟んで下位段丘面と上位段丘面とにまたがっている。特に北部で不自然な広がりを見せ、その範囲が本来のものよりもかなり縮小している可能性があることについては既に述べた。

従って、古代の郷域を積極的に推定し、その結果に固執すること自体にそれほど意味があるとは思えないが、矢田遺跡での文字資料の出土など⁽¹⁴⁾により、少なくとも矢田川付近を東限とし、西谷川によって西を限られた一連の丘陵が「八田郷」を構成していたと考えられるであろう。この東限について、現在の大字の範囲はやや東側に張り出すもののほぼ一致すると見て良からう。西側については、多胡地区を含んで大沢川付近まで広がっていた可能性もあるが、断定は出来ない。

もしそうした広がりがあるならば、郷里制下での里(ニムラ)に相当する単位は、大字矢田の範囲で二～三認められ、比較的大きな谷によって開析された南北方向の丘陵上に展開していたと想像出来る。下位段丘面での広がりもやや不確定であるが、一部に水田部分を含み込んでおり、本来の「郷」も居住域に生産域を併せ持つものであった可能性がある。

これとほぼ同様に考えられるのが「織裳(折茂)」郷であろう。現状では決定的な文字資料などの出土を見ていないが、現存地名折茂の所在地は、想定される多胡郡域の西端に位置し、地形的には南面する籾川の上位段丘面が比較的大きな谷によって東側と西側とを大きく開析され、小支谷によって開析された幾つかの単位を含みながらも、ひとまとまりの大きな単位を持っているように見える。下位段丘面には前述の長根地区の水田が展開し、丘陵上は各時代に亘る集落遺跡が広く分布する。

また「韓級(辛科)」郷については、現在の大字矢田と大字折茂との中間地点の上神保地区に辛科神社が所在する事から、この周辺に「辛科」郷があったと一般に考えられている。尤も、現存地名等では他に4カ所程「辛科」が認められるとされ⁽¹⁶⁾、現在の神社の位置も想定される「折茂」郷との位置関係から見ると、やや南に偏って、入り組み過ぎている印象がある。

複雑な内容で、規模の大きな祭祀遺構を含む長根羽田倉遺跡の存在を考慮すれば、神社が現存する事は意味があるようにも思われるが、それは古墳時代の祭祀を中心としており、その信仰対象等が現在の神社と系統的に連続する内容の祭祀ではなかった可能性もある。また、現在の社地は中世の神保城に重複するとされ⁽¹⁷⁾、それ以降の移転を想定してみる必要もあるように思われる。そうであれば、資料上の錯誤は認められるというものの、現在の社地の所在する地区の東に隣接する大字多胡に所在したとされる「辛科神社」の存在が注意されるように思われる。かつて「辛科」郷の中央近くに所在した神社が、中世以降地域の有力豪族(神保氏カ)の神職化等に伴って現在地に移転させられたのではなかろうか。

そのように考える事が許されるなら、「辛科」郷は東西を主たる居住地である丘陵に挟まれ、中央部に大きな谷を含み、多胡郡の内ではやや変則的な形態を持っていた事になるが、更に検討を要する。

最後に「俘囚」郷について、古活字本系「和名抄」段階には認められるが、多胡郡設置当初に「続紀」の

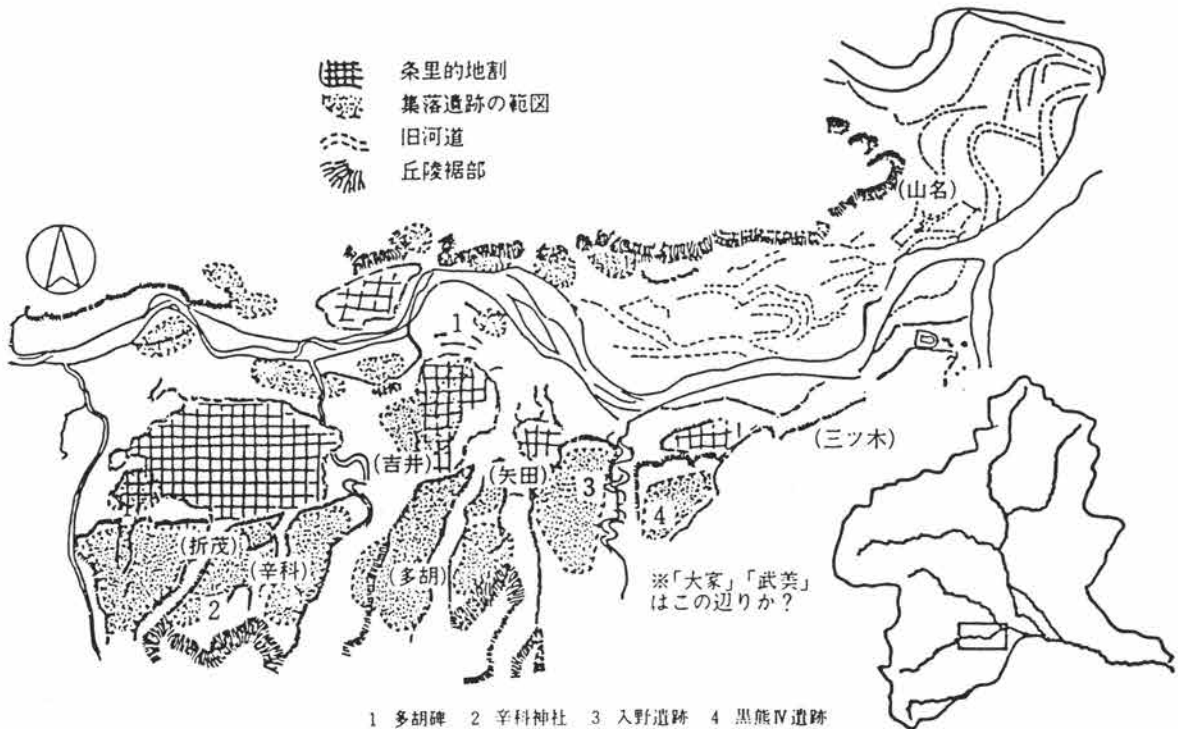
記事には見えず、相互の史料の地名のようなものが同質なのかどうかという問題は残るものの、「統紀」以降「和名抄」以前に発生したものであると考えられる。現状では「俘囚」そのものの理解について定説的なものは無い⁽¹⁸⁾ようだが、律令国家によって強制的に移住させられた、かつての東北地方の住民であると考えられている。そうであれば生活様式—用具に、何らかの形で異質な物を持ち込んできていると予想され、通説によればこの地域に多数居住していたとされている「渡来人」とともに、考古学的にも確認され得るような変化をもたらしたはずである。そうでなければ、そうした不整合に基づいて、通説を疑って見なければならぬだろう。

いずれにしても、以上述べてきたことは不確定な要素が介在することは免れず、問題点の列挙を行ったに過ぎない。これらのことは、一連の上信越自動車道関連の調査・整理が進捗して行くなかで、あるいは地域に密着した研究が進展してゆく上で、忍耐強く一つ一つ解決されて行かなければならぬだろう。

なお、自然地理的環境及び中世以降の歴史的環境については、次の報告書以降で適宜取り上げる。また、遺跡の層序についても前報告と同様であるので割愛したい。

歴史的環境

- 注(1) 関口功一「鏡川流域の条里的地割」(『条里制研究』2、1986年)等。
 (2) 金田章裕「国図の条里プランと荘園の条里プラン」(『日本史研究』332、1990年)等。
 (3) 「池庄」は、現在の大字池を中心にした地域にあったと考えられるが、その詳細は判然としない。大字池に接する大字矢田の範囲が、条里型地割に規制されているように見えるのは、直接的ではないにしろ、あるいは「池庄」の設定に関係して行われたものだったかもしれない。
 (4) 報告済みのものでは長根羽田倉遺跡で確認され、田籬上平遺跡でもその存在を窺わせるものがあるらしい。更に未報告のものを併せれば、条件の揃った地点で確認されていない方がむしろ例外的である。
 (5) 例えば、戸田芳実「中世封建制の成立過程」(『日本領土制成立史の研究』岩波書店、1967年、所収)が参考になる。
 (6) 都丸九十九「(正・統) 地名のはなし」(煥乎堂、1988・1990年)でも同様の事が指摘されている。
 (7) 久保田順一「西上野における公領・荘園と在地領主」(『群馬文化』209、1987年)、関口功一「平安中期上野野の一様相」(『群馬県史研究』27、1987年)等。
 (8) 関越道上越線関連の調査でも、一部下條遺跡として調査されており、古墳時代前期の集落・同後期の小円墳等が調査されているが、当面関連遺構は検出されていないようである。



第5図 多胡郡域概念図

第2章 地理的環境及び歴史的環境

- (9) 例えば前沢和之「史跡上野国分寺出土の文字瓦について」(『日本歴史』454、1986年)。目下のところ、一連の修造瓦の負担者の所属に「大家」郷がはっきりとは知られていない点について、確認されていないだけなのかもしれないが、実際に無かったのだとすれば、様々な政治的意味が想定出来る。この点については、今後充分究明されなければならないだろう。例えば、関口功一「大宝令制定前後の地域編成政策」(『地方史研究』36-3、1986年)参照。
- (10) 尾崎喜左雄「上野三碑と那須国造碑」(『上野三碑の研究』1980年、所収)。
- (11) 吉田孝「ヤケに関する基礎的考察」(『古代史論叢』中巻、吉川弘文館、1984年、所収)。
- (12) その設置起源は問題を残すが、ここにはかつて福島地区のいわゆる「甘楽町条里遺跡」とは単位を異にする条里型方格地割が見られた。吉井町教育委員会「道六神遺跡」(1986年)。
- (13) 例えば、前田晴人「古代王権と衝」(『続日本紀研究』203、1979年)。
- (14) 吉田孝「古代の村落」(岩波講座『日本歴史』3、岩波書店、1976年、所収)。
- (15) 調査範囲のなかでは第三次調査区から底部内面に「八田□」と墨書された高台坏、第四次調査区から「八田郷」の線刻のある石製紡錘車2点、東端に近い第十一次調査区から、「八田」の線刻のある石製紡錘車が出土している。
- (16) 鹿沼栄輔「歴史的環境」(『長根羽田倉遺跡』1990年、所収)。
- (17) 山崎一「藤岡及び多野郡の古城址 389 神保城」(『群馬県古城址の研究』(1978年)。
- (18) 例えば吉村武彦「古代の社会構成と奴隸制」(『講座日本歴史』2、東大出版会、1984年、所収)。



第6図 矢田遺跡遺構分布図



第7図 矢田遺跡周辺図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

第1節 概要

本報告では、第1・2次調査区全体、3次調査区の方形居館址周辺を除く部分、4・5次調査区のうち前回報告の北側隣接地域を扱う（第4・5次調査区の北端部分は一部残る）。整理対象住居軒数は85軒を数える。第1～5次調査区は、台地を南北方向に開析する2本の支谷によって分断され、第5次調査区についてはさらに東西方向の小支谷によって区切られている。

前報告同様、傾斜面に構築された住居のなかには、稀に良好な残存状態を示すものもあるが、大半は残存状況不良で、痕跡のみ確認されたものも少なくなく、様々な事情で既に消失してしまった住居跡も少なくないものと思われる。

報告書中の住居跡の概略は以下の通りである（第3表）。

第3表 住居跡一覧表

住居No	平面形	規模 (cm)	面積 (㎡)	壁高(cm)	主軸方向	カマド	貯蔵穴	柱 穴	周 溝	備 考
1	長方形	290×320	9.63	30	N-130°-E	東竈・石組	—	—	—	文字瓦
3	長方形	325×370	11.48	50	N-85°-E	東竈	—	—	—	
4	長方形	375×285	11.21	14	N-70°-E	東竈・石組	○?	—	—	墨書土器
12	長方形	410×340	12.47	14	N-85°-E	東竈	○	—	—	「物部郷長」の刻字石製紡錘車
13	正方形	305×325	9.54	20	N-80°-E	東竈	—	—	—	
16	長方形	340×310	10.22	18	N-80°-E	東竈	○	—	—	
21	—	?	?	?	?	?	—	—	—	
23	正方形	350×330	11.43	18	N-70°-E	東竈	○	—	—	
85	長方形	390×360	13.46	11	N-98°-E	東竈・石組	○?	—	—	
99	長方形	400×300	11.79	21	N-105°-E	東竈	○	—	—	緑釉段皿・灰釉埴(虎溪山1)
109	正方形	300×285	8.33	11	N-98°-E	東竈・石組	○	—	—	灰釉埴(虎溪山1)
113	長方形	435×380	16.56	17	N-82°-E	東竈・石組	○	—	—	
115	—	?	4.59以上	9	?	東竈・石組	—	—	—	
118	長方形	380×280	10.71	20	N-80°-E	東竈	—	—	—	
124	長方形	330×270	8.46	14	N-90°-E	東竈	—	—	—	
125	長方形	425×490	20.12	15	N-115°-E	東竈	○	—	—	
126	長方形	345×270	8.82	21	N-130°-E	東竈	○?	—	—	
130	長方形	470×370	16.74	22	N-115°-E	東竈	○	—	—	
132	長方形	355×275	9.27	14	N-96°-E	東竈	○	—	—	
146	長方形	270×340	8.78	70	N-3°-E	北竈	○	—	—	
158	正方形	320×340	10.40	18	N-82°-E	東竈	○?	—	—	
163	長方形	325×300	9.77	13	N-70°-E	東竈・石組	○	—	—	
177	正方形	315×330	10.17	54	N-84°-E	東竈	—	—	—	
184	—	255×?	5.22以上	10	N-84°-E	東竈・石組	○	—	—	
190	正方形	300×295	8.73	21	N-93°-E	東竈	—	—	—	
203	—	360×?	6.30以上	7	?	?	—	—	—	
209	長方形	365×300	11.16	10	N-87°-E	東竈	○	—	—	灰釉埴(大原2)
211	長方形	420×395	15.75	20	N-90°-E	東竈	○?	—	—	
212	—	?	4.05以上	4	N-90°-E	東竈	○	—	—	
216	長方形	335×290	9.45	14	N-86°-E	東竈・石組	—	—	—	
218	長方形	420×300	12.38	5	N-96°-E	東竈・石組	○	—	—	灰釉埴(虎溪山2)
219	長方形	350×410	14.22	29	N-93°-E	東竈	○	—	—	
240	長方形	370×280	9.41	19	N-90°-E	東竈	○	—	—	

第1節 概 要

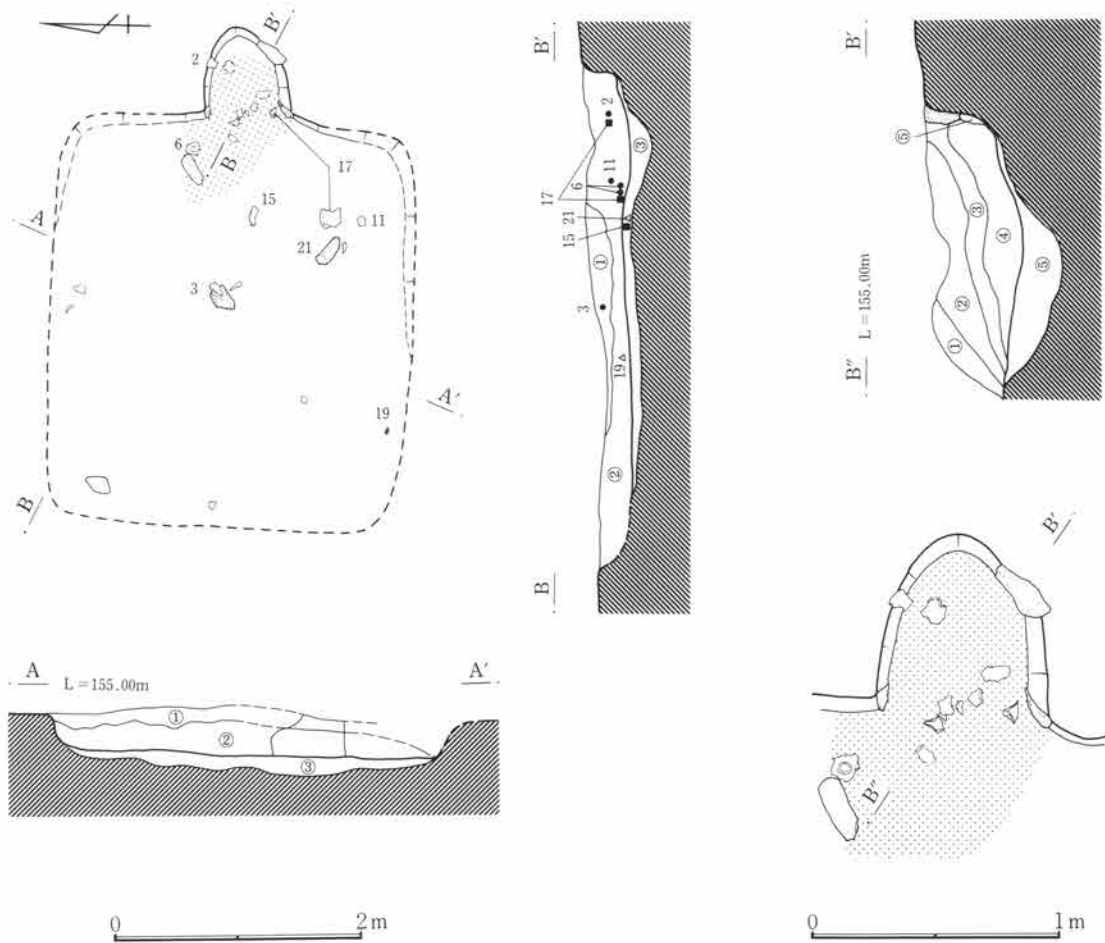
249	正方形	320×310	9.36	18	N-74°-E	東竈・石組	—	—	—	
257	—	240×190	4.28以上	9	N-90°-E	東竈	—	—	—	
287	長方形	345×290	9.63	35	N-47°-E	東竈	—	—	—	
288	正方形	290×275	16.83	29	N-75°-E	東竈	—	—	—	
289	長方形	415×315	12.74	18	N-80°-E	東竈・石組	—	—	—	
290	長方形	410×310	12.47	22	N-72°-E	東竈・石組	—	—	—	
292	長方形	385×295	10.71	28	N-74°-E	東竈	—	—	—	
293	長方形	355×380	13.41	9	N-69°-E	東竈	—	—	—	灰釉塊 (不明)
294	長方形	440×340	14.54	41	N-60°-E	東竈・石組	○	—	—	灰釉皿 (虎溪山2)
296	長方形	410×540	21.29	44	N-59°-E	東竈	—	—	○	
297	長方形	370×280	9.59	18	N-75°-E	東竈	—	—	—	
298	正方形	380×360	12.47	12	N-70°-E	東竈	—	—	—	
318	正方形	350×330	11.30	13	N-115°-E	東竈	—	—	—	
320	長方形	310×385	9.27	10	N-98°-E	東竈	—	—	—	
324	長方形	220×176	3.78以上	16	N-76°-E	東竈	—	—	—	
334	長方形	485×400	18.99	24	N-97°-E	東竈	○	—	—	
337	長方形	310×420	11.88	18	N-90°-E	東竈	○	—	—	
339	正方形	430×410	17.46	21	N-68°-E	東竈	○	—	—	灰釉皿 (丸石2)
340	長方形	305×280	8.33	28	N-66°-E	東竈	—	—	—	
343	—	?	?	—	?	東竈・石組	—	—	—	
353	正方形	300×320	8.87	38	N-78°-E	東竈・石組	○	—	—	
354	正方形	360×360	13.32	59	N-8°-W	北竈	○?	—	—	カマド造り替えありカ
355	長方形	430×380	15.48	65	N-76°-E	東竈	○	—	—	
356	長方形	390×295	11.16	61	N-86°-E	東竈・石組	○	—	—	
357	正方形	450×440	21.15	54	N-66°-E	東竈	—	—	—	
358	—	380×?	8.87以上	21	N-68°-E	東竈	—	—	—	
364	正方形	230×235	5.36以上	21	N-70°-E	東竈	—	—	—	
367	長方形	610×580	16.47	60	N-104°-E	東竈・石組	—	—	—	
372	長方形	335×360	11.52	22	N-78°-E	東竈	—	—	—	
374	長方形	420×320	14.09	31	N-72°-E	東竈	○	—	—	
377	長方形	350×270	9.27	28	N-75°-E	東竈・石組	○	—	—	
379	正方形	400×395	15.75	27	N-78°-E	東竈	—	—	—	
383	長方形	400×345	12.69	13	N-90°-E	東竈	—	—	—	
384	—	?×280	3.24以上	2	N-90°-E	東竈	—	—	—	
386	長方形	410×340	13.28	31	N-72°-E	東竈	—	—	—	
391	長方形	270×205	6.08	15	N-92°-E	東竈・石組	—	—	—	
400	長方形	260×340	8.82	30	N-90°-E	東竈	—	—	—	
402	—	?	1.17以上	10	N-90°-E	東竈	—	—	—	
403	—	300×?	7.88以上	5	N-94°-E	東竈	—	—	—	
406	長方形	430×485	19.80	24	N-66°-E	東竈	○	○	—	
407	長方形	380×330	11.97	17	N-70°-E	東竈	○	—	—	
408	—	—	1.08以上	—	N-78°-E	東竈・石組	—	—	—	
410	正方形	330×340	11.30	17	N-60°-E	東竈・石組	○	—	—	
415	—	?×375	10.98以上	—	N-62°-E	東竈	—	—	—	墨書土器
418	長方形	320×255	7.20	16	N-55°-E	東竈	○	—	—	墨書土器
421	長方形	420×365	15.26	11	N-76°-E	東竈・石組	○	—	—	
424	長方形	230×255	4.50以上	10	N-90°-E	東竈	○	—	—	
425	—	240×?	3.83以上	—	?	—	○	—	—	文字瓦
426	—	280×?	5.45以上	5	N-84°-E	東竈	—	—	—	
434	—	?	4.68以上	7	N-93°-E	東竈	—	—	—	
705	—	460×?	10.08以上	37	?	(東竈カ)	—	—	—	
709	—	300×?	8.60以上	22	N-69°-E	東竈	○	—	—	

※灰釉陶器の()は窯式を示す。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

1号住居跡（第8～11図、第4表、図版2・37・54・57・58・60）

本住居跡は、第1次調査区中央部にあり、38—42グリッドに単独で位置する。南北方向の比較的大きな支谷で区切られ、それに関係する黒色土中で確認されたため、プラン確認などにやや不安が残るが、平面形は東西3m20cm・南北2m90cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-130°-Eを示すと思われる。床面には部分的に貼床を施すが、柱穴は無い。掘り方には、竈に関係すると見られるものも含め、4つのピットが並列し



（1号住居跡）

- ①暗褐色土 微量の焼土粒・多量の白色細粒を含む。
- ②暗褐色土 焼土粒を含む。
- ③黄褐色土 焼土粒（1～5mm）・炭化材・白色粘土塊を含む。

竈

- ①暗褐色土 微量の焼土粒を含み、締まっている。
- ②暗黄褐色土 多量の焼土を含み、締まりに欠ける。
- ③黄褐色土 灰色粘土塊を含み、締まっている。
- ④赤褐色土 竈崩落焼土。
- ⑤黄褐色土 黄白色粘土粒（径1mm）・焼土粒（径5mm）を僅かに含む。

第8図 1号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

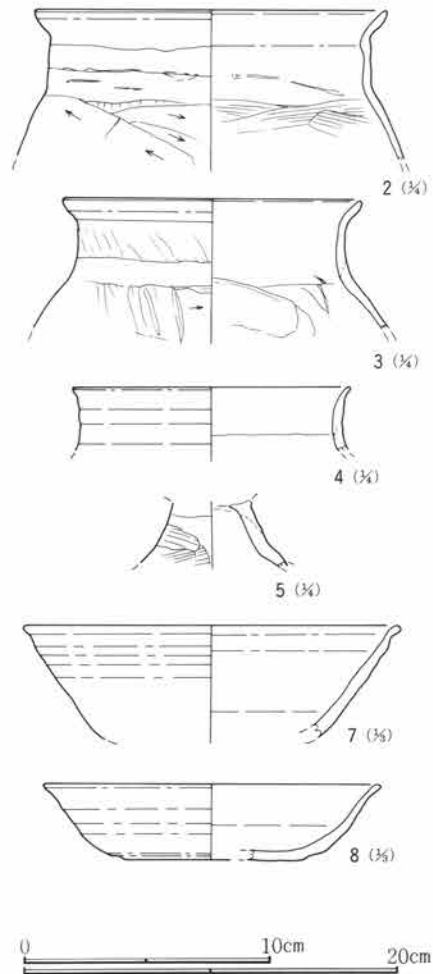
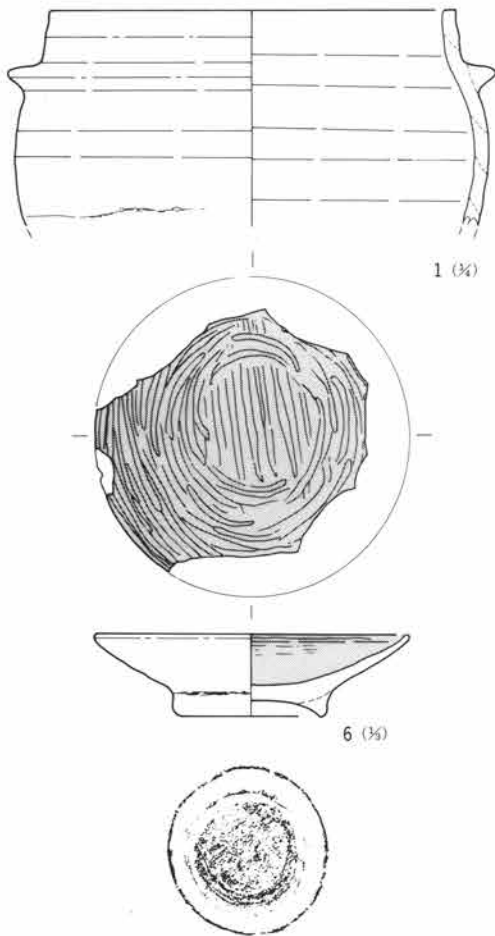
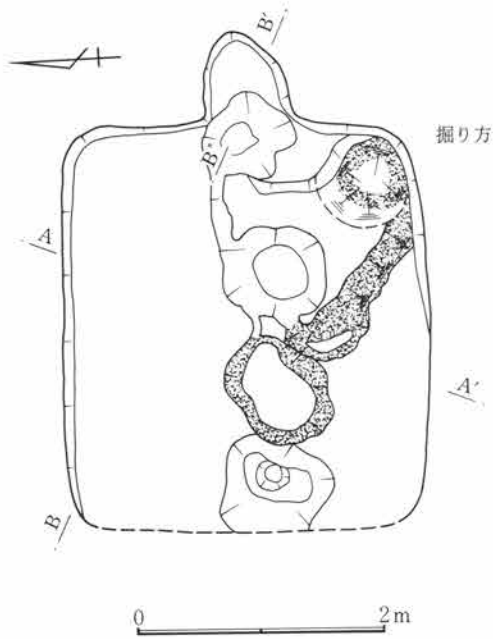
て確認されている。いずれも内側に粘土を貼付し、特に壁際のは「轆轤ピット」の可能性はある。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅54cm・奥行72cm・深さ30cmを測る。基本的に燃焼部を四石で囲む石組みの構造を示すと思われる、補強材に羽釜・瓦を用いていたようだが、天井石・支脚等と思われる石材は、床面上に破損・散乱しており、残存状況は良くない。

貯蔵穴は明瞭には確認されていないが、内部に粘土を貼付したくぼみが竈右脇に存在することが、掘り方調査中に確認され、あるいはこれが貯蔵穴であるかもしれない。

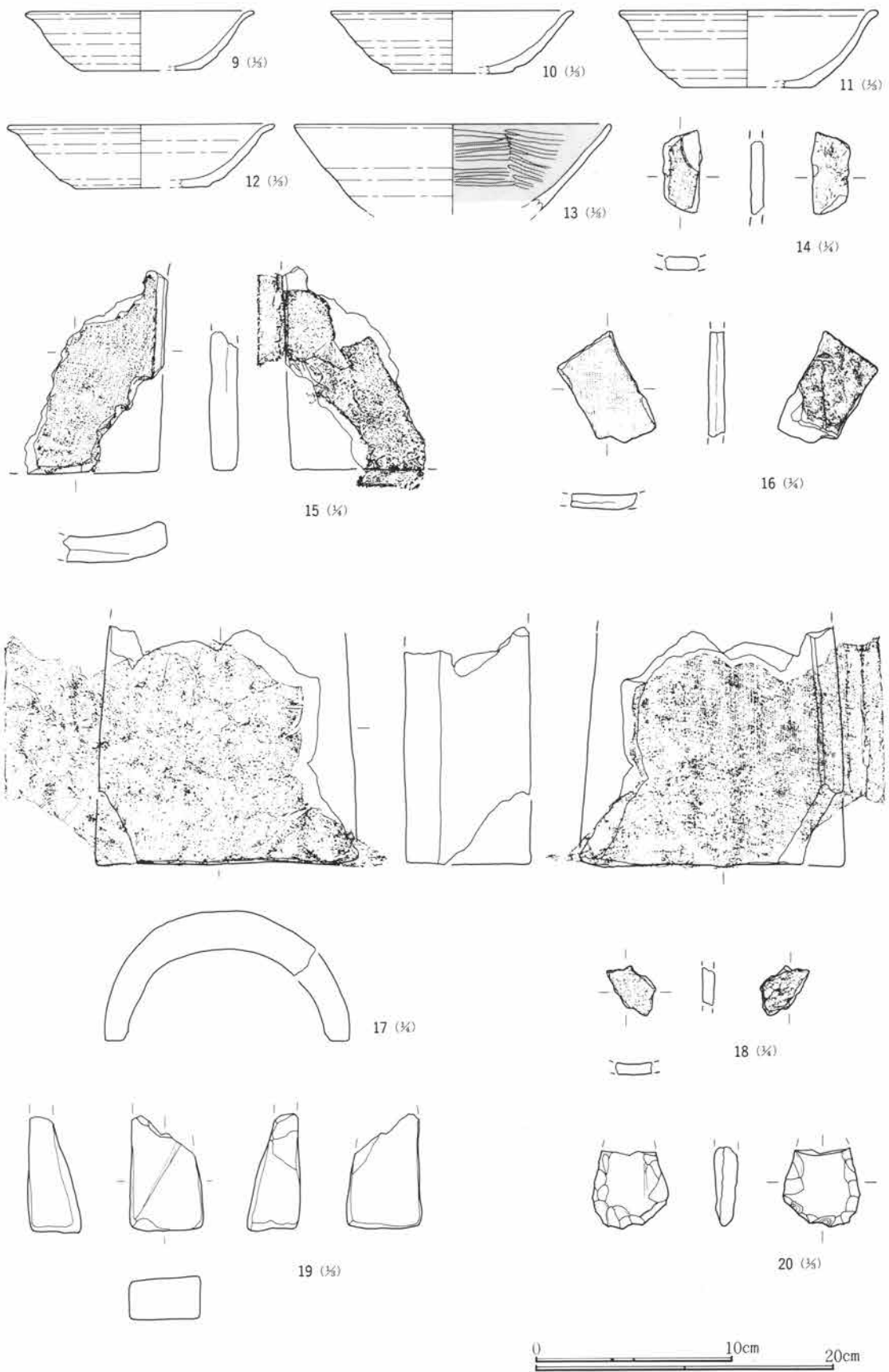
遺物は概して少なく、残存率も低い。羽釜は本住居跡に伴うかどうか問題が残る。

以上の事から、本住居跡の所属年代は、9世紀後半と思われる（鬼形・中沢）。

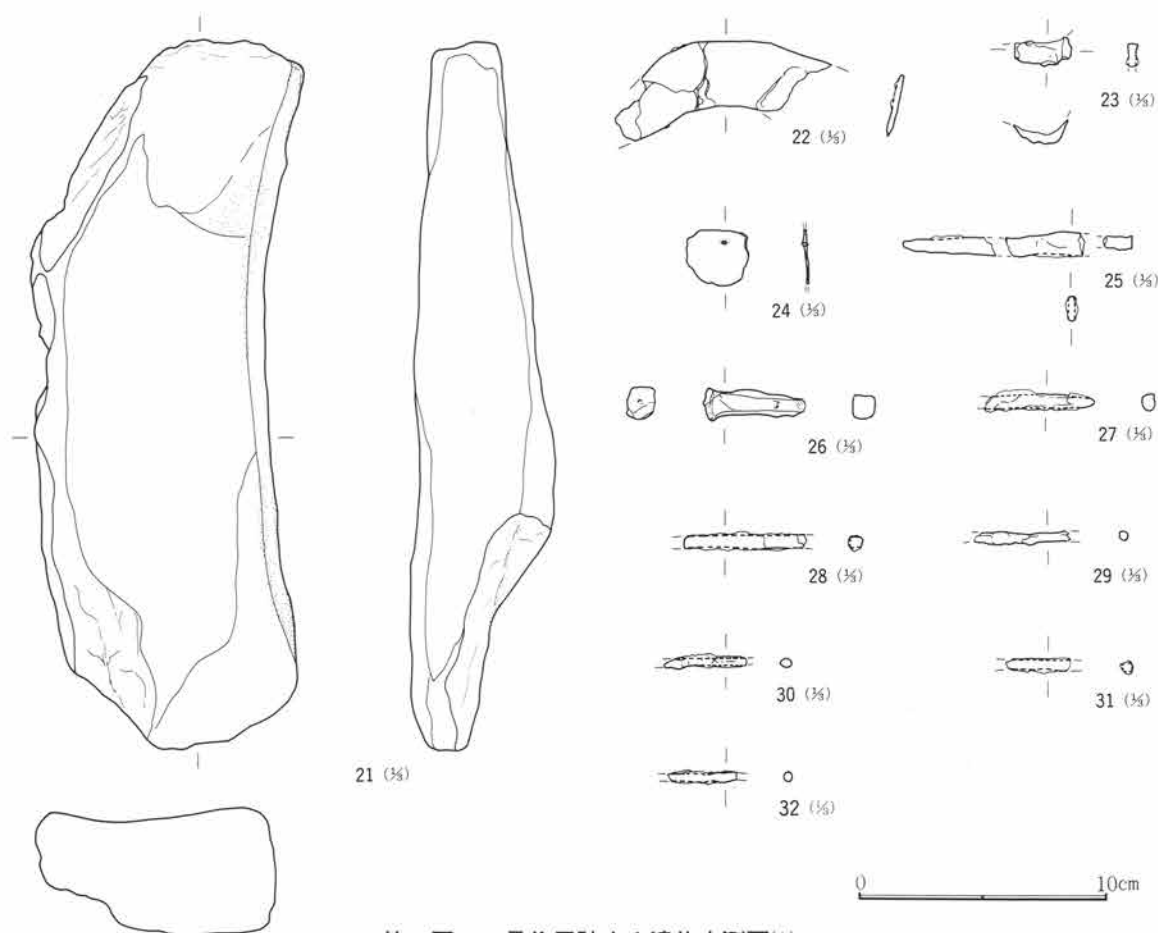


第9図 1号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第10図 1号住居跡出土遺物実測図(2)



第11図 1号住居跡出土遺物実測図(3)

第4表 1号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
9-1 37	須恵器 羽釜	覆土 小破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③黄灰色、断面灰色	輪積成形でロクロを使用。	
9-2	土師器 甕	竈内+11 破片	口(19.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺が横撫で。体部外面上部横方向の篋削り。内面篋撫で。	一部熱をうける
9-3	土師器 甕	床面+18 小破片	口(16.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺が横撫で。体部外面上部横方向の篋削り。内面篋撫で。	
9-4	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(15.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。	
9-5	土師器 小型台付甕	覆土 小破片	口— 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、外面篋撫で。内面撫で。	
9-6 37	須恵器 坏	床面+5 %残存	口(12.6) 底 5.2 高 3.2	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	内面黒色処理
9-7	土師器 埴	覆土 小破片	口(15.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	ロクロ成形。	
9-8	須恵器 埴	覆土 小破片	口(13.5) 底— 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考	
10-9	須恵器 坏	覆土 小破片	口(11.4) 底 — 高 —	①粗、石英大粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。		
10-10	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.2) 底 — 高 —	①粗、石英大粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色、一部黒斑	ロクロ成形後、底部糸切り。		
10-11	須恵器 埴	床面+15 小破片	口(13.0) 底 — 高 —	①粗、石英粒・黒色鈹物大粒 ②還元焰、硬質③暗灰色、 断面一部暗灰褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。		
10-12	須恵器 埴	覆土 小破片	口(13.4) 底 — 高 —	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。		
10-13	須恵器 埴	覆土 小破片	口(16.0) 底 — 高 —	①普、褐色鈹物細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	ロクロ成形。	内面黒色処理	
10-14	平瓦	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 0.9	①粗、白色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	一枚造りか。		
10-15 54	平瓦	床面-4 小破片	長 — 幅 — 厚 1.7	①粗、石英粒 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	一枚造りか。粘土板の合せ目あり。側端の面 取り2。		
10-16 54	平瓦	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 0.9	①普、白色鈹物細粒 ②還元焰、軟質 ③灰色	一枚造りか。粘土板の合せ目あり。		
10-17 54・60	丸瓦	床面+5 破片	長 — 幅 — 厚 2.5	①粗、石英粒多 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色	側端の面取り2。	広端上部に「大」 の刻字あり	
10-18	平瓦	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 0.7	①粗、石英・白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③黒灰色			
10-19 57	石製品 砥石	床面+4 破片	長 — 幅 3.5	厚 2.0 重 (50)	中砥か。四面使用。	流紋岩	
10-20 57	石製品 石斧	覆土 刃部 小破片	長 — 幅 3.8	厚 1.3 重(21.7)		熱変成岩	
11-21 57	石製品 砥石	床面-4 完形	長 28.0 幅 11.0	厚 5.0 重 1620	荒砥。四面使用。	砂岩	
11-22 58	鉄製品 鎌	覆土 刃部破片	長 — 幅 2.5	厚 0.2		刃先、柄部を欠 損する	
11-23 58	鉄製品	覆土 小破片	長 — 幅 —	厚 0.3		鎌の柄部かとも思われるが判然としない。	
11-24 58	銅製品	覆土 小破片	長 — 幅 —	厚 0.1		留金状の金具が刺さった状態で残る。	帯金具か
11-25 58	鉄製品 刀子	覆土	長 — 幅 0.9	厚 0.3		同一個体と思われる三片あり。刀部は鈍い。	
11-26 58	鉄製品 釘	覆土	長 (4.2) 幅 1.0	厚 1.0		断面四角。先端は破損していないが、使用に よる損耗ありか。	
11-27 58	鉄製品	覆土	長 — 幅 0.5	厚 0.5		断面四角。釘状で28・31と同一個体かと思わ れるが接合せず。	
11-28 58	鉄製品	覆土	長 — 幅 0.4	厚 0.4		断面四角。	
11-29 58	鉄製品	覆土	長 — 幅 0.4	厚 0.4		断面丸。軸棒状で30・32と同一個体かと思わ れるが接合せず。	
11-30 58	鉄製品	覆土	長 — 幅 0.3	厚 0.3		断面丸。	
11-31 58	鉄製品	覆土	長 — 幅 0.5	厚 0.5		断面四角。	
11-32 58	鉄製品	覆土	長 — 幅 0.4	厚 0.5		断面丸。	

3号住居跡 (第12~14図、第5表、図版3・37・58)

本住居跡は、第1次調査区の1号住居跡(平安)の西7mにあり、38-40グリッドに単独で位置する。

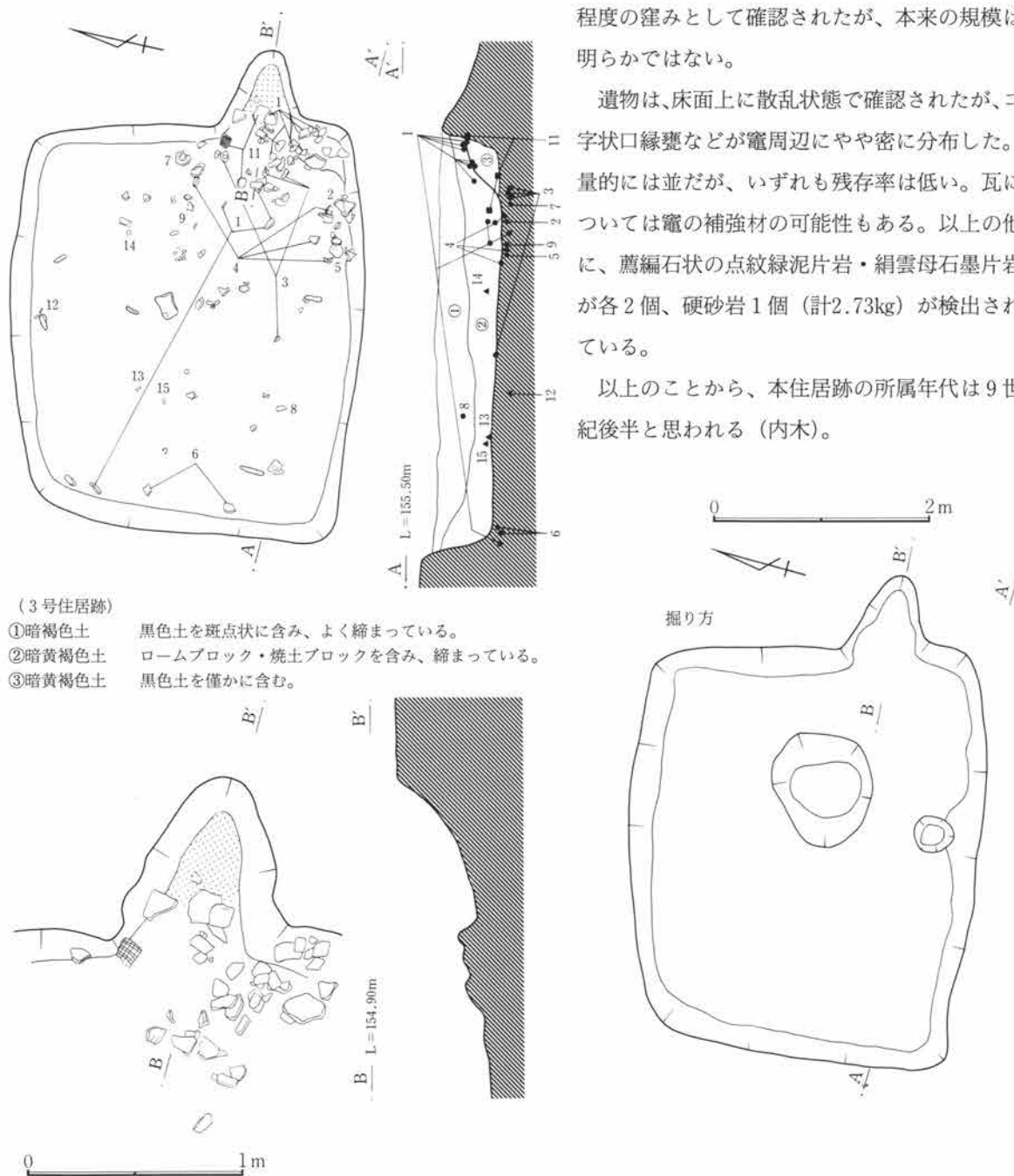
平面形は東西3m70cm・南北3m25cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Eを示す。床面は黄褐色ローム(地山)を叩き締めており、柱穴・壁溝は確認されていない。付属施設には竈前のピットが認められるのみである。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅76cm・奥行80cm・深さ35cmを測る。周辺に石材が散乱し、石組の可能性もあるが判然としない。

貯蔵穴は、南壁中央付近にあったと思われるが、生活面では確認出来ず、掘り方段階で径35cm・深さ21cm程度の窟みとして確認されたが、本来の規模は明らかではない。

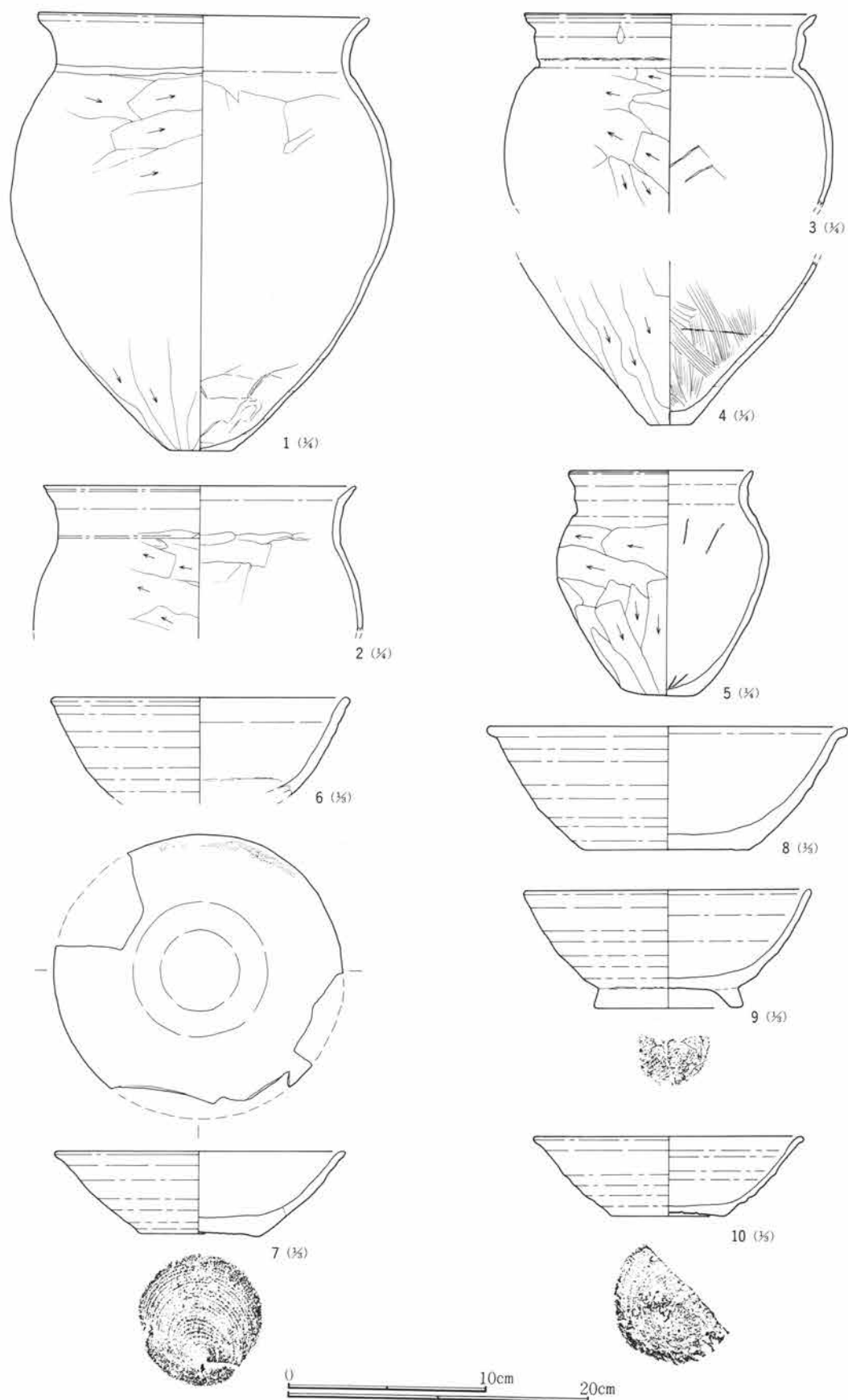
遺物は、床面上に散乱状態で確認されたが、コ字状口縁甕などが竈周辺にやや密に分布した。量的には並だが、いずれも残存率は低い。瓦については竈の補強材の可能性もある。以上の他に、薦編石状の点紋緑泥片岩・絹雲母石墨片岩が各2個、硬砂岩1個(計2.73kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(内木)。



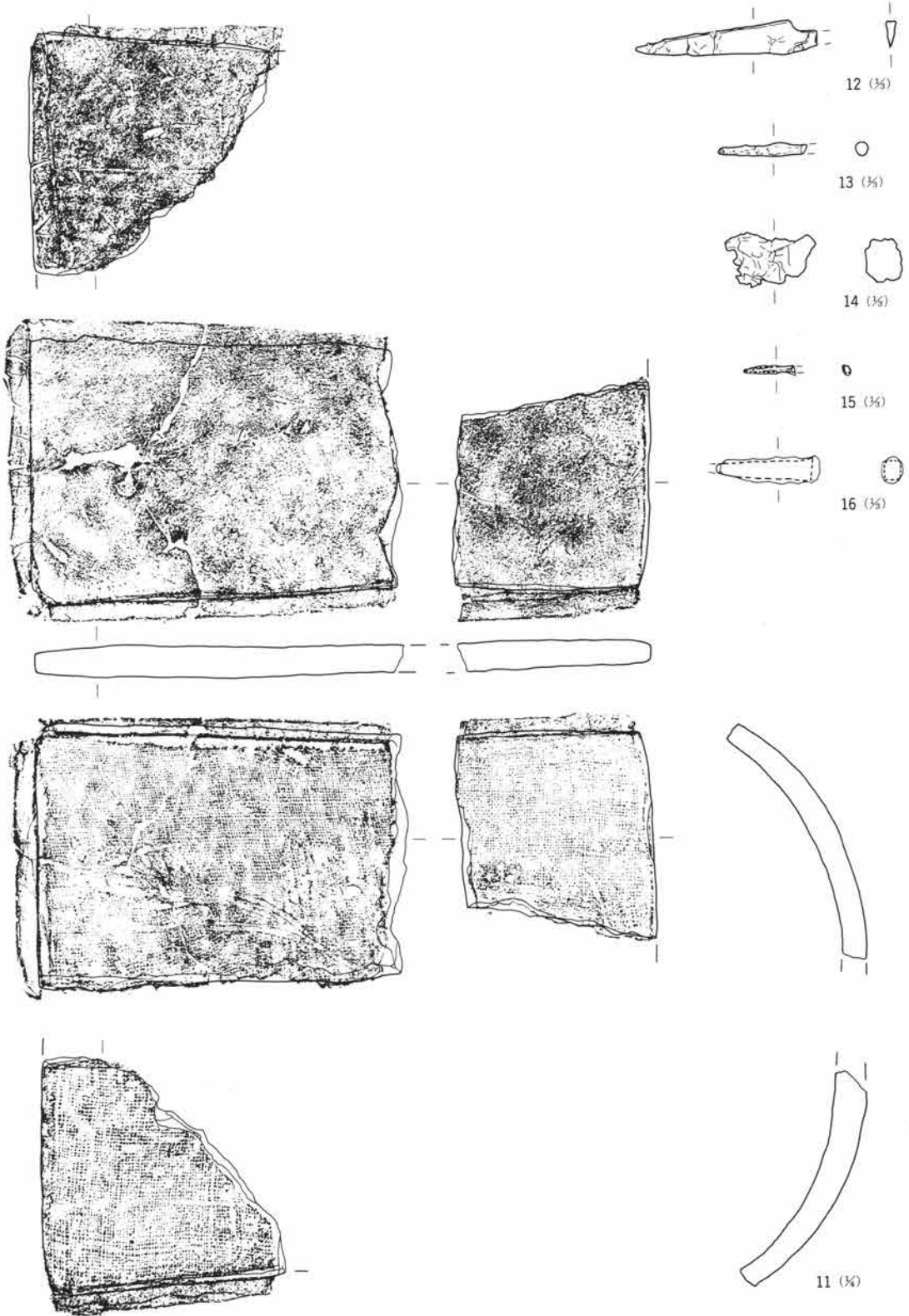
第12図 3号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第13図 3号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第14図 3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

第5表 3号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
13-1 37	土師器 甕	竈内+26 1/2残存	口(22.0) 底(4.4) 高(28.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面上位斜方向の篋削り。下位縦方向の篋削り。内面上位撫で下位篋撫で。	
13-2 37	土師器 甕	床面-4 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面斜方向の篋削り。内面撫で。	
13-3 37	土師器 甕	床面-6 破片	口(19.4) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面斜方向の篋削り。内面撫で。	
13-4 37	土師器 甕	床面直上 破片	口— 底(2.8) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色	輪積成形後、外面縦方向の篋削り。内面篋撫で。	
13-5 37	土師器 小型甕	床面-1 完形	口12.2 底4.3 高14.7	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面上位斜方向の篋削り。下位縦方向の篋削り。内面上位撫で下位篋撫で。	
13-6	須恵器 塊	床面-2 破片	口(15.0) 底— 高—	①やや粗、黒色鉍物細粒 ②還元焰、軟質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
13-7 37	須恵器 塊	床面-6 口縁一部 欠	口(14.5) 底6.0 高4.0	①粗、暗灰色鉍物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	樹脂状の付着物あり
13-8 37	須恵器 高台付塊	床面+28 1/2残存 高台部欠	口(18.0) 底— 高—	①粗、黒色鉍物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色、一部黒斑	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台剝離
13-9 37	須恵器 高台付塊	床面-2 1/2残存	口(14.2) 底(7.2) 高(5.8)	①粗、黒色鉍物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	重ね焼の痕跡あり
13-10	須恵器 塊	覆土 1/2残存	口(13.6) 底(5.8) 高(3.9)	①粗、黒色鉍物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色、断面黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
14-11 54	平瓦	竈内+38 破片	長— 幅— 厚(1.7)	①粗、石英粒・黒色鉍物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。側端面取り2。	
14-12 58	鉄製品 刀子	床面-12 柄部欠	長(8.7) 幅1.2	厚0.4		
14-13 58	鉄製品	床面+2	長(4.3) 幅0.6	厚0.6		
14-14 58	鉄製品	床面+10	長(4.2) 幅2.1	厚1.7		
14-15 58	鉄製品	床面+4	長(2.5) 幅0.5	厚0.4		
14-16 58	鉄製品 釘	覆土	長(4.8) 幅1.3	厚1.1	断面四角。	

4号住居跡 (第15~17図、第6表、図版4・38・54・57・58・60)

本住居跡は、第1次調査区中央部の北に向かって傾斜する緩斜面にあり、35-40グリッドに単独で位置する。

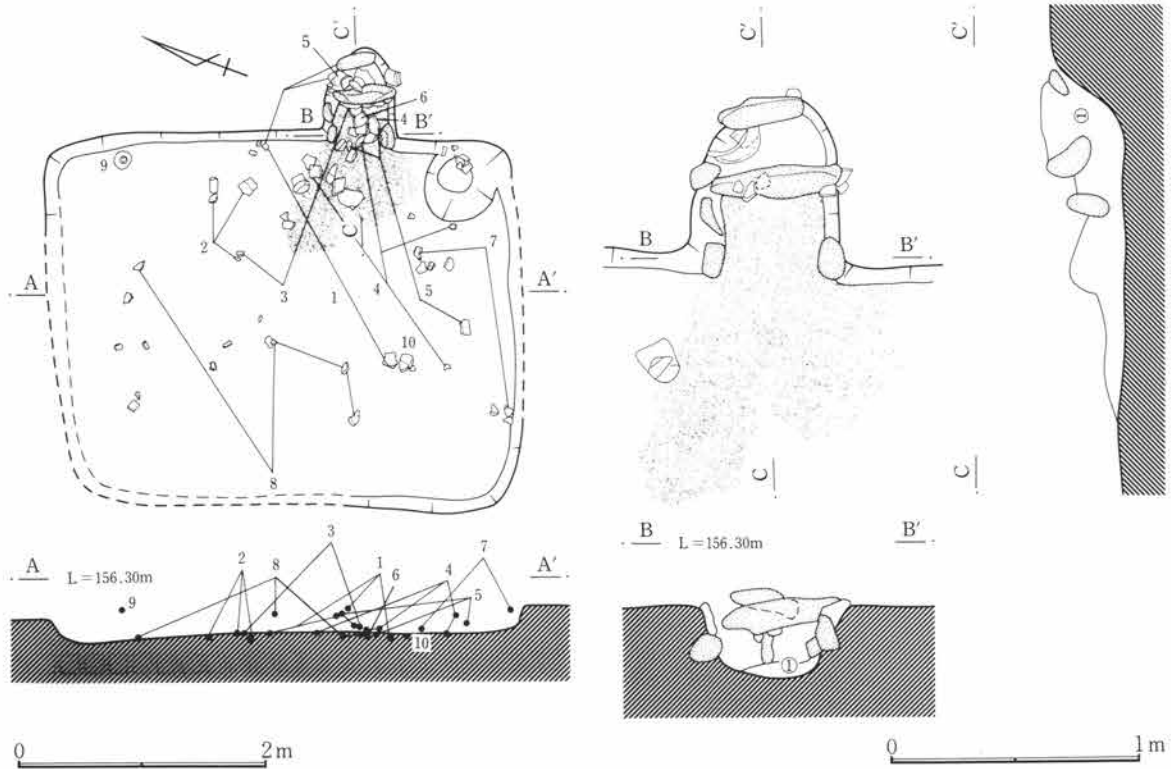
一部黒色土中にかかるため、プラン確認に若干不安が残るが、平面形は東西2m85cm・南北3m25cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-70°-Eを示す。床面は地山黒色土を叩き締めており、柱穴・壁溝は検出されていない。柱穴・壁溝等の付属する施設も検出されなかった。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅46cm・奥行70cm・深さ30cmを測る。燃焼部の天井石は遺存しなかったが両袖が残り、燃焼部中央奥寄りには支脚が残存した。燃焼部奥の砂岩の天井石等一部が架った状態で確認され、補強材に羽釜の大型破片を交えた全体の石組は、比較的良好に検出された。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径30cm・深さ9cmを測る円形を呈する。

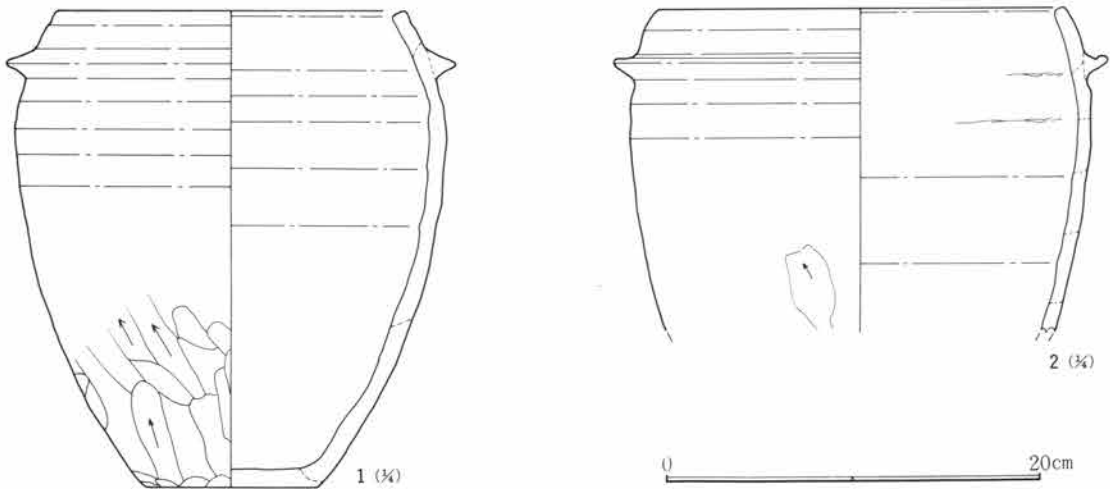
遺物の分布は、竈周辺に補強材に使用されたとと思われる、羽釜・土釜等比較的大型の土器が集中する他はやや散漫だが、そうしたなかでは吉祥句と考えられる「加寿」と読める墨書土器の出土が注意される。土器以外では、砂岩を利用した大型の砥石(破片)や鉄製品も確認されている。他に、薦編石状の安山岩1個(0.6kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(内木)。

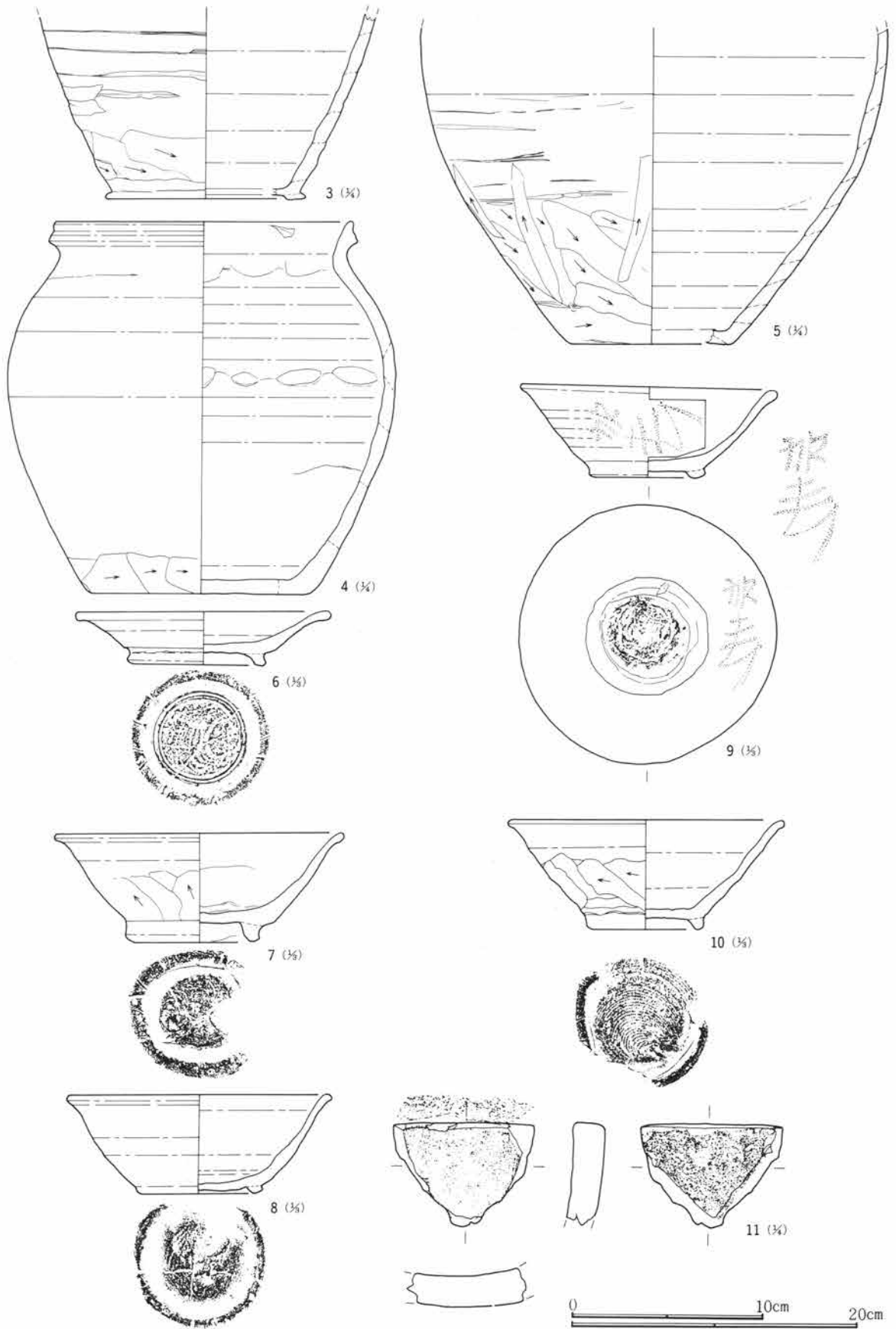


竈

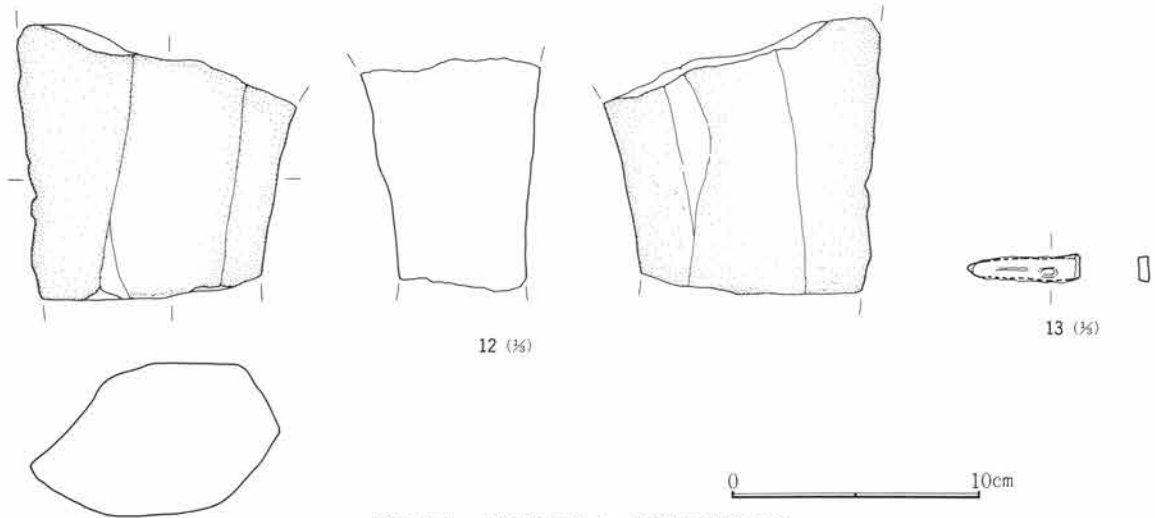
①暗褐色土 焼土粒を多く含み、黄白色粘土塊が混じる。締まっている。



第15図 4号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第16図 4号住居跡出土遺物実測図(2)



第17図 4号住居跡出土遺物実測図(3)

第6表 4号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
15-1 38	須恵器 羽釜	竈内直上 1/4残存	口(18.4) 底(9.0) 高25.0	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半は縦方向の篋削り。	
15-2 38	須恵器 羽釜	床面直上 破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰色	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半は縦方向の篋削り。	
16-3 38	須恵器 羽釜?	竈内+5 破片	口— 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色(やや黒味がかかる)	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半に一部横方向の篋削り、高台貼付。	
16-4 38	須恵器 甕	竈内直上 1/2残存	口(21.0) 底(15.4) 高25.7	①粗、石英大粒、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③暗黄灰色	上部と下部を別に輪積成形して接合。外面底部付近に横方向の篋削り。内面頸部に当具痕あり。	
16-5	須恵器 羽釜	竈内直上 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半に斜~横方向の篋削り。	
16-6 38	須恵器 高台付皿	竈内-1 完形	口13.2 底6.8 高2.7	①粗、白色鉱物細粒少 ②還元焰気味、軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。	
16-7 38	須恵器 高台付埴	床面+2 1/2残存	口(15.2) 底6.1 高5.6	①粗、砂粒 ②酸化焰気味、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。体部外面に指押さえ。	
16-8 38	須恵器 高台付埴	床面直上 1/2残存	口(14.0) 底6.6 高5.1	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。	一部熱をうける
16-9 38・60	須恵器 高台付埴	床面-24 完形	口15.0 底6.2 高4.6	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。	墨書土器
16-10 38	須恵器 高台付埴	床面-1 完形	口14.2 底5.5 高5.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。体部外面に指押さえ。	内面は黒変
16-11 54	平瓦	覆土 破片	長— 幅— 厚2.1	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗赤褐色	一枚造り。粘土板剥取痕・合せ目あり。	
17-12 57	石製品 砥石	覆土 破片	長(10.8) 幅9.9	厚6.0 重(850)		荒砥。四面使用。 砂岩
17-13 58	鉄製品 柄	覆土	長(4.5) 幅1.0	厚0.3 重(7.6)		

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

12号住居跡 (第18~20図、第7表、図版4・38・39・56・57・58・59・60)

本住居跡は、第2次調査区の東端近くの北東方向の緩斜面にあり、36・37-66グリッドに位置する。時期的に先行すると考えられる705号住居跡 (平安) の北半部を破壊し、南北方向の二条の耕作溝に破壊される。

東側のやや顕著な開析谷に面する傾斜面の為、概して残存状況は悪く、特に北東隅を中心とする竈付近は痕跡の状態であった。平面形は東西3m40cm・南北4m10cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Eを示す。竈周辺に貼床を施すが、柱穴・壁溝は検出されていない。掘り方には竈前のピットの他、大小の掘り込みがあって平坦ではない。

竈は、東壁中央やや北寄りにあったと思われるが明瞭ではなく、若干の焼土が認められたのみである。

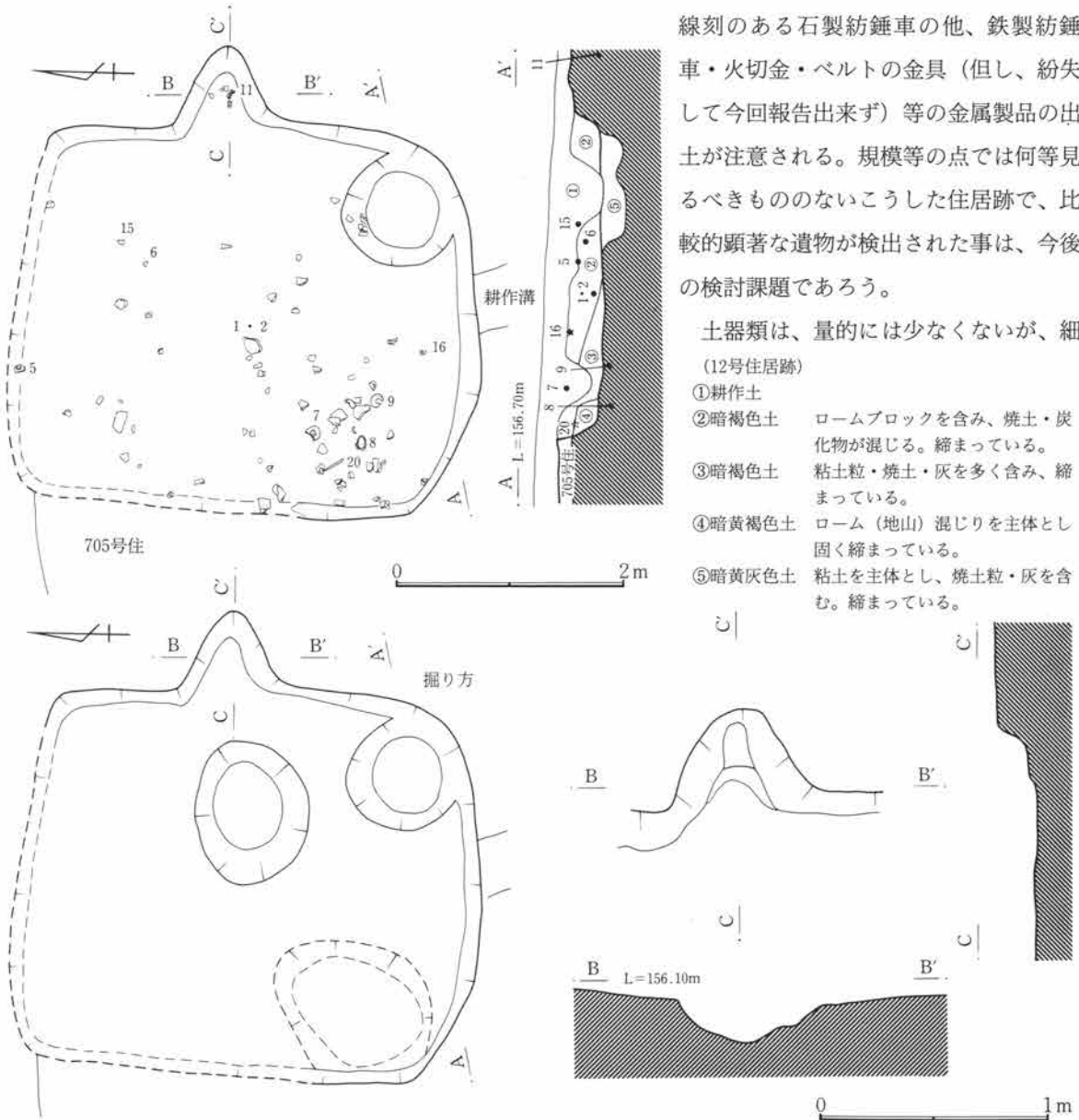
貯蔵穴は竈右脇にあり、径100cm・深さ4cmを測るやや大きなもので、焼土・灰が充満して土器細片が多く埋没していた。

遺物量は全体に多めであるが、特に南西隅のピット付近にやや集中して出土し、単品では「物部郷長」の

線刻のある石製紡錘車の他、鉄製紡錘車・火切金・ベルトの金具 (但し、紛失して今回報告出来ず) 等の金属製品の出土が注意される。規模等の点では何等見るべきものないこうした住居跡で、比較的顕著な遺物が検出された事は、今後の検討課題であろう。

土器類は、量的には少ないが、細 (12号住居跡)

- ①耕作土
- ②暗褐色土 ロームブロックを含み、焼土・炭化物が混じる。締まっている。
- ③暗褐色土 粘土粒・焼土・灰を多く含み、締まっている。
- ④暗黄褐色土 ローム (地山) 混じりを主体とし固く締まっている。
- ⑤暗黄灰色土 粘土を主体とし、焼土粒・灰を含む。締まっている。

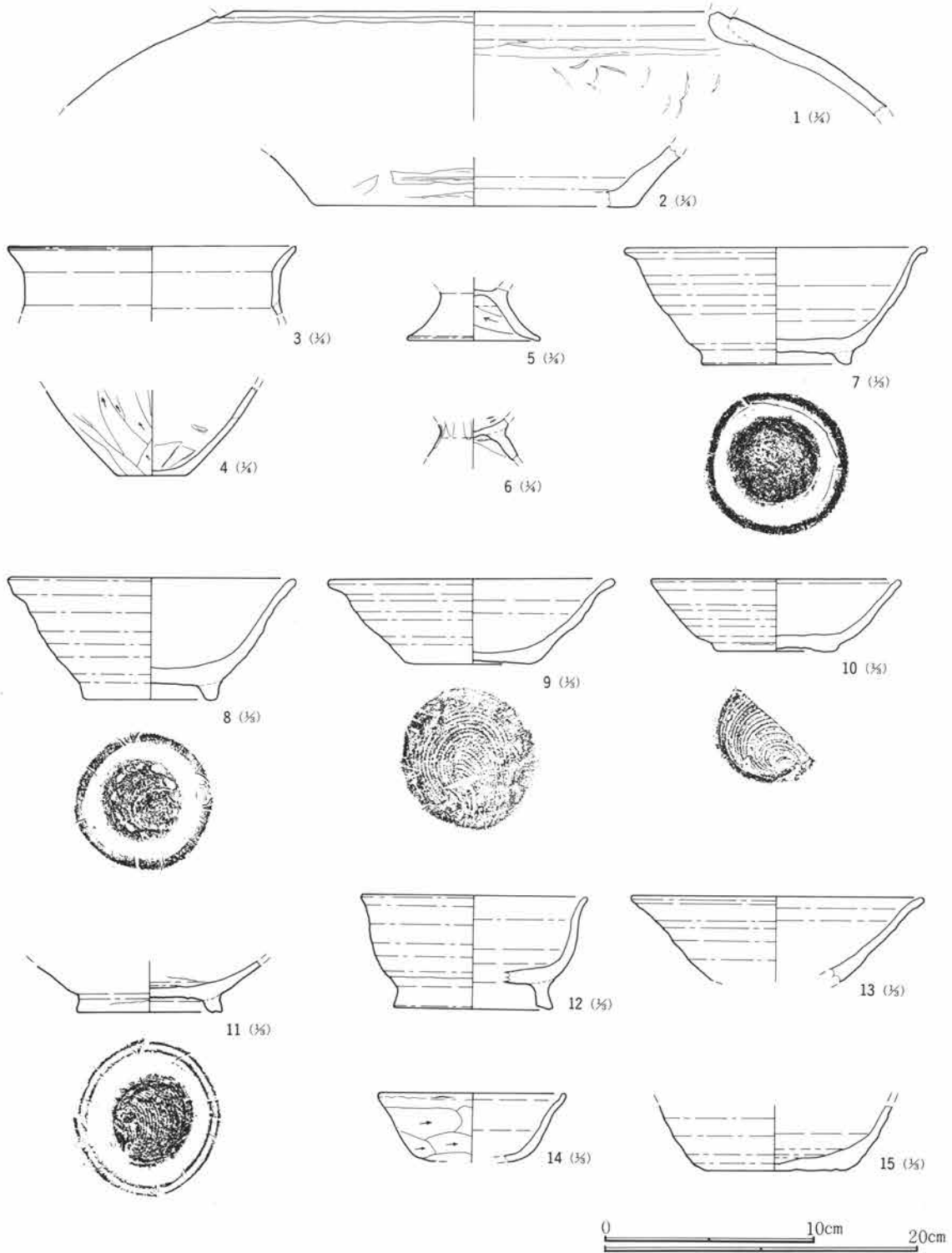


第18図 12号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

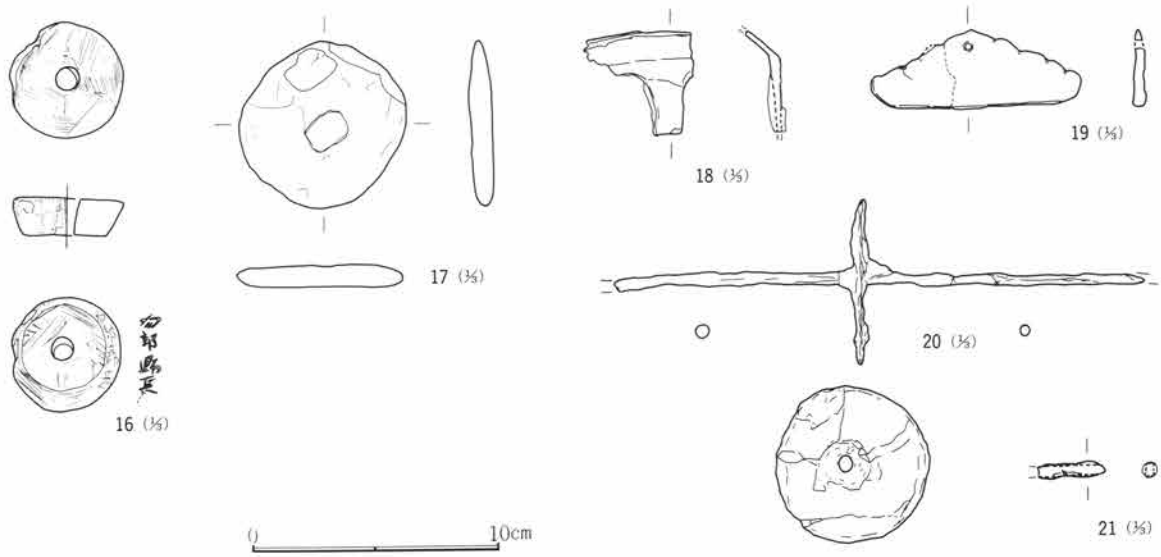
片が多く残存率が低い。特に、煮沸具には見るべき物がないが、少なくとも羽釜を伴わない事は確実である。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母石墨片岩が各2個、石墨絹雲母片岩が1個（計0.75kg）検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（鬼形・内木）。



第19図 12号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第20図 12号住居跡出土遺物実測図(2)

第7表 12号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
19-1	須恵器 大甕	床面-6 小破片	口— 底— 高—	①粗、石英・褐色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用、外面叩き後撫で。内面当具痕あり。	2と同一個体か
19-2	須恵器 大甕	床面-6 小破片	口— 底— 高—	①粗、石英・褐色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
19-3	土師器 甕	覆土 小破片	口(18.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。	
19-4	土師器 甕	覆土 小破片	口— 底(4.6) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	輪積成形後、外面縦方向の篋削り。内面篋撫で熱をうける。	
19-5 39	土師器 台付甕	床面+20 小破片	口— 底(8.5) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪積成形後、外面横撫で。内面撫で。	
19-6	土師器 台付甕	床面+10 小破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面横撫で。内面撫で。	
19-7 38	須恵器 高台付境	床面+38 1/2残存	口(14.6) 底7.1 高5.5	①粗、石英・褐色鉾物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色、体部に黒斑あり	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
19-8 38	須恵器 高台付境	床面-9 1/2残存	口(13.9) 底6.5 高5.7	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
19-9 38	須恵器 坏	床面-2 1/2残存	口(13.9) 底6.5 高4.0	①粗、石英細粒、褐色鉾物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
19-10 38	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(12.0) 底(5.7) 高(3.4)	①粗、黒色鉾物粒少 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
19-11	須恵器 高台付坏	竈内直上 破片	口— 底7.0 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗灰褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

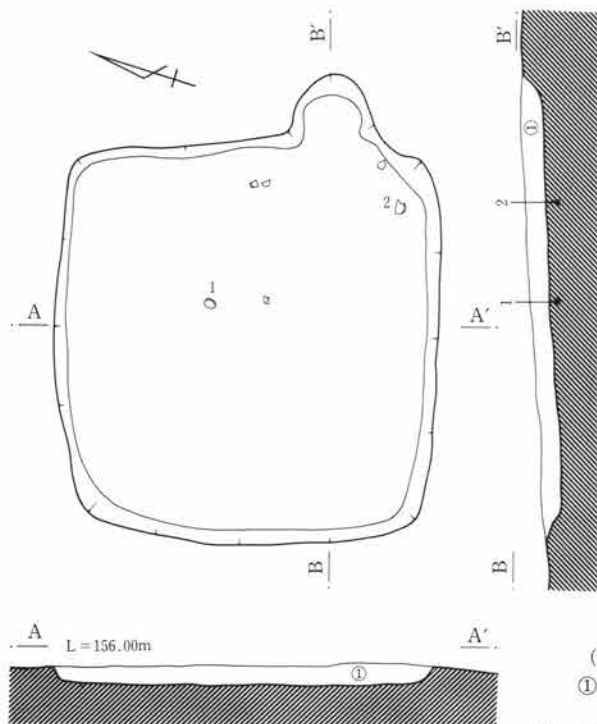
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
19-12 39	須恵器 高台付埴 壇	覆土 残存	口(11.0) 底(7.8) 高(5.4)	①普、黒色鉱物粒多 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
19-13	須恵器 埴壇	覆土 小破片	口(14.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	ロクロ成形。	
19-14	土師器 埴壇	覆土 破片	口(9.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺～内面横撫で。外面指押さ え。	
19-15	須恵器 高台付埴 壇	床面+15 破片 高台部欠	口— 底(6.8) 高—	①粗、黒色鉱物粒多 ②還元焰、やや軟質 ③灰色、内面やや赤変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
20-16 56・60	石製品 紡錘車	床面+16 完形	径 4.59/3.37 孔径 0.86 厚 1.43 重 51.5		上・下面右回転の擦痕、側面に斜方向の擦痕 あり。上面の使用痕は不明瞭。	線刻あり、滑石 片岩
20-17 57	石製品 紡錘車 (?)	覆土 未製品	径 6.6 孔径 — 厚 0.8 重 (63.3)		中央に穿孔の痕跡あり。	千枚岩
20-18 58	鉄製品	覆土	長 — 厚 0.2 幅 — 重(14.6)			
20-19 59	鉄製品 火打ち金	覆土	長 8.4 厚 0.5 幅 3.1 重 21.4		握りに左右各4個以上の刻みあり。中央上 部に穿孔。	
20-20 59	鉄製品 紡錘車	床面+18 軸一部欠	紡輪径(6.2) 厚 0.3 軸長(21.3) 太 0.3 重(51.1)		軸の断面丸。	
20-21 58	鉄製品	覆土	長(2.6) 厚 0.6 幅 0.6 重(1.3)			

13号住居跡 (第21・22図、第8表、図版5)

本住居跡は、第2次調査区の12号住居跡の東側に隣接してあり、37-67グリッドに単独で位置する。

殆ど痕跡でプラン確認さえ困難な状況であったが、平面形は東西3m25cm・南北3m5cmを測る正方形を呈



するものと思われる。主軸方向はN-80°-Eを示す。耕作による攪乱が深く及び、覆土の堆積は不明瞭で床面も判然としない。また、基本的に掘り方は認めらず、貯蔵穴等の付属施設も検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあったと思われるが、多少の焼土が認められた程度である。貯蔵穴・柱穴・壁溝等も認められない。

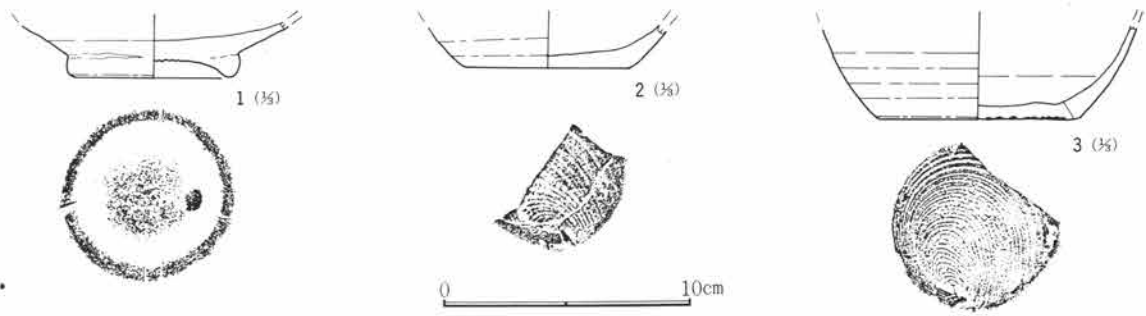
遺物も見べきものがなく、辛うじて図化出来たものも三点に留まる。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(鬼形)。

(13号住居跡)
①暗褐色土 軽石・ロームブロックを多く含み、やや縮まりに欠ける。

第21図 13号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第22図 13号住居跡出土遺物実測図

第8表 13号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
22-1	須恵器 高台付埴	床面-5 破片	口 — 底 6.8 高 —	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
22-2	須恵器 坏	床面-7 破片	口 — 底 (6.6) 高 —	①粗、石英粒・黒色鉱物粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	粘土の付着あり
22-3	須恵器 坏	覆土 小破片	口 — 底 (8.0) 高 —	①粗、褐色鉱物細粒多 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	

16号住居跡 (第23~25図、第9表、図版5・39・54・59)

本住居跡は、第2次調査区北端近くの平坦面にあり、46-59グリッドに位置する。17号住居跡(古墳)・18号住居跡(古墳)・22号住居跡(古墳)の覆土を掘り込んで構築され、南北方向の耕作溝二条が竈及び北西隅をかすめる。

平面形は東西3m10cm・南北3m40cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。竈付近に貼床を施し、柱穴は無い。掘り方には竈に伴う掘り込み、竈前のピットの他、遺物を含むピットが数基認められるが、かなりの部分で他の住居跡の覆土を掘り込んで

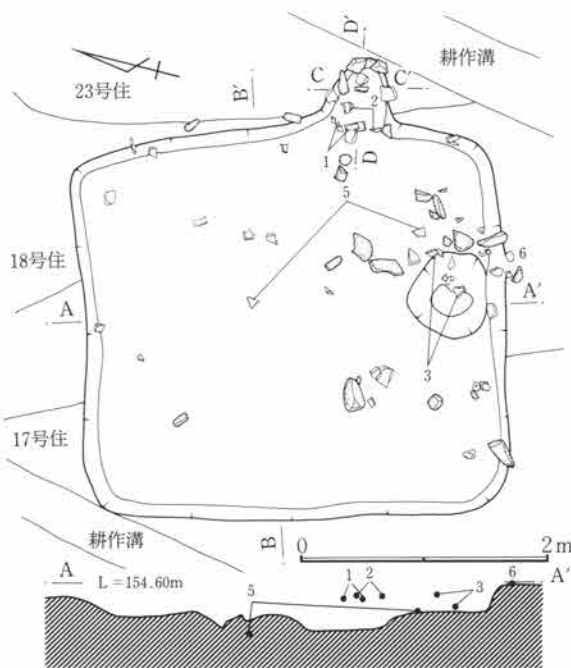
いるため全容は判然としない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行65cm・深さ30cmを測る。竈に用材と見られる石材が床面に散乱し、あるいは石組であったかもしれない。

貯蔵穴は南壁中央にあり、径60cm・深さ13cm程度の楕円状を呈する。

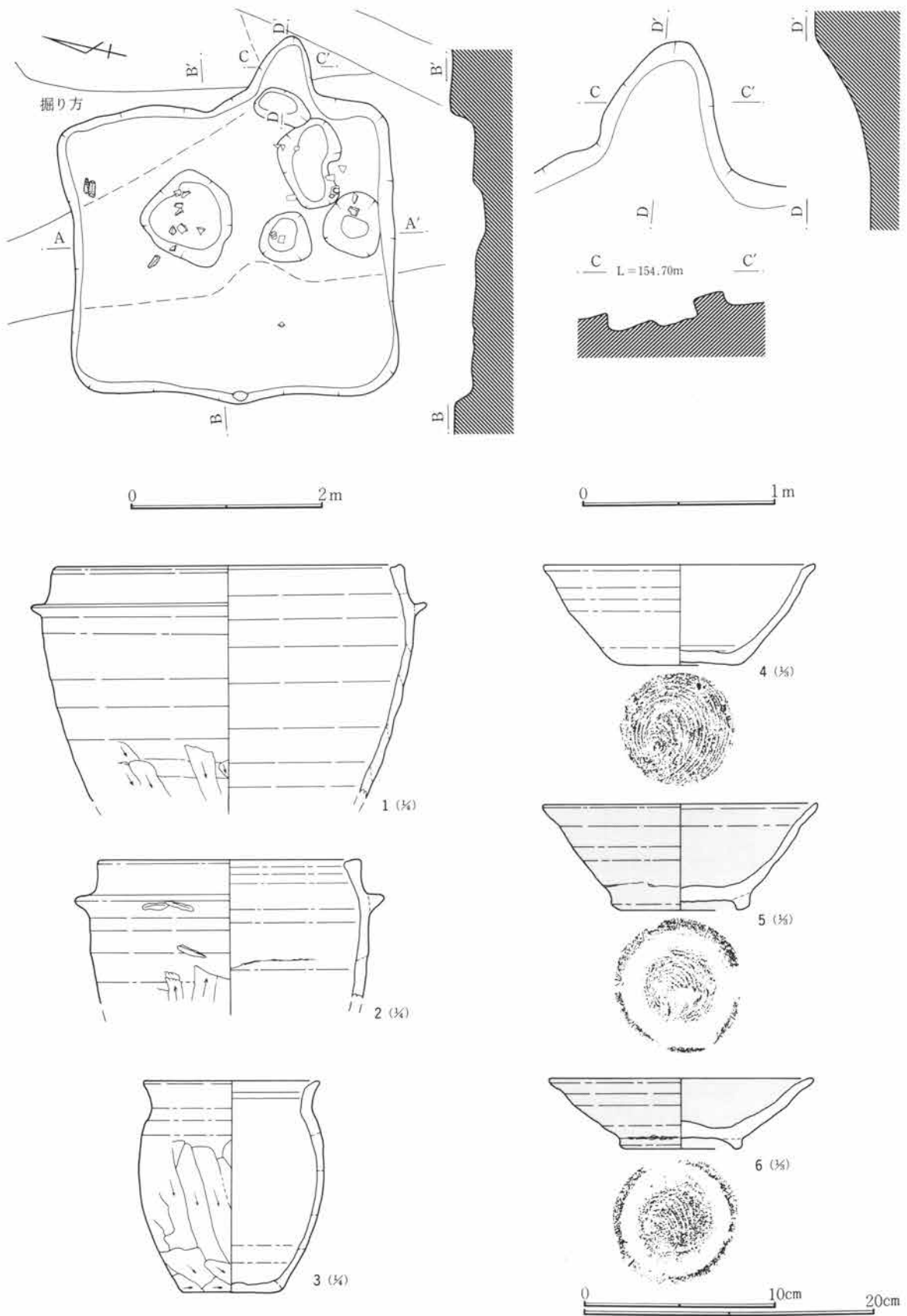
遺物は竈と貯蔵穴周辺とにやや集中するが、その密度は薄く、残存率も低い。煮沸具には羽釜を伴う。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩・緑簾緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・点紋緑泥片岩各1個(計3.75kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。



第23図 16号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第24図 16号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第25図 16号住居跡出土遺物実測図(2)

第9表 16号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
24-1 39	須恵器 羽釜	竈内+22 破片	口(24.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色、断面黄灰色	輪積成形でロクロ使用。外面下半を縦方向の 篋削り。	竈補強材
24-2 39	須恵器 羽釜	竈内+24 破片	口(18.2) 底— 高—	①普、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪積成形でロクロ使用。外面下半を縦方向の 篋削り。	
24-3 39	須恵器 小型土釜	床面+4 1/2残存	口(12.0) 底(6.8) 高(14.4)	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰白色	輪積成形ロクロ使用。外面中位縦方向・下位 横方向篋削り。	一部熱をうける
24-4 39	須恵器 埴	覆土 ほぼ完形	口 14.0 底 6.0 高 5.1	①やや粗、白・褐色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③暗黄灰色、断面灰褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
24-5 39	須恵器 高台付埴	床面直上 1/2残存	口(14.2) 底 6.0 高 5.4	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	黒色処理
24-6 39	須恵器 高台付埴	床面+2 1/2残存	口(13.8) 底 5.9 高 3.6	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	黒色処理
25-7 54	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 0.9	①粗、雲母 ②還元焰、硬質 ③黒灰色、断面黄灰色	一枚造り。	
25-8	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.6	①粗、石英粒・雲母 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚造り。	
25-9 59	鉄製品 小刀	覆土	長(11.2) 厚(0.5) 幅刃(1.4) 重(13.7)			

21号住居跡 (第21・22図、第10表、図版5・39・55・57)

本住居跡は、第2次調査区北端近くの北西向きの緩斜面にあり、47-54グリッドに位置する。

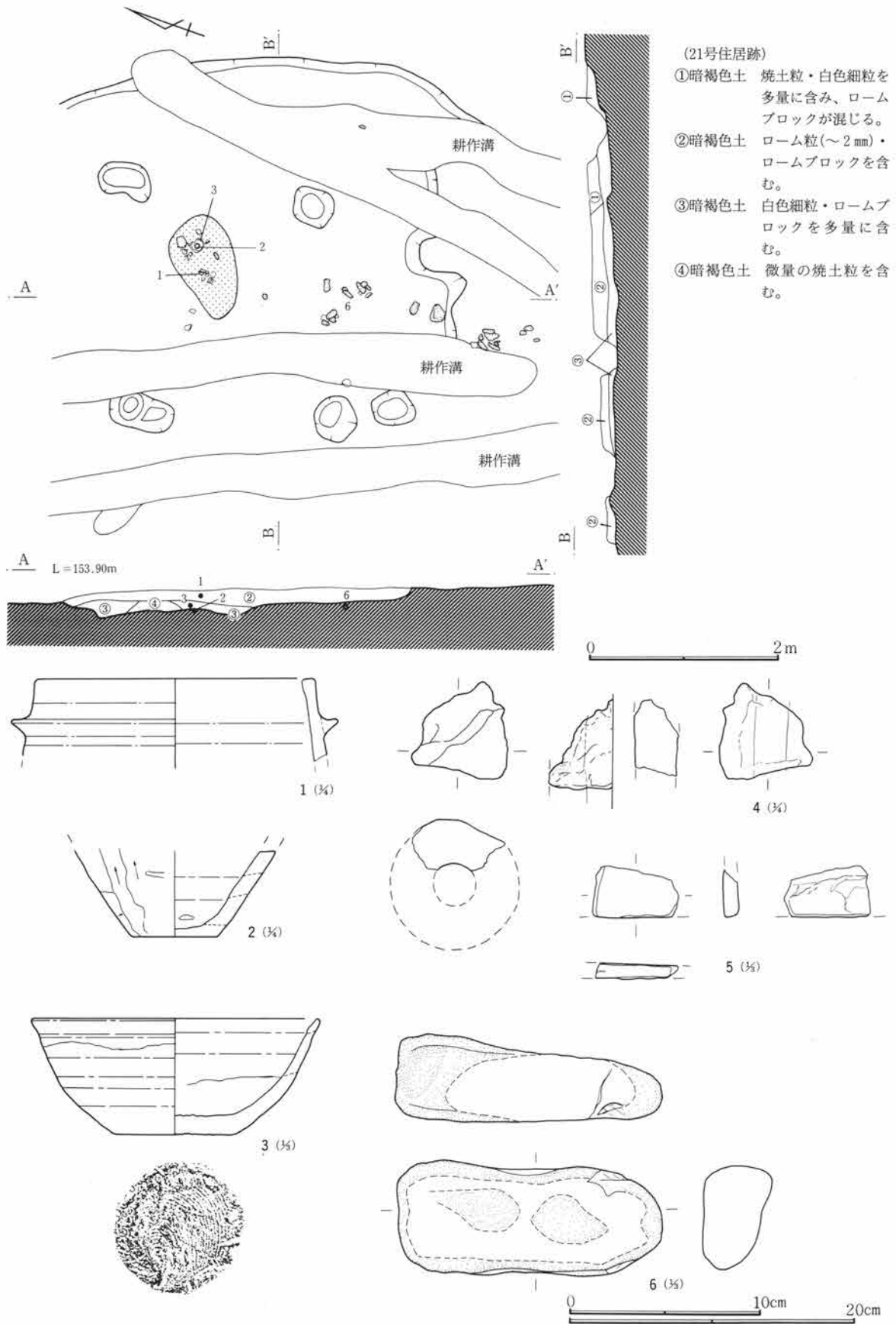
平面形は、東西3m10cm程度・南北3m40cm程度の広がりがあるものと思われるが、数箇所の焼土の分布・壁様の立ち上がりを見るものの、平面プランは不明瞭である。あるいは非常に残存状況の不良な古墳時代の住居跡と重複していたかもしれない。顕著な焼土の位置を東壁と考えると良ければ、周囲に立ち上がりを見いだせないものの、西壁を流失した小規模な住居跡が想定出来るが、断定は出来ない。従って、主軸方向も不明である。

そのような事情によって、竈・貯蔵穴・壁溝等の位置は特定出来ない。柱穴状のピットが見られるが、柱穴には不揃いである。

遺物は、竈の痕跡かと思われる比較的顕著な焼土に伴って羽釜・埴が見られるものの、量的には少ない。図化出来たもの以外では、薦編石状の絹雲母石墨片岩5個、点紋絹雲母石墨片岩3個、石墨緑泥片岩・点紋緑泥片岩・砂岩各1個(計2.7kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(鬼形)。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第26図 21号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

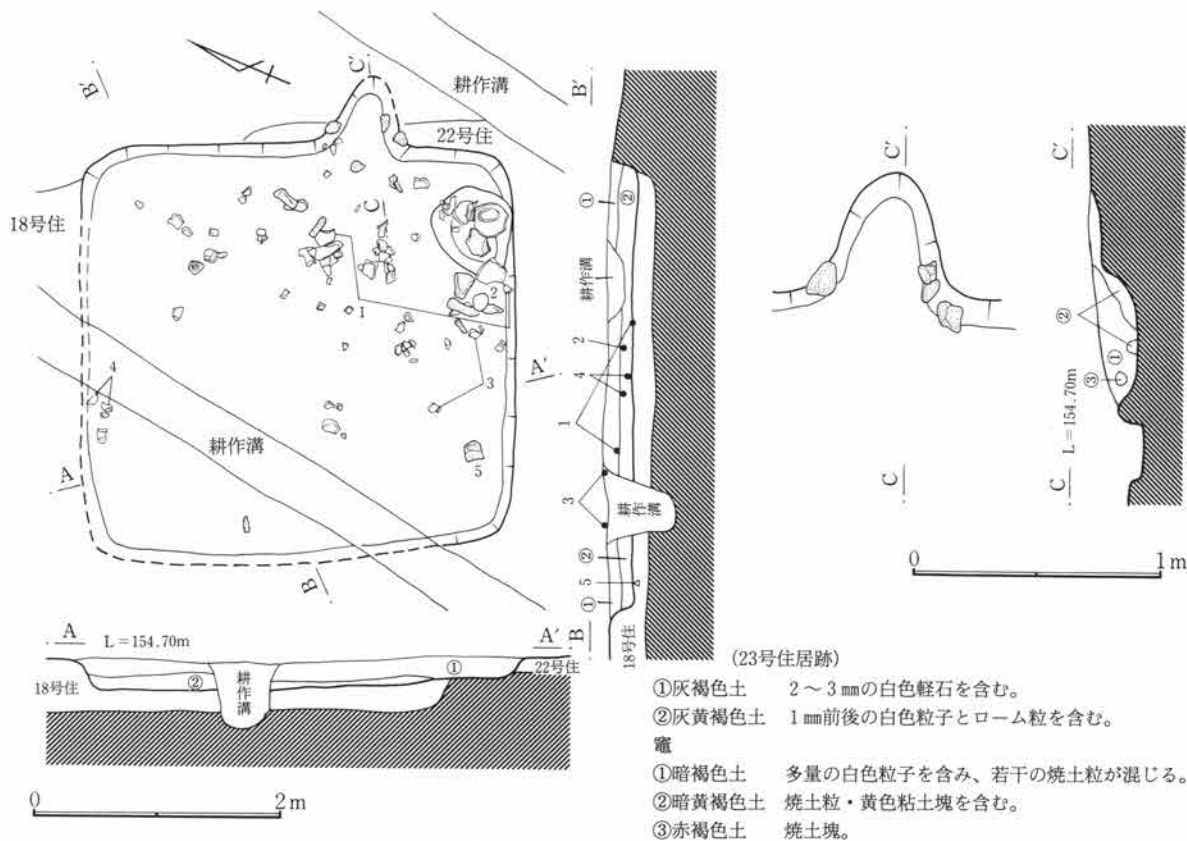
第10表 21号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
26-1	須恵器 羽釜	床面+12 小破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
26-2	須恵器 甕	床面直上 破片	口— 底(6.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半は縦方向の 笥削り。	粘土の付着あり
26-3 39	土師器 埴	床面+2 ほぼ完形	口 15.1 底 6.3 高 6.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色、体～底部内面黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
26-4 55	羽口	覆土 小破片	外径(9.0) 内径(3.5)	①粗、スサ ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色、一部灰色		一部溶解し、鉄 滓が付着
26-5 57	石製品	覆土 小破片	長— 厚(0.7) 幅— 重(14.5)			端部面取1 凝灰質泥岩
26-6 57	石製品 砥石	床面-2 完形	長 14.0 厚 4.4 幅 6.0 重 534		中砥か。二面を使用。	熱変成岩

23号住居跡（第27・28図、第11表、図版6・39・56・57）

本住居跡は、第2次調査区北端の平坦面にあり、46-60グリッドに位置する。平面形は東西3m30cm・南北3m50cmを測る正方形を呈すると思われる。主軸方向はN-70°-Eを示す。耕作溝によって、北壁から西壁にかけて斜めに破壊され、18号住居跡（古墳）・22号住居跡（古墳）の覆土中を中心に掘り込まれ、一部地山を掘り込んでいる部分もある。掘り方は、重複住居跡の覆土中になるため確認出来なかった。

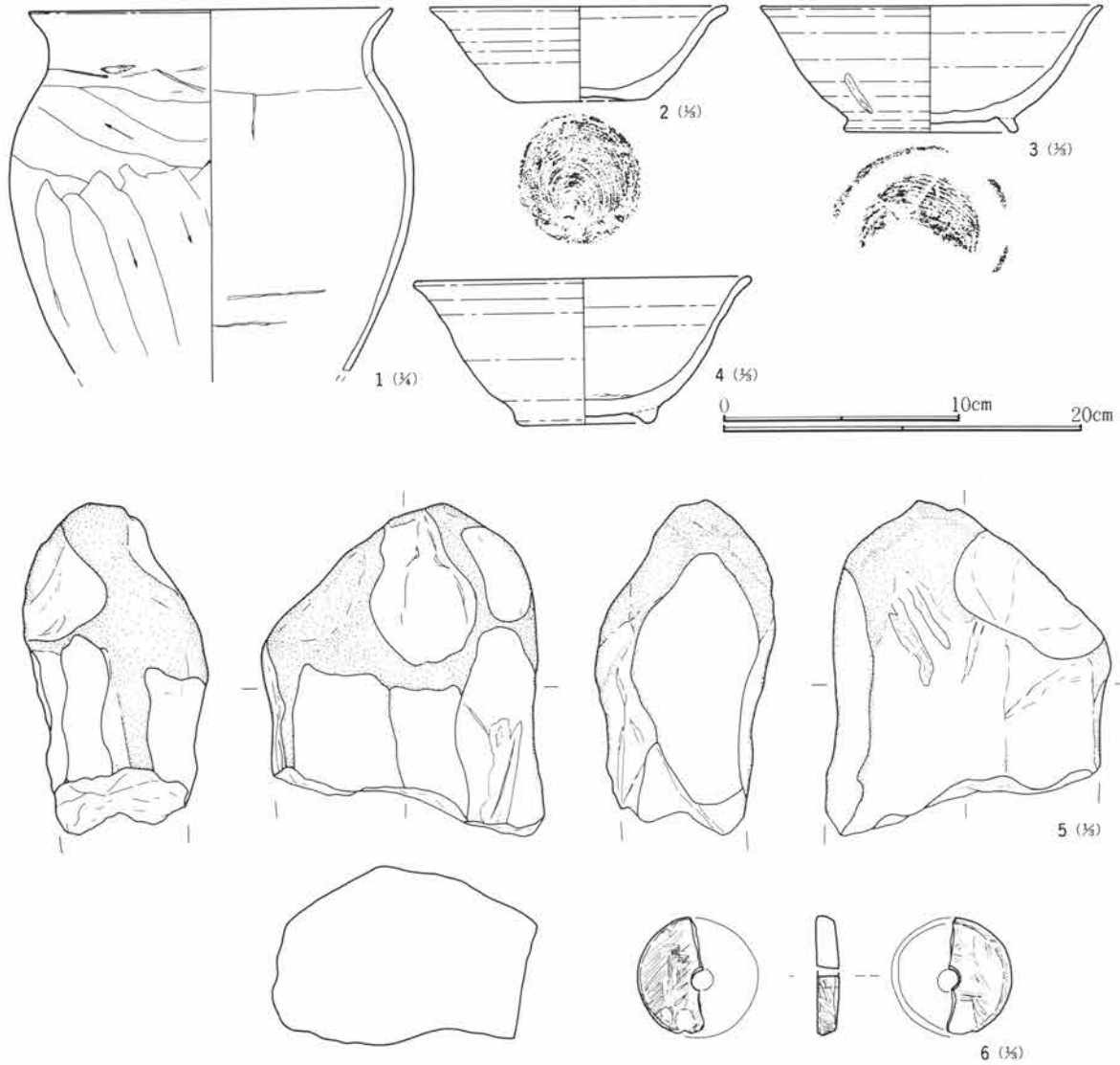
竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行60cm・深さ15cmを測る。両袖石基部を残すが残存状況は



第2節 竪穴住居跡と出土遺物

不良である。貯蔵穴は南東隅近くにあり、径60cm・深さ14cmを測る。内部から竈材らしい石が出土している。遺物は竈周辺に分布しているが密度は薄く、残存状況も不良である。煮沸具には羽釜が含まれていないようである。土器以外では、半分欠損した石製紡錘車・砂岩製の砥石破片が出土している。他に薦編石状の石墨緑泥片岩・絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩・緑泥片岩が各1個（計0.55kg）検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。



第28図 23号住居跡出土遺物実測図

第11表 23号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
28-1 39	土師器 甕	床面+10 1/2残存	口(26.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上部斜方向・下半縦方向の篋削り。内面篋撫で。	
28-2 39	須恵器 坏	床面+5 完形	口 12.6 底 5.6 高 3.9	①粗、石英粒・雲母 ②還元焰、軟質 ③にぶい黄橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
28-3	須恵器 高台付塊	床面+21 1/2残存	口(14.4) 底(7.3) 高(5.2)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

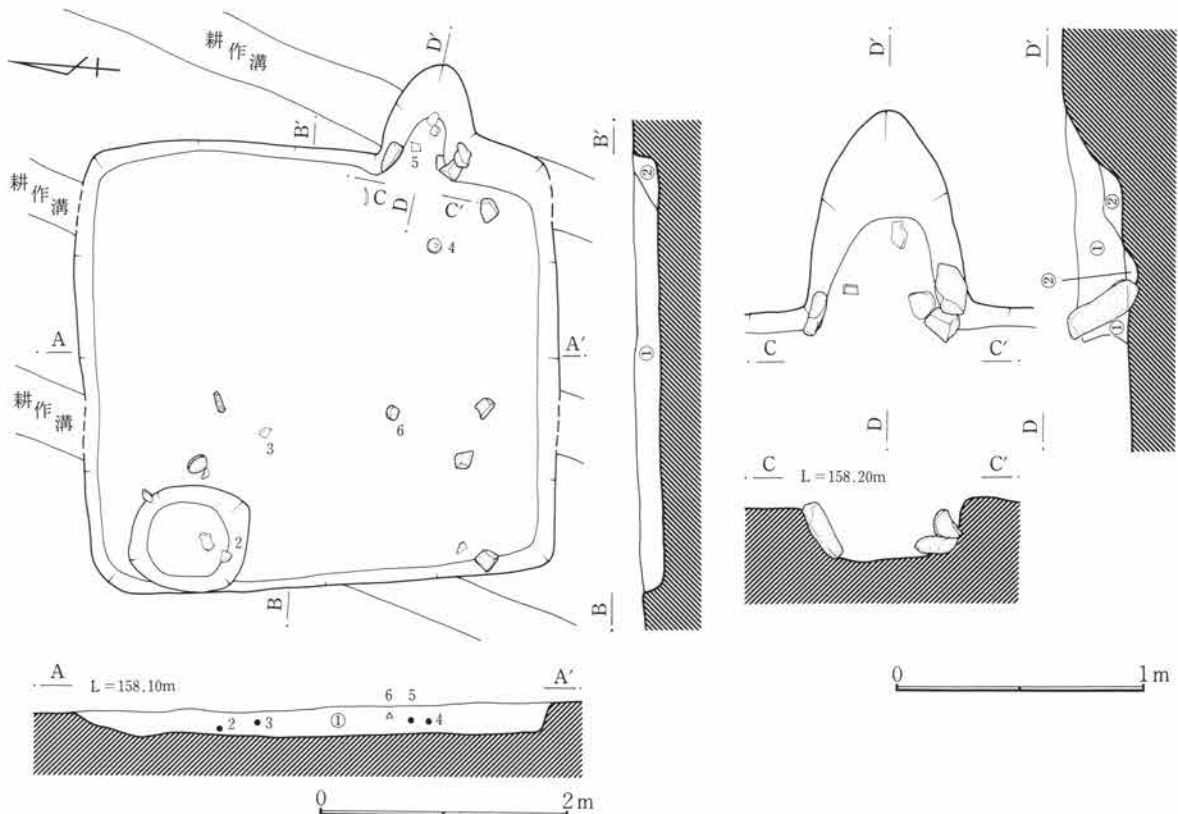
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
28-4	須恵器 高台付塊	床面+4 1/2残存	口(14.3) 底(6.0) 高(6.2)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
28-5 57	石製品 砥石	床面-2	長(14.5) 幅(11.8) 重(1020)	厚 7.5	荒砥。四面以上使用。	砂岩
28-6 56	石製品 紡錘車	覆土 1/2残存	径(5.0/4.6) 孔径 0.9 厚 0.87 重(18)		全体に製作時の擦痕あり。	滑石片岩

85号住居跡（第29・30図、第12表、図版6・39・57・59）

本住居跡は、第4次調査区南寄りの緩斜面にあり、84号住居跡（平安）の北側に隣接している。24・25-29グリッドに単独で位置する。

平面形は東西3m60cm・南北3m90cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-98°-Eを示す。耕作溝三条が、北東から南西方向に向けて抜けており、それによって竈等が破壊されている。床面は黄褐色ローム（地山）を叩き締めており、掘り方・柱穴・壁溝は基本的に認められない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行65cm・深さ20cmを測る。両袖石が残るが、上部は耕作溝によって破壊を受けており、残存状況は不良であるが、基本的に石組の構造を持っていたと考えられる。



（85号住居跡）

①暗黄褐色土 軽石・ローム粒を含む。②暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む。

竈

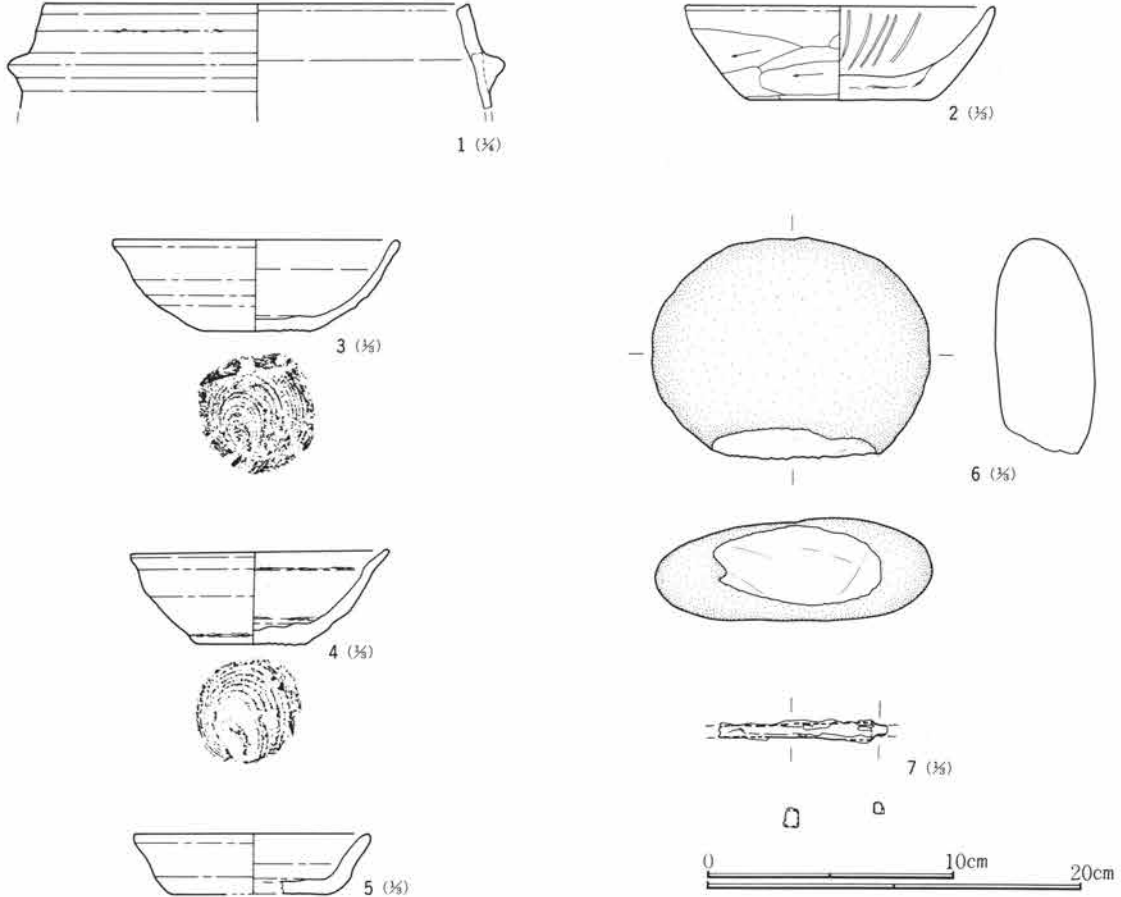
①暗褐色土 焼土・ロームブロックを僅かに含み、やや締まりに欠ける。②暗褐色土 多量の焼土にロームブロックが混じる。

第29図 85号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

貯蔵穴は、西壁北寄りに確認された径1m・深さ18cmを測るピットが相当すると思われるが、確証はない。遺物はごく少なく、坏類が床面上に散漫に分布するのみである。煮沸具には羽釜を含む。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（鬼形）。



第30図 85号住居跡出土遺物実測図

第12表 85号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
30-1	須恵器 羽釜	竈内覆土 小破片	口(23.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
30-2	土師器 坏	床面+4 ½残存	口(12.4) 底(7.2) 高(3.7)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色、内面暗褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面横方向篋削り。内面篋磨き。	
30-3 39	須恵器 坏	床面+8 ½残存	口(11.6) 底 4.4 高 3.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
30-4 39	土師器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 10.4 底 4.5 高 3.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
30-5	須恵器 皿	竈内+8 小破片	口(9.6) 底(6.4) 高(2.3)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
30-6 57	石製品 敲石	床面+14 完形	長 8.5 幅 11.2	厚 3.9 重 600		安山岩
30-7 59	鉄製品 刀子	覆土	長(6.7) 幅 0.7	厚 0.5 重(9.2)	断面四角。	

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

99号住居跡 (第31~33図、第13表、図版6・39・59)

本住居跡は、第4次調査区南寄りの緩斜面にあり、27-27グリッドに単独で位置する。

平面形は、東西3m・南北4mを測るやや歪んだ長方形を呈する。主軸方向はN-105°-Eを示す。北東方向から南西方向に抜ける二条の耕作溝や土壌によって破壊され、残存状況は不良である。竈周辺を中心にやや大きな炭化材の遺存が見られ、あるいは火災を受けているかもしれない。

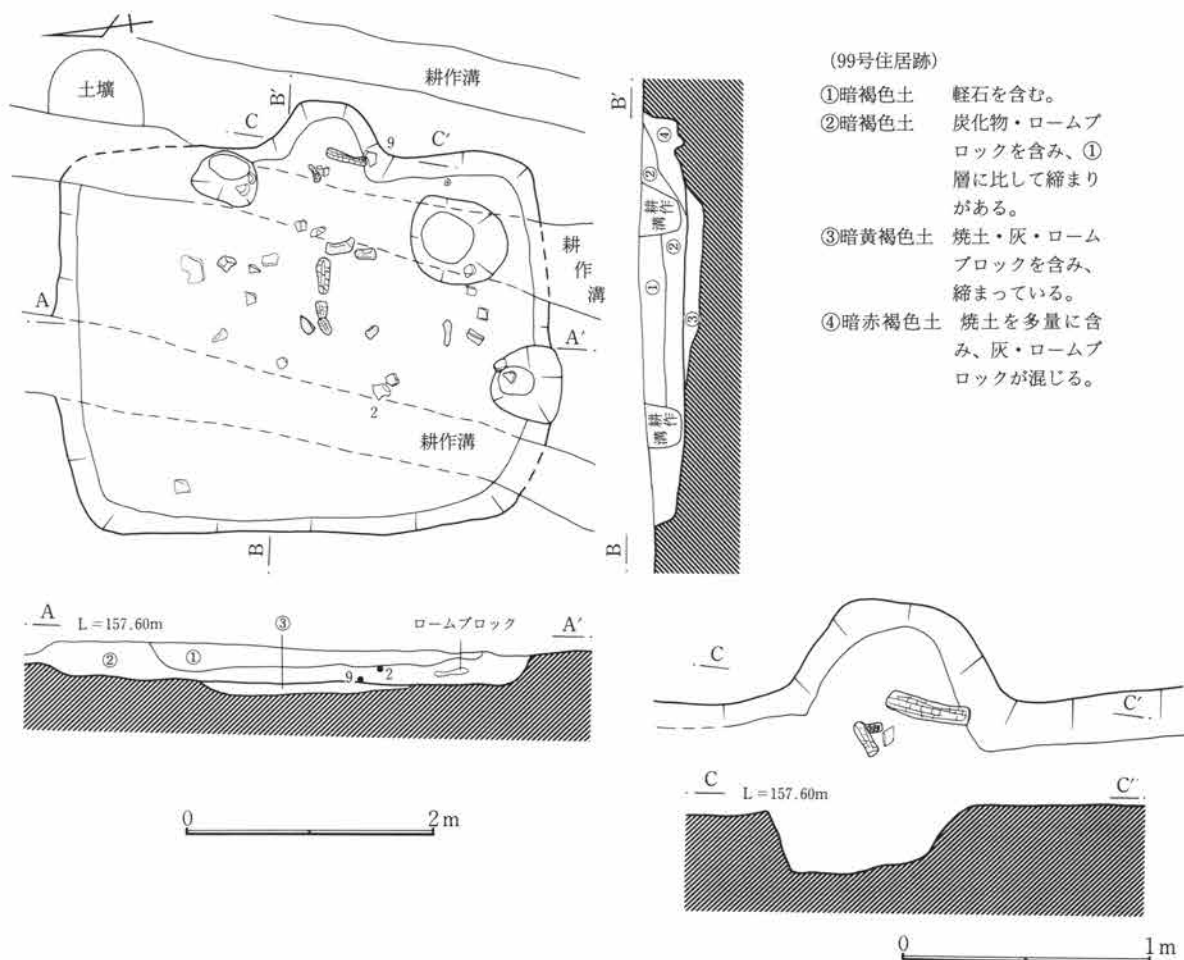
床面は、竈周辺を中心に貼床を施すが、柱穴・壁溝は認められない。南壁に、遺物を検出したピットが確認されているが、その性格は不詳である。掘り方には、竈前に前後関係のあるピット二基が認められた他、竈周辺に幾つか掘り込みが認められ、平坦ではない。

竈は東壁中央にあり、幅90cm・奥行50cm・深さ25cmを測る。覆土に炭化材の残存が見られたが、石組等の残存は全く無く、奥行に比して幅が広すぎるなど、残存状況は不良である。

貯蔵穴は、竈右脇にある径75cm・深さ29cmを測るピットが相当すると思われるが、上部を耕作溝によって削られ、本来の形状を維持しているか疑問がある。

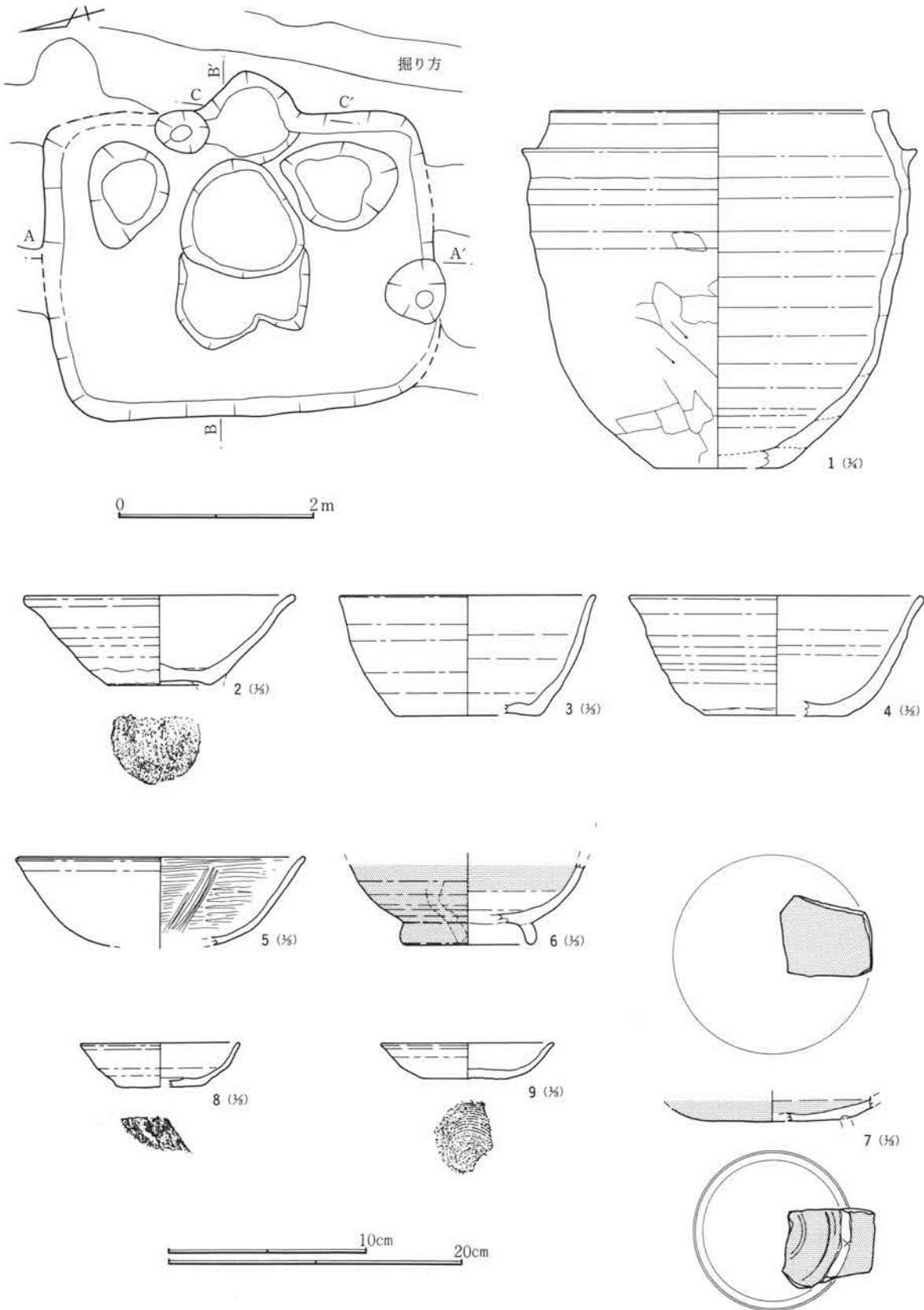
遺物は、竈前の床面上などに主に分布しており、煮沸具に羽釜を含む。金属製品には、破損品を再生・利用した刀子や軸状の棒がある。特に緑釉陶器段皿・灰釉陶器碗の出土が注意されるが、それ以外の遺物に見るべきものがなく、大半が小破片でもあり、流れ込みであるかもしれない。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(鬼形)。



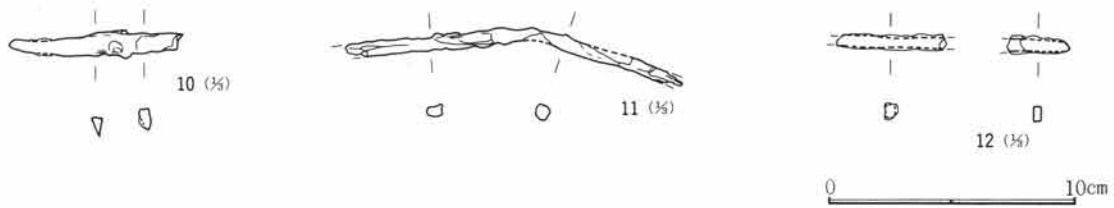
第31図 99号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第32図 99号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第33図 99号住居跡出土遺物実測図(2)

第13表 99号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
32-1 39	須恵器 羽釜	覆土 1/2残存	口(23.2) 底(9.6) 高(24.0)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
32-2	須恵器 高台付坏	床面+10 1/2残存	口(14.0) 底(5.4) 高 4.5	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色、内面黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
32-3	須恵器 埴	覆土 破片	口(13.2) 底(7.6) 高(6.0)	①粗、石英粒・雲母 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰褐色	ロクロ成形。	
32-4	須恵器 埴	覆土 破片	口(15.0) 底(7.2) 高(6.0)	①粗、石英細粒 ②還元焰、やや軟質 ③黒灰色	ロクロ成形。	
32-5	須恵器 埴	覆土 破片	口(14.8) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③暗褐色	ロクロ成形。	
32-6 39	灰釉陶器 埴	覆土 破片	口 — 底(7.0) 高 —	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。高台貼付。	虎渓山1号窯式
32-7 39	緑釉陶器 高台付皿	覆土 高台部欠	口 — 底 — 高 —	①普、殆ど含まない②還元 焰、硬質③素地・灰白色、 釉・淡緑色	ロクロ成形。高台貼付。	
32-8	須恵器 小皿	覆土 小破片	口(8.2) 底(4.6) 高 2.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	ロクロ成形。	
32-9 39	須恵器 小皿	竈内+2 ほぼ完形	口 9.0 底 4.6 高 1.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り、未調整。	
33-10 59	鉄製品 刀子	覆土	長(7.1) 幅 0.8	厚(0.5) 重(6.1)	破損品を再利用するか。	
33-11 59	鉄製品	覆土	長(14.0) 幅 0.5	厚 0.6 重(12.2)	断面四角。	
33-12 59	鉄製品	覆土	長(9.4) 幅 0.4	厚 0.3 重(4.1)	断面四角。	

109号住居跡（第34・35図、第14表、図版7・40）

本住居跡は、第4次調査区北端の平坦面で、36・37-31グリッドに単独で位置する。北側に104号住居跡(古墳)が隣接している他、周辺には住居跡が集中して所在するが、平安時代に属するものとしては、やや孤立している。

平面形は、東西2m85cm・南北3mを測る正方形を呈し、主軸方向はN-98°-Eを示すと思われる。但し、南隅は竈が近接して曲がる部分が殆ど無く、竈北側の壁とは揃わない。西壁は流失して、辛うじて掘り方で確認された。

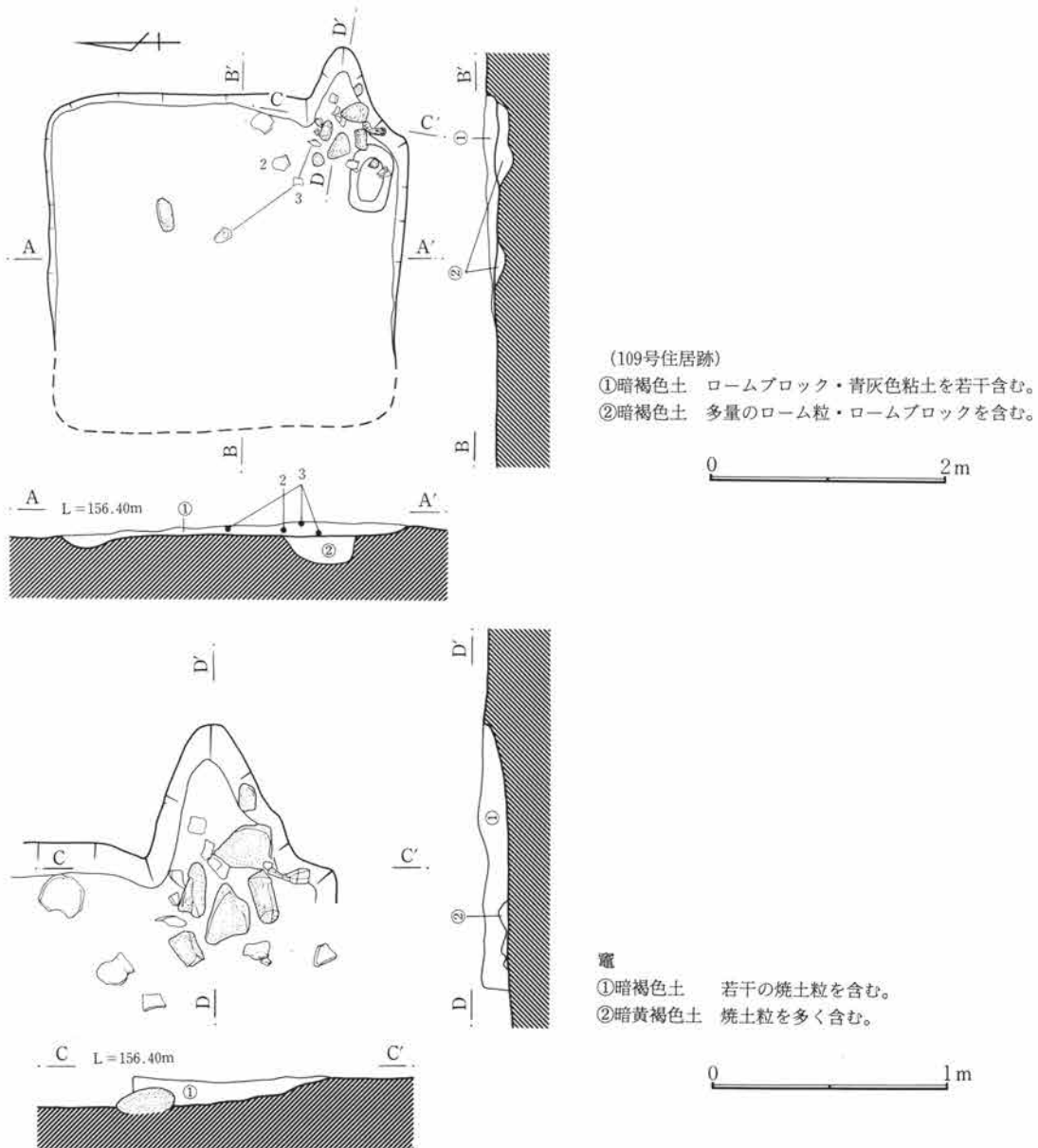
床面は、竈周辺を中心に僅かに貼床を施し、柱穴・壁溝を伴わない。掘り方は、東壁を形成する掘り込みの他、竈周辺にピット状のものを多く検出し、やや平坦でない。

竈は東壁隅近くにあり、幅50cm・奥行80cm・深さ12cmを測る。竈内外に、やや大振りな焼けた石材・炭化物が多く散乱し、石組竈を想定させるが、破損が進んでいて本来の形状は復元出来ない。

貯蔵穴は竈右脇にあり、長径50cm・短径30cm・深さ16cmを測る隅丸方形を呈する。

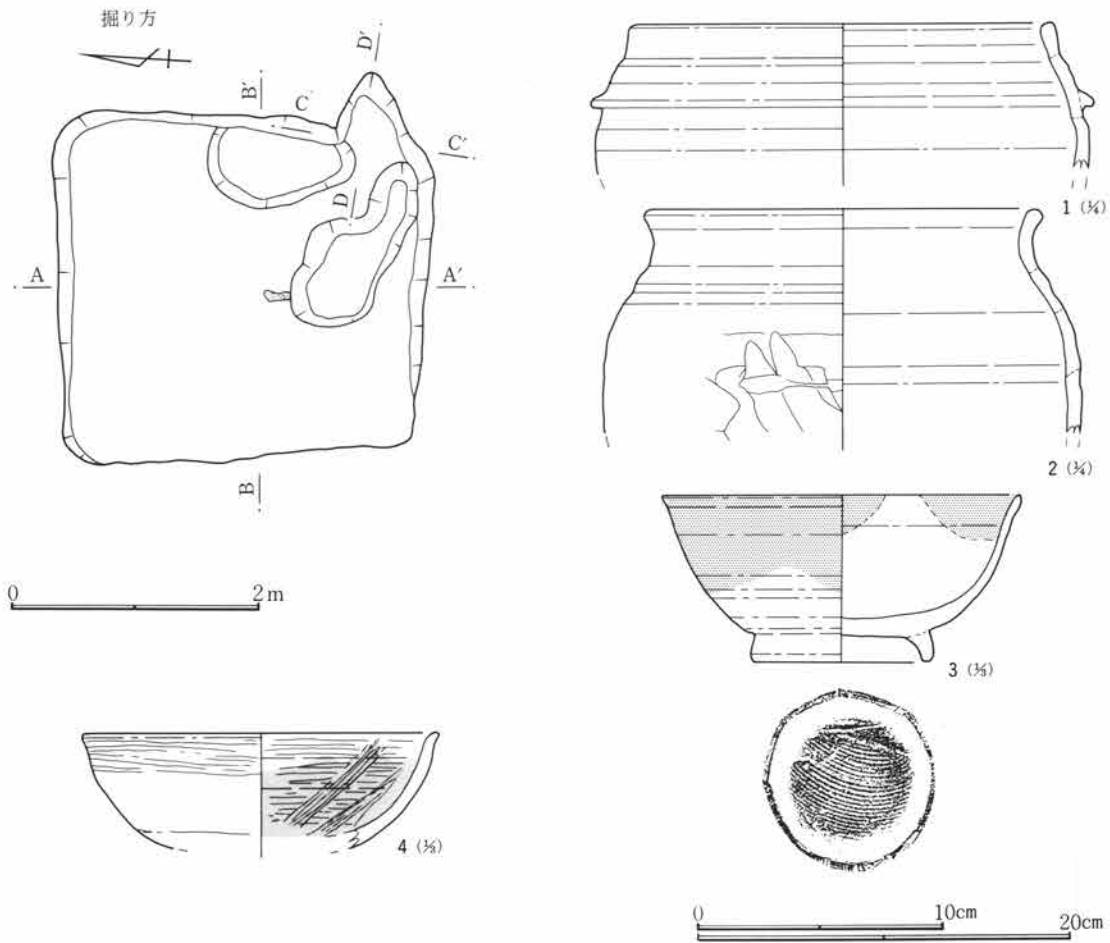
遺物量は少なく種類も乏しいが、竈周辺にやや集中して分布している。今回報告する中では遺存状態の最も良い灰釉陶器碗が検出されている。煮沸具には羽釜・土釜がある。以上の他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩2個、点紋絹雲母石墨片岩が1個（計1.2kg）検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（中沢）。



第34図 109号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第35図 109号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第14表 109号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
35-1	須恵器 羽釜	覆土 破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗橙色	輪積成形でロクロ使用。	
35-2	須恵器 甕	床面+5 破片	口(21.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③暗黄橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半に縦方向の篋削り。	
35-3 40	灰釉陶器 碗	床面+4 1/2残存	口(14.6) 底 7.0 高 6.6	①細 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部静止糸切り。高台貼付。	虎溪山1号窯式
35-4	須恵器 碗	覆土 小破片	口(14.4) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③暗灰褐色	ロクロ成形。	

113号住居跡（第36・37図、第15表、図版7・40）

本住居跡は、第4次調査区北端近くの平坦面にあり、31-29グリッドに位置する。

平面形は、東西3m80cm・南北4m35cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-82°-Eを示すと思われる。

108号住居跡（古墳）・210号住居跡（古墳）の東壁の一部を切って構築され、主として竈を含む南東隅が検出されている。北壁と西壁については、傾斜の影響で、地山の一部を含む表土の流失によって、掘り方段階でのみ確認された。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

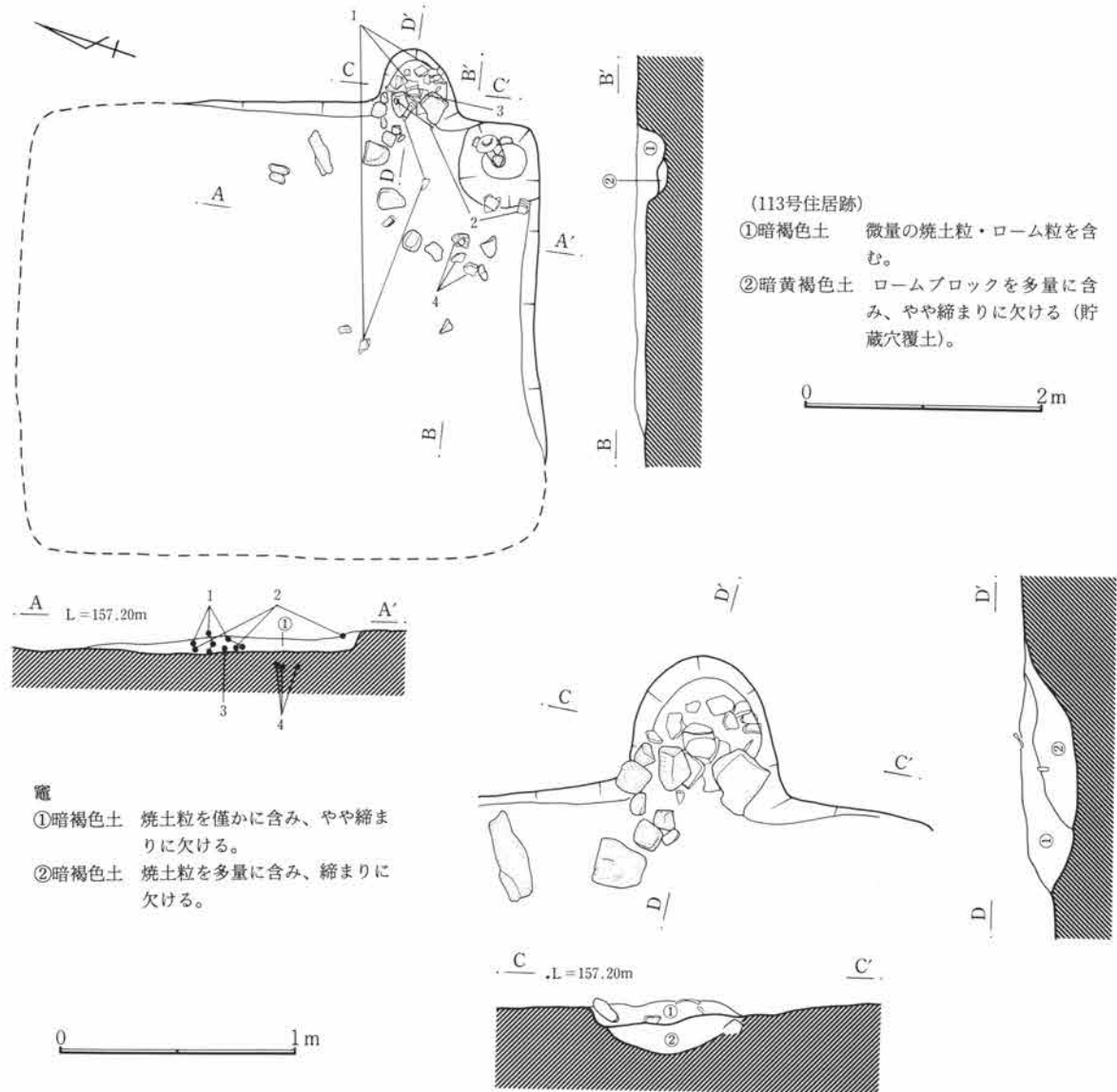
床面は、竈周辺に薄く貼床を施すが、柱穴・壁溝は確認されていない。掘り方には、焼土・灰を混入する竈前のピットの他、時期差をもつピット二基が重複して検出されている。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行60cm・深さ20cmを測る。両袖石が残存するが、天井に用いられたと思われるやや大振りな石材が竈内外に散乱し、必ずしも良好な残存状況とは言えない。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径60cm・深さ22cmを測る円形を呈する。内部から、竈用材と見られる石に混じって、ほぼ完形の坏が出土しており、あるいは支脚等に転用された物が廃棄されたものであるかもしれない。

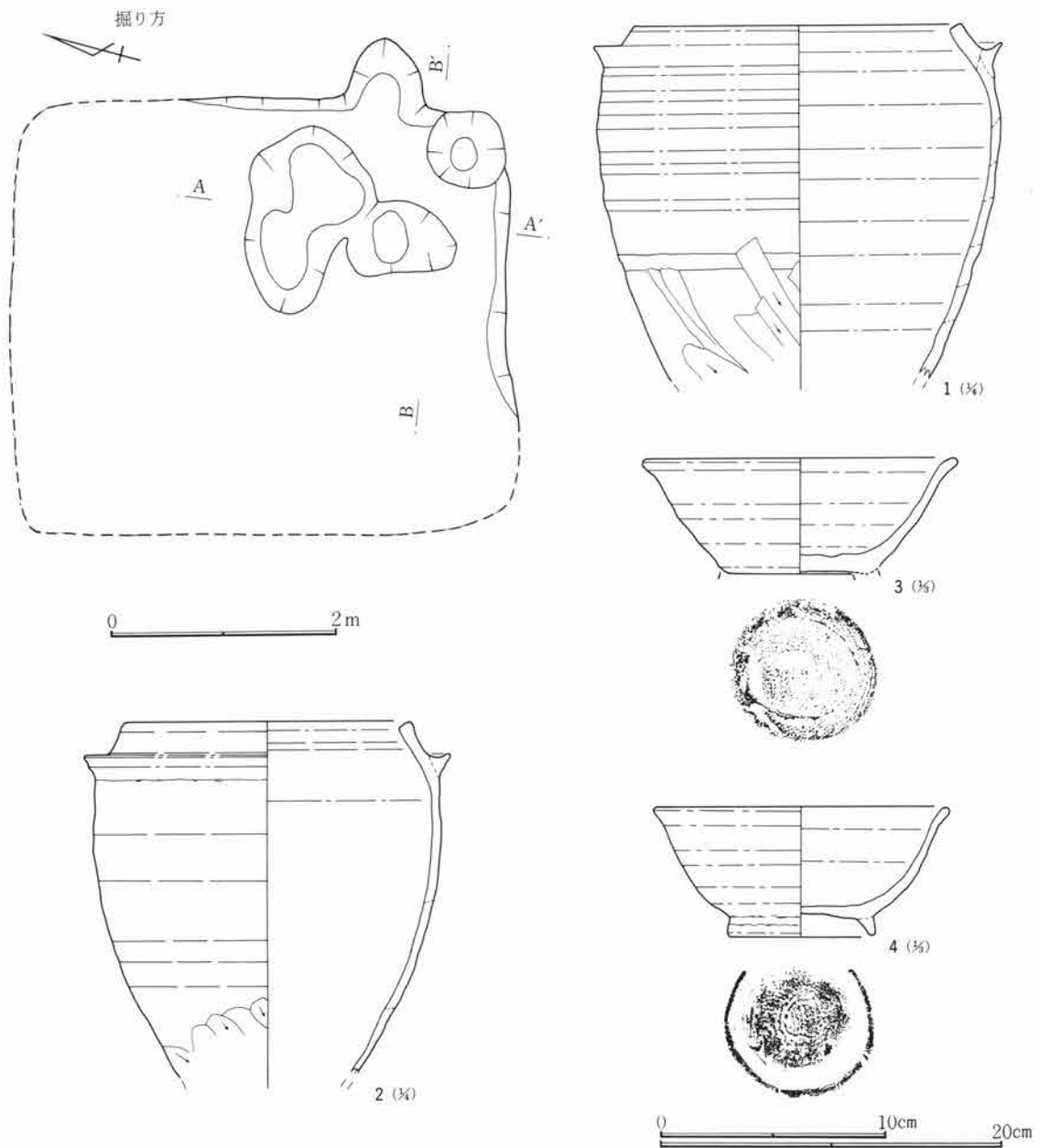
北西隅を中心に、覆土の半分程度が流失し、壁の大半が失われているため、出土遺物は極めて少なく見るべきものが無いが、また竈内部には、補強材に用いられたと思われる羽釜が残る他、土器を中心に床面・掘り方等にも若干検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（内木）。



第36図 113号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第37図 113号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第15表 113号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
37-1 40	須恵器 羽釜	竈内+5 破片	口(19.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。外面下半斜方向の篋削り。	
37-2	須恵器 羽釜	床面+10 1/2残存	口(17.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半斜方向の篋削り。	
37-3 40	須恵器 高台付埴	竈内直上 ほぼ完形 高台部欠	口 14.0 底— 高—	①粗、石英・黒色鋳物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後底部糸切り。高台貼付。	高台剥離
37-4 40	須恵器 高台付埴	床面-10 1/2残存	口(13.0) 底 6.4 高 5.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後底部糸切り。高台貼付。	

115号住居跡 (第38・39図、第16表、図版8・40・55)

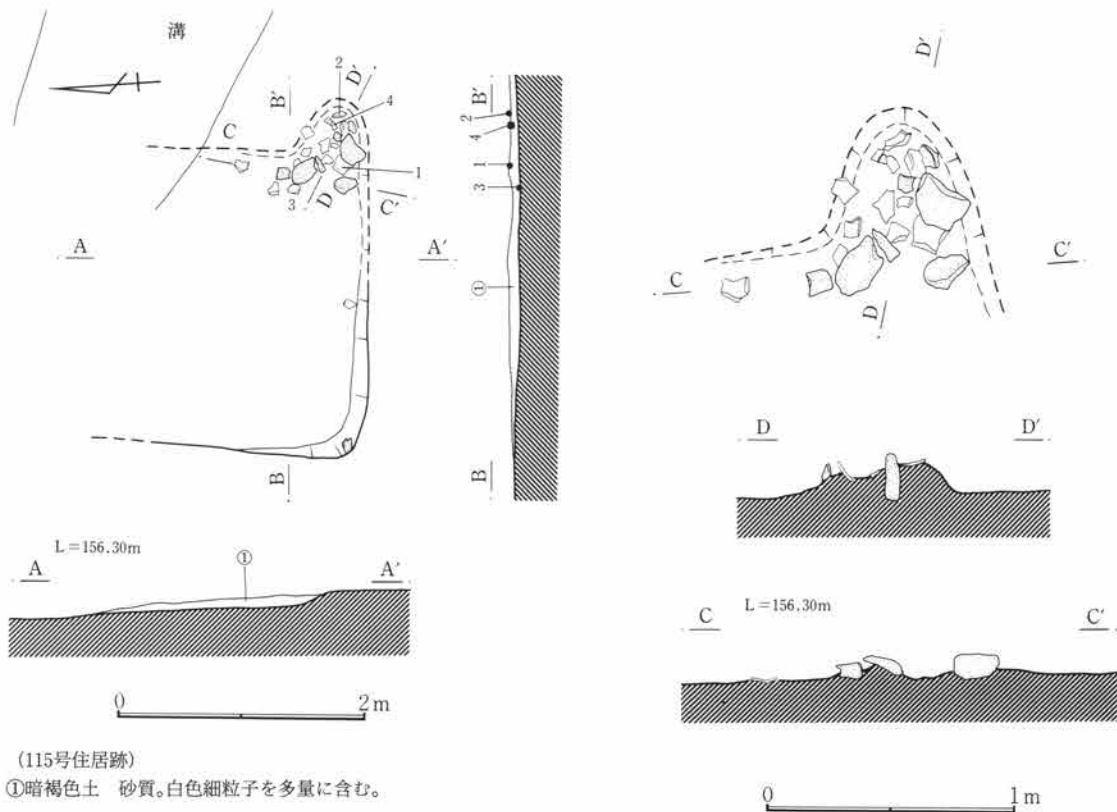
本住居跡は、第4次調査区北端近くの平坦面にあり、35—27グリッドに位置する。重複する住居跡はなく、同時期の住居跡に限れば住居跡の分布は散漫な地区になる。南東方向から北西方向に蛇行しながら抜ける3号溝(平安カ)によって、北東隅付近を中心に大きく破壊されている。

そのような事情によって、遺存状態は極めて不良で、南北4m59cm以上を測るものの、東西の長さは不詳である。方形になると思われるが、平面形は不明とせざるを得ない。確認段階では、焼けた石材と焼土の集中する地点といった趣きであった。床面は、竈周辺に薄く貼床を施していると思われるが、遺存状況が不良で断定出来ない。掘り方には、竈前のピットも含め、前後関係のあるピット三基が確認されたが、どれが貯蔵穴になるかは判然としない。

竈は、焼土・遺物が残る以外は痕跡に近いが、東壁南隅にあって、幅60cm・奥行70cmを測る。内部に焼けた石材を多く含み、本来は石組の構造であったと思われるが、現状から原型を推定する事は困難である。

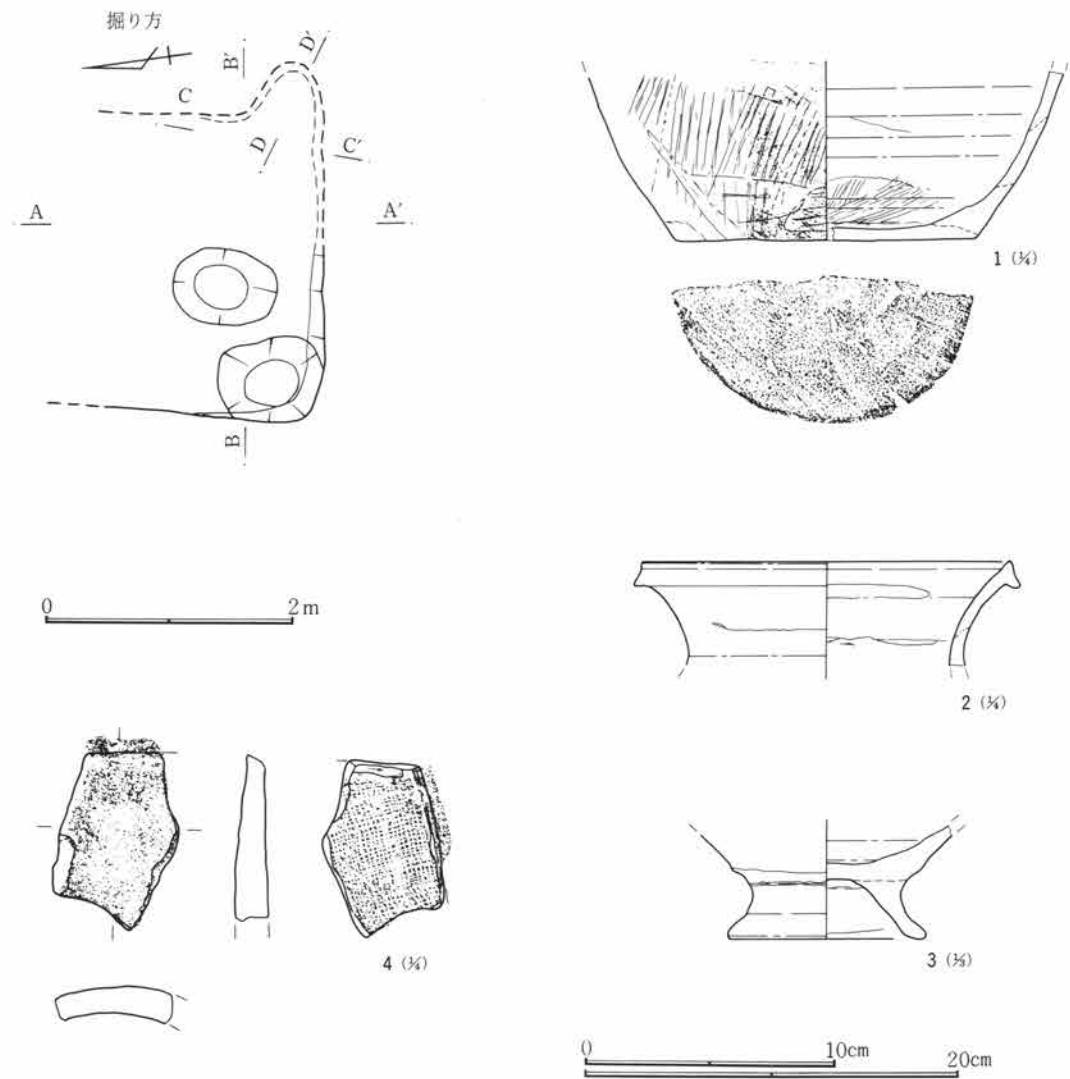
遺物は、竈内部を中心に検出されているが量は少なく、図化出来る物も殆ど無かった。そうした中では、外面に平行叩きを施す土釜がやや注意される程度である。他に、薦編石状の点紋緑泥片岩が1個(0.71kg)検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(内木)。



第38図 115号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第39図 115号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第16表 115号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
39-1 40	須恵器 土釜	竈内+6 1/2残存	口— 底(16.2) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面平行叩き。内面底部撫で。	
39-2	須恵器 甕	竈内+6 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	熱を受ける
39-3	須恵器 高台付埴	竈内直上 破片	口— 底(7.9) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	
39-4 55	丸瓦	竈内+5 破片	長— 幅— 厚(1.5)	①粗 ②還元焰、硬質 ③暗褐色	一枚造り。側端面取2。	

118号住居跡 (第40・41図、第17表、図版8・40)

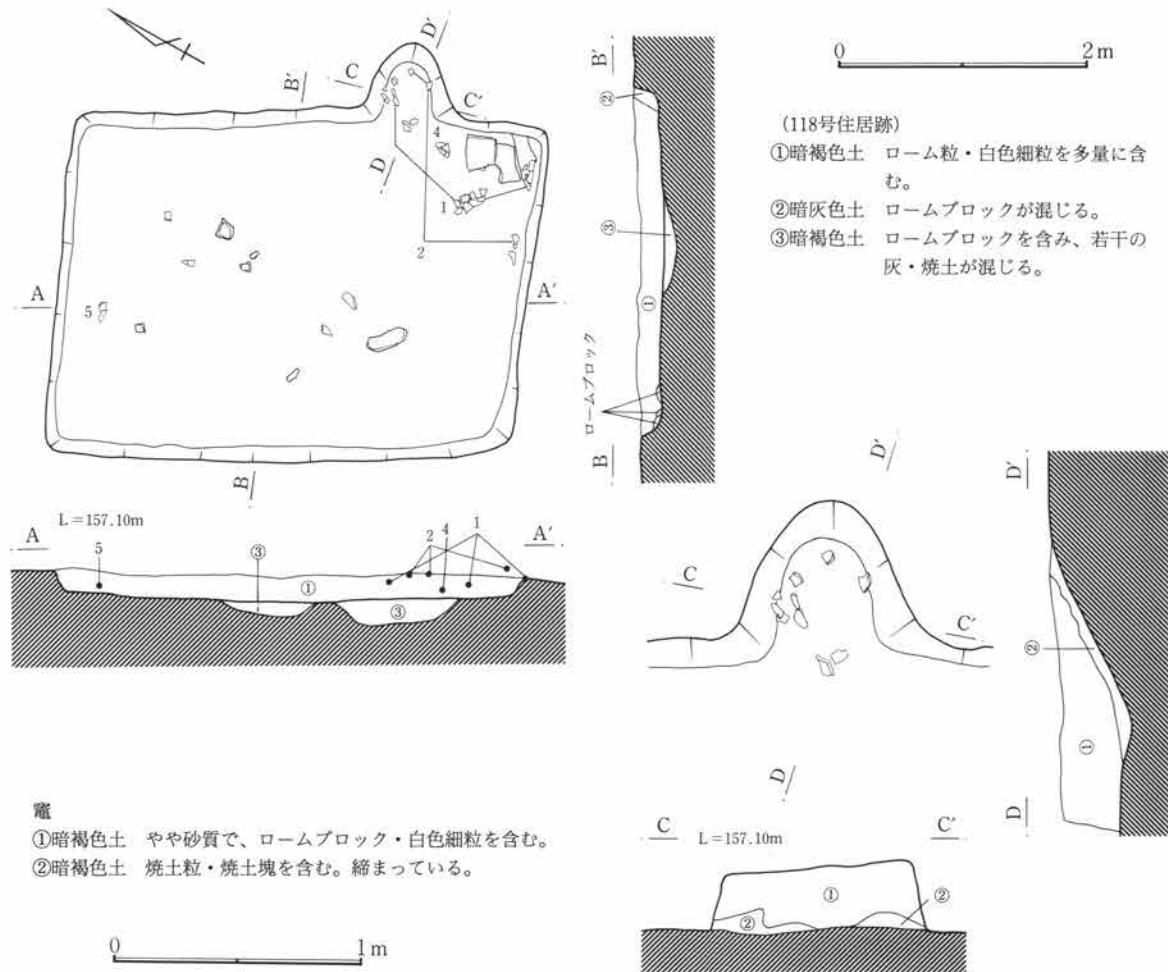
本住居跡は、第4次調査区北寄りの平坦面にあり、31-27グリッドに単独で位置する。周囲には、北側を中心に119号住居跡(古墳)・108号住居跡(古墳)などが重複・密集している。

平面形は、東西2 m80cm・南北3 m30cmを測る平行四辺形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。床面は、竈周辺を中心に貼床を施し、掘り方には時期差のある竈前のピット二基を含め、四基程度のピットが認められたが、柱穴・壁溝は検出されず、貯蔵穴も明瞭な窪みとしては確認されていない。

竈は、東壁中央やや右寄りにあり、幅60cm・奥行60cm・深さ22cmを測る。竈右脇に、用材と考えられる砂岩板石が3個、横に並べられた状態で置かれていたが、その下部からは、予想された貯蔵穴も含め、何も検出されなかった。袖石等は、明瞭には遺存していなかったが、上記の板石の存在が認められるので、天井部に砂岩板石を利用した石組構造であった可能性がある。

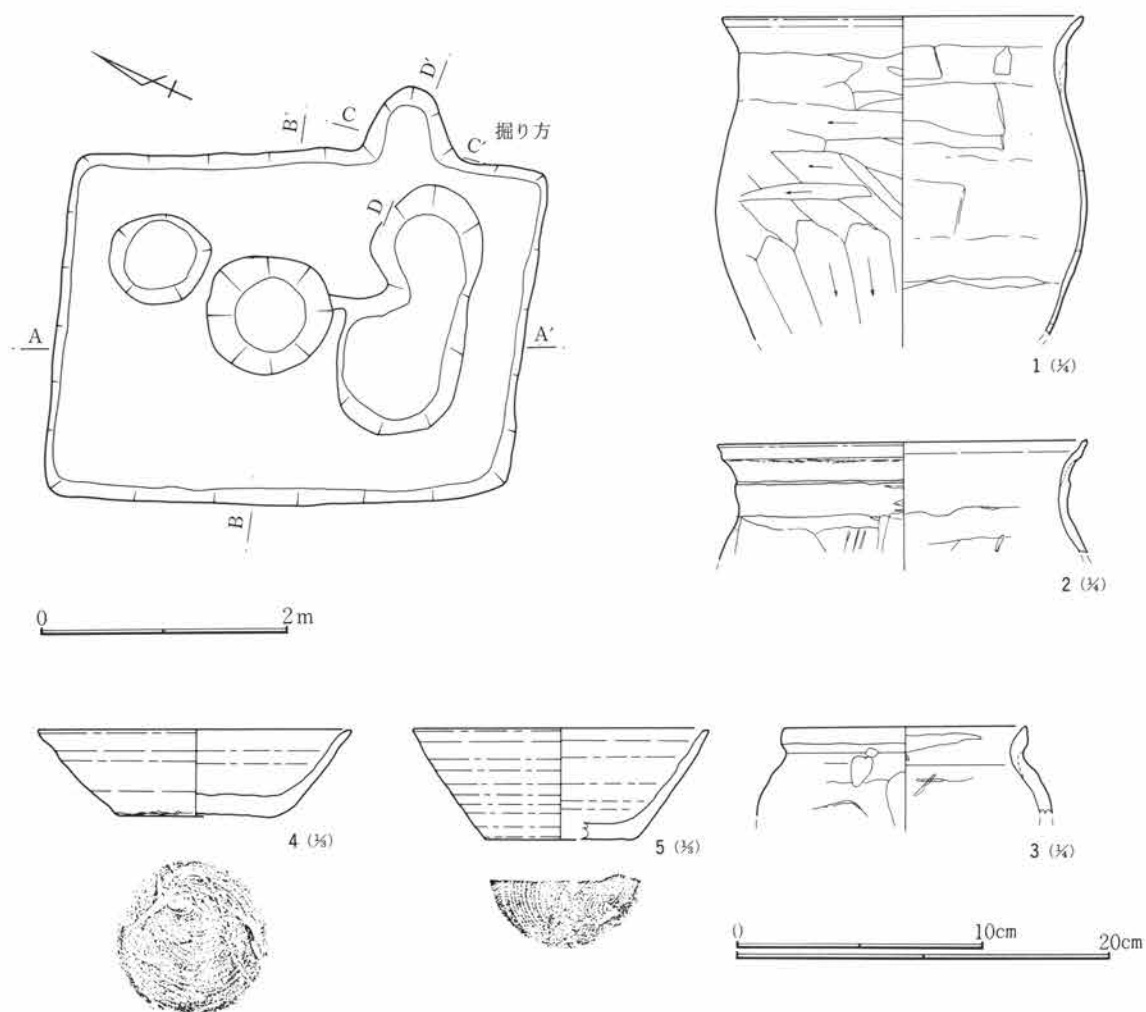
遺物は、竈内部を中心に検出されているが、量的に少なく種類も乏しい。図化出来た物も、極めて限られている。竈内部で検出された煮沸具は、コ字状口縁土師器甕のみで羽釜が含まれていない。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩3個、点紋絹雲母石墨片岩が1個(計0.55kg)検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(内木)。



第40図 118号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第41図 118号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第17表 118号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
41-1 40	土師器 甕	床面+11 破片	口(19.5) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上部横方向・下半斜～縦方向篋削り。内面篋撫で。	
41-2	土師器 甕	竈内+15 破片	口(20.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面横方向篋削り。内面篋撫で。	
41-3	須恵器 小型甕	竈覆土 小破片	口(13.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黒褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面横方向篋削り。内面篋撫で。	
41-4 40	須恵器 坏	床面+5 %残存	口 12.6 底 6.2 高 3.4	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
41-5	須恵器 塊	床面+4 %残存	口(12.0) 底 (6.0) 高 (4.4)	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色、断面黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	熱を受ける

124号住居跡（第42図、第18表、図版8・40）

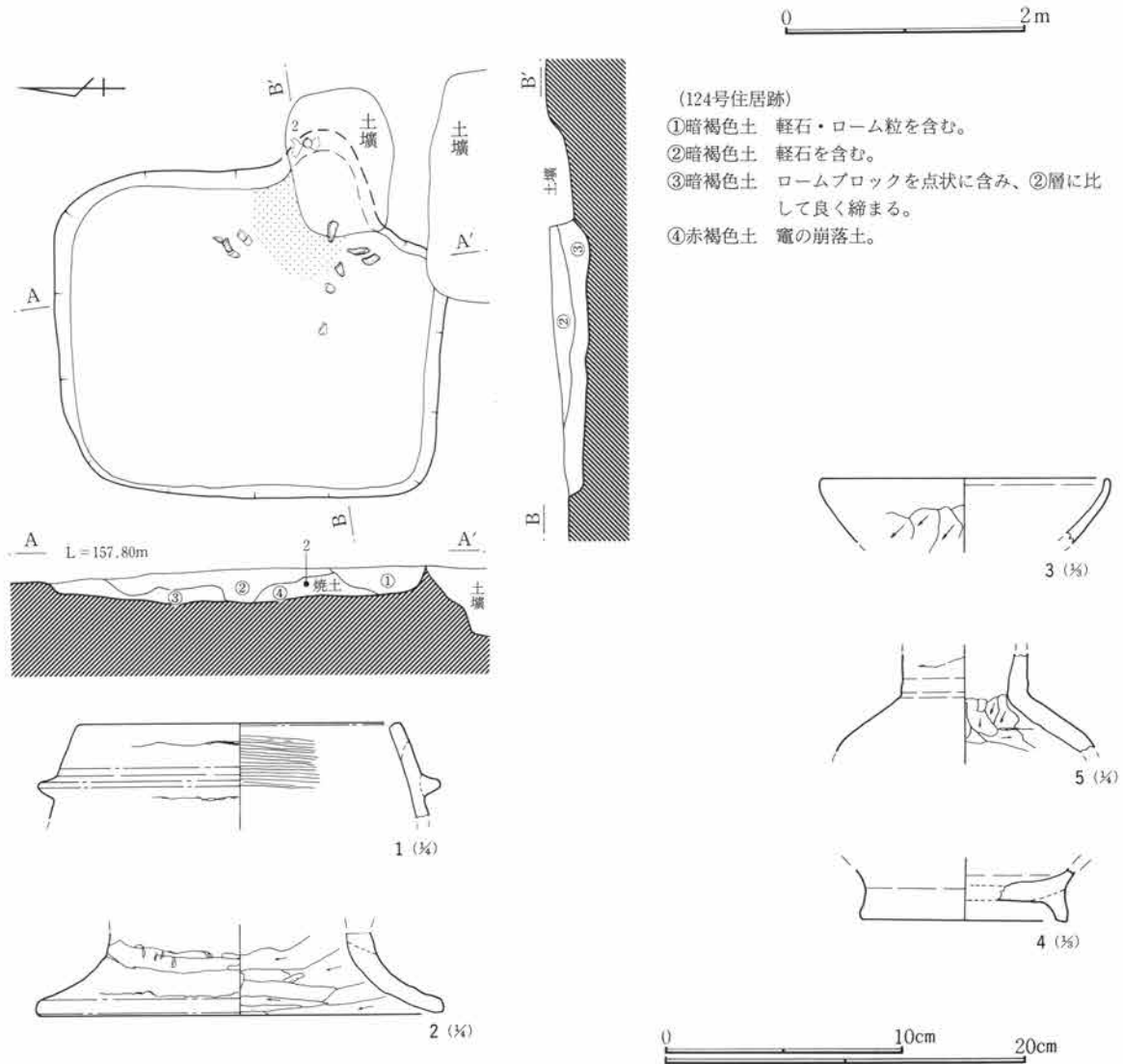
本住居跡は、第4次調査区中央の西向き緩斜面にあり、23・24-27グリッドに単独で位置する。

平面形は東西2m70cm・南北3m30cmを測る歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示すと思われる。竈本体を中心に土壌に切られる為、断定は出来ないが、東壁が竈の南側と北側とで揃わず、あるいは棚状の構造物があったかもしれない。基本的に掘り方は無く、ローム（地山）を叩き締めて床面としていたと思われる。貯蔵穴・柱穴・壁溝等付属するピット類も検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm・奥行50cm程度の規模になると思われるが、土壌によって大きく破壊されている為、詳細は不詳である。

遺物は少なく種類も乏しい。竈周辺から、甑を含む羽釜等が検出された他は、流紋岩製の石製紡錘車（完形）の出土が注意される程度である。薦編石状の絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩各2個、緑泥片岩1個（計1.21kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（鬼形）。

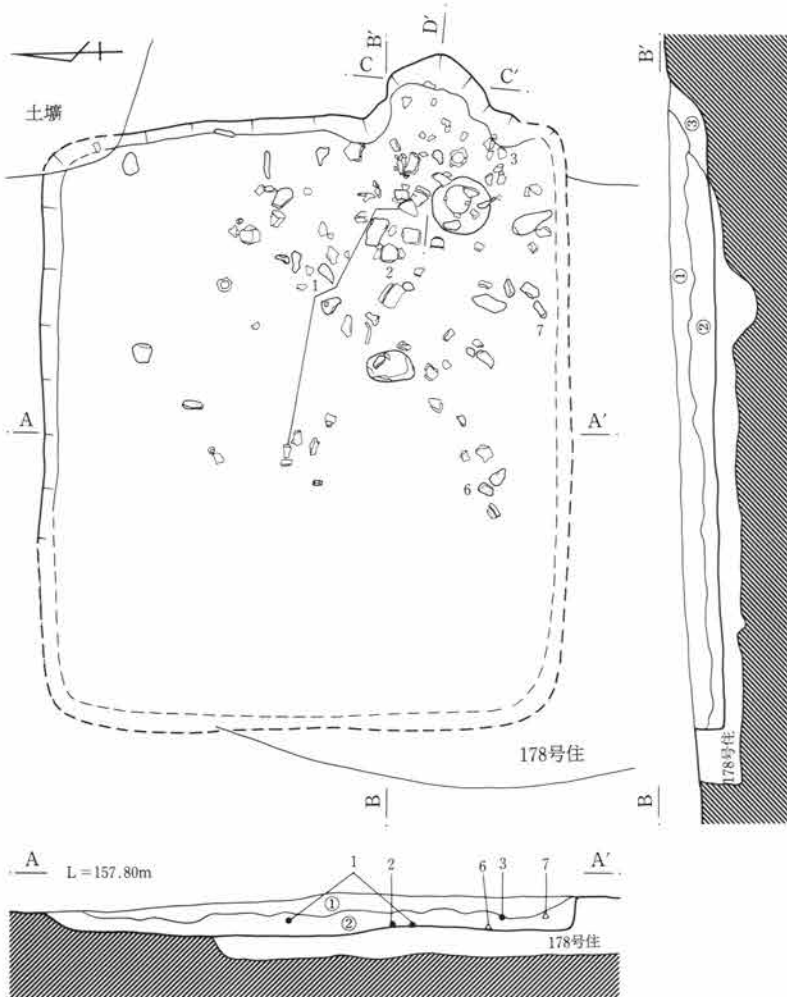


第42図 124号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第18表 124号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
42-1	須恵器 羽釜	覆土 小破片	口(18.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。内面篋撫で。	
42-2 40	須恵器 甌	甌+10 小破片	口— 底(22.2) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。内面篋削り。	
42-3	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
42-4	須恵器 高台付塊	覆土 小破片	口— 底(8.6) 高—	①粗、白色鈹物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③黒色処理、断面黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
42-5	須恵器 壺	覆土 小破片	口— 底— 高—	①粗、褐色鈹物粒 ②還元焰、やや硬質③外面 灰色、内面にふい橙色	ロクロ成形。	

125号住居跡（第43～46図、第19表、図版9・40・57）



本住居跡は、第4次調査区南寄りの西向き緩斜面にあり、22・23—26グリッドに位置する。178号住居跡（奈良）の覆土を掘り込んでおり、北側半分を切って構築される。

平面形は、遺物分布の状況等を考慮すれば、やや不確定な要素があるとせざるを得ないが、東西4m90cm・南北4m25cmを測る長方形を呈するものと思われ、やや規模は大きいものと思われる。主軸方向はN-115°-Eを示す。床面は、竈周辺を中心に厚く貼床を施

(125号住居跡)

- ①暗褐色土 ローム粒をブロック状に含む。白色細粒（～2mm）を多量に含み、焼土粒（～3mm）を少量含む。
- ②暗褐色土 ①層に比し、ロームの含有は少ない。
- ③暗褐色土 ①層に比しやや色調は明るく、ローム粒の含有は多い。

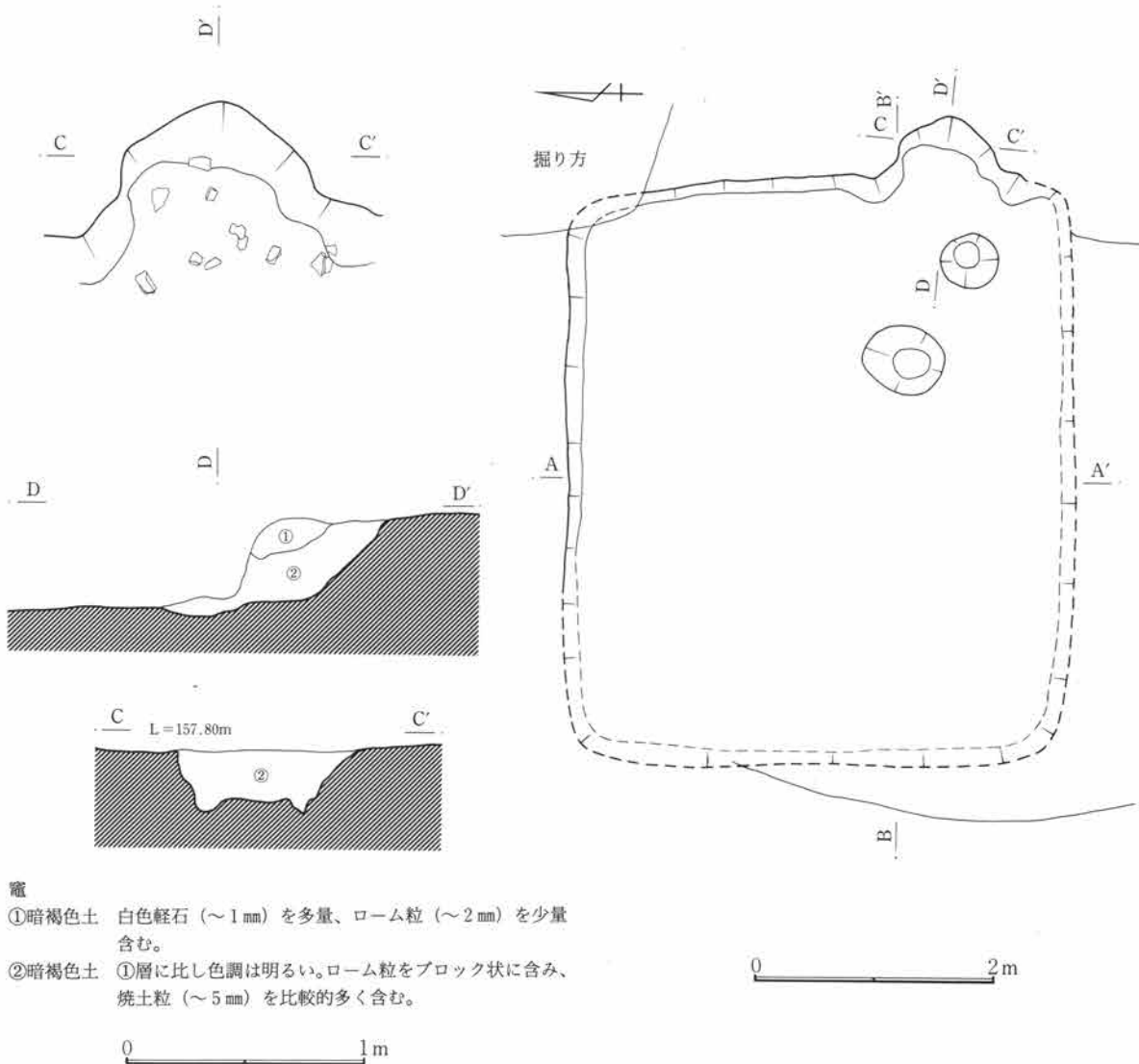
第43図 125号住居跡実測図(1)

す。掘り方は、他住居跡の覆土を掘り込むため明瞭ではないが、ピット二基が確認されている。それ以外の貯蔵穴・柱穴・壁溝等付属すると思われるピット類は確認されていない。

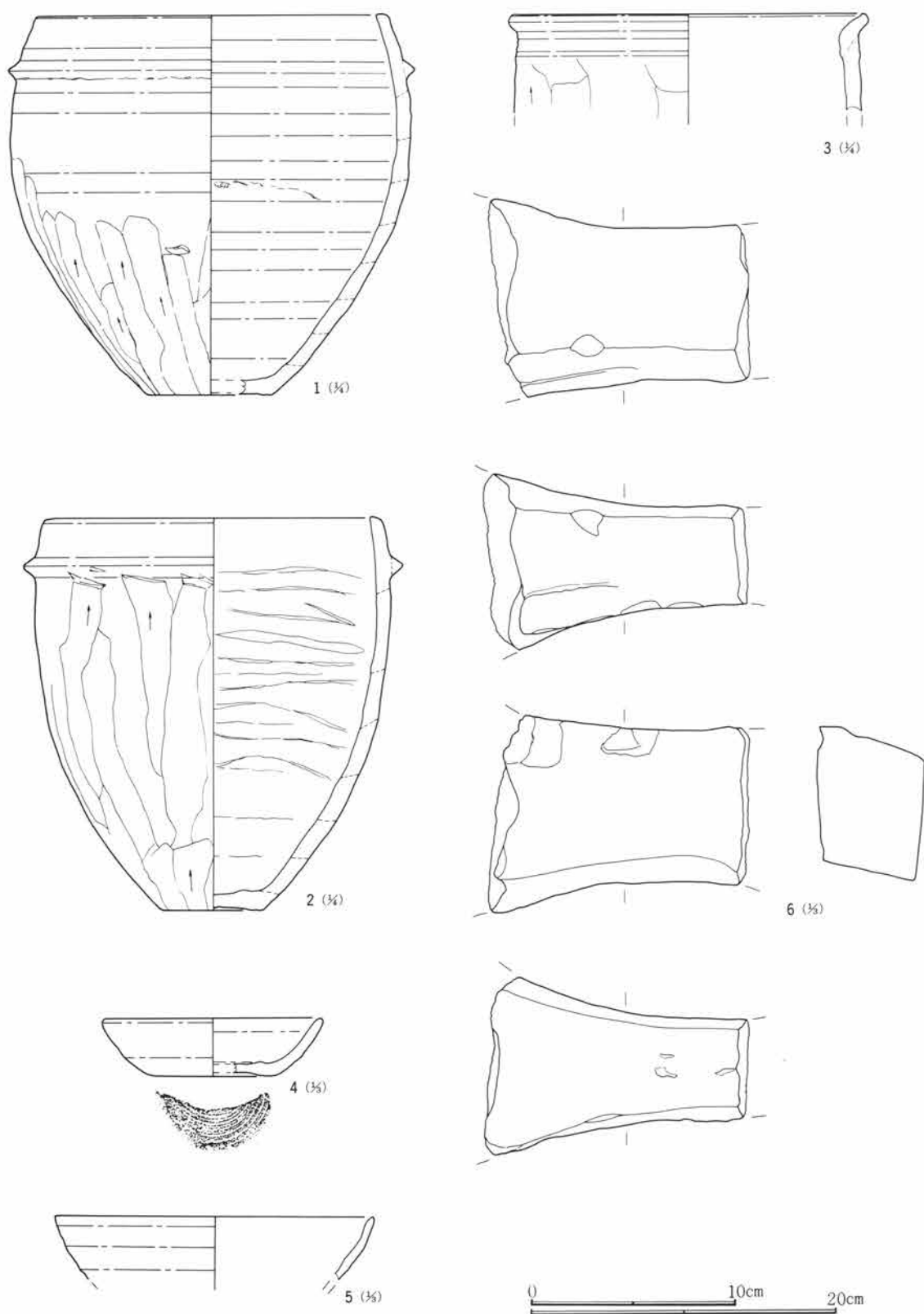
竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅90cm・奥行90cm・深さ30cmを測る。深さは充分であるが、幅が大きすぎるので、原形よりもかなり崩壊していると思われる。床面に散乱する石材や羽釜類が、石組竈の構成・補強材である可能性もあり、それらが竈付近の床面に散乱している状況からは、住居跡の廃棄の時点で竈を完全に破壊していた事が予想される。

遺物は、量的には少なくないが、種類は乏しく、流れ込みと考えられる物もある。図化出来る物は案外少なく、土器類では竈周辺の羽釜・土釜が目立つ程度である。石製品では、砂岩製の荒砥と思われる大型の砥石の断片や、縄文時代の可能性のある敲石状の石がある。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩・緑簾緑泥片岩各1個(計0.25kg)が検出されている。

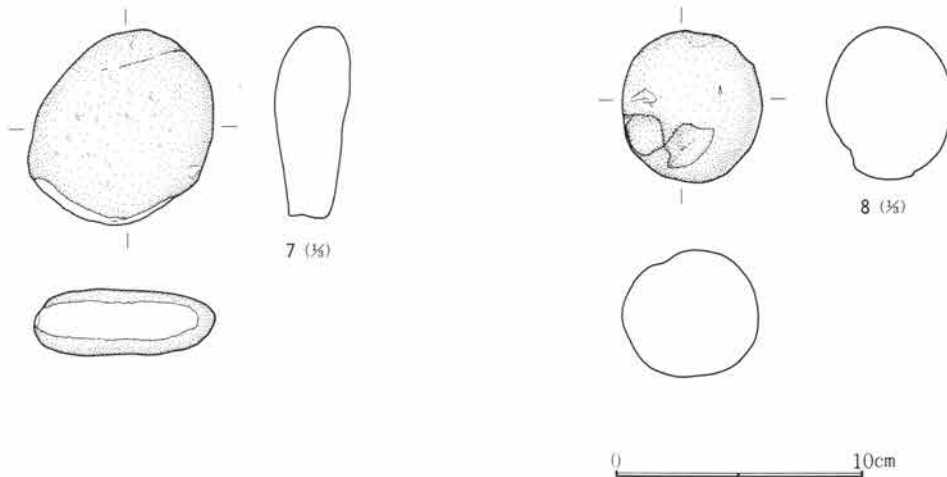
以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。



第44図 125号住居跡実測図(2)



第45図 125号住居跡出土遺物実測図(1)



第46図 125号住居跡出土遺物実測図(2)

第19表 125号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
45-1 40	須恵器 羽釜	床面 1/8残存	口(23.4) 底 8.6 高 24.5	①粗、白色細粒②酸化焰、 やや硬質③にぶい黄橙色、 断面灰黄色	輪積成形でロクロ使用。外面下半縦方向篋削り。	
45-2 40	須恵器 羽釜	床面 1/8残存	口(22.6) 底 6.6 高 25.3	①粗、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄橙色	輪積成形でロクロ使用。外面鏝以下篋削り。	
45-3	須恵器 甕	床面+8 小破片	口(23.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面縦方向篋削り。 口辺横撫で。	
45-4	須恵器 坏	覆土 破片	口(11.0) 底 (6.0) 高 (2.8)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
45-5	灰釉陶器 塊	覆土 小破片	口(15.8) 底 — 高 —	①普、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③断面灰白色	ロクロ成形。	
45-6 57	石製品 砥石	床面 破片	長(12.7) 厚 5.1 幅 (9.6) 重 850		荒砥。四面使用。	砂岩
46-7 57	石製品 敲石	床面+9 完形	長 7.4 厚 2.5 幅 6.9 重 150			石英粗面岩
46-8 57	石製品 擦石	覆土 完形	長 6.0 厚 4.9 幅 5.6 重 120			安山岩

126号住居跡 (第47図、第20表、図版9・41)

本住居跡は、第4次調査区南寄りの緩斜面にあり、21・22-25グリッドに単独で位置する。すぐ北に127号住居跡(古墳)・178号住居跡(奈良)などが隣接している。

平面形は、東西3m45cm・南北2m70cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-130°-Eを示す。東壁南隅はやや住居跡内部に入るので、本来棚状の施設があったかもしれない。

基本的に掘り方は無く、ローム(地山)を叩き締めて床面としているようである。柱穴・壁溝等の関連施設も検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあるが、主軸に対して南に20度程度振れており、ズレが認められる。規模は幅50cm・奥行65cm・深さ20cmを測る。内部に破損した土器破片や石材が残る他、用材と見られる石材が周辺

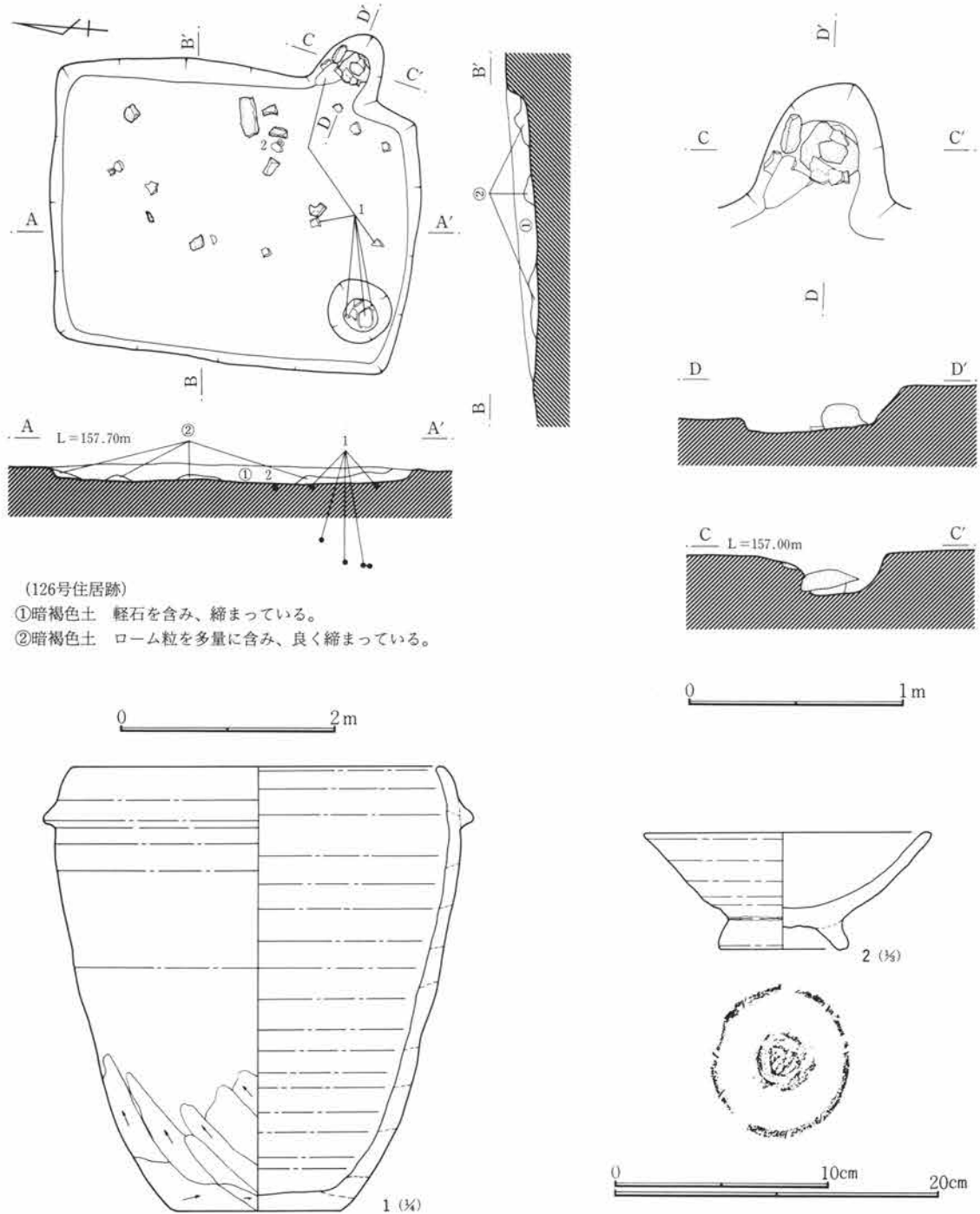
第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

に散乱し、あるいは東壁寄りに検出された板石を天井石に用いた石組構造であったかもしれない。

貯蔵穴は南西隅にあり、径55cm・深さ42cmを測る円形を呈する。

遺物は少なく、図化出来た物も限られているが、高台付や竈内部で検出された羽釜がある。特に羽釜は、竈内部の石材とともに竈の補強材であった可能性がある。他に薦編石状の緑泥片岩・点紋絹雲母石墨片岩各1個（計1.05kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（鬼形）。



第47図 126号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第20表 126号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
47-1 41	須恵器 羽 釜	床面-1 半残存	口(23.0) 底(10.4) 高 26.9	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下部篋削り。	
47-2 41	須恵器 高台付埴	床面-2 半残存	口(13.3) 底 5.8 高 5.3	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

130号住居跡 (第48~51図、第21表、図版10・41・42・55)

本住居跡は、第4次調査区中央の平坦面にあり、26-27グリッドに位置する。194号住居跡(古墳)の東部分を一部切り込んで構築されている。

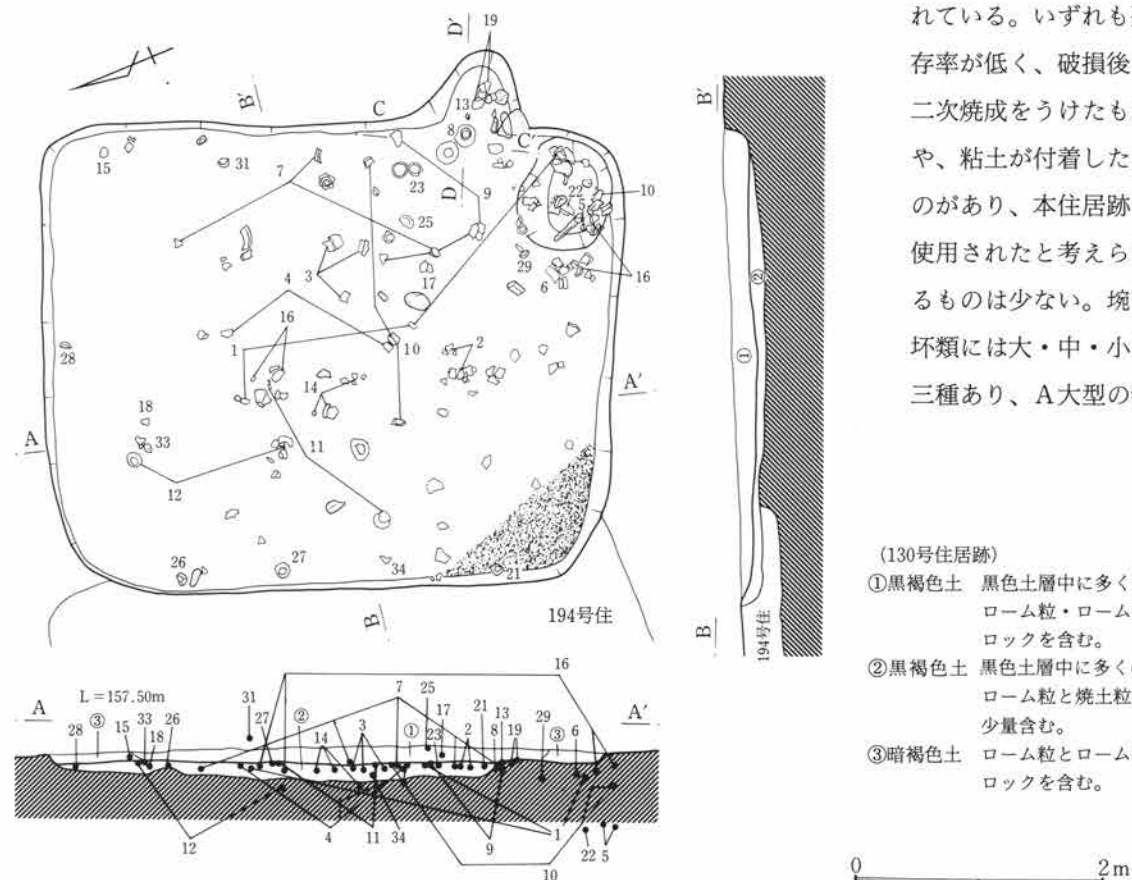
平面形は東西3m70cm・南北4m70cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-115°-Eを示す。床全面に貼床を施すが、掘り方には通常見られる竈前のピットや、柱穴・壁溝等は検出されておらず、小規模なピットが六基ほど見られる程度で、比較的平坦である。

竈は、東壁中央南寄りにあり、幅65cm・奥行65cm・深さ22cmを測る。残存状況は不良だが、右袖部には石が残存しており、燃焼部中央近くには下半部を欠失した壺が支脚に利用されたと思われる状況を示している。

貯蔵穴は竈右脇にあり、長径85cm・短径70cm・深さ54cmの東西に長い楕円形を呈する。

遺物は、土器を中心にかなり多く検出されている。羽釜には大・小二種あり、大型のものの中には甑が含ま

れている。いずれも残存率が低く、破損後に二次焼成をうけたものや、粘土が付着したものがあり、本住居跡で使用されたと考えられるものは少ない。埴・坏類には大・中・小の三種あり、A大型の物

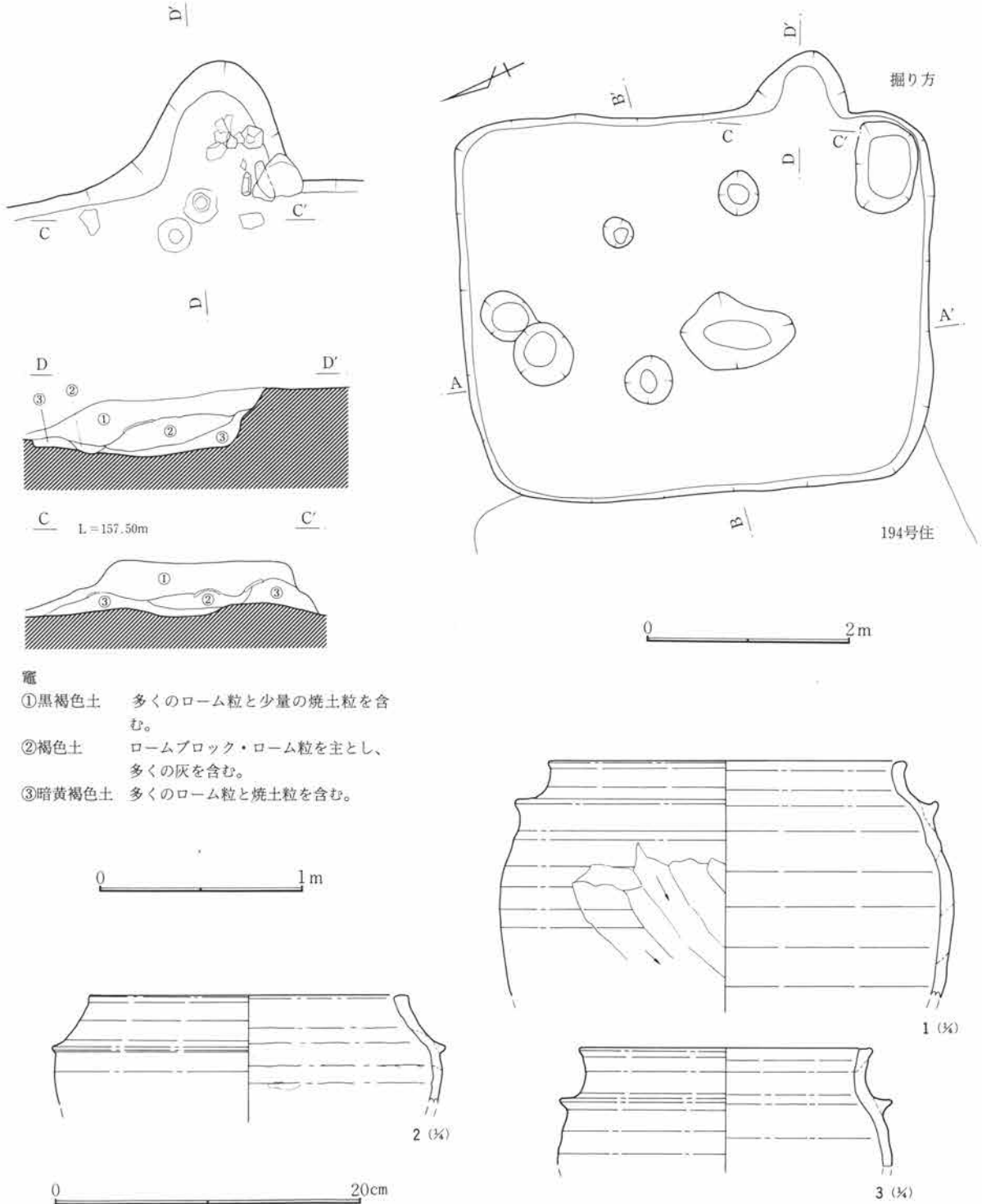


第48図 130号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

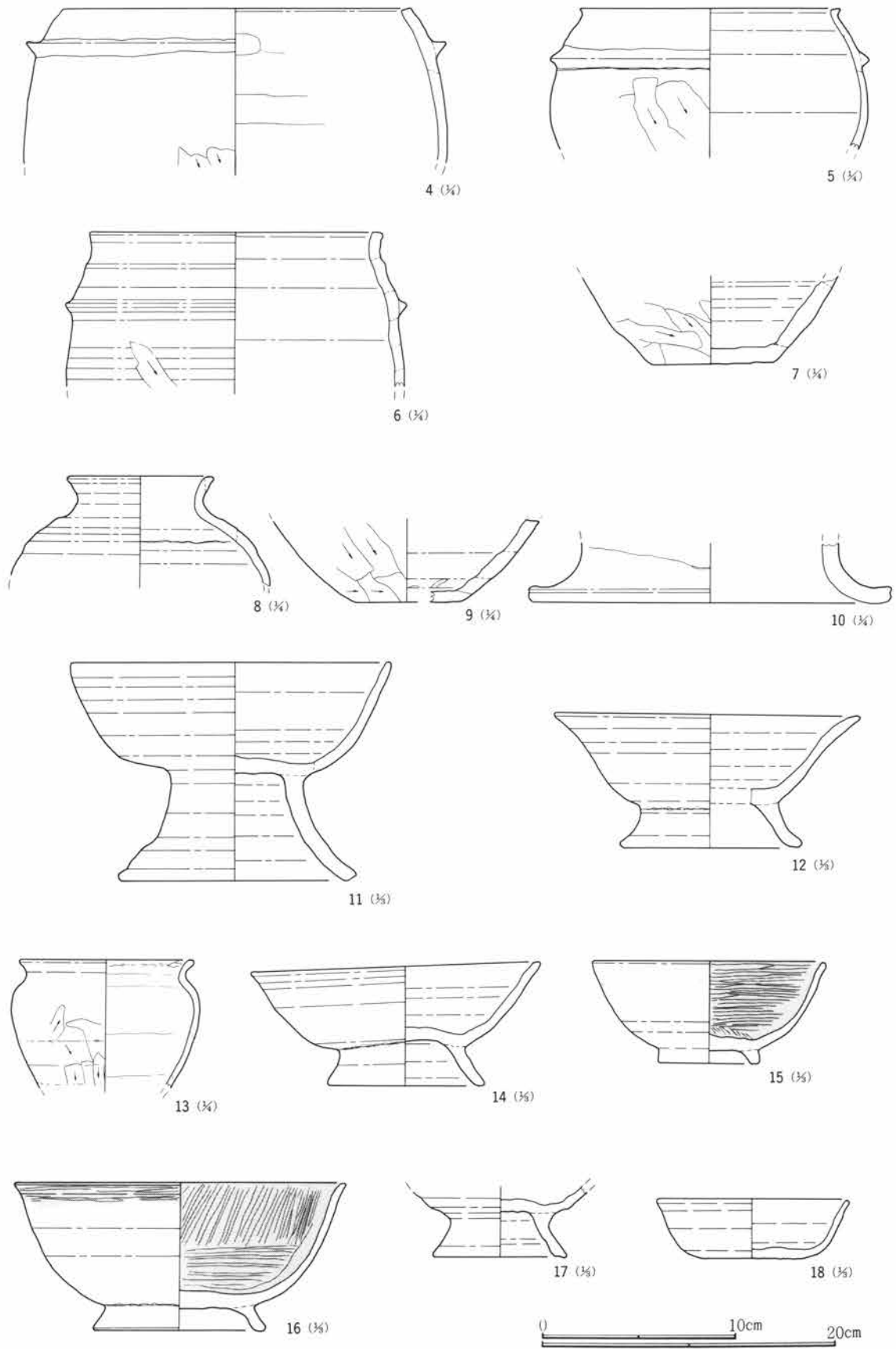
は①足高台と②通常の高台の物に細分出来る。B中型も同様で、大・中とも内面磨き又は黒色処理を施す物もある。C小型の物は一様ではないが、器高の高低で細分出来、片口の物もある。他に薦編石状の石墨緑泥片岩2個、紅簾絹雲母石墨片岩・絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母石墨片岩各1個（計2.18kg）検出されている。それら以外では、朝顔型円筒の肩部の破片が出土している。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（内木）。



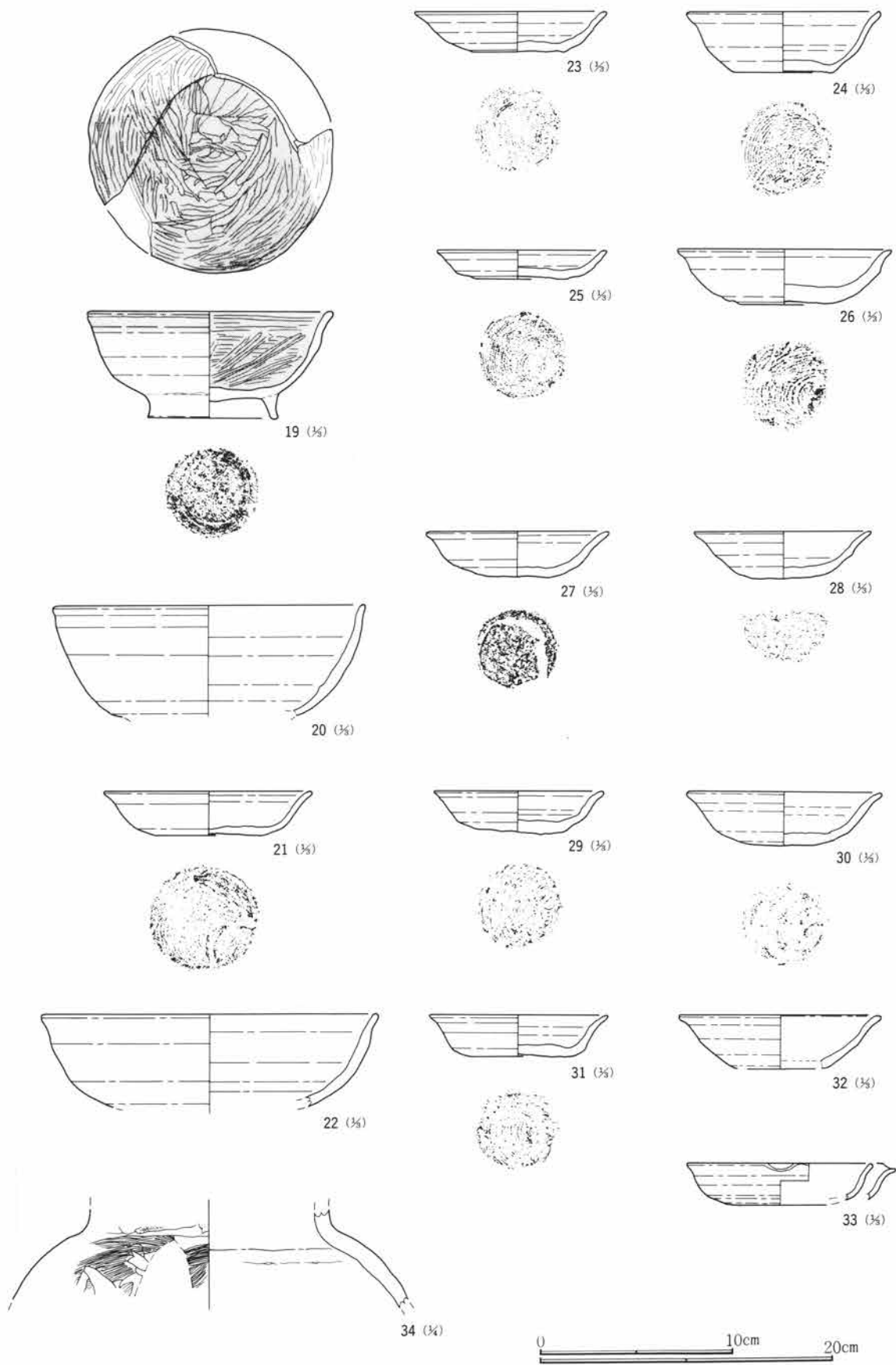
第49図 130号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第50図 130号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第51図 130号住居跡出土遺物実測図(3)

第21表 130号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
49-1 41	須恵器 羽釜	床面-8 破片	口(23.4) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	粘土が付着
49-2 41	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口(21.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
49-3	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口(19.2) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
50-4	須恵器 羽釜	床面-3 破片	口(24.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	
50-5	須恵器 羽釜 (小型)	貯蔵穴内 -45 破片	口(18.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	
50-6 41	須恵器 羽釜	床面-6 破片	口(20.2) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	
50-7	須恵器 羽釜	床面-4 破片	口 - 底(8.2) 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
50-8 41	須恵器 壺	竈内-5 破片	口(10.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
50-9	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口 - 底(7.2) 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	熱を受ける
50-10 41	須恵器 甔	床面-2 破片	口(24.4) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪積成形でロクロ使用。	破損後、熱を受ける
50-11 41	須恵器 高台付埴	床面-2 完形	口 16.5 底 11.7 高 11.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
50-12 41	須恵器 高台付埴	床面-19 %残存	口(15.6) 底 9.0 高 6.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③黄灰色、断面にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	
50-13 41	土師器 小型甕	竈内-2 破片	口(12.0) 底 - 高(8.7)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面一部篋削り。	
50-14 41	須恵器 高台付埴	床面-4 %残存	口 15.0 底 7.9 高 6.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	
50-15 41	須恵器 高台付埴	床面+4 破片	口(12.0) 底 5.2 高 5.2	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面黒色処理
50-16 41	須恵器 高台付埴	床面-5 %残存	口(17.0) 底 8.7 高 7.4	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面黒色処理
50-17	須恵器 高台付埴	床面+5 破片	口 - 底(6.8) 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	
50-18	土師器 小皿	床面-5 %残存	口(10.0) 底(5.2) 高(3.0)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-19 41	土師器 高台付埴	竈内直上 %残存	口 12.8 底 6.7 高 5.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	内面黒色処理
51-20 42	須恵器 埴	竈内覆土 %残存	口 16.0 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄橙色	ロクロ成形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
51-21 41	土 師 器 小 皿	床面-2 破片	口(10.7) 底 5.6 高 2.2	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-22	須 恵 器 壺	貯蔵穴内 -50 瓦残存	口(17.2) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	ロクロ成形。	
51-23 41	土 師 器 小 皿	床面-2 ほぼ完形	口 9.8 底 4.8 高 2.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-24	土 師 器 小 皿	覆土 瓦残存	口(10.0) 底 5.4 高 3.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-25 42	土 師 器 小 皿	床面+10 破片	口 8.7 底 4.8 高 1.4	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-26 41	土 師 器 小 皿	床面-4 破片	口(11.0) 底 4.7 高 2.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-27 41	土 師 器 小 皿	床面-2 瓦残存	口 9.4 底 4.0 高 2.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-28 42	土 師 器 小 皿	床面-2 瓦残存	口 (9.1) 底 (3.8) 高 (2.4)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-29 41	土 師 器 小 皿	床面-12 瓦残存	口 (8.6) 底 (4.5) 高 (3.2)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-30	土 師 器 小 皿	覆土 瓦残存	口(10.0) 底 (3.4) 高 (2.7)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-31 42	土 師 器 小 皿	床面+15 瓦残存	口 (9.1) 底 5.4 高 3.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
51-32	土 師 器 小 皿	覆土 瓦残存	口(10.4) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
51-33 41	土 師 器 小 皿	床面-2 破片	口 9.6 底 (5.2) 高 (2.1)	①粗、砂粒 ②酸化焰 ③暗褐色	ロクロ成形。口辺を片口状につくる。	
51-34 55	埴 輪 小破片	埴輪 小破片	口 - 底 - 高 -	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③黄褐色、断面黄灰色	輪積成形後、外面横刷毛。内面撫で。	

132号住居跡（第52図、第22表、図版11・42）

本住居跡は、第4次調査区中央の平坦面にあり、29-26グリッドに単独で位置する。東西方向の溝によって分断され、竈上部も大きく削平されている。南東隅も土壌によって破壊を受けている。

平面形は、東西2m75cm・南北3m55cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-96°-Eを示す。ローム（地山）を叩き締めている。柱穴・壁溝は検出されておらず、掘り方調査では竈前のピットが確認されたのみである。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行65cmを測る。中央を溝によって破壊される為、残存状態は悪いが、右袖付近に石材の残存があり、本来は石組であったかもしれない。

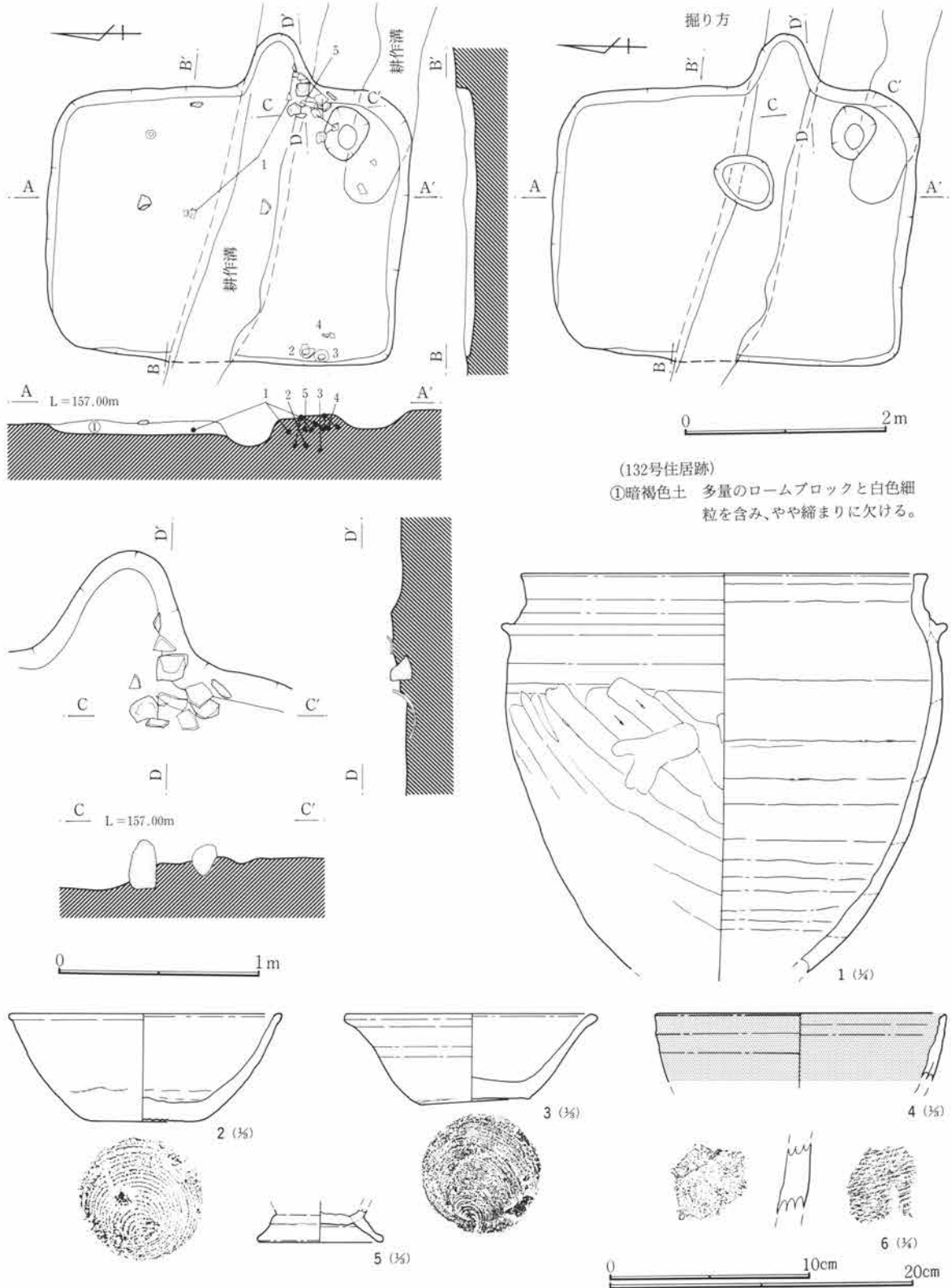
貯蔵穴は竈右脇にあり、径40cm・深さ16cmを測る円形を呈する。

遺物は竈周辺に分布するが、量は少なく種類も乏しい。煮沸具には羽釜を含むようである。竈中央を破壊

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

されている為断定出来ないが、竈用材の可能性もあるかと思われる。他に、薦編石状の輝岩・絹雲母石墨片岩各1個（計0.85kg）検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（内木）。



第52図 132号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

第22表 132号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
52-1 42	須恵器 羽釜	床面+4 %残存	口(27.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明黄褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半斜方向篋割り。	粘土の付着あり
52-2 42	須恵器 坏	床面+2 ½残存	口(13.6) 底 5.8 高 5.2	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
52-3 42	須恵器 坏	床面-12 完形	口 12.6 底 5.6 高 4.4	①粗、雲母・黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰色、一部灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
52-4	灰釉陶器 塊	床面+2 小破片	口(14.4) 底— 高—	①普、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
52-5 42	須恵器 台付甕 (?)	床面+2 小破片	口— 底 8.4 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
52-6	須恵器 大甕 破片	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	外面平行叩き。内面無で。	

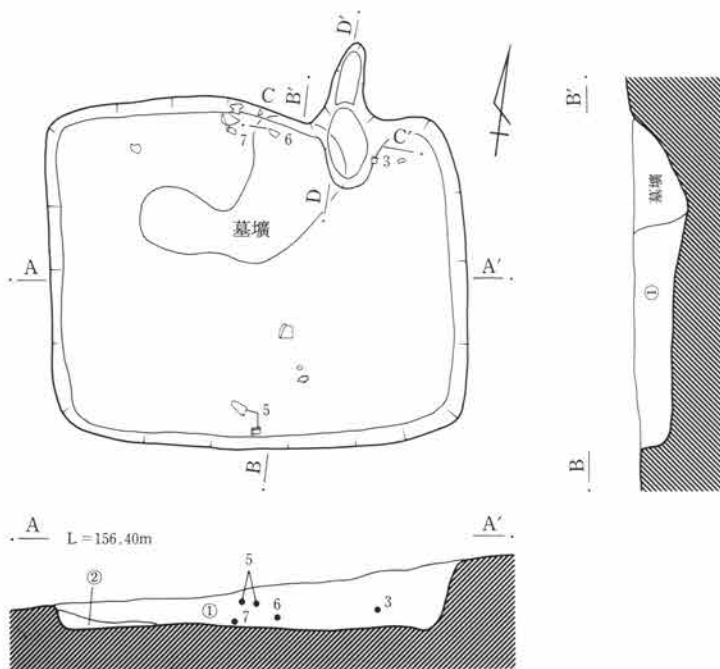
146号住居跡 (第53~54図、第23表、図版11・42・55)

本住居跡は、第4次調査区の西端の西向きの緩斜面にあり、22-22グリッドに単独で位置する。東側と南側とは同時期も含め隣接して住居跡が集中しているが、北側についてはそうした状況が見られず、西側もやや離れる傾向がある。表土の流失の他に、竈左袖付近を中心に後世の墓墳が掘り込まれ、特に竈の残存状況が不良である。

平面形は東西3m40cm・南北2m70cmを測る長方形を呈し、竈周辺がやや住居跡内部に張り出している。主軸方向はN-3°-Eを示す。床面はローム(地山)を叩き締めており、貼床は認められない。貯蔵穴・柱穴・

壁溝等の関連施設も検出されていない。

竈は、この時期の住居跡としてはかなり例外的で、北壁中央やや東寄りにある。あるいは北側の住居跡密集度に関係しているかもしれない。燃烧部には、焼土・灰を充満した楕円形の掘り込みを伴



(146号住居跡)

- ①黒褐色土 ローム粒(〜2mm)をブロック状に含む。白色細粒(〜1mm)を多量、焼土粒(〜3mm)を少量、炭化物を微量含む。
- ②黒褐色土 ①層に比しロームの含有が高い。

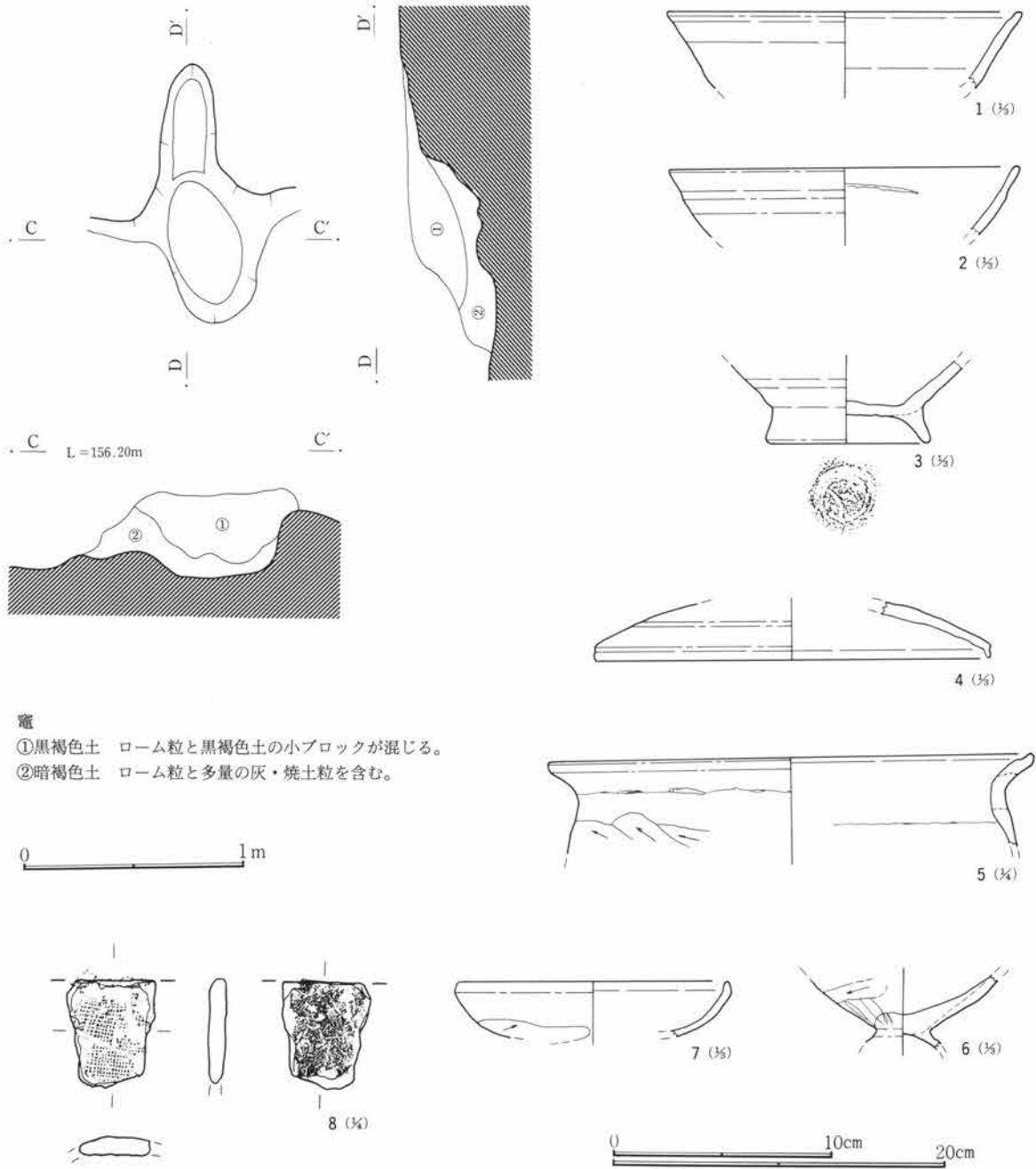
0 2m

第53図 146号住居跡実測図(1)

う。規模は、幅40cm・奥行80cm・深さ33cmを測る。残存状況は極めて不良だが、石組構造については本来持っていなかったものと思われる。

遺物は竈周辺に分布しているが、量的には極めて少なく種類も乏しい。いずれも小破片のみで、図化出来た物も限られている。一部に流れ込みの物もあるようである。そのような事情によって、やや明瞭さに欠けるが、少なくとも煮沸具には羽釜が含まれていないようである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（春山）。



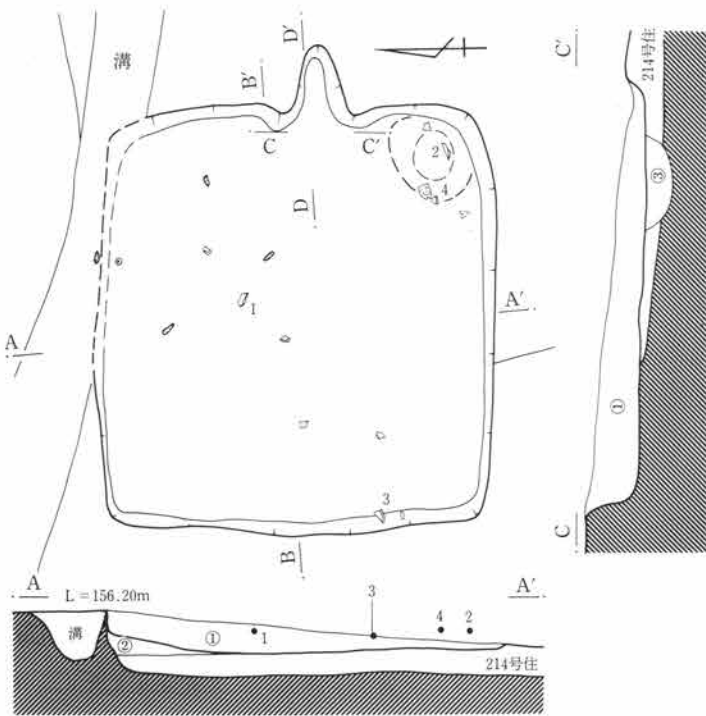
第54図 146号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第23表 146号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
54-1	須恵器 坏	覆土 破片	口(13.2) 底 — 高 —	①粗、白色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
54-2	須恵器 塊	覆土 破片	口(15.8) 底 — 高 —	①粗、黒色鉍物細粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
54-3 42	須恵器 高台付塊	床面+10 破片	口 — 底 7.0 高 —	①粗、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③灰色、断面暗黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
54-4	須恵器 蓋	覆土 小破片	口(18.0) 高 —	①粗、白・黒色鉍物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
54-5	土師器 甕	床面+16 小破片	口(29.6) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒変	輪積成形でロクロ使用。口辺横撫で。外面一部篋削り。	
54-6	土師器 台付甕	床面+5 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色、一部橙色	輪積成形後、外面篋削り。	内面炭化物付着
54-7	土師器 坏	床面+2 小破片	口(10.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半篋削り。	
54-8 55	丸 瓦	覆土 破片	長 — 幅 — 厚 1.1	①粗、雲母・白色鉍物粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	一枚造り。	

158号住居跡 (第55~57図、第24表、図版11・12・42・56)

本住居跡は、第4次調査区の平坦面にあり、29-23グリッドに位置する。周囲に住居跡の分布は見られるが、同時期の住居跡に限るとかなり散漫な状態になる。214号住居跡(古墳)の北西隅を切って構築され、耕作溝によって北東隅を切られている。



大半が214号住居跡等の覆土中で確認された為、不確定な要素は残るが、平面形は東西3m40cm・南北3m20cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-82°-Eを示す。柱穴・壁溝は検出されていない。掘り方も明瞭ではないが、214号住居跡の床面に迄

(158号住居跡)

- ①暗褐色土 多量のロームブロックと微量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土 ①層に比してロームブロックが多い。
- ③暗褐色土 ロームブロックを含み、焼土粒を少量含む。

第55図 158号住居跡実測図(1)

0 2m

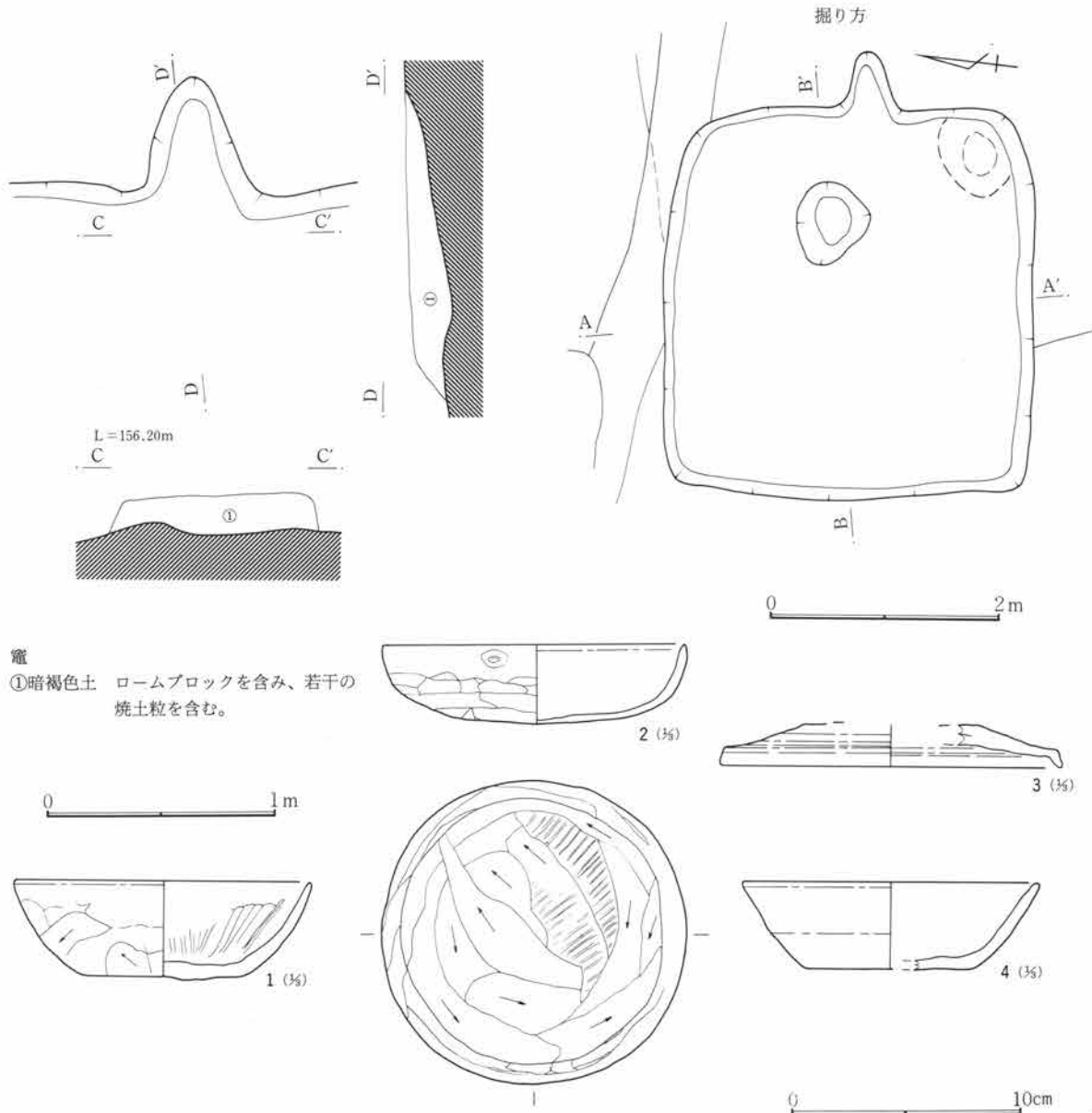
達する深さの竈前のピットが存在したと思われる。

竈は、東壁のほぼ中央にあり、幅40cm・奥行65cm・深さ16cmを測ると思われるが、僅かに焼土が見られる程度で、残存状況は不良である。住居跡内部にも大きな石材の出土は殆ど認められず、石組構造ではなかったと思われる。

貯蔵穴は竈右脇にあったようで、径60cm程度を測る円形を呈したと思われるが、深さははっきり確認されていない。

遺物の分布は散漫で、種類も乏しい。図化出来る物が少なく、特に煮沸具を全く欠くが、羽釜は本来伴わないようである。土師器坏類は手持ち篋削りで、内面に暗文を施すものもある。加工痕・使用痕の明瞭な紡錘車も検出されている。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩2個、絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩各1個(計0.61kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる(内木)。



第56図 158号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



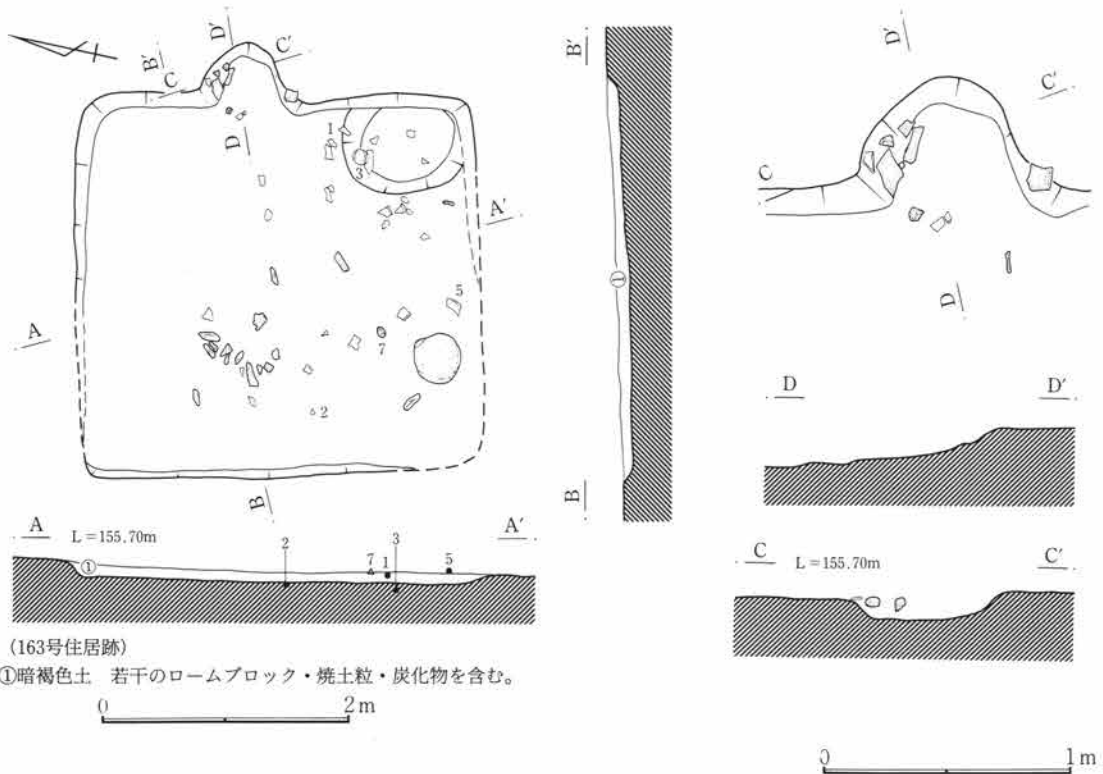
第57図 158号住居跡出土遺物実測図(2)

第24表 158号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
56-1 42	土師器 坏	床面+35 %残存	口(13.0) 底(6.9) 高 4.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面窺削り。内面窺磨き。	
56-2 42	土師器 坏	床面+42 ほぼ完形	口 13.4 底 — 高 3.4	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半窺削り。	
56-3	須恵器 蓋	床面+36 破片	摘(14.4) 口 — 高 —	①粗、石英・白色鈦物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
56-4 42	須恵器 坏	床面+42 破片	口(13.0) 底(7.2) 高(3.7)	①粗、褐色鈦物粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰色、断面灰白色	右回転ロクロ成形。	
57-5 56	石製品 紡錘車	覆土 ほぼ完形	径3.77/2.32 孔径0.58 厚 1.46 重 26.4		側面に製作時の擦痕、上面に使用痕あり。	滑石片岩

163号住居跡 (第58・59図、第25表、図版12・42・57)

本住居跡は、第4次調査区の西端の平坦面にあり、29-21グリッドに位置する。165号住居跡(古墳)の南東隅を掘り込んで構築される。164号住居跡(古墳)他、古墳時代の住居跡がすぐ隣接して所在するが、同時



第58図 163号住居跡実測図

期の住居跡の分布は散漫で、やや孤立する傾向にある。表土の流失により、南西隅と北壁の一部は痕跡状態であった。

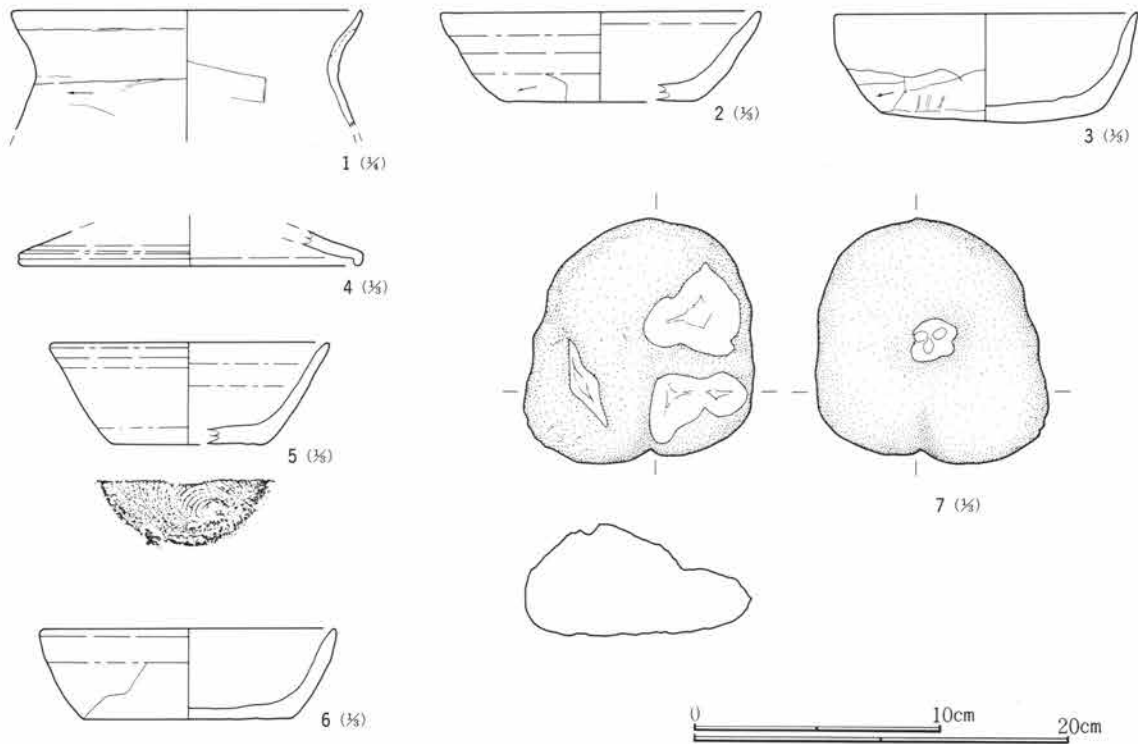
平面形は、東西3m・南北3m25cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-70°-Eを示す。南壁西寄りに、作業台と思われる平石を据えているが、出土している遺物等に特殊なものは認められず、その性格は未詳である。柱穴・壁溝等については検出されていない。床面は、ローム（地山）を叩き締めており、基本的に貼床等は認められない。

竈は、東壁中央やや北寄りにあり、幅70cm・奥行55cm・深さ10cmを測る。両袖部分に石材が残り、石組であったと思われるが、残存状況は不良で原型を想定する事は出来ない。

貯蔵穴は竈右脇にあり、やや大きめで径1m・深さ7cmを測る浅い円形を呈する。

遺物は、床面中央部にやや集中しているが、種類に乏しく残存率も極めて低い。図化出来た物は坏類が主であるが、確認されている範囲では煮沸具はコ字状口縁の土師器甕のみである。他に薦編石状の点紋緑泥片岩2個、絹雲母石墨片岩・チャート・緑泥片岩各1個（計0.5kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる（中沢）。



第59図 163号住居跡出土遺物実測図

第25表 163号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
59-1	土師器 甕	床面+5 小破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
59-2	土師器 坏	床面-2 小破片	口(13.0) 底(8.0) 高(3.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

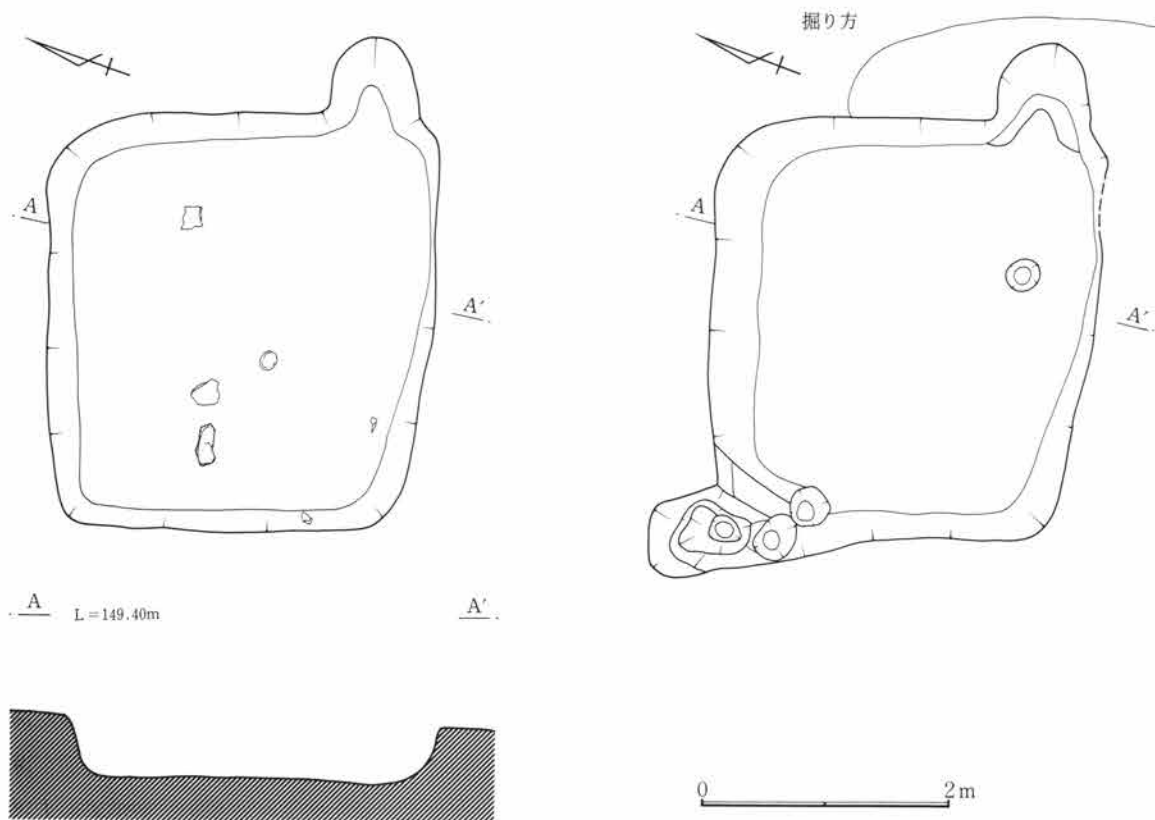
挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
59-3 42	土 師 器 坏	床面-4 ほぼ完形	口 12.2 底 8.4 高 4.2	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面寛削り。	
59-4	須 恵 器 蓋	覆土 小破片	摘 - 口(14.0) 高 -	①粗、黒色鈹物粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
59-5	須 恵 器 坏	床面+8 3%残存	口(11.2) 底 (6.4) 高 4.0	①粗、黒色鈹物粒少 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
59-6	土 師 器 坏	覆土 破片	口(12.0) 底 (8.4) 高 (3.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面寛削り。	
59-7 57	凹 石	床面+8 完形	長 9.2 厚 4.3 幅 9.2 重 350		3個所使用。	砂岩

177号住居跡 (第60図)

本住居跡は、第5次調査区西端の緩斜面にあり、28-4グリッドに位置する。谷にかかる南西部分を中心に、一部黒色土を掘り込む13軒程の竪穴住居跡が複雑に重複しており、調査は困難を極めた。298号住居跡(平安)・408号住居跡(平安)と番号の無い住居跡(古墳)を切って構築されていたと思われる。

平面形は東西3m30cm・南北3m15cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-84°-Eを示す。掘り方は明瞭ではないが、北西隅に住居外へ張り出す形でピットが連なっていた。貯蔵穴・柱穴・壁溝等については検出されていない。

竈は東壁隅近くにあり、幅50cm・奥行70cmを測る。

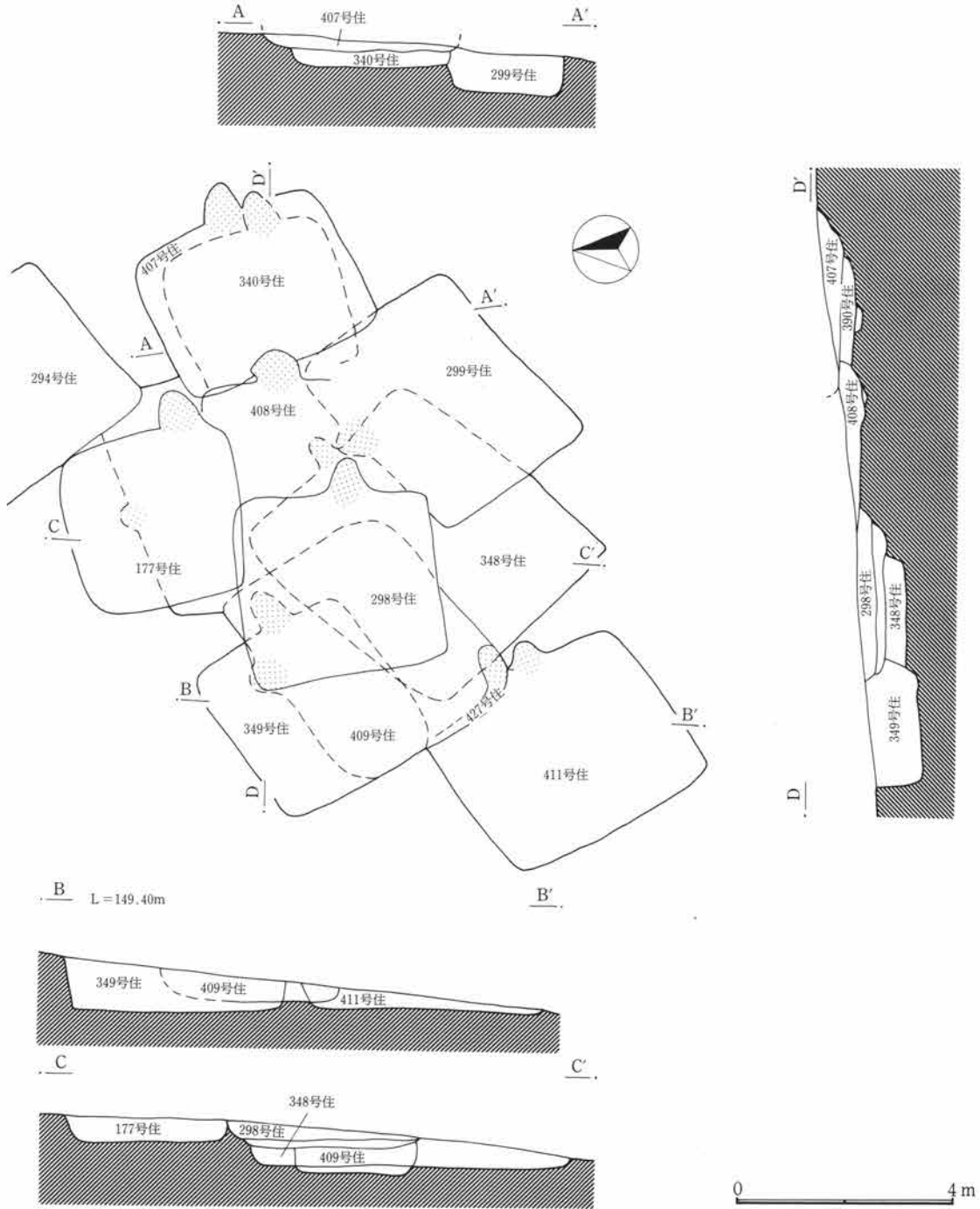


第60図 177号住居跡実測図

遺物は、図化出来る物が無いが、僅かな破片の様相から見て平安期に収まると思われる。
遺物の様相や、切り合い関係等を勘案して、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（中沢）。

参考までに、各住居跡の所属年代を整理すれば次のようになる（第61図参照）。

- ◎古墳時代・時期不明…348・427・番号なし（次回以降報告）
- ◎奈良時代…299・349・409・411（次回以降報告）
- ◎平安時代…177・294・298・340・407・408（今回報告対象…関口）



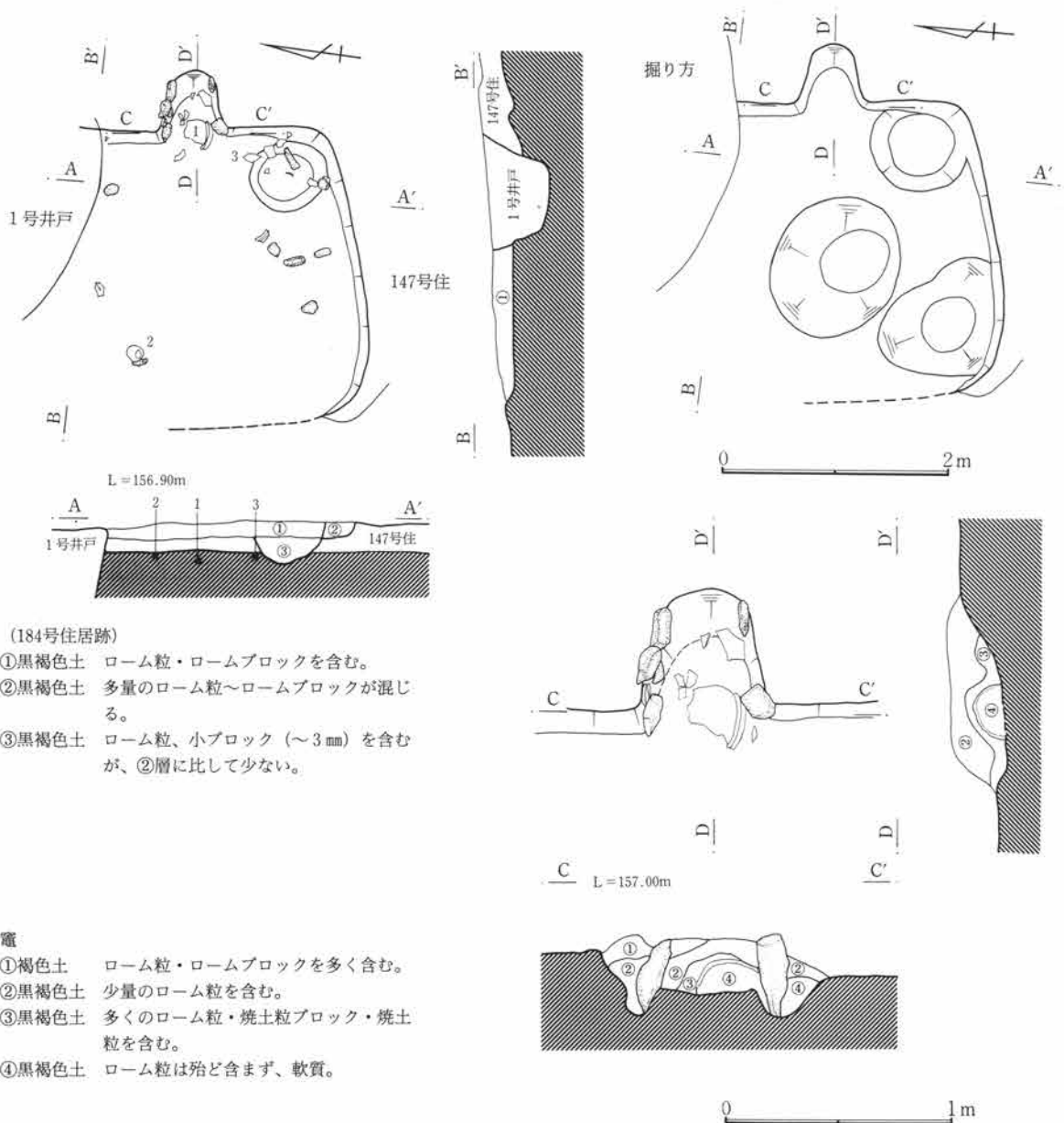
第61図 177号住居跡周辺遺構重複関係図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

184号住居跡（第62・63図、第26表、図版12・13・42）

本住居跡は、第4次調査区中央の緩斜面にあり、26-24グリッドに位置する。周囲に同時期の住居跡は少なく、広場状になっている。147号住居跡（奈良）の覆土を掘り込んで構築され、後出する1号井戸（平安）に西半部を破壊されているが、周囲に同時期の住居跡が少ないのは、あるいはこの井戸の存在が関係しているかもしれない。表土の流失により、西壁は完全に消失していた。規模は、南北2m55cmを測り、方形になると思われるが、南北方向の長さは確認出来ない。

竈の残存により、主軸方向はN-84°-Eになると思われる。柱穴・壁溝は検出されていない。床面の残存した部分には貼床が残る。掘り方は147号住居跡の床面に迄及び、竈前のピットのほか南西隅に関係すると見られる掘り込みがあった。



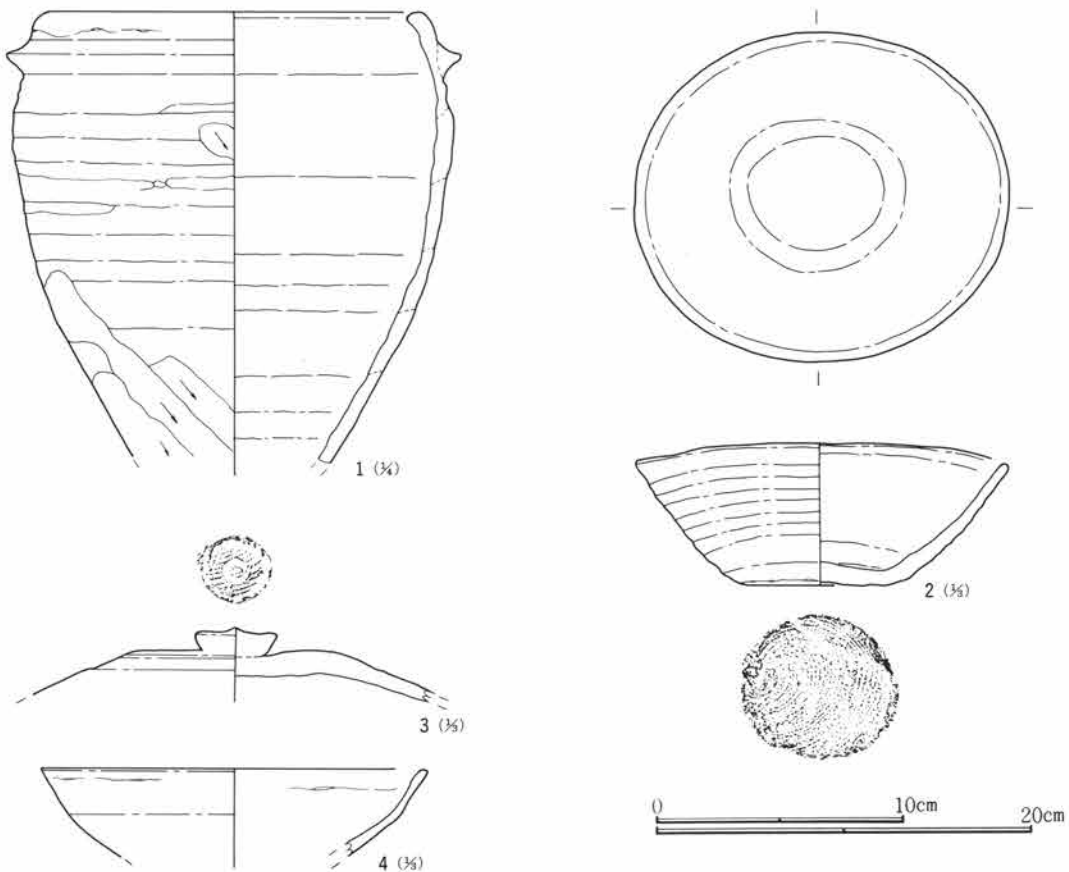
第62図 184号住居跡実測図

竈は東壁にあり、幅50cm・奥行60cm・深さ22cmを測る。両袖の二石と燃焼部を画する二石とが残存し、天井石は残らないものの、比較的大型の羽釜破片が内部を下向きにして検出され、本来羽釜を補強材に使用した石組構造であったと思われる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径70cm・深さ28cmを測る。

遺物は量的には少ないが、煮沸具には羽釜を含む。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩2個、紅簾絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩各1個(計3.1kg)検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(春山)。



第63図 184号住居跡出土遺物実測図

第26表 184号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
63-1 42	須恵器 羽釜	竈内-8 1/2残存	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。外面下部篋削り。	
63-2 42	須恵器 坏	床面-2 完形	口 14.8 底 5.8 高 5.7	①粗、石英粒・黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。口辺一方向に押し曲げてつくる。	意図的に潰されている(?)
63-3	須恵器 蓋	床面-2 破片	摘 3.3 口— 高—	①粗、石英粒多 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、頂部糸切り。回転篋削りを施した後、刻みを入れて摘みを貼付。	
63-4	須恵器 塊	貯蔵穴 覆土 破片	口(14.3) 底— 高—	①粗、雲母 ②酸化焰、軟質 ③灰色、断面にぶい橙色	ロクロ成形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

190号住居跡（第64図）

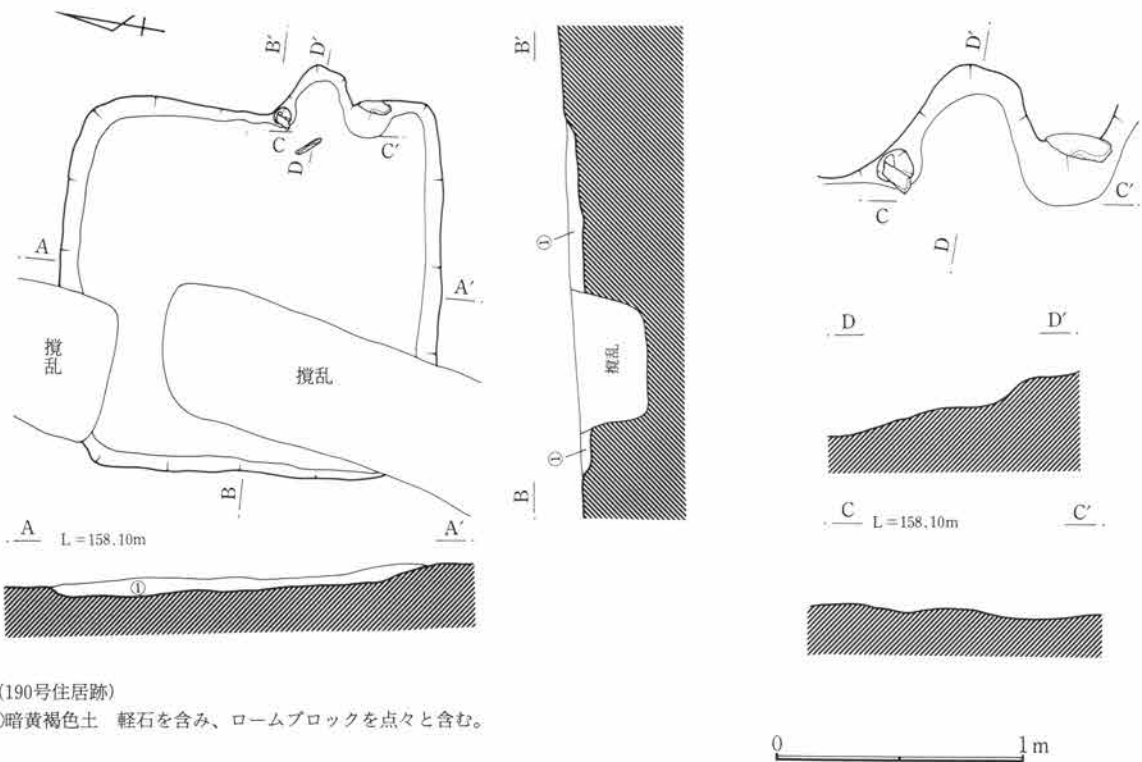
本住居跡は、第4次調査区中央の緩斜面にあり、22—27グリッドに単独で位置する。同時期の住居跡としては、南から西にかけて124・125・126号の各住居跡が比較的近接しているが、相互にかなり差異が認められる。表土の大半が流失している他、時期不明の方形の土壌二基によって、北壁と南西隅を大きく破壊されている。

平面形は、東西2m95cm・南北3mを測る正方形を呈し、主軸方向はN-93°-Eを示す。床面は、ローム（地山）を叩き締めており、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設は検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm・奥行50cmを測る。左袖の位置等に石材の残存が見られるが、本来伴うものかどうかは問題がある。

遺物には図示し得るものがないが、検出されている細片はいずれも平安期に収まるものと思われる。

住居跡の形態や遺物の様相などから、本住居跡の所属年代は平安時代と判断した（中沢）。



第64図 190号住居跡実測図

203号住居跡（第65図、図版13）

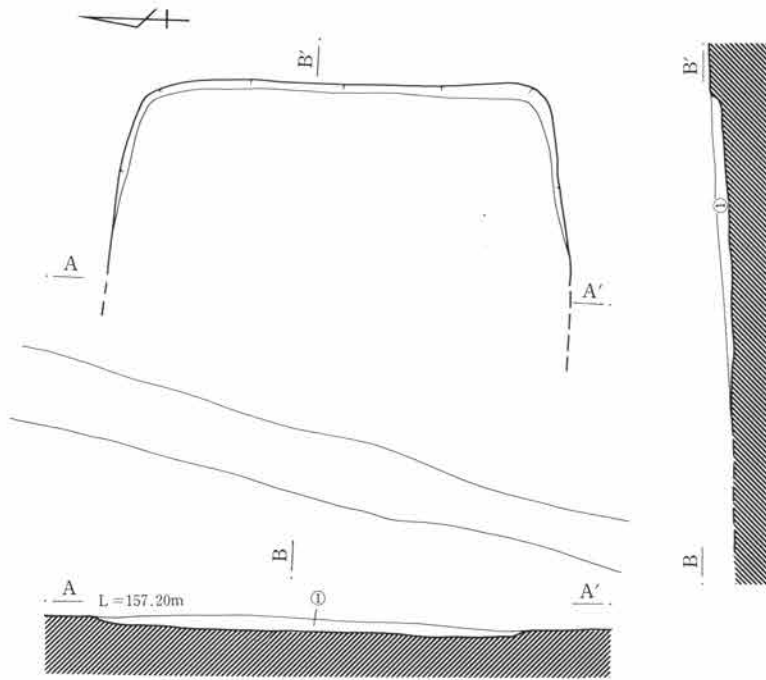
本住居跡は、第4次調査区西端近くの平坦面にあり、29—20グリッドに位置する。覆土の流失が進行し、残存状況は極めて不良である。西側を耕作溝に破壊されるほか、掘り方以下まで消失する。

規模は、僅かに斜面に掘り込んだ東壁によって、南北3m60cmを測り、方形を呈すると思われるが、東西方向は痕跡程度で確認出来ない。焼土などの散布も見られず、竈・貯蔵穴の位置はわからず、主軸方向も不詳である。柱穴・壁溝も検出されていない。

周辺の住居跡の状況を参考にすれば、竈については、北竈になる可能性がある。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

遺物にも見るべきものはなく、図化出来ない。本来住居状遺構とするべきかもしれないが、僅かな遺物や掘り込みの状況に住居跡を想像させるものがあるので、平安期の住居跡と認定した(春山)。



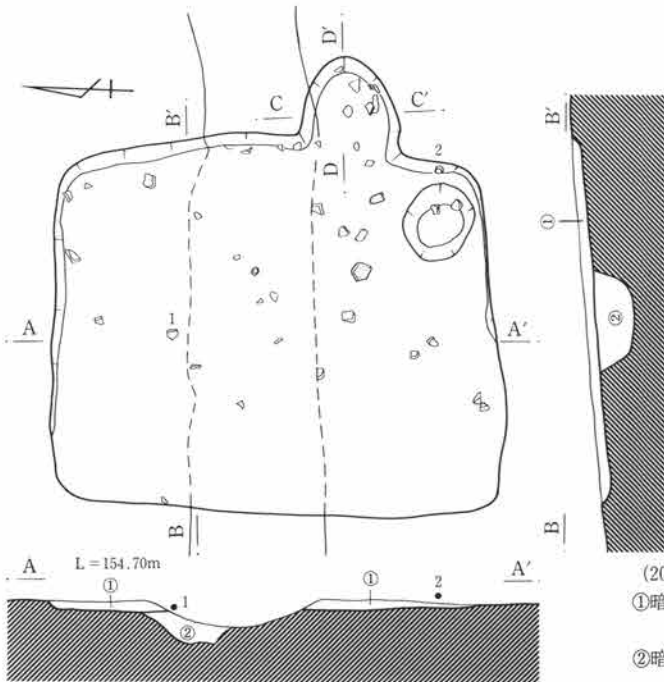
(203号住居跡)
①黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(〜3mm)を含む。

0 2m

第65図 203号住居跡実測図

209号住居跡(第66・67図、第27表、図版13)

本住居跡は、第4次調査区西端の緩斜面にあり、24-19グリッドに単独で位置する。周辺には、南西方向にある、しっかりした掘り方の柱穴の3号掘立柱建物跡を囲む形で、同時期の住居跡がやや集中して所在する。東西方向の溝(自然流路)によって東壁の中央付近が大きく破壊される他、表土の流失により、西壁は掘り方で確認された。



平面形は、東西3m・南北3m65cmを測る長方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-87°-Eを示す。床面には、住居中央部を中心に薄く貼床が認められ、床下には溝に削平を受けながらも、時期差のあるピット三基が検出さ

(209号住居跡)

①暗褐色土 ローム粒(〜5mm)を多量、焼土粒(〜3mm)・炭化物粒(〜5mm)を含む。
②暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。

0 2m

第66図 209号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

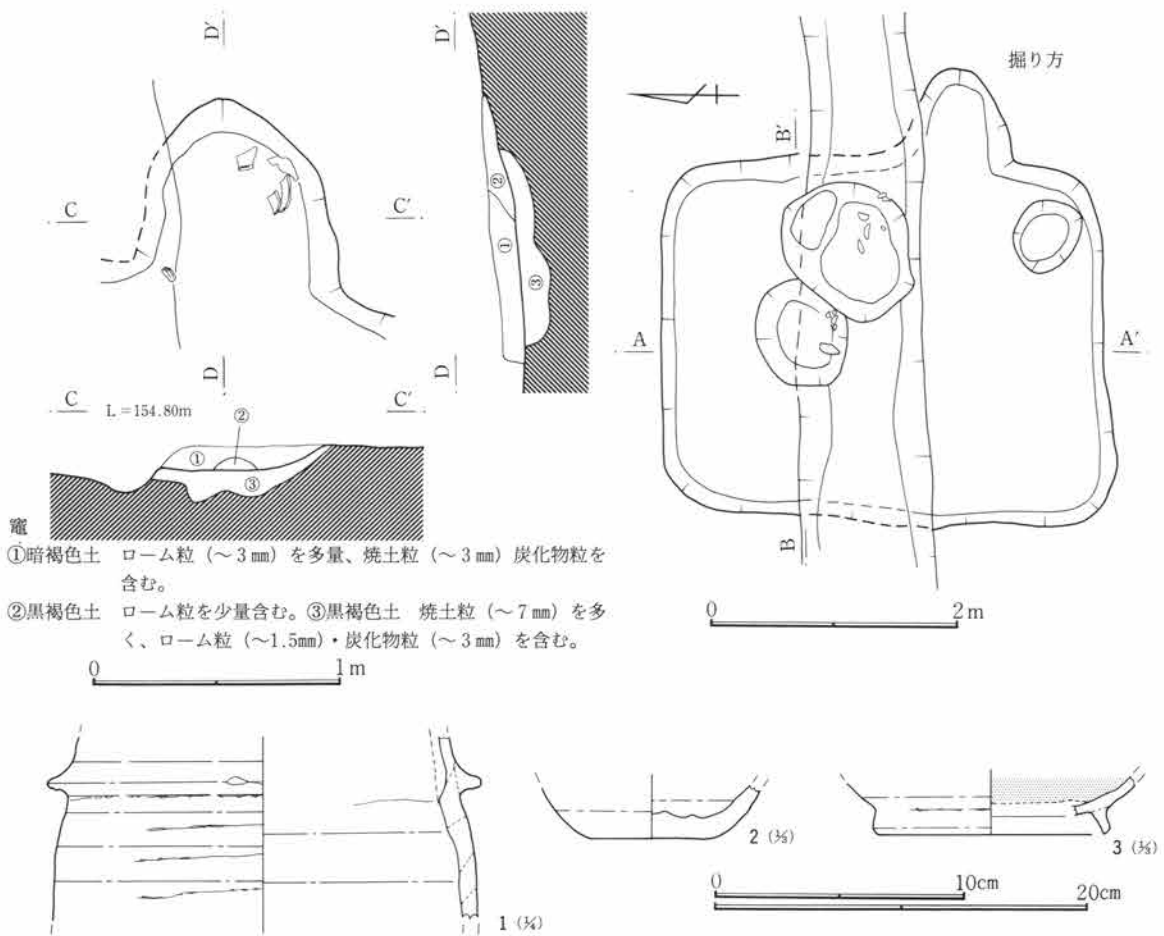
れた。柱穴・壁溝等については検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm程度・奥行80cm・深さ14cm程度を測ると思われるが、溝によって左袖付近を大きく破壊されている。石組に関係すると思われる石材は全く検出されていない。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径50cm・深さ21cmを測る円形を呈する。

遺物は、床面及び床下土壌中から主に検出されているが、その分布は散漫で種類が乏しい上、個々の残存率も極めて低く、図化できた物も少ない。灰釉陶器も検出されているが小破片であり、煮沸具には、竈内部を中心に羽釜が認められる。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩各1個（計0.81kg）検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（春山）。



第67図 209号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第27表 209号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
67-1	須恵器 羽釜	床面+4 小破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
67-2	須恵器 埴	床面+8 小破片	口— 底(5.0) 高—	①粗、石英粗粒 ②還元焰、やや硬質 ③外面暗灰色、内面黄灰色	ロクロ成形。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
67-3	灰釉陶器 塊	覆土 小破片	口— 底(9.0) 高—	①普 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	大原2号窯式

211号住居跡 (第68~70図、第28表、図版14・42)

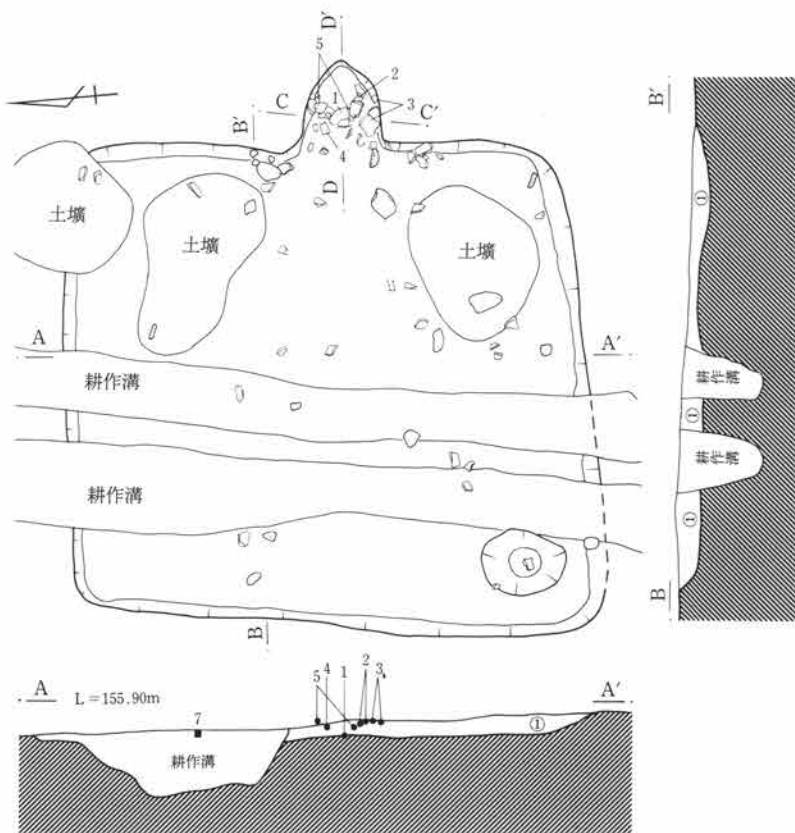
本住居跡は、第4次調査区西端近くの平坦面にあり、33-24グリッドに単独で位置する。表土がかなり流失した上に、西半分を南北方向の二条の耕作溝によって寸断される他、東半分は土壌三基が掘り込まれ、本住居跡本来の覆土は僅かなものであった。

平面形は、東西4m20cm・南北3m90cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。床面の貼床はほぼ全面に施されていたと思われるが、上記の攪乱によって残りが悪い。床下には、時期差にある五基以上のピットと住居跡西半分に及ぶ掘り込みが複雑に検出されている。

竈は、東壁のほぼ中央にあり、幅70cm・奥行70cm・深さ20cmを測る。原位置を保つと見られる物が無いが、数個体分の羽釜破片を含んでいる。竈内外に石材が散乱しており、本来は羽釜を補強材に用いた石組構造であった可能性がある。

貯蔵穴は、掘り方調査で検出された竈右脇の掘り込みが該当すると思われるが、土壌によって大きく破壊を受けている為、詳細は不詳である。

遺物は、竈を中心に床面全体に分布するが、密度は薄く残存率も低い。他に薦編石状の緑簾緑泥片岩2個、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩・安山岩・凝灰岩各1個(計1.91kg)が検出されている。以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる(春山)。

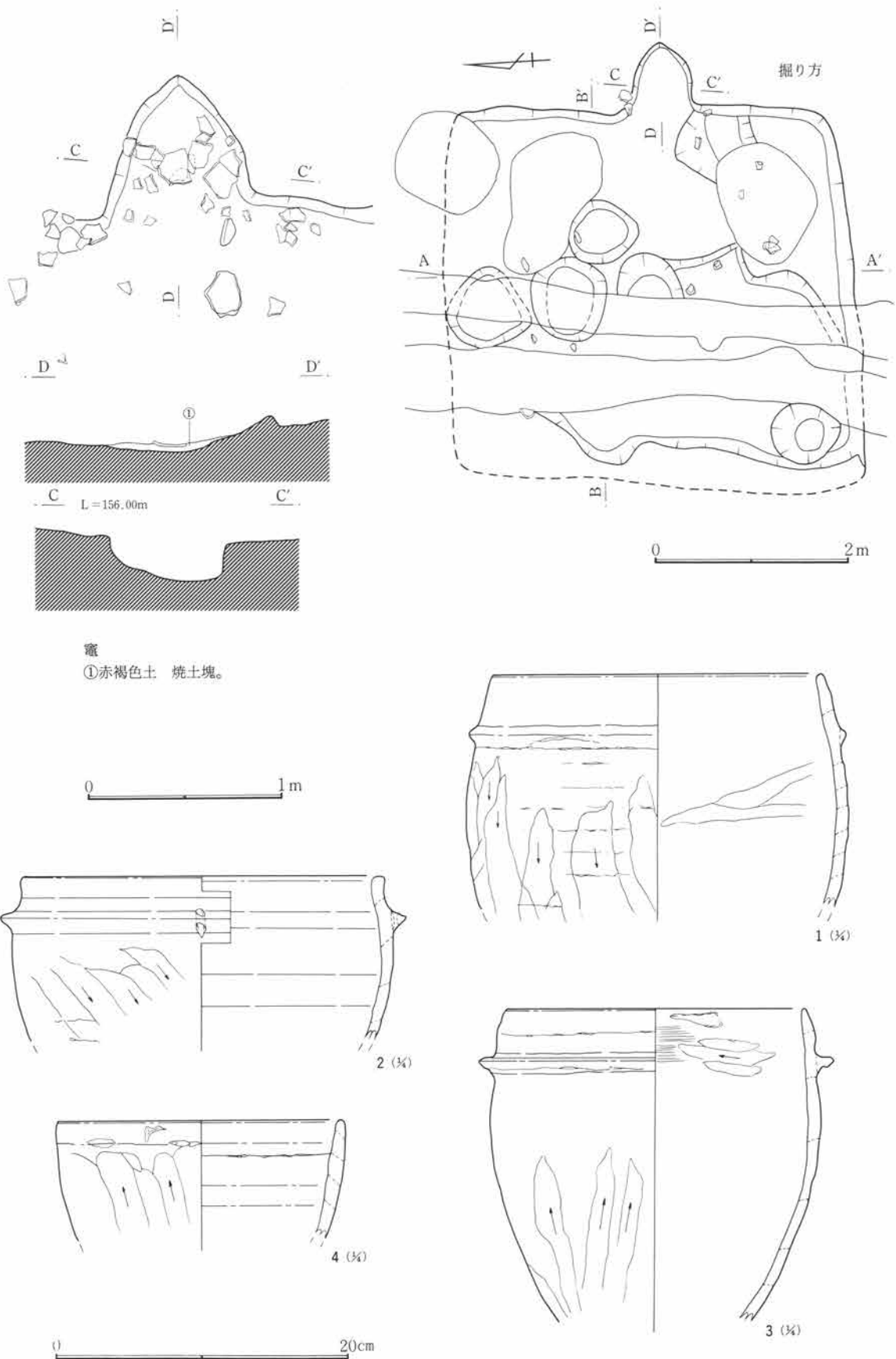


(211号住居跡)
①暗褐色土 多量のローム粒を含む。

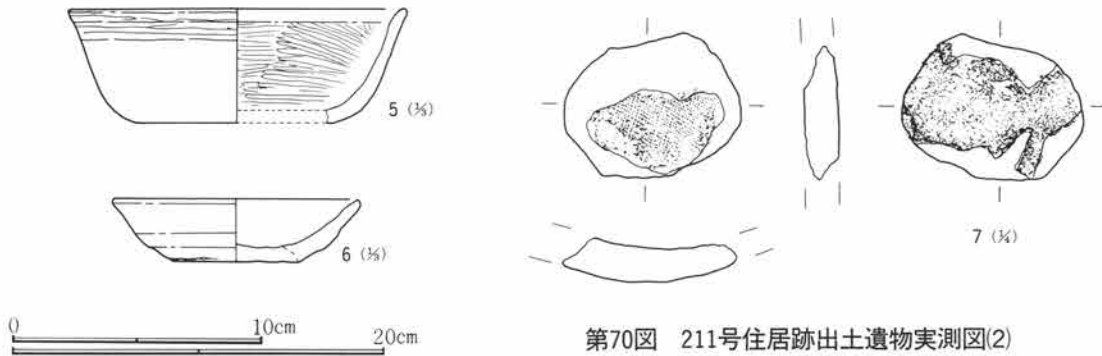
0 2m

第68図 211号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第69図 211号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第70図 211号住居跡出土遺物実測図(2)

第28表 211号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
69-1 42	須恵器 羽釜	床面直上 破片	口(22.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙～灰色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。内面一部撫で。	
69-2 42	須恵器 羽釜	床面+6 破片	口(24.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	鏝に上→下の穿孔あり
69-3 42	須恵器 羽釜	床面+8 破片	口(20.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。内面一部撫で。	
69-4	須恵器 鉢	床面+5 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	鏝刻離
70-5 42	須恵器 碗	床面+10 破片	口(13.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。内面磨き。	
70-6	須恵器 小皿	覆土 破片	口(10.0) 底 5.0 高 2.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい浅黄色	ロクロ成形。	
70-7	平瓦	床面+5 小破片	長— 幅— 厚 1.9	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	一枚造りか。	

212号住居跡 (第71図、第29表、図版14・57)

本住居跡は、第4次調査区西端近くの平坦面にあり、32-24グリッドに単独で位置する。北に211号住居跡(平安)、南に213号住居跡(平安)が隣接し、挟まれる位置関係になる。覆土が大半流失した上、土壌などによって破壊が進行し、竈周辺のみ確認された。規模の詳細は不詳であるが、本来比較的小規模なものであったと思われる。掘り方では、径90cm・深さ36cmを測る竈前のピットが確認されている。床面は、竈周辺に貼床を持つと思われるが、全体の様子はわからず、柱穴・壁溝も実態不明であるが、伴わなかった可能性が強い。

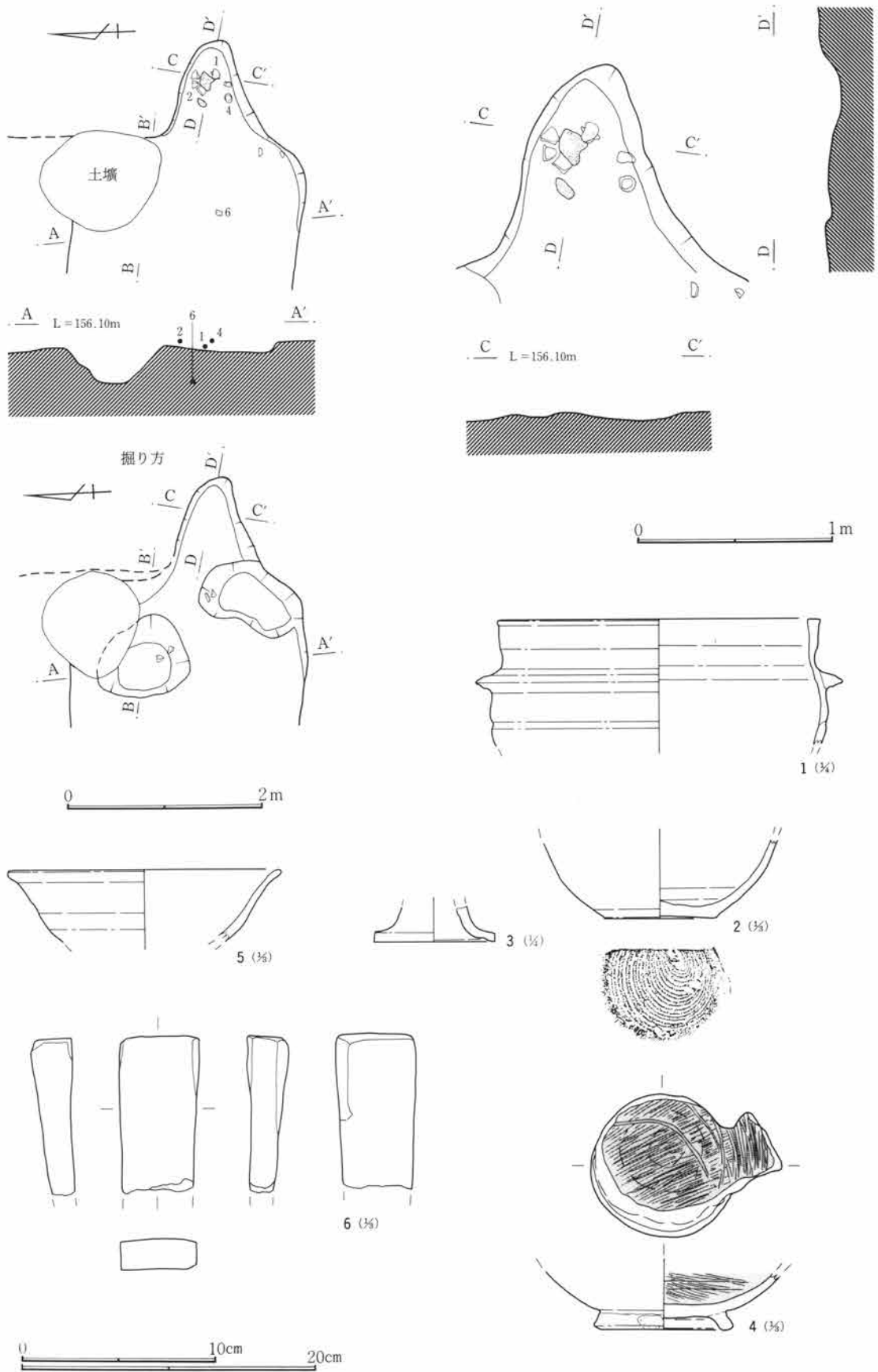
竈は、幅1m・奥行90cm・深さ5cmを測るが、殆ど深さが無い状態で痕跡と言うべきである。

貯蔵穴は、掘り方調査で確認された長径1m・短径50cm・深さ18cmを測る、竈右脇のピットが該当すると思われる。

遺物の分布は竈内部を中心とし、その周辺にも多少見られるが、全体量は少ない。煮沸具には羽釜を含むが、竈補強材と考えられ、本住居跡で直接使用されていた訳ではないだろう。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩・脆雲母石墨片岩各1個(計0.2kg)検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第71図 212号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第29表 212号住居跡出土遺物観察表

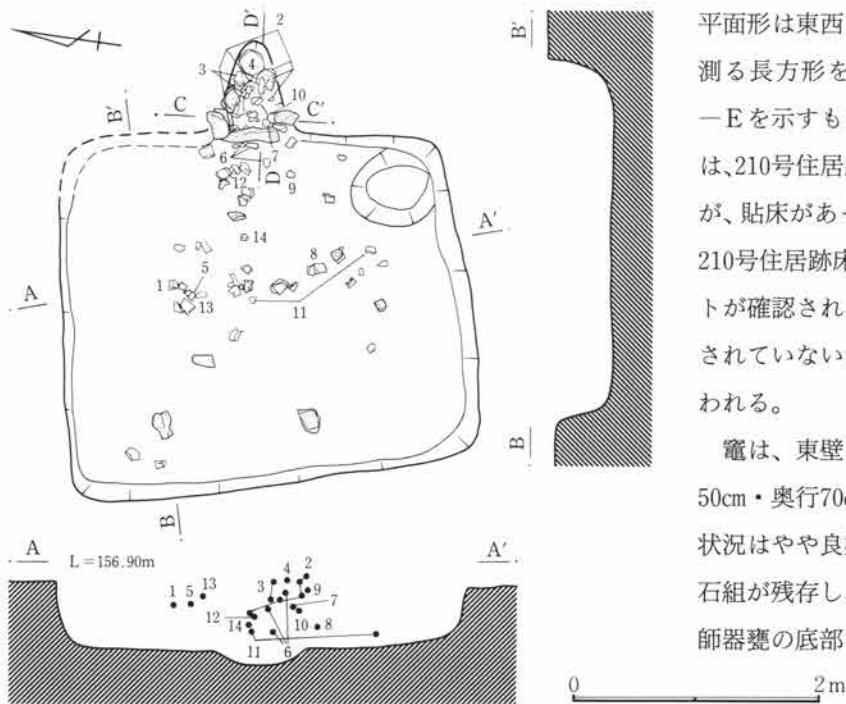
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
71-1	須恵器 羽釜	竈内+4 小破片	口(22.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色、一部黒変	輪積成形でロクロ使用。	
71-2	須恵器 埴	竈内+5 小破片	口— 底 5.8 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③外面黒色、内面暗褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
71-3	須恵器 台付甕	覆土 小破片	口— 底(8.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗褐色、断面黄灰色	ロクロ成形。	
71-4	須恵器 高台付坏	竈内+9 破片	口— 底(6.6) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③外面浅黄色、内面黒色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面黒色処理
71-5	須恵器 埴	覆土 小破片	口(14.0) 底— 高—	①粗 ②還元焰、やや軟質 ③外にぶい橙色の黄灰色	ロクロ成形。	
71-6 57	石製品 砥石	床面-28 破片	長—厚 1.5 幅 3.9 重 90		中砥。四面使用。	玻璃質安山岩

216号住居跡 (第72~74図、第30表、図版15・43)

本住居跡は、第4次調査区北寄りの平坦面にあり、32-28グリッドに位置する。周囲には、時期的に近接し、主軸方向のほぼ揃った113・118号住居跡等がやや集中して所在する。切り合い関係は、210号住居跡(古墳)の覆土中に、完全にはまった形で構築されている。プランのほぼ中央に収まる形になっており、偶然にそういう占地になったというよりも、216号住居跡が構築された段階では、210号住居跡が未だ完全には埋没しきっておらず、意図的に掘削量の少なく済む窪みを利用している可能性がある。

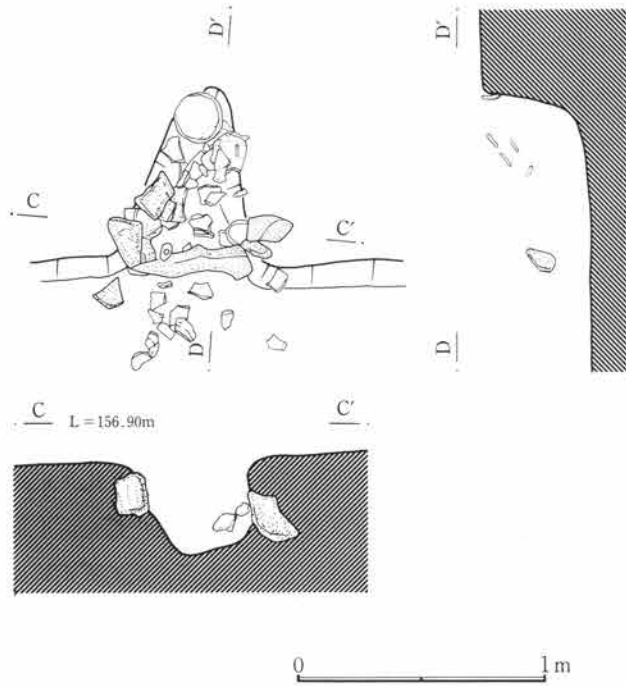
210号住居跡の覆土中に構築されている為に、プラン確認にやや不安は残るが、平面形は東西2m90cm・南北3m35cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-86°-Eを示すものと思われる。床面の状況は、210号住居跡覆土中の為明瞭ではないが、貼床があったと思われる。掘り方は、210号住居跡床面にまで達し、竈前のピットが確認されている。柱穴・壁溝は検出されていないが、本来伴わないものと思われる。

竈は、東壁中央やや北寄りにあり、幅50cm・奥行70cm・深さ42cmを測る。残存状況はやや良好で、焚口部の天井石他の石組が残存し、煙道部にはコ字状口縁土師器甕の底部を抜いたものを口縁を下に



第72図 216号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

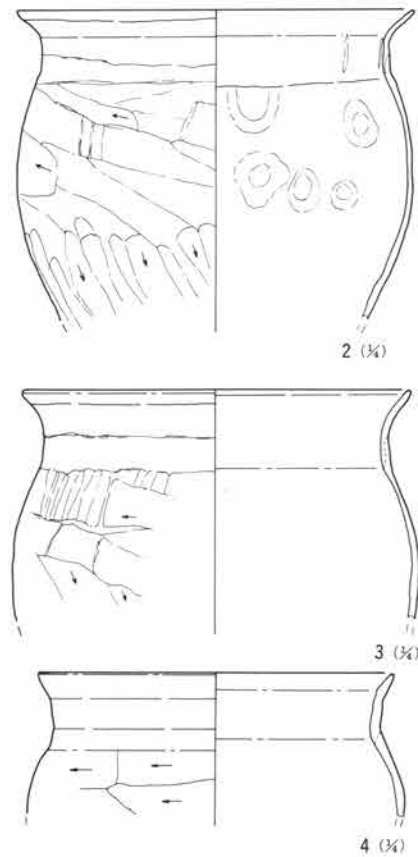
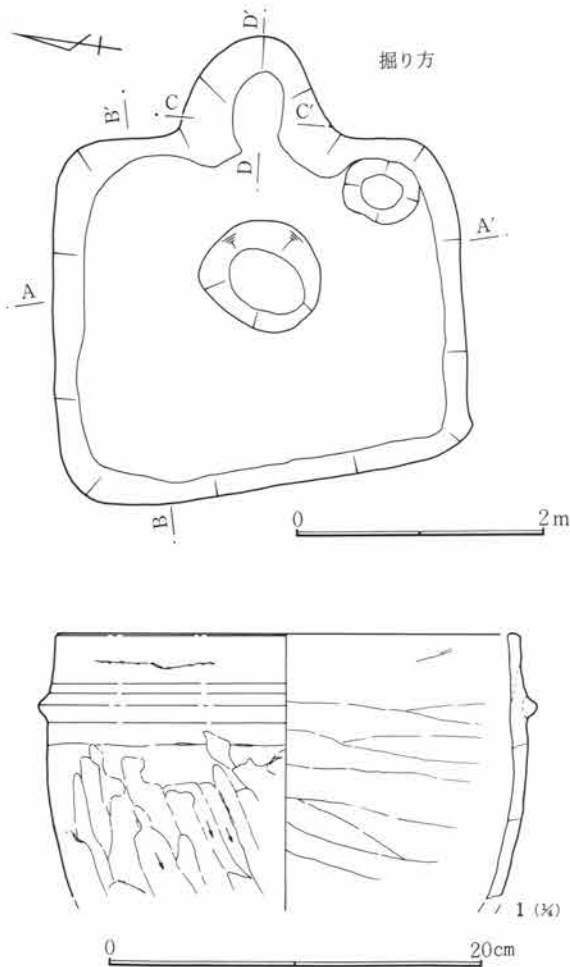


設置して再利用している。

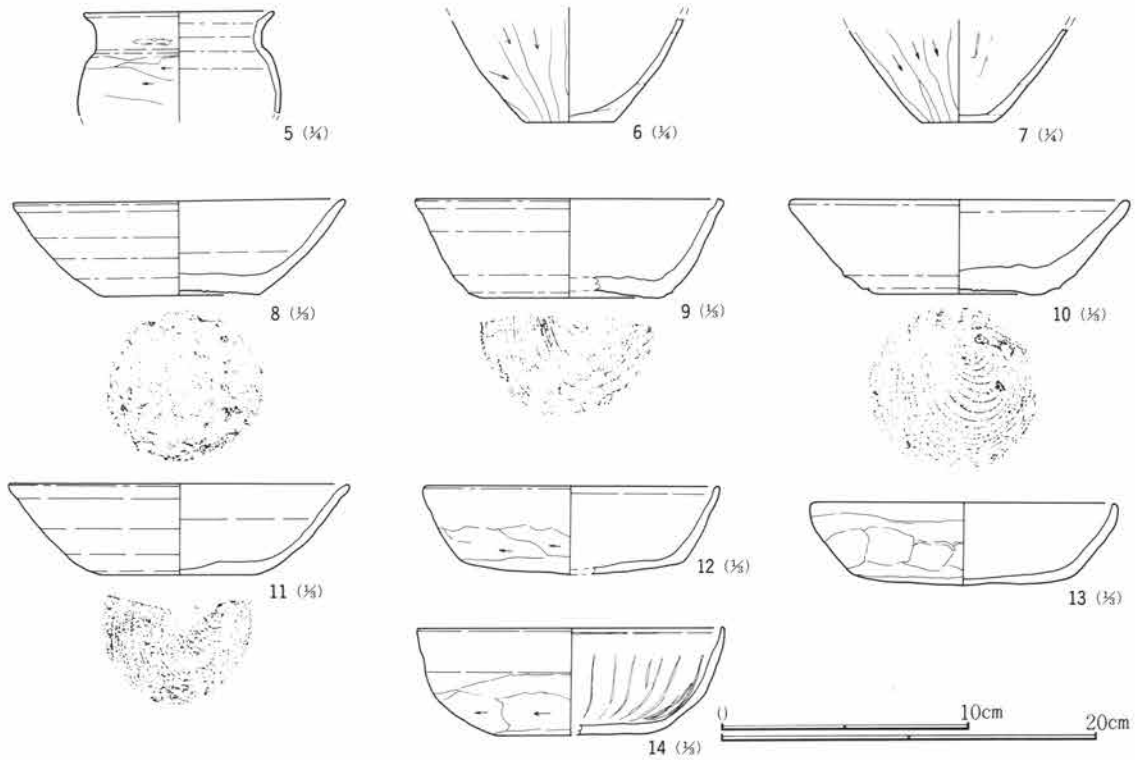
貯蔵穴は竈右脇にあり、径65cm・深さ14cmを測る円形を呈する。

遺物はやや多く、竈内部及び床面中央付近を中心に分布している。煮沸具には僅かながら羽釜が見られるが、土師器坏類は手持ち篋削りの物が主で、本来は個体数も多く検出されているコ字状口縁の土師器甕を利用していたと思われる。他に、薦編石状の絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩各1個(計0.65kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる(中沢)。



第73図 216号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第74図 216号住居跡出土遺物実測図(2)

第30表 216号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
73-1	須恵器 羽釜	床面+35 破片	口(25.2) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②還元焰、硬質 ③橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。内面撫で。	
73-2 43	土師器 甕	竈内+30 %残存	口(21.4) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上半横方向篋削り。下半縦方向篋削り。内面指頭圧痕。	
73-3 43	土師器 甕	竈内+40 破片	口(21.0) 底 — 高 —	①粗、石英細粒 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上半横方向篋削り。下半縦方向篋削り。	
73-4 43	土師器 甕	竈内+52 破片	口(19.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上半横方向篋削り。	
74-5	土師器 小型甕	床面+36 小破片	口(10.4) 底 — 高 —	①粗、細砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色、断面明赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上半横方向篋削り。	
74-6 43	土師器 甕	床面+12 破片	口 — 底 4.8 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、外面縦方向篋削り。内面篋撫で。	
74-7	土師器 甕	竈内+31 破片	口 — 底 4.0 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③外面黒色、内面にぶい橙色	輪積成形後、外面縦方向篋削り。内面篋撫で。	
74-8 43	須恵器 坏	床面+18 %残存	口(14.4) 底 6.4 高 3.7	①細、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③灰色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
74-9	須恵器 坏	床面+45 %残存	口(12.6) 底 (7.2) 高 3.9	①粗、石英粒やや多 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
74-10 43	須恵器 坏	竈内+30 %残存	口(13.7) 底 6.8 高 3.7	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	比重大 二次焼成を受け るか

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
74-11 43	須恵器 坏	床面+14 ㄱ残存	口(13.8) 底(6.2) 高 3.6	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
74-12 43	土師器 坏	床面+25 ㄱ残存	口(12.2) 底(9.2) 高 3.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面指押さえ。底部篋削り。	
74-13 43	土師器 坏	床面+40 ㄱ残存	口(12.4) 底(9.0) 高 3.3	①細 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面指押さえ。底部篋削り。	
74-14	土師器 坏	床面+20 ㄱ残存	口(12.5) 底(7.4) 高 4.0	①細、細砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面指押さえ。底部篋削り。内面磨き。	

218号住居跡（第75～77図、第31表、図版15・43・57）

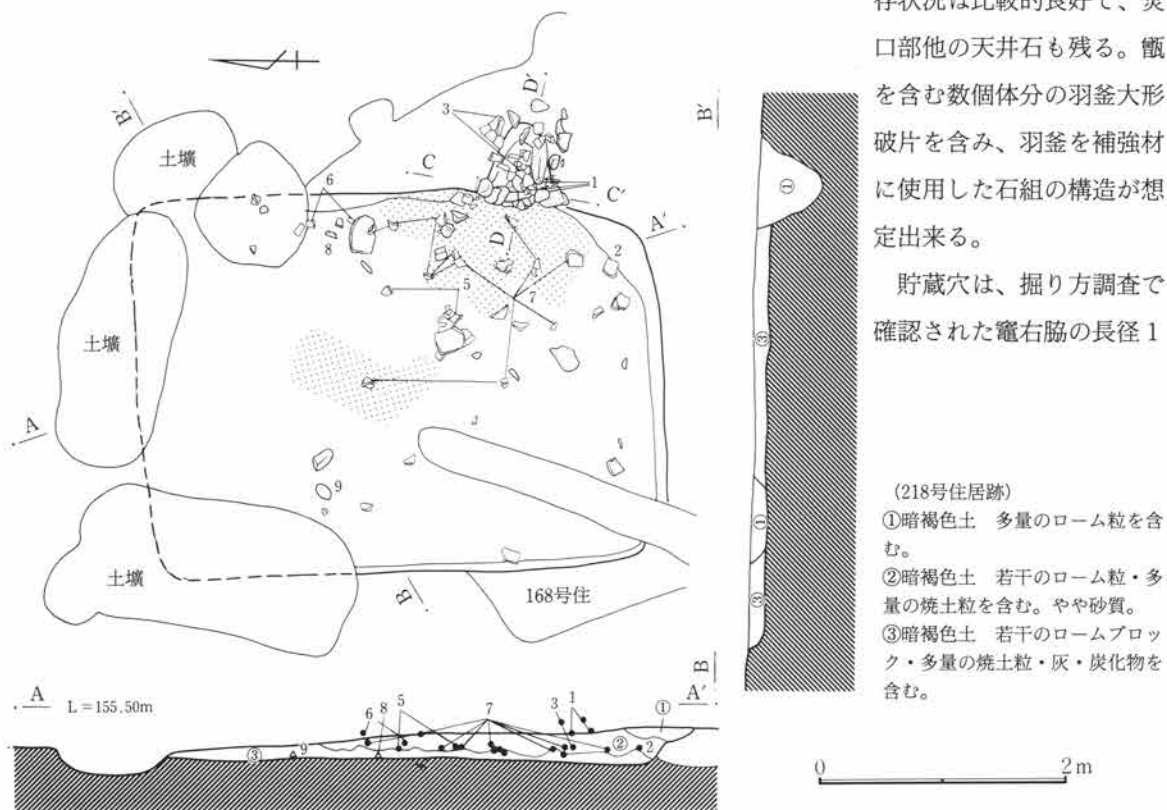
本住居跡は、第4次調査区北西端の平坦面にあり、32-21グリッドに位置する。168号住居跡（古墳）の北半部を切って構築し、耕作溝によって南西隅を、土壌によって北半部を破壊され、痕跡で想定されるのみである。170号住居跡との関係は微妙だが、恐らく切り合っていないだろう。

大半が168号住居跡の覆土中で確認された為、不確定な要素が残るが、平面形は東西3m・南北4m20cmを測る長方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-96°-Eを示す。貼床はあったと思われるが、明確な硬化面としては確認されていない。掘り方も不明瞭で、柱穴・壁溝等は検出されていないが、小規模なピットが五基程確認されている。

竈は、東壁中央南寄りにあり、幅50cm・奥行70cm・深さ24cmを測る。一部原位置でない部材もあるが、残

存状況は比較的良好で、焚口部他の天井石も残る。甕を含む数個体分の羽釜大形破片を含み、羽釜を補強材に使用した石組の構造が想定出来る。

貯蔵穴は、掘り方調査で確認された竈右脇の長径1

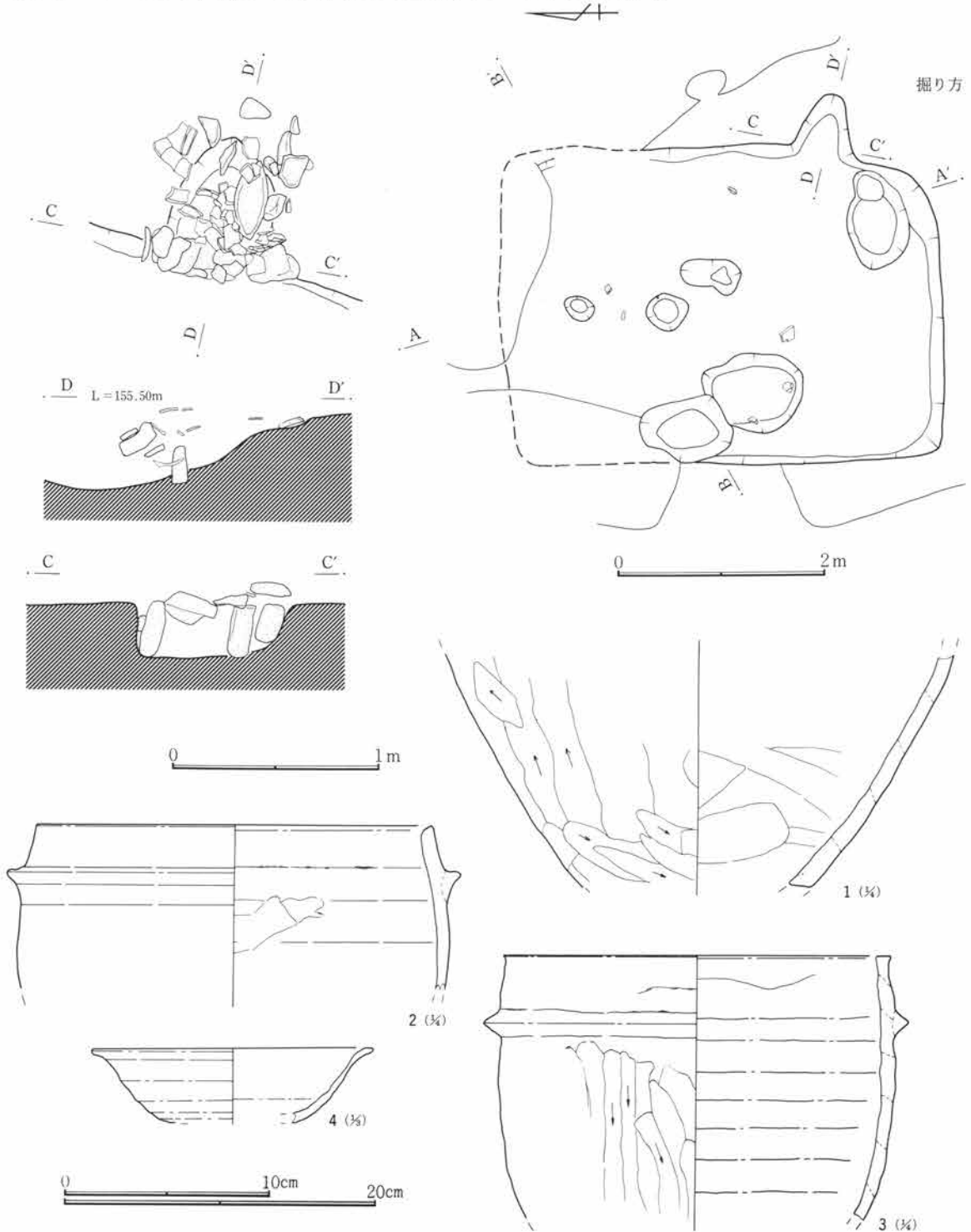


第75図 218号住居跡実測図(1)

m・短径55cm・深さ10cmの楕円形のピットが該当すると思われる。

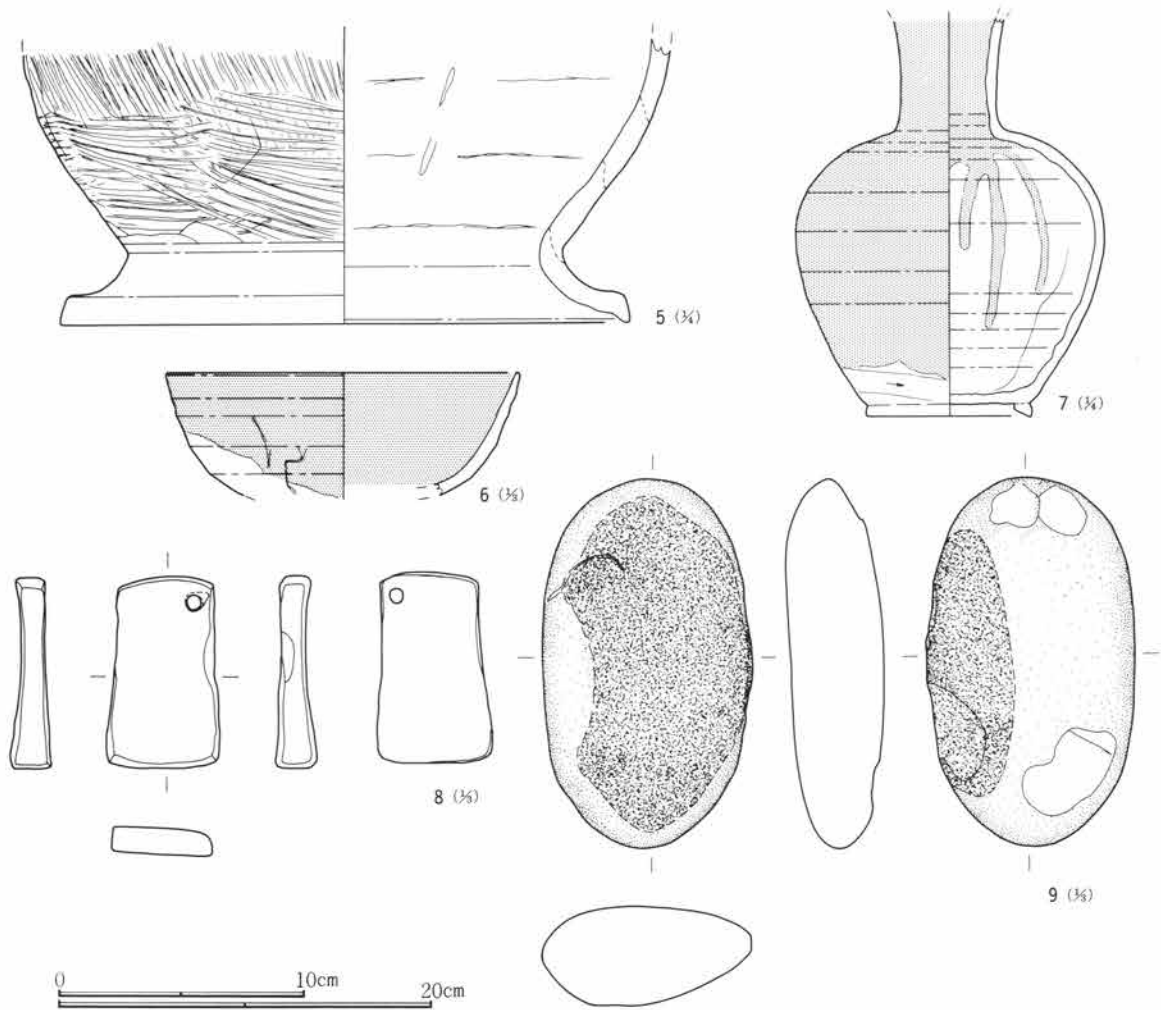
遺物は、竈を中心に床面全体に分布するが、携帯用の砥石や灰釉長頸壺・同壺が注意される程度である。特に灰釉長頸壺については、2分の1程度の接合状況であるが、破損後に火をうけており、破片が剥離状態で破損して、量の割に接合しなかった。あるいは住居そのものが火災を被っているのかもしれない。他に薦編石状の石墨緑泥片岩・絹雲母石墨片岩各1個(計0.4kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(春山)。



第76図 218号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第77図 218号住居跡出土遺物実測図(2)

第31表 218号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
76-1 43	須恵器 羽釜?	竈内+21 1/2残存	口— 底— 高—	①粗、砂・黒色鉾物粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	輪積成形。外面篋削り。内面篋撫で。	
76-2	須恵器 羽釜	床面+12 小破片	口(25.8) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉾物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形ロクロ使用。内面撫で。	
76-3 43	須恵器 羽釜	竈内+10 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色、褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	破損後二次焼成を受ける
76-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.6) 底— 高—	①粗、石英・白色鉾物粒 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	ロクロ成形。	
77-5 43	須恵器 甗	床面+8 1/2残存	口— 底(30.8) 高—	①粗、石英粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色～暗灰色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
77-6 43	灰釉陶器 埴	床面+12 破片	口(14.4) 底— 高—	①普 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	破損後、二次焼成を受ける。虎溪山2号窯式
77-7 43	須恵器 長頸壺	床面+11 1/2残存	口— 底 9.0 高—	①粗、黒色鉾物粒やや多 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	破損後、二次焼成を受ける

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
77-8 57	石製品 砥石	床面+2 完形	長 7.5 厚 1.0 幅 4.0 重 50		中砥。四面使用。	流紋岩
77-9 57	石製品 敲石	床面+4 完形	長 14.5 厚 3.7 幅 8.4 重 700			安山岩。熱を受ける

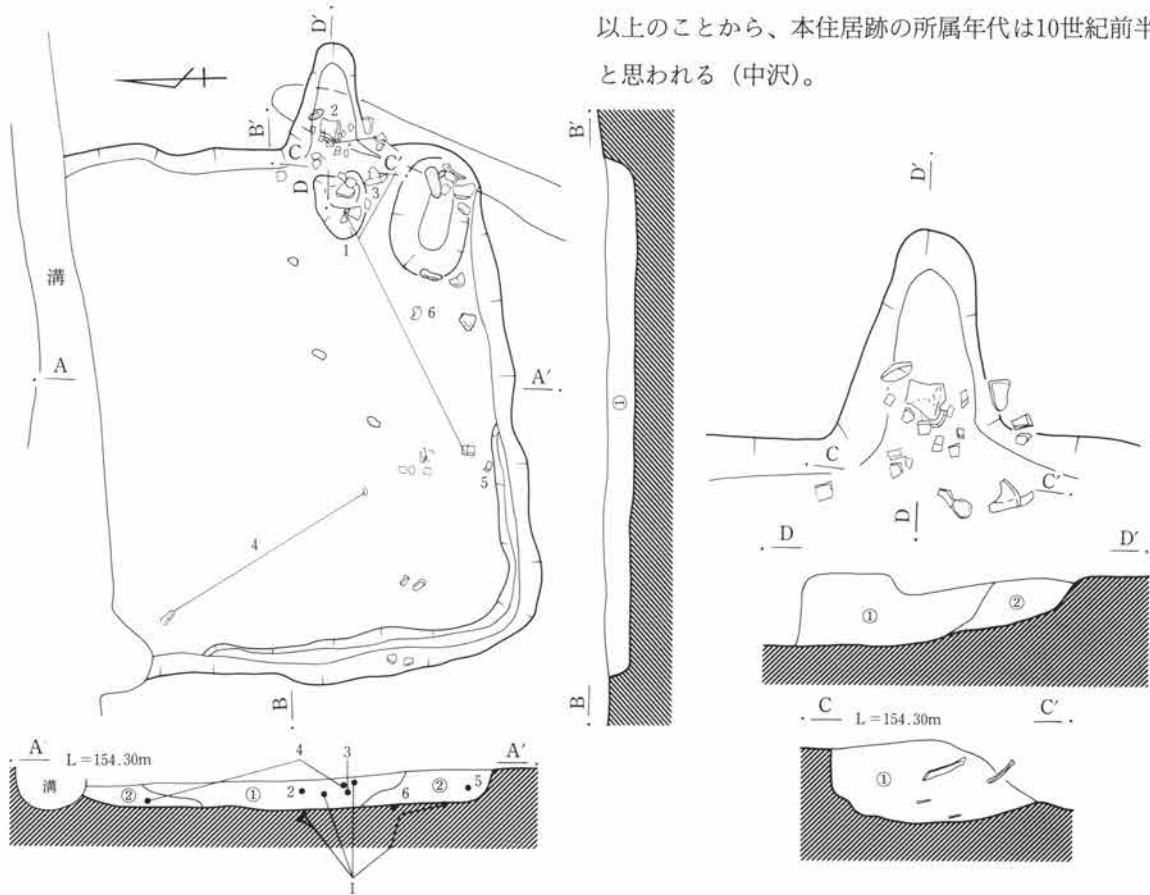
219号住居跡 (第78・79図、第32表、図版16・44)

本住居跡は、第4次調査区北端にあり、29-22グリッドに位置する。耕作等により破壊されるが、北壁は溝とほぼ一致し、平面形は東西4m10cm・南北3m50cmを測る長方形で、主軸方向はN-93°-Eを示すと思われる。貼床は無く、床下の施設もない。南西隅を中心に西壁2m50cm・南壁1m50cmほどの溝が検出されている。

竈は、東壁中央南寄りにあり、幅60cm・奥行1m・深さ30cmを測るが、耕作溝によって破壊され、石組があったかは確認出来ない。貯蔵穴は竈右脇にあり、長径1m・短径60cm・深さ14cmを測る楕円形を呈する。

遺物は竈を中心に分布し、量は少ない。羽釜が見られるが、竈補強材との分別は難しい。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩6個、緑泥片岩2個、凝灰岩1個(計1.11kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。



(219号住居跡)

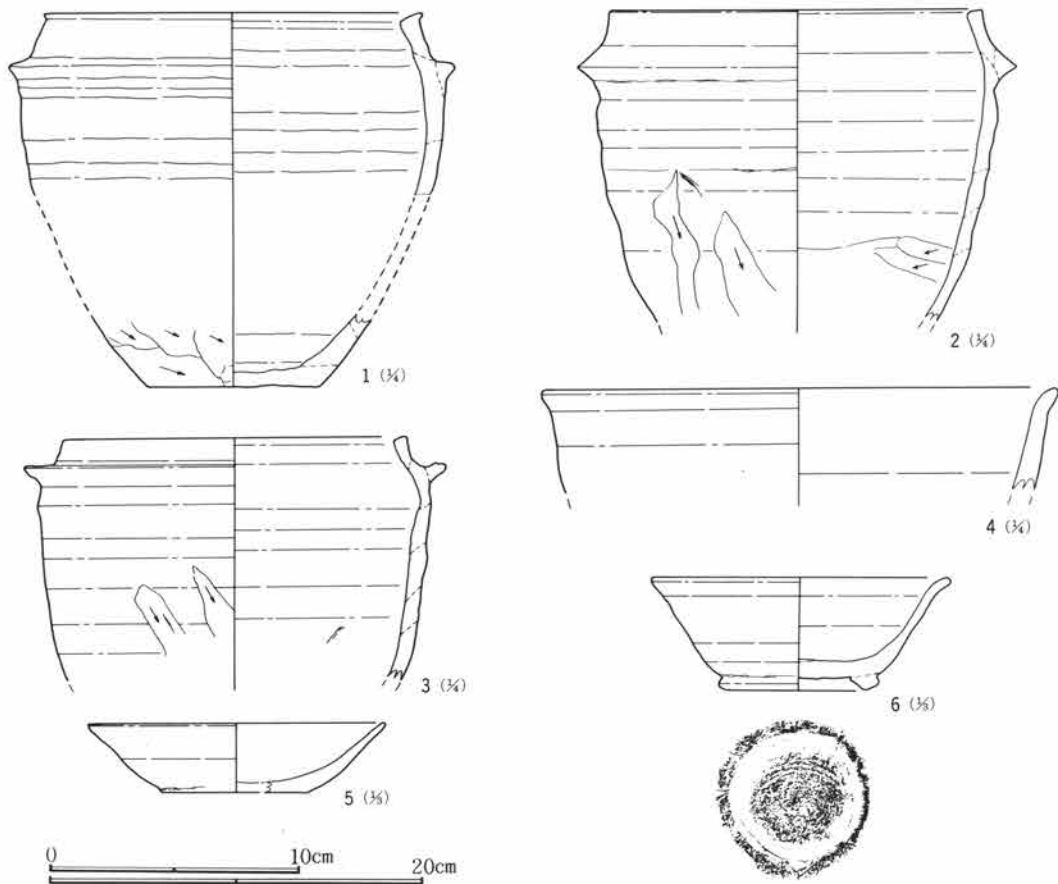
- ①暗褐色土 多量のローム粒を含み、締まりに欠ける。②暗褐色土 多量のロームブロックを含み、締まりに欠ける。
- 竈
- ①暗褐色土 多量のローム粒・微量の焼土粒を含み、締まりに欠ける。②暗褐色土 焼土粒を若干含む。

0 2m

0 1m

第78図 219号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第79図 219号住居跡出土遺物実測図

第32表 219号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
79-1	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口(20.2) 底(9.0) 高(20.0)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③外面暗灰色、内面灰色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	
79-2 44	土師器 羽釜	竈内+13 破片	口(20.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗黄灰色、断面暗灰色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。内面一部撫で。	
79-3 44	須恵器 羽釜	竈内+12 破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄灰色、断面暗灰色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	
79-4	須恵器 土釜	床面+5 小破片	口(27.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。	
79-5	須恵器 坏	床面+10 小破片	口(10.1) 底(6.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③灰褐色	ロクロ成形。	
79-6 44	須恵器 台付坏	床面-2 1/2残存	口 12.0 底 6.4 高 4.4	①粗、白色・灰色鉱物粒少 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色、断面黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

240号住居跡（第80・81図、第33表、図版16・17・44・55・59）

本住居跡は、第4次調査区北端の平坦面にあり、38-22グリッドに位置する。周囲には殆ど住居跡が分布せず、219号住居跡とともに二軒だけ孤立している。

土壌に西壁を切られる他、表土の流失によって北壁も明瞭ではないが、平面形は東西2m80cm・南北3m

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

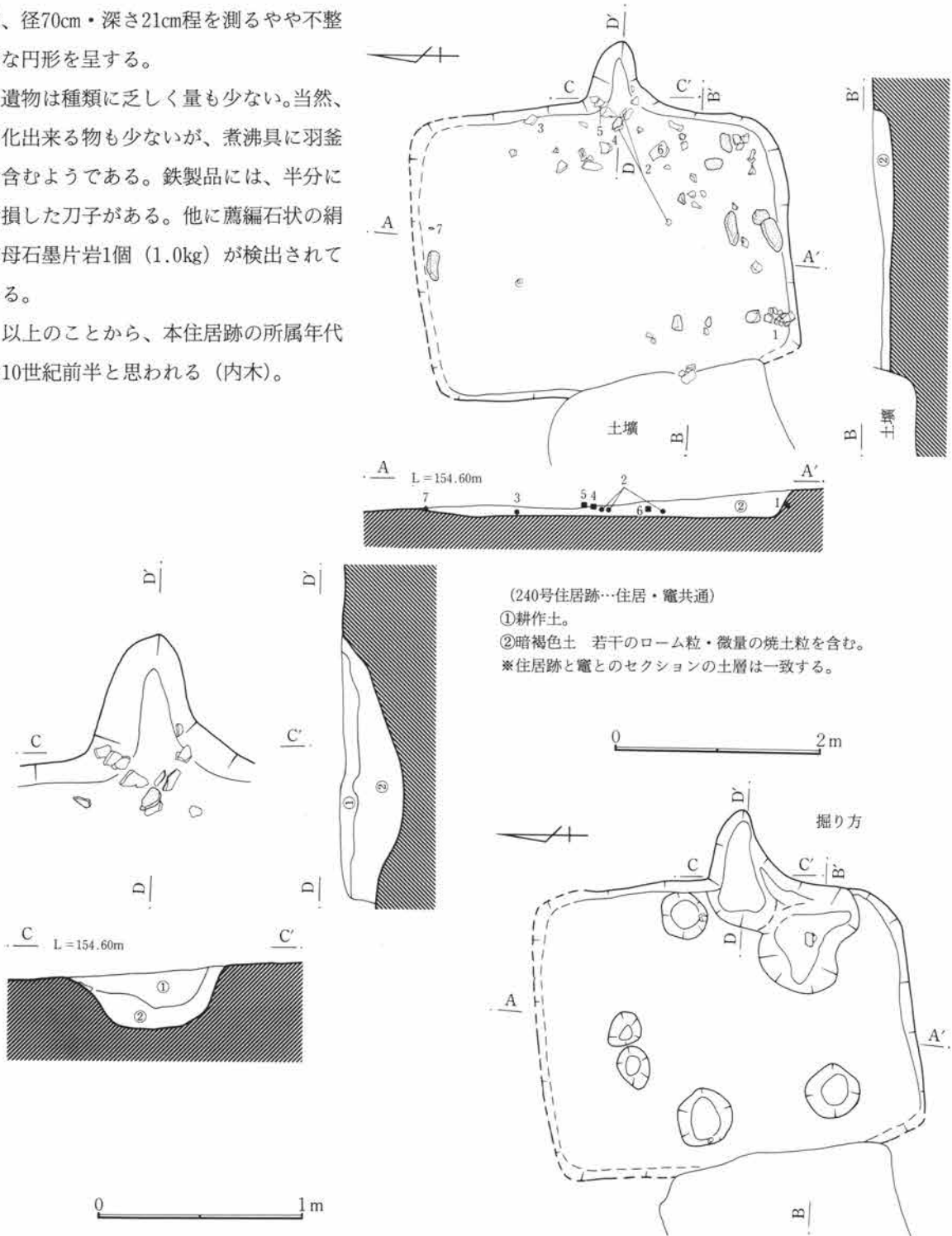
70cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-90°-Eを示す。竈周辺には薄い貼床があり、床下には小規模なピットが五基程認められた。柱穴・壁溝等は検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行70cm・深さ24cmを測る。南壁付近に用材と思われる砂岩が散乱し、羽釜・瓦片も含まれていた。これらを補強材に用いた石組構造であった可能性もある。

貯蔵穴は、掘り方調査で確認された、ほぼ竈に伴う掘り込みに接した右脇のピットが該当すると思われるが、径70cm・深さ21cm程を測るやや不整形な円形を呈する。

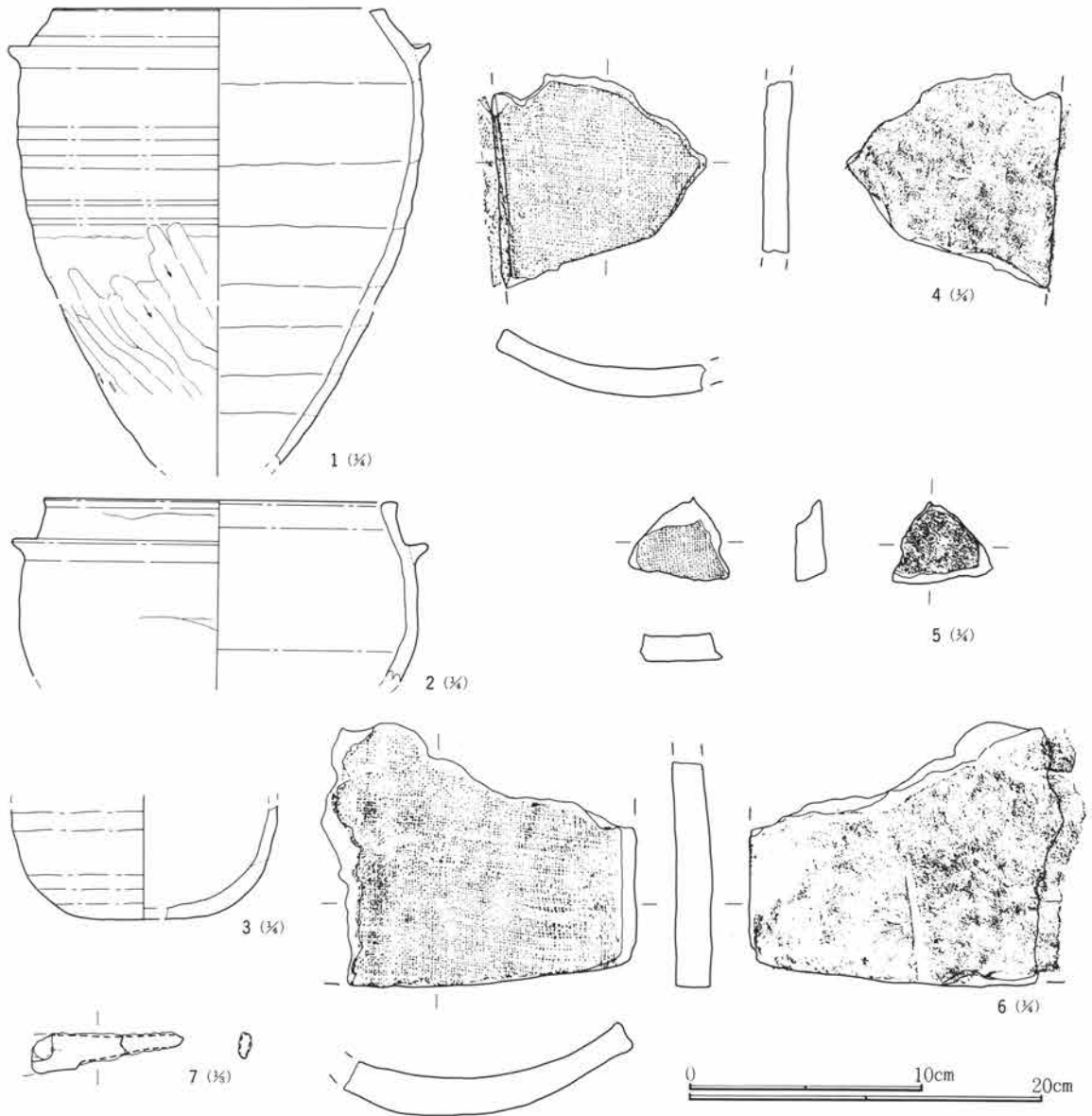
遺物は種類に乏しく量も少ない。当然、図化出来る物も少ないが、煮沸具に羽釜を含むようである。鉄製品には、半分に折損した刀子がある。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩1個(1.0kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(内木)。



第80図 240号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第81図 240号住居跡出土遺物実測図

第33表 240号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
81-1 44	須恵器 羽釜	床面+12 %残存	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂・黒色鉾物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰オリーブ色	輪積成形でロクロ使用。外面下半部削り。	
81-2 44	須恵器 羽釜	床面+5 破片	口(20.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	輪積成形でロクロ使用。	
81-3	土師器 鉢	床面+3 破片	口— 底— 高—	①粗、砂・黒色鉾物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。	
81-4 55	平瓦	床面+6 破片	長— 幅— 厚(1.5)	①粗、石英粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色、断面暗灰色	一枚造り。側端面取り1。	5、6同一個体か

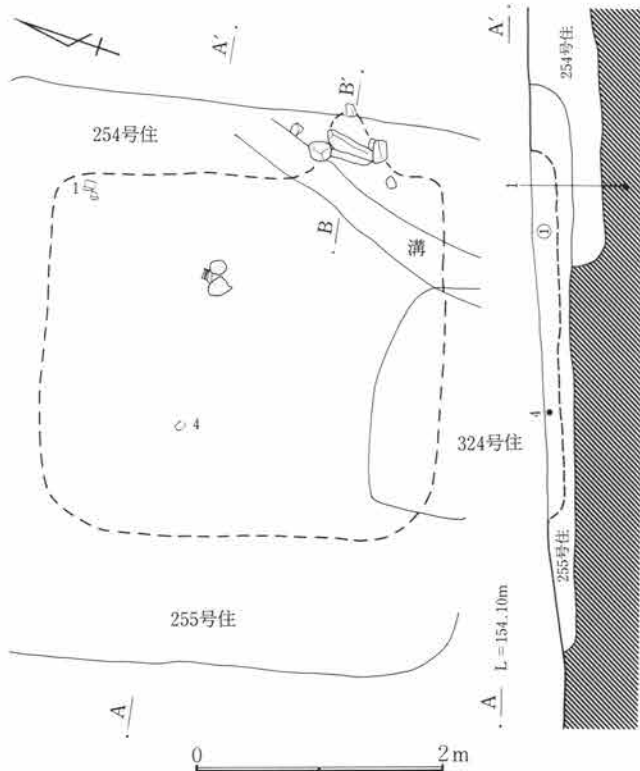
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
81-5 55	平瓦	竈内+10 小破片	長 — 幅 — 厚 (1.4)	①粗、石英粒少 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	一枚造りか。	
81-6 55	平瓦	床面+6 破片	長 — 幅 — 厚 (2.1)	①粗、石英粒少 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色、断面暗灰色	一枚造り。側端面取り1。	
81-7 59	鉄製品	床面直上	長 (6.4) 厚 (0.4) 幅 (0.9) 重 (7.8)			

249号住居跡 (第82・83図、第34表、図版17・44・59)

本住居跡は、第4次調査区西寄りの平坦面にあり、29-19グリッドに位置する。本住居跡以南では同時期の住居跡がやや集中しているが、以北では同様の地形条件であるにも拘わらず分布密度が低く、空地のような状態が見られる。切り合い関係は、254号住居跡(奈良)・255号住居跡(古墳)の覆土中に構築され、恐らく324号住居跡(平安)によって南壁を切られている。更に南北方向の耕作溝によって、竈脇から南壁にかけて破壊されている。

245・255号住居跡調査中に検出され、完全に覆土中に構築されている為、十分な情報が無いが、土層観察等から、平面形は東西3m10cm・南北3m20cm程度を測る正方形を呈するものと思われる。竈から想定される主軸方向はN-74°-Eを示す。貼床はあったかもしれないが不詳で、少なくとも顕著な硬化面を形成する程ではなかった。掘り方についても覆土中にかなり明瞭ではない。従って、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設の存在もわからない。

竈は東壁(恐らくやや南寄り)にあり、幅60cm・奥行60cmを測るが、火床面を抜いてしまった為に深さの



詳細はわからない。両袖石と焚口部を含む天井石の一部が明瞭に残存するところから判断して、30cm程度の深さを持っていたと思われる。竈中には数個体と思われる羽釜破片が検出されているが、補強材に利用されているものと思われる。

遺物は極めて少なく、図化出来た物もあまり無い。覆土中出土の須恵器蓋・土師器坏は、平安時代の所産とするには問題が多く、先行する254・255号住居跡からの流れ込みであろう。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩1個(0.4kg)が検出されている。

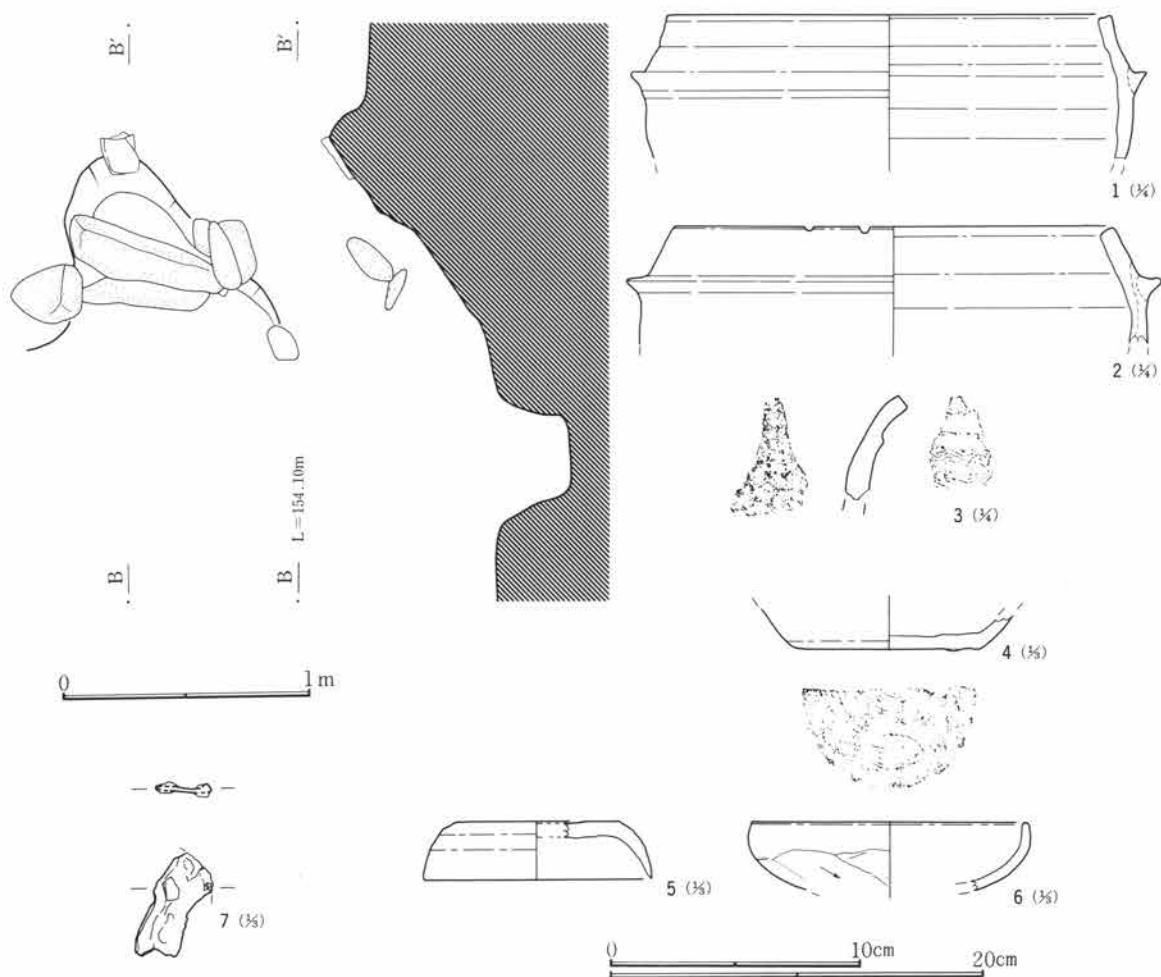
遺構・遺物の様相から、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(内木)。

(249号住居跡)

①暗褐色土 多量の白色細粒、若干の焼土粒・炭化物粒を含む。

第82図 249号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第83図 249号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第34表 249号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
83-1 44	須恵器 羽釜	床面-50 小破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	粘土の付着あり
83-2	須恵器 羽釜	覆土 小破片	口(23.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	口辺に刻み2箇所あり
83-3	須恵器 大甕	覆土 小破片	口— 底— 高—	①普、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	外面に波状紋。	
83-4	須恵器 坏	床面+6 破片	口— 底(7.6) 高—	①細、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
83-5	須恵器 蓋	覆土 小破片	摘— 口(6.6) 高(2.3)	①粗、白色鉱物粒やや多 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。頂部回転篋削り。	
83-6	須恵器 坏	覆土 小破片	口(11.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黒褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
83-7 59	鉄製品 鎌(?)	覆土	長— 厚— 幅—	重(6.8)		

257号住居跡（第84図、第35表、図版17・44）

本住居跡は、第4次調査区西寄りの平坦面にあり、30-16グリッドに位置する。周辺の同時期の住居跡は、本住居跡以南には認められるが、以北では空地状態になっている。254号住居跡（奈良）の竈付近の覆土を切っ
て構築され、耕作溝によって西端を壊されている。確認段階で既に床面以下が露出するような状態で、覆土
の大半が流失し、傾斜面に掘り込まれた竈を含む北半部分の壁のみ痕跡状態で残存するが、全体の大きさ自
体も本来小規模なものであったろう。

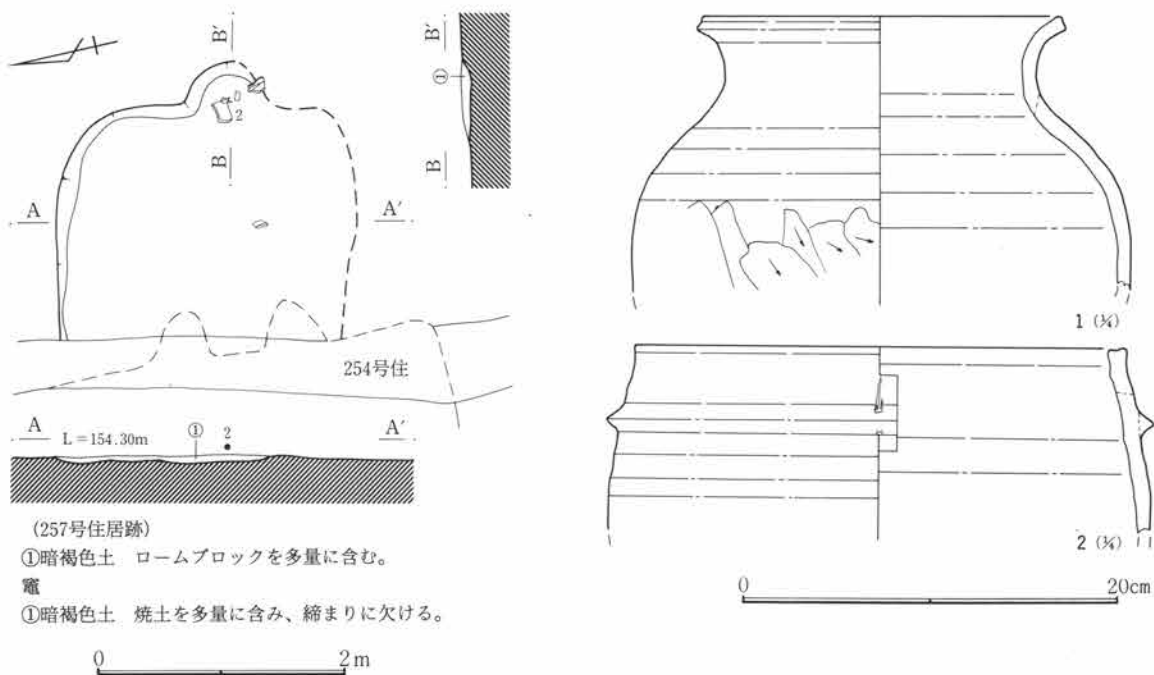
竈及び残存する東壁から想定される主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は、ローム（地山）を叩き締めていると思われ、掘り方は基本的に認められず、貯蔵穴・柱穴・壁溝
等の付属施設も検出されていない。

竈は、東壁中央付近にあると思われ、半壊状態の為断定は出来ないが、幅60cm・奥行40cmを測ると思われ
る。石組等を推定させる石材の検出も絶無であった。

遺物は、竈内部を中心に分布するが、総量は極めて少ない。坏類は無く、煮沸形態の羽釜・土釜のみ図化
出来たが、竈の補強材であったと思われる。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（内木）。



第84図 257号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第35表 257号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
84-1 44	須恵器 甕	覆土 破片	口(19.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋削り。	
84-2	須恵器 羽釜	竈内+5 破片	口(26.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄橙色	輪積成形でロクロ使用。	罫に穿孔(未貫通)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

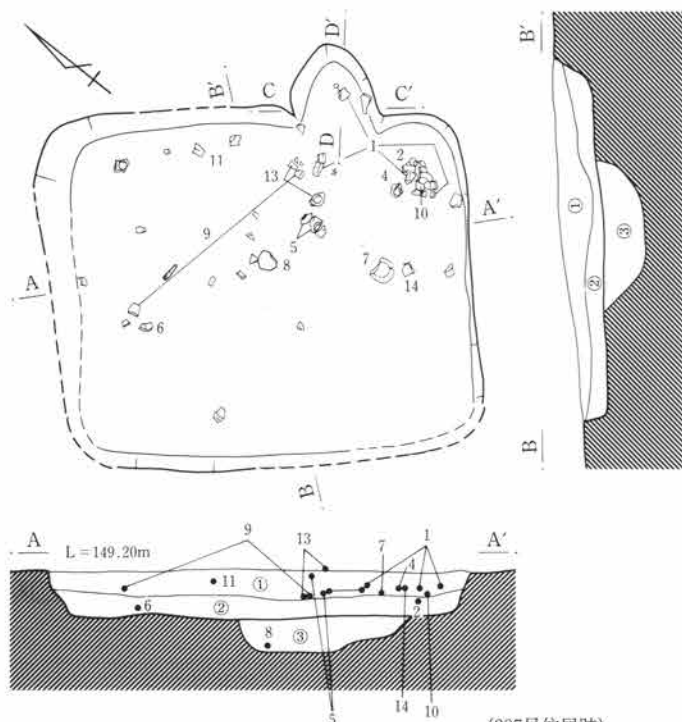
287号住居跡 (第85・86図、第36表、図版17・44)

本住居跡は、第5次調査区中央の埋没谷に面する緩斜面にあり、26—17グリッドに位置する。周囲には、主軸方向のほぼ一致する近接した時期の住居跡が、等高線に直交するように東西方向に階段状に連なり、かなり密集した状況を示している。344号住居跡 (古墳) の北壁を切って構築され、平面形は東西2 m90cm・南北3 m45cmを測る長方形を呈する。

北3 m45cmを測る長方形を呈する。

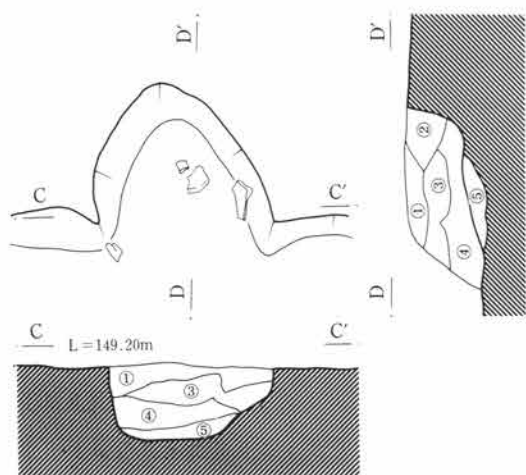
主軸方向はN-47°-Eを示す。住居中央を中心に貼床が認められ、掘り方には、西壁に沿って大きな掘り込みが認められた他、時期差のある竈前のピット二基が検出されたが、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属する施設については明瞭には検出されなかった。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行65cm・深さ30cmを測る。覆土の状態の割に残存状態は不良で、構築材と見られるものが殆ど検出されていない。



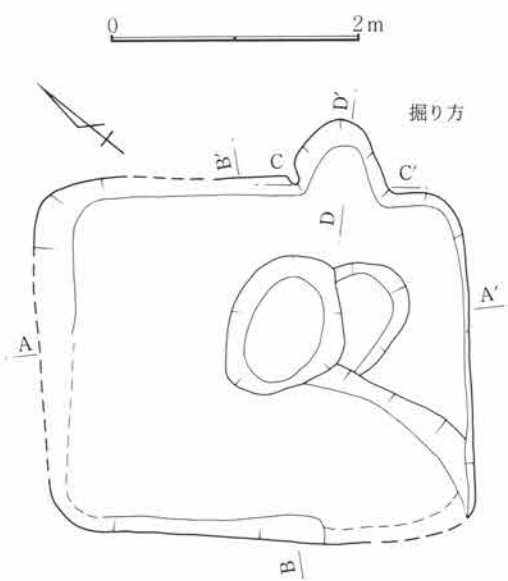
(287号住居跡)

- ①暗褐色土 灰白色軽石 (~3mm), 焼土粒 (~7mm), 炭化物粒 (~3mm) を含む。
- ②暗褐色土 ローム粒 (~1cm), 焼土粒 (~3mm), 炭化物粒 (~2mm) を多く含む。
- ③黒褐色土 5mm内外の焼土ブロックを多く含む。



竈

- ①黒色土 1mm内外の白色軽石粒を多く含む。
- ②暗褐色土 2~3mmのロームブロックとローム粒を含む。
- ③黒褐色土 ローム粒を多く、焼土粒を少量含む。
- ④黒褐色土 多くのローム粒・焼土粒を含む。
- ⑤赤褐色土 ローム粒と焼土粒を多量に含む。

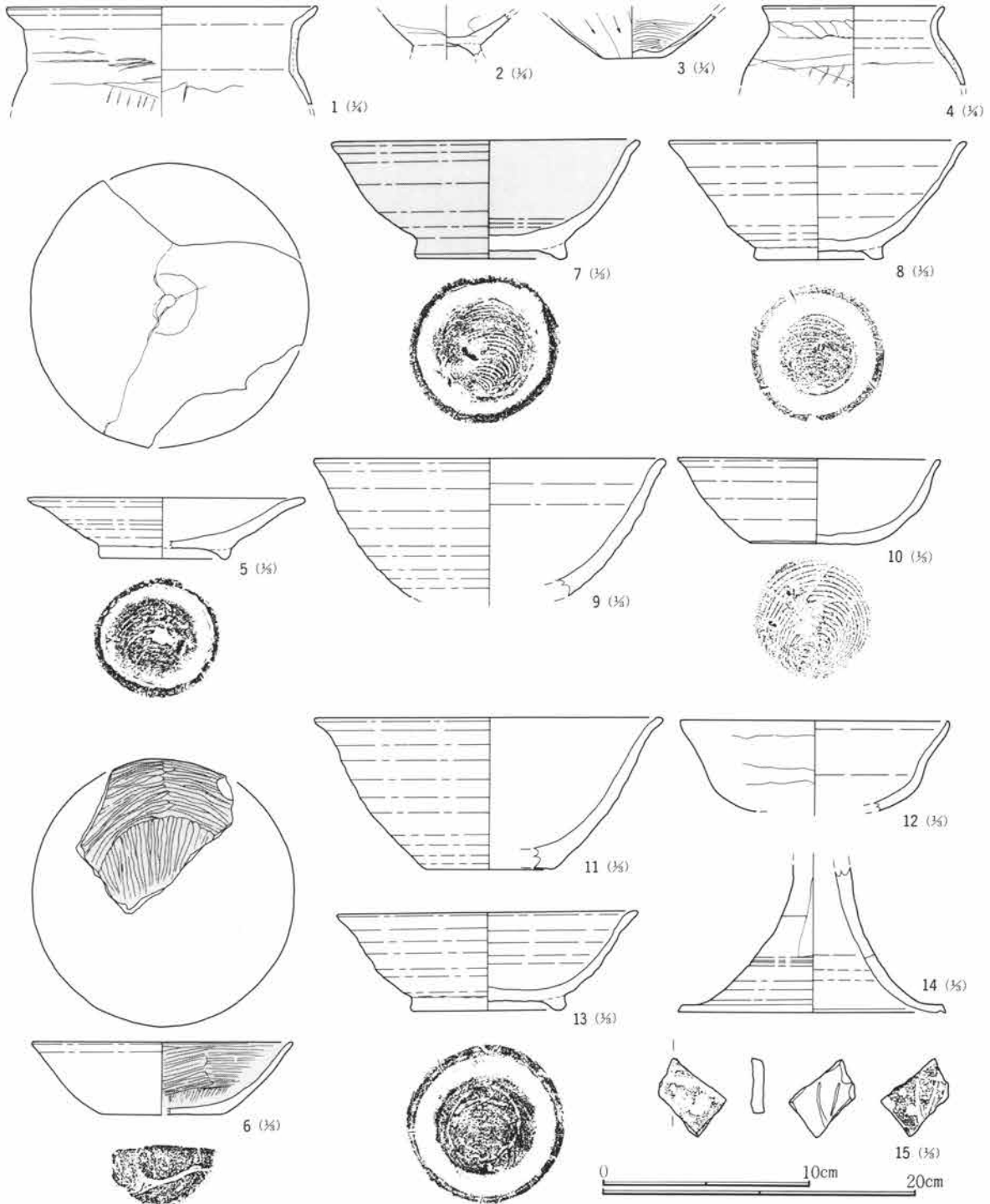


第85図 287号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

遺物は、竈周辺にやや集中するものの、全体量はやや少ない。そうした中では、坏類が個体数も種類もやや多く、煮沸具に羽釜を含まないようである。個体の残存率は概して低いが、やや特徴的な物が含まれている。例えば、須恵器皿の中に中央に意図的に穿孔した為に破損したとみられるものがあった。更に、須恵器小壺の頸部かと思われる小破片に、模様なのか文字なのかは判然としないが線刻を伴う物があった。また、胴部に稜を持つ土師器や須恵器高坏脚部については、重複住居跡からの混入品であろう。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（春山）。



第86図 287号住居跡出土遺物実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

第36表 287号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
86-1	土師器 甕	床面+18 破片	口 20.1 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
86-2	土師器 高台付甕	床面+10 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
86-3	土師器 甕	覆土 破片	口 — 底 4.0 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰 ③暗褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
86-4	土師器 小型甕	床面+20 小破片	口(11.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
86-5 44	須恵器 高台付皿	床面+15 1/2残存	口(13.4) 底 6.1 高 2.9	①粗、雲母・石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③にぶい浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	底部に内→外へ 穿孔
86-6	須恵器 坏	床面+4 1/2残存	口(12.6) 底(5.8) 高 3.4	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③外面にぶい橙色、内面黒色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	内面黒色処理
86-7 44	須恵器 高台付埴	床面+15 1/2残存	口 14.8 底 7.1 高 5.6	①粗、雲母・石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③黒色、断面黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	内、外面黒色処 理
86-8 44	須恵器 高台付埴	床面-20 1/2残存	口 14.4 底 5.9 高 5.6	①粗、雲母少・褐色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
86-9	須恵器 埴	床面+15 1/2残存	口(17.0) 底 — 高 —	①粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
86-10 44	須恵器 坏	床面+15 1/2残存	口 12.7 底 5.9 高 4.1	①粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色、断面灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	ゆがみが大
86-11	須恵器 埴	床面+28 1/2残存	口(16.8) 底(6.0) 高 7.2	①粗、黒色鈹物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形。	
86-12	土師器 坏	覆土 破片	口(12.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	磨耗がすすむ
86-13 44	須恵器 高台付埴	床面+14 1/2残存	口(14.6) 底 7.2 高 4.6	①粗、雲母・石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
86-14	須恵器 高坏	床面+21 破片	口 — 底(13.0) 高 —	①普、白色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	ロクロ成形後、外→内に長方形の透しを穿孔。	
86-15	須恵器 壺	覆土 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、褐色鈹物粒 ②還元焰 ③灰色、断面黄灰色	ロクロ成形。	内面に線刻あり

288号住居跡（第87図、第37表、図版18・44）

本住居跡は、第5次調査区中央の埋没谷に面する緩斜面にあり、27-7グリッドに位置する。西側を中心に近い時期の住居跡が集中しているが、東側にはそうしたものの密度が疎で、本住居跡の存続期にはやや大きな空地状態を呈していたと思われる。切り合い関係では、341号住居跡（奈良）・286号住居跡（奈良）の覆土を切って構築されている。

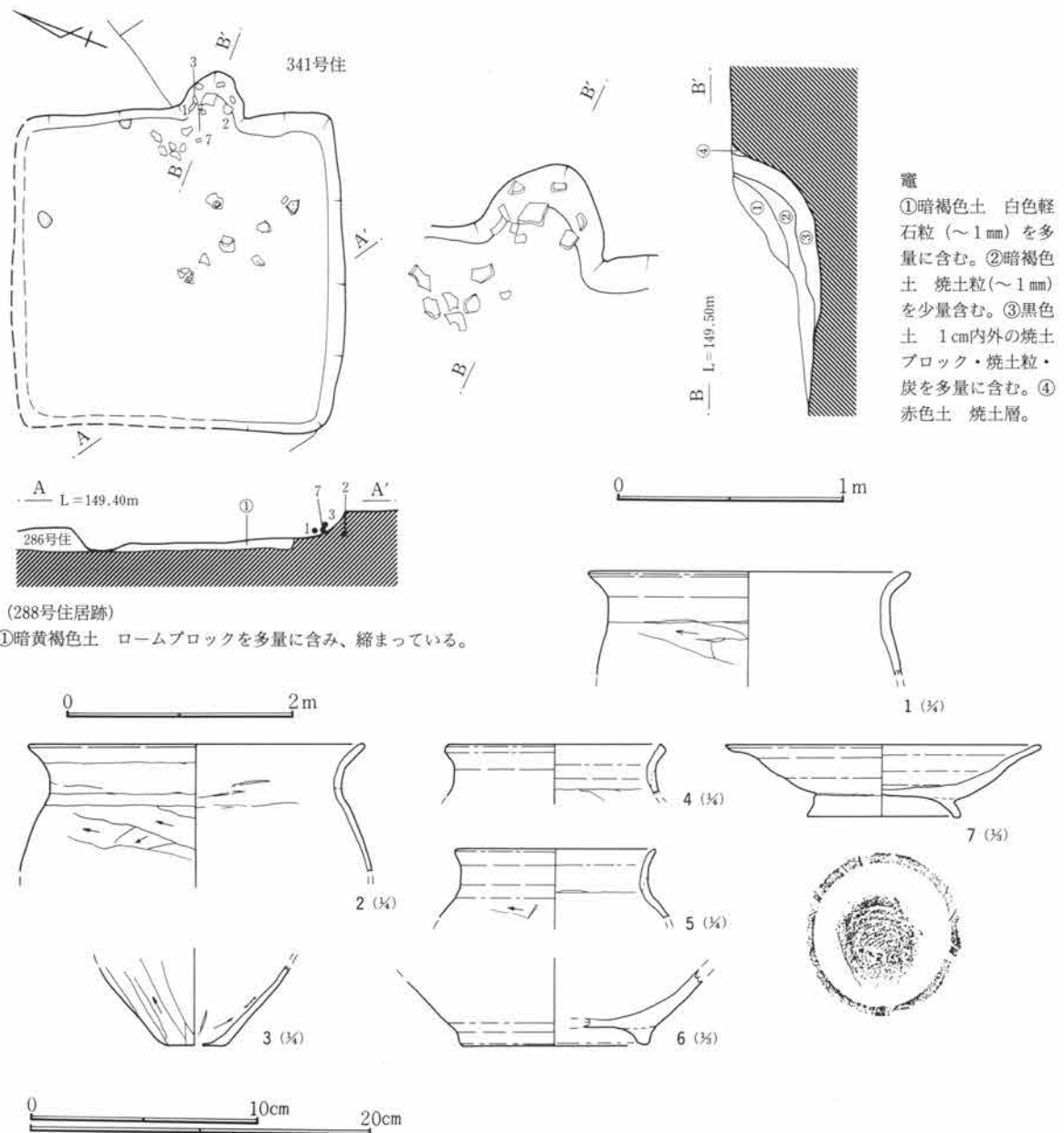
両住居跡の調査中に検出された為に、地山を掘り込んでいる場所以外ではやや不確定な要素もあるが、平面形は東西2m75cm・南北2m90cmを測る正方形を呈するものと思われる。竈の位置から想定される主軸方

向はN-75°-Eを示す。大半が覆土中になる為、顕著な貼床の存在は明瞭ではないが、本来無かったと思われる。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設も検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあったと思われる、幅50cm・奥行50cm・深さ30cmを測る。内部にコ字状口縁土師器甕の破片が僅かに残されていたが、全体として量が少なく、本住居跡で使用されていたのか、煙道に転用されていたのかは判然としない。石組等の形跡も殆ど認められず、竈自体の残存状況も不良で、原型は判然としない。

遺物は、竈内部とその付近から出土しているが、概して、種類は乏しく残存率も低い。坏類は破片も少なく、大小数種あってやや種類の多い煮沸具には羽釜を含まないようである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(春山)。



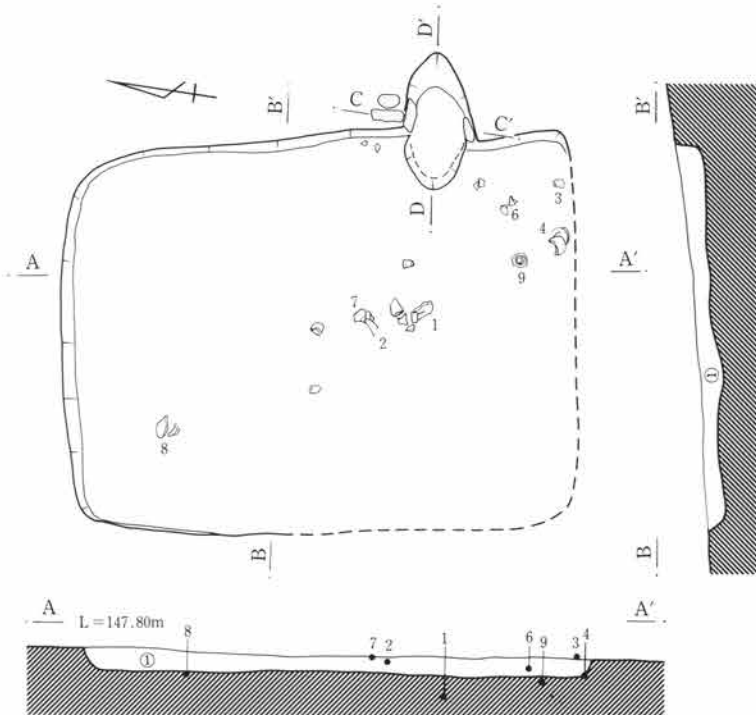
第87図 288号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第37表 288号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
87-1	土師器 甕	竈内+5 小破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
87-2	土師器 甕	竈内+1 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
87-3	土師器 甕	竈内+5 小破片	口— 底(3.6) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
87-4	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(13.0) 底— 高—	①粗、砂粒少 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。	
87-5	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(12.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
87-6	須恵器 高台付埴	覆土 小破片	口— 底(8.4) 高—	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
87-7 44	須恵器 高台付坏	竈内+8 1/2残存	口(13.9) 底6.7 高3.1	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り、高台貼付。	

289号住居跡 (第88~90図、第38表、図版18・44)

本住居跡は、第五次調査区中央の埋没谷に面した南傾斜面にあり、26-6グリッドに単独で位置する。本住居跡以北には、等高線がやや混んでいるにも拘わらず、時期の近接した住居跡が集中して存在する。一方、以南では比較的平坦な地形であるが分布密度が極めて低く、かなり広い空地状態を呈していたものと思われる。湧水の見られる埋没谷が存在する事や、矢田遺跡ではやや大型に属する掘立柱建物跡二棟が存在し、施設の種類による集落内部での立地の違いが関係するのかもしれない。



施設の種類による集落内部での立地の違いが関係するのかもしれない。

表土の流失により、南壁から西壁の半分程度迄が痕跡状態であるが、残存する部分から見て、平面形は東西3m15cm・南北4m15cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-80°-Eを示す。床面はやや軟弱だが、竈前を中心に薄く貼床

(289号住居跡)

①黒褐色土 1mm内外の白色軽石粒と焼土粒を含む。

0 2m

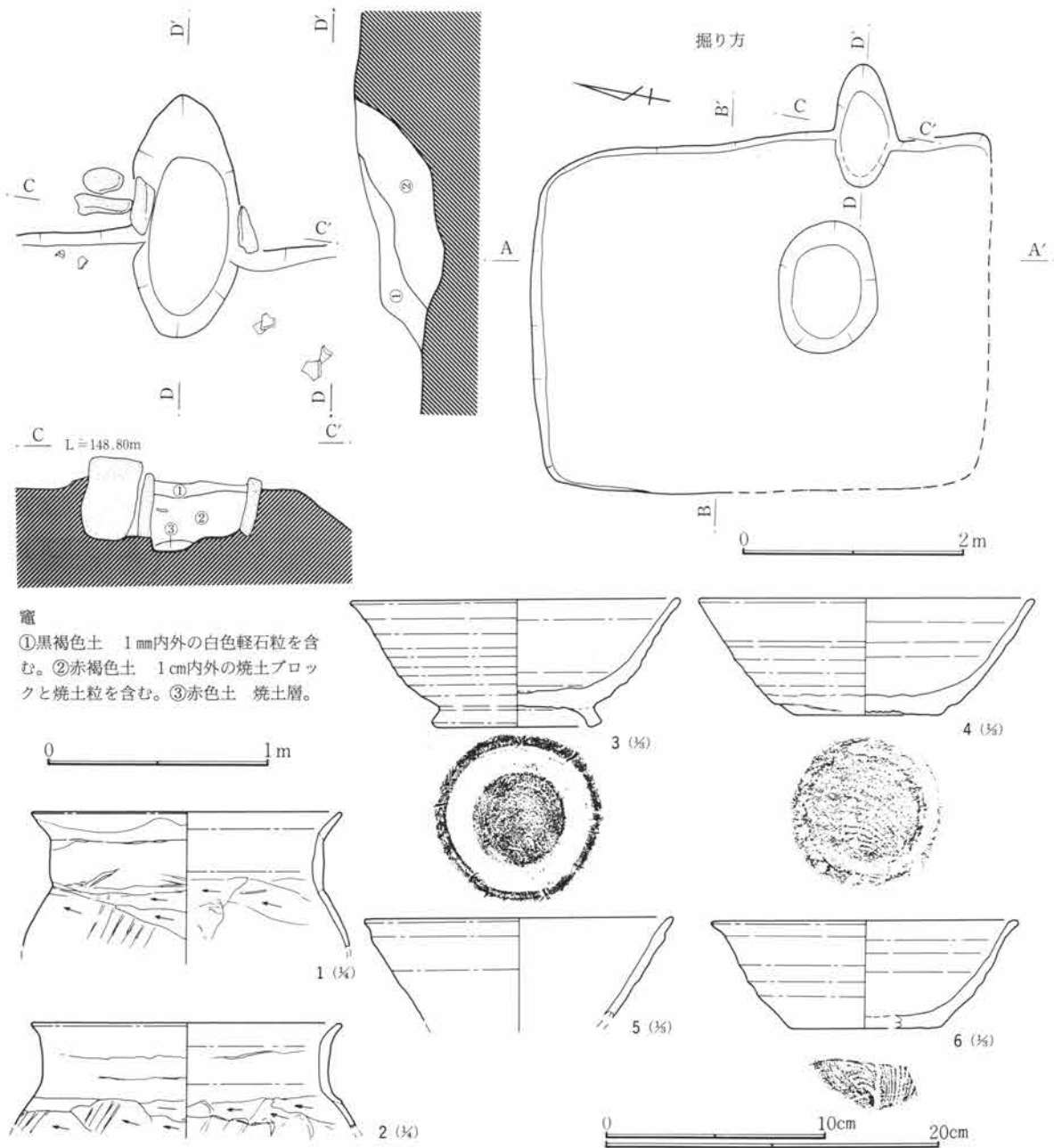
第88図 289号住居跡実測図(1)

を施しており、掘り方調査によって竈前のピットが検出されている。貯蔵穴・柱穴・壁溝等については検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行き60cm・深さ30cmを測る。覆土の状態の割に遺存状態は不良だが、燃焼部に若干の掘り込みを伴う。地山に据え付けられた両袖の砂岩板石が検出されているが、主軸方向とややズレがある。特に左袖については、同大の板石を立て掛ける形で支えに補強しており、補修して利用を重ねていた可能性がある。

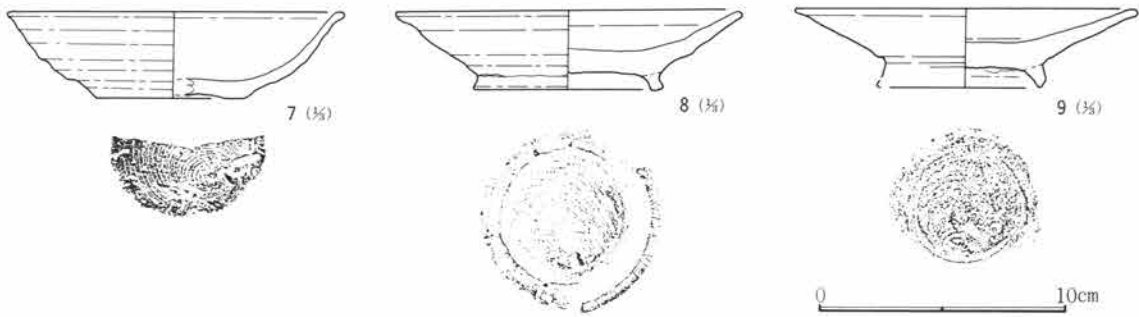
遺物は竈付近に薄く分布するが、種類は乏しく個体の残存率もやや低い。皿を含む坏類がやや多く認められるが、僅かに残る煮沸具の破片はいずれもコ字口縁土師器甕で、羽釜は全く含まないようである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（春山）。



第89図 289号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第90図 289号住居跡出土遺物実測図(2)

第38表 289号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
89-1	土師器 甕	床面-15 破片	口(18.8) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
89-2	土師器 甕	床面+8 破片	口(19.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
89-3 44	須恵器 高台付埴	床面+12 ほぼ完形	口(15.0) 底(7.6) 高(5.7)	①やや粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
89-4 44	須恵器 高台付埴	床面直上 %残存	口(15.2) 底(6.6) 高(5.1)	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色、底部内面に黒斑	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台剥離
89-5	須恵器 埴	覆土 破片	口(14.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黒色処理、断面暗灰色	ロクロ成形。	
89-6	須恵器 坏	床面+4 破片	口(14.0) 底(6.6) 高(4.8)	①粗、褐色鉱物細粒少量 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
90-7 44	須恵器 坏	床面+10 %残存	口(13.4) 底(5.8) 高3.4	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
90-8 44	須恵器 台付皿	床面-3 %残存	口(14.0) 底(7.8) 高3.1	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
90-9 44	須恵器 台付皿	床面-2 %残存	口14.0 底7.2 高3.1	①粗 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

290号住居跡（第91・92図、第39表、図版19・45）

本住居跡は、第5次調査区中央西端の南向きの緩斜面にあり、25-4・5グリッドに単独で位置する。階段状に分布する、時期の比較的近接する一連の住居跡群の、下から二軒目になる。

平面形は東西3m10cm・南北4m10cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-72°-Eを示すと思われる。床面は、ローム（地山）を叩き締めており、基本的に貼床は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設も無いようである。

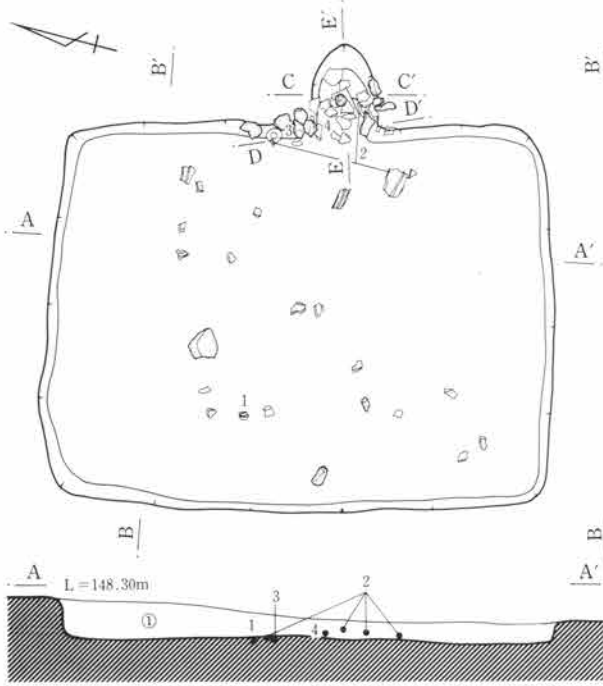
竈は、東壁ほぼ中央にあり、幅50cm・奥行70cm・深さ22cmを測る。両袖石・支脚は残るが、天井石の残存は全く無い。周辺には竈用材と考えられる破損した石材がかなり散乱しており、竈自体の残存状況はやや不良である。袖石には板状の砂岩を利用している他、燃焼部を限る右側の一石も残存するが、それに対応する位置には石材が残らない。竈内部には接合しない羽釜の破片が多く認められ、補強材に羽釜の破片を用いた

石組竈が想定出来る。

遺物は、竈内部を中心に分布し、一部床面にも及ぶが、全体量は少なく残存率も低い。煮沸具には羽釜を含むと思われるが、上記の様に補強材の可能性も強く、本住居跡での使用を確認出来る物は確認されていない。本住居跡出土の羽釜には、器高の高低によって二種あるが、特に底部を篋磨きする器高の低いものにつ

いては、今回報告分では唯一のものである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（春山）。



(290号住居跡)

①黒色土 灰白色軽石粒（～5mm）を多量に含み焼土粒を少量含む。

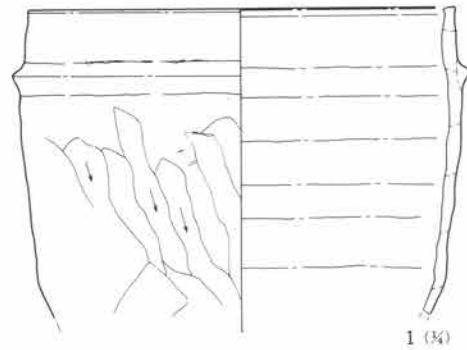
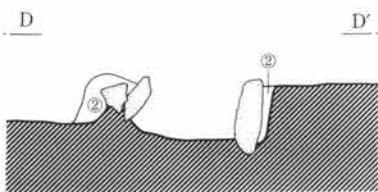
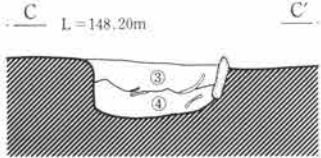
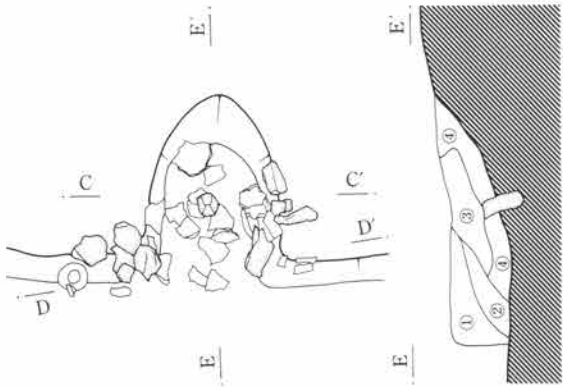
竈

①暗褐色土 ローム粒・焼土ブロックを少量含む。

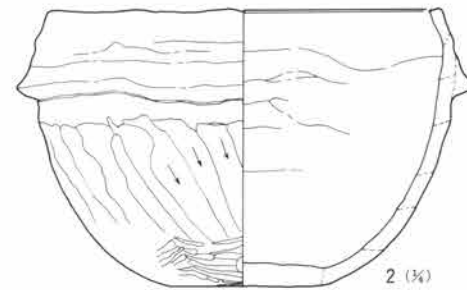
②暗褐色土 ①層に近いが焼土ブロックの含有が少ない。

③暗褐色土 灰白色粘質ブロック・灰白色粘質粒・焼土粒を多量に含む。

④赤色土 焼土層。



1 (34)

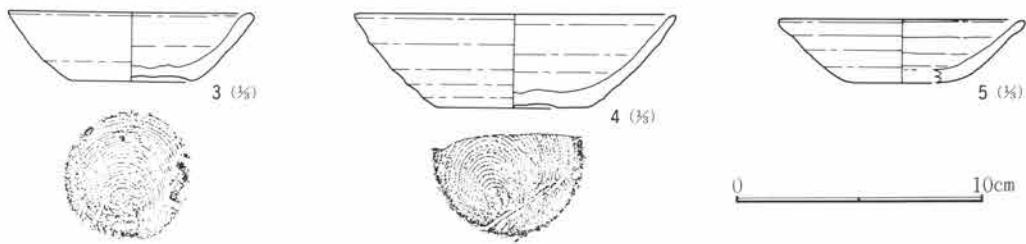


2 (34)



第91図 290号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第92図 290号住居跡出土遺物実測図(2)

第39表 290号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
91-1	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③灰褐色	輪積成形でロクロを使用。外面篋削り。	
91-2 45	須恵器 羽釜	床面+2 1/2残存	口(21.0) 底 8.6 高 14.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗黄褐色体部下半は黒変	輪積成形でロクロを使用。外面下半篋削り。底部磨き。内面撫で。	
92-3 45	土師器 坏	床面-2 ほぼ完形	口 9.9 底 5.0 高 2.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
92-4 45	須恵器 坏	竈内+4 1/2残存	口(13.0) 底 6.0 高 3.7	①粗、黒色・灰色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
92-5	須恵器 坏	覆土 1/4残存	口(10.0) 底(4.0) 高 2.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	ロクロ成形。	

292号住居跡（第93・94図、第40表、図版20・45・56）

本住居跡は、第5次調査区中央最西端の緩斜面にあり、25-3・4グリッドに単独で位置する。周辺に集中している、比較的時期の近接した一連の住居跡の中では、最も低位に位置する。表土が流失した上、斜面上部からの暗褐色土の流出土に覆われ、確認困難であったが、地山への掘り込み自体はかなりしっかりしており、土層も自然堆積状態を示していた。

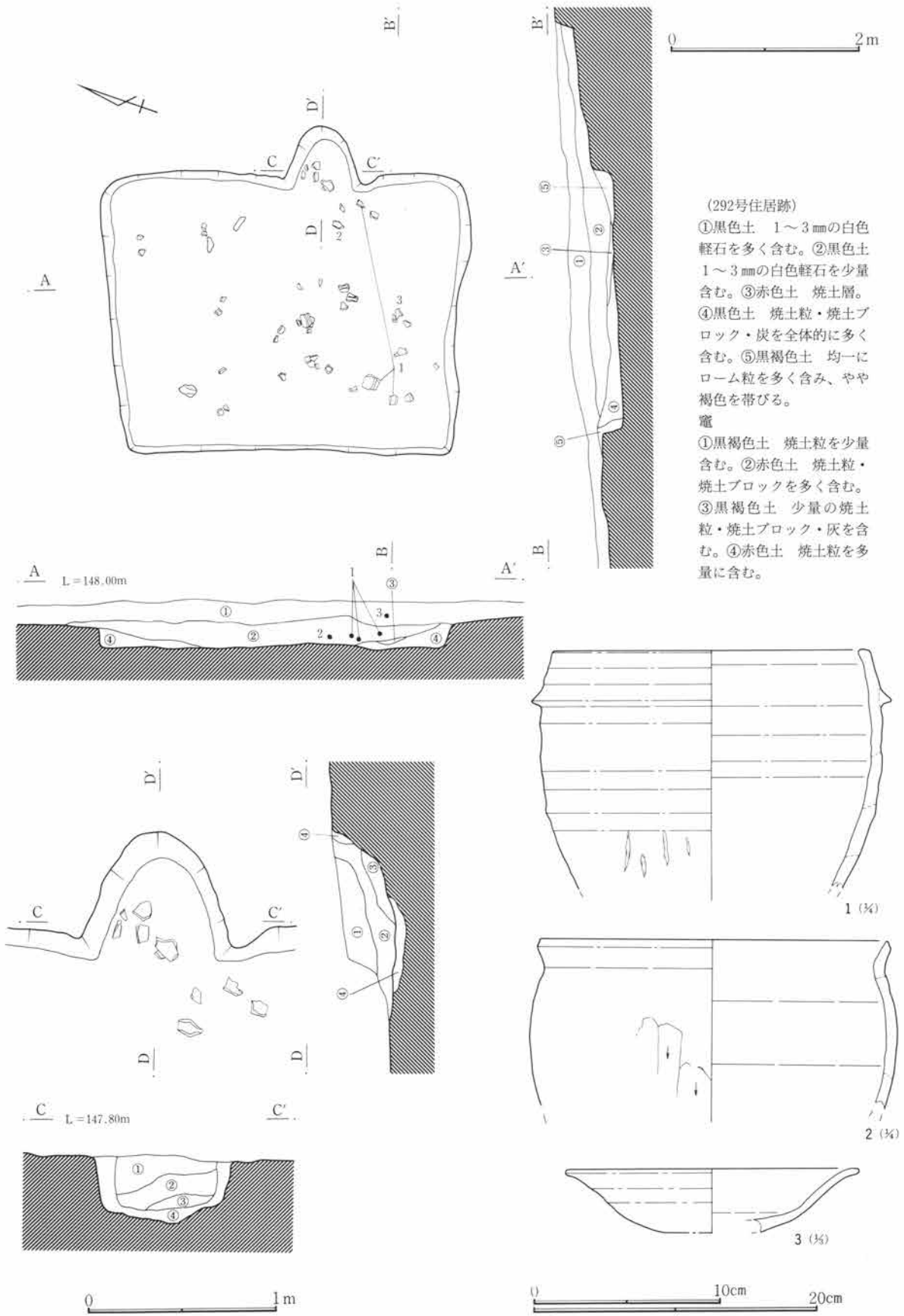
平面形は、東・南壁がやや張り出した感じだが、東西2m95cm・南北3m85cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-74°-Eを示す。床面はローム（地山）を叩き締めており、貼床等は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設も検出されなかった。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm・奥行70cm・深さ34cmを測る。石材等は全く残存せず、内部に残されていた土器類も小破片ばかりで、補強材なのかどうかの判断が出来ない。覆土の状況の割に遺存状態は不良である。

遺物は住居跡全体に分布するが、密度は極めて薄く種類も乏しい。煮沸具には土釜・羽釜があり、坏類は高足気味の物を含んでいる。いずれも小破片ばかりで、個体の残存率が低い事からすれば、竈の補強材であった可能性を否定出来ないだろう。中央を穿孔した砂岩製の石製品が検出されているが、紡錘車としてはやや重量が不足気味で、石製模造品とするべきであろう。以上の他に、薦編石状の緑簾緑泥片岩・絹雲母石墨片岩各1個（計0.4kg）が検出されている。

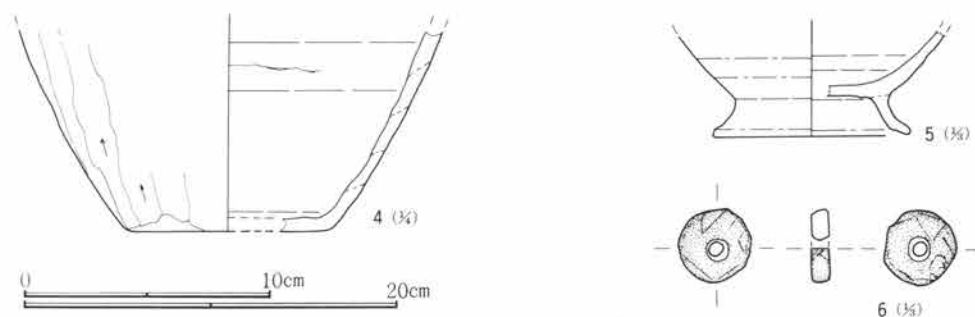
以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（中沢）。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第93図 292号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第94図 292号住居跡出土遺物実測図(2)

第40表 292号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
93-1 45	須恵器 羽釜	床面+6 %残存	口(22.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③灰白色	輪積成形でロクロを使用。外面下位篋削り。	破片毎に色が変化(二次焼成)
93-2	土師器 甕	床面-5 小破片	口(24.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	輪積成形でロクロを使用。外面一部篋削り。	
93-3	須恵器 坏	床面-32 小破片	口(15.6) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰気味、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形	
94-4	土師器 甕	覆土 破片	口— 底(11.2) 高—	①粗、砂粒多 ②酸化焰、硬質 ③黄褐色	輪積成形後、外面篋削り。	
94-5	須恵器 高台付埴	覆土 小破片	口— 底(8.0) 高—	①粗、石英細粒 ②酸化焰気味、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
94-6 56	石製品	覆土 完形	径2.8/2.8 厚0.8	孔径0.9 重6.5	両側から穿孔。	砂岩

293号住居跡（第95～97図、第41表、図版45・55・56・57・59）

本住居跡は、第5次調査区西端の西向きの緩斜面にあり、27-6グリッドに位置する。周囲には、比較的時期の近接した住居跡が環状に取り囲み、その中央部を占める。

西に傾斜する斜面に立地する為、本来西壁より東壁が良く残っていたと思われるが、やや先行する709号住居跡（平安）の西半部の覆土を切って構築するので、全体にやや明瞭さに欠ける。

平面形は東西3m80cm・南北3m55cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-69°-Eを示す。床面は、ローム（地山）を叩き締めており、基本的に貼床は認められない。柱穴・壁溝等の付属施設も検出されていない。

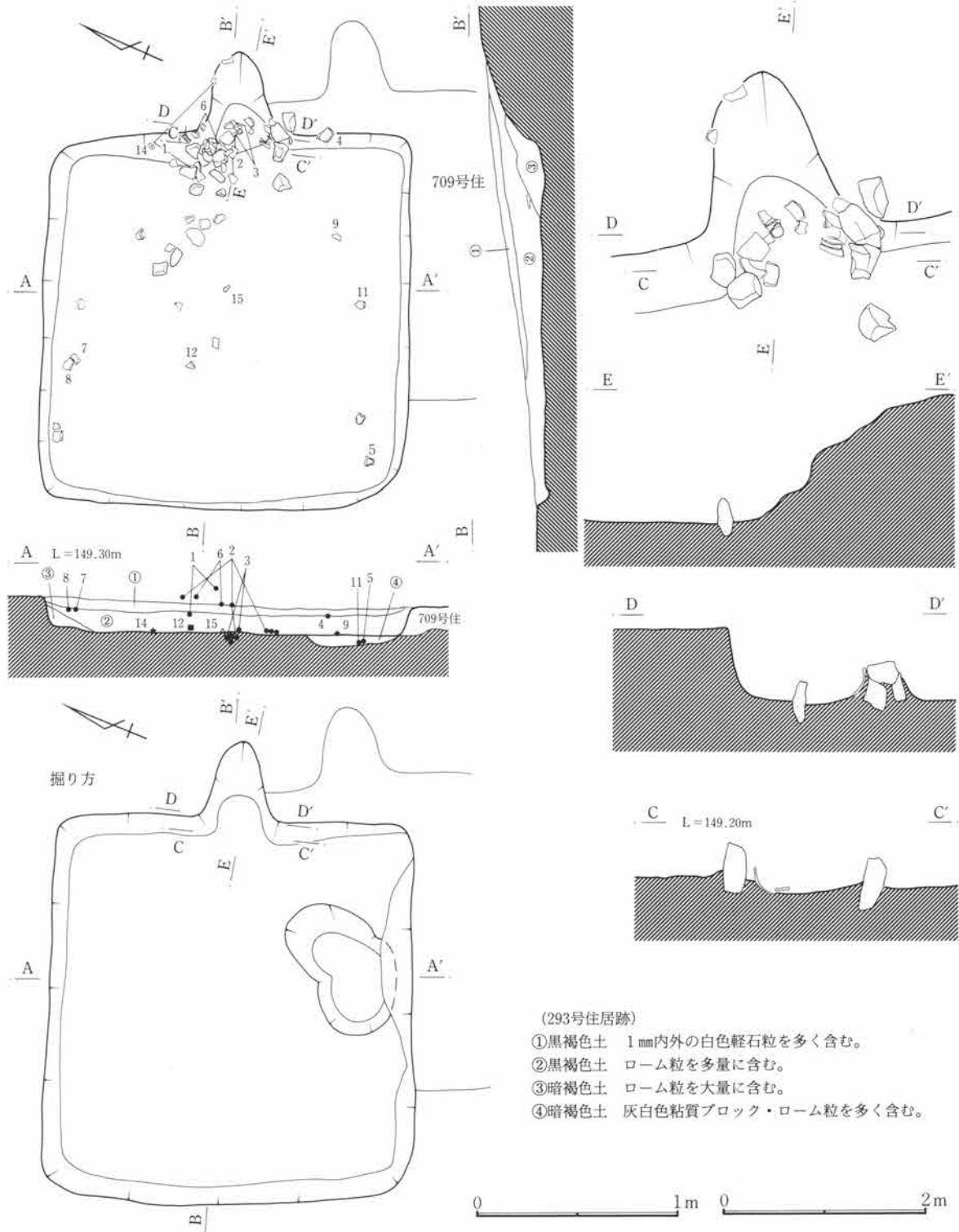
竈は、東壁のほぼ中央にあり、幅70cm・奥行1mを測る。傾斜面に掘り込まれる為、煙道部分迄良く残るが、両袖石は残存するものの大きく破損している。竈内外には、石材や数個体分の接合しない羽釜破片が検出され、羽釜破片を補強材に利用した石組竈が想定出来るが、概して残存状況は不良である。

貯蔵穴は、掘り方調査で確認されたが、南壁中央東寄りにある。径70cmを測る円形を呈し、北側に掘り直しの痕跡がある。

遺物は、竈を中心にやや多く検出されているが、概して個体の残存率は低い。羽釜には、底部が存在する事により、甕を含んでいたと思われる。土釜は、小型の片口型のもののみ確認されている。小破片ではあるが、灰釉陶器も認められる。土器類以外では、使用痕の明瞭な石製紡錘車・携帯用に穿孔したと思われる砥

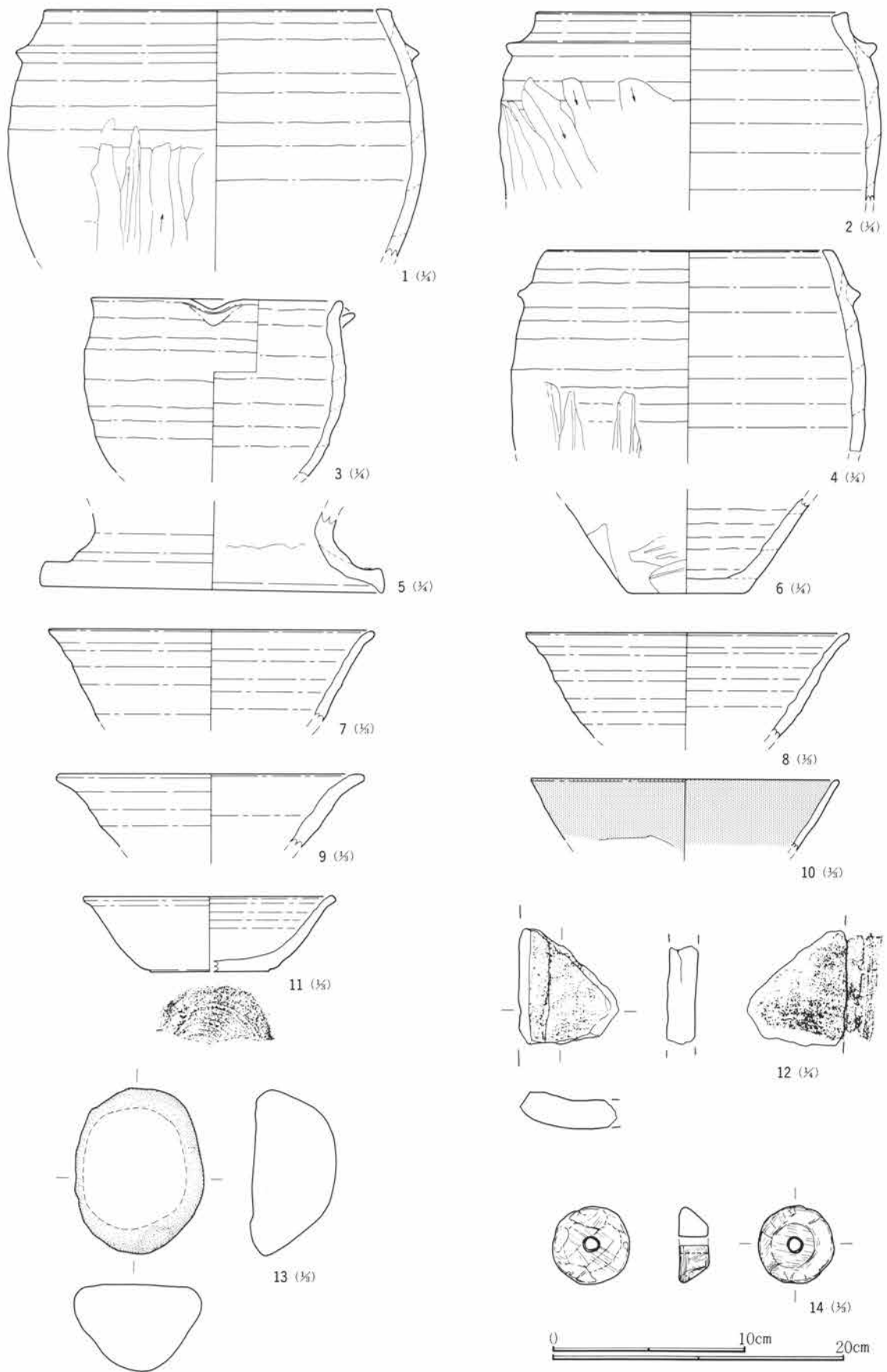
石・ほぼ完形の鉄鏃等の出土が注意される。これらのうち砥石は、この種のものでは珍しく破損する程摩滅するまで実際に使用している。鉄鏃は、通常の住居跡からの出土には不釣り合いな形態で、何故こうした物が普通の住居跡から出土するのか、類例を収集して検討してみる必要があるだろう。以上の他に、薦編石状の安山岩2個（計0.2kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（中沢）。

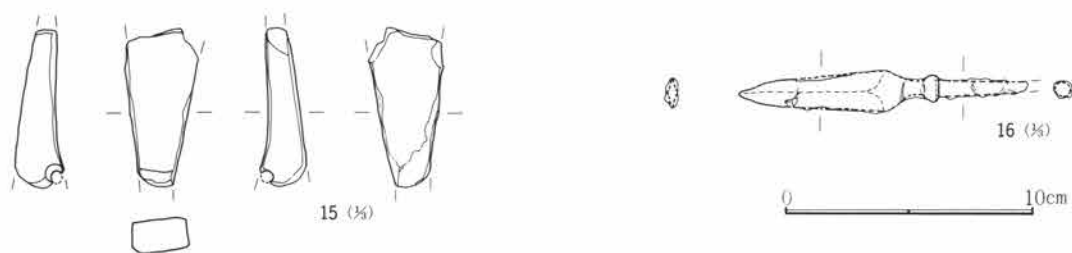


第95図 293号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第96図 293号住居跡出土遺物実測図(1)



第97図 293号住居跡出土遺物実測図(2)

第41表 293号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
96-1	須恵器 羽釜	床面+15 破片	口(24.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	輪積成形でロクロ使用。外面下半部削り。	
96-2 45	須恵器 羽釜	竈内+2 1/2残存	口(21.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面削り。	粘土の付着あり
96-3 45	土師器 片口鉢	竈内+2 3/5残存	口 18.4 底— 高—	①粗、砂粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。口辺を片口状につくる。	
96-4	須恵器 羽釜	床面+17 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	輪積成形でロクロ使用。外面一部削り。	
96-5 45	須恵器 羽釜甕	床面-5 小破片	口— 底(24.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい浅黄色	輪積成形でロクロ使用。	
96-6 45	須恵器 羽釜	竈内+25 破片	口— 底(8.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色、一部黒変	輪積成形でロクロ使用。	
96-7	須恵器 坏	床面+16 小破片	口(17.0) 底— 高—	①粗、雲母・黒色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③黄褐色	ロクロ成形。	内面暗褐色
96-8	須恵器 坏	床面+16 小破片	口(16.8) 底— 高—	①粗、雲母 ②還元焰、硬質 ③黄灰色、一部黒変	ロクロ成形。	
96-9	須恵器 坏	床面直上 小破片	口(16.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい浅黄色、一部黒変	ロクロ成形。	
96-10 45	灰釉陶器 埴	覆土 小破片	口(16.0) 底— 高—	①普、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色に淡緑色の釉	ロクロ成形。	窯式名不明
96-11 45	須恵器 坏	床面-5 1/2残存	口(13.0) 底(6.2) 高 3.8	①粗、雲母・褐色鉍物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄褐色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
96-12 55	平瓦	床面+5 小破片	長— 幅— 厚 2.0	①粗、石英粒 ②酸化焰、硬質 ③灰色	1枚造り。	
96-13 57	石製品 磨石	覆土 完形	長 8.3 厚 4.3 幅 6.7 重 150			軽石
96-14 56	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径3.82/2.53 孔径 0.69 厚 1.58 重 34.9		上、下面に縦方向、側面に斜方向の製作時の擦痕。上面に使用痕。	滑石片岩
97-15 57	石製品 砥石	床面直上 破片	長(6.2) 厚 1.3 幅 2.3 重(30.7)		中砥。四面を使用。	安山岩 穿孔あり
97-16 59	鉄製品 鉄	覆土 柄部欠	長(11.6) 厚 0.4 幅 1.2 重(13.6)		刃部断面菱形、柄部断面四角。	

294号住居跡 (第98・99図、第42表、図版20・45)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、29・30-5グリッドに位置する。295号住居跡(古墳)の南壁・古墳時代の住居跡(番号無)の北東隅を切って構築される。

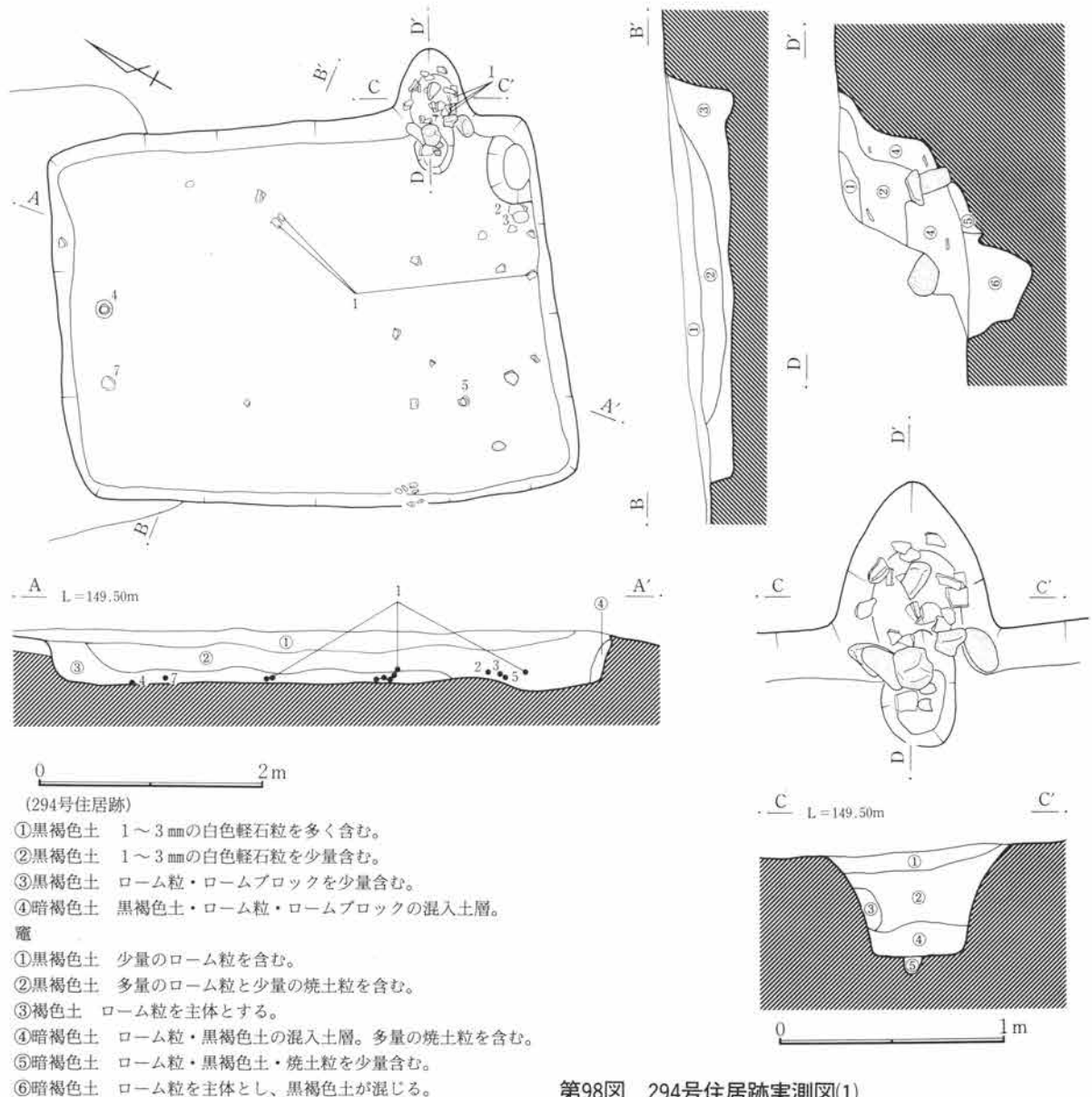
平面形は東西3m40cm・南北4m40cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-60°-Eを示す。床面は、竈前を中心に貼床が施され、床下には竈前のピットの他、小ピットが三基程検出されたが、掘り方は概して平坦である。柱穴・壁溝については検出されていない。

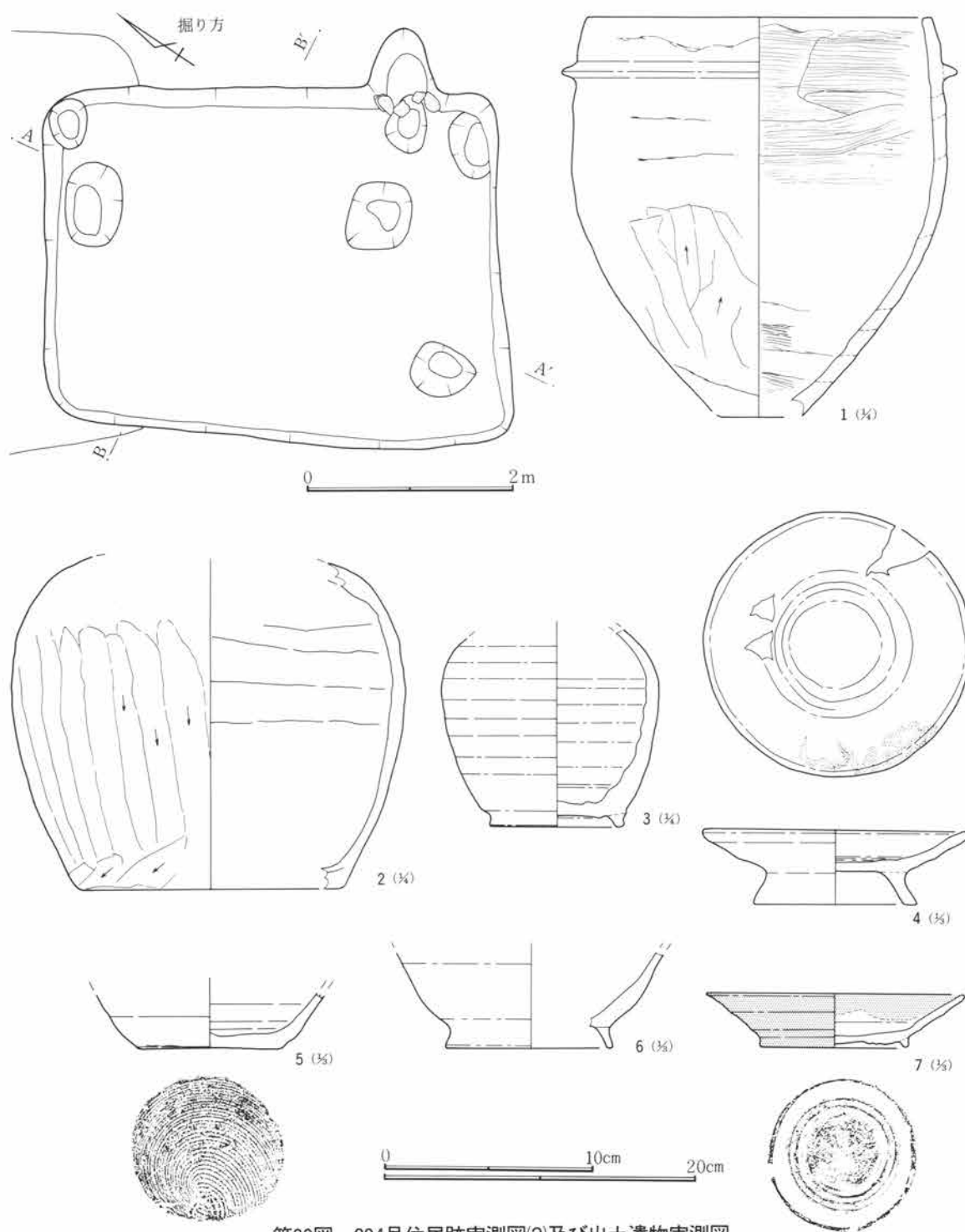
竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行80cm・深さ50cmを測る。両袖石・支脚が残存する他、竈内部に用材と見られる石材や、接合しない土釜・羽釜の破片が多く見られる。比較的遺存状態は良好であるが、天井部は崩落していると思われる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径40cm・深さ33cmを測る。

遺物は竈内部が最も多く、床面全体に分布は見られるが密度は低い。個体の残存率はやや高く、灰釉陶器皿の完形品が注意される。他に薦編石状の放散虫板岩1個(0.02kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる(中沢)。





第99図 294号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第42表 294号住居跡出土遺物観察表

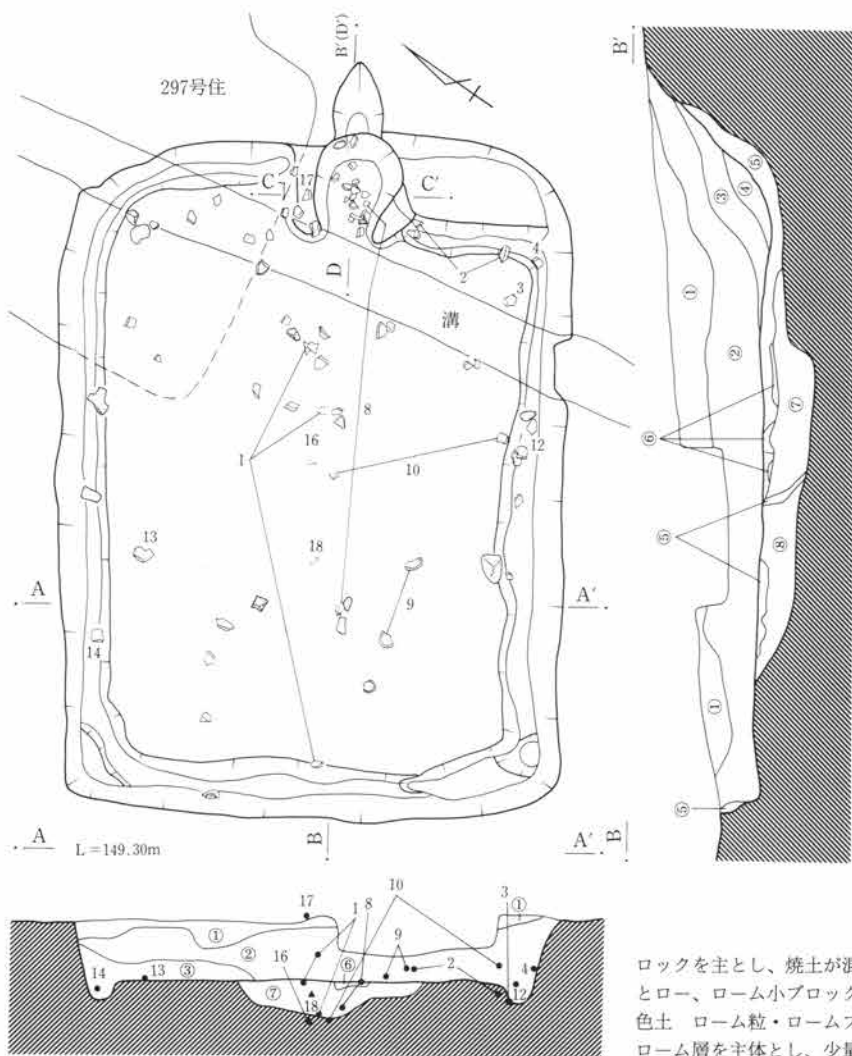
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
99-1 45	須恵器 羽釜	床面+4 1/2残存	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋削り。内面篋撫で。	
99-2	土師器 甕	床面+5 1/2残存	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色、断面にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半縦方向篋削り。底部付近横方向篋削り。	

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
99-3 45	須恵器 長頸壺	床面+5 口・頸部 欠	口 — 底 8.4 高 —	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや軟質 ③暗緑灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	鉄分の滲出が目立つ
99-4 45	土師器 高台付皿	床面+2 口縁一部 欠	口 12.5 底 7.8 高 3.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色、断面赤褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	漆状の付着物あり
99-5	須恵器 坏	床面+3 破片	口 — 底 7.0 高 —	①やや粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
99-6	須恵器 高台付埴	覆土 破片	口 — 底 (8.2) 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
99-7 45	灰釉陶器 高台付皿	床面+5 完形	口 12.5 底 7.3 高 2.4	①細、殆ど含まない ②還元焰、やや硬質 ③灰白色に透明の釉	ロクロ成形後、底部篋削り。高台貼付。	虎溪山2号窯式

296号住居跡 (第100~102図、第43表、図版21・46・59)

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、30・31-4グリッドに位置する。297号住居跡(平安)に北東隅を切られ、更に南北方向の耕作溝が破壊している。

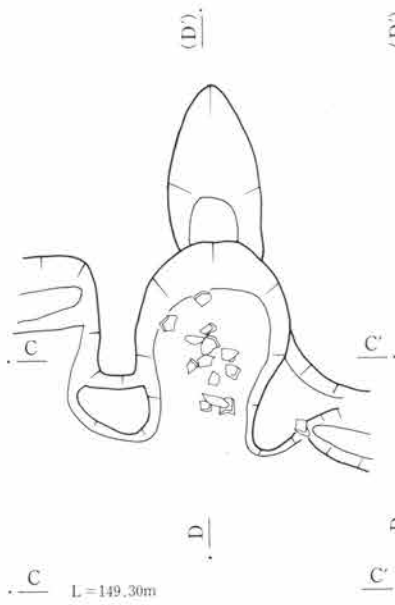


第100図 296号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

山を、床面から40cm程掘り残して、1m×50cmの棚状のテラスを造成している。本住居跡では、この部分についての遺物の出土は見られず、その機能に関する資料は得られていない。

竈は、東壁ほぼ中央にあり、幅50cm・奥行1m20cm・深さ1mを測る。右袖は棚状に掘り残した地山を利用し、左袖は東壁から80cm程住居内部に張り出している。但し、支脚等は残存せず、天井部も崩落して遺存していなかった。煙道は、約50度の傾斜で燃烧部から立ち上がり、緩やかな角度に変化して住居跡外へ20cm程張り出す。

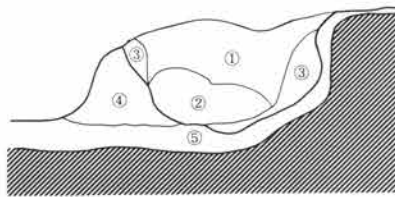


L=149.30m



竈

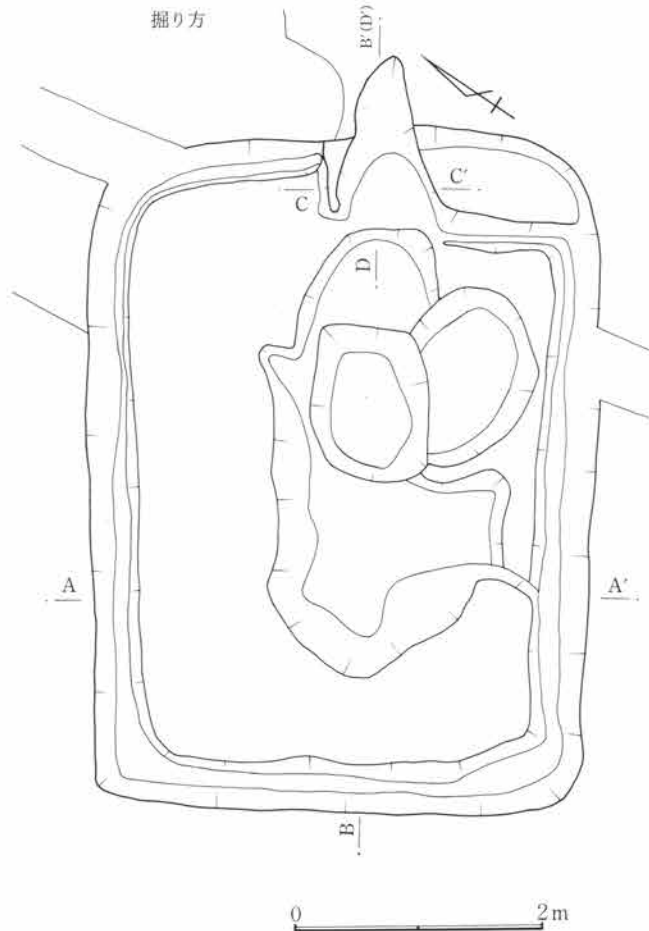
- ①暗褐色土 多くのローム粒とロームブロック (~1mm) を含む。
- ②赤褐色土 多量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを主とし、焼土粒を含む。
- ④褐色土 ローム層。
- ⑤灰褐色土 ローム層。



0 1m

遺物は、竈内部を中心にやや多く見られ、量もやや多いが個々の残存率は低い。坏・蓋共大小二種あるが、組み合わせる物はないようである。坏の中には、製作時に意図的に四角形に歪めた物が、完形に近い形で検出されているが、生産地に近接した集落ならではの遺物であるかもしれない。煮沸具に羽釜は含まれない。金属製品には、再製品と見られる刀子があり、1号住居跡でも検出されている留具状の金具の刺さった銅板の出土が注意される。以上の他に、薦編石状の緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・点紋絹雲母石墨片岩各1個(計0.4kg)が検出されている。

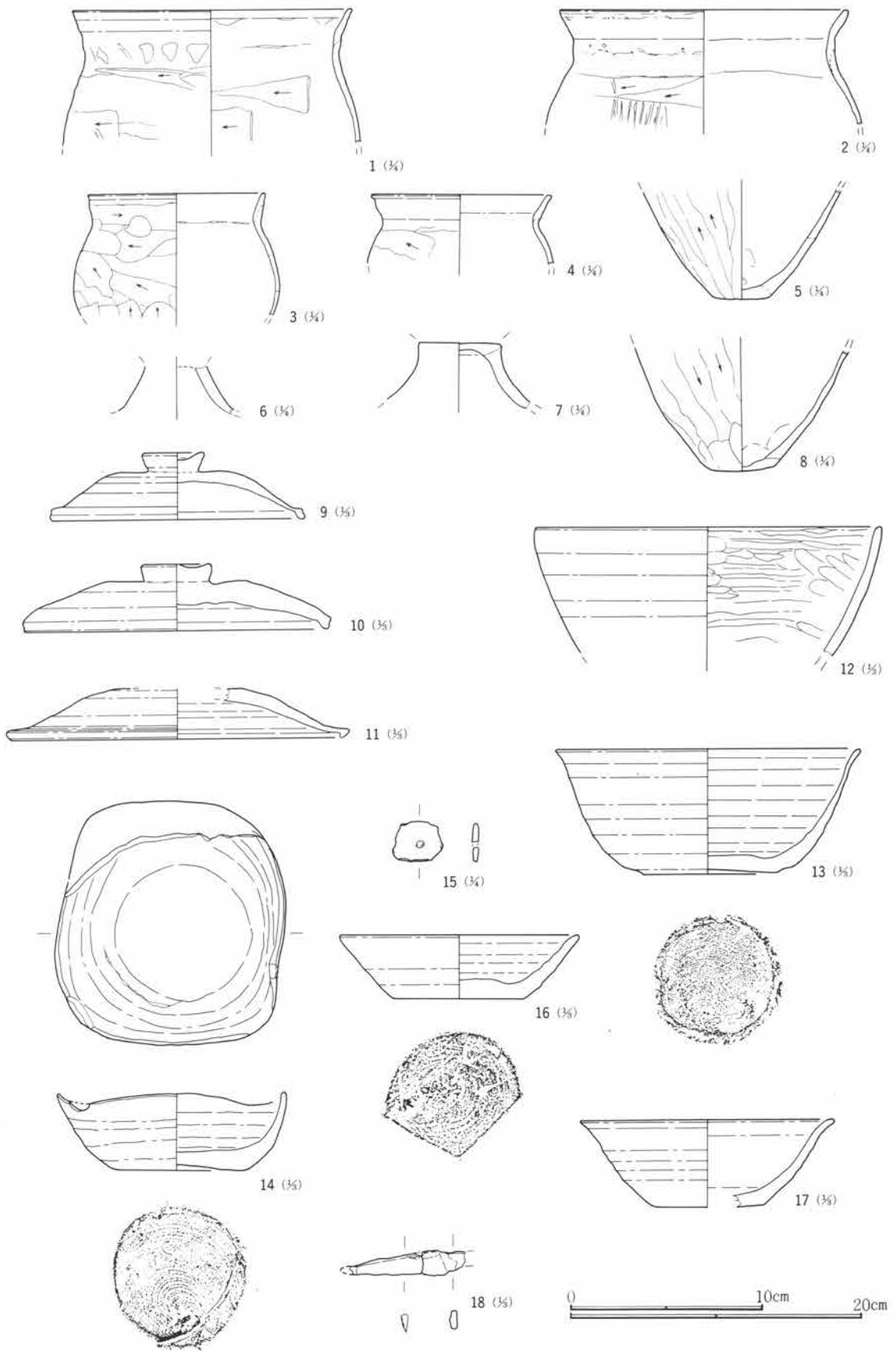
以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(中沢)。



0 2m

第101図 296号住居跡実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第102図 296号住居跡出土遺物実測図

第43表 296号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
102-1 46	土師器 甕	床面-2 破片	口 19.4 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
102-2 46	土師器 甕	床面+6 破片	口 20.0 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 撫で。	
102-3	土師器 小型甕	床面-12 破片	口(12.4) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
102-4	土師器 小型甕	床面+10 破片	口(12.4) 底 — 高 —	①粗、黒色鋳物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
102-5	須恵器 甕	覆土 破片	口 — 底 3.8 高 —	①粗、石英細粒 ②酸化焰、軟質③外面褐色、 内面にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
102-6	土師器 小型台付 甕	覆土 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形。	
102-7	須恵器 小型台付 甕	覆土 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形。	
102-8	須恵器 甕	床面直上 小破片	口 — 底 4.5 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③外面褐色、にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。内面撫で。	
102-9 46	須恵器 蓋	床面+4 ほぼ完形	口 3.2 口 15.2 高 3.4	①普、石英・黒色鋳物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、頂部篋削り。摘貼付。	
102-10 46	須恵器 蓋	床面+15 %残存	口 3.6 口(15.8) 高 3.4	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、頂部篋削り。摘貼付。	
102-11	須恵器 蓋	覆土 %残存	口 — 口(17.2) 高 —	①普、白色・黒色鋳物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、頂部篋削り。	
102-12	土師器 埴	床面直上 破片	口(18.0) 底 — 高 —	①粗 ②酸化焰、軟質 ③内面黒色、外面にぶい橙色	ロクロ成形後、内面磨き。	内面黒色処理
102-13 46	須恵器 埴	床面直上 %残存	口 15.8 底 6.6 高 6.3	①粗、石英粒 ②酸化焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	高台剝離
102-14 46	須恵器 坏	床面-5 %残存	口 — 底 6.6 高 3.9	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。 口辺を二方向圧縮し、平面四角につくる。	
102-15	土師器 甕	覆土 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形。	穿孔あり
102-16	須恵器 坏	床面-30 %残存	口(12.4) 底 6.8 高 3.2	①粗、石英・褐色鋳物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
102-17	須恵器 坏	床面+50 破片	口(13.2) 底(5.8) 高 4.4	①粗、雲母・白色鋳物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形。	一部黒変
102-18 59	鉄製品 刀子	床面-10	長 — 幅 9.5	厚 0.3 重 5.6		

297号住居跡（第103・104図、第44表、図版21）

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りにあり、31-4グリッドに位置する。本住居跡以西には、時期の近接した住居跡が集中する傾向にあるが、以東は各時期を通じて一貫して住居が構築された形跡が無く、立木

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

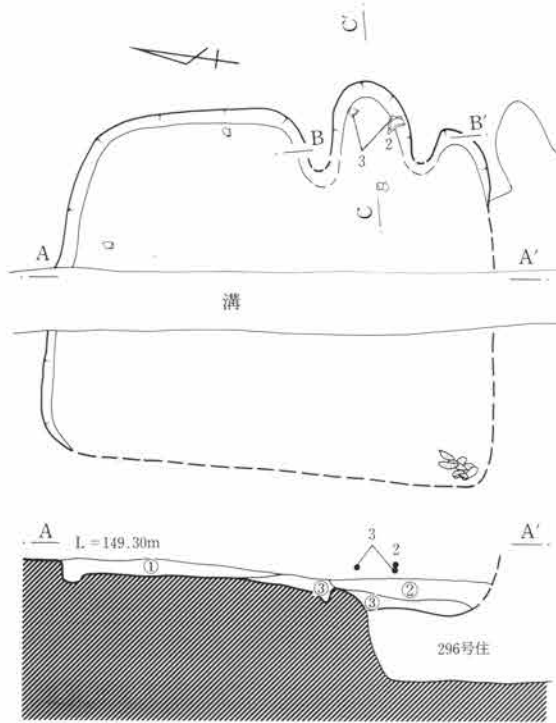
や畑等の可能性もあるが、永く空地状態を呈していたと思われる。296号住居跡（平安）の北東隅を掘り込んで構築され、南北方向の耕作溝によって中央を分断されている。

平面形は東西2m80cm・南北3m70cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-75°-Eを示す。床面は、竈前を中心に薄く貼床を施し、掘り方には竈前のピットなど二基が検出されたが、貯蔵穴・柱穴・壁溝に相当すると見られるものは無い。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、白色粘土等によって構築された両袖を伴って住居内部に60cm程張り出している。幅70cm・奥行80cm・深さ20cmを測る。

遺物は少なく、個々の残存率も低いが、煮沸具には羽釜を含まないようである。他に薦編石状の石墨緑泥片岩2個、絹雲母石墨緑泥片岩・滑石片岩・点紋緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・絹雲母石墨片岩各1個（計1.15kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。



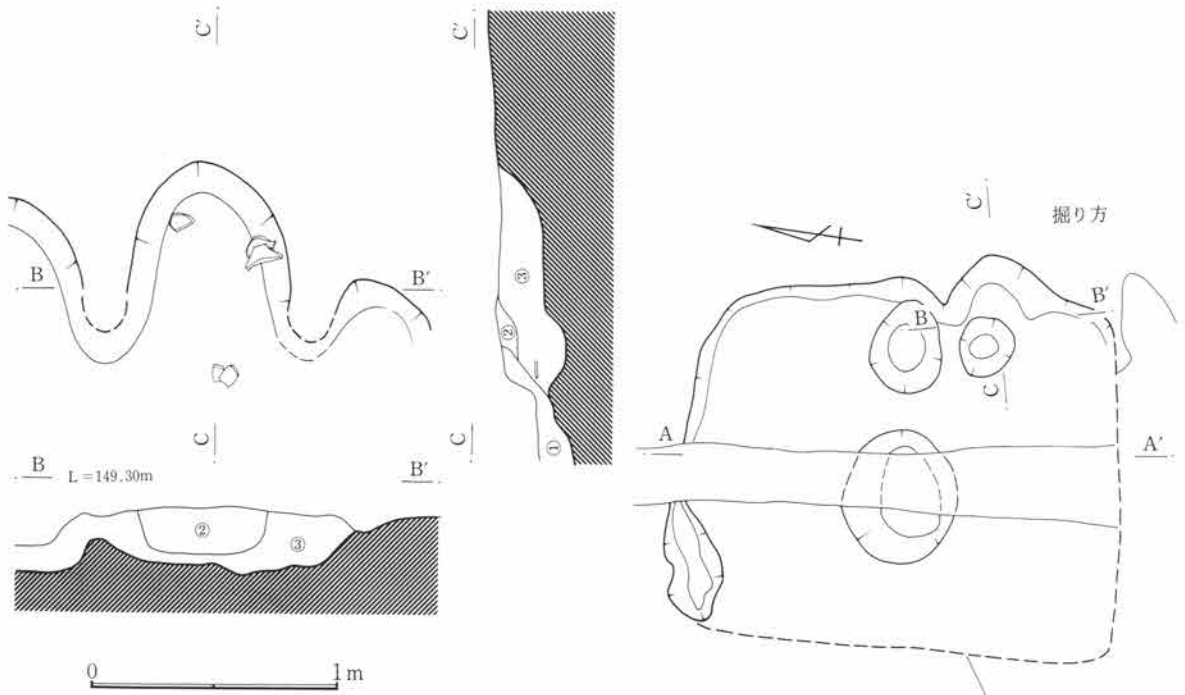
0 2m

(297号住居跡)

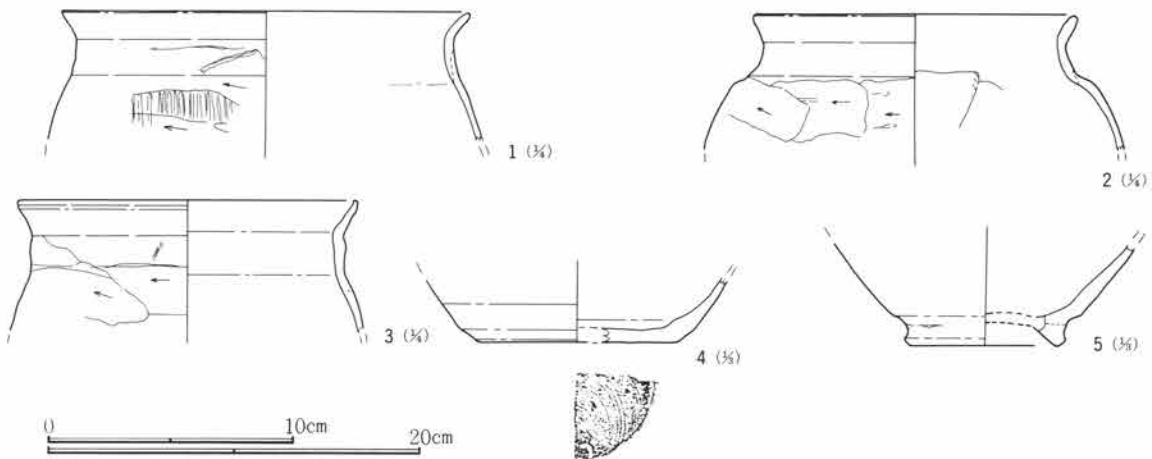
①黒褐色土 1~2mmのローム粒・ローム小ブロックを多く含む。②黒褐色土 ①層に比して含有物が少ない。③暗褐色土 ローム粒と1cm内外のローム小ブロックを多量に含む。

竈

①黒褐色土 1mm内外の白色軽石粒を多く含む。②赤褐色土 焼土粒を多く含む。③黒褐色土 ロームブロック・焼土粒・灰等を含む。



第103図 297号住居跡実測図



第104図 297号住居跡出土遺物実測図

第44表 297号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
104-1	土師器 甕	覆土 小破片	口(22.2) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
104-2	土師器 甕	竈内+10 小破片	口(17.4) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
104-3	土師器 甕	竈内+8 破片	口(18.4) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
104-4	須恵器 坏	覆土 破片	口— 底(8.0) 高—	①普、殆ど含まない ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
104-5	須恵器 高台付埴	覆土 小破片	口— 底(6.0) 高—	①粗、灰色鉱物・片岩細粒少 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色、一部黒変	ロクロ成形。	

298号住居跡 (第105・106図、第45表、図版22・46・59)

本住居跡は、第5次調査区中央西端の緩斜面にあり、27・28-5グリッドに位置する。348号住居跡(古墳)・349号住居跡(奈良)・409号住居跡(奈良)を切って構築され、177号住居跡(平安)に北壁を切られる。結果として、地山を掘り込んでいるのは僅かに北壁の一部のみである。

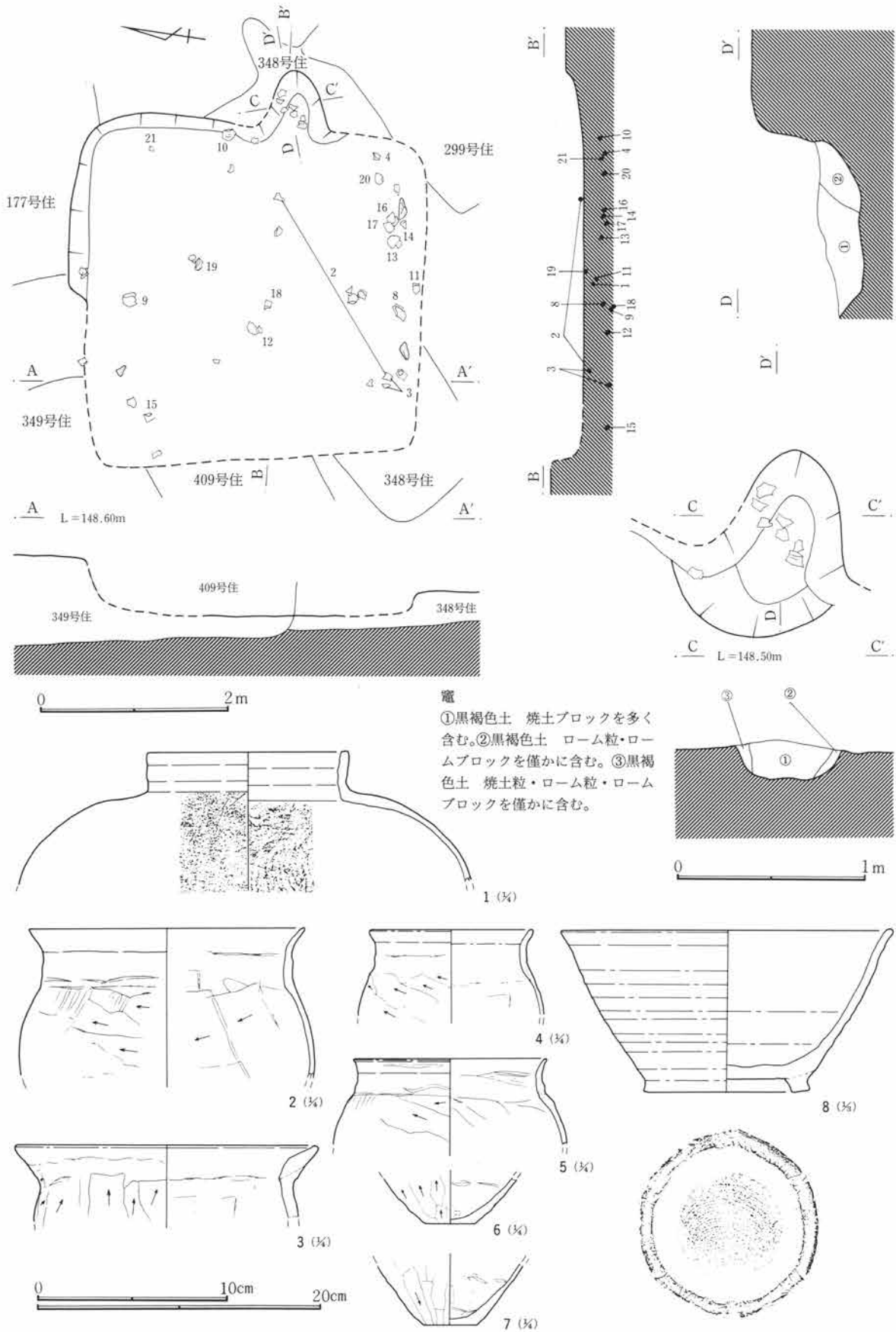
切り合い関係が複雑な為、壁の立ち上がりを充分追及出来ず、やや不確定な要素はあるが、平面形は東西3m60cm・南北3m80cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-70°-Eを示すと思われる。床面は、貼床を施すと見られるが明瞭でない。他の住居跡の覆土中になる為、掘り方も不明瞭で、貯蔵穴・柱穴・壁溝等付属施設の実態は不明である。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm・奥行70cm・深さ20cmを測る。内部にコ字状口縁土師器甕が残存するが、石組等は伴わないようである。

遺物はやや多く、一部時期の異なる物も含まれるが、いずれも先行する住居跡からの混入品であろう。種別では、特に坏類の多さが目立つ。大形と中形に大別出来ると思うが、小形になる物は認められず、蓋等の種類も見ることが出来ない。煮沸具には羽釜を含まないようである。他に薦編石状の石墨緑泥片岩1個(0.2kg)が検出されている。

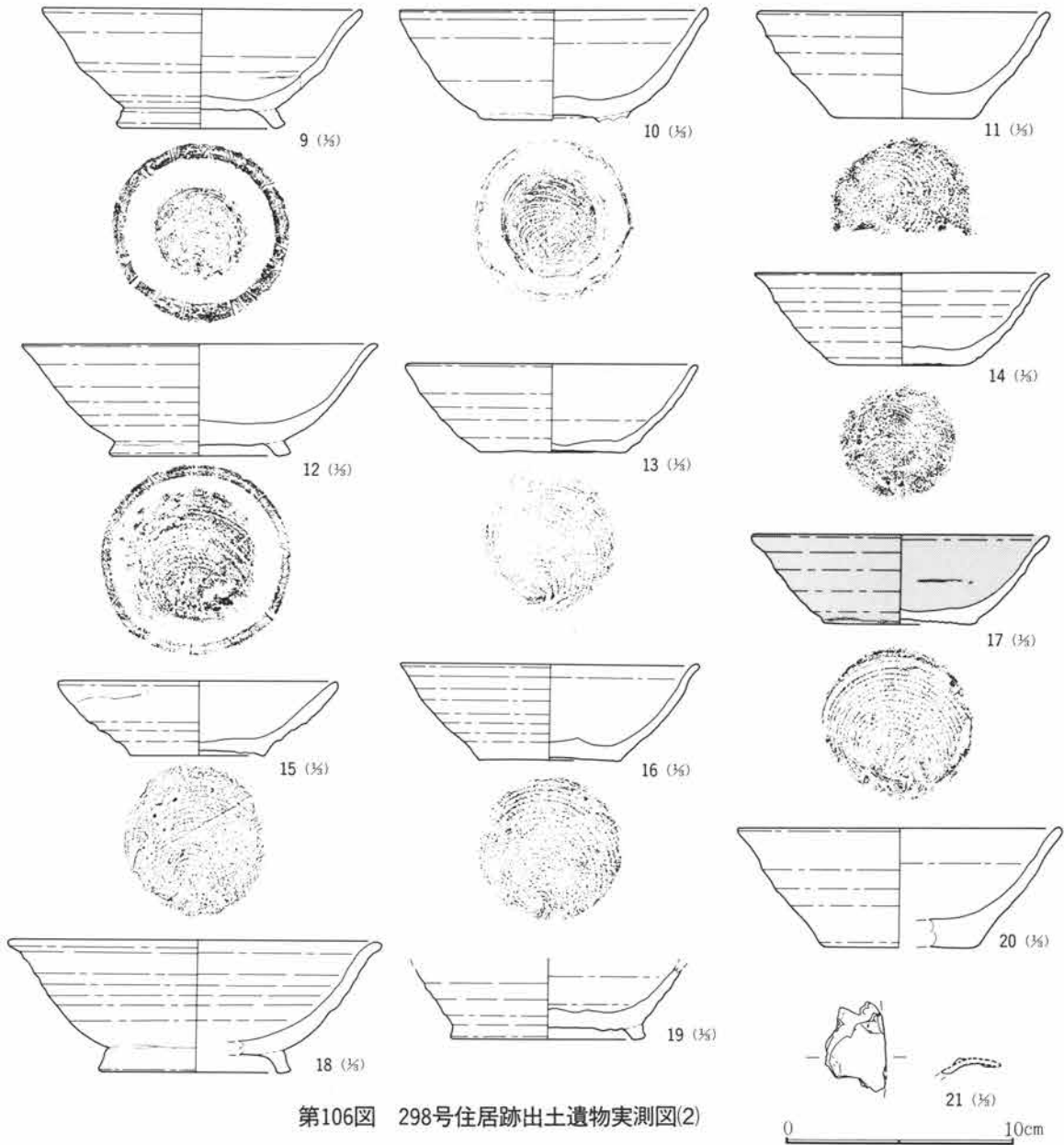
以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(中沢)。

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第105図 298号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第106図 298号住居跡出土遺物実測図(2)

第45表 298号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
105-1 46	須恵器 壺	床面-8 小破片	口(14.4) 底 - 高 -	①やや粗、黒色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	輪積成形でロクロを使用。外面叩き。内面当具痕あり。	
105-2 46	須恵器 甕	床面直上 破片	口(19.6) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
105-3	土師器 長甕	床面-5 破片	口(21.6) 底 - 高 -	①やや粗、砂粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面縦方向篋削り。内面篋撫で。	
105-4 46	土師器 小型甕	床面-22 破片	口(11.6) 底 - 高 -	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
105-5	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(13.8) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
105-6	土師器 甕	覆土 破片	口 — 底 (3.6) 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
105-7	土師器 甕	覆土 破片	口 — 底 (3.8) 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	一部熱をうける
105-8 46	須恵器 高台付埴	床面-20 %残存	口(17.8) 底 8.8 高 8.4	①普、黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。	
106-9 46	須恵器 高台付埴	床面-28 口縁一部 欠	口 14.1 底 7.5 高 5.1	①粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
106-10 46	須恵器 高台付埴	床面-19 %残存 高台部欠	口 13.6 底 — 高 —	①やや粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台剝離
106-11	須恵器 坏	床面-12 %残存	口(13.0) 底 (6.2) 高 (4.6)	①粗、褐色鈹物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色、底部黒斑	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
106-12 46	須恵器 高台付埴	床面-22 %残存	口(15.6) 底 (8.0) 高 (4.8)	①粗、褐色鈹物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色、一部黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
106-13 46	須恵器 坏	床面-20 ほぼ完形	口 12.8 底 6.4 高 3.8	①粗、雲母・白色鈹物粒多 ②還元焰気味、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	底面外面中心に 黒斑
106-14	須恵器 坏	床面-20 %残存	口(13.0) 底 5.4 高 3.9	①粗、石英粒・雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
106-15 46	須恵器 坏	床面-24 %残存	口(12.4) 底 6.0 高 3.2	①普、石英・褐色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
106-16 46	須恵器 埴	床面-20 %残存	口(13.2) 底 6.4 高 5.2	①普、石英・黒色鈹物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
106-17 46	須恵器 坏	床面-25 %残存	口(13.0) 底 6.6 高 3.8	①細、石英細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黒色処理、断面暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
106-18 46	須恵器 高台付埴	床面-29 %残存	口(15.4) 底 (8.6) 高 (5.7)	①やや粗、黒色鈹物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	底部内外面に黒 斑
106-19	須恵器 高台付埴	床面-2 破片	口 — 底 (8.5) 高 —	①やや粗、石英・黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
106-20	須恵器 坏	床面-21 %残存	口(14.2) 底 (7.0) 高 (5.1)	①粗、石英粒、褐色・暗灰 色鈹物粒多②還元焰、軟質 ③灰白色、断面暗灰色	ロクロ成形。	外面に黒変あ り、内面暗灰色
106-21 59	鉄製品 鎌(?)	床面-20	長 — 厚 — 幅 — 重 (4.8)			

318号住居跡（第107図、図版22）

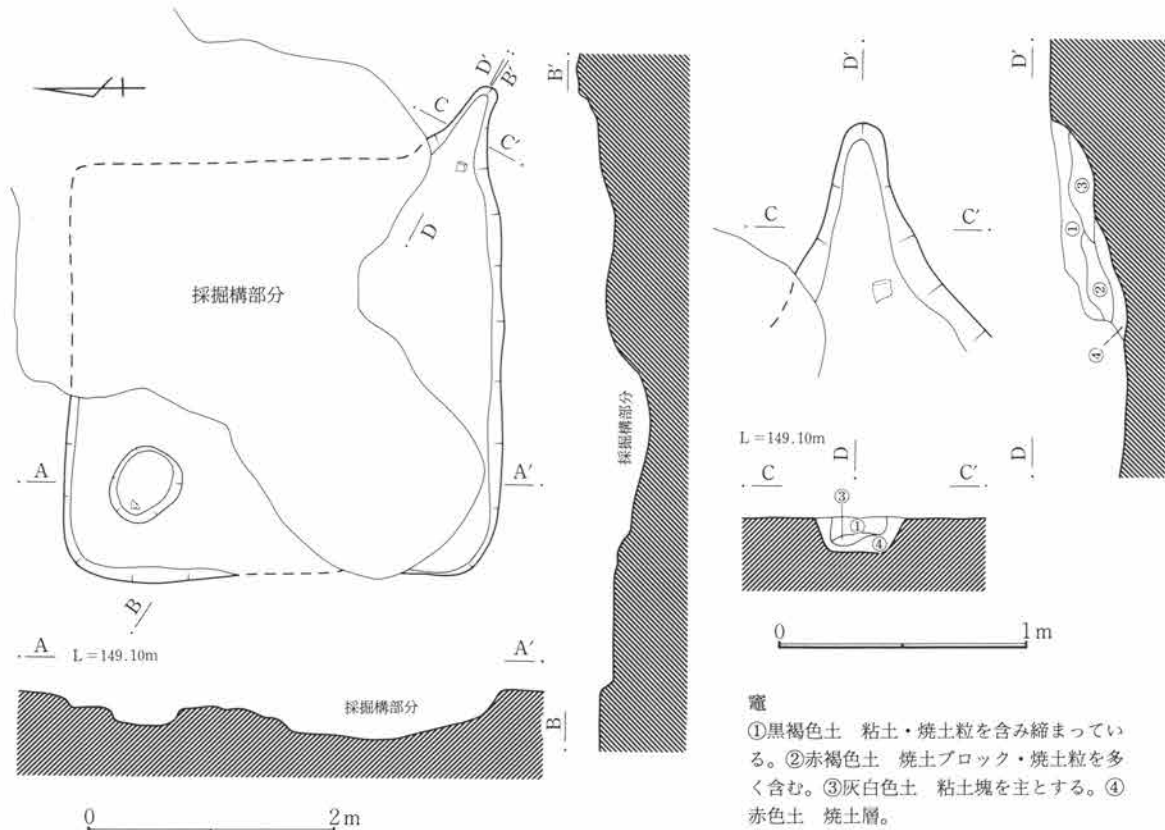
本住居跡は、第5次調査区中央の埋没谷内部の平坦面にあり、21-7・8グリッドに位置する。

埋没谷の黒色土中で検出された為、不確定な要素はあるが、平面形は東西3m30cm・南北3m50cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-115°-Eを示すものと思われる。北東隅を中心に「粘土採掘坑」によって大きく破壊される為、床面及び掘り方の実態は明らかではない。貯蔵穴も断定出来るようなものが無かったが、あるいは南西隅のピットが該当するかもしれない。柱穴・壁溝については本来無かったものと思われる。

竈は東壁隅にあり、主軸に対して南東方向へ30度程の振れを持って構築されている。幅40cm・奥行70cm・深さ24cmを測る。

遺物には図化し得る物が無かったが、僅かに検出された細片には羽釜の胴部と思われる物が数点含まれていた。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（中沢）。



第107図 318号住居跡実測図

320号住居跡（第108図、第46表、図版23・46）

本住居跡は、第5次調査区北寄りの緩斜面にあり、30-12グリッドに位置する。近辺に同時期の住居跡は全く認められず、全く孤立して立地している。確認の段階で、全体に痕跡という状態で、殆ど掘り方の調査であったが、253号住居跡（奈良）の南東隅を掘り込んで構築され、土壌が東壁の一部・南西隅を破壊している。

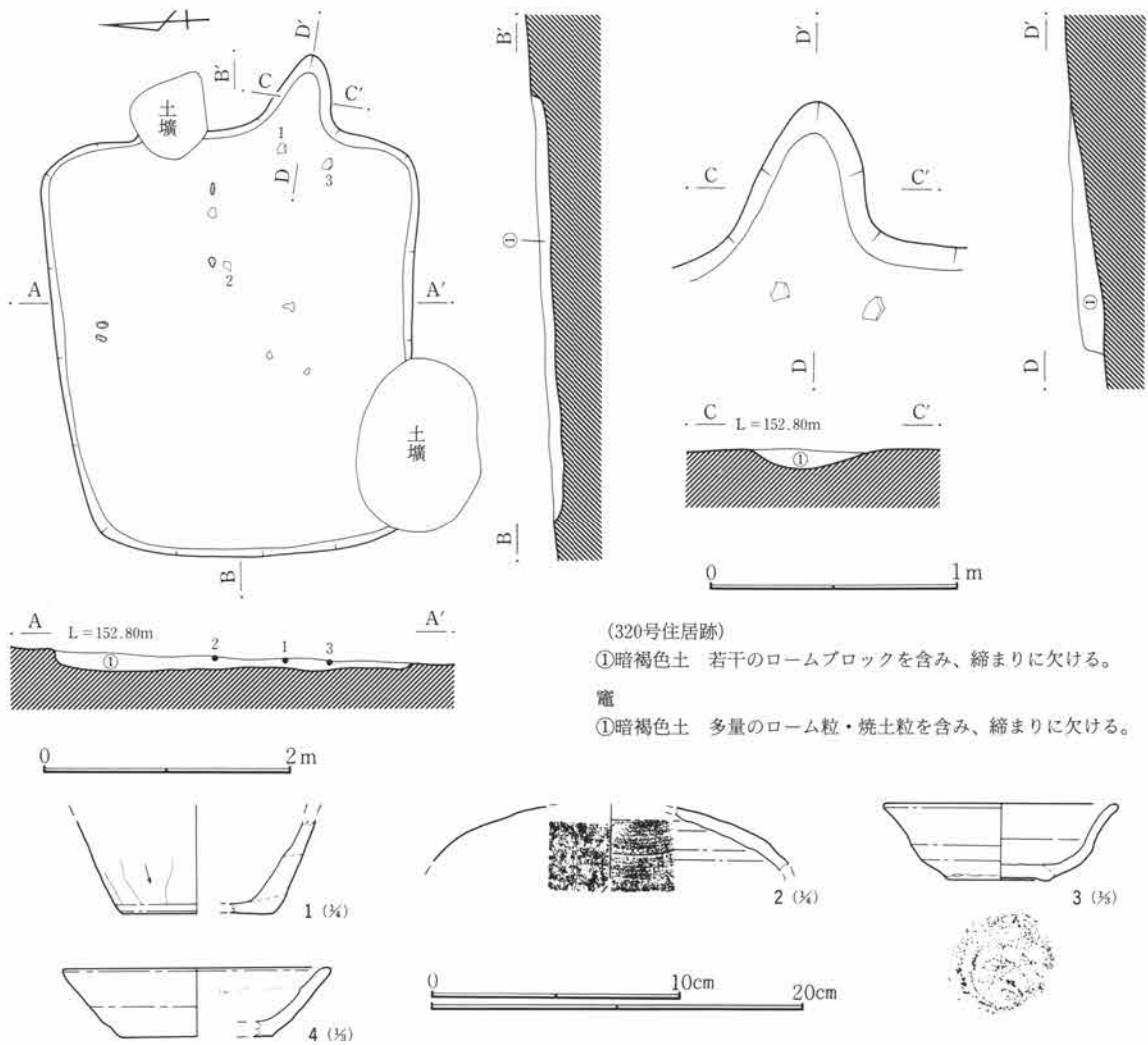
平面形は東西3m85cm・南北3m10cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-98°-Eを示す。床面は、ローム（地山）を叩き締めており、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設は検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行70cm・深さ5cmを測るが、焼土の残存が僅かに認められるのみで、袖石等の石材は全く残存しない。

遺物は極めて少なく、個々の残存率も低い。少量の羽釜胴部と見られる物を除けば、土師質土器の小破片が床面上にまばらに分布していたのみである。それ以外では、薦編石状の絹雲母石墨片岩・砂岩各1個（計0.11kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（内木）。

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第108図 320号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第46表 320号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
108-1	土師器 甕	床面+5 小破片	口— 底(8.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色、にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。	
108-2	須恵器 瓶	床面+6 小破片	口— 底— 高—	①細、黒色鉱物少 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
108-3 46	須恵器 坏	床面+6 ½残存	口(9.6) 底(4.0) 高(3.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
108-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(10.8) 底(6.2) 高(2.7)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③淡黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	

324号住居跡（第109図、第47表、図版23）

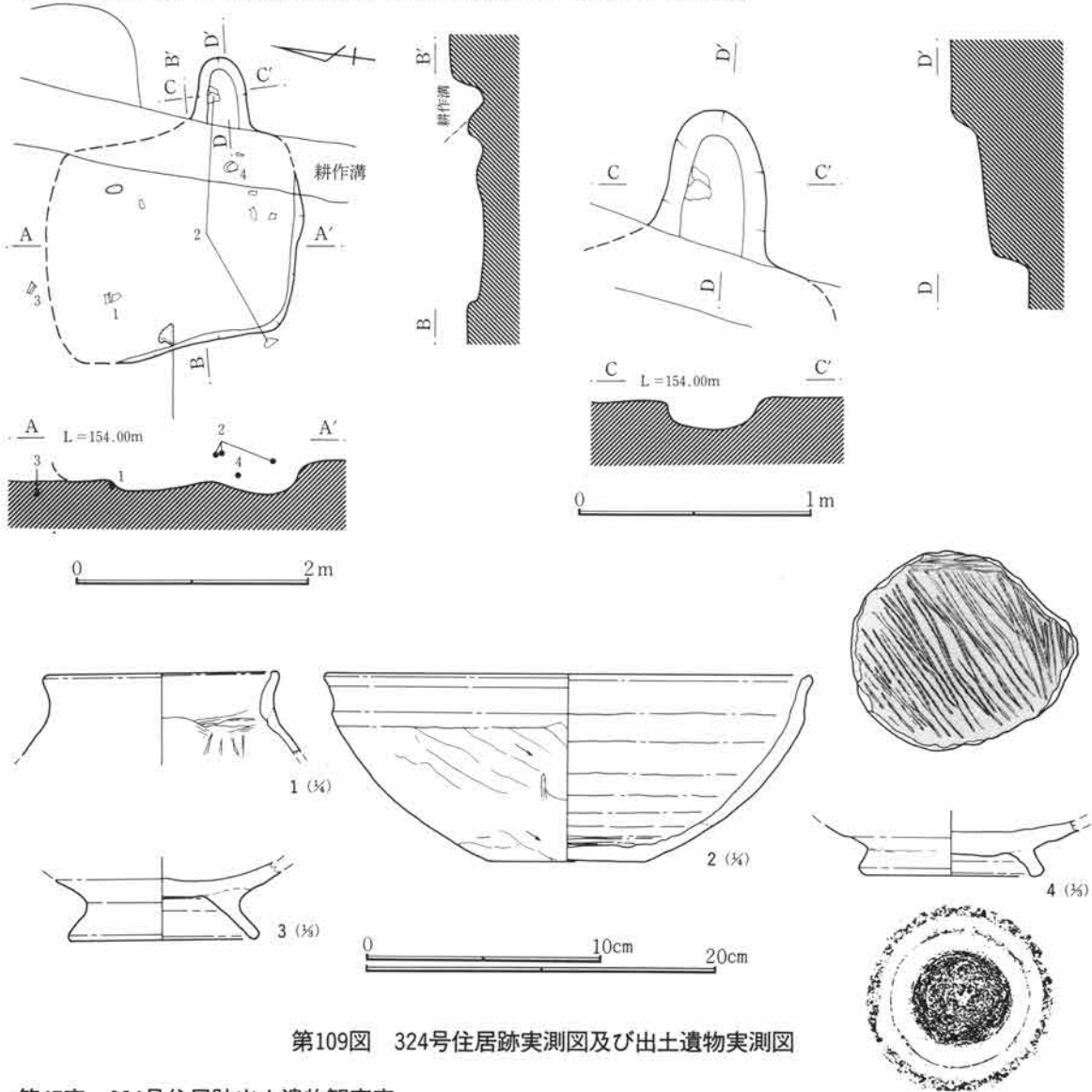
本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、29-6グリッドに位置する。249号住居跡（平安）・255号住居跡（平安）の覆土を切って構築されると思われる。耕作溝によって竈付近を大きく破壊される上、北半

分が他住居跡の覆土中になる為、やや不確定な要素もあるが、平面形は東西1m76cm・南北2m20cmを測るやや歪んだ長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-76°-Eを示す。貯蔵穴は確認出来ず、基本的に掘り方は存在しないものと思われる。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅40cm・奥行70cm・深さ12cmを測ると思われるが、耕作溝によって燃焼部を破壊され、袖などは全く残存していない。

遺物は、床面上に分布するものの密度は薄く、残存率も低い。煮沸具には羽釜を含まないが、土師質の鉢型土器が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（内木）。



第109図 324号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第47表 324号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
109-1	土師器 甕	床面-2 小破片	口(13.2) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③外面橙色、内面褐色	輪積成形後、内面篋撫で。	
109-2 46	須恵器 鉢	床面+25 破片	口(28.0) 底(9.2) 高(11.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
109-3	須恵器 高台付塊	床面-8 破片	口 - 底 8.2 高 -	①粗、雲母・黒色鈹物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半部削り。	
109-4	須恵器 高台付塊	床面+10 破片	口 - 底 7.8 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③外面にぶい橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面黒色処理

334号住居跡（第110～112図、第48表、図版23・47）

本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、38-8グリッドに位置する。羽釜を出土する住居跡は2グリッド以上離れなければ存在せず、近辺での同時期の住居跡の分布密度は低い。333号住居跡（古墳）の東半部・痕跡状態の423号住居跡（古墳）の西半部を掘り込んで構築される。傾斜の関係で、南東隅の残りは比較的良いが、北壁の西半は痕跡状態であった。

平面形は、やや北壁が長いようだが、ほぼ東西4m・南北4m35cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-97°-Eを示す。床面は、竈前を中心に厚く貼床が施される。掘り方には、時期差のあるやや小振りな竈前のピットを含め、三基のピットが認められた。柱穴・壁溝については検出されていない。

竈は東壁南寄りにあり、幅60cm・奥行90cm・深さ25cmを測る。燃焼部内部に、数個体分の接合しない羽釜破片が含まれており、掘り方に埋め込まれた状態の物もあったので、石材の残存は見られないものの、補強材に使用されたと考えられる。

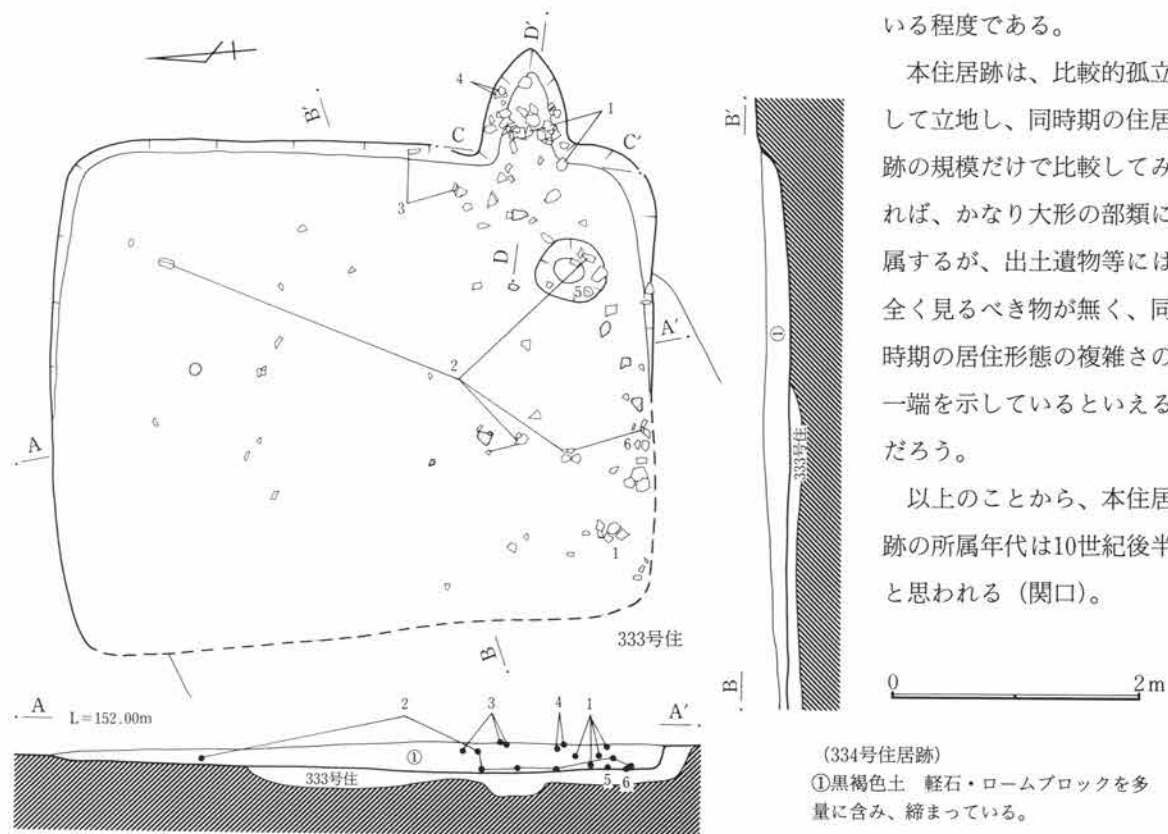
貯蔵穴は、竈前のピットが相当すると考えられ、径50cm・深さ17cmを測る円形を呈している。

遺物は竈を中心に分布しているが、個体の残存率は低い。竈関係の羽釜を除くと土師質の小皿がみつ

ている程度である。

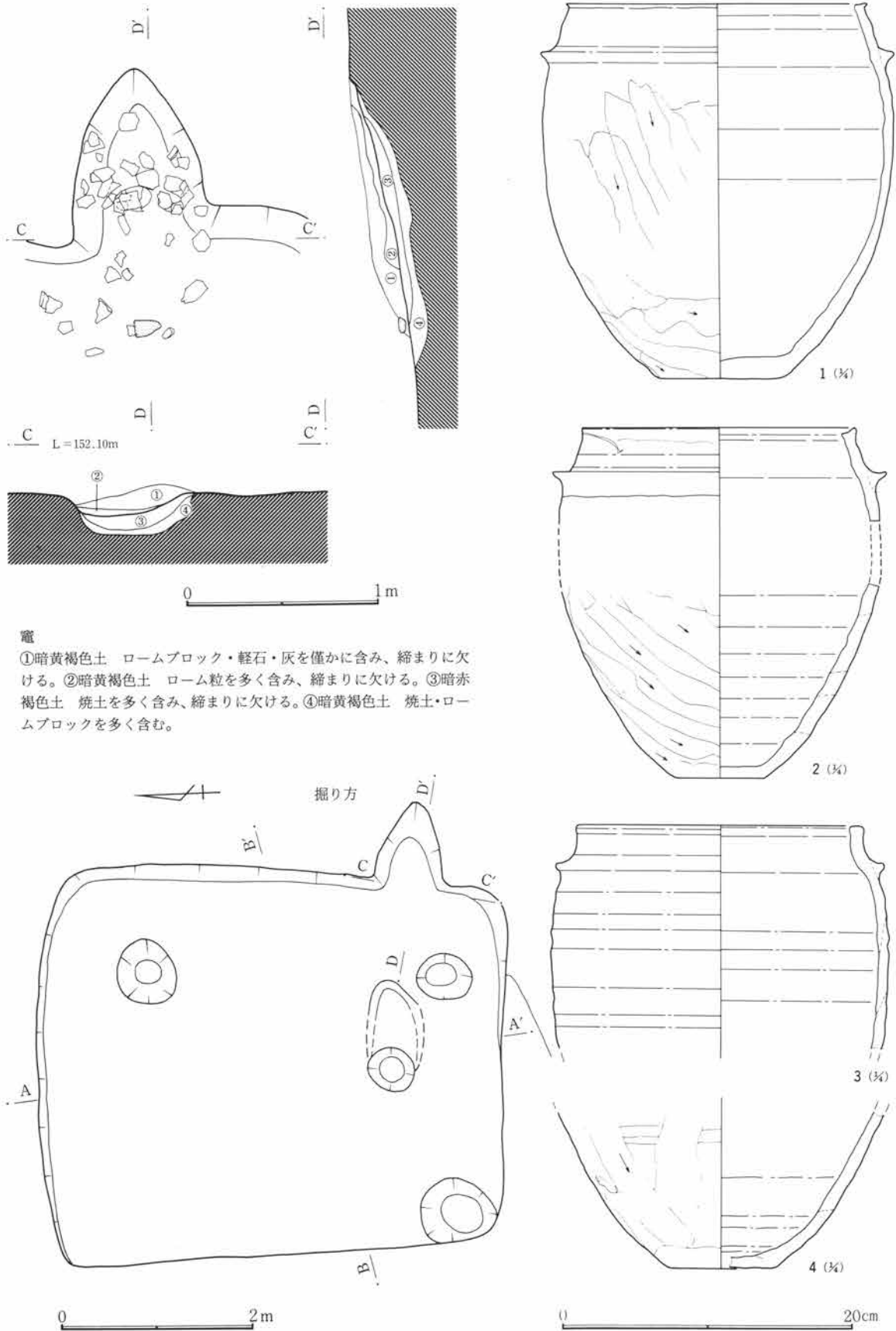
本住居跡は、比較的孤立して立地し、同時期の住居跡の規模だけで比較してみれば、かなり大形の部類に属するが、出土遺物等には全く見るべき物が無く、同時期の居住形態の複雑さの一端を示しているといえるだろう。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（関口）。



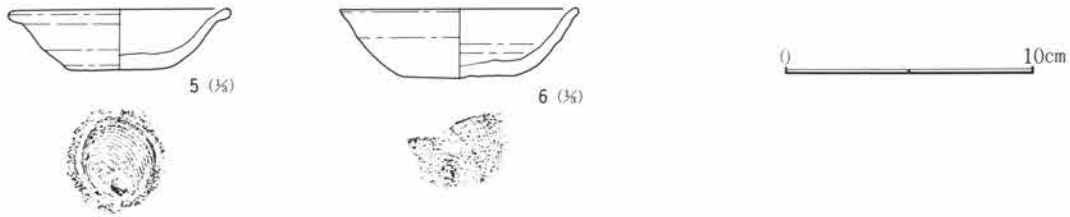
(334号住居跡)
①黒褐色土 軽石・ロームブロックを多量に含み、締まっている。

第110図 334号住居跡実測図(1)



第111図 334号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第112図 334号住居跡出土遺物実測図(2)

第48表 334号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
111-1 46	須恵器 羽 釜	竈内+4 2/3残存	口(20.6) 底 8.6 高 25.9	①普、石英・砂粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	輪積成形後、ロクロ使用。外面篋削り。	
111-2 47	須恵器 羽 釜	床面+4 破片	口(18.8) 底(6.2) 高(24.3)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗黄褐色	輪積成形後、ロクロ使用。外面篋削り。	
111-3 47	須恵器 羽 釜	床面+16 破片	口(19.6) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤灰色	輪積成形後、ロクロ使用。	
111-4	土 師 器 甕	竈内+16 破片	口 — 底(7.0) 高 —	①粗、黒色鉱物粒、砂粒多 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、ロクロ使用。外面篋削り。	
112-5 47	土 師 器 坏	床面+2 1/2残存	口(9.0) 底 4.5 高 2.4	①普、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
112-6 47	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口(9.1) 底(4.4) 高 2.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	

337号住居跡 (第113・114図、第49表、図版24・47)

本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、38-5グリッドに単独で位置する。先行する336号住居跡(奈良)がすぐ北側に隣接するが、両者の主軸方向がほぼ一致するにも拘わらず、時期的には同時存在を考え難い状況にある。住居跡による切り合いはないが、南北方向の耕作溝二条によって中央以西を斜めに破壊される他、表土が浅く、覆土には浅間A軽石が多く含まれ、主として耕作によると考えられる攪乱が進んでいた。

平面形は東西4m20cm・南北3m10cmを測るやや歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施し、掘り方にはピット二基の他、住居跡東半が東壁に向かって全体に掘り込まれている状況を示す。竈右脇と北壁寄りに地山の掘り残しがあって、東壁が一直線には揃わないが、特に竈右脇の部分については柵状の施設があった可能性がある。柱穴・壁溝については検出されていない。

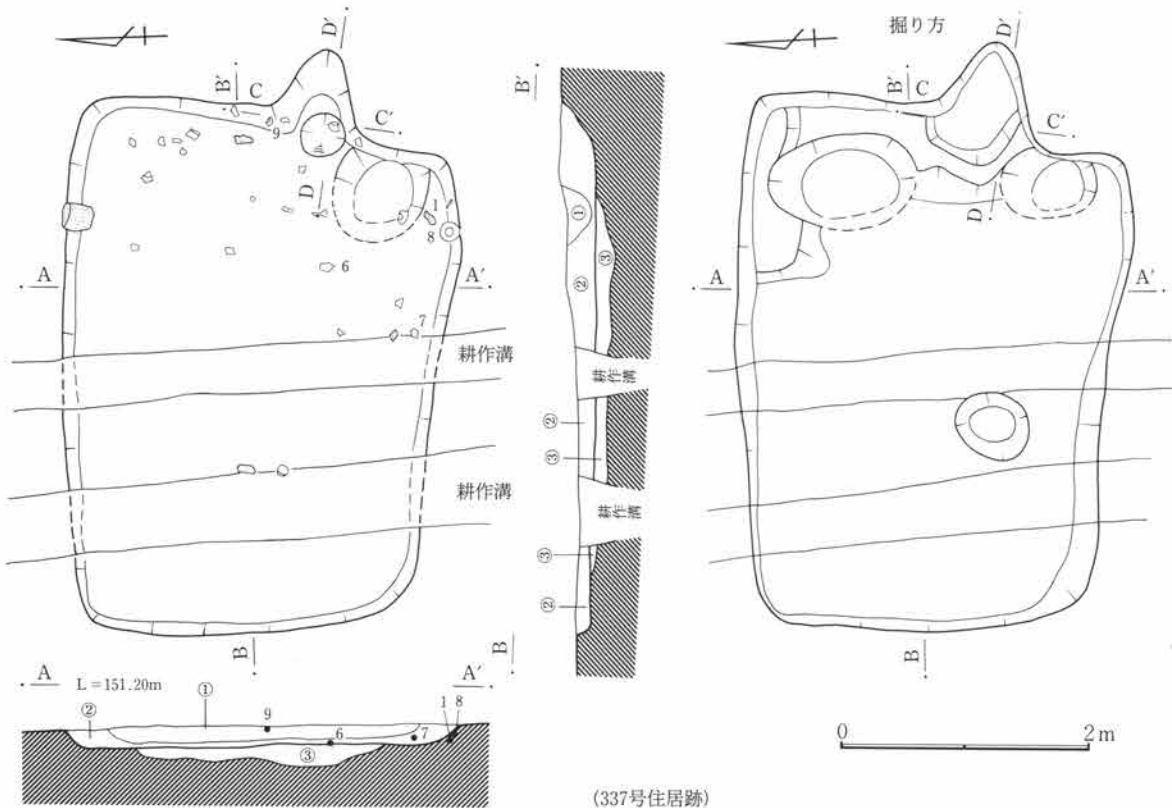
竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行70cm・深さ26cmを測る。燃烧部に浅い掘り込みがあり、煙道部との間に明瞭な段を造る。

貯蔵穴は、竈右脇のピットが相当すると思われるが、径70cm・深さ10cmを測る歪んだ円形を呈する。

遺物は少なめで、種類も乏しい。竈や貯蔵穴周辺の住居跡東半部にやや集中して分布している。坏類の出土がやや目立つが、概して個体の残存率は低い。主に竈覆土中に検出されている煮沸具は、コ字状口縁土師器甕で、羽釜は伴わないようである。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩2個、絹雲母緑泥片岩・絹雲母石墨片岩各1個(計0.7kg)が検出されている。

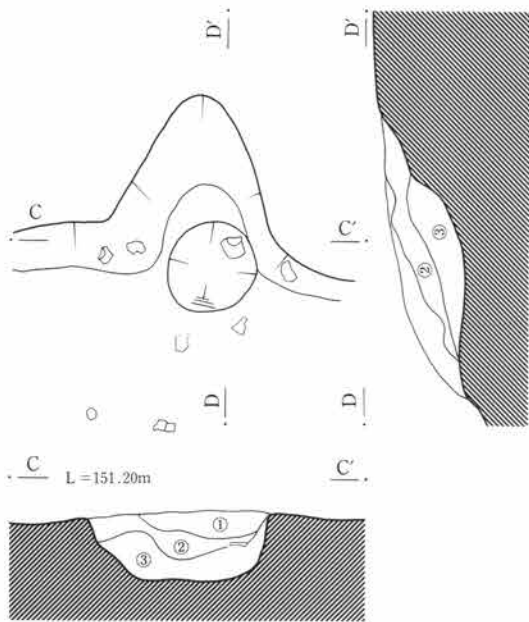
以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(関口)。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



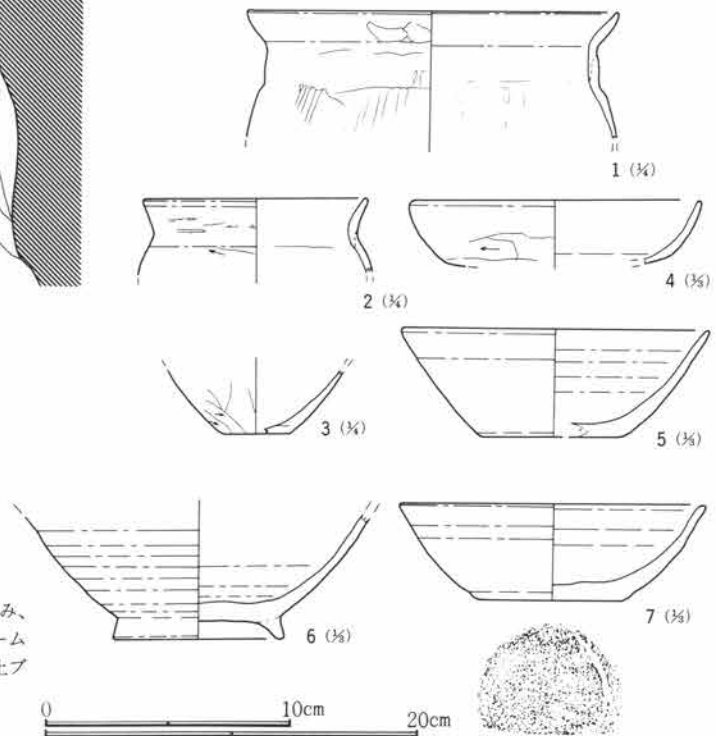
(337号住居跡)

①暗青灰色土 A軽石純層。②暗黄褐色土 多量のロームブロック・少量の軽石を含み、縮まりに欠ける。③黄灰褐色土 ローム粒を多く含む。



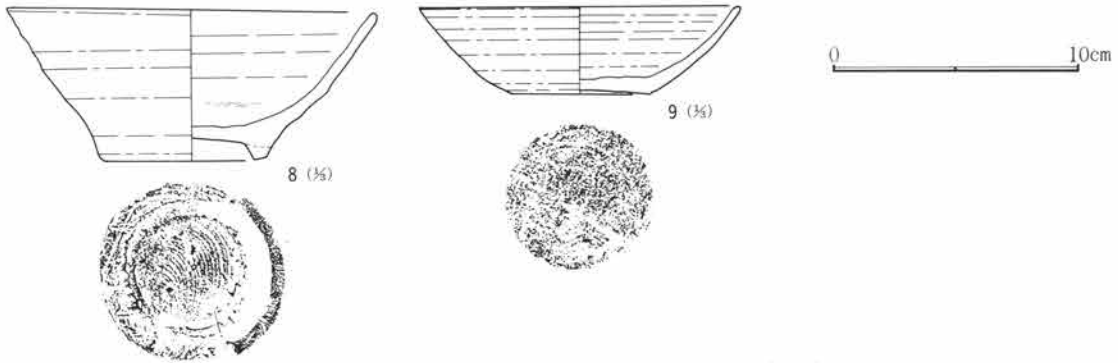
竈

①暗黄褐色土 焼土・灰・ロームブロックを僅かに含み、やや縮まりに欠ける。②暗赤褐色土 焼土・灰・ロームブロックを多く含み、縮まっている。③赤色土 焼土ブロックを主体とし固く縮まっている。



第113図 337号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第114図 337号住居跡出土遺物実測図(2)

第49表 337号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
113-1	土師器 甕	床面+2 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
113-2	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(12.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
113-3	土師器 小型甕	覆土 小破片	口— 底(4.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、外面篋削り。	
113-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(11.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
113-5	須恵器 埴	覆土 破片	口(12.4) 底(5.6) 高4.3	①粗、白色・褐色鉾物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
113-6	須恵器 高台付埴	床面+1 破片	口— 底7.0 高—	①粗、石英・黒色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
113-7	須恵器 坏	床面+5 1/2残存	口(12.4) 底5.6 高3.8	①粗、雲母・黒色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
114-8 47	須恵器 高台付埴	床面+4 ほぼ完形	口15.0 底(6.0) 高6.0	①粗、白色鉾物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
114-9 47	須恵器 埴	床面+12 1/2残存	口(13.0) 底5.8 高3.4	①粗、雲母・石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	粘土が付着

339号住居跡（第115・116図、第50表、図版24・47・57・59）

本住居跡は、第5次調査区北端近くの緩斜面にあり、35-4グリッドに単独で位置する。13号住居状遺構北東隅を南西隅で切っている。

表土の流失等により西壁は痕跡程度であるが、平面形は東西4m10cm・南北4m30cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-68°-Eを示すと思われる。床面には、竈周辺を中心に貼床を施し、掘り方には径80cm程のピット二基と、壁を画するような掘り込みが2カ所認められた。柱穴・壁溝については検出されていない。

竈は、東壁右寄りにあり、幅70cm・奥行60cm・深さ30cmを測るが、遺存状態は不良である。

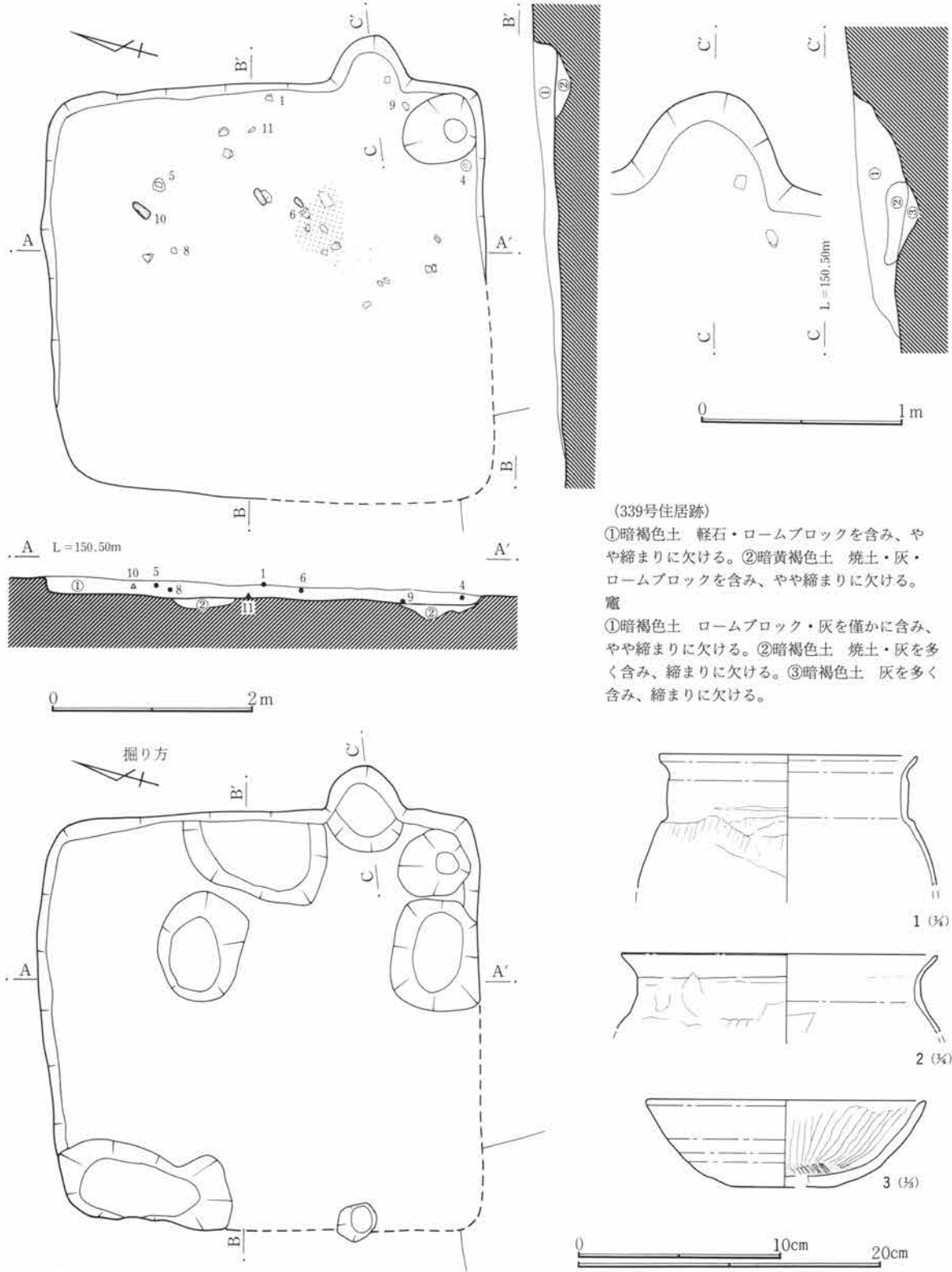
貯蔵穴は竈右脇にあり、径70cm・深さ10cmを測る円形を呈する。

遺物は少なく、残存率も低い。煮沸具はコ字状口縁甕である。時期の大きく異なる完形の灰釉皿の出土が

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

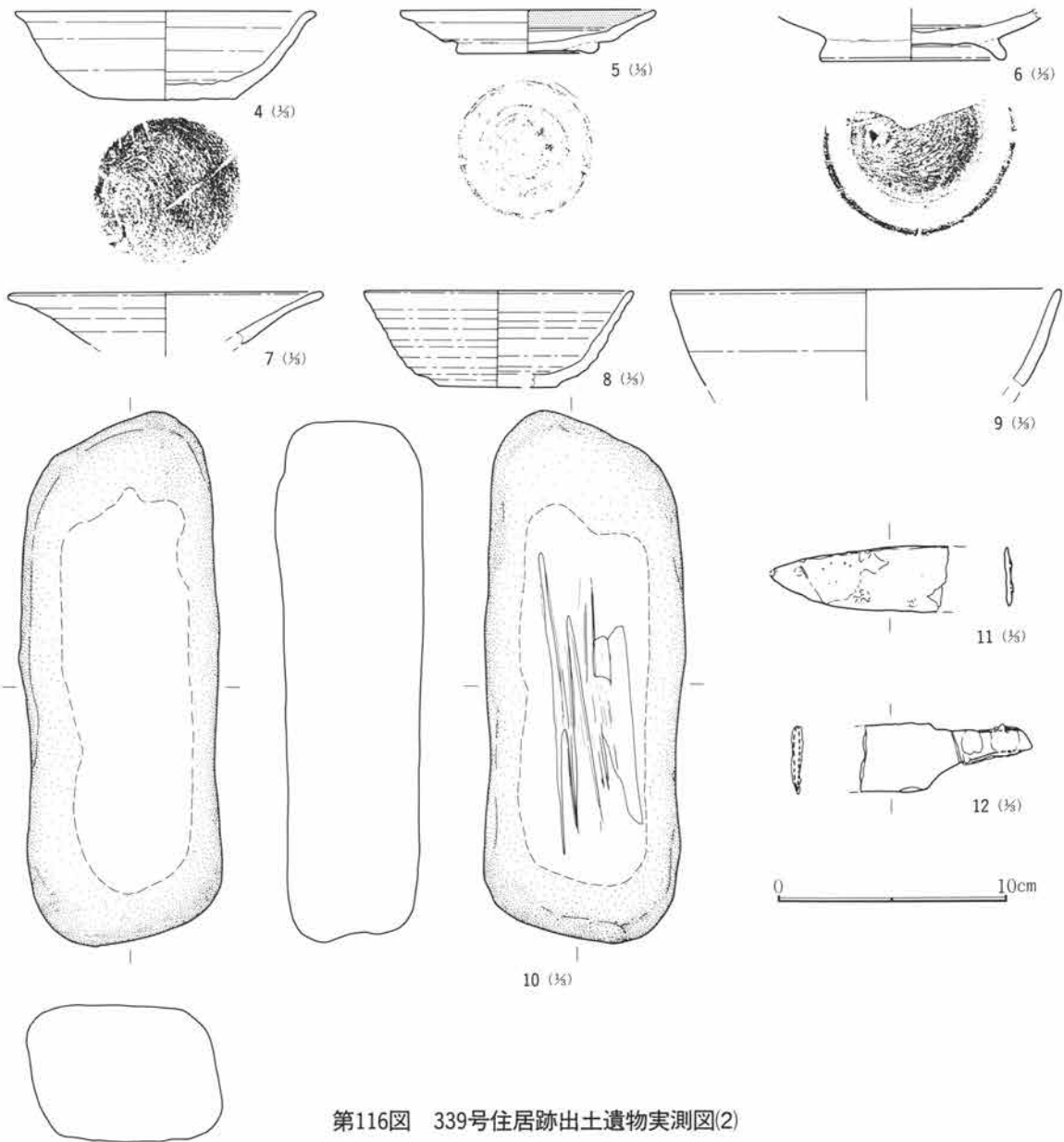
注意される。住居跡中央に焼土・粘土が認められ、あるいは後出の住居跡が切り合っていたかもしれない。他に薦編石状の輝岩1個(0.62kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(中沢)。



第115図 339号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第116図 339号住居跡出土遺物実測図(2)

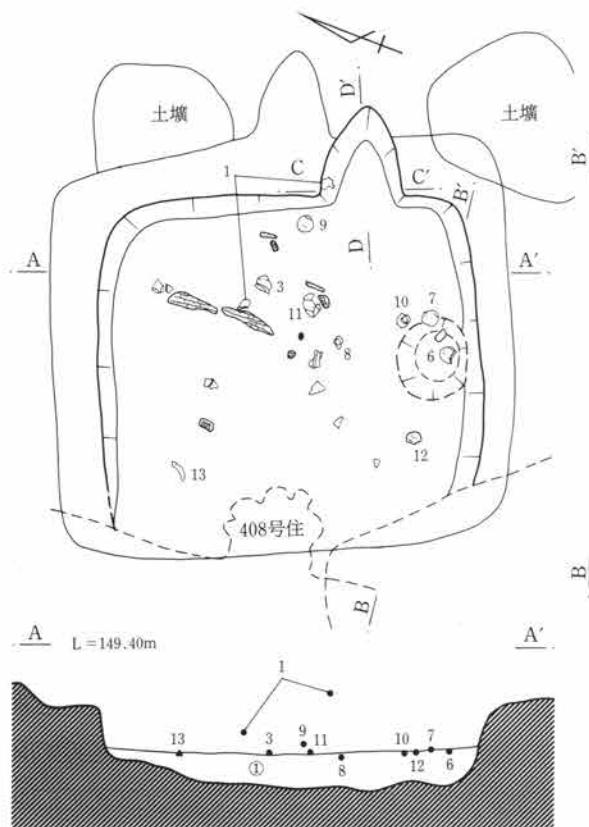
第50表 339号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
115-1 47	須恵器 甕	床面+10 小破片	口(17.2) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③外面暗褐色、内面橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
115-2	須恵器 甕	覆土 小破片	口(22.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
115-3	土師器 坏	覆土 破片	口(14.0) 底(3.0) 高 4.2	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色	ロクロ成形後、内面磨き。	
116-4 47	須恵器 坏	床面+5 1/2残存	口(13.2) 底 6.4 高 3.8	①粗、黒色鉾物粒・雲母 ②還元焰、やや軟質 ③暗黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
116-5 47	灰釉陶器 高台付皿	床面+8 完形	口 11.1 底 6.2 高 1.8	①普、白色・黒色鉱物粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部回転篋削り。高台貼付。	丸石2号窯式
116-6	須恵器 高台付塊	床面+5 破片	口 — 底 8.2 高 —	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
116-7	須恵器 皿	覆土 小破片	口(13.8) 底 — 高 —	①粗、雲母・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形。	
116-8	須恵器 坏	床面+5 破片	口(11.8) 底(5.4) 高 4.1	①普、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
116-9	須恵器 塊	床面+2 小破片	口(17.0) 底 — 高 —	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
116-10 57	石製品 砥石	床面+6 完形	長 22.5 厚 5.8 幅 8.5 重 1.700		荒砥。二面使用。刃試しの傷あり。	砂岩
116-11 59	鉄製品 刀子?	床面直上	長 — 厚 0.3 幅 2.6 重 9.2			12と同一個体か
116-12 59	鉄製品 刀子?	覆土	長 — 厚 0.4 幅 2.8 重 13.3			

340号住居跡 (第117~119図、第51表、図版24・47・59)

本住居跡は、第5次調査区中央の埋没谷に面した緩斜面にあり、28・29-5グリッドに位置する。恐らく、1号住居跡(古墳)の東壁を切り込んで構築する。また、407号住居跡(平安)が上部を削平し、竈を貯蔵穴によって抜かれている。また、408号住居跡(平安)が西壁を掘り込んでいる。



平面形は東西2m80cm・南北3m5cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-66°-Eを示す。床面は全面に貼床を施し、掘り方には三基のピットが検出された。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行80cm・深さ30cmを測る。

遺物量はやや多いが、残存率は低い。煮沸具はコ字状口縁甕である。薦編石状の絹雲母石墨片岩1個(0.2kg)が検出されている。

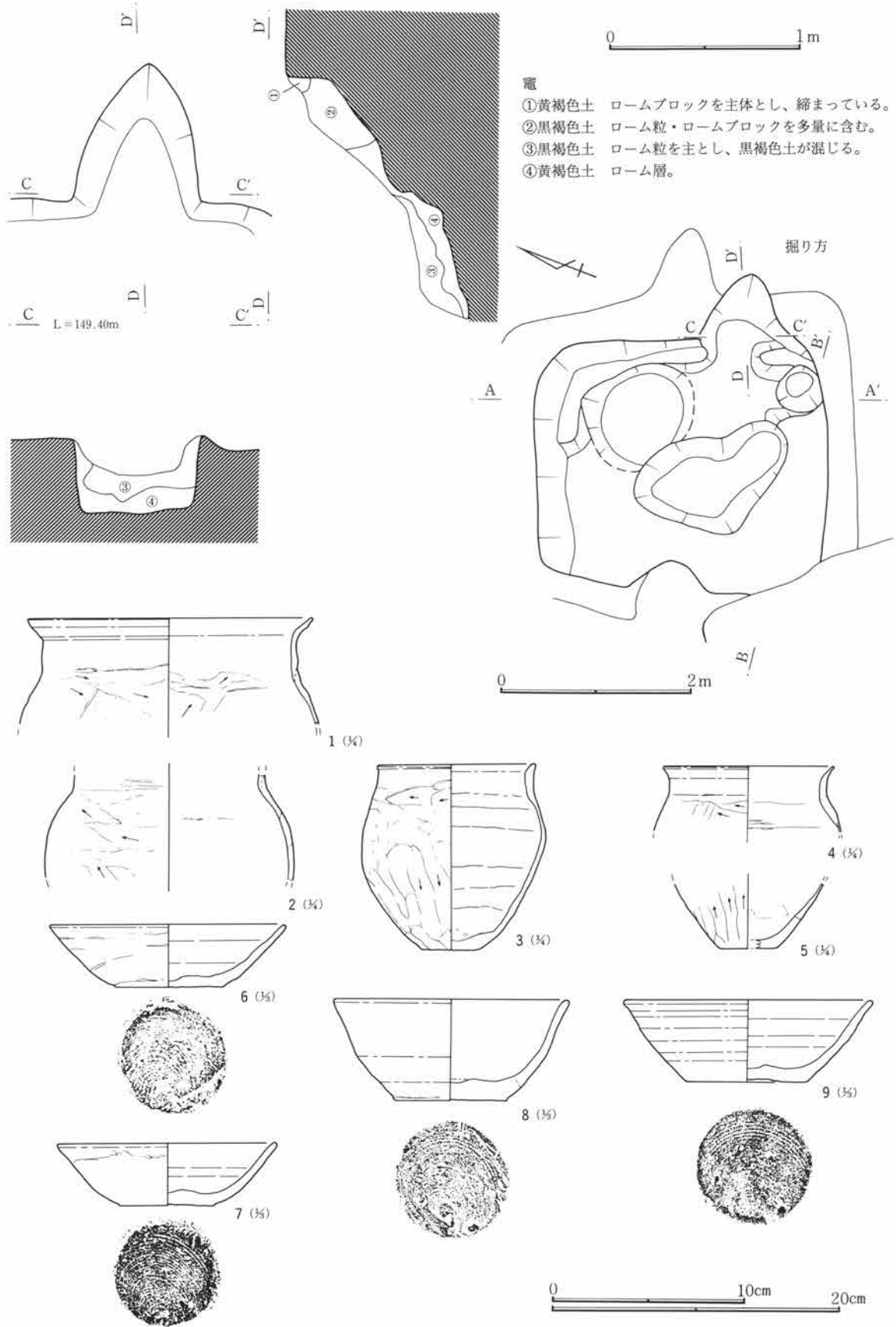
以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。

(340号住居跡)
①暗褐色土 ロームブロックを多く含み、締まっている。

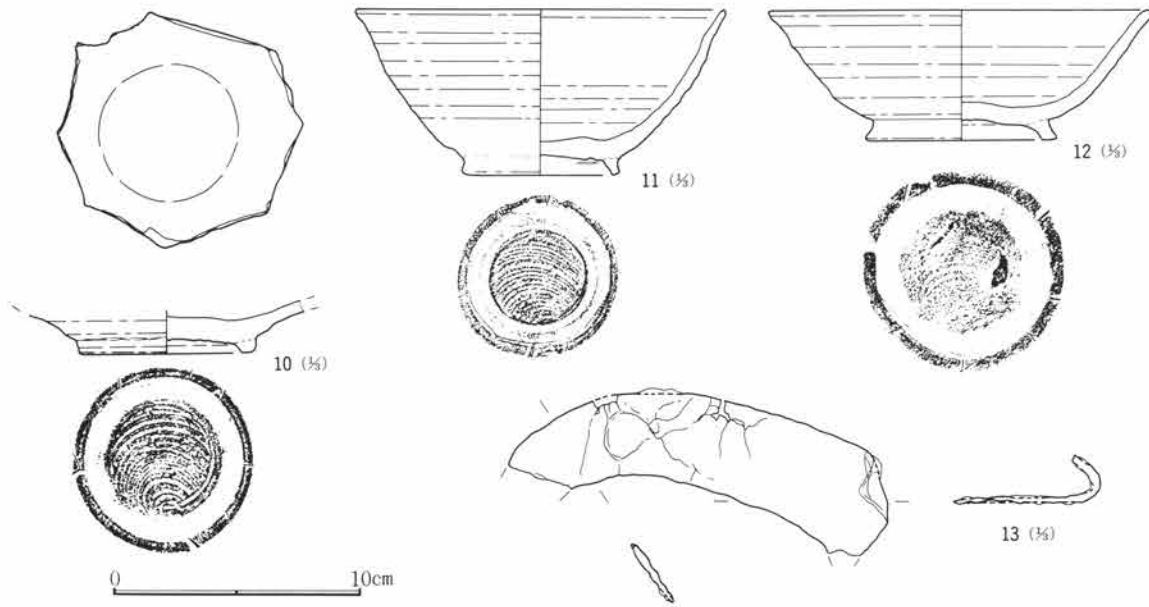
0 2m

第117図 340号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第118図 340号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第119図 340号住居跡出土遺物実測図(2)

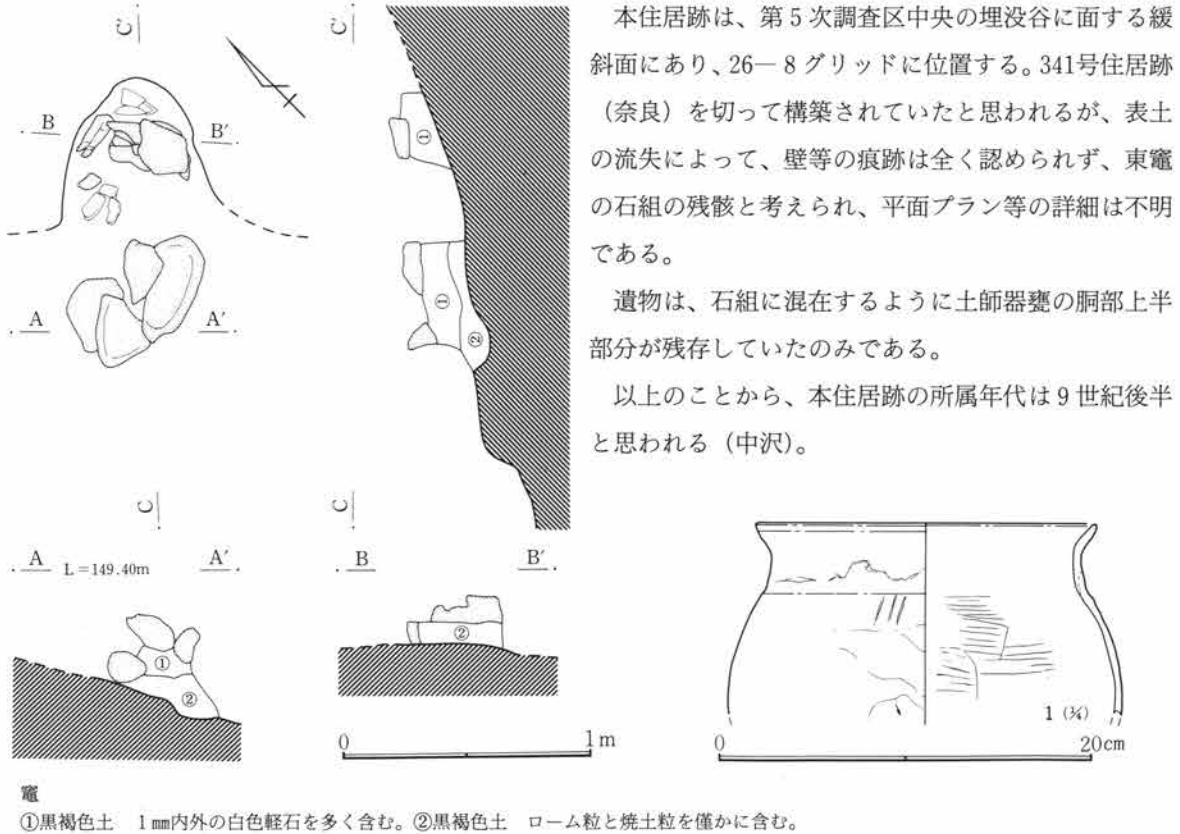
第51表 340号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
118-1	須恵器 甕	床面+39 破片	口(20.0) 底 — 高 —	①細、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
118-2	土師器 甕	覆土 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
118-3 47	土師器 小型甕	床面+23 ほぼ完形	口 11.1 底 3.9 高 12.7	①細、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面上半横方向篋削り。下半縦方向篋削り。内面底部撫で。	
118-4	土師器 小型甕	覆土 小破片	口(12.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色、断面赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	二次焼成によるか
118-5	土師器 小型甕	覆土 破片	口 — 底(4.0) 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
118-6 47	須恵器 坏	床面+25 1/2残存	口 12.5 底 5.7 高 3.2	①粗、黒色鉾物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰、断面暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
118-7 47	須恵器 坏	床面+23 ほぼ完形	口 11.6 底 5.0 高 3.2	①粗、黒色・灰色鉾物細粒 ②還元焰気味、軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	体部～底部、内外面に黒斑あり
118-8	須恵器 塊	床面+20 破片	口(12.4) 底 5.8 高 5.2	①普、石英・黒色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③暗黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	体部外面に黒斑あり
118-9 47	須恵器 坏	床面+32 ほぼ完形	口 13.0 底 6.4 高 4.2	①粗、黒色鉾物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
119-10	須恵器 高台付皿	床面+20 破片	口 — 底 7.0 高 —	①細、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	体部を故意に打ち割る
119-11 47	須恵器 高台付塊	床面+25 完形	口 15.0 底 6.4 高 6.5	①やや粗、石英・灰色鉾物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
119-12 47	須恵器 高台付塊	床面+20 1/2残存	口 15.4 底 7.8 高 5.1	①やや粗、黒色・褐色鉾物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
119-13 59	鉄製品 鎌	床面+14	長 — 幅 3.0	厚 0.35 重 48.4		

343号住居跡（第120図、第52表、図版25・47）



第120図 343号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第52表 343号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
120-1 47	土師器 甕	竈内+10 破片	口(18.4) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	

353号住居跡（第121・122図、第53表、図版25・47）

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、31-2・3グリッドに単独で位置する。周囲は比較的近接した時期の住居跡が集中して分布しているが、台地平坦部とは逆に古墳時代の住居跡は殆ど見られず、時期による立地の違いを感じさせる。傾斜の関係で、東壁の残りは良いが西壁は痕跡に近い。

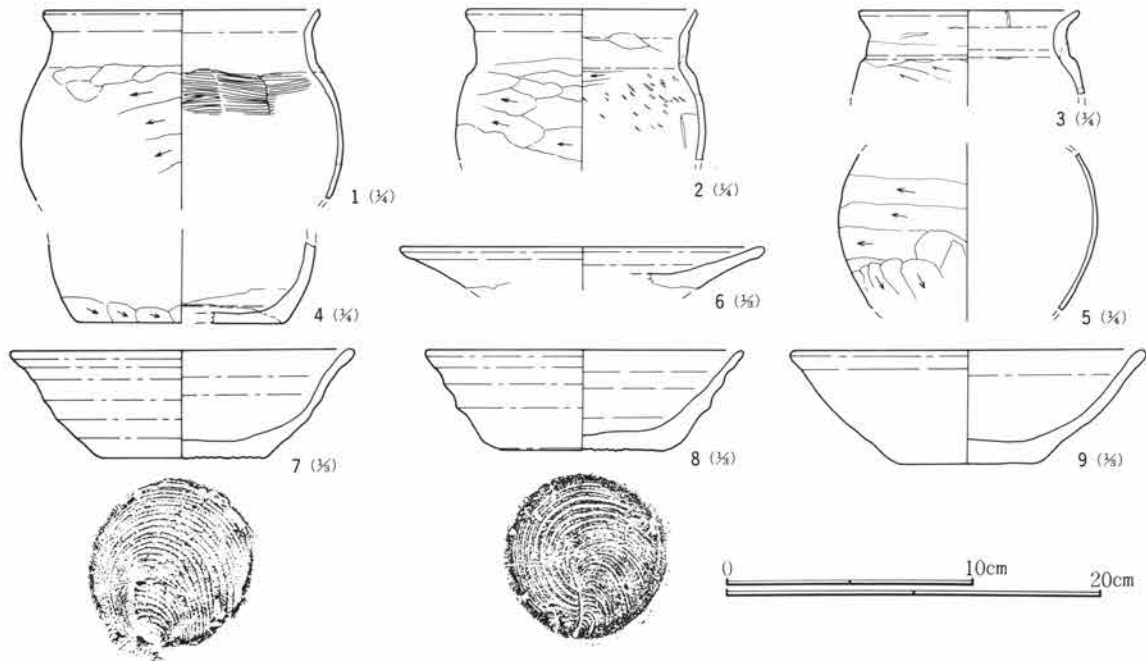
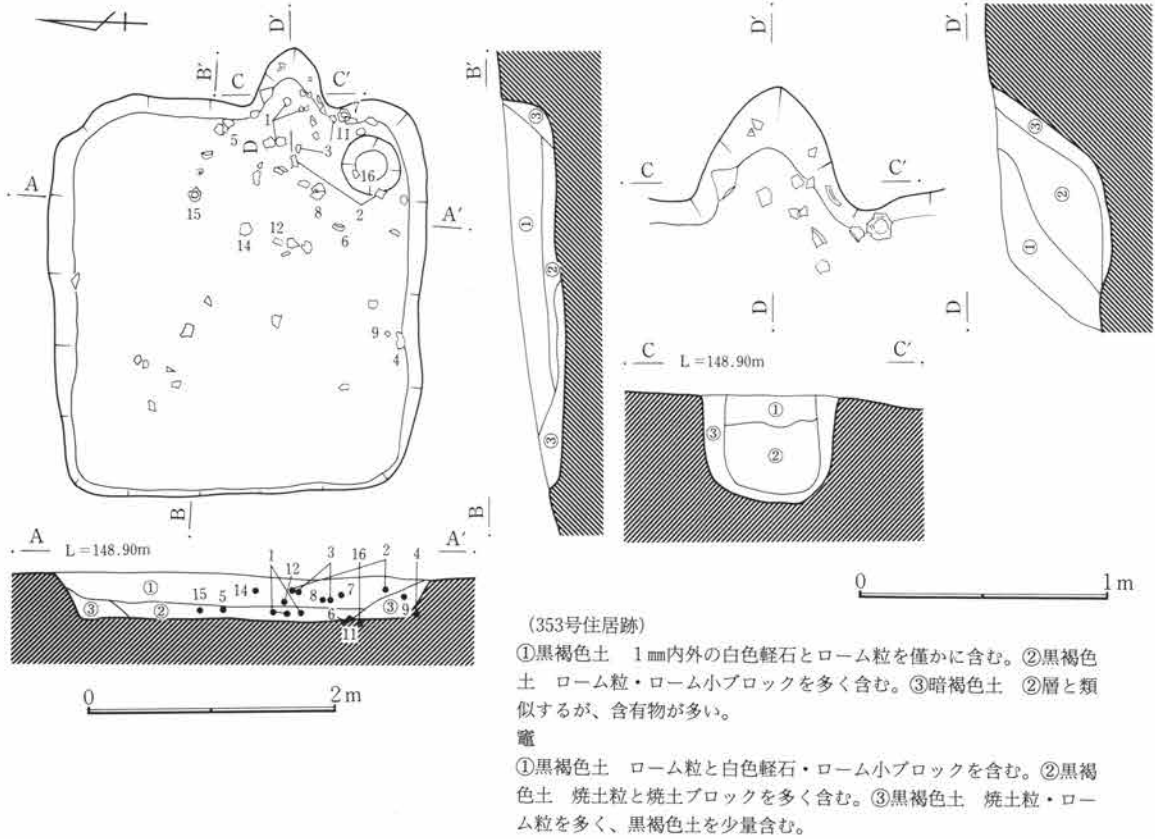
平面形は東西3m20cm・南北3mを測る隅丸正方形を呈し、主軸方向はN-78°-Eを示す。床面はローム（地山）を叩き締めており、貼床は認められない。柱穴・壁溝も検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行60cm・深さ30cmを測る。覆土に若干土器を含むが、補強材として石材等を用いていた形跡はない。本来石組は伴わなかったものと思われる。覆土の厚さの割には残存状況は不良である。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径45cm・深さ11cmを測る円形を呈する。

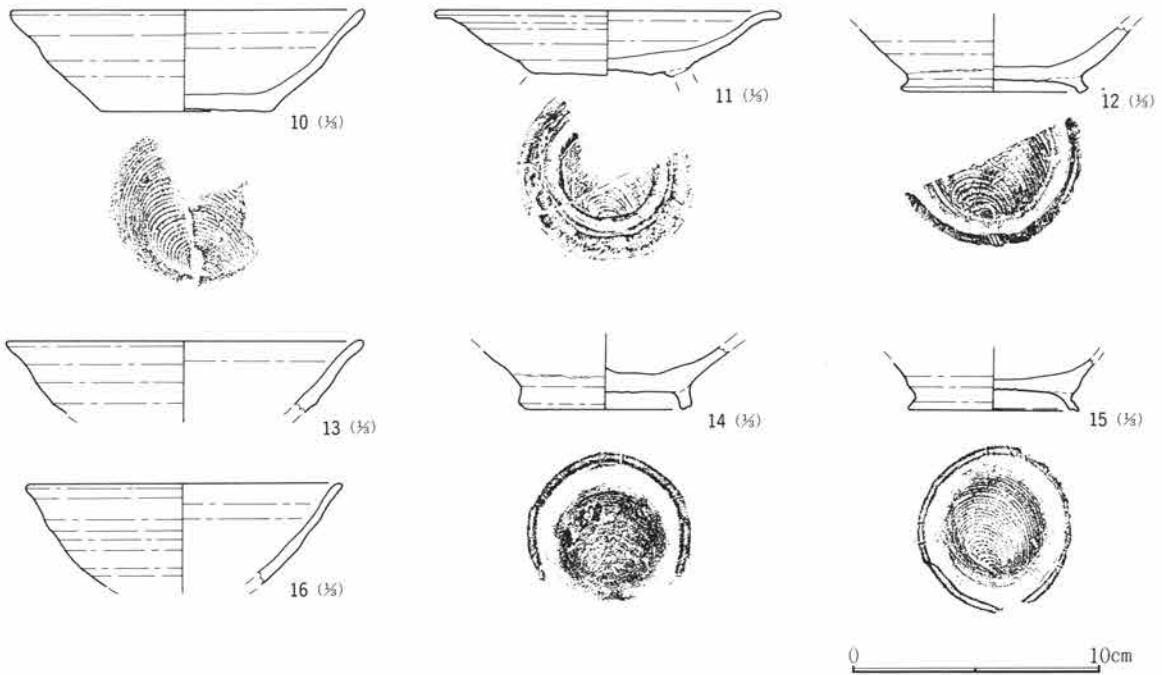
遺物は竈を中心に分布し、量的には少なくないが、残存率は概して低い。そうしたなかでは坏・皿類の出土が目立つ。煮沸具は、大小二種のコ字状口縁土師器甕である。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。



第121図 353号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第122図 353号住居跡出土遺物実測図(2)

第53表 353号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
121-1 47	土師器 小型甕	竈内+4 破片	口(14.7) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
121-2	土師器 小型甕	床面+22 破片	口(12.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
121-3	土師器 小型甕	床面+15 破片	口(11.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
121-4 47	須恵器 小型甕	床面+4 小破片	口— 底(11.2) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③暗黄灰色、断面黄灰色	輪積成形後、外面一部篋削り。	外面に炭化物が 付着
121-5	土師器 小型甕	床面+5 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。	
121-6	須恵器 高台付皿	床面-2 破片	口(14.8) 底— 高—	①粗、褐色鉍物粒 ②還元焰、やや硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
121-7 47	須恵器 坏	床面+18 %残存	口(14.0) 底 6.4 高 4.2	①粗、黒色鉍物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
121-8 47	須恵器 坏	床面+14 %残存	口(12.8) 底 6.4 高 3.9	①粗、石英・黒色鉍物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
121-9	須恵器 坏	床面+15 小破片	口(14.0) 底(5.5) 高 4.5	①粗、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色、一部黒変	ロクロ成形。	
122-10	須恵器 坏	覆土 破片	口(14.2) 底 7.0 高 4.0	①粗、黒色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
122-11	須恵器 高台付皿	床面直上 破片	口(13.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台剥離

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
122-12	須恵器 高台付埴 破片	床面+12 破片	口— 底(7.1) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③外面暗灰色、内面橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
122-13	須恵器 坏	覆土 小破片	口(14.4) 底— 高—	①粗、褐色鉍物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
122-14	須恵器 高台付埴 小破片	床面+20 小破片	口— 底7.0 高—	①粗、石英・白色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
122-15	須恵器 高台付埴 小破片	床面+5 小破片	口— 底6.8 高—	①粗、黒色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
122-16	須恵器 坏	床面-3 小破片	口(12.6) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	

354号住居跡 (第123~125図、第54表、図版25・48・57)

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、31-0・1グリッドに位置する。竈が355号住居跡(平安)の南壁を切っている。

平面形は東西・南北共に3m60cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-8°-Eを示す。床面には貼床を施し、床下には貯蔵穴と考えられるものも含め四基のピットが認められた他、西壁に接してやや大きな舟形の掘り込みが認められた。柱穴・壁溝については検出されていない。

廃棄時の竈は、北壁中央やや右寄りにあり、幅60cm・奥行65cm・深さ30cmを測る。東壁にも焼土・灰のやや集中する地点があり、貯蔵穴

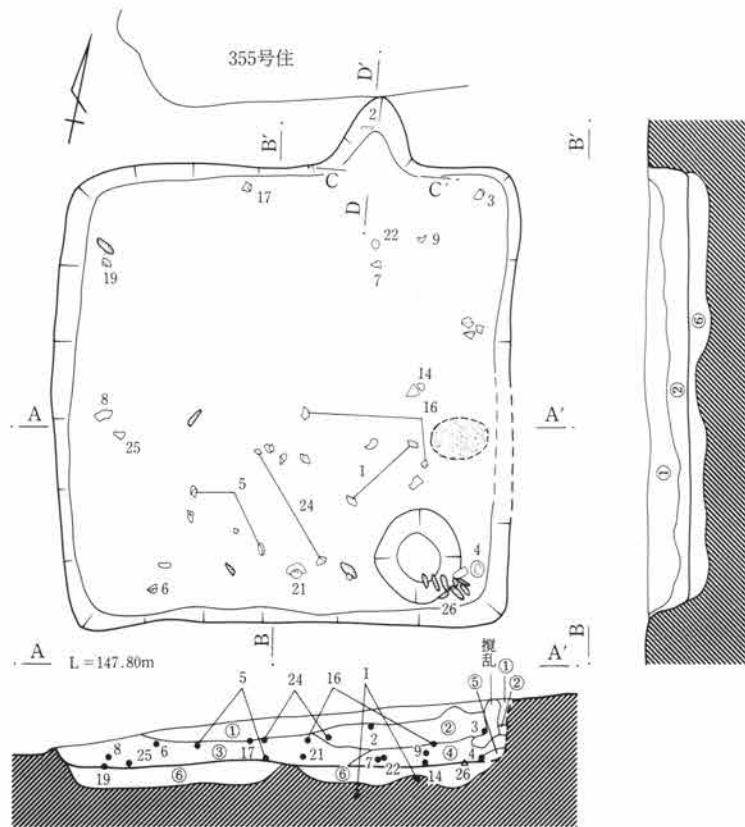
の位置からも先行する作り替え竈が存在した可能性がある(破線の位置)が、残存状態は極めて悪く、図化出来ない。

貯蔵穴は南東隅にあり、径70cm・深さ11cmを測る円形を呈する。周囲に完形の坏や薦編石状の石がやや原位置を保った状態で検出されている。

遺物はやや多く、坏・蓋類の出土が目立ち、特に坏類には各

(354号住居跡)

- ①茶褐色土 ローム粒が混じる。
- ②茶褐色土 ロームブロック(〜2cm)が混じる。
- ③茶褐色土 ロームブロックを多く含む。
- ④茶褐色土 軽石・ローム粒を含む。
- ⑤赤褐色土 炭・焼土を含む。
- ⑥黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭を含む。



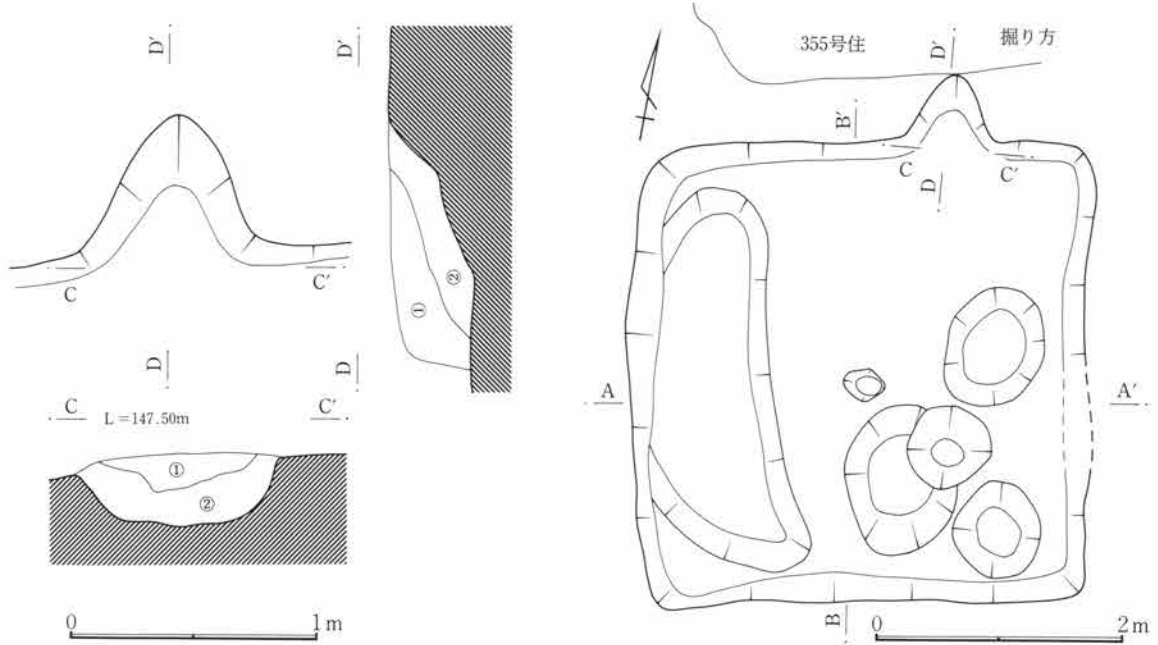
第123図 354号住居跡実測図(1)

0 2m

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

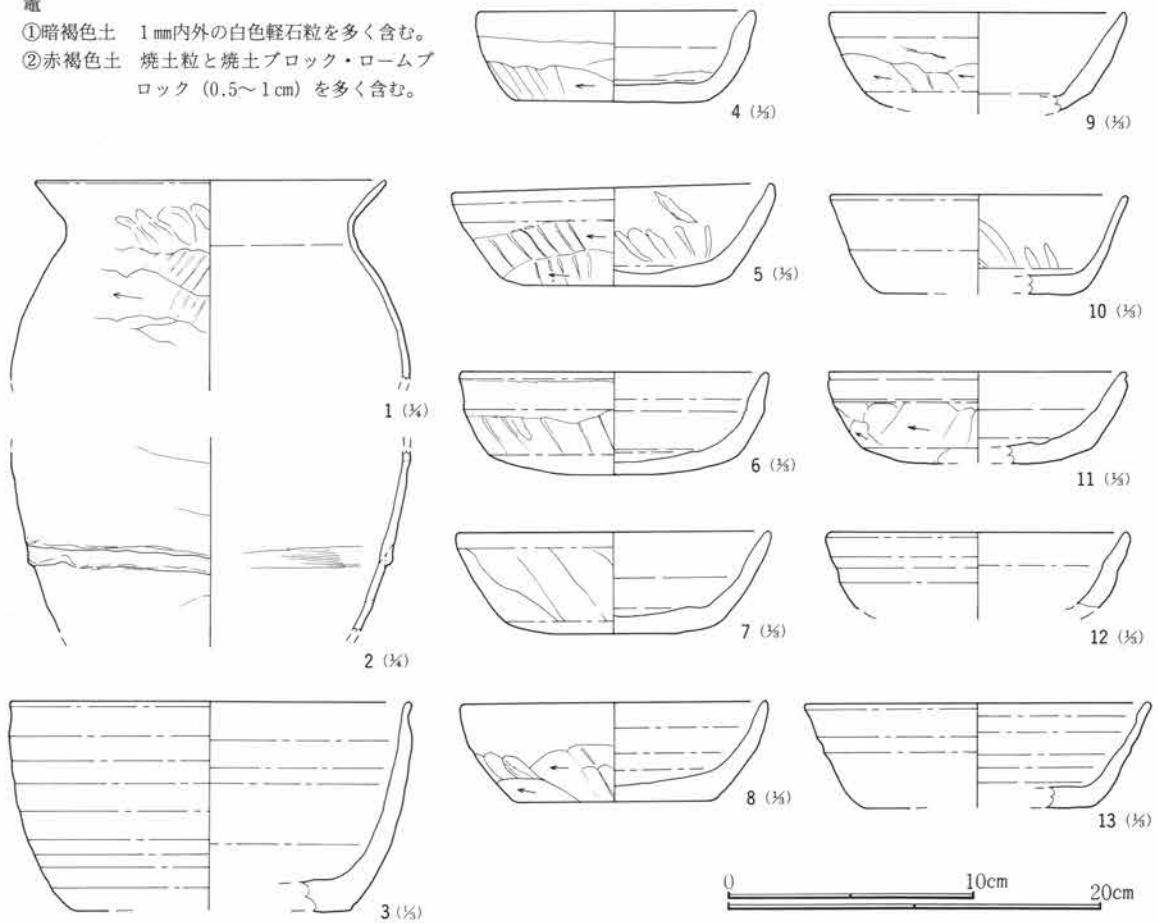
種が認められる。煮沸具は、コ字状口縁土師器甕が検出されている。他に薦編石状の緑泥片岩5個、石墨絹雲母緑泥片岩2個、緑簾緑泥片岩・点紋絹雲母石墨片岩各1個（計2.6kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる（中沢）。



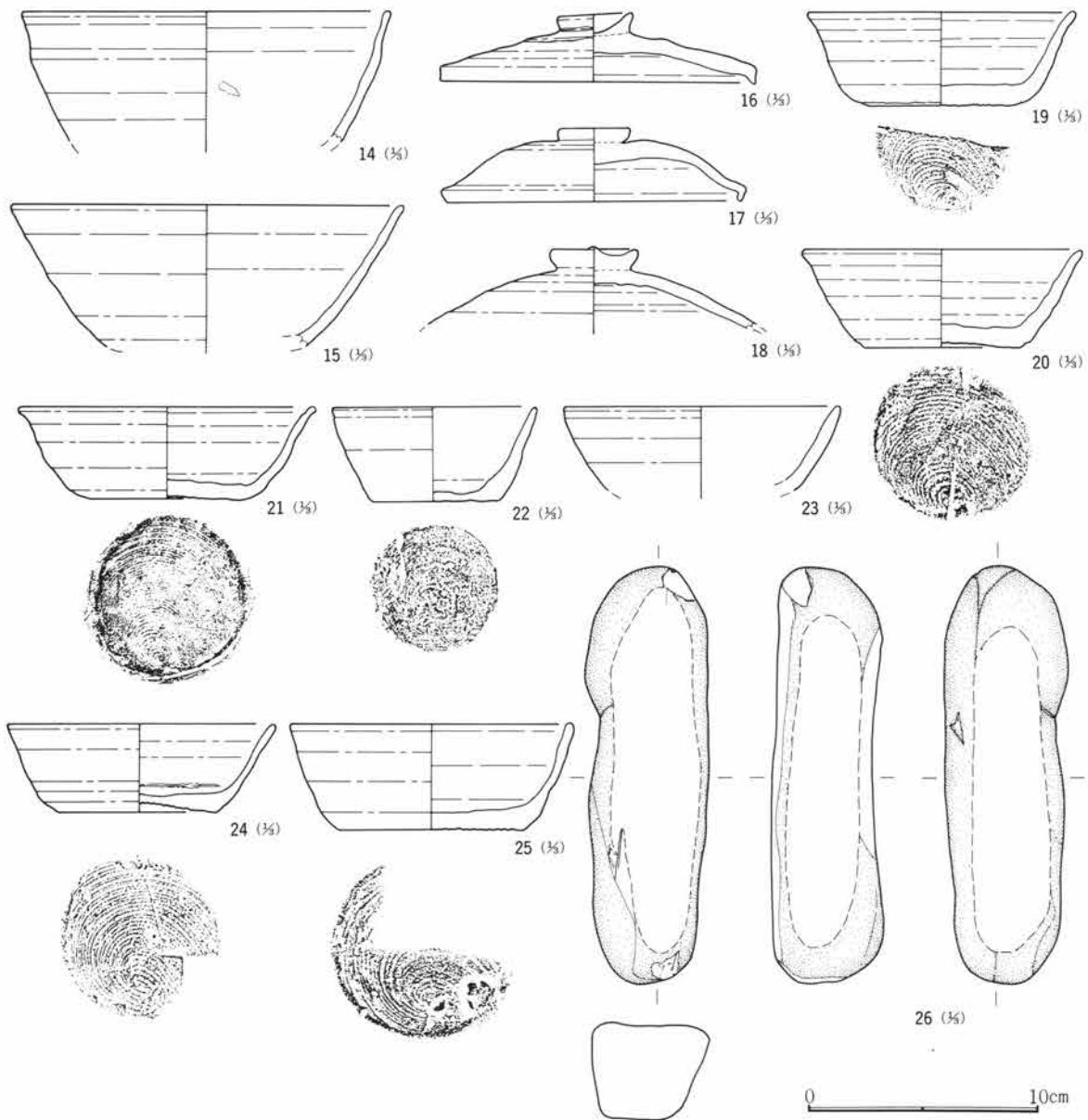
竈

- ①暗褐色土 1mm内外の白色軽石粒を多く含む。
- ②赤褐色土 焼土粒と焼土ブロック・ロームブロック（0.5～1cm）を多く含む。



第124図 354号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第125図 354号住居跡出土遺物実測図(2)

第54表 354号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
124-1	土師器 甕	床面-8 破片	口(18.9) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-2	土師器 甕	竈内+30 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。上下分割製作の痕跡あり。	製作時の補修痕あり
124-3 48	須恵器 坏	床面+8 破片	口(16.2) 底(11.4) 高(8.2)	①粗、白色・褐色鉱物粒多 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面灰白色	ロクロ成形。	
124-4 48	土師器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 11.2 底 7.6 高 3.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-5 48	土師器 坏	床面+1 1/4残存	口 13.0 底 7.2 高 3.9	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
124-6 48	土 師 器 坏	床面+18 1/2残存	口 12.3 底 — 高 4.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-7	土 師 器 坏	床面+4 1/2残存	口(12.8) 底 (8.8) 高 (4.0)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-8 48	土 師 器 坏	床面+6 1/2残存	口(12.4) 底 (7.8) 高 (3.9)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-9	土 師 器 坏	床面+8 1/2残存	口(12.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-10	土 師 器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 底 (8.0) 高 (3.9)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗灰色、断面橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-11	土 師 器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
124-12	土 師 器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。	
124-13	須 惠 器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 底 (9.2) 高 (4.1)	①粗、黒色鉾物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
125-14	須 惠 器 坏	床面+2 破片	口(16.0) 底 — 高 —	①普、黒色鉾物細粒少 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	内面灰色
125-15	須 惠 器 坏	覆土 破片	口(17.0) 底 — 高 —	①粗、黒色鉾物細粒少 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
125-16 48	須 惠 器 蓋	床面+15 1/2残存	口 3.2 口 13.8 高 2.8	①粗、黒色鉾物細粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	内面灰色
125-17	須 惠 器 蓋	床面+15 破片	口 — 口 — 高 —	①粗、石英粒・雲母 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面褐色	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	
125-18	須 惠 器 蓋	覆土 破片	口 3.8 口 — 高 —	①粗、黒色鉾物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	
125-19 48	須 惠 器 坏	床面 1/2残存	口(11.6) 底 (6.0) 高 (4.0)	①粗、黒色鉾物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
125-20 48	須 惠 器 坏	床面+5 1/2残存	口(12.0) 底 6.8 高 4.2	①粗、雲母・黒色鉾物粒 ②還元焰、軟質 ③暗灰色、断面灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	内面灰白色
125-21 48	須 惠 器 坏	床面+5 1/2残存	口(13.0) 底 6.6 高 3.9	①粗、白色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
125-22 48	須 惠 器 坏	床面+4 完形	口 8.8 底 5.5 高 4.0	①粗、白色・褐色鉾物粒 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
125-23	須 惠 器 坏	覆土 破片	口(12.0) 底 — 高 —	①粗、黒色鉾物細粒少 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面灰白色	ロクロ成形。	内面灰白色
125-24 48	須 惠 器 坏	床面+15 1/2残存	口(11.6) 底 (6.8) 高 (3.7)	①粗、石英・黒色鉾物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
125-25 48	須 惠 器 坏	床面+2 1/2残存	口(12.2) 底 8.0 高 4.5	①粗、石英・黒色鉾物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
125-26 57	石 製 品 砥 石	床面 完形	長 18.7 幅 5.2	厚 4.1 重 500	荒砥。三面使用。	砂岩

355号住居跡 (第126～128図、第55表、図版26・48・58)

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、33-0・1グリッドに位置する。周囲には、比較的時期の近接したほぼ同大の住居跡が階段状に連なるが、西谷川による地形的制約もあって、本住居跡以西には殆ど住居跡の分布が見られない。特に、南側には空地状に住居跡の分布が見られず、第五次調査区の調査範囲に限っては、標高147.00m以下では居住域が見られないという際立った現象を示す。切り合い関係では、南壁を354号住居跡(平安)の竈によって僅かに切られている。

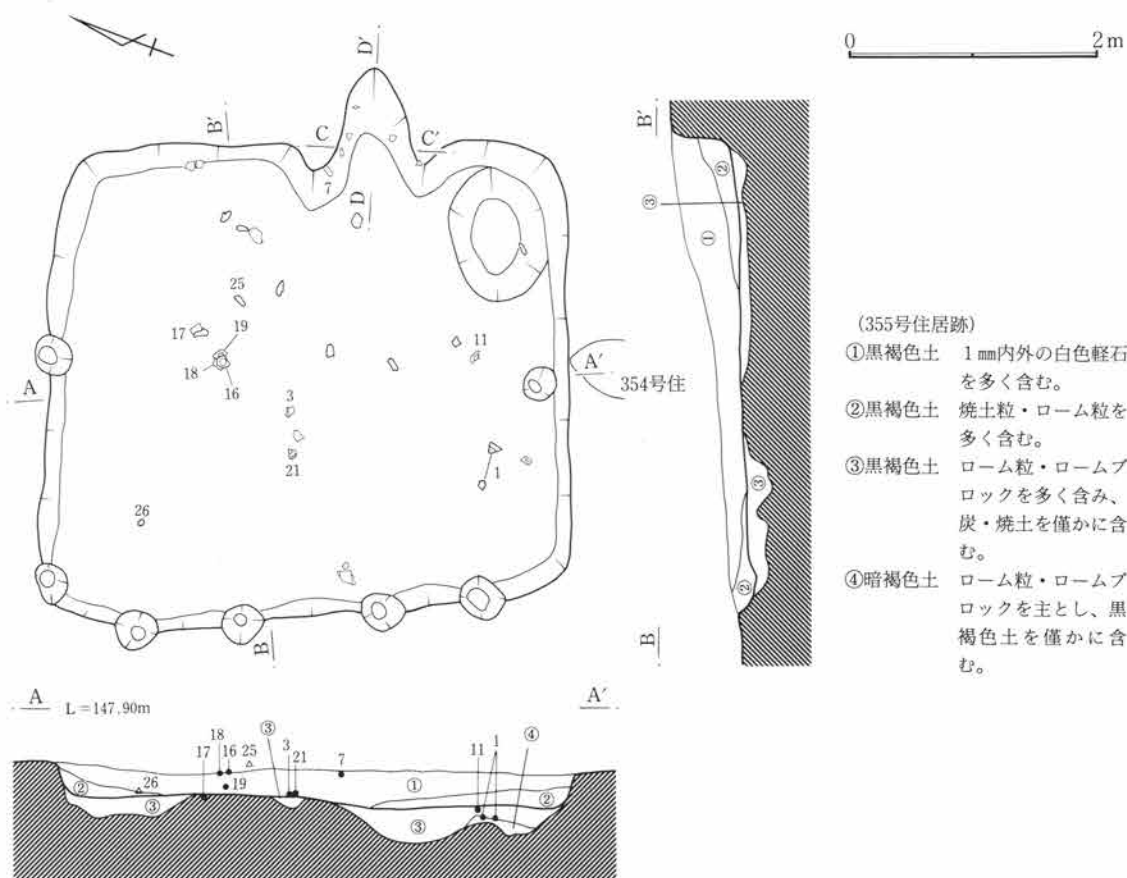
平面形は東西3m80cm・南北4m30cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-76°-Eを示す。床面は、一部地山を掘り残すが、ほぼ全面に貼床を施している。掘り方には、三時期に亘る竈前のピットの掘り直しが検出された他、北壁～西壁がL字型に大きく掘り込まれていた。北壁・南壁には一対になると見られる柱穴状のピットが二カ所、西壁には同じく五カ所のピットが検出されたが、南西隅に同様の物が無く、柱穴になる可能性は低い。壁溝は検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm・奥行1m5cm・深さ50cmを測る。

貯蔵穴は竈右脇にあり、長径1m・短径75cm・深さ13cmを測る楕円形を呈する。

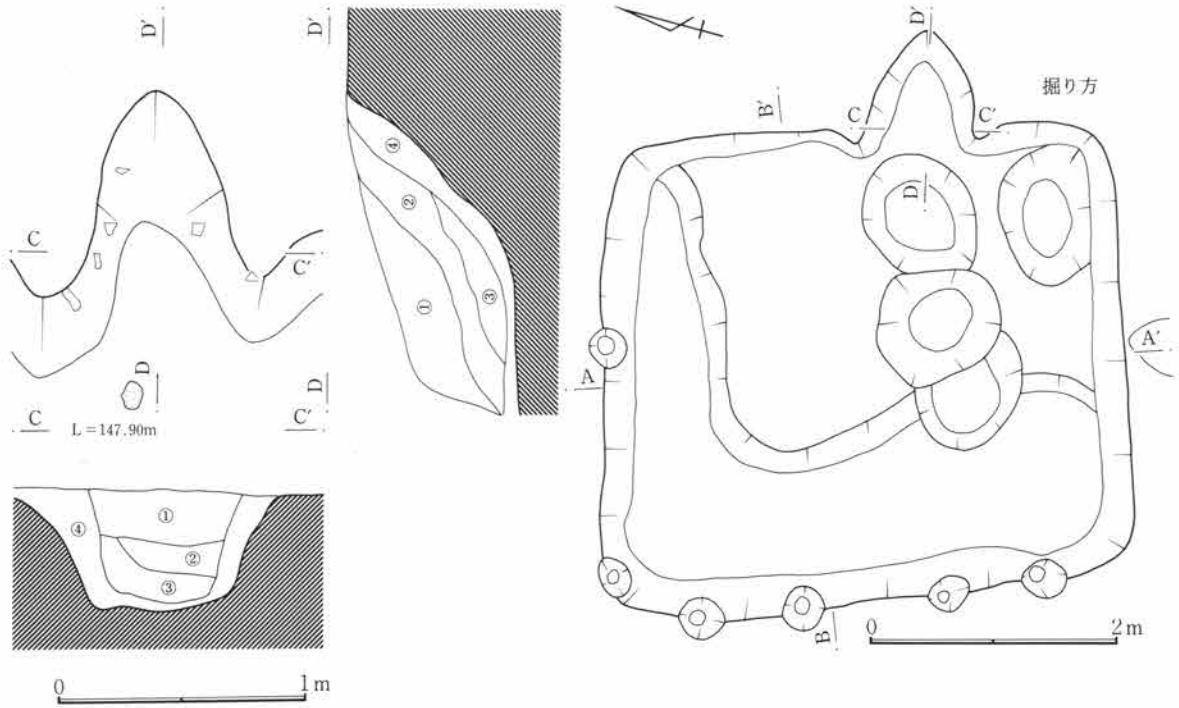
遺物はやや多く、坏・蓋類は多様である。煮沸具はコ字状口縁土師器甕である。他に薦編石状の緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・石墨緑泥片岩・絹雲母石墨片岩・熱変成岩各1個(計1.03kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる(中沢)。



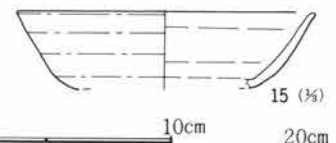
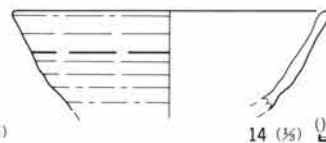
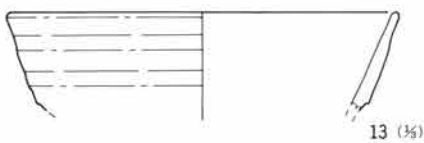
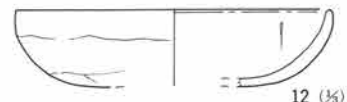
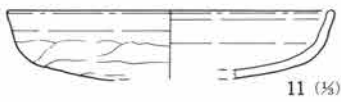
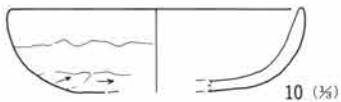
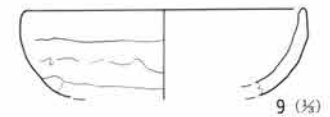
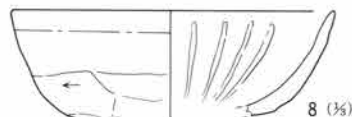
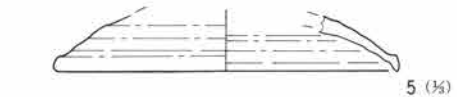
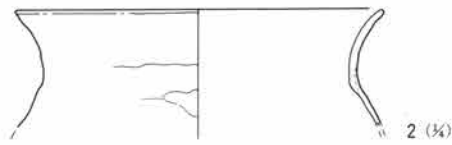
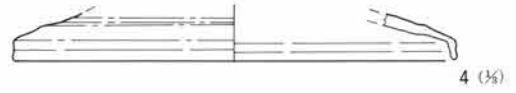
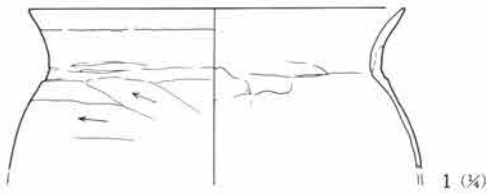
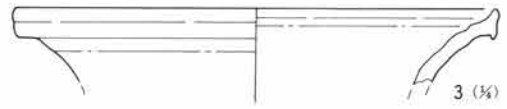
第126図 355号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



竈

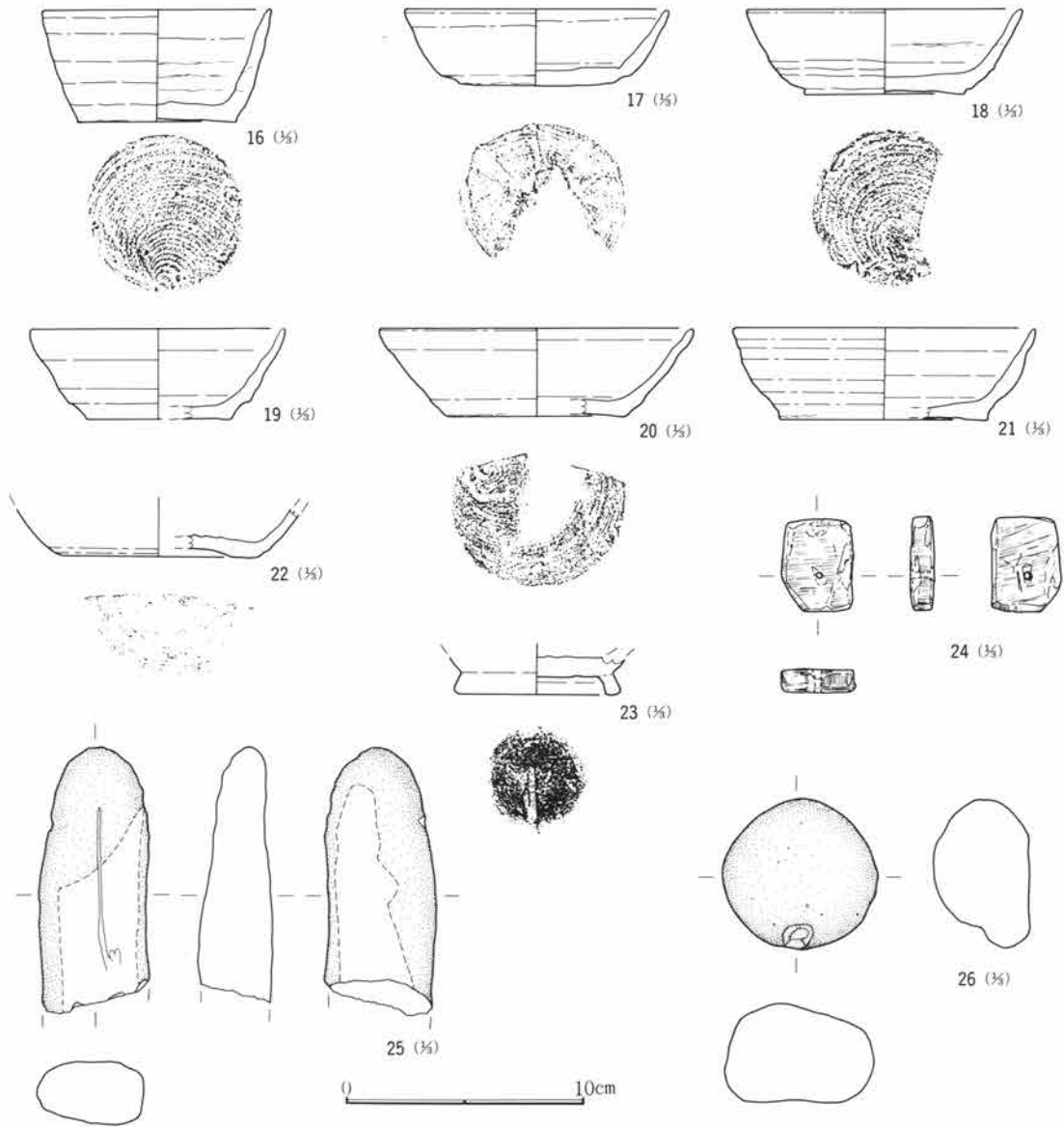
①黒褐色土 白色軽石を多く含む。②暗褐色土 焼土粒・ローム粒を多く含む。③黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む、炭・灰を僅かに含む。④暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを主とする。



0 10cm 20cm

第127図 355号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第128図 355号住居跡出土遺物実測図(2)

第55表 355号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
127-1	土師器 甕	床面-5 破片	口(20.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
127-2	土師器 甕	覆土 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
127-3	須恵器 大甕	床面+2 小破片	口(26.0) 底— 高—	①粗、白色・黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
127-4	須恵器 蓋	覆土 小破片	摘— 口(17.8) 高—	①粗、石英粒・雲母 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
127-5	須恵器 蓋	覆土 小破片	摘— 口(13.8) 高—	①粗、白色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
127-6	須恵器 蓋	覆土 破片	摘 — 口 — 高 —	①粗、石英・黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	ロクロ成形後、頂部篋削り。	
127-7	土師器 坏	床面+20 破片	口(13.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
127-8	土師器 坏	覆土 破片	口(15.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
127-9	土師器 坏	竈覆土 小破片	口(11.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
127-10	土師器 坏	竈覆土 小破片	口(11.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
127-11	土師器 坏	床面-2 小破片	口(13.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
127-12	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい浅黄色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
127-13	須恵器 坏	覆土 小破片	口(15.8) 底 — 高 —	①粗、褐色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面にぶい橙色	ロクロ成形。	
127-14	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.8) 底 — 高 —	①粗、黒色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
127-15	須恵器 坏	覆土 小破片	口(11.8) 底 — 高 —	①粗、黒色鈹物粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
128-16 48	須恵器 坏	床面+16 %残存	口(9.6) 底 6.6 高 4.6	①粗、黒色鈹物粒やや多 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
128-17 48	須恵器 坏	床面-2 %残存	口(11.2) 底 6.6 高 3.1	①粗、黒色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
128-18 48	須恵器 坏	床面+15 %残存	口(11.4) 底 6.6 高 3.5	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
128-19	須恵器 坏	床面+5 小破片	口(10.6) 底(6.0) 高(3.2)	①粗、黒色鈹物粒やや多 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面褐色	ロクロ成形。	
128-20	須恵器 坏	覆土 破片	口(13.2) 底 7.4 高 3.6	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
128-21	須恵器 坏	床面+3 破片	口(12.8) 底(8.8) 高(3.8)	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
128-22	須恵器 坏	覆土 小破片	口 — 底(8.2) 高 —	①普、黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
128-23	須恵器 高台付塊	覆土 破片	口 — 底(7.0) 高 —	①粗、白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
128-24 58	石製模造 品	覆土 完形	長 3.0 幅 3.8	厚 1.0 重 21.2	両面から穿孔。製作時の擦痕が多い。	滑石
128-25 58	砥 石	床面+22	長(10.5) 幅 4.5	厚 2.5 重(150)	荒砥。二面使用。刃試の傷あり。	砂岩
128-26 58	擦 石	床面-4 完形	長 6.1 幅 6.4	厚 3.9 重 80		軽石

356号住居跡 (第129~131図、第56表、図版26・48・56・59)

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、29・30-2グリッドに単独で位置する。周囲には、

ほぼ同時期で同大の住居跡が比較的集中しているが、以西は西谷川に限られる事もあってあまり見られず、地形的にも台地の西端に近い。

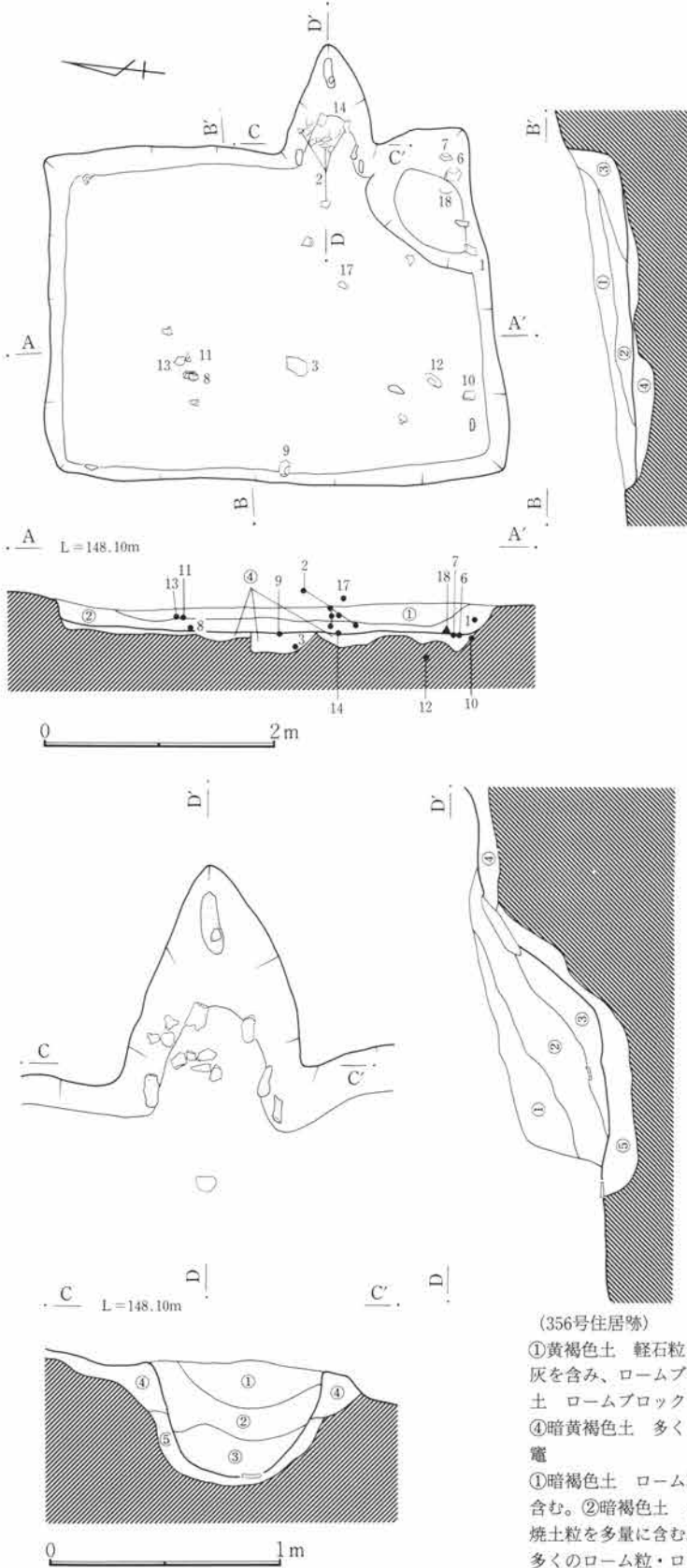
平面形は東西2m95cm・南北3m90cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-86°-Eを示す。床面は、全面に厚く貼床を施し、掘り方には竈前のピットその他、時期差のある五カ所以上のピットが検出されていて平坦ではない。柱穴・壁溝等の付属施設については検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行1m・深さ50cmを測る。両袖石が残存するが、その他の石材等は遺存せず、残りは悪い。

貯蔵穴は竈右脇にあり、長径1m・径80cm・深さ18cmを測る楕円形を呈するやや大形のものである。

遺物はやや多く、坏・蓋の量が目立ち、特に須恵器坏については種類も多い。煮沸具は、コ字状口緑土師器甕である。紡錘車末製品とみられる円盤や、鎌の装着部の破片の出土が注意される。以上の他に、薦編石状の点紋緑泥片岩・緑簾緑泥片岩各1個(0.65kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(中沢)。



(356号住居跡)

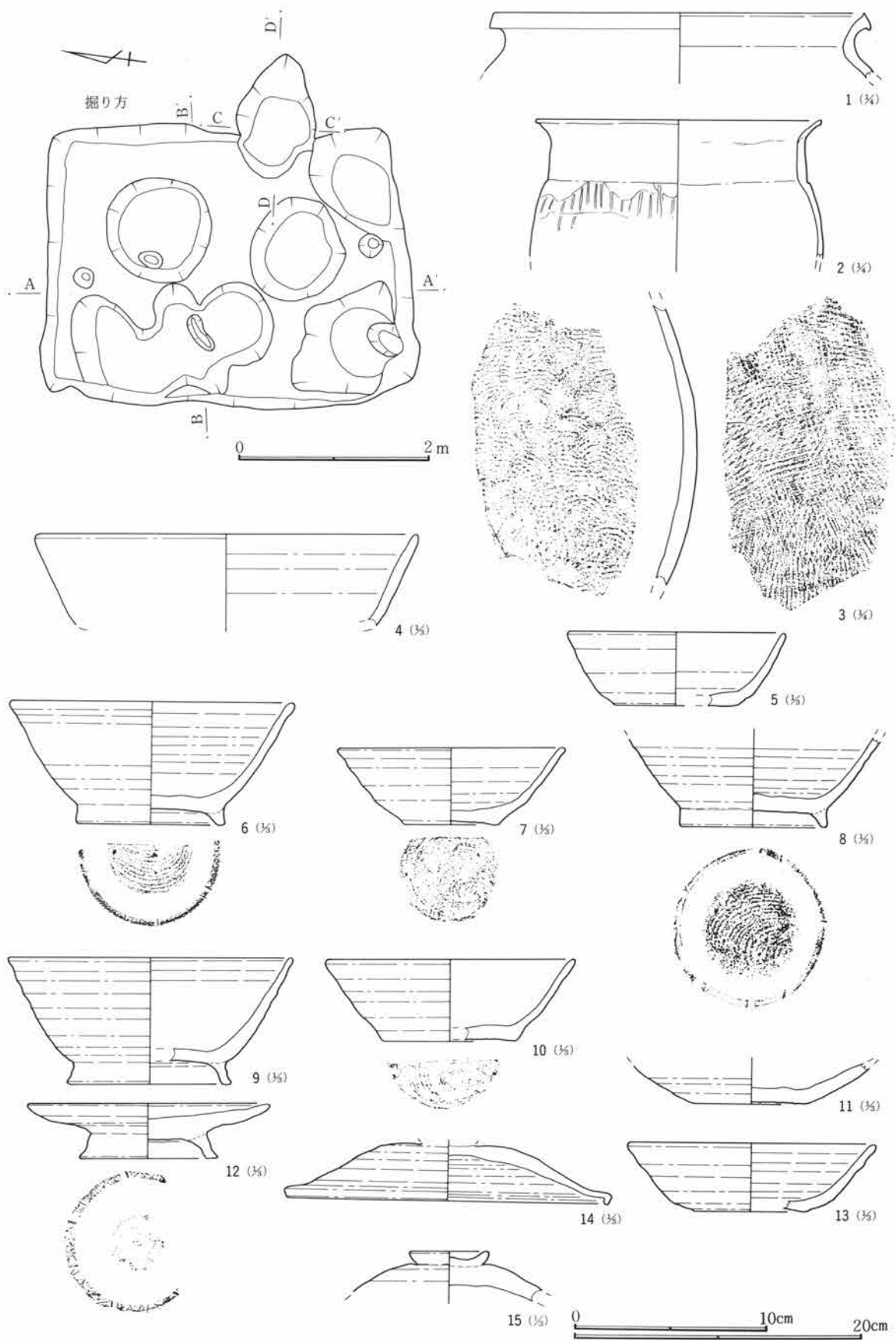
- ①黄褐色土 軽石粒を含み、やや締まりに欠ける。
- ②暗黄褐色土 焼土・灰を含み、ロームブロックが混じる。やや締まりに欠ける。
- ③暗黄褐色土 ロームブロックを含み、焼土が僅かに混じる。やや締まっている。
- ④暗黄褐色土 多くのロームブロックを含む。

竈

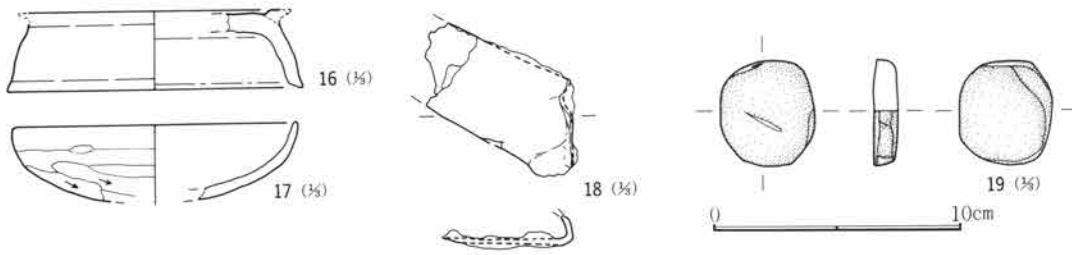
- ①暗褐色土 ローム粒・1mm内外の白色軽石粒を多く、焼土粒を僅かに含む。
- ②暗褐色土 多くのローム粒と、少量の焼土粒を含む。
- ③赤色土 焼土粒を多量に含む。
- ④暗褐色土 多くのローム粒を含む。
- ⑤黒褐色土 多くのローム粒・ロームブロック・少量の焼土粒を含む。

第129図 356号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第130図 356号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第131図 356号住居跡出土遺物実測図(2)

第56表 356号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
130-1	須恵器 甕	床面+10 小破片	口(26.2) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③外面灰色、内面灰白色	ロクロ成形。	
130-2 48	須恵器 甕	床面-4 破片	口(20.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
130-3	須恵器 大 甕	床面-10 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪積成形でロクロ使用か。外面平行叩き。 内面当具痕。	灰が付着し、一 部灰白色
130-4	須恵器 壺	覆土 小破片	口(20.0) 底 — 高 —	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形。	
130-5	須恵器 坏	覆土 小破片	口(11.4) 底(6.4) 高 3.8	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形。	
130-6 48	須恵器 高台付壺	床面-2 ½残存	口(15.0) 底 7.8 高 6.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰色、一部黒変	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
130-7 48	須恵器 坏	床面-2 ½残存	口(12.0) 底 5.8 高 3.9	①細、石英粒、雲母 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
130-8	須恵器 高台付壺	床面+2 破片	口 — 底 7.6 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
130-9 48	須恵器 高台付壺	床面-2 ½残存	口(15.0) 底(8.7) 高 6.5	①粗、石英細粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③暗灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
130-10 48	須恵器 坏	床面-6 ½残存	口(13.2) 底(7.8) 高 4.2	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
130-11	須恵器 坏	床面+10 小破片	口 — 底(3.0) 高 —	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
130-12 48	須恵器 高台付皿	床面-20 ほぼ完形	口 12.8 底 7.2 高 2.8	①粗、雲母、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
130-13	須恵器 坏	床面+11 小破片	口(13.0) 底(6.0) 高 3.5	①粗、雲母、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形。	
130-14	須恵器 蓋	竈内+2 破片	口 — 口(17.0) 高 —	①粗、石英・茶色の鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	摘剥離
130-15	土師器 蓋	覆土 小破片	口 4.2 口 — 高 —	①普、砂粒 ②還元焰、軟質 ③外面灰白色、内面にぶい橙	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	
131-16	須恵器 蓋	覆土 破片	口(12.0) 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面褐色	ロクロ成形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
131-17	土師器 坏	床面+27 小破片	口(11.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③外面黄褐色、内面にぶい橙	輪積成形後、口辺横撫で。外面笕削り。	
131-18 59	鉄製品 鎌	床面直上	長—厚 0.6 幅 3.4 重 24.4			
131-19 56	石製品 紡錘車	覆土 完形	径 4.11/3.66 孔径— 厚 0.95 重 18.4		側面を中心に加工。	未製品、砂岩

357号住居跡（第132～134図、第57表、図版27・48・59）

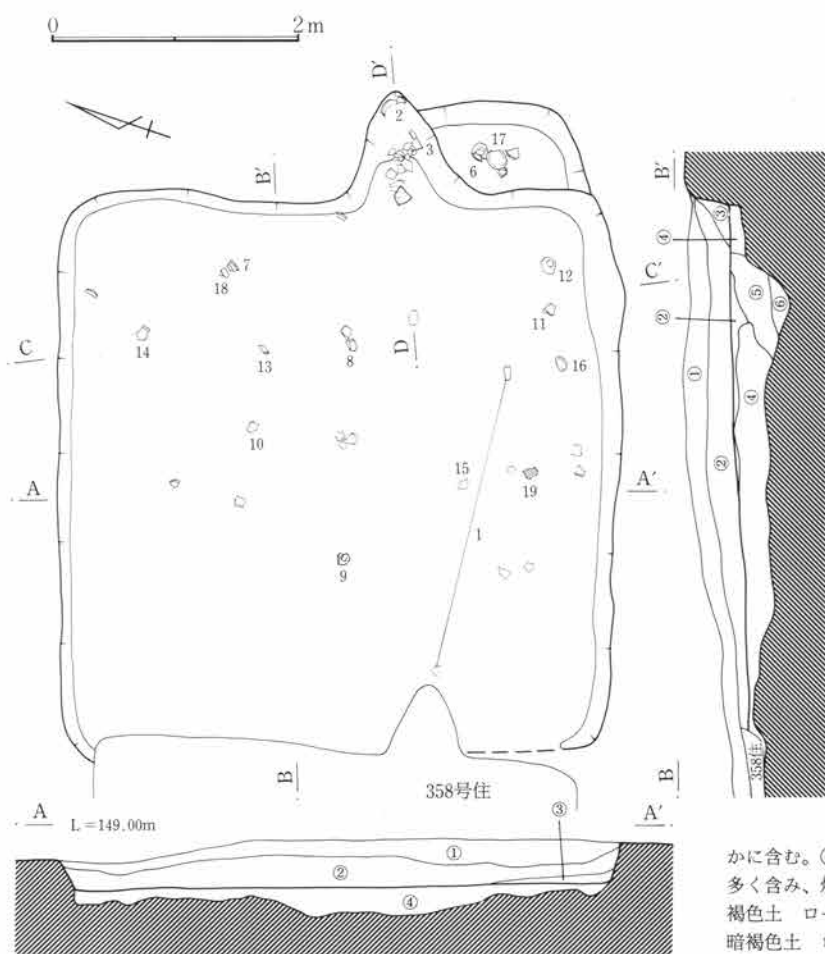
本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、32-2グリッドに位置する。358号住居跡（平安）に西壁を切られている。

平面形は東西4m40cm・南北4m50cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-66°-Eを示す。床面は、中央部を中心に厚く貼床を施し、掘り方には竈前のピットを含めて五カ所のピットが確認されているが、貯蔵穴に相当するものは明確ではない。この点に関しては、竈右脇に地山を掘り残した1m×50cmの棚状の施設が見られ、上面に完形の坏を含む遺物が残されており、この部分が本来棚として機能していた可能性を示す。このような場合には貯蔵穴は無い可能性がある。柱穴・壁溝等も検出されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りであり、幅70cm・奥行85cm・深さ50cmを測る。煙道部の端に、甕を煙突として敷設していた形跡があり、棚状施設の存在と共に注意される。

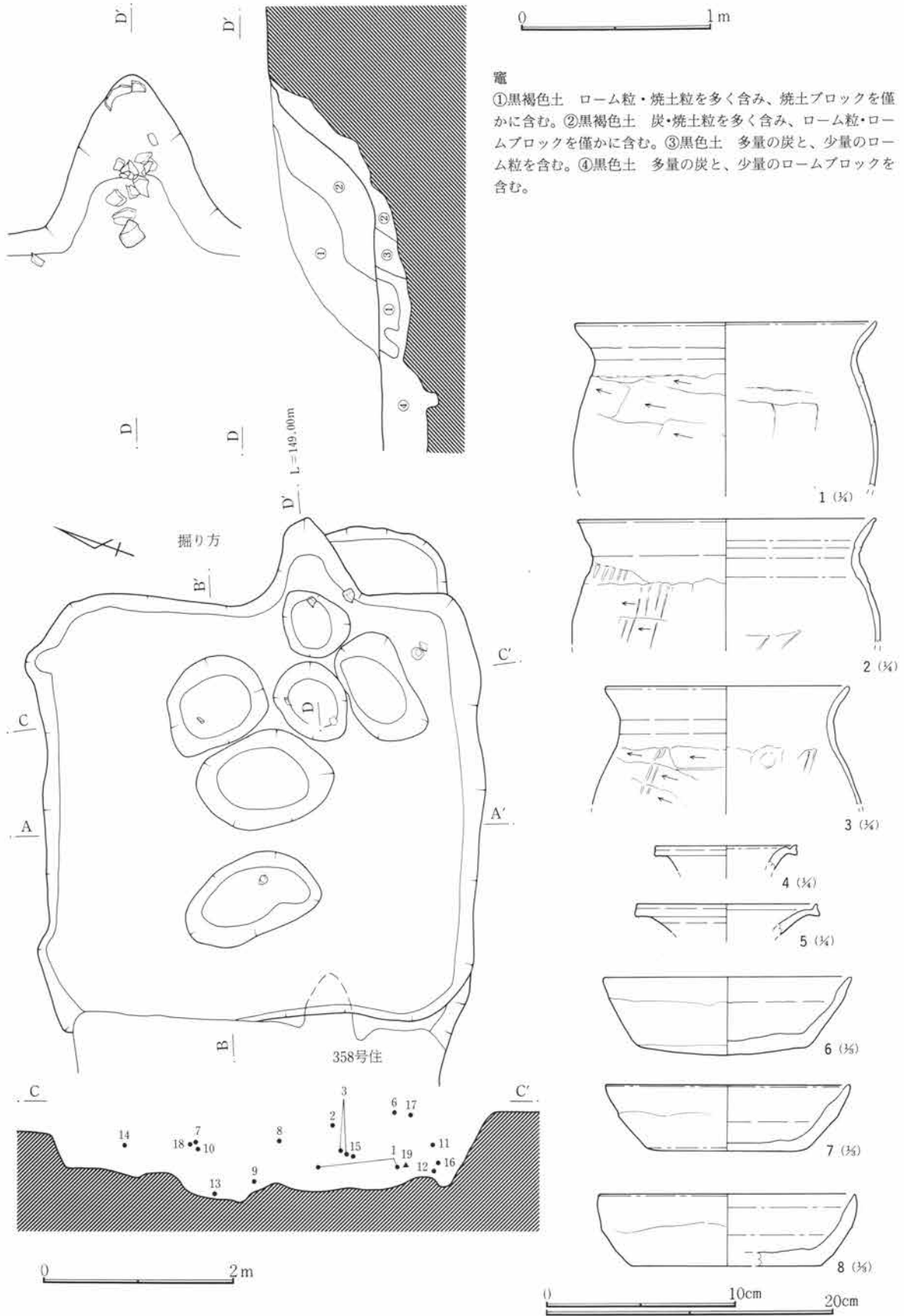
遺物はやや少なく、竈内部を中心に分布している。比率では坏・蓋が多い。煮沸具は、やや不明瞭だが羽釜は伴わないようである。他に完形の斧の検出がある。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる（中沢）。



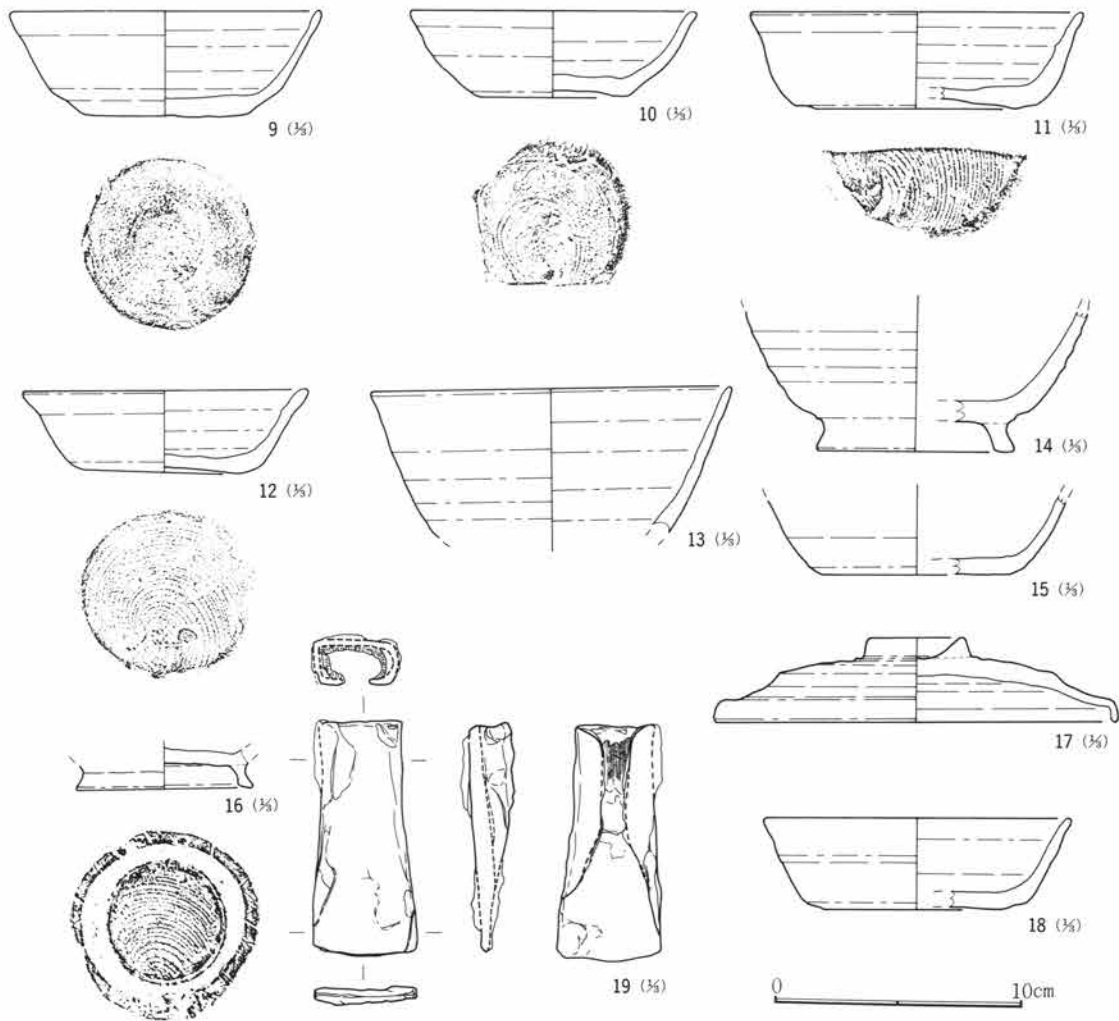
第132図 357号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第133図 357号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第134図 357号住居跡出土遺物実測図(2)

第57表 357号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-1 49	土師器 甕	床面+20 破片	口(21.2) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
133-2	土師器 甕	竈内+64 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
133-3 48	土師器 甕	竈内+32 破片	口(17.2) 底— 高—	①細、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。指頭圧痕あり。	
133-4	須恵器 壺	覆土 小破片	口(10.0) 底— 高—	①粗、石英細粒多 ②還元焰、硬質 ③暗黄灰色	ロクロ成形。	
133-5	須恵器 瓶	覆土 小破片	口(13.0) 底— 高—	①粗 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形。	
133-6 48	土師器 坏	床面+75 ほぼ完形	口 13.0 底 8.8 高 4.0	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半～底部篋削り。	
133-7	土師器 坏	床面+52 1/4残存	口(12.8) 底(8.4) 高 3.4	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半～底部篋削り。	

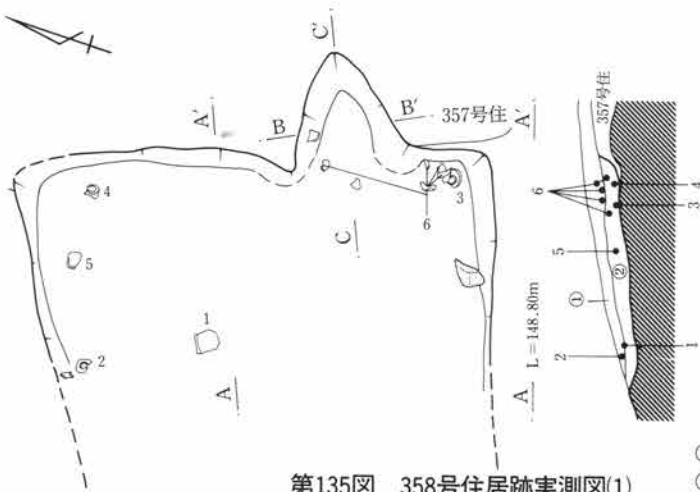
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-8	土師器 坏	床面+40 1/2残存	口(13.4) 底(10.0) 高 3.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半～底部篋削り。	
134-9 49	須恵器 坏	床面+10 1/2残存	口(12.7) 底 6.7 高 4.1	①普 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。外周篋削り。	
134-10	須恵器 坏	床面+15 1/2残存	口(11.6) 底(6.0) 高 3.4	①細 ②還元焰、硬質 ③灰オリーブ色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
134-11 49	須恵器 坏	床面+32 1/2残存	口(13.4) 底(8.0) 高 3.8	①粗、褐色鉱物細粒多 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
134-12 49	須恵器 坏	床面+5 完形	口 11.6 底 6.5 高 3.2	①普、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
134-13	須恵器 塊	床面+5 1/2残存	口(14.6) 底 — 高 —	①普、黒色鉱物粒少 ②酸化焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
134-14	須恵器 高台付塊	床面+29 破片	口 — 底(8.0) 高 —	①粗、褐色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
134-15	須恵器 坏	床面+30 小破片	口 — 底(7.6) 高 —	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、灰褐色	ロクロ成形。	
134-16	須恵器 瓶	床面+20 破片	口 — 底 9.6 高 —	①普、白色粒子 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。	
134-17 49	須恵器 蓋	床面+65 ほぼ完形	口 3.8 口 16.4 高 3.3	①細、白色鉱物細粒 ②酸化焰、硬質 ③青灰色	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	
134-18	須恵器 坏	床面+45 1/2残存	口(13.3) 底(7.0) 高 3.6	①細、石英細粒 ②酸化焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
134-19 59	鉄製品 斧	床面+18 完形	長 9.2 厚 0.2 幅 3.2 重 150			木質部が残存

358号住居跡 (第135・136図、第58表、図版27・49)

本住居跡は、第5次調査区西端北寄りの緩斜面にあり、31・32-2・3グリッドに位置する。東壁は、357号住居跡(平安)の西壁を破壊して構築され、西半部分は傾斜の為に消失している。

平面形は南北3m80cmを測り、東西長は不明だが本来方形を呈していたと思われる。床面は、竈を中心に



第135図 358号住居跡実測図(1)

貼床を施し、掘り方には竈前のピットも含め、二基の不整形なピットが検出されているが、貯蔵穴・柱穴・壁溝等は明瞭でない。

竈は、東壁中央南寄りにあり、幅70cm・奥行90cm・深さ26cmを測る。構造物は殆ど残らず遺存状況は不良である。

遺物は竈内部やその近辺にやや集中し

0 2m

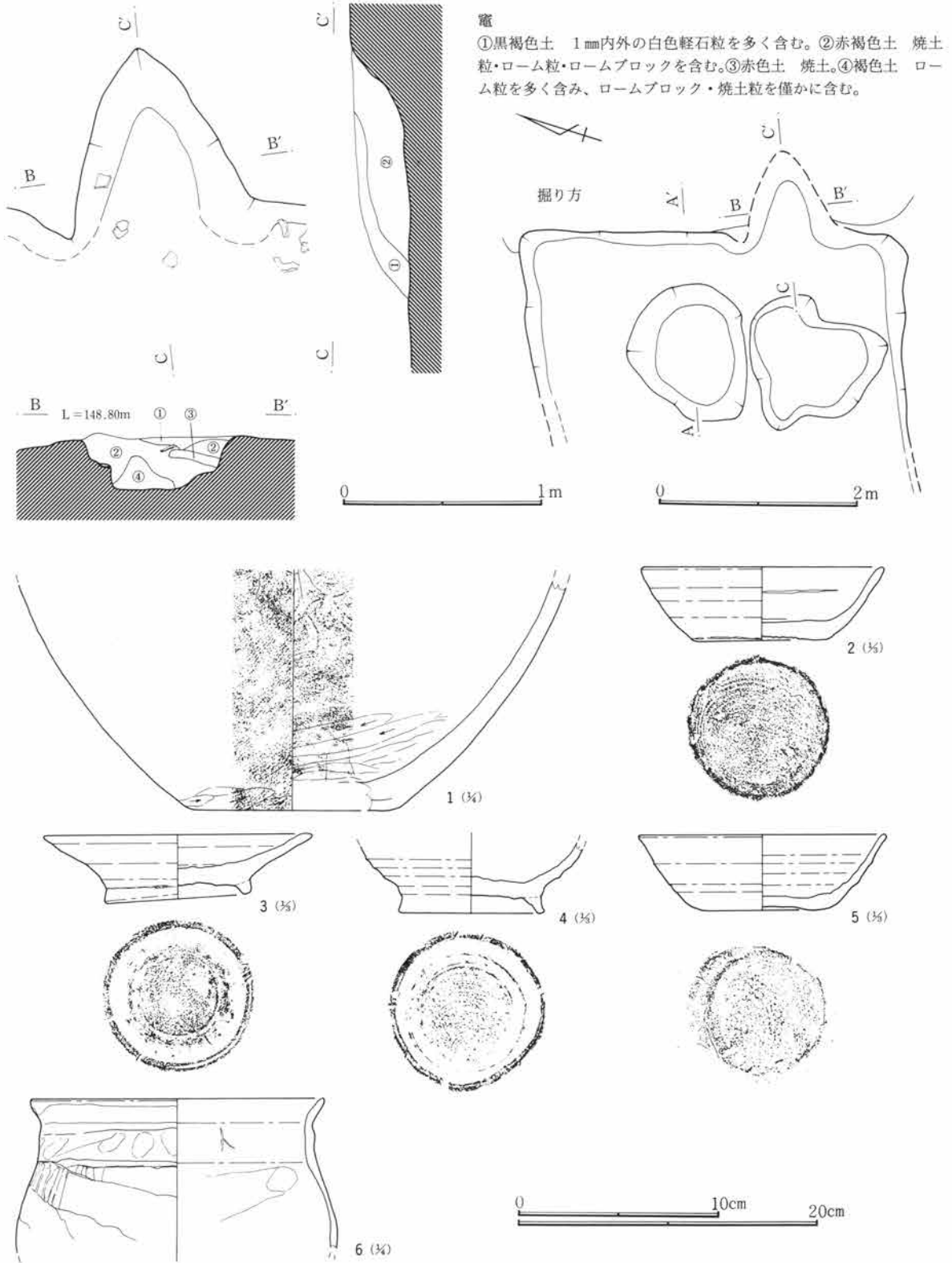
(358号住居跡)

- ①黒褐色土 1mm内外の白色軽石粒を多く含む。
- ②黒褐色土 ローム粒を多く含み、ロームブロック・焼土粒を僅かに含む。

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

ているが、全体量・種類は少なく、個体の残存率も低い。坏・埴類がやや目立つが、煮沸具には羽釜を含まないようである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。



第136図 358号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第58表 358号住居跡出土遺物観察表

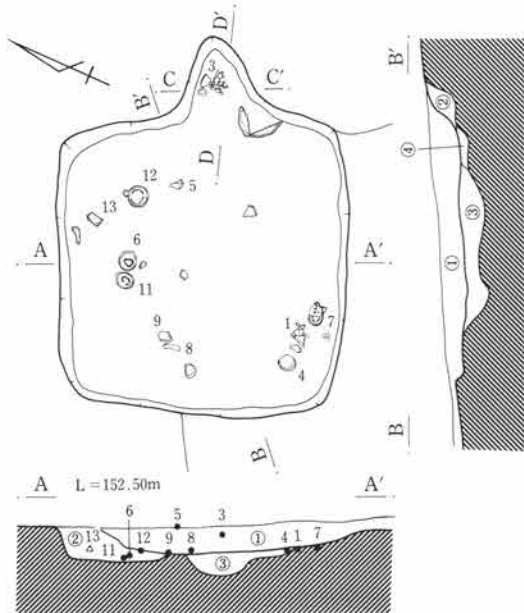
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
136-1	須恵器 大甕	床面+10 破片	口 — 底(14.0) 高 —	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③緑灰色	輪積成形後、外面叩き。底部付近篋削り。 内面当具痕。底部付近撫で。	
136-2 49	須恵器 坏	床面+12 口縁 一部欠	口(12.3) 底 6.9 高 3.6	①粗、砂粒②還元焰、軟質 ③オリーブ灰色、断面灰白 色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	内面灰白色
136-3 49	須恵器 高台付皿	床面+4 %残存	口(13.6) 底 7.4 高 3.2	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
136-4	須恵器 高台付碗	床面+4 破片	口 — 底 7.5 高 —	①普、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③明緑灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
136-5 49	須恵器 坏	床面+5 %残存	口(12.5) 底 6.0 高 3.7	①粗、石英粒やや多 ②還元焰、やや軟質 ③暗黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
136-6 49	土師器 甕	床面+8 破片	口(19.8) 底 — 高 —	①細、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 撫で。	

364号住居跡 (第137・138図、第59表、図版28・49・56・58)

本住居跡は、第5次調査区中央の埋没谷に南面する緩斜面にあり、25—14グリッドに位置する。375号住居跡(奈良)の北東隅を切って構築され、平面形は東西2 m30cm・南北2 m35cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-70°-Eを示す。床面は地山を叩き締めており、床下には竈前のピットも含め、床下土壌が三基検出されているが、貯蔵穴・柱穴・壁溝は明らかでない。

竈は、東壁中央にあり、幅60cm・奥行70cm・深さ34cmを測る。右袖付近に用材とみられる棒状の石材が立て掛けられていたが、原型を窺い知る残存状況ではない。

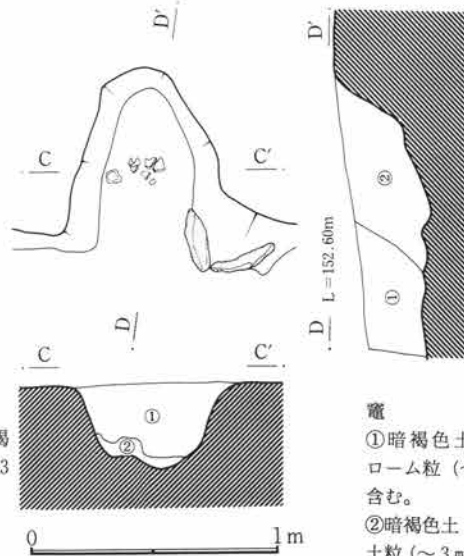
遺物は、住居規模から見れば多い方で、土師器の坏類の出土が目立つ。煮沸具はコ字状口縁土師器甕である。定形化した砥石の他、穿孔途中で加工を中止した



(364号住居跡)

①暗褐色土 ローム粒とローム小ブロック(〜3mm)を含む。②暗褐色土 ①層に比しローム粒が多い。③暗褐色土 ロームブロック(〜3cm)を少量含む。④暗褐色土 ローム粒(〜3mm)を少量含む。

0 2m



竈

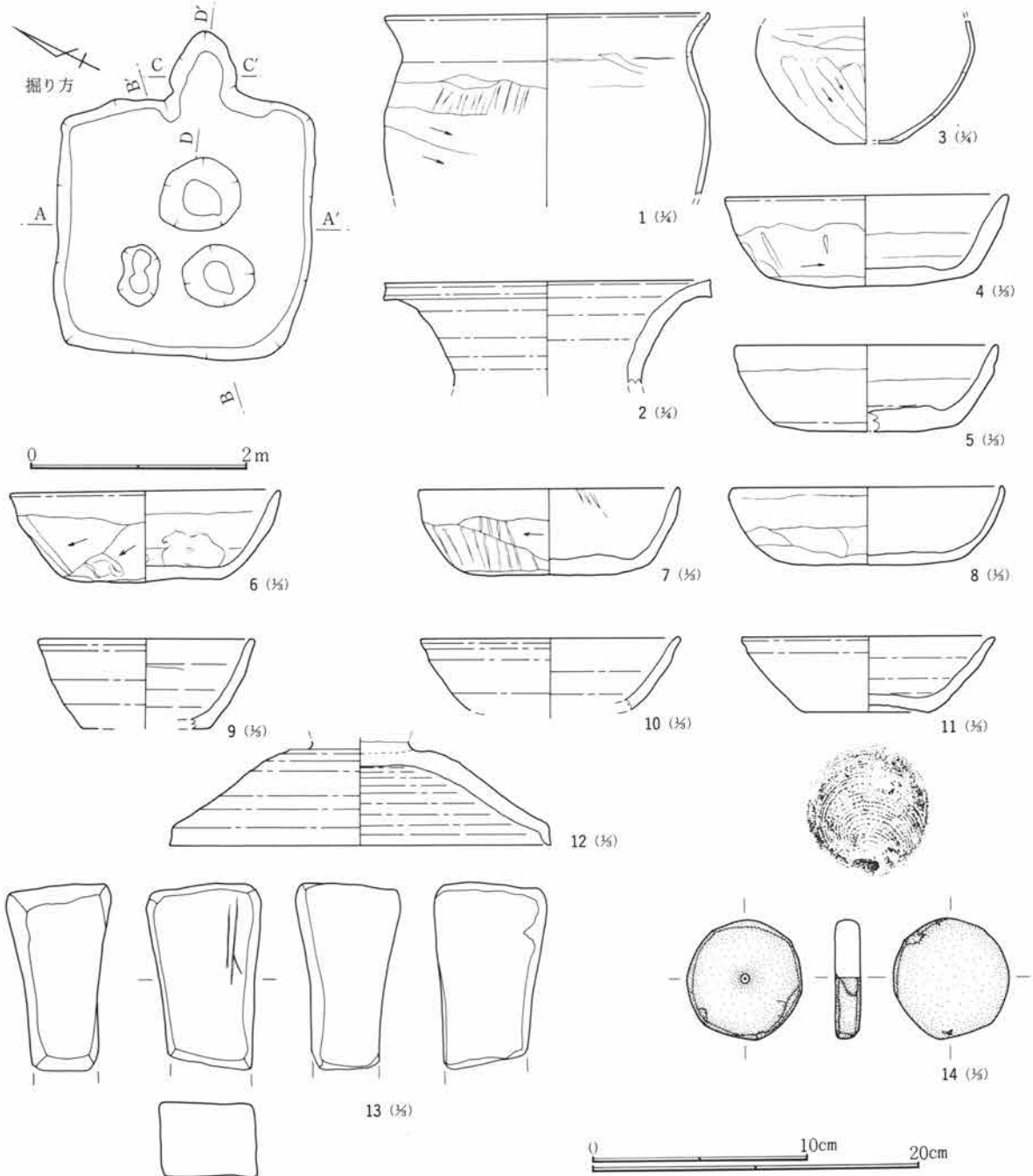
①暗褐色土 少量のローム粒(〜3mm)を含む。
②暗褐色土 多くの焼土粒(〜3mm)・灰を含む。

第137図 364号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

石製紡錘車の未製品が注意される。それら以外に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩1個(0.4kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる(春山)。



第138図 364号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第59表 364号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
138-1 49	土師器 甕	床面-2 破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
138-2	須恵器 甕	覆土 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄褐色	ロクロ成形。	
138-3	土師器 甕	竈内+10 破片	口— 底(4.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。	
138-4 49	土師器 坏	床面-2 完形	口13.0 底4.5 高4.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半~底部篋削り。	磨耗している
138-5	土師器 坏	床面+20 %残存	口(12.2) 底— 高3.9	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半~底部篋削り。	
138-6 49	土師器 坏	床面+4 完形	口12.4 底6.4 高4.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半~底部篋削り。	整形中の失敗を雑に補習している
138-7 49	土師器 坏	床面-3 ほぼ完形	口12.0 底6.0 高3.9	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半~底部篋削り。	
138-8 49	土師器 坏	床面+2 %残存	口12.6 底6.0 高3.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半~底部篋削り。	
138-9	須恵器 坏	床面直上 小破片	口(10.0) 底(6.0) 高4.0	①粗、石英 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面黄灰色	ロクロ成形。	
138-10	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 底— 高—	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
138-11 49	須恵器 坏	床面+4 完形	口11.6 底5.7 高3.4	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
138-12 49	須恵器 蓋	床面+6 摘部のみ 欠	口— 口17.7 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、頂部回転篋削り。摘貼付。	
138-13 58	石製品 砥石	床面+8	長8.4 幅4.4	厚3.2 重250	中砥。四面使用。	流紋岩
138-14 56	石製品 紡錘車	覆土	径5.27 厚1.12	孔径 中断 重63.9	中央に穿孔するが、未貫通。	緑泥片岩 未製品

367号住居跡 (第139・140図、第60表、図版29・49)

本住居跡は、第5次調査区中央の埋没谷に南面する緩斜面にあり、25-9・10グリッドに位置する。西壁は表土の流失により掘り方以下で痕跡状態だった。387号住居跡(古墳)の、東端の一部を除く大半を破壊して構築される。

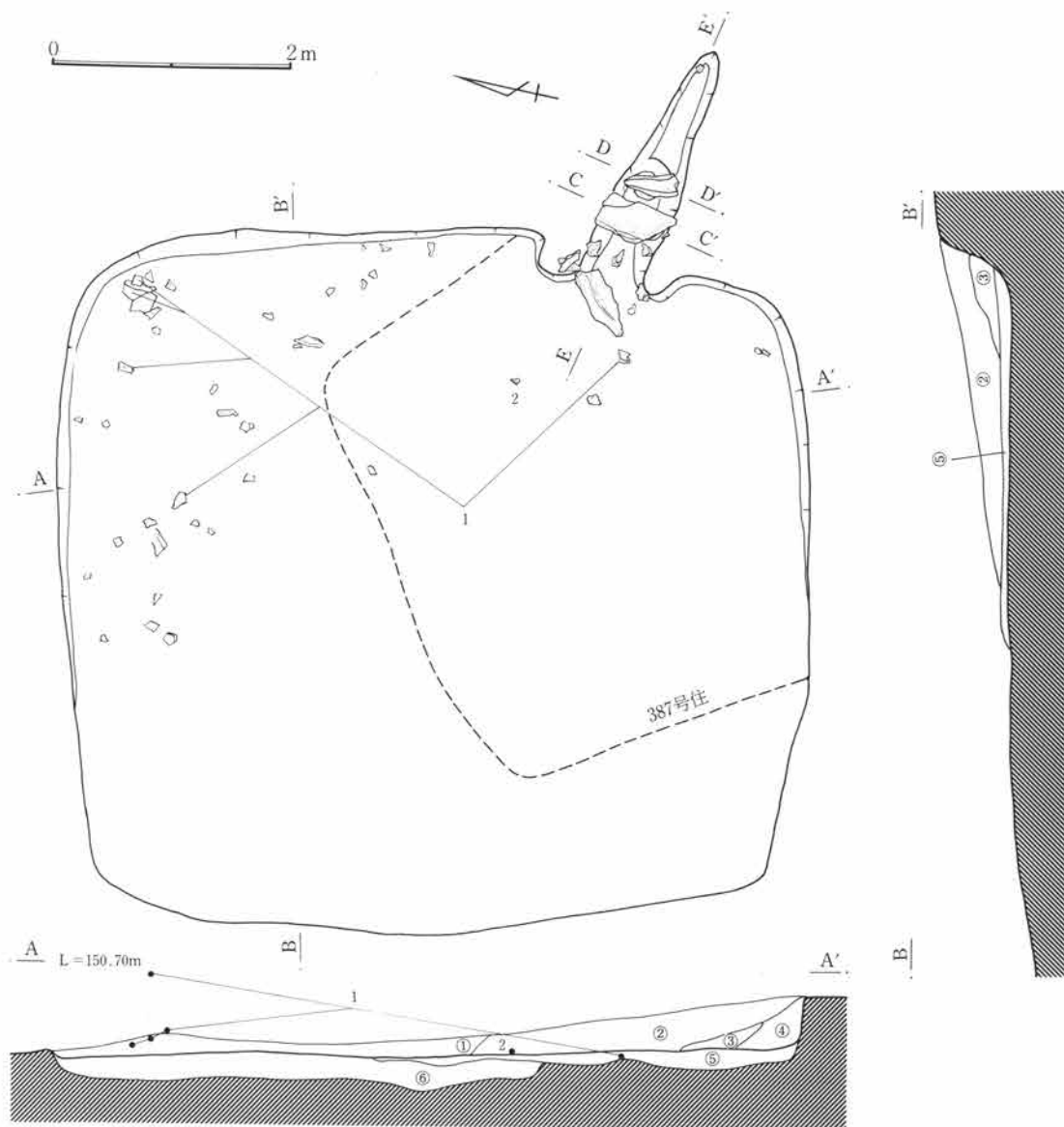
平面形は東西5m80cm・南北6m10cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-104°-Eを示す。床面は、竈周辺を中心に貼床を施していたと思われる、灰や焼土が多量に散乱していた。掘り方は、387号住居跡の覆土中になる為明瞭でない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等についても同様である。

竈は東壁隅にあり、主軸から南に25度程振れている。幅60cm・奥行2m10cm・深さ42cmを測り、石組や煙道部も良好に遺存していた。東壁から袖石を埋設した袖が僅かに突出し、焚口の天井石が外れた状態であった以外は、ほぼ原位置を保つ。

遺物は東壁寄りにやや集中するが、量的には少なく個体の残存率も低い。煮沸具に土釜を含む。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩・石墨緑泥片岩・閃緑岩各1個(計0.62kg)が検出されている。

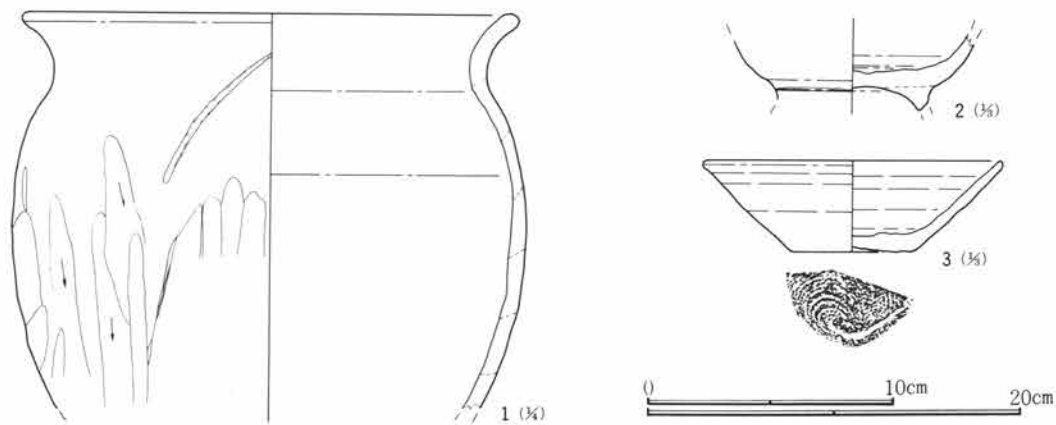
以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(春山)。

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

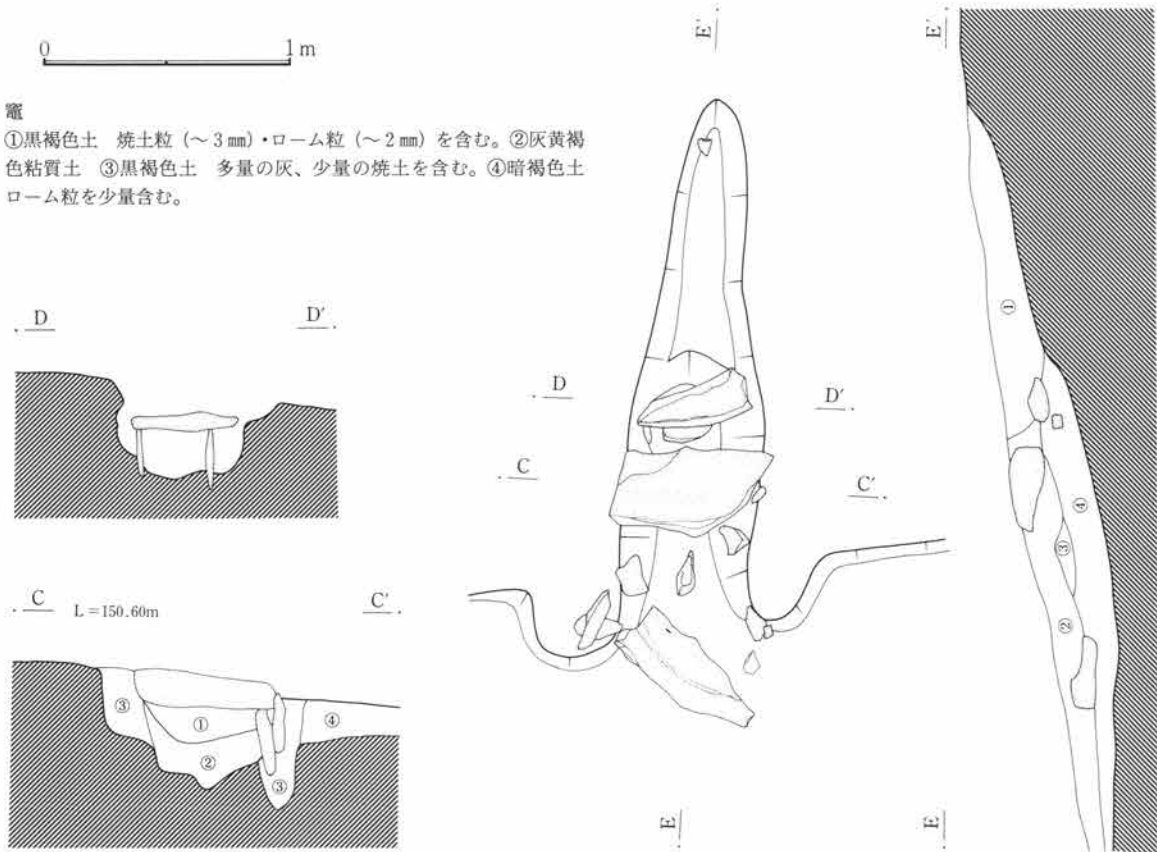


(367号住居跡)

①暗褐色土 ローム粒(～3mm)と少量の軽石(～3mm)を含む。②暗褐色土 ローム粒を含み、多量の軽石(～5mm)が混じる。③暗褐色土 ①・②層に比して暗色を増し、ローム粒を含む。④暗褐色土 ローム粒(～5mm)を多量に含み、やや明るい色調を増す。⑤暗褐色土 ロームブロック(～3cm)を多量に含む。⑥暗黄褐色土 ローム層。



第139図 367号住居跡実測図(1)及び出土遺物実測図



第140図 367号住居跡実測図(2)

第60表 367号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
139-1 49	土師器 土釜	床面+8 破片	口(26.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋削り。	
139-2	須恵器 高台付壺	床面+2 小破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③外面にふい橙色、内面黒色	ロクロ成形後、高台貼付。	
139-3	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(12.0) 底(4.8) 高3.6	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	

372号住居跡 (第141～143図、第61表、図版29・50・55・58・59)

本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、26-17グリッドに位置する。369号住居跡(古墳)の北西隅を掘り込んで構築される。

大半が覆土中に構築される為、やや不確定な要素はあるが、平面形は東西3m60cm・南北3m35cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-78°-Eを示すと思われる。床面は全面に貼床を施し、掘り方は369号住居跡の床面に迄達している。掘り方には、竈に伴う大小二基のピットが確認されているが、貯蔵穴に相当すると見られるものは確認されなかった。柱穴・壁溝についても同様である。

竈は、東壁中央南寄りにあり、幅40cm・奥行65cm・深さ40cmを測る。両袖石が残存し、内部に遺物も多く

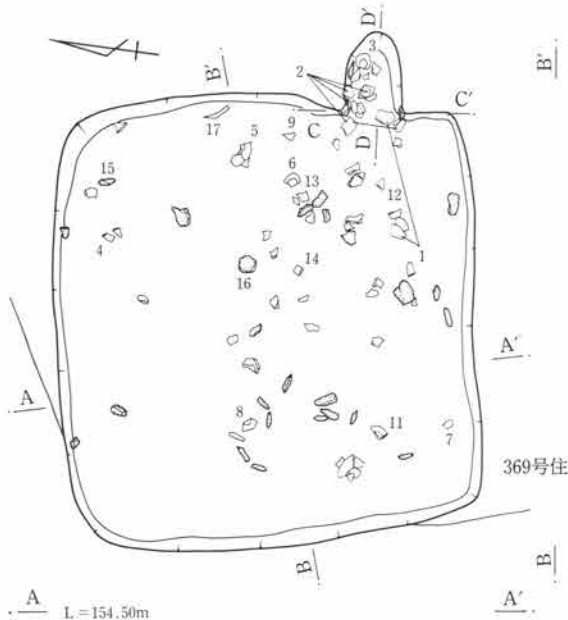
第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

検出されているが、竈で使用されていたか疑問がある。

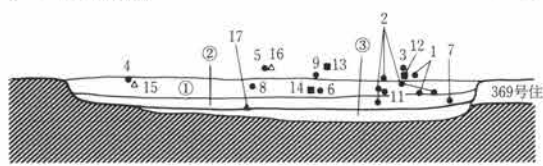
遺物は比較的多く、全面に分布しているが、いずれも残存率が低い為、図化出来た物は案外少ない。土師器坏は手持ち篋削りで、煮沸具には羽釜を伴わないようである。須恵器小壺や大型の鎌の出土が注意される

が、一部本来は369号住居跡の所属で流れ込んだと考えられる物も含まれている。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩4個、絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩各3個、石墨緑泥片岩・緑泥片岩各2個、緑簾緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・輝緑岩各1個(計3.6kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(春山)。



0 2m

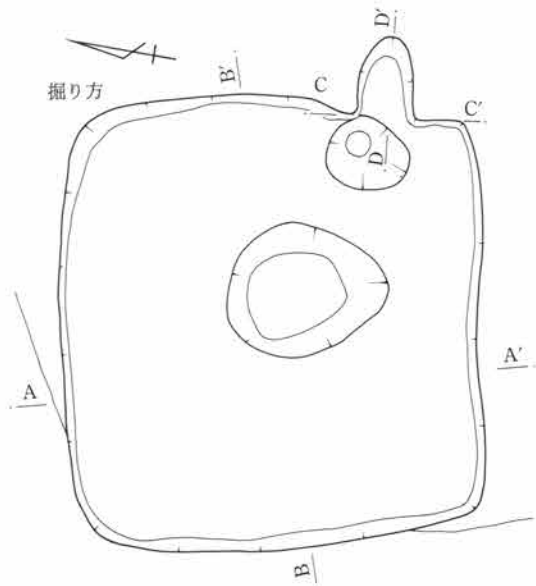
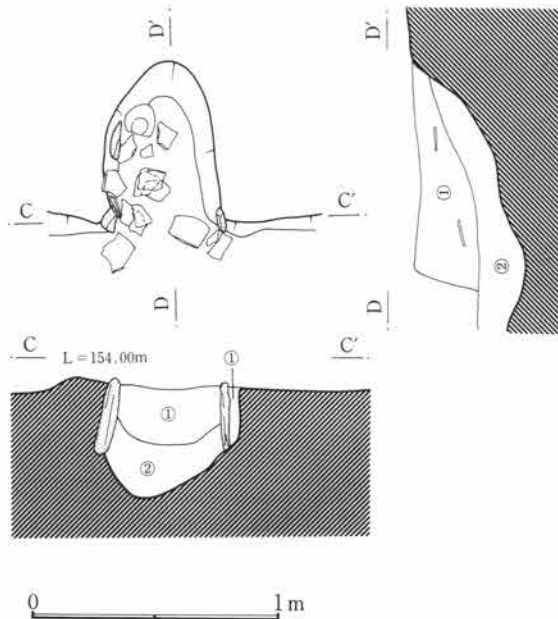


(372号住居跡)

- ①暗褐色土 ローム粒(～2mm)・焼土粒(～2mm)を少量含む。
- ②暗褐色土 ①層に比し、ローム粒の含有が多い。
- ③黄褐色土 ローム粒・焼土粒をやや多く含む。

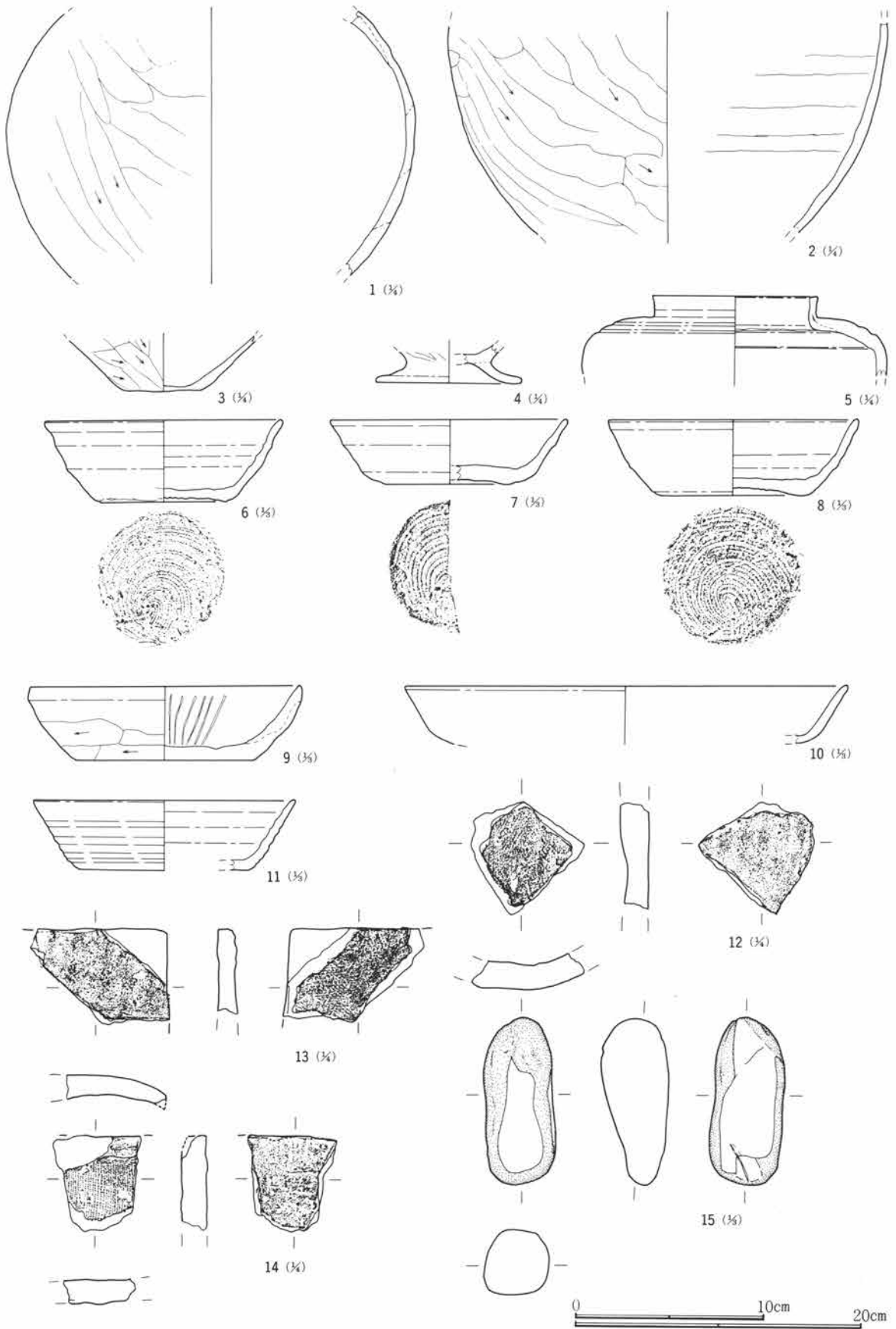
竈

- ①暗褐色土 ローム粒(～3mm)・焼土粒(～2mm)を多く含む。
- ②暗褐色土 ローム粒(～1mm)・焼土粒(～1mm)を多量に、炭化物粒(～5mm)を含む。

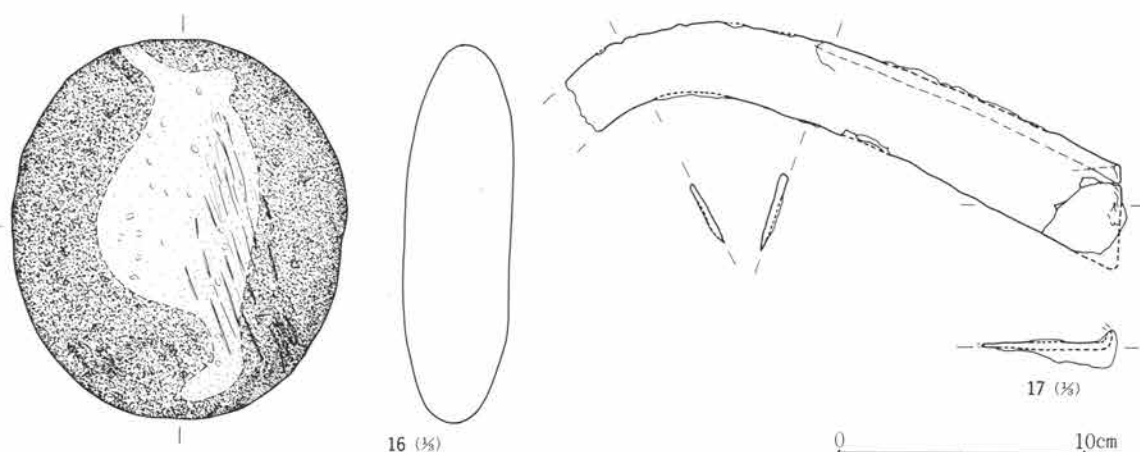


第141図 372号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第142図 372号住居跡出土遺物実測図(1)



第143図 372号住居跡出土遺物実測図(2)

第61表 372号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
142-1	土師器 甕	床面+9 破片	口 — 底 — 高 —	①普 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	輪積成形後、外面篋削り。	
142-2 50	土師器 甕	竈内+4 破片	口 — 底 — 高 —	①普、石英細粒 ②酸化焰、軟質 ③明褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面撫で。	
142-3	土師器 甕	竈内+30 小破片	口 — 底 5.6 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗黄褐色	輪積成形後、外面篋削り。	
142-4	土師器 甕	床面+18 小破片	口 — 底(10.4) 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪積成形後、外面篋削り。	
142-5 50	須恵器 壺	床面+30 破片	口(11.6) 底 — 高 —	①粗、石英・黒色鋇物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	ロクロ成形。	
142-6 49	須恵器 坏	床面+12 3/4残存	口 12.6 底 6.8 高 4.2	①粗、石英・黒色鋇物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
142-7 50	須恵器 坏	床面+4 1/2残存	口(12.6) 底(6.6) 高 3.3	①粗、石英細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
142-8 49	須恵器 坏	床面+18 3/4残存	口 13.2 底 7.4 高 3.9	①粗、石英・黒色鋇物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
142-9	土師器 坏	床面+25 1/2残存	口(14.2) 底(9.4) 高(3.8)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で、外面下半~底部篋削り。内面篋撫で。	
142-10	須恵器 坏	覆土 小破片	口(23.3) 底 — 高 —	①普、白色鋇物細粒少 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	奈良か
142-11	須恵器 坏	床面+12 小破片	口(13.8) 底(8.8) 高(3.6)	①普、黒色鋇物粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
142-12 55	平瓦	床面+24 小破片	長 — 幅 — 厚 1.9	①普、褐色鋇物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色凹面赤化		
142-13 55	丸瓦	床面+32 破片	長 — 幅 — 厚 1.2	①粗、石英・褐色鋇物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色		
142-14 55	平瓦	床面+14 小破片	長 — 幅 — 厚 1.7	①粗、石英・雲母細粒 ②還元焰、硬質 ③黄褐色、断面灰		

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
142-15 58	石製品 砥石	床面+16 完形	長 8.3 厚 3.3 幅 3.3 重 100		荒砥。二面使用。	砂岩
143-16 58	石製品 敲石	床面+30 完形	長 15.8 厚 4.3 幅 13.3 重 1,200		刃試しの痕跡あり。	安山岩。火を受け黒変している。
143-17 59	鉄製品 鎌	床面直上	長 — 厚 0.3 幅 3.3 重 90.6			

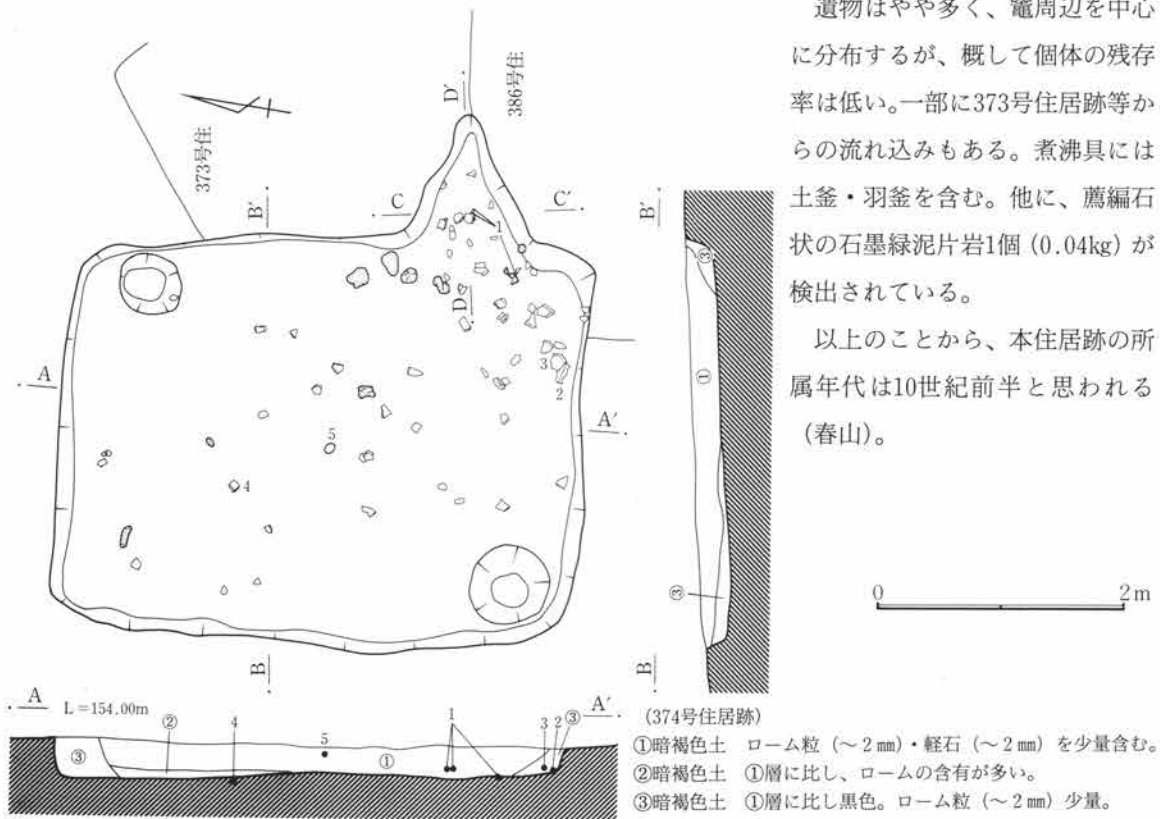
374号住居跡 (第144・145図、第62表、図版30・50)

本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、25-17グリッドに位置する。周囲には、主軸がほぼ一致するような、比較的時期の近接した住居跡が集中して分布する。また、矢田遺跡では数少ない掘り方のしっかりした柱穴を持つ掘立柱建物跡が、東西に五棟程連なっており、一部竪穴住居跡とも切り合っている。掘立柱建物跡自体の検出数が、極めて少ない事も関係しているだろうが、全体を眺めてもこうした地点は他に見られず、やや特異な地点である印象がある。本住居跡の直接の切り合い関係は、373号住居跡(奈良)・386号住居跡(平安)の西壁を掘り込んで構築されている。

373・386号住居跡の覆土中に構築される為、特に東壁について不確定な要素が残るが、平面形は東西3m 20cm・南北4m 20cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-72°-Eを示すと思われる。床面に貼床は認められず、ローム(地山)を直接叩き締めて使用しているようである。付属する柱穴・壁溝等も確認されていない。

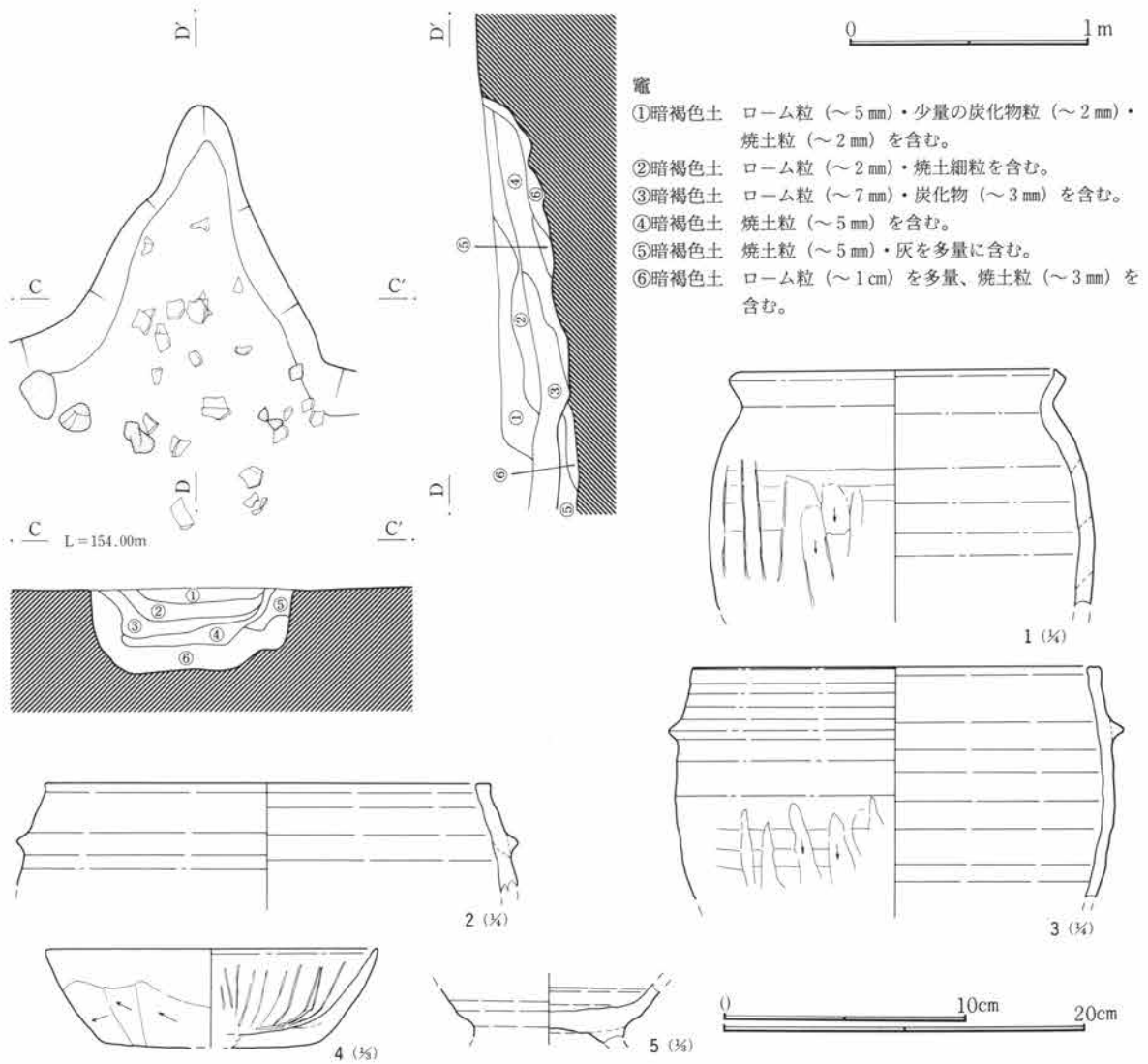
竈は、東壁中央南寄りにあり、幅1m・奥行1m・深さ31cmを測る。残存状況は極めて悪く、用材とみられる石が周辺に散乱している。

貯蔵穴は、南西隅にあるピットが相当すると考えられ、径60cm・深さ35cmを測る円形を呈する。



第144図 374号住居跡実測図(1)

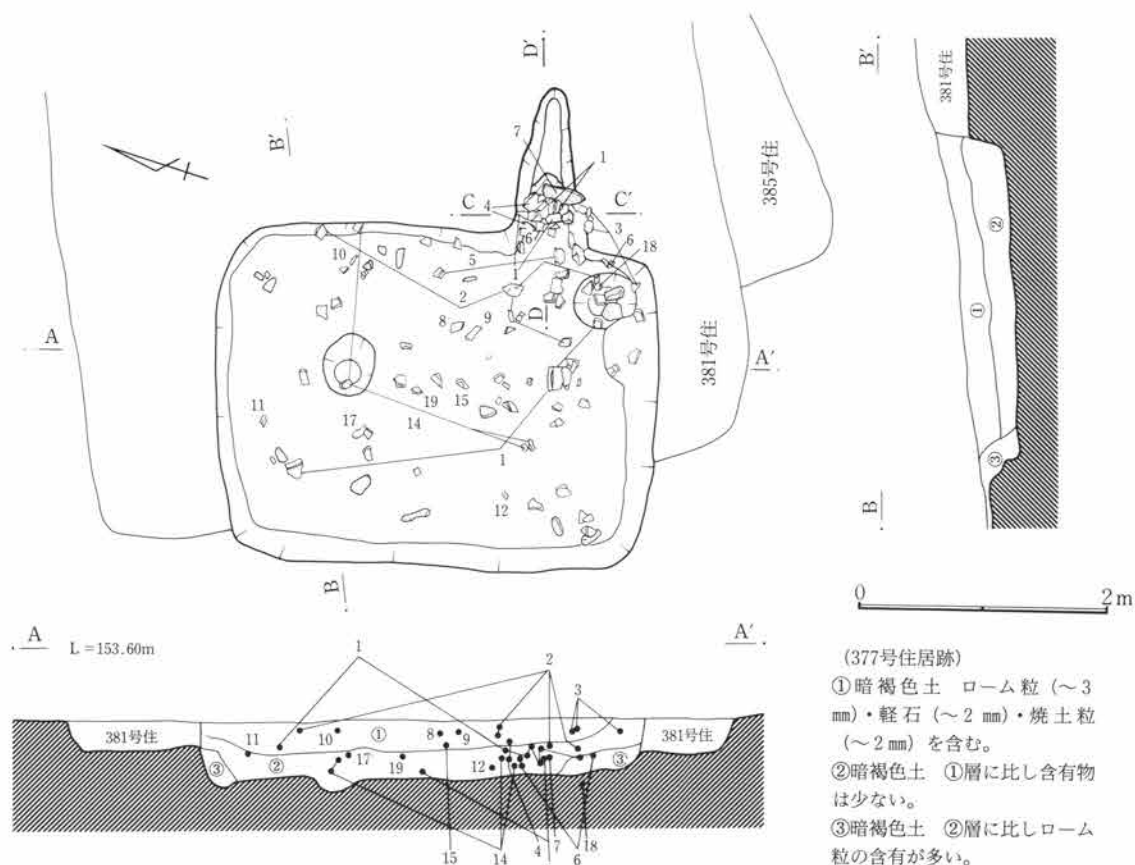
第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



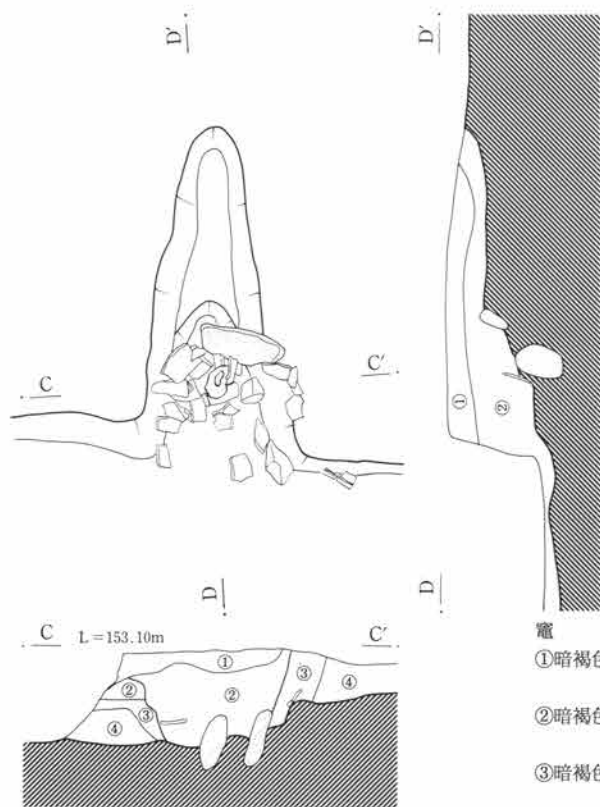
第145図 374号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第62表 374号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
145-1 50	須恵器 土釜	竈内+12 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋削り。	
145-2	須恵器 羽釜	床面+2 破片	口(24.9) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰褐色	輪積成形でロクロ使用。	
145-3 50	須恵器 羽釜	床面+4 破片	口(22.8) 底— 高—	①普、砂粒・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋削り。	
145-4	土師器 器坏	床面-2 1/4残存	口(14.0) 底(9.0) 高4.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③暗褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半～底部篋削り。内面篋撫で。	
145-5	土師器 器塊	床面+12 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	高台剝離



377号住居跡 (第146～148図、第63表、図版30・50)



第146図 377号住居跡実測図

0 1m

本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、24-15グリッドに位置する。381号住居跡(奈良)の覆土を掘り込んで構築されている。

平面形は東西2m70cm・南北3m50cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-75°-Eを示す。掘り込みは381号住居跡の床面を掘り抜いている。床面は、地山を直接叩き締めていると思われる。床下の施設については不明である。

竈は、東壁南寄りにあり、幅50cm・奥行1m20cm・深さ40cmを測る。燃焼部と煙道部は明瞭な段を持つ。燃焼部には、天井石と見られる石材が残存し、羽釜の破片を補強材としていた。

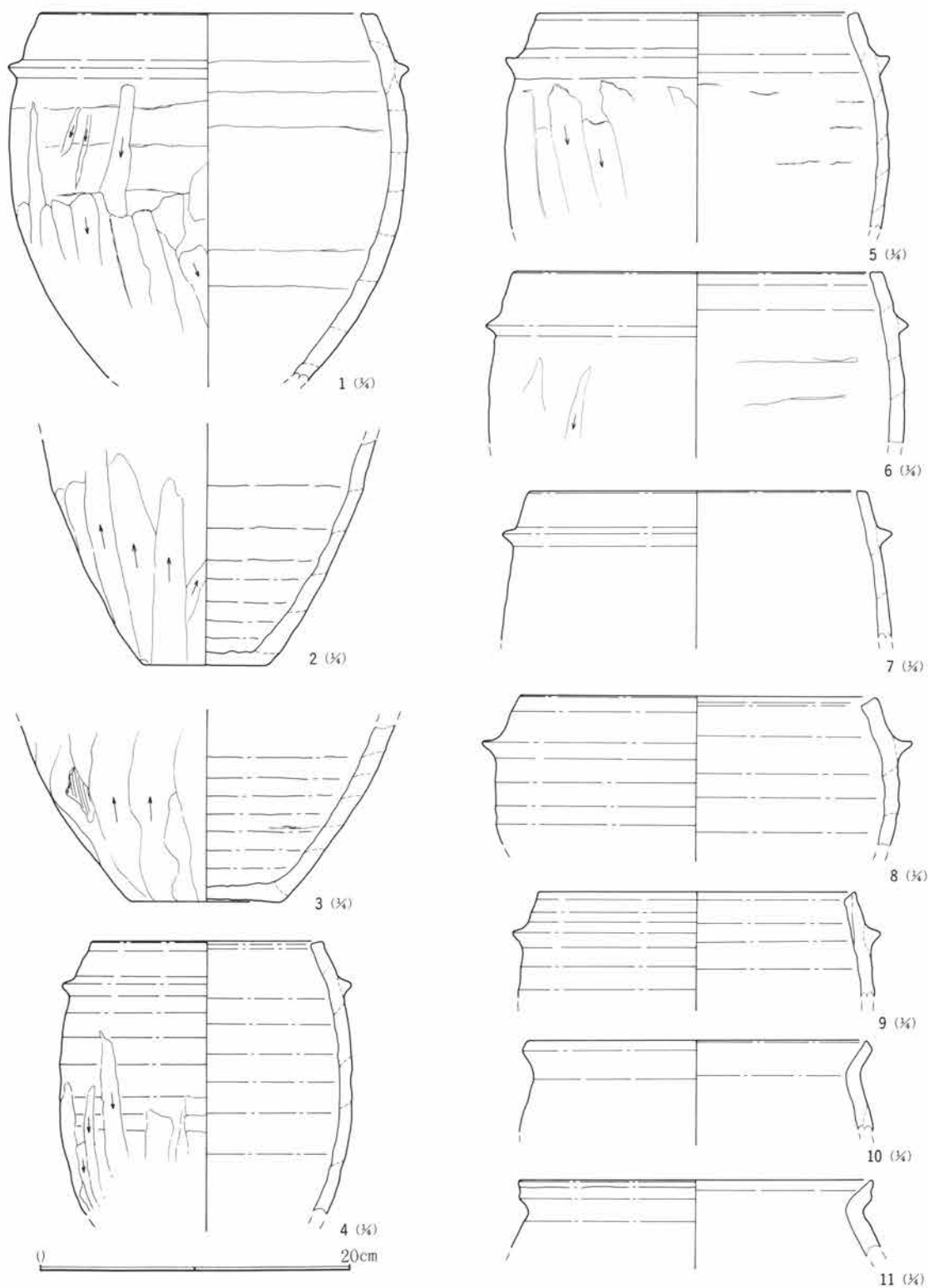
貯蔵穴は竈右脇にあり、径50cm・深さ45cmを

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

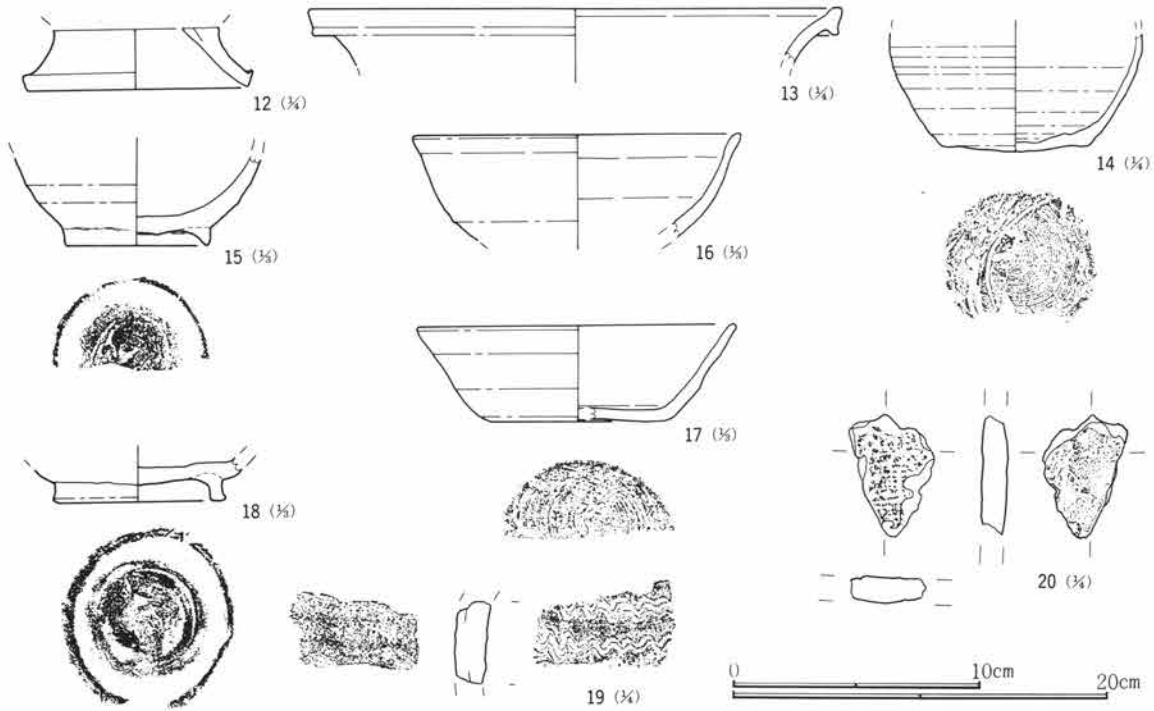
測る円形を呈する。南壁を突堤状に掘り残しており、住居外へやや張り出す形になっている。

遺物はやや多く、床面全体に散布している。特に接合しない羽釜の個体数の多さが目立つ。他に薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩4個、緑簾緑泥片岩・閃緑岩各1個（計1.51kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（春山）。



第147図 377号住居跡出土遺物実測図(1)



第148図 377号住居跡出土遺物実測図(2)

第63表 377号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
147-1 50	須恵器 羽 釜	床面+7 1/2残存	口 21.6 底 — 高 —	①粗、石英、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
147-2 50	須恵器 羽 釜	床面+19 破片	口 — 底 8.2 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
147-3 50	須恵器 羽 釜	床面+29 破片	口 — 底 10.0 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③外面褐色、内面黄灰色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
147-4 50	須恵器 羽 釜	竈内+11 破片	口(15.2) 底 — 高 —	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
147-5	須恵器 羽 釜	床面+5 破片	口(21.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄橙色	輪積成形でロクロ使用。外面一部篋削り。	
147-6	須恵器 羽 釜	床面+5 破片	口(24.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
147-7	須恵器 羽 釜	竈内+14 破片	口(22.2) 底 — 高 —	①粗、石英・黒色鉄物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
147-8	須恵器 羽 釜	床面+35 破片	口(23.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黒灰色	輪積成形でロクロ使用。	二次焼成を受け るか
147-9	須恵器 羽 釜	床面+38 小破片	口(20.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄橙色	輪積成形でロクロ使用。	
147-10	土師器 甕	床面+40 小破片	口(22.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
147-11	土師器 甕	床面+19 小破片	口(23.0) 底— 高—	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	輪積成形でロクロ使用。	
148-12	須恵器 甕	床面+6 小破片	口— 底(12.0) 高—	①粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪積成形。	
148-13	須恵器 甕	覆土 小破片	口(29.0) 底— 高—	①粗、白色鈹物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	ロクロ成形。	
148-14 50	土師器 小型甕	床面+5 1/2残存	口— 底18.2 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
148-15	須恵器 高台付壺	床面+26 破片	口— 底(5.8) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
148-16	須恵器 壺	覆土 小破片	口(13.4) 底— 高—	①粗、雲母・白色鈹物粒 ②還元焰、軟質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
148-17 50	須恵器 壺	床面+20 破片	口(13.0) 底— 高3.8	①粗、白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
148-18	須恵器 高台付壺	床面-5 破片	口— 底7.1 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③外面にぶい橙色、内面黒色	ロクロ成形後、高台貼付。	
148-19	須恵器 甕	床面+18 小破片	口— 底— 高—	①粗、石英・白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
148-20	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚(1.4)	①粗、石英粒 ②還元焰 ③黒色、断面黄灰色		

379号住居跡（第149図、第64表、図版31・50・55・58）

本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、24-18グリッドに単独で位置する。周囲には、各時代の住居跡が重複しており、比較的近い時期の住居跡も含まれている。特に、東に209号住居跡（平安）・北に386号住居跡（平安）の、主軸方向のほぼ一致する住居跡が隣接するものの、いずれも切り合い関係は無く、相互に存在を意識していた可能性もある。南側は、住居跡の分布がやや途切れるが、等高線には明瞭に表れてこないものの、埋没谷にかかわる湧水点があったようで、住居跡の占地もこれを避けているように観察出来る。

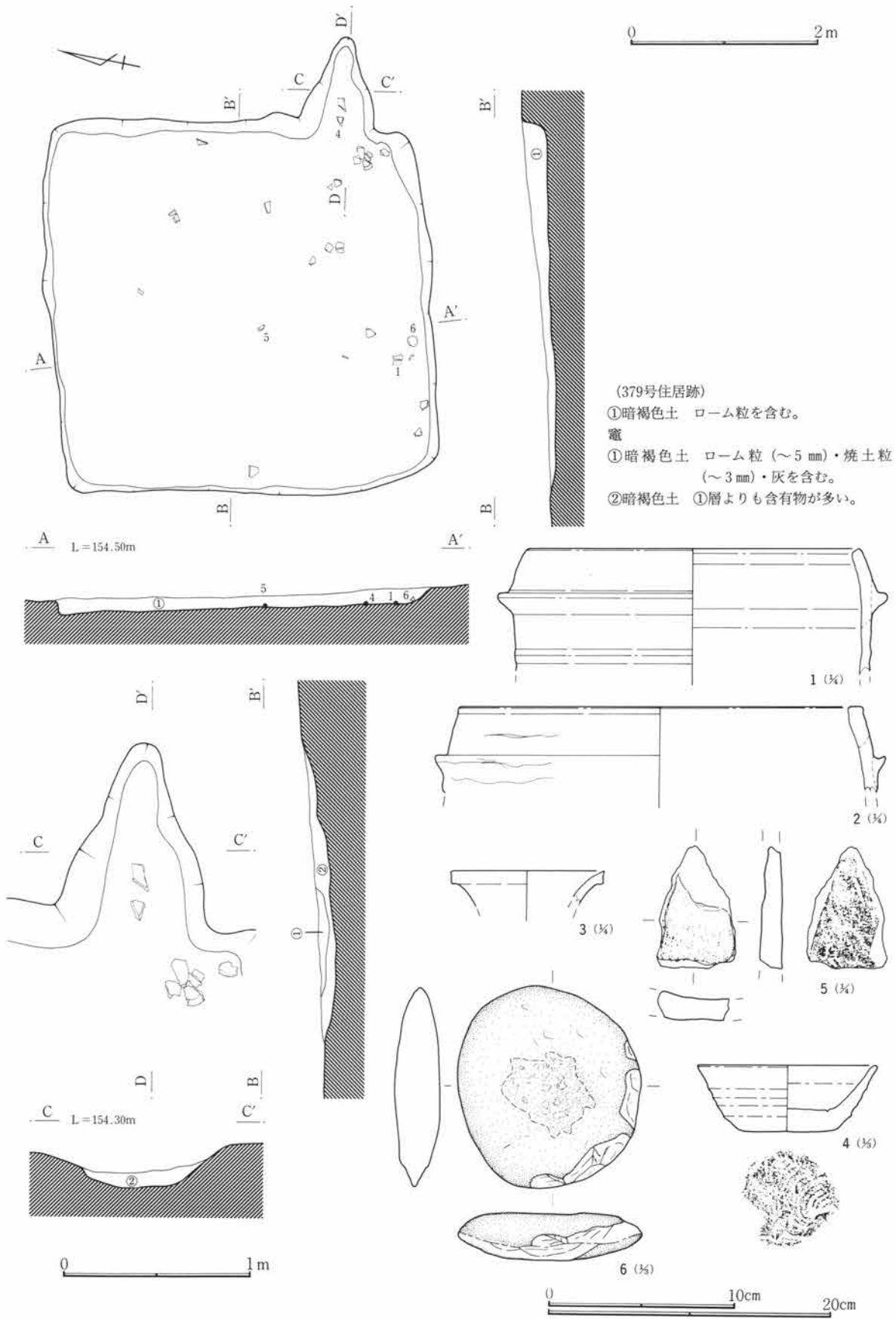
傾斜面の影響で表土の流失が進行し、本住居跡の覆土もかなり流され、特に西壁は痕跡状態であったが、平面形は東西3m95cm・南北4m程度を測るやや歪んだ正方形を呈すると思われる。主軸方向はN-78°-Eを示す。床面は、ローム（地山）を叩き締めていると思われ、基本的に掘り方は無いようである。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設の存在も確認されていない。

竈は、東壁の南東隅近くにあり、殆ど焼土のみの痕跡状態であるが、幅70cm・奥行1m5cm・深さ10cmを測る。東壁から50cm程の位置にくびれがあり、明確な段は認められないが、燃焼部と煙道部との境に係するものであろう。構築材に係すると見られる石材等は、住居跡全体を見ても殆ど認められないので、本来石組ではなかったかもしれない。

遺物は極めて少なく、南壁寄りの床面上全体に散漫に分布しており、個体の残存率も低い。従って図化できた物も非常に少ないが、煮沸具には羽釜を含むと思われる。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（春山）。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第149図 379号住居跡実測図及び出土遺物実測図

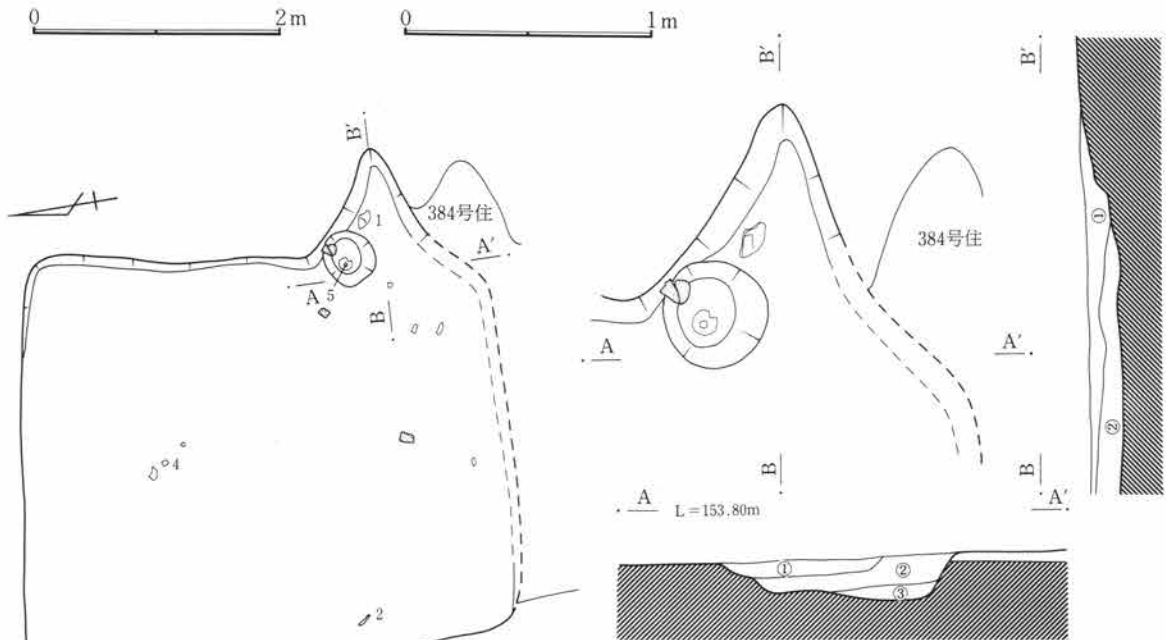
第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)

第64表 379号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
149-1	須恵器 羽釜	床面直上 破片	口(23.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪積成形でロクロ使用。	
149-2	須恵器 羽釜	覆土 小破片	口(28.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③灰白色	輪積成形でロクロ使用。	
149-3	須恵器 甕	覆土 小破片	口(11.0) 底 — 高 —	①粗、灰色・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
149-4 50	須恵器 坏	床面+2 %残存	口 9.6 底 4.8 高 3.4	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③黒色処理、断面黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
149-5 55	平瓦	竈内直上 小破片	長 — 幅 — 厚(1.4)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色		
149-6 58	石製品 敲石	床面+4 ほぼ完形	長 10.6 幅 9.7 厚 2.4 重 37.5		側面に打撃痕、中央に敲打痕あり。	結晶片岩(輝岩)

383号住居跡 (第150・151図、第65表、図版31)

本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、37-17グリッドに位置する。周囲には同時期の住居跡が少ないが、確認出来たものの多くは切り合っている。本住居跡は、384号住居跡(平安)の北半部を切って構築され、平面形は東西3m45cm・南北4mを測る長方形を呈する。但し、南壁は掘り込みが充分でなくやや明瞭さに欠ける。竈から想定される主軸方向はN-90°-Eを示す。床面はローム(地山)面を叩き締めており、貼床は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等も確認されなかった。



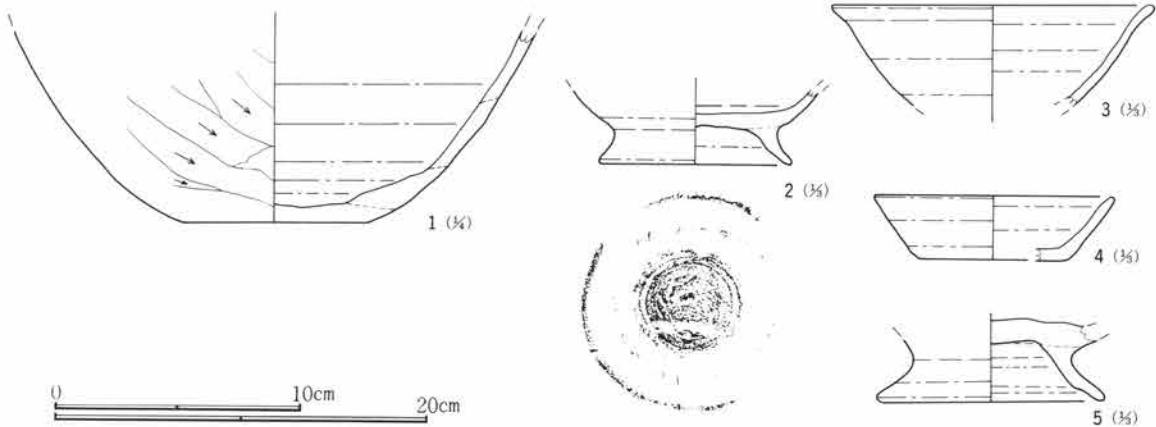
竈 ①暗褐色土 ローム粒(～2mm)を多量、焼土粒(～2mm)・炭化物粒(～2mm)を含む。②暗褐色土 ①層に比し暗い色。焼土粒(～3mm)を含み、多量の焼土ブロック(～1cm)・灰・ローム粒を含む。③暗褐色土 多量の灰とローム粒(～1cm)を含む。

第150図 383号住居跡実測図

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅1m・奥行き85cm・深さ12cmを測る。焼土化は充分でなく痕跡に近いが、燃焼部中央左寄りにピットが認められ、遺物の大半はこの周辺から出土している。

遺物量は少なく、残存率も不良である。図化出来たものの中には土師質皿と見られるものがあり、煮沸具としては羽釜底部が検出されているが、残存率は不良である。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（春山）。



第151図 383号住居跡出土遺物実測図

第65表 383号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
151-1	須恵器 羽釜	竈内直上 破片	口 — 底(10.0) 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
151-2	土師器 高台付塊	床面-7 破片	口 — 底 7.8 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい浅黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
151-3	土師器 塊	覆土 破片	口(13.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
151-4	土師器 坏	床面-3 破片	口(9.6) 底(5.8) 高 2.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
151-5	土師器 高台付塊	床面-22 破片	口 — 底 9.2 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	

384号住居跡（第152図、第66表、図版31）

本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、36-15グリッドに位置する。あまり時期差がないとみられる383号住居跡（平安）に北半部を切られ、竈周辺のための痕跡状態で残存している。

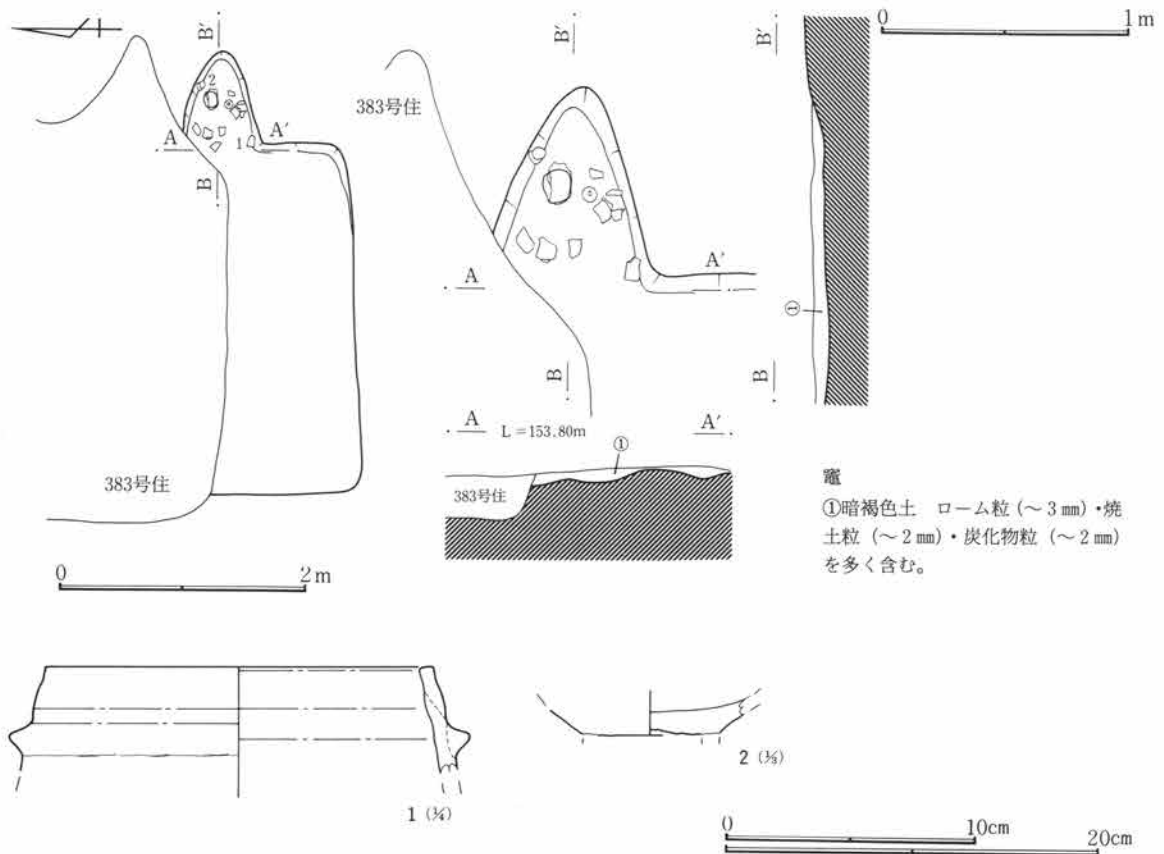
地山との色調の違いで判断される住居跡の範囲は、東西2m80cmを測り、383号住居跡に切られる為、南北の規模は不詳であるが、本来やや東西に長い長方形を呈していたと思われる。竈から想定される主軸方向はN-90°-Eを示す。床面はかなり流失していたが、基本的にはローム面（地山）を叩き締めており、貼床等は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等も確認されていない。

竈は僅かに焼土が残る程度であったが、東壁中央やや右寄りにあったと思われ、幅約60cm・奥行70cm・深さ8cmを測る。

遺物は非常に少なく、個体の残存率も不良であるが、羽釜・坏の破片が認められる。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（春山）。

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第152図 384号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第66表 384号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
152-1	須恵器 羽釜	竈内+4 小破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
152-2	須恵器 高台付塊	竈内+2 破片	口— 底 5.6 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	高台剥離

386号住居跡（第153・154図、第67表、図版31・51・58）

本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、24-17・18グリッドに位置する。373号住居跡（奈良）の南半部を切って構築され、374号住居跡（平安）に北西隅を切られる。

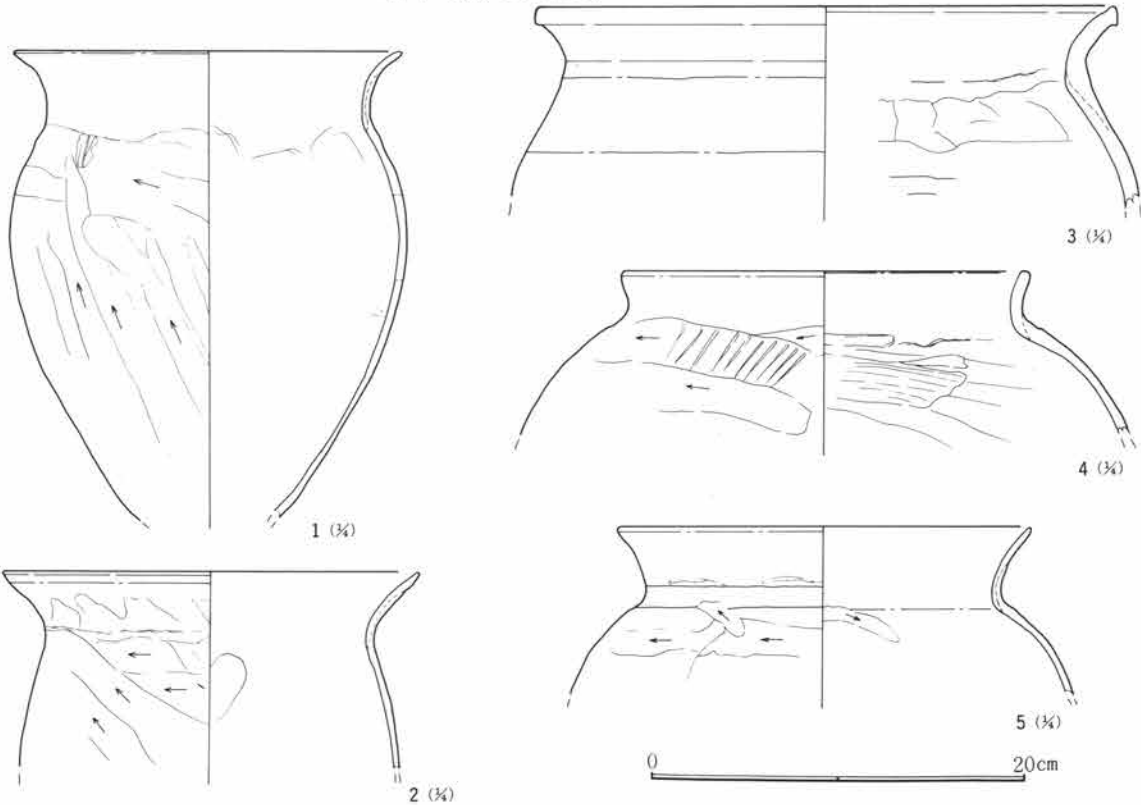
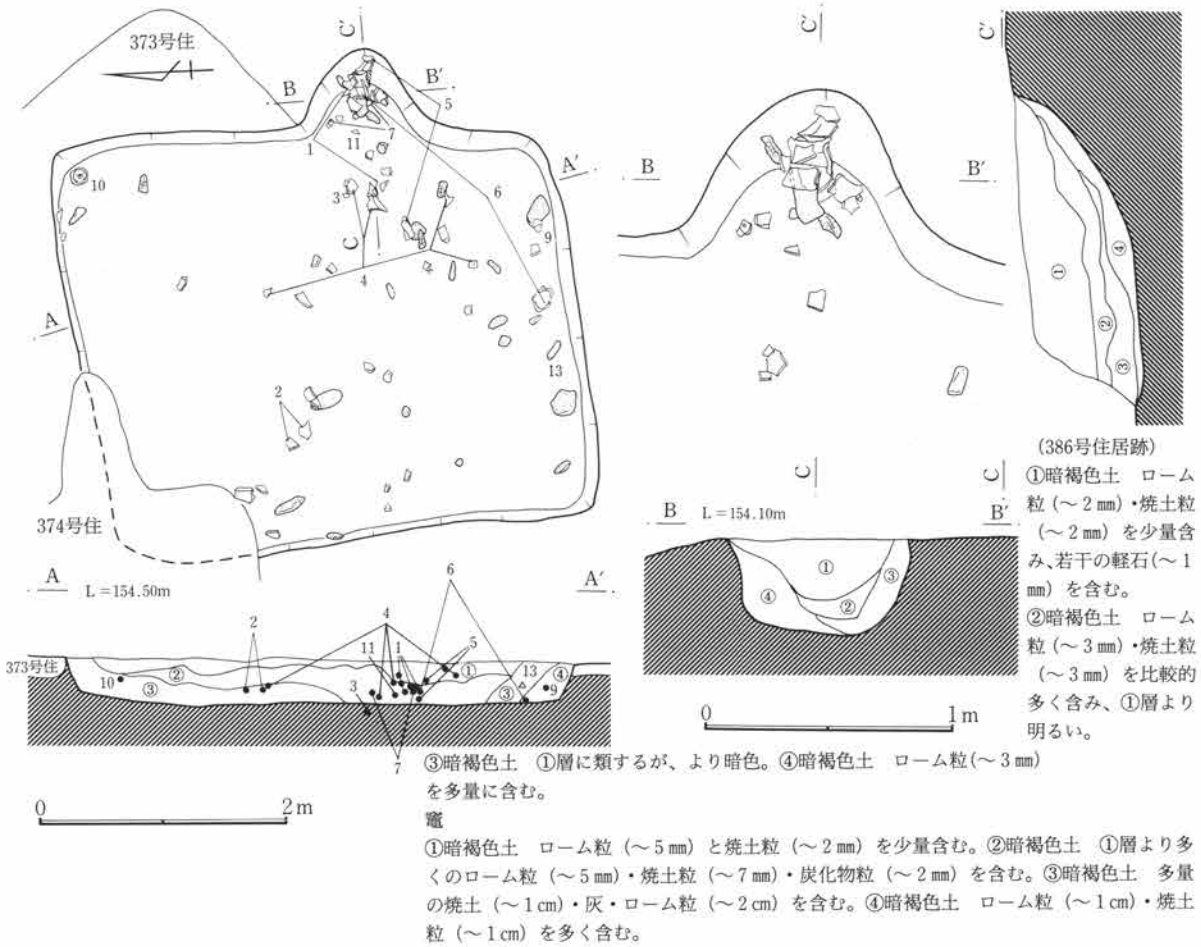
平面形は東西3m40cm・南北4m10cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-72°-Eを示す。床面は、基本的にローム（地山）を叩き締めており、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設の有無も明らかでない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅90cm・奥行70cm・深さ37cmを測る。構築材に関連するような石材の遺存が全く無いが、内部の煙道寄りにゴ字状口縁土師器甕がややまとまって残存しており、あるいは煙道に再利用された物であるかもしれない。

遺物は、床面上全体に散乱していたが、量的にはやや少ない。373号住居跡に伴う遺物も混入している可能性がある。定形化した砥石には、刃試しの条痕が顕著に認められる。それら以外では薦編石状の絹雲母石墨片岩4個、緑簾緑泥片岩・点紋緑泥片岩各1個（計1.68kg）が検出されている。

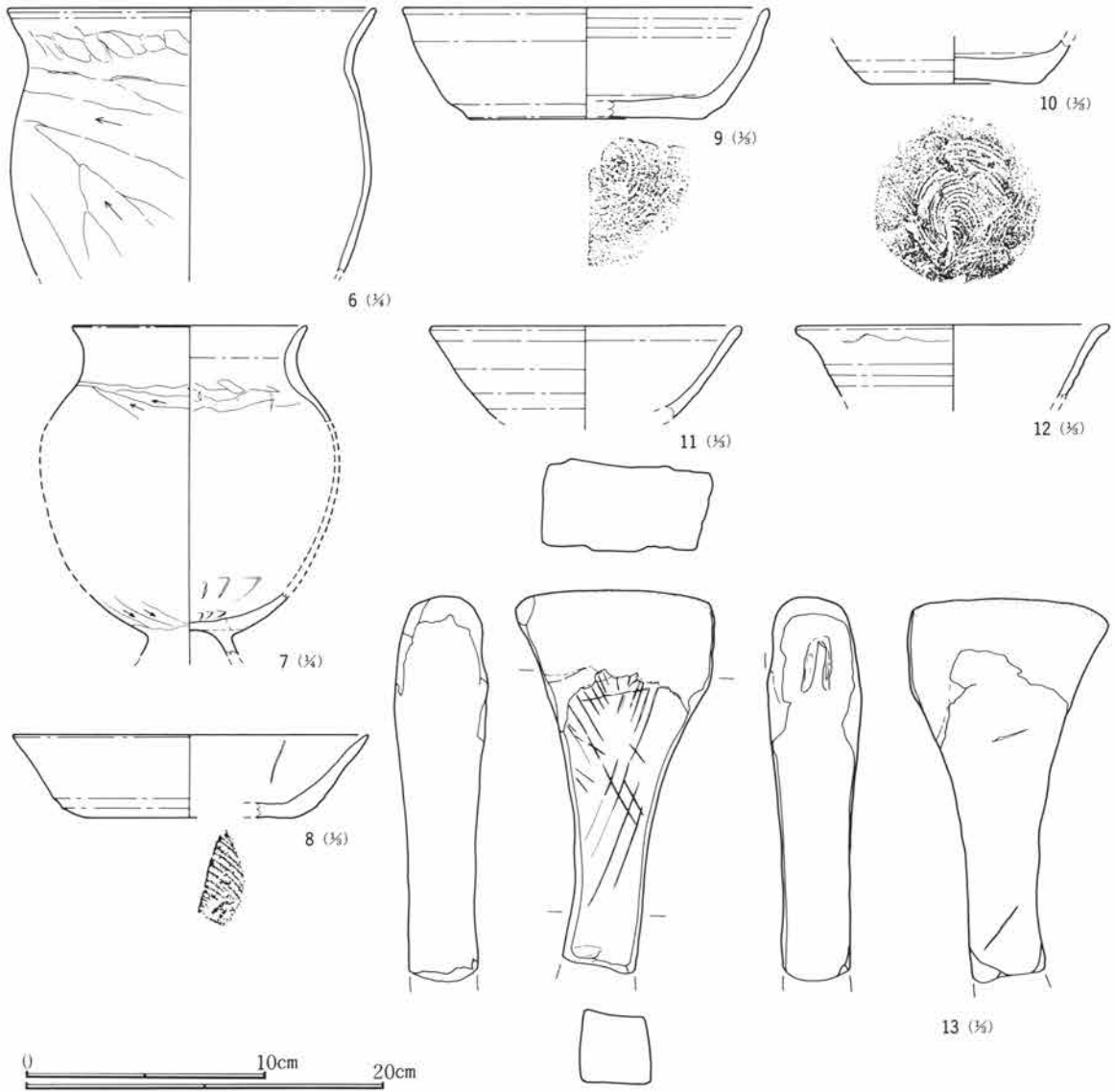
以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（春山）。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第153図 386号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第154図 386号住居跡出土遺物実測図(2)

第67表 386号住居跡出土遺物観察表

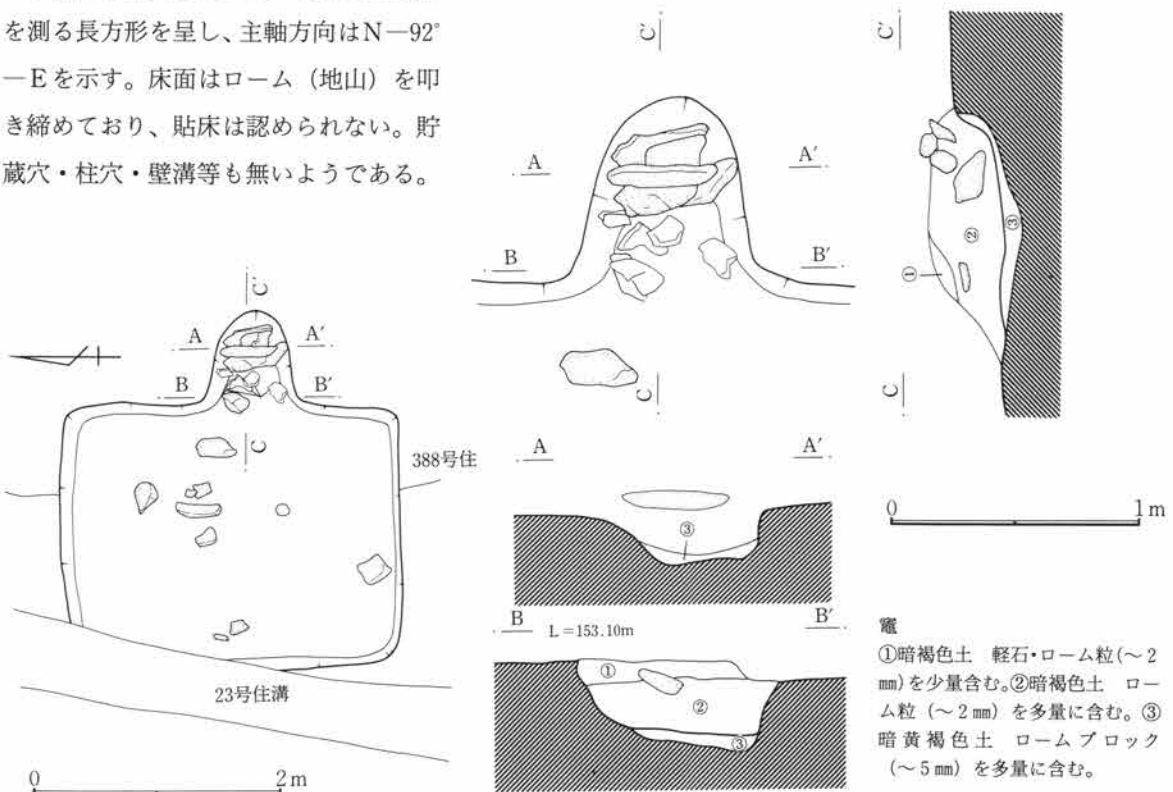
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
153-1 51	土師器 甕	床面+8 1/2残存	口 20.6 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
153-2	土師器 甕	床面+8 破片	口 (22.4) 底 — 高 —	①粗、雲母 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 撫で。	
153-3	須恵器 大甕	床面-5 破片	口 (31.2) 底 — 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪積成形後、口辺横撫で。内面撫で。	
153-4 50	土師器 甕	床面+4 破片	口 (22.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 撫で。	
153-5	土師器 甕	床面+4 破片	口 (22.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 撫で。	

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
154-6 51	土師器 甕	床面直上 破片	口 20.6 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
154-7	土師器 小型 高台付甕	竈内+7 小破片	口(13.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
154-8	須恵器 坏	覆土 小破片	口(15.0) 底(8.8) 高 3.4	①粗、褐色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
154-9 50	須恵器 坏	床面+11 小破片	口(15.4) 底(10.0) 高 4.6	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。全面回転 篋削り。	
154-10	須恵器 坏	床面+13 破片	口 — 底 7.2 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。外周手持 ち篋削り。	
154-11	土師器 坏	竈内+6 破片	口(13.0) 底 — 高 —	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色	ロクロ成形。	
154-12	須恵器 坏	覆土 小破片	口(13.4) 底 — 高 —	①粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色～一部黒変	ロクロ成形。	
154-13 58	石製品 砥石	床面+12	長 15.5 厚 3.5 幅 7.2 重 480		中砥。四面使用。刃試しの痕跡あり。	石英安山岩

391号住居跡 (第155・156図、第68表、図版32・51)

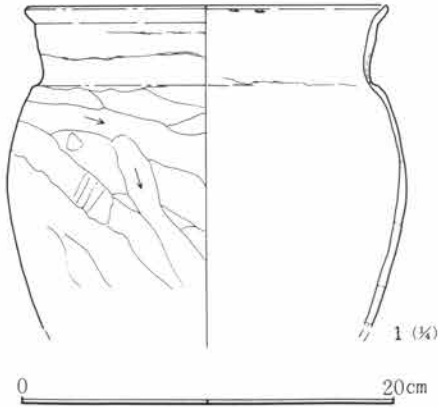
本住居跡は、第5次調査区北寄りの緩斜面にあり、35-12グリッドに位置する。388号住居跡(古墳)の西壁を掘り込んで構築され、23号溝によって西壁南西隅寄りを破壊される。

平面形は東西2m5cm・南北2m70cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-92°-Eを示す。床面はローム(地山)を叩き締めており、貼床は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等も無いようである。



第155図 391号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第156図 391号住居跡出土遺物実測図

竈は、東壁のほぼ中央にあり、幅70cm・奥行70cm・深さ32cmを測る。燃烧部の奥の天井石は、ほぼ原位置を保っていると考えられるが、支持の石材は見られず、素掘りの竈斜面に寄せていると思われる。袖石やその他の天井石と考えられる石材は、床面上に散乱していた。

遺物は極めて少なく、坏類の検出はない。竈内部にコ字状口縁土師器甕が残存していた。それ以外では、薦編石状の点紋絹雲母石墨片岩2個(計0.6kg)が検出されている。

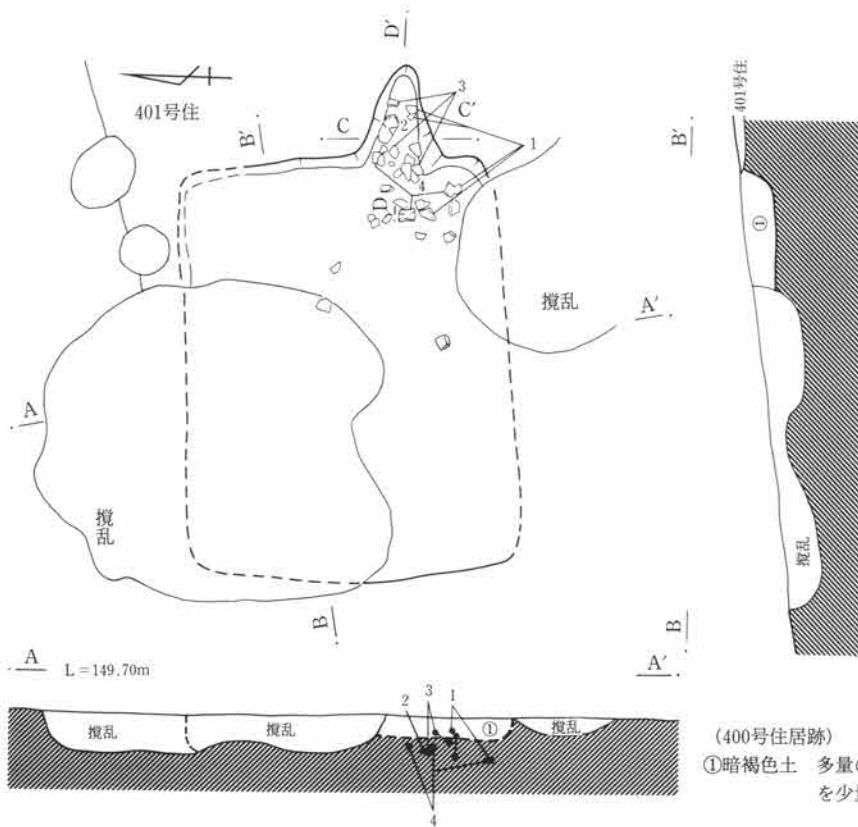
以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(春山)。

第68表 391号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
156-1 51	土師器 甕	竈内+4 %残存	口 19.8 底 - 高 -	①普、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横無で。外面削削り。	

400号住居跡 (第157・158図、第69表、図版32・51)

本住居跡は、第5次調査区北寄りの緩斜面にあり、33-3グリッドに位置する。401号住居跡(平安)の西壁を切って構築され、9号掘立柱建物跡が北東隅を切っている可能性がある。



第157図 400号住居跡実測図(1)

表土掘削に際して大きく破壊を受けた為に、やや不確定な要素があるが、平面形は東西3m40cm・南北2m60cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示すと思われる。床面は残存状況が悪く、詳細は不明だが、ローム(地山)を叩き締めているものと思われる。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設は確認されていない。

竈は、東壁中央やや南寄

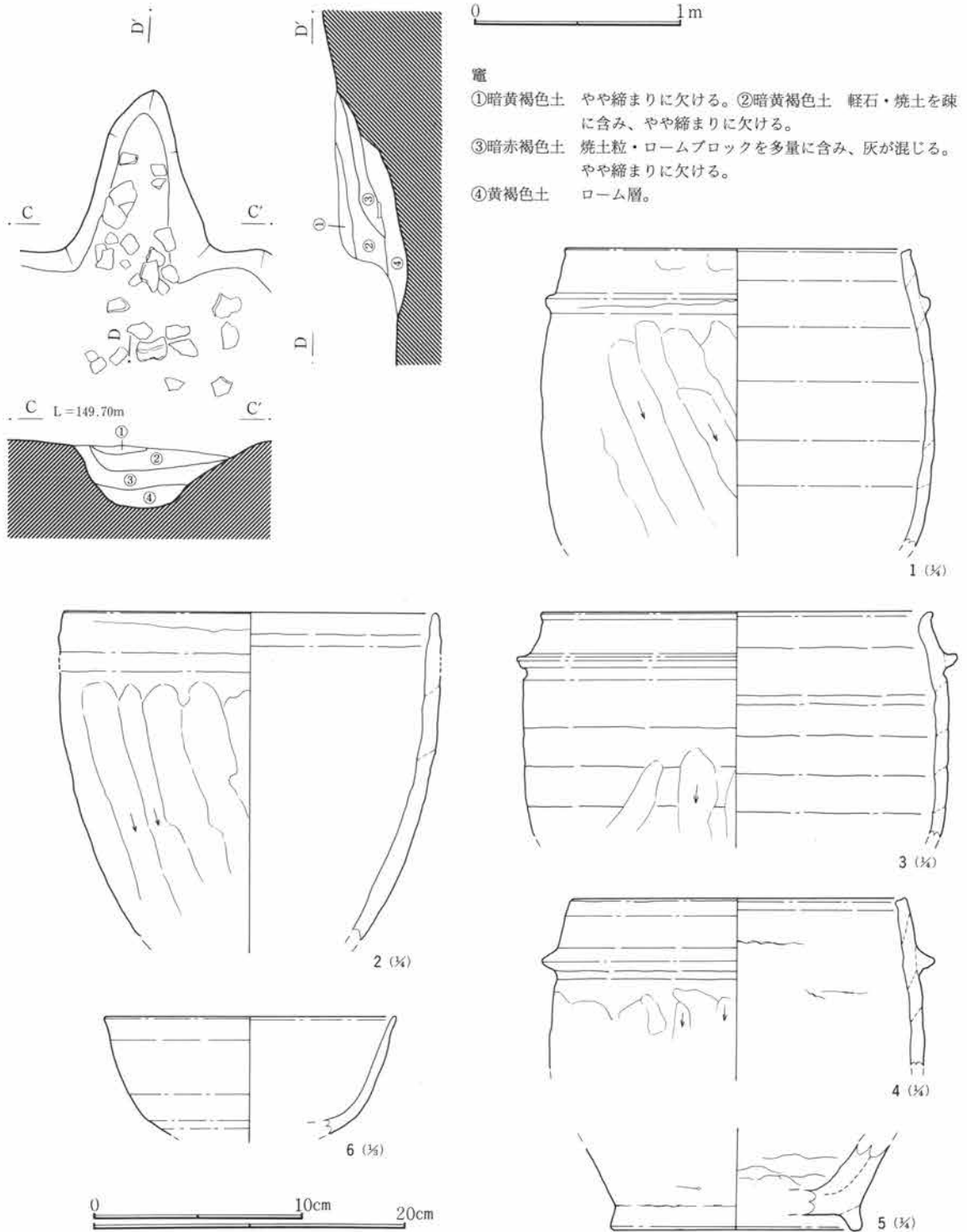
(400号住居跡)
①暗褐色土 多量のローム粒と、1mm内外の白色軽石粒を少量含む。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

りにあり、幅60cm・奥行80cm・深さ30cmを測る。竈内外から数個体分の接合しない羽釜の破片が検出され、補強材に再利用していたものと思われる。

遺物は竈周辺に集中するが、量的には少ない。特に坏類は僅かで、図化できた物も、大半が竈周辺に分布する羽釜破片で占められている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（中沢）。



第158図 400号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

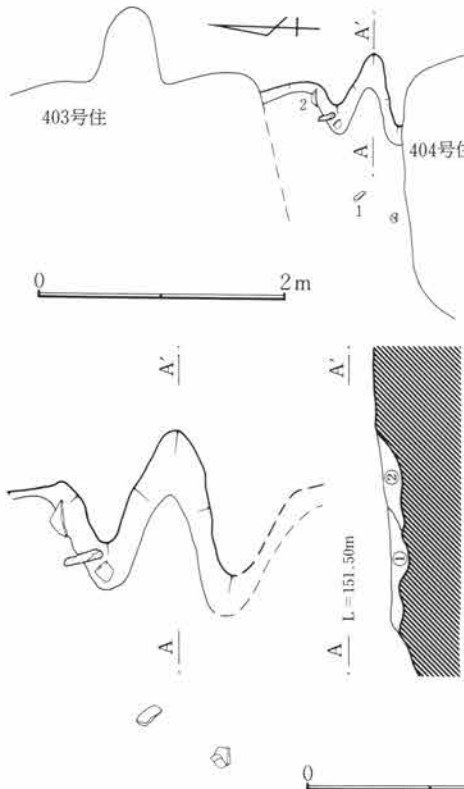
第69表 400号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
158-1	須恵器 羽 釜	竈内-2 破片	口(22.0) 底 - 高 -	①粗、黒色鈹物粒 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
158-2	須恵器 羽 釜	竈内-10 破片	口(24.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい黄橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	鈹剝離
158-3	須恵器 羽 釜	竈内-2 破片	口(27.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
158-4 51	須恵器 羽 釜	竈内-8 破片	口(21.6) 底 - 高 -	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
158-5	須恵器 高台付甕	覆土 小破片	口 - 底(12.0) 高 -	①粗、石英・白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③外面にぶい橙色、内面灰色	輪積成形でロクロ使用。高台貼付。内面撫で。	
158-6	須恵器 壺	覆土 3%残存	口(14.2) 底 - 高 -	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	

402号住居跡（第159図、第70表、図版33・51）

本住居跡は、第5次調査区北寄りの平坦面にあり、33-8グリッドに位置する。404号住居跡（古墳）の北端の覆土を切って構築していたと思われ、403号住居跡（平安）に北半部を切られる。西端は表土の流失によって検出されず、竈周辺のみ確認出来た。掘り方は確認出来ず、付属する貯蔵穴・柱穴・壁溝なども確認されていない。竈から想定される主軸方向はN-90°-Eを示す。

竈は東壁にあり、幅50cm・奥行60cm・深さ5cmを測る。辛うじて焼土は残存するが、殆ど痕跡状態である。

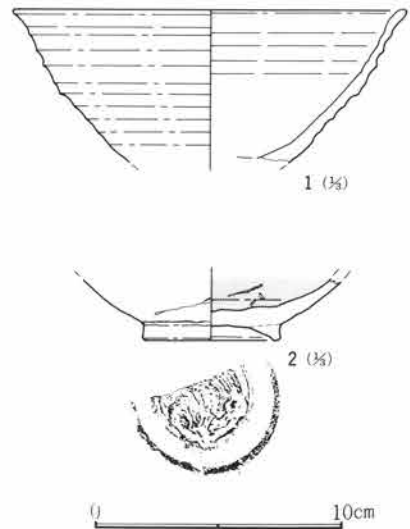


左袖に該当する位置に僅かな遺物が認められたが、竈の構築材に関係する物ではないだろう。

遺物は極めて少なく、図化出来た以外は極端な細片である。以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。

竈

- ①黒褐色土 ローム粒を多量、1mm内外の白色軽石粒・焼土粒を少量含む。
- ②褐色土 ロームを主体とし、僅かに焼土粒を含む。



第159図 402号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第70表 402号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
159-1 51	須恵器 高台付埴	床面+10 片残存	口(16.0) 底— 高—	①粗、褐色鉾物粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗黄灰色	ロクロ成形。	
159-2	須恵器 高台付埴	床面+2 破片	口— 底(5.6) 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③外面黄灰色、断面黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	内面黒色処理

403号住居跡 (第160・161図、第71表、図版51)

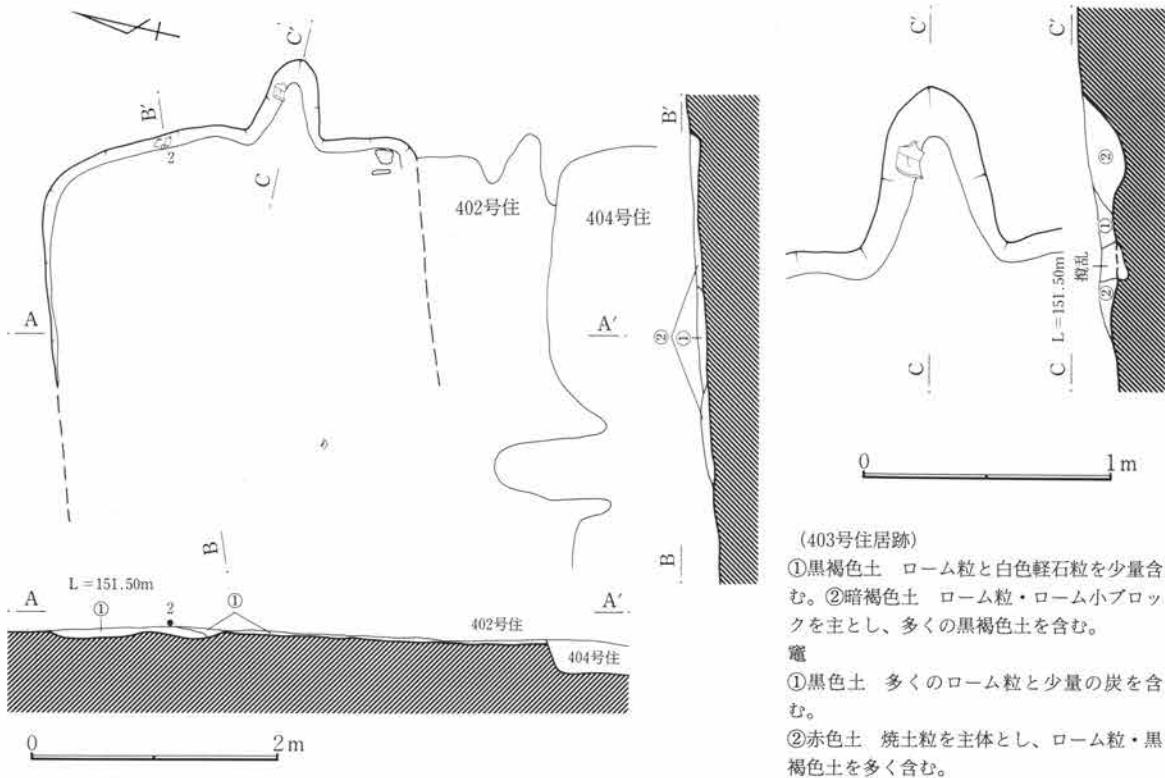
本住居跡は、第5次調査区北寄り平坦面にあり、33-8グリッドに位置する。この付近は、表土の流失が特に著しく、古墳時代の404号住居跡でさえ痕跡状態で、平安期の住居跡はいずれも竈の焼土のみといった残存状況であった。切り合い関係は402号住居跡(平安)の北半部を切って構築されている。隣接する402号住居跡同様、覆土は殆ど残存せず、全体に痕跡状態と言ってよい。

傾斜面に位置する為に、床面の西半部から西壁迄が完全に流失しており、東西方向の規模は全く不詳であるが、南北規模は3mを測ると思われる。主軸方向はN-94°-Eを示す。床面は、ローム(地山)を叩き締めており、貼床及び貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設は認められない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅50cm・奥行70cm・深さ10cmを測る。構築材とみられる石材等の遺存は全くなく、残存状態は極めて不良である。

遺物も極めて少なく、埴が二点図化出来たのみで、煮沸具に関しては残存していなかった。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる(中沢)。



第160図 403号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第161図 403号住居跡出土遺物実測図

第71表 403号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
161-1 51	須恵器 坏	覆土 %残存	口 10.4 底 (4.4) 高 (3.3)	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③にぶい橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
161-2	須恵器 高台付塊	床面+6 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	高台剝離

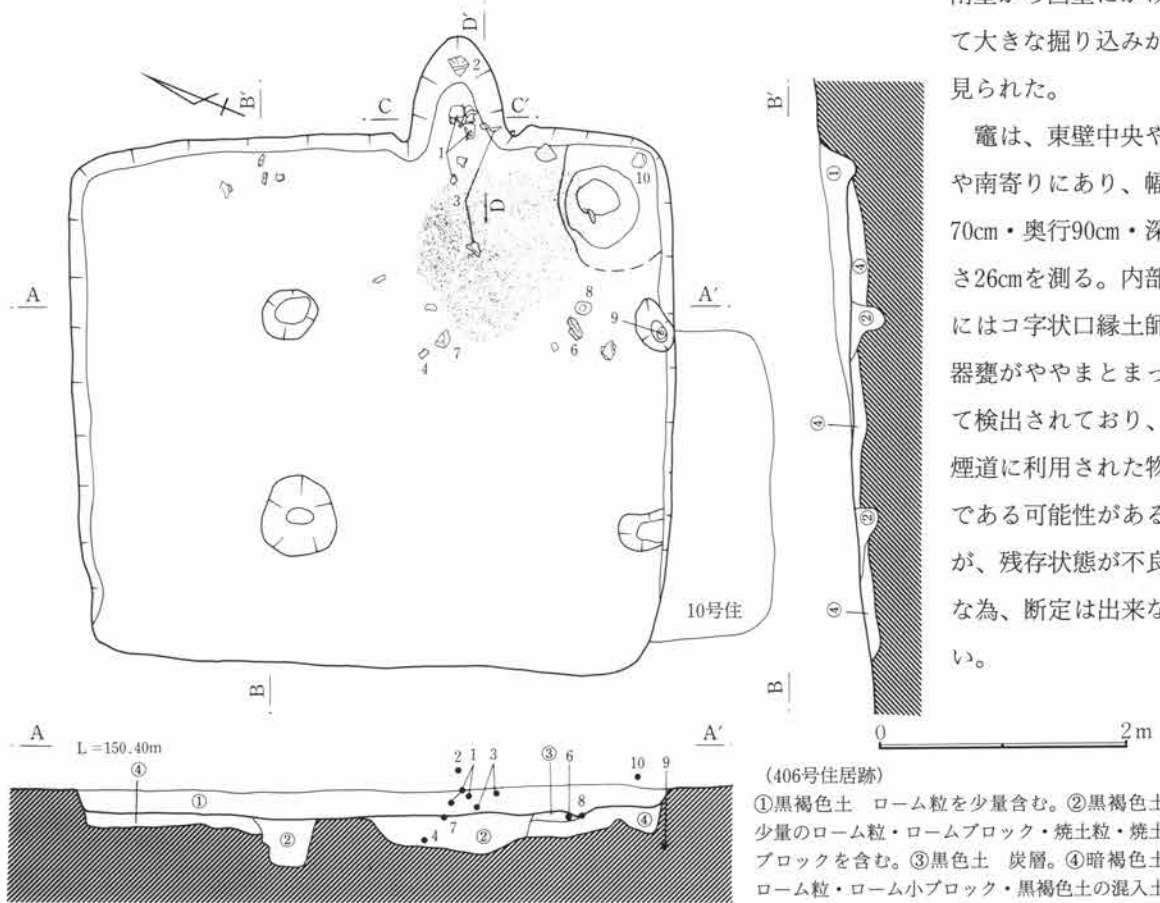
406号住居跡 (第163・164図、第72表、図版33・51)

本住居跡は、第5次調査区北寄りの緩斜面にあり、33-4・5グリッドに位置する。10号住居状遺構 (時期不明) の北端、405号住居跡 (奈良) の西壁を切って構築する。

平面形は、東西 4 m 85cm・南北 4 m 30cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-66°-Eを示す。住居跡中央に二穴と、南壁に接して二穴の柱穴がある。床面は竈前を中心に貼床を施し、床下には竈前のピットの他、

南壁から西壁にかけて大きな掘り込みが見られた。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅 70cm・奥行 90cm・深さ 26cmを測る。内部にはコ字状口縁土器甕がややまとまって検出されており、煙道に利用された物である可能性があるが、残存状態が不良な為、断定は出来ない。



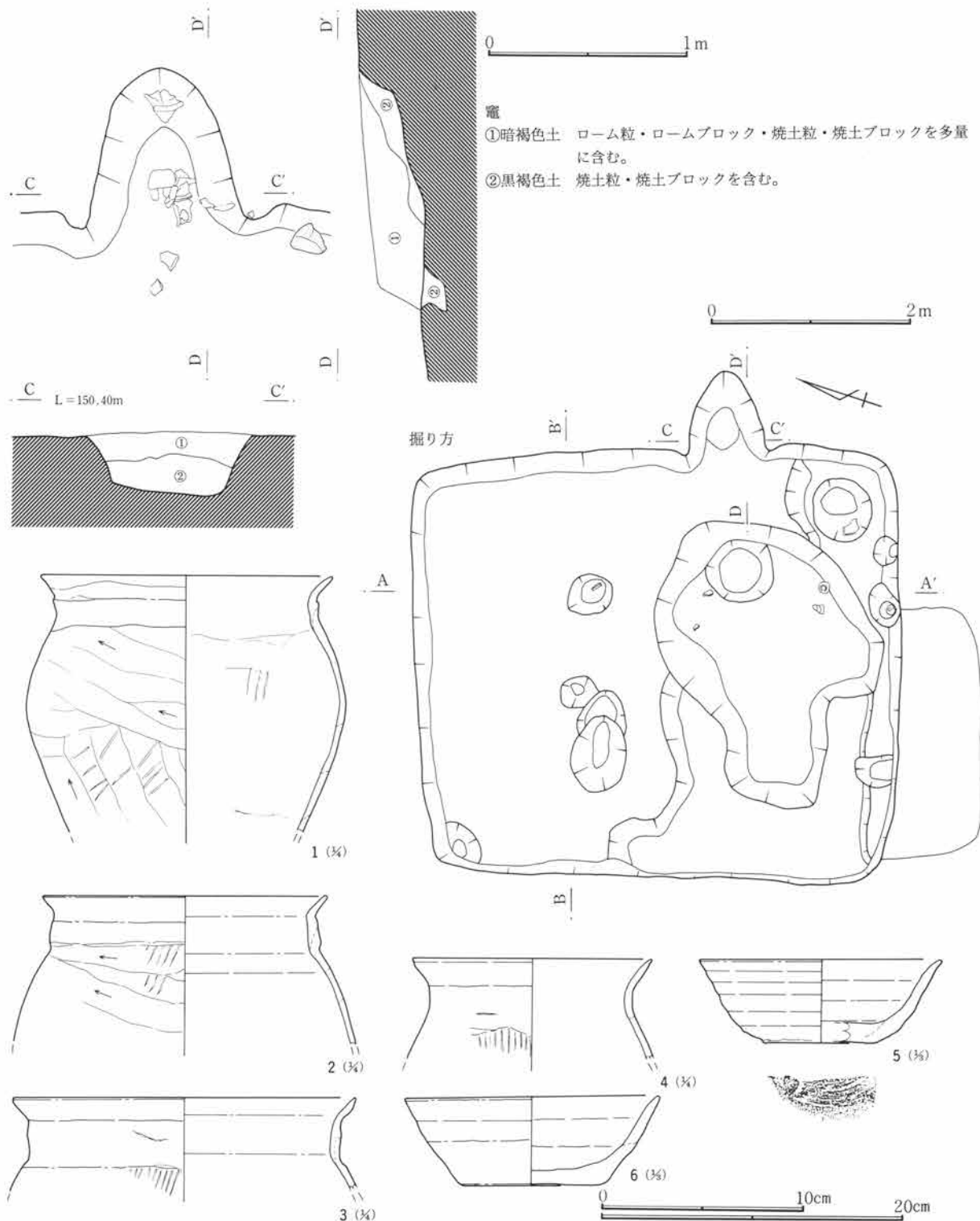
第162図 406号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

貯蔵穴は竈右脇にあり、径60cm・深さ30cm程度を測る。周囲を低い周堤と見られる高まりが、東西1m・南北70cmに亘って見られた。

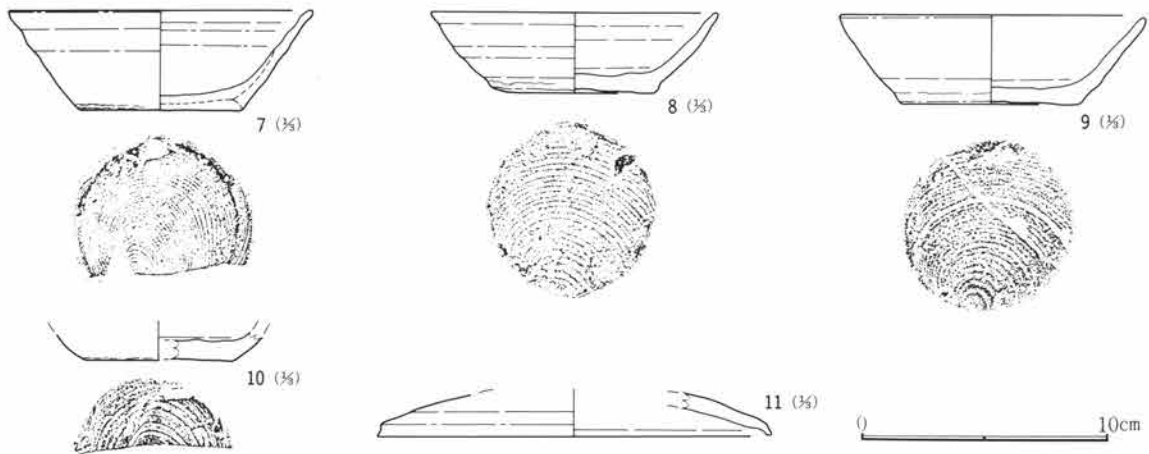
遺物はやや少なく、竈周辺に疎に分布し、残存率も低い。煮沸具には羽釜を含まない。それら以外では、薦編石状の石墨緑泥片岩・絹雲母石墨片岩各1個（計0.63kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。



第163図 406号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物 (承前)



第164図 406号住居跡出土遺物実測図(2)

第72表 406号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
163-1 51	土師器 甕	竈内+12 %残存	口 19.4 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	粘土の付着あり
163-2 51	土師器 甕	竈内+32 %残存	口 19.2 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
163-3	土師器 甕	床面+4 破片	口(23.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
163-4	土師器 甕	床面-18 小破片	口(16.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
163-5	須恵器 坏	覆土 %残存	口(12.2) 底(5.8) 高(4.1)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
163-6 51	土師器 坏	床面-4 %残存	口(12.8) 底 7.0 高 4.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	ロクロ成形。	
164-7 51	須恵器 坏	床面直上 %残存	口 12.4 底 6.6 高 3.9	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
164-8 51	須恵器 坏	床面直上 完形	口 11.6 底 6.6 高 3.2	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
164-9 51	須恵器 坏	床面-26 ほぼ完形	口 12.4 底 7.3 高 3.5	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
164-10	須恵器 坏	床面+22 破片	口 — 底(6.0) 高 —	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
164-11	須恵器 蓋	覆土 小破片	口(16.0) 底 — 高 —	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面褐色	ロクロ成形。	

407号住居跡 (第165・166図、第73表、図版51・52)

本住居跡は、第5次調査区中央西寄りの緩斜面にあり、27・28-5グリッドに位置する。一連の重複住居跡群の中にあり、340号住居跡(平安)の上部を削平して構築し、408号住居跡(平安)の竈に西壁を切られている。

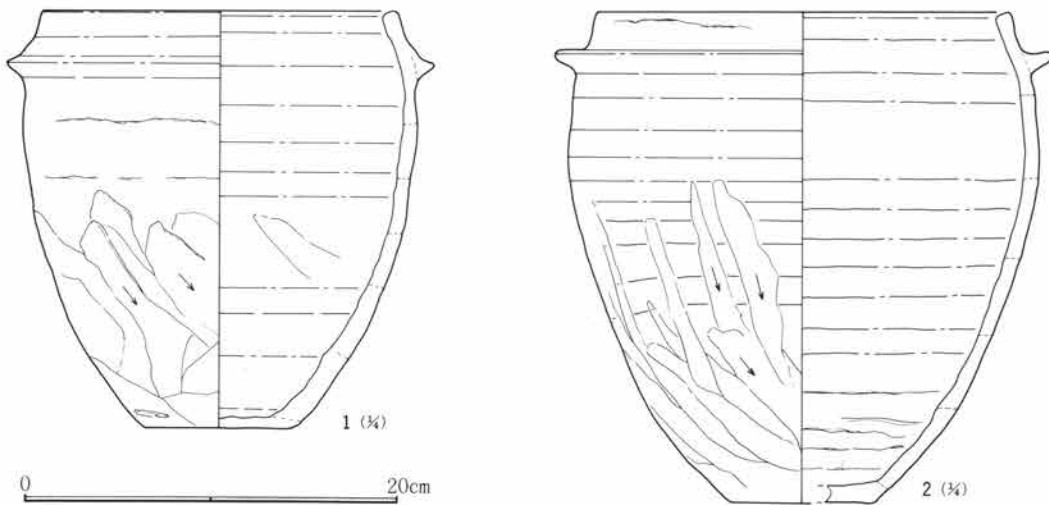
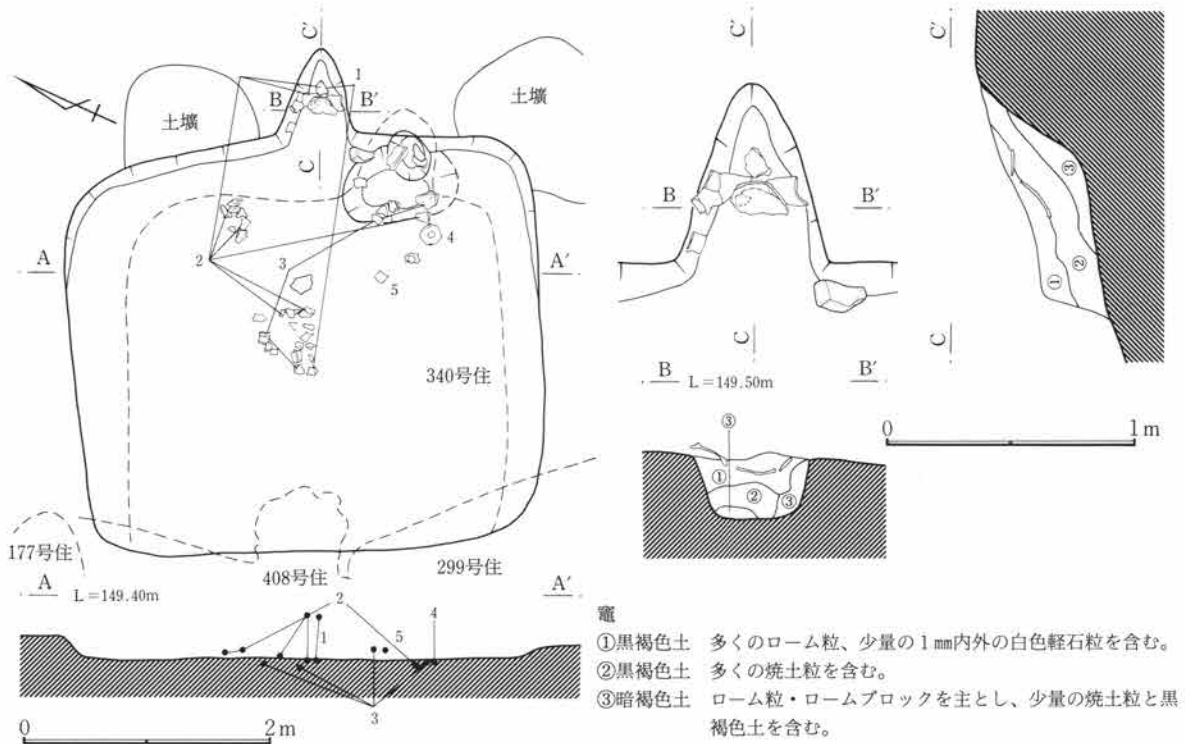
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

平面形は東西3 m30cm・南北3 m80cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-70°-Eを示す。貼床を施していたと思われるが、掘り方等については340号住居跡と重複している為、充分確認出来ていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行70cm・深さ26cmを測る。内部に数個体分の羽釜の破片が残存し、石材も認められる事から、羽釜を補強材に用いた石組の構造を想定出来る。

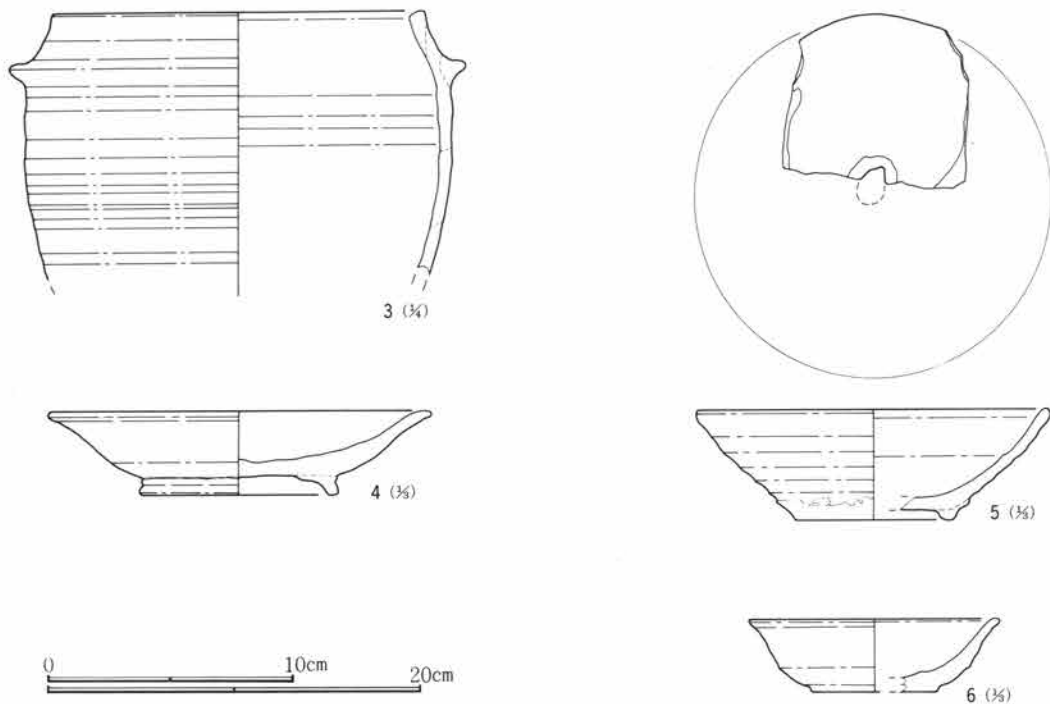
貯蔵穴は、径70cmを測ると思われるが、340号住居跡の竈と重複しているらしく、正確な所はわからない。遺物は、竈内外と床面中央からやや集中して検出されているが、量的にはやや少なめである。こうした中では、底部内面中央から外面に向けて穿孔された高台坏の存在が注意される程度である。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（中沢）。



第165図 407号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第166図 407号住居跡出土遺物実測図(2)

第73表 407号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
165-1 52	須恵器 羽釜	床面-2 片残存	口(18.8) 底(8.0) 高22.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋割り。	
165-2 52	須恵器 羽釜	床面直上 片残存	口(22.0) 底(7.8) 高26.3	①普、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色、一部黒変	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋割り。	
166-3 52	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口20.2 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
166-4 52	須恵器 高台付皿	床面-2 ほぼ完形	口15.4 底(8.0) 高3.3	①普、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	部分的に黒変
166-5 51	須恵器 坏	床面+6 破片	口(14.2) 底(6.4) 高(4.3)	①粗、雲母 ②還元焰、硬質 ③暗灰色、断面灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面底部より外面穿孔あり
166-6	須恵器 坏	覆土 小破片	口(10.2) 底5.0 高(2.8)	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰色～灰白色	ロクロ成形。	

408号住居跡（第167図、第74表、図版33・52・59）

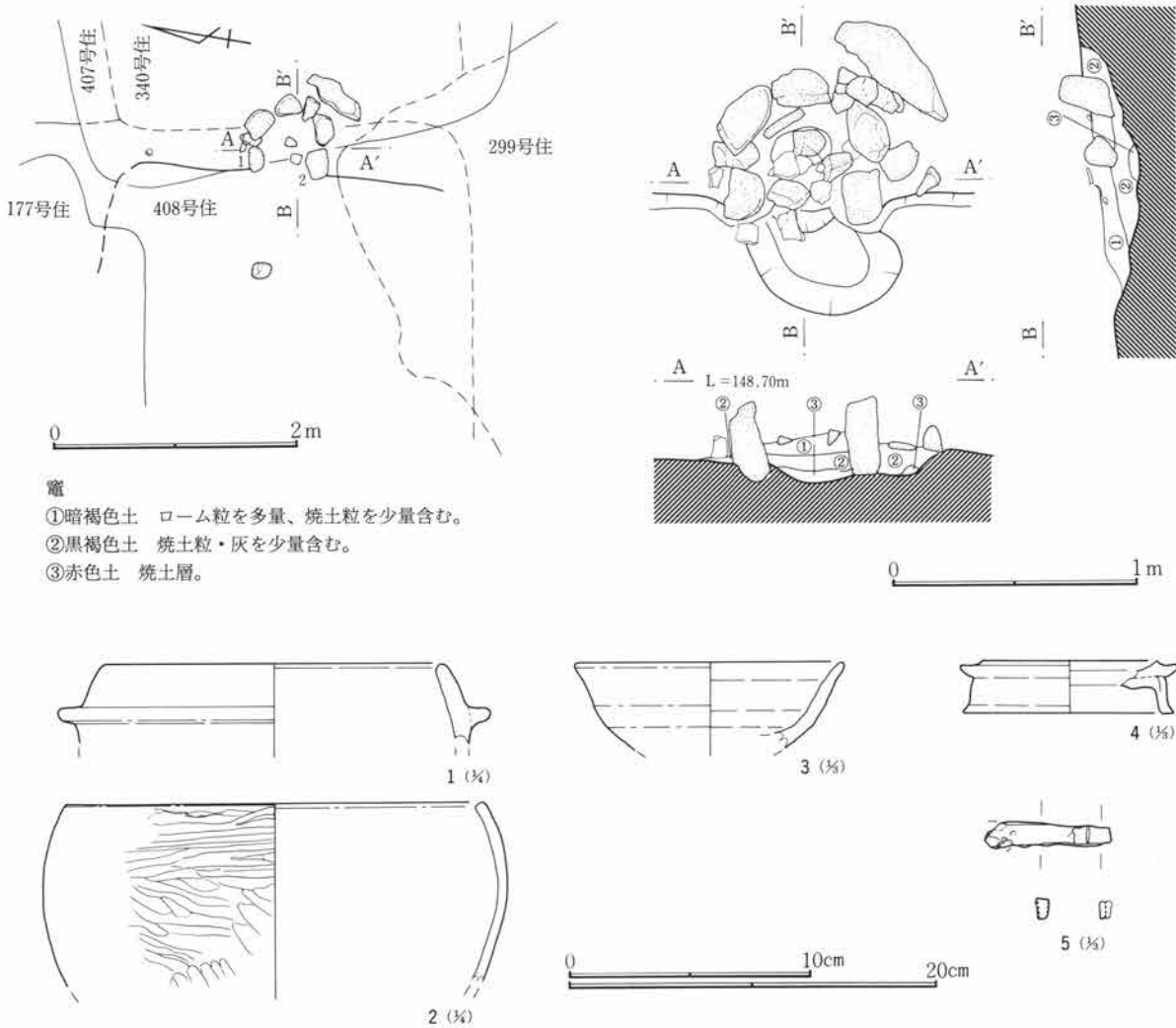
本住居跡は、第5次調査区中央西寄りの緩斜面にあり、27・28—5グリッドに位置する。一連の重複住居跡群の中にあり、348号住居跡（古墳）・751号住居跡（古墳）の覆土中に構築され、尚且つ先行する340号住居跡（平安）及び407号住居跡（平安）の西壁を切っていると考えられる。周囲の住居跡を調査中に、竈の石組が発見されたもので、規模や床面上下の付属施設の実態は不詳である。残存する竈から、主軸方向はN—78°—Eを示すと思われる。

竈は東壁にあり、幅50cm・奥行50cm・深さ20cmを測る。周囲を袖石他の石で囲む石組で、羽釜等の破片を

差し込んで補強しており、補強材は加熱により脆弱化していた。

遺物は、竈に挟み込まれていた土釜・羽釜の破片を主とし、それら以外は流れ込みであろう。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀後半と思われる（中沢）。



第167図 408号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第74表 408号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
167-1	須恵器 羽釜	竈内+6 破片	口(18.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形でロクロ使用。	
167-2 52	土師器 土釜	竈内+6 破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒多 ②酸化焰、軟質 ③褐色～赤褐色	輪積成形後、外面篋磨き。	
167-3	須恵器 坏	覆土 小破片	口(11.0) 底— 高—	①普 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
167-4	須恵器 蓋	覆土 小破片	口(8.6) 底— 高—	①普、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
167-5 59	鉄製品 刀子	覆土 柄破片	長— 厚— 幅—	0.4 重 6.1		

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

410号住居跡（第168～170図、第75表、図版34・52・58・59）

本住居跡は、第5次調査区北寄りの平坦面にあり、35・36-7グリッドに単独で位置する。周囲の傾斜は緩やかであるが、東側の壁は約50cm残るものの、西側は5cm程度で痕跡に近い。

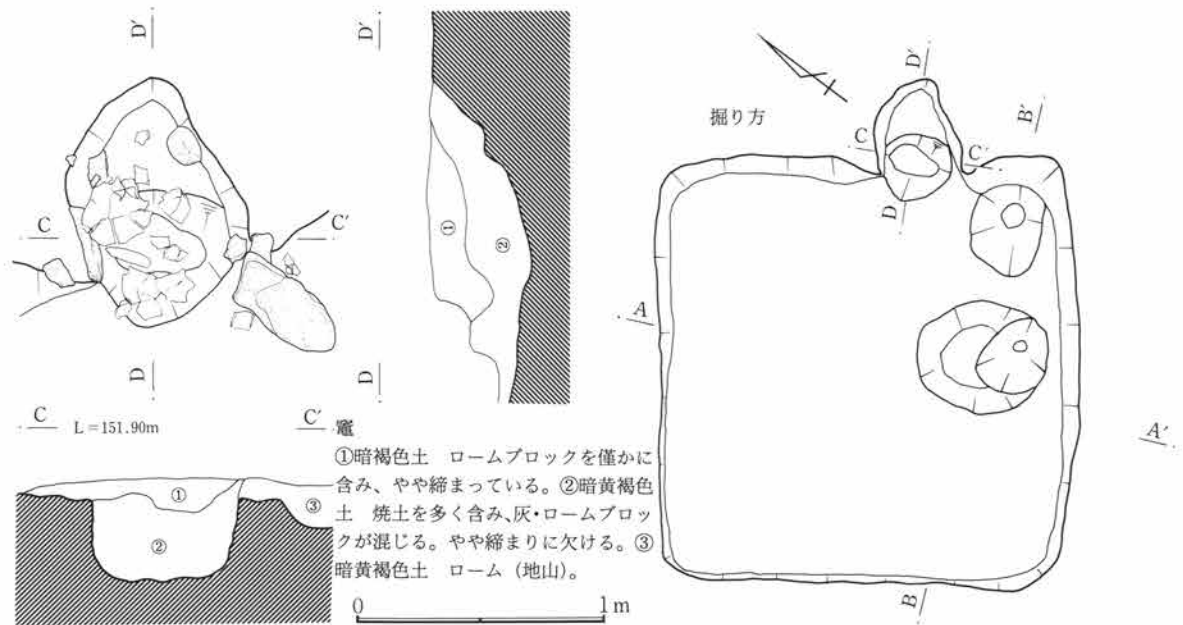
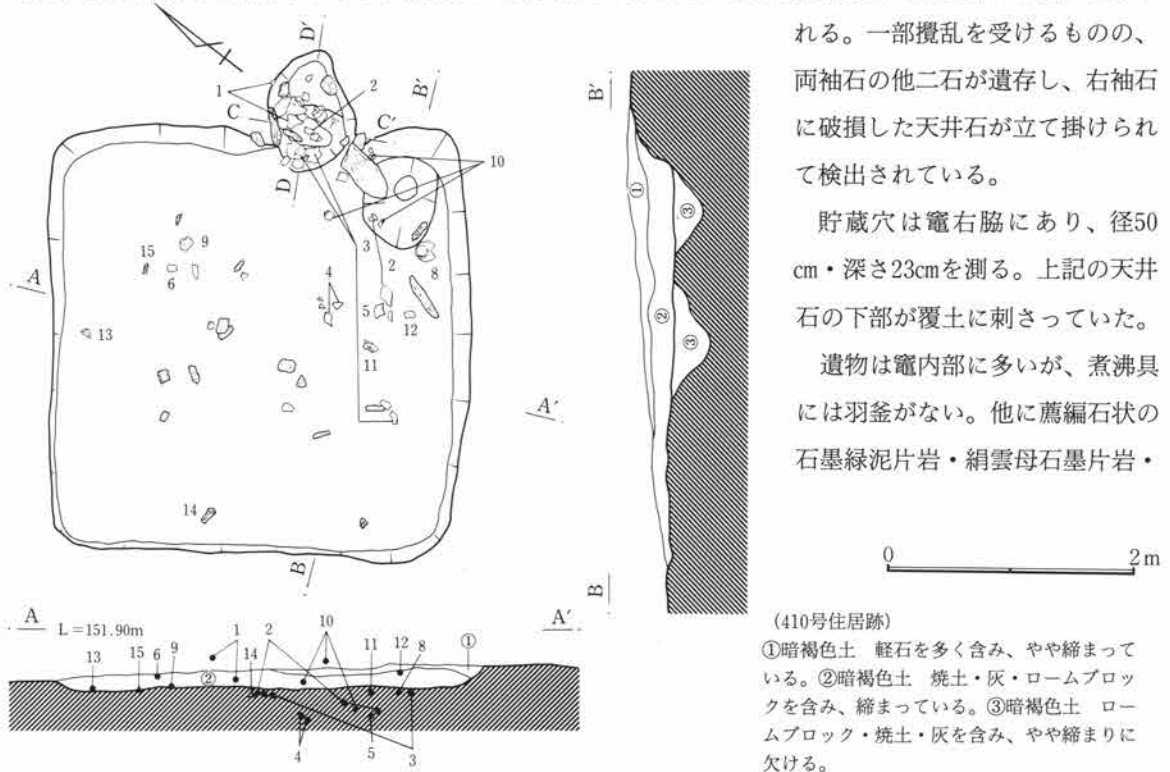
平面形は東西3m40cm・南北3m30cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-60°-Eを示す。床面は、竈近くの他に貼床はなく、ローム（地山）を叩き締めている。南壁中央寄りには、二時期の前後関係を持つピットが認められた。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行90cm・深さ38cmを測る。燃焼部と煙道部とは段で区別される。一部攪乱を受けるものの、両袖石の他二石が遺存し、右袖石に破損した天井石が立て掛けられて検出されている。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径50cm・深さ23cmを測る。上記の天井石の下部が覆土に刺さっていた。

遺物は竈内部に多いが、煮沸具には羽釜がない。他に薦編石状の石墨緑泥片岩・絹雲母石墨片岩・

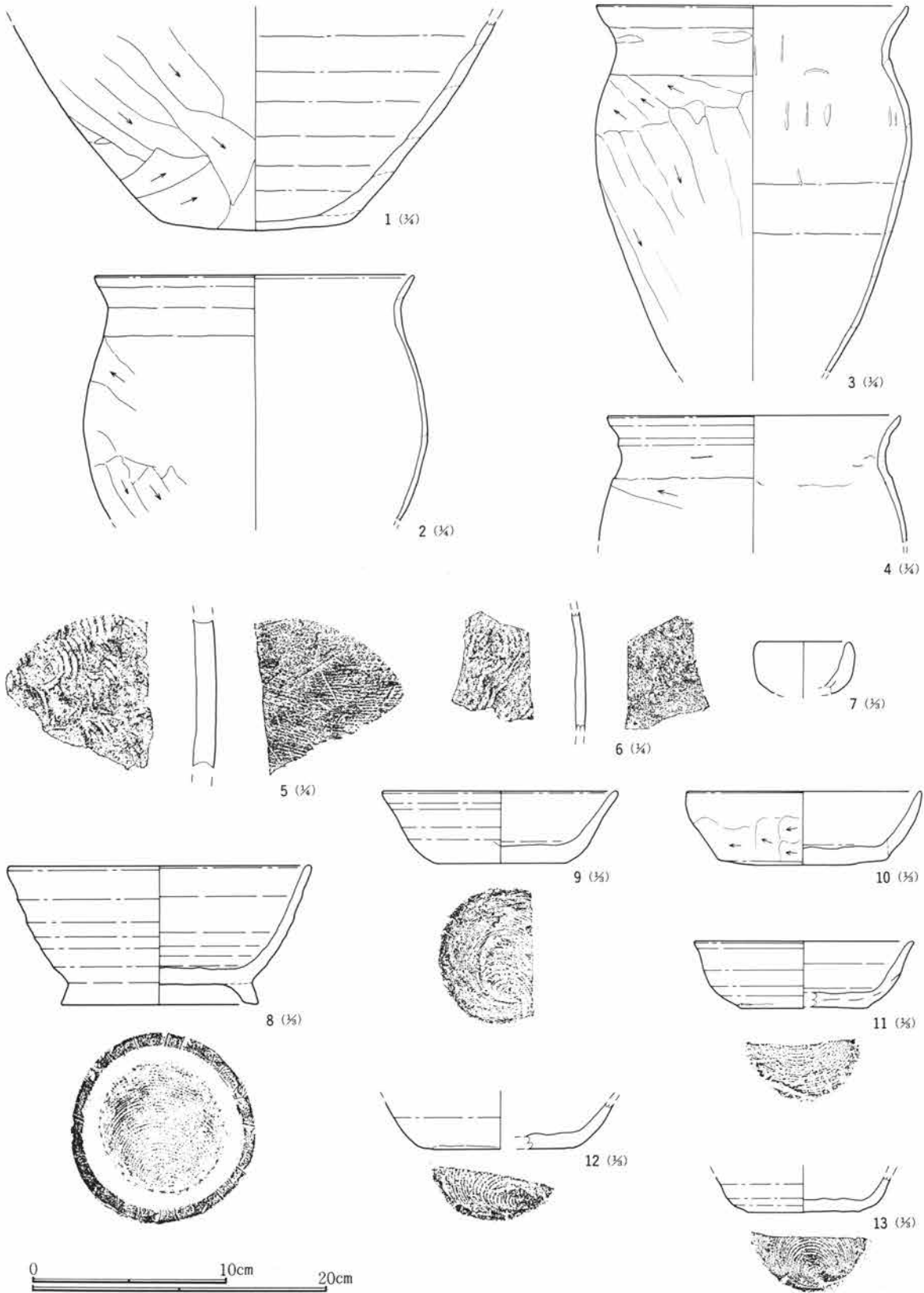
遺物は竈内部に多いが、煮沸具には羽釜がない。他に薦編石状の石墨緑泥片岩・絹雲母石墨片岩・



第168図 410号住居跡実測図

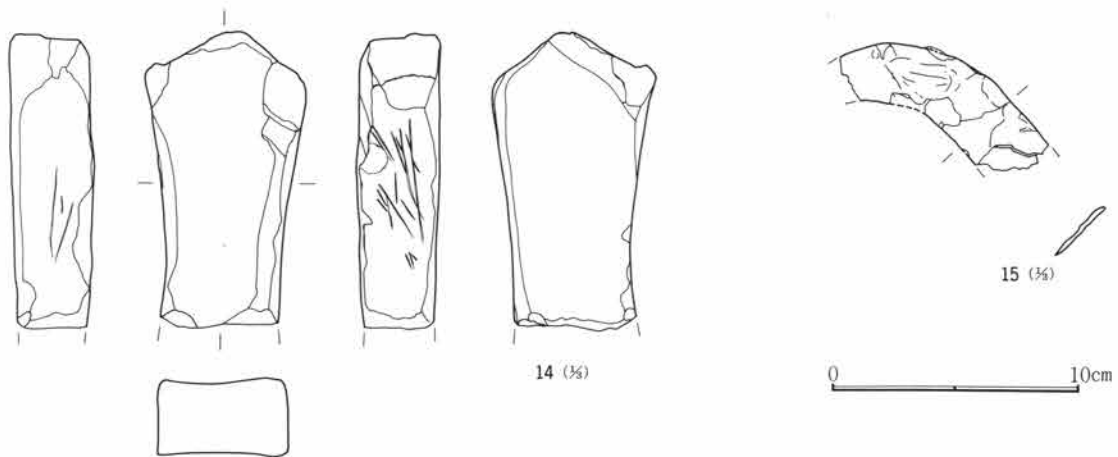
点紋絹雲母石墨片岩・熱変成岩各1個（計1.18kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（関口）。



第169図 410号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第170図 410号住居跡出土遺物実測図(2)

第75表 410号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
169-1 52	土師器 大甕	竈内+5 破片	口— 底(13.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい黄橙色	輪積成形後、外面篋削り。	
169-2	土師器 甕	竈内-4 破片	口(21.6) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
169-3 52	須恵器 甕	床面-2 1/2残存	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面 篋撫で。	
169-4	須恵器 甕	床面-20 破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
169-5	須恵器 大甕	床面-22 小破片	口— 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	外面平行叩き。内面当具痕。	
169-6	須恵器 大甕	床面+8 小破片	口— 底— 高—	①粗、白色鈹物・黒色鈹物 少②還元焰、硬質③外面緑 色釉、内面灰色	外面撫で。内面当具痕。	
169-7	土師器 手捏	覆土 小破片	口(4.6) 底— 高—	①普、石英・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③浅黄色～黒灰色	手捏成形。	
169-8 52	須恵器 高台付埴	床面-3 ほぼ完形	口 15.4 底 10.0 高 6.9	①粗、黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
169-9 52	須恵器 坏	床面+2 1/2残存	口(12.0) 底 6.8 高 3.6	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
169-10 52	土師器 坏	床面+3 口縁一部 欠	口 12.0 底 8.8 高 3.6	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半～底部篋 削り。	磨耗している
169-11 52	須恵器 坏	床面-5 1/2残存	口(11.2) 底(6.8) 高 3.3	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
169-12	須恵器 坏	床面+12 小破片	口— 底(6.8) 高—	①粗、石英・黒色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色～灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
169-13	須恵器 坏	床面+1 小破片	口— 底(5.8) 高—	①細、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
170-14 58	石製品 砥石	床面-4 完形	長 11.5 厚 2.8 幅 5.3 重 310		中砥。四面使用。	流紋岩

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
170-15 59	鉄製品 鎌	床面直上 破片	長 — 厚 0.2 幅 1.8 重 16.4			

415号住居跡 (第171・172図、第76表、図版34・53)

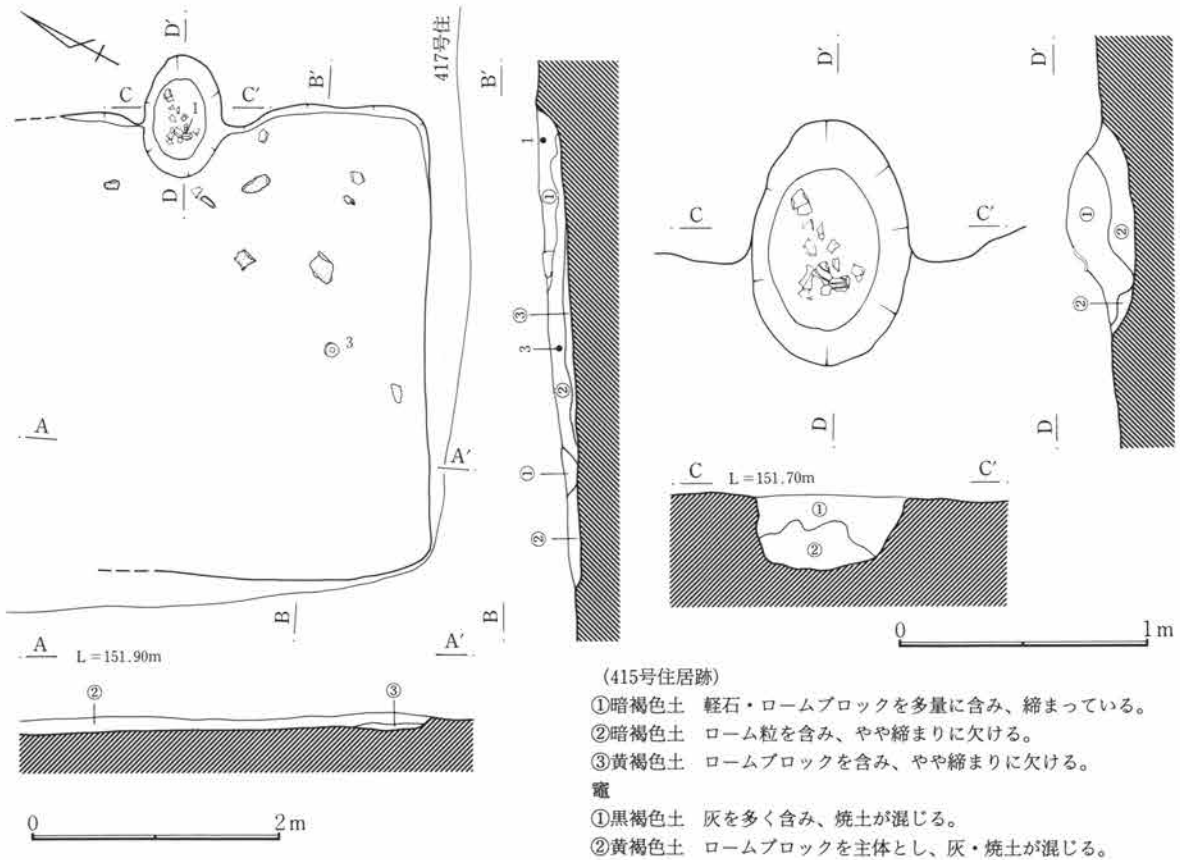
本住居跡は、第5次調査区北寄りの平坦面にあり、34-8グリッドに位置する。417号住居跡(古墳)の南西隅近くの覆土中に構築され、東西3m75cmを測るが、北西方向への表土の流失によって北壁は確認出来なかった。

住居の掘り方は、417号住居跡の床面を掘り込んでおらず、床面は覆土の黒色土中であつたが417号住居跡の床面に一致するものと思われる。覆土の微かな色調変化や遺物散布の範囲から言えば、東西にやや長い平面プランが想像される。

竈は、東壁中央やや北寄りに位置すると思われ、粘土・焼土の散布がかなり見られたが、明瞭な構造は残存していなかった。貯蔵穴・柱穴・壁溝等も付属しないと思われる。

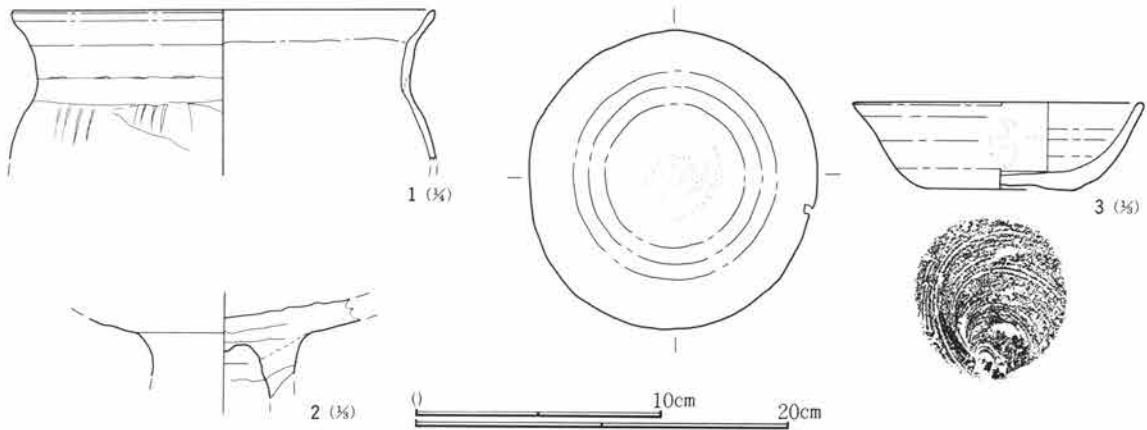
遺物は、竈内部とその周辺にやや集中していたが、概して分布密度は薄い。煮沸具には、羽釜を含まないようである。判読不能の墨書土器1点の検出が注意される。他に薦編石状の石墨緑泥片岩・熱変成岩各1個(計0.6kg)が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(関口)。



第171図 415号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第172図 415号住居跡出土遺物実測図

第76表 415号住居跡出土遺物観察表

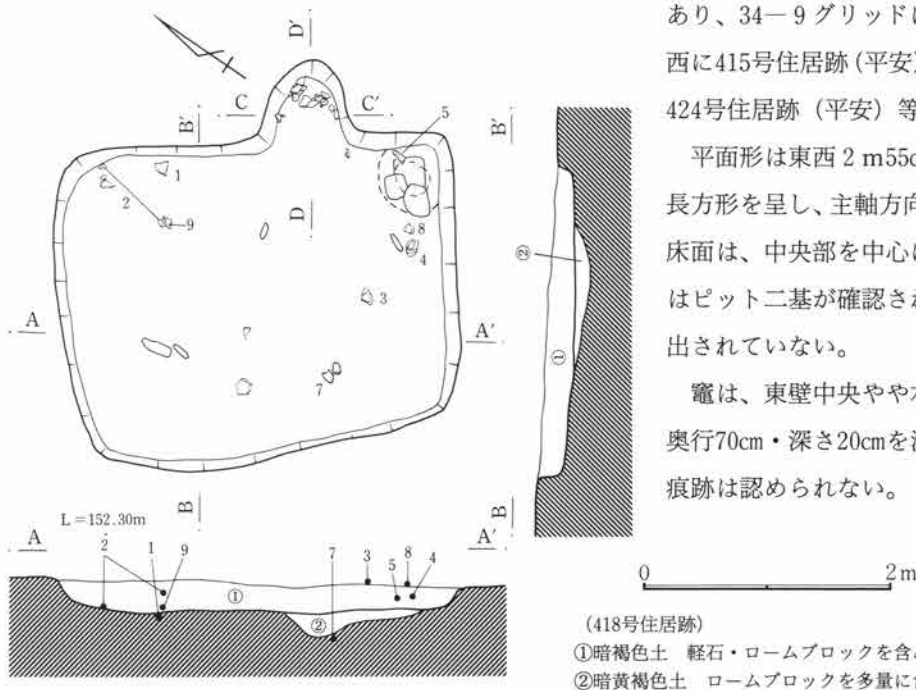
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
172-1 53	土師器 甕	竈内+12 破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。	
172-2	須恵器 脚付盤	覆土 小破片	口— 底— 高—	①粗、黒色鉱物細粒少 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面にふい橙色	ロクロ成形。	
172-3 53	須恵器 埴	床面+10 完形	口 11.7 底 6.2 高 3.4	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	墨痕あり (判読出来ず)

418号住居跡（第173・174図、第77表、図版35・53・60）

本住居跡は、第5次調査区北寄りの平坦面にあり、34-9グリッドに単独で位置する。すぐ西に415号住居跡（平安）・417号住居跡（古墳）・424号住居跡（平安）等が隣接する。

平面形は東西2m55cm・南北3m20cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-55°-Eを示す。床面は、中央部を中心に貼床を施し、掘り方にはピット二基が確認されたが、柱穴・壁溝は検出されていない。

竈は、東壁中央やや右寄りにあり、幅70cm・奥行70cm・深さ20cmを測る。内部には、石組の痕跡は認められない。



(418号住居跡)

- ①暗褐色土 軽石・ロームブロックを含み、締まっている。
- ②暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、やや締まっている。

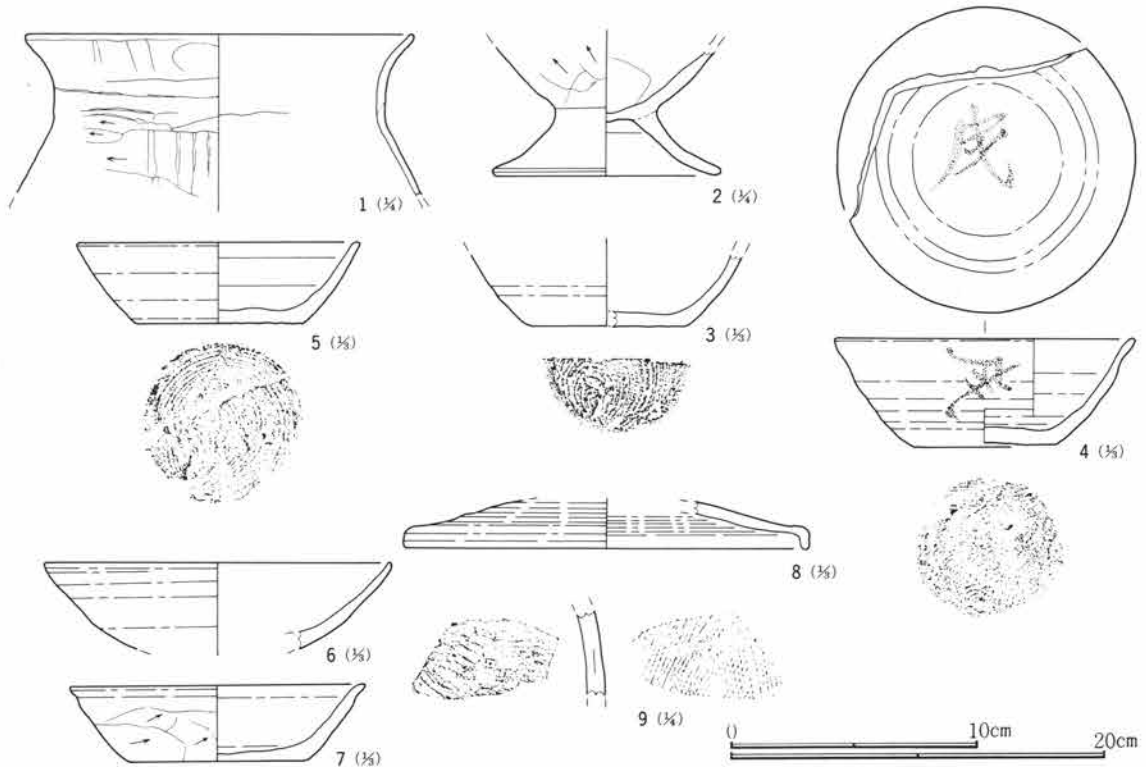
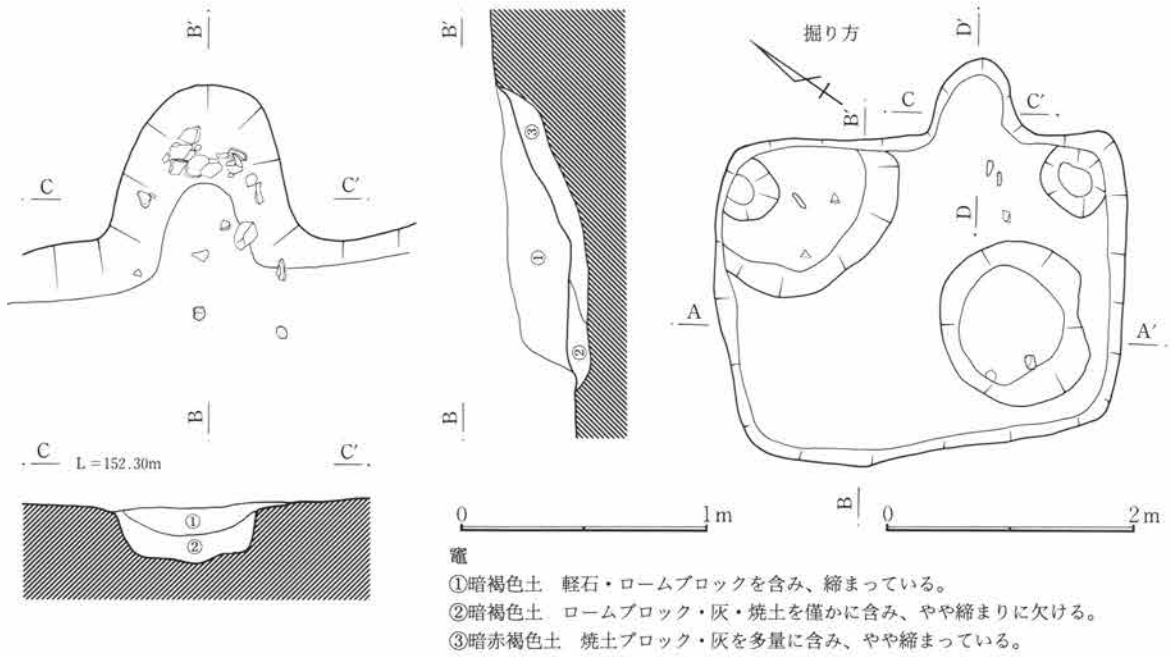
第173図 418号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

貯蔵穴は竈右脇にあり、径50cm・深さ8cmを測る。板石が三個、蓋状に被せられていたが、その下からの遺物の出土は無かった。

遺物は住居規模から見ればやや多く、煮沸具の甕が竈内部、坏・蓋類は床面上を中心に分布している。「成」と書かれた墨書土器が、伏せた状態で出土している。他に薦編石状の絹雲母石墨片岩4個、点紋絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩各1個（計1.27kg）が検出されている。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（関口）。

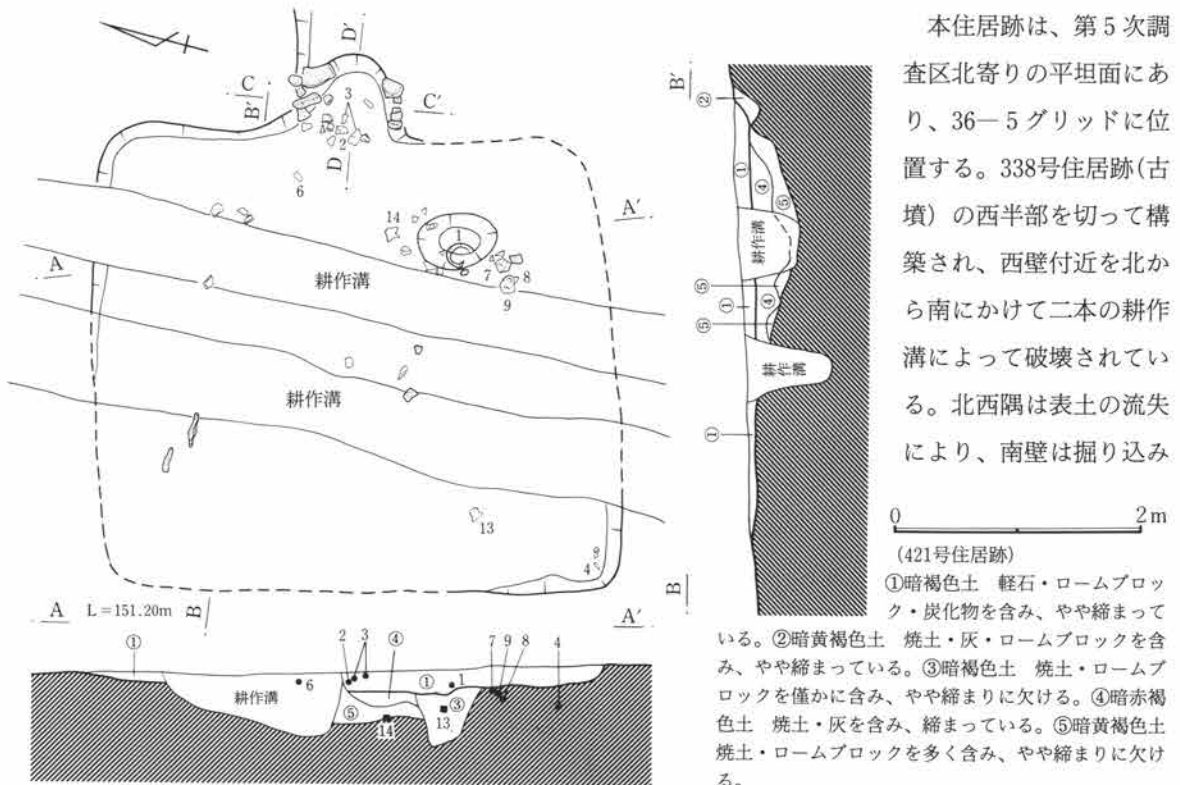


第174図 418号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第77表 418号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
174-1 53	土師器 甕	床面-4 破片	口(20.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。	
174-2	土師器 甕	床面直上 破片	口— 底(9.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。脚部横撫で。	
174-3	須恵器 壺	床面+20 破片	口— 底(6.3) 高—	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
174-4 53・60	須恵器 坏	床面+8 %残存	口12.0 底5.4 高4.3	①粗、黒色鉍物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	墨書あり
174-5 53	須恵器 坏	床面+6 %残存	口(11.4) 底6.5 高3.2	①粗、石英・黒色鉍物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
174-6	須恵器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 底— 高—	①粗、雲母・黒色鉍物細粒 ②還元焰、硬質③外面灰色、 内面にぶい橙色	ロクロ成形。	器面の剥落が目立つ
174-7	土師器 坏	床面-20 %残存	口(12.0) 底(7.0) 高(3.0)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半~底部篋削り。	
174-8	須恵器 蓋	床面+18 破片	口(16.2) 底— 高—	①粗、黒色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
174-9	須恵器 大甕	床面+4 小破片	口— 底— 高—	①粗、白色鉍物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	外面平行叩き。内面当具痕。	

421号住居跡 (第175~177図、第78表、図版35・53・55・59)



第175図 421号住居跡実測図(1)

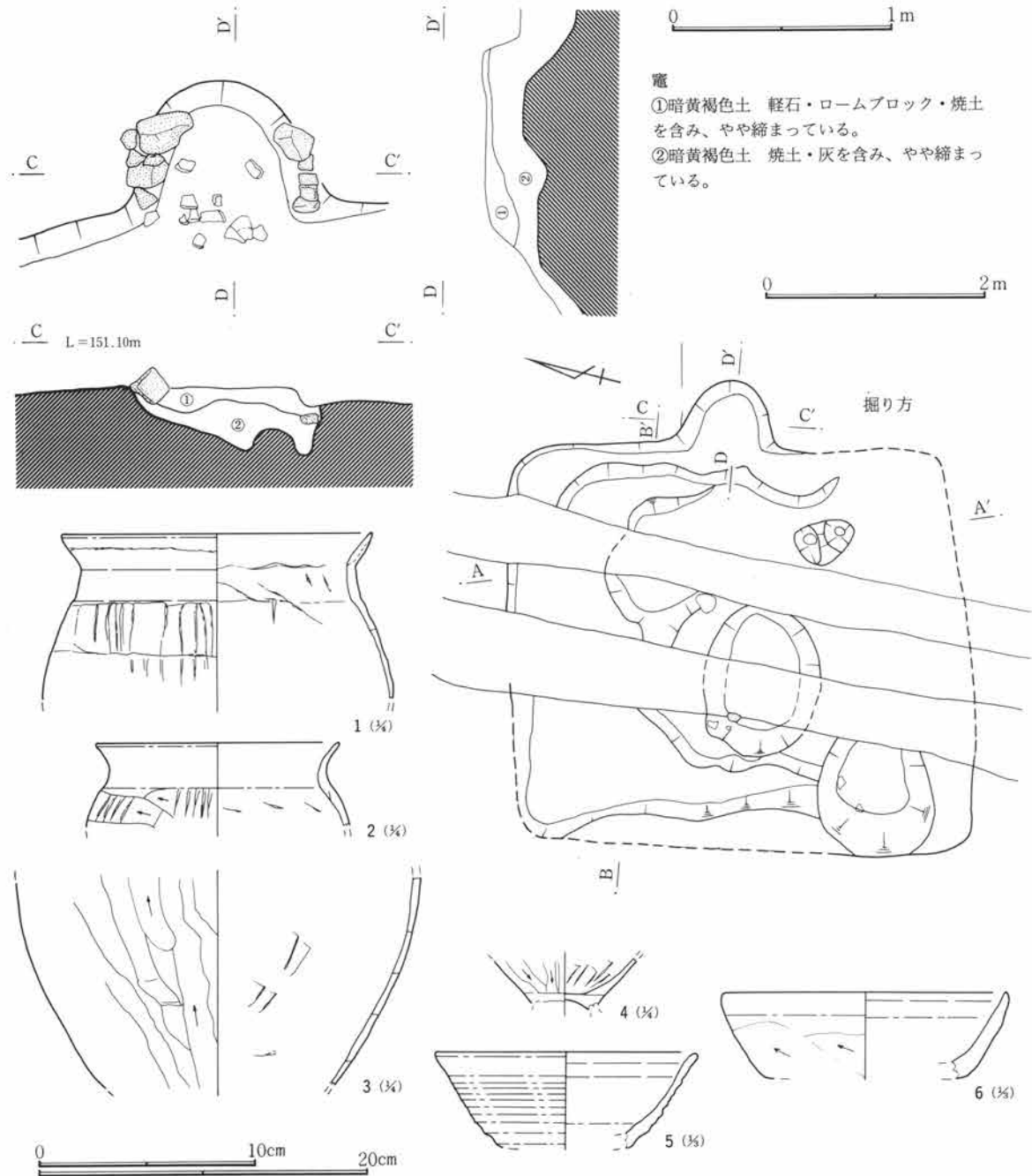
が浅いため共に不明瞭だが、平面形は東西3m65cm・南北4m20cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-76°-Eを示す。床面には中央部に厚い貼床が施され、掘り方には時期差のあるピットが四基以上認められる。

竈は、東壁中央やや北寄りにあり、幅70cm・奥行60cm・深さ20cmを測る。表土掘削の際に破壊され、原位置を残すものが無かったが、基本的に石組構造を示す。

貯蔵穴は、遺物の集中度などから竈右脇のピットが該当すると思われる。径60cm・深さ38cmを測る。

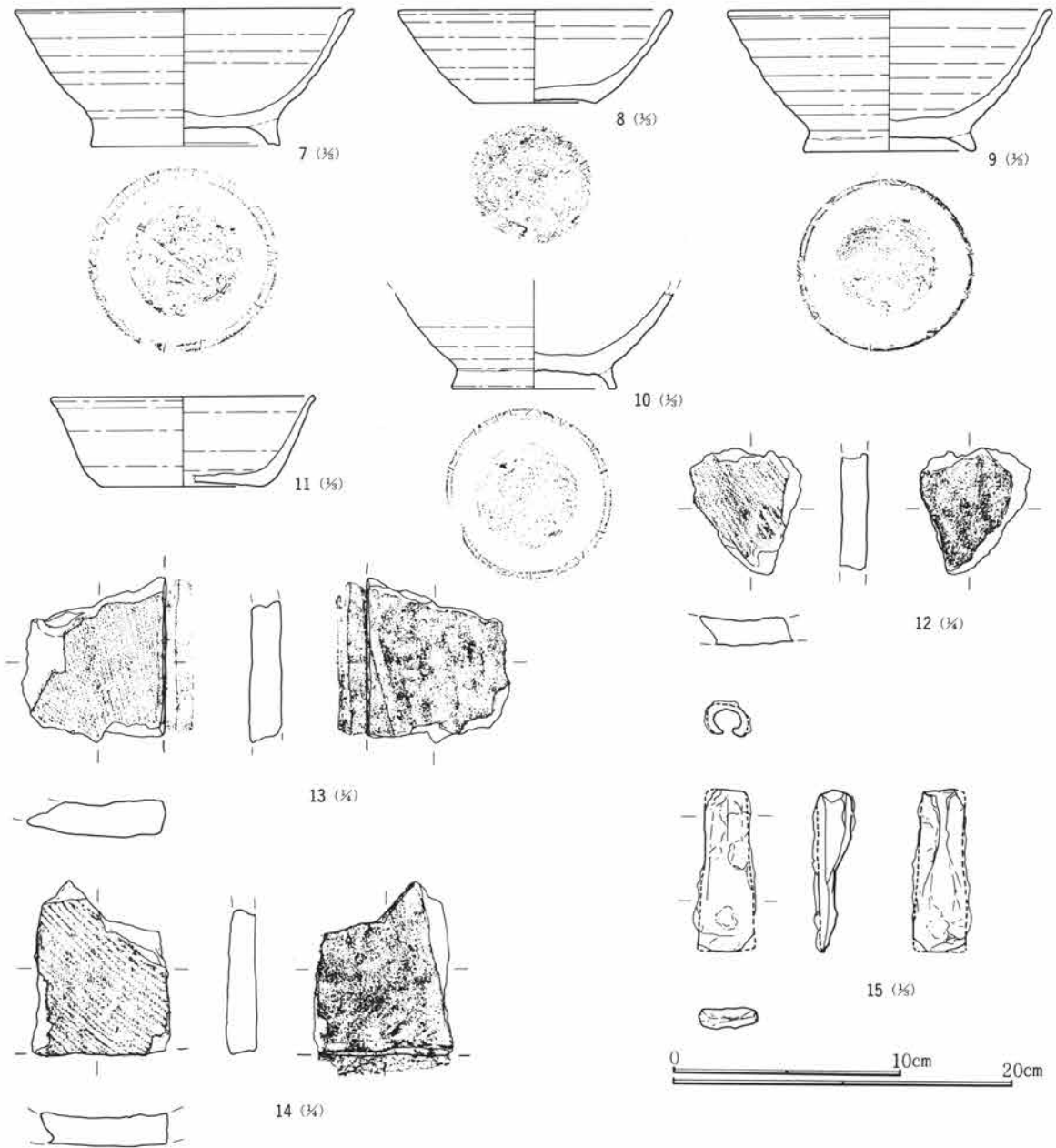
遺物はかなり多く、竈内部や貯蔵穴周辺から検出されているが、土師器は手持ち篋削りで、煮沸具に羽釜を含まないようである。小型の斧の完形品の出土が注意される。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる(関口)。



第176図 421号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第177図 421号住居跡出土遺物実測図(2)

第78表 421号住居跡出土遺物観察表

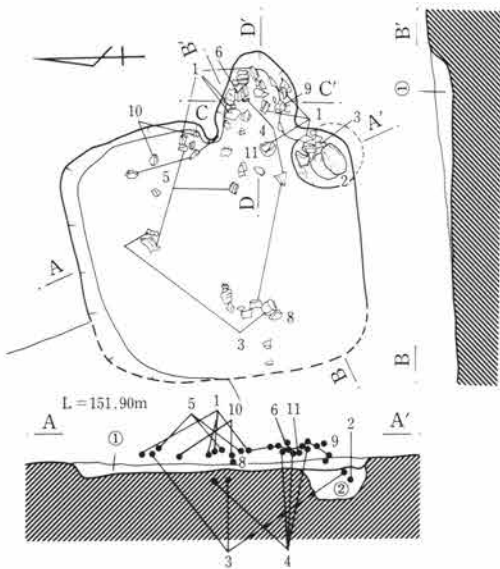
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
176-1 53	土師器 甕	床面+5 破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
176-2 53	土師器 甕	竈内+6 小破片	口(14.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面篋削り。内面篋撫で。	
176-3 53	土師器 甕	竈内+8 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	
176-4	土師器 小型台付 甕	床面-14 小破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰 ③暗褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋撫で。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
176-5	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 底— 高—	①粗、白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
176-6	土師器 坏	床面+6 小破片	口(12.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪積成形後、口辺横撫で。外面下半篋削り。	
177-7 53	須恵器 高台付塊	床面-2 1/2残存	口(15.0) 底 8.3 高 5.9	①粗、黒色鈹物細粒少 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
177-8 53	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(12.2) 底 5.5 高 4.0	①粗、黒色・白色鈹物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
177-9 53	須恵器 高台付塊	床面-5 1/2残存	口 14.4 底 7.6 高 6.1	①粗、黒色・白色鈹物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
177-10	須恵器 高台付塊	覆土 1/2残存	口— 底 7.4 高—	①粗、白色・黒色鈹物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色、一部黒斑	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
177-11	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(11.7) 底(7.0) 高(3.9)	①粗 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙~黒褐色	ロクロ成形。	二次焼成を受けるか
177-12 55	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.5	①粗、石英・褐色鈹物粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	粘土板剥取り痕あり。	12-14は同一個体桶巻作り
177-13 55	平瓦	床面-10 小破片	長— 幅— 厚 1.2	①粗、石英・褐色鈹物粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	粘土板剥取り痕あり。側端面取りあり。	
177-14 55	平瓦	床面-19 小破片	長— 幅— 厚—	①粗、石英・褐色鈹物粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	粘土板剥取り痕あり。	
177-15 59	鉄製品 斧	覆土	長 7.0 幅 2.5 重 53.4	厚—		

424号住居跡 (第178~180図、第79表、図版35・53)

本住居跡は、第5次調査区北寄りの平坦面にあり、34-9グリッドに位置する。417号住居跡(古墳)の南東隅を切って構築する。平面形は東西2 m55cm・南北2 m30cmを測る歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。床面は、ローム(地山)を叩き締めており、床面下にはピット二基があった。



竈は、東壁中央南寄りで、幅60cm・奥行60cm・深さ18cmを測る。補強材に羽釜を使用するらしい。

貯蔵穴は竈右脇で、径50cm・深さ24cmを測り、一部住居外に袋状に掘り込む。

遺物は、大部分が羽釜で、一部貯蔵穴からも検出されている。

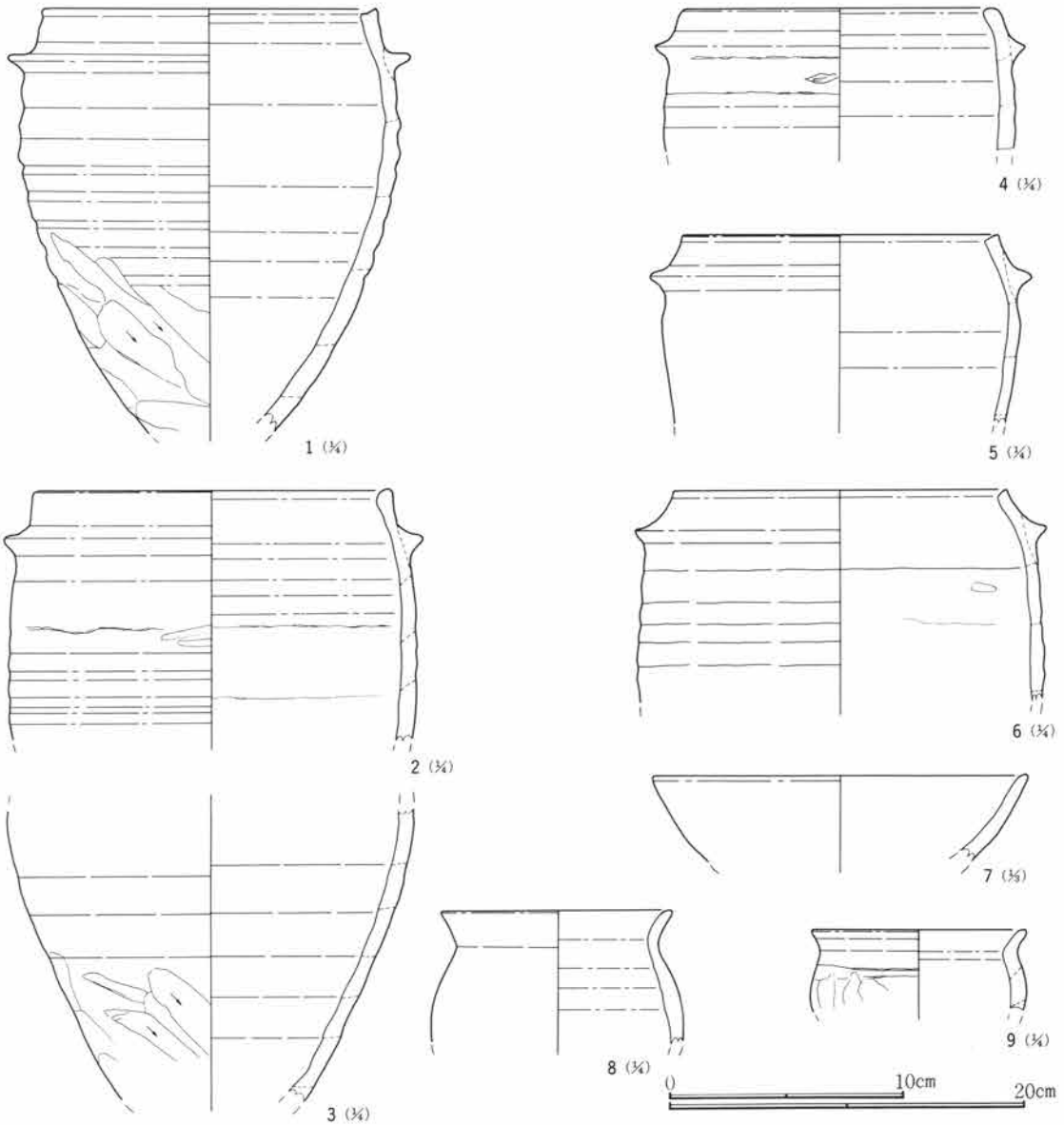
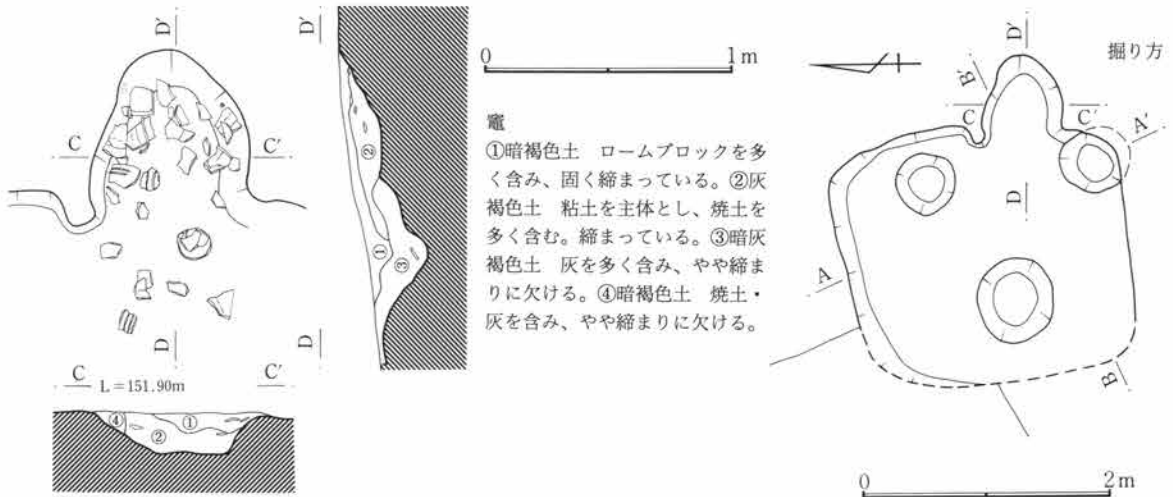
以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(関口)。

(424号住居跡)

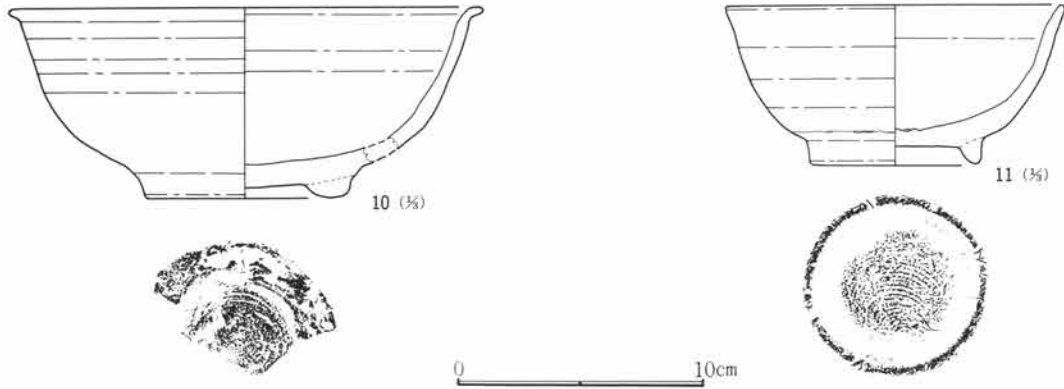
- ①暗褐色土 ロームブロック・焼土を含み、固く締まっている。
- ②暗褐色土 ロームブロック・焼土をやや多く含み、締まりに欠ける。

第178図 424号住居跡実測図(1) 0 2m

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第179図 424号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第180図 424号住居跡出土遺物実測図(2)

第79表 424号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
179-1 53	須恵器 羽釜	床面+5 1/4残存	口(19.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい浅黄色	輪積成形でロクロ使用。外面下方篋削り。	
179-2 53	須恵器 羽釜	床面-9 破片	口(20.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
179-3	須恵器 羽釜	床面-2 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面下方篋削り。	
179-4 53	須恵器 羽釜	床面+14 破片	口(17.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
179-5	須恵器 羽釜	床面+14 小破片	口(18.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	破損後、熱を受ける
179-6	須恵器 羽釜	床面+20 破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。	
179-7	土師器 高台付埴	覆土 小破片	口(16.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形。	
179-8	須恵器 小型甕	床面+5 破片	口(13.2) 底— 高—	①粗、雲母 ②還元焰、軟質 ③外面灰白色、内面灰色	輪積成形でロクロ使用。	
179-9 53	土師器 小型甕	床面+20 小破片	口(12.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形でロクロ使用。外面篋削り。	
180-10	土師器 高台付埴	床面+10 破片	口(19.2) 底(7.8) 高(7.8)	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、軟質 ③明黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
180-11 53	土師器 高台付埴	床面+10 胴部一部 欠	口 15.6 底 6.6 高 6.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

425号住居跡 (第181図、第80表、図版36・53・55・60)

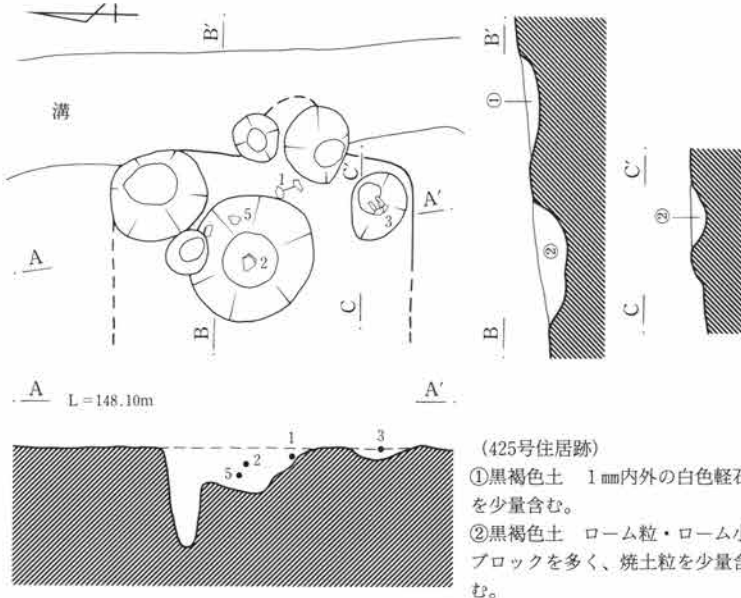
本住居跡は、第5次調査区西端の緩斜面にあり、31-2グリッドに位置する。1号方形区画溝によって東端を切られ、西半部は斜面の為に流失している。

覆土が完全に流失し、殆ど掘り方の状態で確認され、現状では南北2m40cmを測るが、東西方向は不詳である。西半部の床面も完全に流失し、確認段階で約1mを測る竈前のピットの他、三カ所程度の掘り込み

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

が検出されている。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径40cm・深さ9cmを測る。

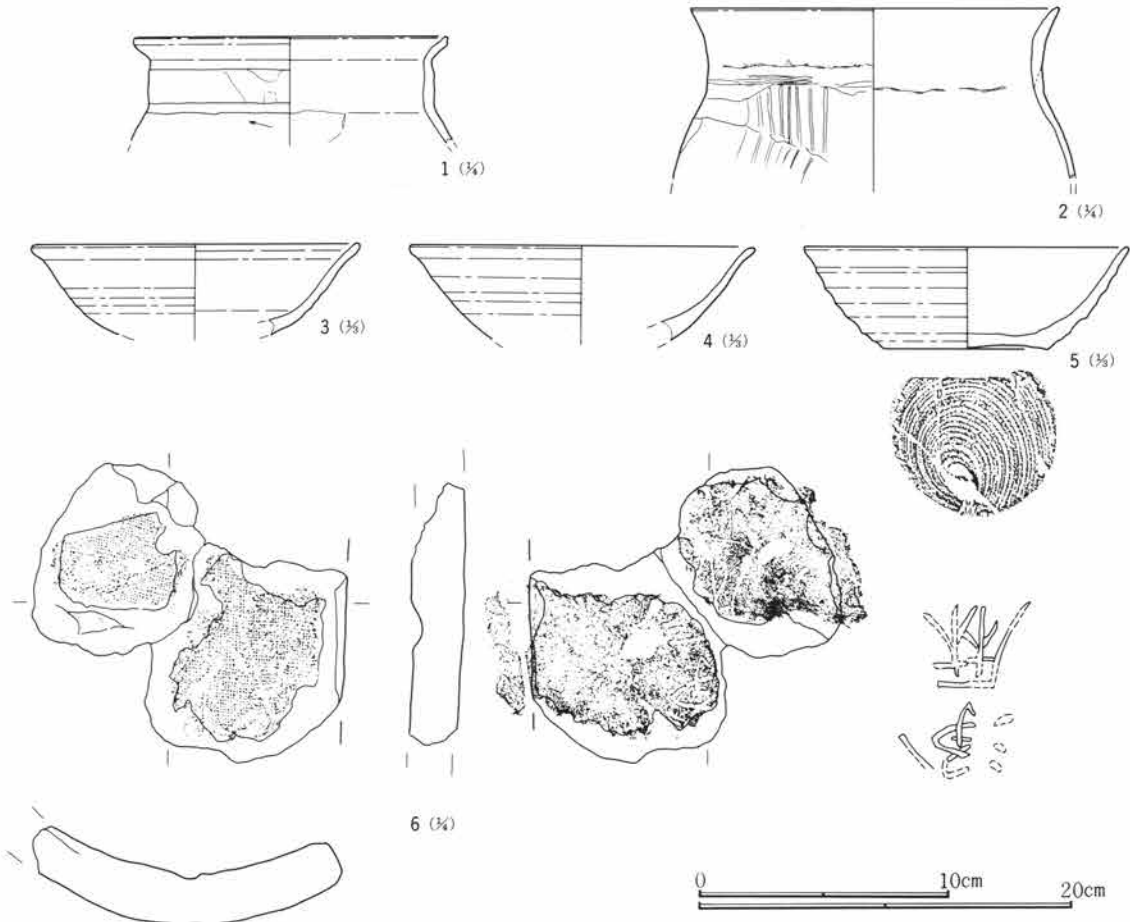


竈は、焼土の分布から東壁中央やや南寄りにあったと思われるが、詳細は不詳である。

遺物は、遺構が痕跡状態であった事から見れば比較的多いが、煮沸具に羽釜を含まない。「□浄麻□」の文字瓦の出土が注意される。

以上により、本住居跡の所属年代は9世紀後半と思われる（中沢）。

- (425号住居跡)
- ①黒褐色土 1mm内外の白色軽石を少量含む。
 - ②黒褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを多く、焼土粒を少量含む。



第181図 425号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第80表 425号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
181-1	土 師 器 甕	床面+8 小破片	口(17.0) 底 — 高 —	①普、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③明赤褐色	輪積成形後、外面篋削り。内面篋無で。	
181-2	土 師 器 甕	床面+20 破片	口(20.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形後、外面篋削り。	
181-3	須 恵 器 坏	床面+8 破片	口(13.2) 底 — 高 —	①普、雲母細粒・褐色鉍物 粒②酸化焙、やや軟質 ③黄灰色、断面灰色	ロクロ成形。	
181-4	須 恵 器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 底 — 高 —	①普、雲母 ②酸化焙、やや軟質 ③黒灰色、断面黄褐色	ロクロ成形。	内外面黒色処理
181-5 53	土 師 器 坏	床面+10 %残存	口(13.0) 底 6.6 高 4.0	①粗、石英・黒色鉍物粒 ②酸化焙、軟質 ③にぶい橙色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	破損後、熱を受ける
181-6 55・60	平 瓦	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 —	①粗、雲母・石英・褐色鉍 物粒②酸化焙、やや軟質 ③にぶい橙色	側端の面取り2?	「□浄麻□」の 文字あり

426号住居跡 (第182図、図版36)

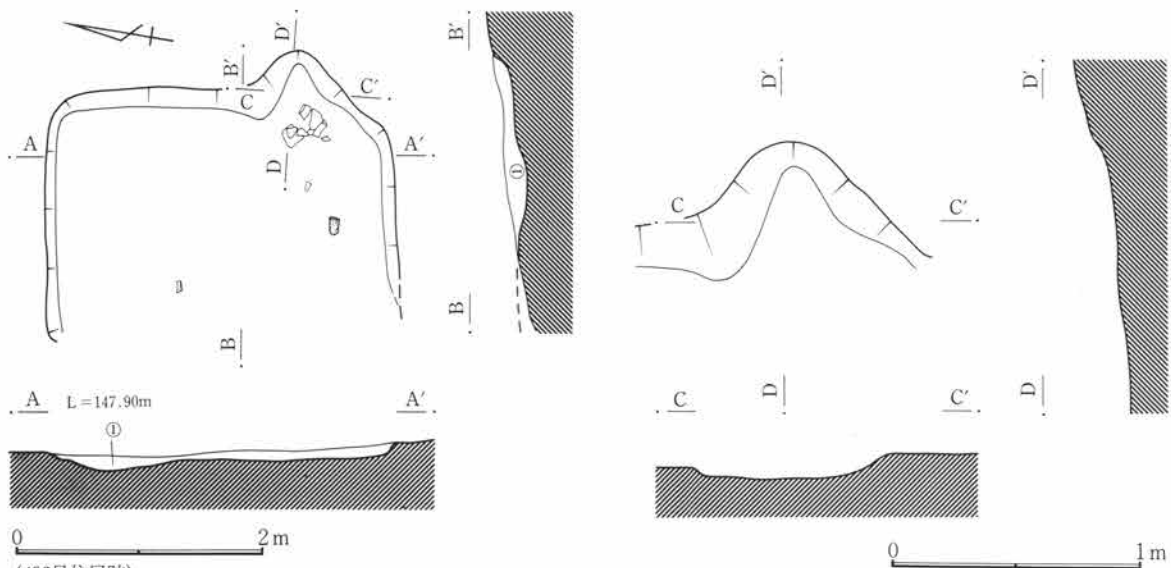
本住居跡は、第5次調査区北西端の緩斜面にあり、A-39グリッドに単独で位置する。西半部は、北流する西谷川の崖によって消失し、表土が薄く草根が地山まで達するため、床面の硬化部分・壁の立ち上がりといった要素も充分検出され得なかった。掘り方は基本的に無く、貯蔵穴・柱穴・壁溝等付属する施設も確認されていない。

西半部を欠く現状で、南北2m80cmを測る。竈から想定される主軸方向はN-84°-Eを示す。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行50cm・深さ5cmを測る。構築材は残らず、焼土化も不充分で、微かにそれと認められる程度であった。

遺物は、坏類や羽釜の小破片が数点あるが、図化出来るものが無かった。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。



(426号住居跡)
①暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを主とし、少量の黒褐色土を含む。

第182図 426号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）

434号住居跡（第183図、第81表、図版36・53）

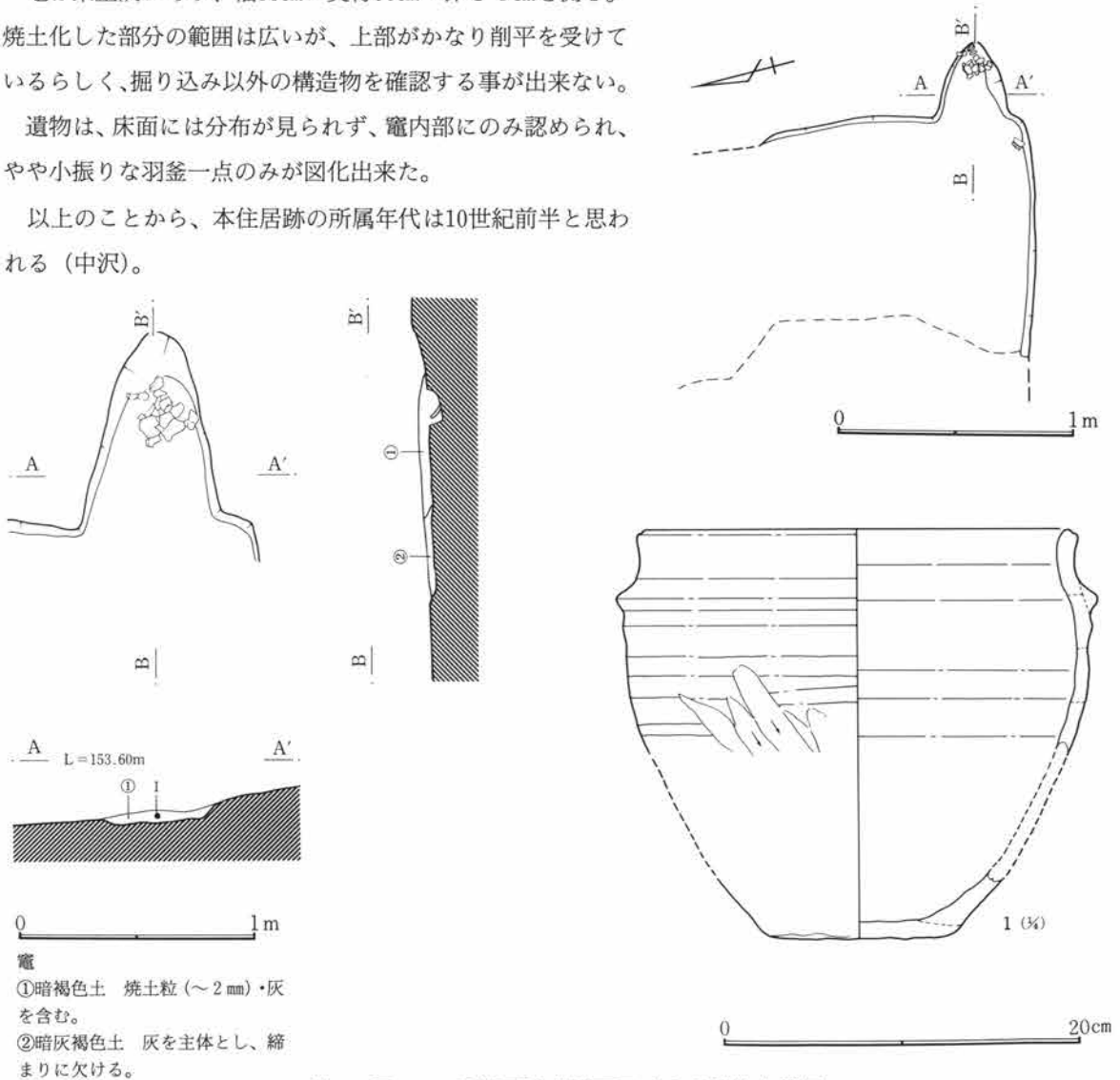
本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、38-45グリッドに位置する。北西に397号住居跡（古墳）、南に383号住居跡（平安）がそれぞれ近接している。表土が流失していなければ、397号住居跡との切り合い関係があったかもしれない。

表土の流失が進み、僅かに竈周辺のみが痕跡状態で確認されている。従って規模の詳細は不詳だが、東西・南北とも2m以上の広がりを持っていたと思われる。床面（破線で表示した範囲）は、ローム（地山）を叩き締めていると思われるが、貯蔵穴・柱穴・壁溝等付属する施設は一切確認されていない。竈から想定される主軸方向はN-93°-Eを示す。

竈は東壁隅にあり、幅55cm・奥行80cm・深さ4cmを測る。焼土化した部分の範囲は広いが、上部がかなり削平を受けているらしく、掘り込み以外の構造物を確認する事が出来ない。

遺物は、床面には分布が見られず、竈内部にのみ認められ、やや小振りな羽釜一点のみが図化出来た。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる（中沢）。



第183図 434号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第81表 434号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
183-1 53	須恵器 羽釜	竈内+2 破片	口(23.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗黄褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半部削り。	

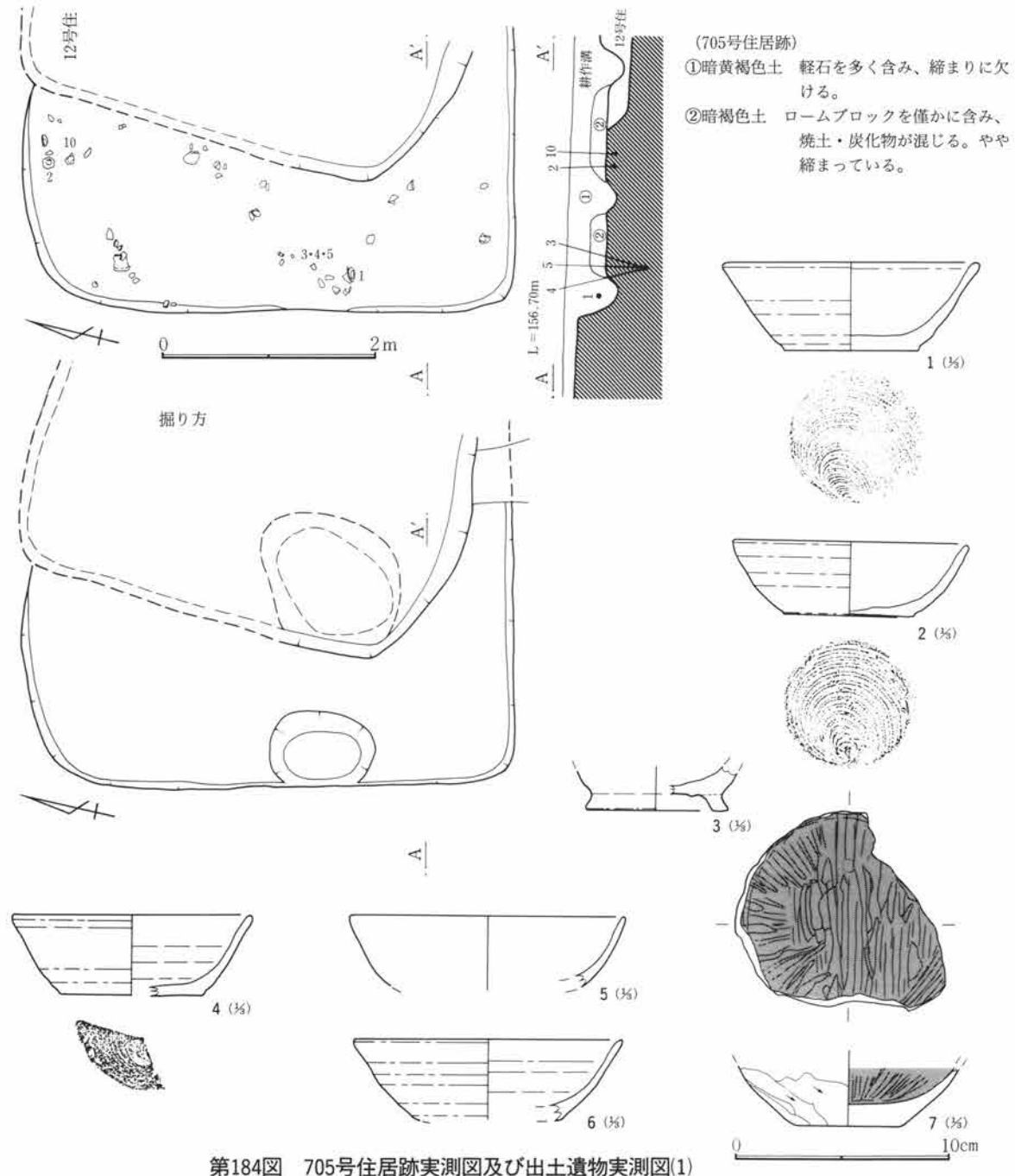
705号住居跡 (第184・185図、第82表、図版54・55・59)

本住居跡は、第2次調査区東南端の平坦面にあり、36—65グリッドに位置する。12号住居跡(平安)によって東半部を切られているほか、耕作溝三条が北から南に抜けており、残存状況は不良である。

竈・貯蔵穴などの施設は消失しているが、残っている西・北・南壁に確認出来ず、恐らく東壁に位置したと思われる。現状で南北4m60cmを測るが、北壁は表土が流失して痕跡に近く、掘り方には西壁際にピット一基を検出したに留まる。

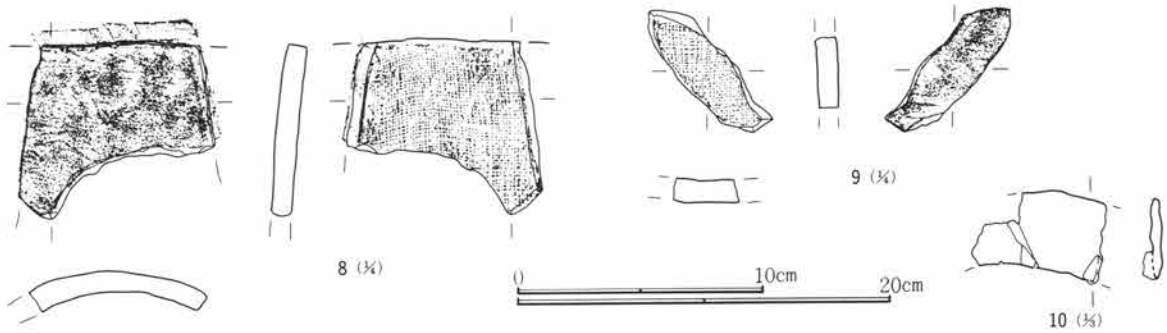
遺物は、床面上から完形の坏が検出されている。煮沸具には図化出来る物は無いが、羽釜を含まないようである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は9世紀前半と思われる(鬼形・内木)。



第184図 705号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物（承前）



第185図 705号住居跡出土遺物実測図(2)

第82表 705号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
184-1 54	須恵器 埴	床面+15 %残存	口 12.0 底 6.2 高 4.1	①粗、白色鈹物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
184-2 54	須恵器 坏	床面-6 完形	口 11.0 底 6.0 高 3.4	①粗、黒色鈹物 ②還元焰、やや硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
184-3	須恵器 壺	床面-34 小破片	口 - 底 (9.0) 高 -	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形、高台貼付。	
184-4	須恵器 坏	床面-34 %残存	口(11.2) 底 (6.6) 高 (3.7)	①粗、黒色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
184-5	須恵器 坏	床面-34 小破片	口(13.0) 底 - 高 -	①粗、褐色鈹物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	粘土付着
184-6	須恵器 埴	覆土 %残存	口(12.6) 底 - 高 -	①粗、白色鈹物細粒少 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
184-7	須恵器 埴	覆土 %残存	口 - 底 5.0 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③にぶい橙色	輪積成形?、外面~底部篋削り。	内面磨き黒色処理
185-8 55	丸瓦	覆土 小破片	長 - 幅 - 厚 1.2	①粗、石英・黒色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色		
185-9	平瓦	覆土 小破片	長 - 幅 - 厚 1.1	①粗、石英・黒色鈹物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色		
185-10 59	鉄製品 鎌	床面-5	長 - 幅 3.3	厚 0.5 重 (9.1)		

709号住居跡（第186図、第83表、図版36・54）

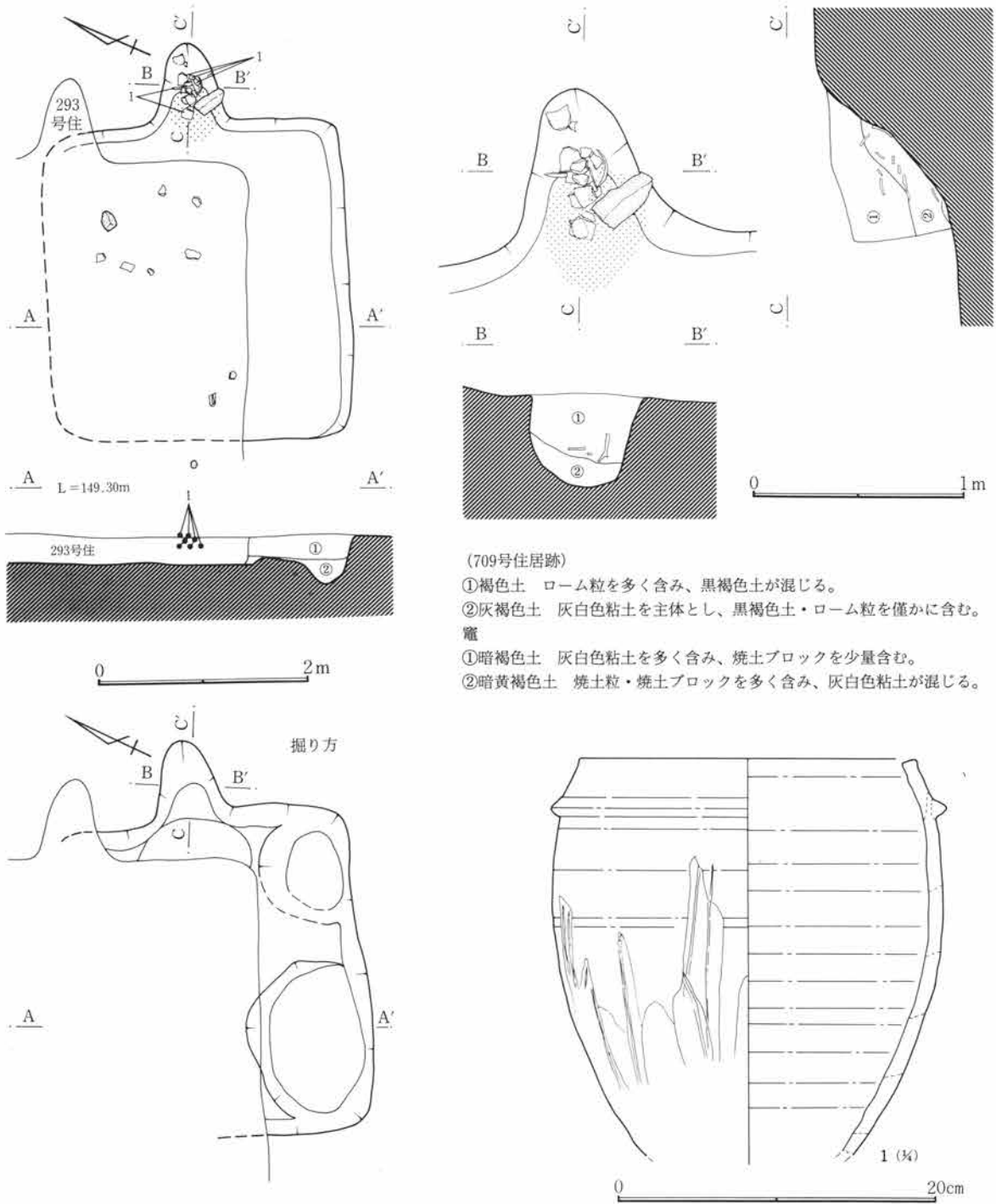
本住居跡は、第5次調査区西端近くの緩斜面にあり、26-6グリッドに位置する。後出する293号住居跡(平安)に北半部を切られている。現状で南北3mを測り、主軸方向はN-69°-Eを示す。本来は東西にやや長い長方形を呈していたろう。床面は大半削平されているが、竈前には貼床が施され、掘り方には、貯蔵穴以外に隅を形成する掘り込みがあった。柱穴・壁溝は確認されていない。

竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅70cm・奥行80cm・深さ46cmを測る。

貯蔵穴は掘り方調査で検出され、竈右脇にあり、径70cm・深さ38cmを測る。

遺物は、竈内部に羽釜が一個体検出されたが、量から見て竈構築材ではないようである。

以上のことから、本住居跡の所属年代は10世紀前半と思われる(中沢)。



第186図 709号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第83表 709号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
186-1 54	須恵器 羽釜	竈内+14 片残存	口 21.0 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。外面下半篋削り。	

第4章 若干の考察及びまとめ

第1節 矢田遺跡集落成立の前後

新潟大学 小林 昌二

1. はじめに

矢田遺跡周辺地域の歴史的な理解は、すでに「矢田遺跡をとりまく歴史的環境」(『矢田遺跡—平安時代住居跡編(1)』1990)とともに、「古代布生産と在地社会—矢田遺跡紡錘車の分析を通して—」⁽¹⁾などで示されている。とくに後者では、「6世紀後半代より一気に多くの住居が造られ集落が形成され始めた」ことを指摘している。また本遺跡は、古墳前期の小規模な居住後に一旦廃絶し、その後古墳後期の6世紀後半から平安時代の10世紀後半にわたり継続的に営まれたことが明らかにされている。したがって、6世紀後半からの居住の意義は、「一気に多くの住居が造られ」というように、小規模の居住が順次に規模を拡大したのではなく、集団的な移住・定着という事態を想定させる。またその移住後の定着・継続が4世紀ほどの長い期間にわたったことは、集団のこの地における居住を支える生産・生活基盤が実現していたことも物語っている。したがって、この移住と定着には密接な関連があり、6世紀後半の矢田遺跡集落の第2の成立期には大いに注目する必要があると考える。

そのため以下の考察においては、本遺跡に密接する周辺地域に現われたミヤケの問題を手掛りにし、またこれを全国的な史的動向のなかに位置づけ、本遺跡理解の一助となることを目指すこととしたい。

2. 緑野屯倉と佐野三家

矢田遺跡周辺には、周知のように緑野屯倉や佐野三家が存在した。しかし、それらの詳細は必ずしも明らかではないが、その成立の時期や位置などについてまず確認⁽²⁾をしたい。

『日本書紀』安閑二年五月甲寅条には、筑紫の穂波屯倉をはじめにして13か国に26の屯倉を置くという中に、上毛野国緑野屯倉がふくまれている。

さて、安閑二年は、『日本書紀』の紀年では535年のこととなるが、正しくは疑問とせざるをえない⁽³⁾。また、これら大量の屯倉の設置記事は、何度かにわたる設置記事を一度に記したものであるとも考えられ、その屯倉設置の正確な年次は明らかであるとはいえない⁽⁴⁾。それでは屯倉の設置それ自体の信憑性はどうかという問題についても議論がないわけではない⁽⁵⁾。26箇所の屯倉のうち、地名の遺称などから所在地が推定できるのは筑紫の穂波、鎌、播磨の越部、近江の葦浦、尾張の間敷、上野の緑野などの6つほどであり、あとの20の屯倉はその推定地が必ずしも明確でないか、あるいは不明である。しかし、この場合は第一に、大半の屯倉の所在が不明なのは、存在をしなかったことを必ずしも意味せず、逆に6つほどの屯倉の所在地が推定できる点に不明の屯倉の存在可能性が期待される。第二には、この屯倉の設置記事の三か月後の八月に、「国々置犬養部」、九月に「詔桜井田部連、県犬養連、難波吉士等主掌屯倉之税」の記事が続き、屯倉の守衛や屯倉の税の主管者のことなどが関連しており、単に設置した屯倉の名称を羅列した記事であると見なすことはできない。第三に、上記の犬養部に関連すると推定される犬飼(イヌガイ)の地名が、ミヤケの地名などに近接していることなどがすでに指摘されており、記事における屯倉の設置自体の信憑性が支証⁽⁶⁾される。以上によって、安閑二年紀五月甲寅条の屯倉設置記事は、『日本書紀』紀年の535年及び26か所の屯倉の一括設置につい

ては不明であるが、6世紀の前半から後半の時期にかけて、記事に掲げられた26の屯倉が設置されたと考え、よいものと思われる。

したがって上野国の緑野屯倉は、多野郡西部から藤岡市（緑野・倉屋敷付近）にかけての地名遺称により、烏川、鮎川、鑓川の溪口付近とも考えられているように、6世紀の前半から後半の時期にかけて設定されたと考えてよいものである。さてその場合、黛弘道氏が「犬養と神社との関係について」で補説し、群馬県多野郡「貫前神社の裏手を流れる高田川に犬飼橋があり、ここで毎年川瀬の神事が執り行われる」ことを例示している⁽⁸⁾。犬飼（イヌガイ）の地名の遺称は本章第4節で明らかにされ、貫前神社との関連を注目しているように屯倉の存在との関係は明らかであろう。したがって、緑野屯倉等設置の記事が犬養部の設置記事と一連のものであると考えられることによって、緑野屯倉は、地名の遺称とともに、神社と犬飼（イヌガイ）の関連も有するものとして考察する必要がある。しかし、黛弘道氏はミヤケとイヌガイとの遺称は近接するものであることを指摘しているが、ここで問題としている緑野の遺称地と貫前神社・犬飼橋との間はおよそ14～5キロメートルという大きな隔たりがあり、緑野屯倉の範囲とその中心をどのように理解すべきか問題が残る。しかしここでは、緑野屯倉が6世紀の前半から後半の時期にかけて設定され、地名の遺称とともに、貫前神社（あるいは近接する抜鋒神社）と犬飼（イヌガイ）の関連も有することを指摘し、問題の考察を最後に回してさきに進む。

次に佐野三家については、すでに尾崎喜左雄氏が「山ノ上碑」を詳しく検討し、成立年代とその地域とに関して重要な提起をしている。まず、成立年代を「恐らく推古十五年（607）の屯倉の設置の一つに当たるものであろう。」とし、その地域を、群馬郡小野郷、片岡郡佐没郷、緑野郡小野郷を挙げて「恐らくはこれらを総括した地域の名称が『佐野』ではなかろうか。」としている。「山ノ上碑」を次に掲げてみる。

辛己歳集月三日記

佐野三家定賜健守命孫黒壳刀自此

新川臣兎斯多々弥足尼孫大兒臣娶生兒

長利僧母為記定文也 放光寺僧

佐野三家を定め、賜わった健守命の孫の黒壳刀自が放光寺の長利僧の母であり、その母の為に文を記したとある。辛己歳の年次を天武九年（681）とするならば、推古十五年（607）との間は74年前となり、確かに三世代前としておおよそ妥当な範囲になるであろう。しかし、『日本書紀』推古十五年是歳冬の記事は「於倭国、作高市池・藤原池・肩岡池・菅原池。山背国、掘大溝於栗隈。且河内国、作戸苅池・依網池。亦每国置屯倉」とあるもので、その「每国置屯倉」とある「每国」を、従来前掲の倭国、山背国、河内国であるとし、また畿内の範囲とするなど、直ちに全国の意味に解するにはなお異論が残るであろう。このことの是非は暫くおいて、別の角度からこの問題を考えてみたい。

『万葉集』巻十四に、「佐野」を詠んだ三つの歌がある。

- ・三四〇六号 「可美都気野 左野乃九久多知 乎里波夜志 安礼波麻多牟恵 許登之許受登母」
（上毛野 佐野の莖立 折りはやし 吾は待たむゑ 今年来ずとも）
- ・三四一八号 「可美都気努 佐野田能奈倍能 武良奈倍尔 許登波佐太米都 伊麻波伊可尔世母」
（上毛野 佐野田の苗の 占苗に 事は定めつ 今是如何にせも）

第4章 若干の考察及びまとめ

- ・三四七三号 「佐努夜麻尔 宇都也乎能登乃 等抱可騰母 祢毛等可児呂賀 於母尔美要都留」
(佐野山に 打つや斧音の 遠かども 寝もとか子ろが 面に見えつる)

さて、三四七三号の佐野山を上野国佐野の高崎市付近の山とする説もあるが、根拠が明らかではない。その点では、三四〇六号の上毛野佐野や三四一八号の上毛野佐野田は、佐野屯倉の地に当てて理解できるものとする。

三四一八号「武良奈倍尔」を「占苗」とした岩波古典文学大系の注は、「宇麻」(馬、三九九一号など)が「牟麻能都米」(馬の蹄、四三七二号)とも表音され、また「宇梅」(梅、三九〇六号)が「牟梅能波奈」(梅の花、八五一号)ともあるように「むらなへ」を「うらなへ」と解釈することは支持できる。

しかし、「うらなへ」を「占苗」とすることは、「佐野田の苗の」の前の句に拠るのであろうが、やや穿ちすぎているように思われる。その意味を「占いをする苗の意で苗代から一握の苗を抜き、その数によって吉凶を判断するという。」解釈をしているが、そうであるならば素直に、単なる「占相」(ウラナヘ)と詠み、「佐野田の苗の」句を懸詞とすることが良い。このように解釈する方が、果して佐野田の苗自体を抜いて占いをしたかどうかを問題にする必要もなく、上毛野の佐野田と占相の神事との密接な関係が明らかになる。

次に、三四〇六号の「上毛野 佐野の莖立 折りはやし 吾は待たむゑ 今年来ずとも」の同注は、「折りはやし」について、「折って栄えさす。折って賑々しくする。おいしい料理を作ることをいうのであろう。霊ある植物の枝を折って分霊を作り、それを祭ることが、元の神霊をまつると同じことになると見る説がある。」と述べている。この解釈では、何故「佐野の莖立」なのか明らかにならない。むしろ「吾は待たむゑ」という人の好物であるかも知れぬが、三四一八号で検討したように、「佐野田の苗の」「占相」を前提にすれば、「佐野の莖立」には願いを懸けるべき霊験があったと考えてよい。

次に、三四七三号の歌に戻ってみよう。同書のこの歌の注釈は「佐野山に打つ斧の音の遠く聞こえるように、遠くにいるが共に寝ようというのか、妹の姿が面影に見えたことよ」とある。「共に寝ようというのか、」というからにはそのときは当然夜のことと思われる。他方「佐野山に打つ斧の音」を樵りの木を切る斧の音であるとすると昼間のことでなければならず、時間的に合わない。注釈はこの点に触れるところがない。この歌が詠もうとしている時は、「寝もとか子ろが 面に見えつる」というように夜のことと考えられ、そうだとすれば夜に「佐野山に打つ斧の音」とは、樵りが木を切る斧の音とは考えられず、夜の神事の斧の音か、あるいは後述するような、多胡郡山部郷(ヤマノサト)の特質にかかわる夜の生業の斧の音以外にはないであろう。ここでは、一応前者の神事に基づくとしておきたい。

次にこの句は「相聞」の編にはあるが、はたしてそのような意味にとらえてよいのか疑問である。すなわち、「可児呂」の「可(か)」は、接頭語「か」で、か弱いなどのように見た目にその様が感じとられることを表わし、「児呂」は「子ら」の上代東国方言である。したがって「児呂」は子供たちの意味であり、「児」を「妹」の意味で用いている例は少なくはないが、この場合は「妹」と解することは適当でない。したがって、この歌の意味は「佐野山に打つ(神事の)斧の音が聞こえないほど遠くにいる(我が身である)が、(斧の音が聞こえる我が家で)寝て横たわっている子供達の面影が浮かんで見える。」という親の心を詠んだものである。したがって、「佐野山に打つ斧の音」が、夜の神事の斧の音であるとすれば、この佐野山は、三四〇六号や三四一八号で見た「佐野田の苗の占相」に神意を聞き、「佐野の莖立」に願懸けの霊験があるとする共通した佐野であると推定できる。以上、迂遠な方法を使ったが、いささかの根拠をもって「佐努夜麻」を上毛野佐野と考えられることを述べてきた。

次に「佐努夜麻（佐野山）」の「夜麻（山）」は、単なる地形の山であるか問題である。佐野の辺りには「山」里があった。つまり、天平十九年法隆寺伽藍縁起流記資財帳⁽¹¹⁾にみえる多胡郡山部郷は、和銅四年三月辛亥条による多胡郡の編成に至るまで片岡郡山里であり、「ヤマノサト」と呼ばれていたであろうが、和銅六年五月の『風土記』撰進の詔以後に、漢字二字の好字として表記する「山部」（ヤマ）里に変化したと見てよい⁽¹²⁾。さて、佐野の地を前述のように群馬郡小野郷、片岡郡佐没郷、緑野郡小野郷を総称するものと推定した尾崎説に従えば、佐野の地には当然片岡郡山里の地も含まれてしかるべきであろう。したがって「佐努夜麻（佐野山）」の「夜麻（山）」は、「山部」（ヤマ）里のことであった可能性が高い。この推定が正しければ、推古15年以後に成立した可能性をもつ佐野三家は、後に「山部」（ヤマ）里とされる地域を含み、山部を名乗る部民集団を抱え、また後に『万葉集』の歌にも詠まれる程に、占相に神意を聞く信仰を周辺地域に発達させた靈威ある神の信仰の拠点をなしたと思われる。

以上の検討によって、緑野屯倉は設定された時代が6世紀前半～後半にかけての時期であり、佐野三家は7世紀の初頭以降の時期であり、また前者が鎭川流域の谷、後者が烏川流域の扇状地とその範囲を異にするが、一方の中心を地名が残る緑野に求め、他方の中心を佐野の山に求めるとするならば、その両者は鎭川・鮎川・烏川の合流する河川交通の接点と碓氷峠に向かう東山道の交通の要衝の地点に重なりあう。このことは、「ミヤケが交通路と密接な関連をもつことを想定しておくことはミヤケの立地を考察する基礎的な視角になると考える。」⁽¹³⁾とした千田稔氏の指摘を裏付けるものである。

3. 佐野三家と上宮王家

多胡郡山部郷と上宮王家との関連の指摘⁽¹⁴⁾はすでにあるが、これをどのように理解するかが課題である。

天平十九年法隆寺伽藍縁起流記資財帳において、封戸二百戸の記載があり、ここに上野国多胡郡山部郷五十戸とあるが、その寄進は天平十年のことであり、その関連を示唆するところはないかの如くである。しかし、法隆寺伝来裂墨書幡銘などによって大和の斑鳩・飽波の地域を検討し、古代史の重要な問題に及んだ狩野久氏⁽¹⁵⁾の研究が手掛かりになるように思われる。

すなわち、7～8世紀の斑鳩・飽波の地域には、額田部連氏、飽波評君氏、山部連（宿禰）氏がいたが、ここに飽波評が設置された理由には太子晩年の宮の飽波葦墻宮が存在したためであり、額田部皇女の乳母が額田部連氏の婦女と推定され、その額田部連氏の本拠地の額田部丘陵が佐保川、富雄川、大和川の三河川に囲まれ、佐保川、初瀬川、寺川などの大和の大きな川が合流する地点にあり、大和の河川の水運を利用するものにとって格好の土地であったことなどによるとする。

ここでは上宮王家に関わるものとして飽波評に関わる額田部氏との関係に焦点があり、また膳氏や平群氏との関連にも言及し、また前に掲げた山部連（宿禰）氏の本拠地が平群郡夜摩（山部）郷であり、平群郡の有力者であるとするが、上宮王家との関係には触れられていない。たしかに『日本書紀』やその他の上宮王家関係史料に明記するところはない。しかし、狩野氏の研究をもとに岸俊男氏が山部連氏と上宮王家との関係を明らかにしている⁽¹⁶⁾。確かに岸氏の指摘するように、私見もまた『日本書紀』推古九年二月と同十三年十月に見える斑鳩宮が、法隆寺東院下層遺構とされており、平群郡夜摩郷にあることを考えると斑鳩宮や法隆寺の造営に山部連（宿禰）氏が深く関係したと考えることが自然と思う。

そしてその示唆が、天平十九年の法隆寺伽藍縁起流記資財帳に法隆寺水田396町余のうち播磨国揖保郡には219町余、同寺園地31町2反のうち12町2反、同寺山林等26か所のうち播磨国に21か所、同国の揖保郡に5か所、同寺庄地46か所中播磨国3か所、うち同国揖保郡に1か所と記載され、法隆寺の経済的な基盤が播磨国

第4章 若干の考察及びまとめ

の各郡、とりわけ揖保郡に存在していたことを窺わせるところにあると考える。また天平十年に施入された法隆寺封戸二百戸のうち、五十戸はすでに記した上野国多胡郡山部郷であり、五十戸は播磨国揖保郡林田郷で、他は但馬国朝来郡枚田郷、相模国足下郡倭戸郷の各々五十戸であるが、この播磨国揖保郡林田郷が天平十年法隆寺の封戸とされたが、播磨国揖保郡はすでに見たように法隆寺経済においてそれ以前から格別な地位にあったことが注目されるからである。その水田については、法隆寺伽藍縁起流記資財帳や『上宮聖徳法王帝説』に天皇が上宮聖徳法王の法華経・勝鬘経の講説のために賜与した五十万代の水田の一部であると記されており、したがって起源が推古朝に遡る可能性は高い。このように天平十年の播磨国揖保郡林田郷の封戸施入には揖保郡地域の法隆寺との親密な歴史的前提が考慮されたと推定される。

次に、『播磨国風土記』宍禾郡条によれば、難波長柄豊前天皇（孝徳）之世に宍禾郡（評）は揖保郡（評）より分かれたという。孝徳朝の立評は、その規模において種々の議論はあるが事実としてよく、したがってその分離の信憑性を認めてよいとすれば、以前の宍禾郡（評）と揖保郡（評）とは一つのまとまりをもった地域であったと考えられるのである。問題はこのまとまりの要素をどのように考えるかである。『播磨国風土記』の両郡の記載には、上宮王家や法隆寺の記載が全くないのも不思議であるが、次のような記述が注目される。

- ① 揖保郡条広山里に続く意此川の記述に、出雲の御蔭大神が神尾山にいて道行く人を遮ったので、伯耆・因幡・出雲の人が朝庭に憂い申したところ額田部連久等等を遣わし、祈禱させた。
- ② 同郡大田里に続く鼓山について昔、額田部連伊勢が神人腹太文と闘った。
- ③ 同郡大家里は旧大宮里であるとし、勝部岡は小治田河原天皇之世（推古）の御世に大和の千代の勝部を遣わして田を開墾させた。
- ④ 同郡越部里は、勾宮天皇之世（安閑）に但馬君小津が三宅を造って仕えた。
- ⑤ 宍禾郡の郡家の置かれたところを矢田村と名づけた。
- ⑥ 同郡に比治里があるが、山部比治が里長に任じられた。
- ⑦ 同郡にある安師里は、旧酒加里といい、その後山守里といったのは山部三馬が里長に任ぜられたからであった。

以上のように『播磨国風土記』の宍禾郡（評）と揖保郡（評）には興味深い記述がある。そのなかで特に額田部連氏に関する伝承が複数あることであり、また額田部連氏のみならず里長に任じられた山部氏が複数存在していることである。この山部の存在は平城宮木簡などからも裏付けられる。また、意奚・袁奚王を発見した山部連少楯の記述が賀毛郡と美囊郡とに見られ、また『日本書紀』清寧紀二年十一月条にも同様の伝承があり、これらの地域の山部の広範な分布と伝承とからこの地の山部と山部連氏との緊密な関係が窺われる。

このように額田部連氏や、また山部連氏を伴造とする山部の広範な存在は、法隆寺伽藍縁起流記資財帳に見える推古朝の寄進に始まるであろうことを揖保郡の水田や山林などについて示唆する点であり、この水田や山林が宍禾郡（評）と揖保郡（評）とにまたがる一つのまとまりの要因ではなかったか。

随分と回り道をしたが、天平十年に上野国多胡郡山部郷が法隆寺の封戸になったことも、その封戸が山部郷（山里）であり、山部氏の居住が確認されることから、上宮王家や法隆寺との歴史的な関係の可能性が十分考えられてよい。そして前述のように、佐野夜麻が山里であり、佐野三家がこの地域に設置され、またその設置が推古十五年ころでおかしくないとするれば、山部連氏の協力によって上宮王家が東国に進出する一拠点を設定したと見ることもあながち不当とは言えまい。

『日本書紀』皇極紀二年(643)に上宮王家の継承者である山背大兄が、居所斑鳩宮を蘇我臣入鹿の部隊に襲われた有名な事件がある。山背大兄は斑鳩宮を逃れ、膽駒山に隠れたそのときに従者の三輪文屋君が深草屯倉に移り向かい、ここから馬に乗って東国に至り、乳部をもとに師(いくさ)を興して戦いましょう、そうすれば必ず勝ちましょう、と勧めたという。ここにいう東国と乳部が具体的に如何なるものであったかはむろん明らかではない。天平十年の法隆寺伽藍縁起流記資財帳にみられる水田以下の資財のうちに、封戸の相模国足下郡倭戸郷の五十戸を除いてはそれらしいものはない。東国とその乳部に頼れば蘇我臣入鹿と戦って必ず勝たんという話は、法隆寺伽藍縁起流記資財帳から推定される経済基盤からいえば西国にこそ拠点があつてよいように見え、いささか作り話めくが、しかし上宮王家の経済基盤が全て法隆寺に伝えられたわけではないことを考えれば東国とその乳部の話は見逃すことができないと思う。したがって佐野三家もあるいはそうしたものの一つであった可能性も捨て切れないのである。

4. 金井沢碑文と知識

神亀三年(726)の年紀があり、上野国群馬郡下賛郷高田里を本貫にする三家の子孫達である、現在の家刀自や上毛野君の一族とされる池田君や物部君の男女6人、そして知識として結んだ三宅毛人以下3人の名前を記して、七世の父母と現在の父母の菩提を弔い、互いの知識を天地に誓願した内容の金井沢碑文は、従来畿内を中心に考えられがちな知識結の東国における広がりを示すものとして注目される。

我が国の最も古い知識として知られるものは癸未年(623)の紀年をもつ法隆寺釈迦三尊像銘の「信道知識⁽¹⁷⁾」であり、丙寅年(666)の野中寺弥勒菩薩像銘には「栢寺知識之等、(中略)友等人数一百十八⁽¹⁸⁾」とあるように7世紀後半には畿内の中心部において行なわれていたことが知られる。この場合「栢寺」を橋寺と解する説⁽¹⁹⁾があり、上宮王家・法隆寺系統の僅かな関連が推察される。

次に、前述の上宮王家・法隆寺の影響関係を不明とする以外にない天平6年(734)の奥跋をもつ石山寺一切経中の播磨国賀茂郡既多寺の大智度論知識経は、恰も加茂郡の戸籍を見るの感がある、と評されるような加茂郡内における広範な人々による知識経として注目される。ここに知識を結んだ人々として、僧尼が5人、針間国造氏、国造氏、針間直氏を名乗るもの31人、山直氏が8人、佐伯直氏が4人、以下中臣氏、平群氏、物部連氏、衣縫造氏、車持連氏、民直氏、大野君氏、神田君氏、妹臣氏、石作氏、六人部氏など十一氏が1～2名、不明2名の63名が知られている。この播磨国賀茂郡既多寺の大智度論書写の知識を結んだ氏族の様子を見ると地元播磨の伝統的一族が半ばを占めながら、大和の伴造系氏族につながる氏族が目立つように思われる。ここにあるいは畿内の大和、河内地域(あるいは上宮王家・法隆寺関係)のかすかな影響関係を見ることができるともかもしれない。

こうした播磨国賀茂郡既多寺の知識経と金井沢碑の知識とは、経と碑とで異なり、知識結の地域的広がりが異なるなど種々の点で相違するところが少なくない。しかし、金井沢碑の知識でも氏族的関係などその畿内地域との関係が如何なるものであったのか考えてみなければならぬ。金井沢碑の知識では、その氏族の記載内容からその関係を直ちに指摘することは困難であるが、三宅(=屯倉)の子孫達によることが注目されてよい。ここに知識結が東国においても共通した現象として早期に行なわれた理由があり、また畿内地域との密接な関係がやはり考えられるのである。その密接な関係を具体的には4項までの検討の結果から上宮王家・法隆寺系統と見なしたいが、今は明確な根拠を欠くのでささやかな参考程度で満足しなければならない。

5. おわりに

おわりに、本節第2項で保留した緑野屯倉の範囲とその中心の理解について触れたい。すなわち、問題の緑野の遺称地と貫前神社・犬飼橋、そして第4節に指摘した両地点との間はおよそ14～5キロメートルの距離があり、屯倉と犬飼（イヌガイ）の遺称地が近接するとの指摘に矛盾するという点でこれを別の第2の屯倉とする見方が第4節の指摘のように当然あってよい。しかし、緑野の遺称地の地理的位置は第2項で見たように鍋川・鮎川・烏川の合流する河川交通の接点と碓氷峠に向かう東山道の交通の要衝の地点ににあたる。したがって千田稔氏のいう「ミヤケが交通路と密接な関連をもつことを想定しておくことはミヤケの立地を考察する基礎的な視角になると考える。」に基づけば、河川交通の接点になる地点から碓氷峠に至る間の交通の要衝を押えるとともに、その交通路を確保する機能を目的にしていたとみてよい。こうした視点に立つと緑野の遺称地はその河川交通の接点にあり、貫前神社・犬飼橋と犬飼（イヌガイ）の遺称地は、碓氷峠の山間部への起点に当たり、それぞれ相互に重要な結節点にあることを考えると二つの遺称地が推定させるミヤケ施設の存在物が異なった支配・管理機能のもとにあったとは考え難い。したがって、二つのミヤケの遺称地は、緑野屯倉の範囲におけるいくつかの施設の存在を語るものと考えたい。

以上の理解に基づくと、矢田遺跡は完全に緑野屯倉の範囲の中に存在することになる。そして矢田遺跡集落の第2の出現期は、この周辺の6世紀後半に出現する集落遺跡と同様に緑野屯倉設定の時期に重なる可能性がきわめて高いものとなる。

次に佐野三家の設定は推古朝としてよいことを述べたが、それは上宮王家の進出を背景にしたと考えられる痕跡について触れた通りである。和銅四年三月の多胡郡成立以前の片岡郡山里は、緑野の遺称地と指呼の間にあり、鍋川沿いの谷とは山一つ隔てた烏川沿いの谷を通して碓氷峠に向かう起点に当たる。佐野三家も烏川沿いにかかなり広い範囲にわたるとみられるのも緑野屯倉と同様の機能のためであり、片岡郡山里がその中心の一つであったと見てよい。

物部氏が卓越する緑野屯倉の地域から上宮王家の痕跡を残す佐野三家という6世紀後半から7世紀前半への二つのミヤケの移り変わりという結論は、中央における物部連守屋の滅亡と蘇我系の上宮王家の台頭という余りにも重大な政治権力の消長に重なってくるのでなお慎重な具体的事実に基づく検討が重要である。

注(1) 中沢悟・春山秀幸・関口功一「古代布生産と在地社会—矢田遺跡出土紡錘車の分析を通して—」（『群馬県の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団十周年記念論集、1988年11月）

(2) 尾崎喜左雄「上野三碑と那須国造碑」（『古代の日本』7関東、角川書店、1970年6月）『上野三碑の研究』（尾崎先生著書刊行会、1980年1月）

(3) 林屋辰三郎「継体・欽明朝の内乱の史的分析」（『立命館文学』88号、1952年9月、後『古代国家の解体』所収、東京大学出版会、1955年10月）など。

(4) 館野和己「屯倉制の成立—その本質と時期—」（『日本史研究』190号、1978年6月）は、「しかも『紀』は名代・子代の屯倉を継体・安閑朝に集中させ、かつ伝承の残っているものはいずれも安閑妃に関するものであり、その中でも春日皇女に関わるものが多い。これも『紀』の潤色の結果であると考えべきであり、それをそのまま信用することはできないではなからうか。」との氏の見解は、従来の屯倉研究を踏まえた妥当な理解であると考えられる。したがって『紀』の潤色の仕方やまたその基となった事実の如何をどのように確認していくのが課題である。

(5) 津田左吉『日本上代史の研究』（48頁、岩波書店、1947年）、『日本古典の研究』下巻（80～82頁、岩波書店、1950年）。原島礼二『日本古代王権の形成』（校倉書店、1977年9月）は、津田説でいう『日本書紀』編者の潤色が、欽明紀以降の屯倉記事を基準として、これを陰陽五行説讖緯説にいう陽数から割り出して9人の天皇の年数に割り当てたものとする大胆な解釈を示した。しかし、設置の時期はとなく、陰陽五行説によったとしても屯倉の設置として重ならない屯倉については以下の本文のように考えられよう。

(6) 黛弘道『律令国家成立史の研究』序論第2章大和国家の財政（吉川弘文館、1982年12月）

(7) 前掲注(2)尾崎喜左雄『上野三碑の研究』（尾崎先生著書刊行会、1980年1月）

(8) 前掲注(6)黛弘道『律令国家成立史の研究』序論第2章

(9) 前掲注(2)尾崎喜左雄著書

(10) 岩波古典文学大系『万葉集』三、三四七三三注

第1節 矢田遺跡集落成立の前後

- (11) 『寧楽遺文』中巻、1962年10月、
合家封貳佰戸永年若在図國、
播磨国揖保郡林田郷五十戸、但馬国朝来郡枚田郷五十戸、
相模国足下郡倭戸郷五十戸、上野国多胡郡山部郷五十戸
- (12) 関口功一「上野国多胡郡山部郷に関する覚書」(『信濃』36-11、1984年11月)、小林昌二「日本古代鉄生産集団支配に関する一試論」(『社会科学』9、1985年1月)
- (13) 千田稔「ミヤケの地理的実体一畿内とその周辺における立地と地割の問題一」(『史林』58-4、1975年7月)
- (14) 前掲注(12)関口功一論文
- (15) 狩野久「額田部連と飽波評一七世紀史研究の一視角一」(岸俊男教授退官記念会編『日本古代政治社会史研究』上巻、塙書房、1984年、後『日本古代の国家と都城』、東京大学出版会、1990年9月)
- (16) 岸俊男「山部連と斑鳩の地」(『古代の日本』6 王権をめぐる戦い、中央公論社、1986年10月、後『日本古代文物の研究』塙書房、1988年1月)が、山部連氏と法隆寺との濃密な関係とともに聖徳太子の御杖代として山部連一族が仕えたことを初めて具体的に指摘している。
- (17) 『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館、1976年)
- (18) 前掲注(17)
- (19) 前掲注(17)
- (20) 田中魂堂『日本写経綜覧』(思文閣、1974年)

第2節 「物部郷長」の世界

共立女子第二高校 関 和彦

1 はじめに

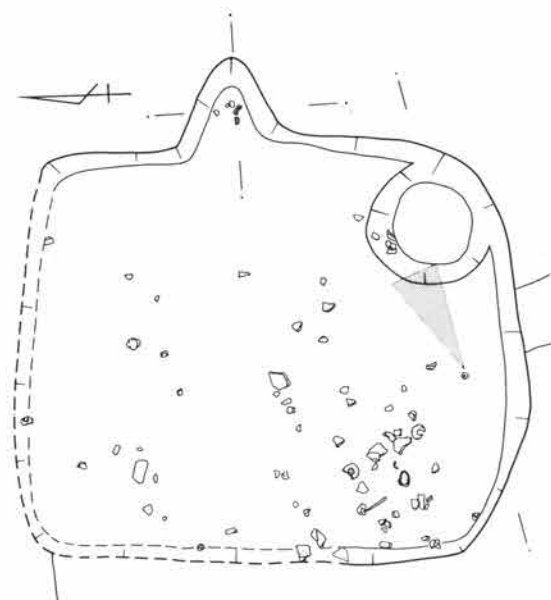
矢田遺跡は、人々の目をひきつける特別な遺構・遺物を世に示したとはいえないが、遺跡の広がり、発掘面積の広さ、そして遺跡を取り巻く史的環境から貴重な情報を提供していると判断する。ここで筆者に与えられた課題である石製紡錘車に刻まれた「物部郷長」について若干の考察を加えたいと思う。ここで展開する見解は未だ古代史研究においては未知の分野、すなわち「機織」祭祀・「郷家」に切り込むものであり、試論の域を出ないことをお断りしておきたい。

「物部郷長」刻字石製紡錘車は、「第2次調査区の東端近くの北東方向の緩斜面」に位置し、705号（平安時代）の竪穴建物跡を切る形で発掘された12号竪穴建物跡から出土している。12号竪穴建物跡は「平面形は東西3m4cm・南北4m10cmを測る長方形」を呈するが、その規模は本遺跡では目立つ大きさではない。但し、すでに前述されているように①「物部郷長」刻字石製紡錘車、②鉄製紡錘車、③帯金具の出土が確認されており、当遺跡で最も注目される存在である。肝心の時期は9世紀後半、それも第4四半期と目されている。

2 「物部郷長」刻書の背景

「郷長」という職名を付す資料をまず集成・検討することが必要である。「郷長」を語る資料は少ないが遺跡の一定程度の検討材料となろう。⁽²⁾ 9例のうち兵庫県山垣遺跡のそれは「里長」とあり、里制段階のものである。ここで注目したいのは、矢田遺跡の「物部郷長」の刻書と他の「郷長」資料（次頁掲載）では性格が違うのではないかという点である。「玉井郷長」・「丹生郷長」・「春部里長」の場合はそれぞれ「郷名」+「郷長（里長）」と考えられる。例えば「玉井郷長」の場合は、「玉井郷」が『倭名類聚抄』に確認できる。

矢田遺跡は、著名な上野三碑の一つである多胡碑をのぞむ鑄川右岸の河岸段丘上に立地している。この東西に長い段丘は、『倭名類聚抄』に確認できる多胡郡の織裳・韓級・大家・武美・山等の六郷の多くが分布していたのではないかと注目されてきた場所である。もとよりここに「矢田」の地名が広く確認できること、そして今回、同遺跡から「八田郷」と刻書された石製紡錘車が出土したことから、この地が古代の「八田郷」の領域にかかわるものであることがほぼ間違いないことがわかった。そうであるならば、「物部郷長」刻書石製紡錘車は、律令制下の「八田郷」の故地から出土したことになる。『倭名類聚抄』、そしてその他の資料を通覧しても、「物部郷」という郷は多胡郡には一切確認されていない点を考慮すると、「物部郷長」の「物部」



第187図 12号住居跡と「物部郷長」の線刻のある石製紡錘車

第84表 「郷長」関係出土文字資料

墨書の内容	遺跡名
玉井郷長	山梨県東八代郡大原遺跡
丹生郷長	福井県武雄市丹生郷遺跡
鹿郷長鹿成里□里□	千葉県佐倉市馬場遺跡
春部里長	兵庫県水上郡山垣遺跡
郷長 由	茨城県水戸市大塚新地遺跡
□郷長	千葉県市原市門脇遺跡
竹田郷長	静岡県浜松市伊場遺跡
郷長丸子□□	神奈川県鎌倉市御成遺跡
大郷長	群馬県前橋市荒砥洗橋遺跡

は、「玉井郷長」「丹生郷長」の例と相違し、「郷名」ではないと理解できるのである。そうなれば「物部」は、当然「氏名」として理解すべきであろう。ここで一つの問題が提起される。何故、他の例と同じく「郷名」+「郷長」とせずに「氏名」+「郷長」、すなわち「物部郷長」としたのかという点である。同様の表記の場合、三つのケースが想定される。それは、

- ①「郷長」とのみ書く場合
- ②「氏名」+「郷長」の場合
- ③「郷名」+「郷長」の場合

である。

①の場合は、その郷の範囲内では十分に意味するところは通じるが、その郷域を越えた時点で「どこの郷長」かが不明となる。③の場合は、郷域を越えても十分にその意味は通じ、むしろそれを意識して書かれた可能性も高いと考えられる。課題の②の場合、当時の「氏」の分布からして近隣に同じ「氏名」を称する郷長の存在を否定できないことから、「何処の郷」の「物部郷長」かが不明になるので、①と同じく郷内の範囲でのみ意味を持つ表記とみるのが妥当であろう。

別稿で「郷長(里長)」の史的性格について論究し、『風土記』・『万葉集』の検討から「郷長(里長)」の「世襲」性に言及しておいた⁽³⁾。その論拠は、「郷長」宅に付随した「郷家」の存在、そして『万葉集』にみえる山上憶良の著名な貧窮問答歌等の背景から導き出した知見による。

a 楚取る五十戸良が声は 寝屋処まで 来立呼ばひぬ かくばかり術なきものか 世間の道

b 壇越や 然もな言ひそ 五十戸良が 課役徴らば 汝も泣かむ

a では里長の「楚」をもって民家に押しかける姿が、b では「汝も泣かむ」ほどの徴税をする里長の職務が歌われており、里長の反里人的姿勢が伺える。この二首に見える「五十戸良(里長、後の郷長)」の一般農民を敵にまわす行為が可能なのは、その職が権力を背景とし、原則として「世襲」されるという認識をもっていたからであろう。しかし、それはあくまで原則であり、「家」の人的弱体、あるいは経済的衰退によりその職が移動することも場合によってあったと考えるのが自然であろう。

ここで「五十戸良(里長、後の郷長)」職の移動という事態を想定し、八田郷に目を転じてみよう。

多胡郡内に分布していたと考えられている「氏族」としては[山部・物部・神人(部カ)・秦人(部カ)・大伴(部)・矢田・穂積・上毛野・阿倍]が指摘されている。そのうち「八田郷」に確実に居たと考えられるのは上毛野、そして物部であり、矢田も郷名から推測して候補として挙げることができよう。その点をふまえて郷名と郷長(里長)・「氏族」のかかわりを検討してみよう。

a 比治里(土は中の上なり)比治と名づくる所以は、難波長柄豊前天皇のみ世、揖保郡を分ちて、宍禾郡を作りし時、山部比治、任されて里長となりき。此の人の名によりて、故、比治里といふ。(『播磨国風土記』宍禾郡条)

b 石作里(本の名は伊和なり)土は下の中なり。石作と名づくる所以は、石作首等此の村に居りき。故、庚

午年に石作となせり（『播磨国風土記』宍禾郡条）

史料aは比治里の里名起源に触れ、それは山部「比治」が里長になったからとし、里長の名が里名になったということを伝えている。同様の里名起源は『播磨国風土記』の讃容郡、揖保郡等にも見えており、注目される。史料bは石作里の里名起源であるが、そこに「石作首」一族が居住していたからという。この命名の方法は随所に見えるものであり、里名の起源としては比較的多いケースである。そのbの場合を念頭において「八田郷」の「郷（里）」名の性格を考えるならば、郷域に多くの「矢田」一族が分布していたと推定できよう。そのような氏族分布という状況を背景に、史料a・b伝承で具体的にみた通り「八田郷」という郷名が成立したものと思われる。そのような優勢を誇った「矢田」一族の「何某」がかつて「五十戸良（里長、後の郷長）」職に就いていたことは、以上の点からして十分に想定できよう。しかし、「物部郷長」刻書石製紡錘車が明確に示すように、9世紀第4四半期の「八田郷」郷長は「物部」であった。この「矢田郷長」から「物部郷長」への変更は「矢田」郷長家の「家」の人的弱体、あるいは経済的衰退という状況のなかでなされたこととしたい。「物部郷長」刻書石製紡錘車が出土した12号竪穴建物付近は西側に比し、建物の分布は少ないようである。その点を考慮すると「矢田郷長」から「物部郷長」への交替は比較的新しい時期であったものかもしれない。

以上の憶測をふまえると、「八田郷」内において物部は郷長（里長）として未だ十分に安定した基盤をもっていなかったのではなかろうか。『正倉院宝物銘文集』所収の調庸墨書銘にみえる「上野国多古郡八〇郷」の「上毛野朝臣甥」が多古地方の在地有力者として位置づけられており⁽⁴⁾、本論に引き付ければ「八田郷」在住の多古地方の有力者として紹介することができよう。また「郷長」の地位は失ったとはいえ「矢田」一族の郷内への広がりも無視できない状況にあったのではなかろうか。「物部何某」という郷長は郷内において単に「郷長」と表明するだけでは「心」的不安が解けないわけであり、あくまで「物部」という「氏名」を付す必要がその時点ではあったと考えられる。

3 石製紡錘車と刻書

木簡・墨書土器に隠れて地味ではあるが、確実に石製紡錘車刻書の数も増加してきている。1987年に『季刊考古学』が「考古学と出土文字」という特集を組んだが、木簡・墨書土器・文字瓦・漆紙文書・鏡鑑銘・篋書土器・刻印土器・墓誌・経筒銘等の立項でそれぞれの意義、研究法が展開されているが、石製紡錘車の刻書に関しては全く言及されることはなかった。その時点では未だ石製紡錘車刻書に関しては文字史料としての適確なる位置づけがなされていなかったことになる。最近では、出土数の多い群馬県で特に石製紡錘車刻書が注目され、研究が展開しているが、「墨書土器との共通性が指摘できるとすれば、線刻紡錘車のもつ意味も本質的には墨書土器と共通するものである可能性が考えられる」という形で文字資料一般のなかに解消される傾向にある。⁽⁶⁾確かに、墨書土器との係わりを探求することは正しく、重要であると筆者も認識するが、未だ研究の端緒の段階にある現時点では石製紡錘車刻書独自の資質を明らかにすることがなにより肝要ではなかろうか。

まず石製紡錘車への「刻書」の目的について考えてみたい。その場合、墨書土器に関する同研究が一つの参考になろう。玉口時雄氏は墨書土器の項目分類を行い、記念銘、官衙関係建物、官職、人名、寺院・仏教、地名、神社、農耕・祭祀、所属・所有、器物・用途、吉祥、四季、呪具・呪語、嗜好・食料、干支、十二支、動・植物、数字、大きさ、平仮名、片仮名、行事、習書等の項目を示している。⁽⁷⁾余り整理されている分類で

はないが、「物部郷長」を考える上で援用できよう。この分類では当然のこととして「官職、人名」に相当することになるが、項目分類ではそこで終わってしまうのである。大切なのは項目分類でいう「官職、人名」を刻書して何を主張しようとしたかにある。まず考えられるのは「所属・所有」である。その点に関して井上唯雄氏は「賦役令」にみられる調庸布の長さ、幅への厳しい規定、そしてその遵守から調庸布作成過程における統制を想定し、「その品質にかかる紡錘車についても勿論当初から制限を受けたのではあるまいか」とし、その「調庸布製作の任に当る郷なり郷戸主は紡錘車の指定をうけて対応したことも想定され、当該の紡錘車に地名や人名を付すことが行われた⁽⁸⁾」とする。若干意味合いが違うが、氏の見解は「所属・所有」に係わるとみてよいだろう。この調庸制との係わりで把握する視点は重要であるが、現実の場を想定すると、次の諸点から承認できない。何故なら、所有を示すならばより多くの石製紡錘車に所有者（井上氏の言う「郷なり郷戸主」名）を示す刻書があつてしかるべきである。刻書された石製紡錘車に所有をより主張したいであろう立派な石製紡錘車に刻書されていない点も説明出来ない。また刻書し、所有を示す前提にはその「刻書」を読める識字層が一定程度居住していたことを想定する必要があるが、当該期にそのような状況を考えることは不可能である。確かに、調庸布という性格を把握すれば、その生産に国家の関与は当然想定はされるが、その関与の結果で刻書するならもっと「書式」が整っているはずであろう。

「所属・所有」という想定が無理とすると、「農耕・祭祀」が注目される。古代の祭祀といえば神祇信仰を中心にその研究が展開しているが、厳密に言えば神祇「農耕」信仰の世界に限定されているのが現状である。確かに古代の基本的生産を考えればそれは当然のことであるが、漁業・狩猟・林業・鋳業等に係わる祭祀も視野に入れていかねば、全体的な神祇信仰像は描けないのではなかろうか。

群馬県における養蚕習俗の調査を展開している板橋春夫氏は、年中行事の中に養蚕習俗を位置づけ、「豊蚕の予祝儀礼としての小正月と初午」「とはいっても、稲作の豊富なそれに比べれば、量的にも比較にならないほど貧弱である。また小正月行事は、養蚕の予祝だけでなく、稲作や畑作の予祝も数多く認められ、それらが錯綜して習俗を構成している⁽⁹⁾」と観察する。確かに小正月には俵、餅、粟・稗穂、麦殻の束、里芋とともに繭玉も飾られることが報告されている。養蚕の予祝が農耕予祝行事の中に組み込まれていることが伺えるのである。古代の予祝儀礼といえば祈年祭であるが、その体系化されたものとしては『延喜式』巻八にみられる祈年祭祝詞が有名である。

初穂をば、千穎八百穎に奉り置きて、甕の上へ高知り、甕の腹満て雙べて、汁にも穎にも稱辞竟へまつらむ。大野の原に生ふる物は、甘菜・辛菜、青海の原に住む物は、鱈の廣物・鱈の狭物、奥つ藻菜・邊つ藻菜に至るまでに、御服は明るたへ、照るたへ、和たへ、荒たへに稱辞竟へまつらむ。

この祝詞をみると、稲・野菜・魚・海藻・山海の産物と並んで「御服」が挙げられていることが注目される。祈年祭というと農耕予祝のみが注目されてきたが、織物、その原料となる麻、桑（蚕）の豊穰祈願も含まれていたとすべきであろう。その点で朝廷内の年中行事化した儀式としての正月の初子の儀礼も注目される。その典型的具体例は『万葉集』巻二十に見える宝字二年正月三日の内裏東屋垣下で開催された「帝王躬耕・后妃親蚕」の儀式である。そこでは「親蚕」儀式が「躬耕」と並んで位置づけられており、「養蚕」の比重の大きさが伺える。また、『日本書紀』神代上にみえる「唯し其の神の頂に、牛馬化為る有り。顛の上に粟生れり。眉の上に蠶（かいこ）生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稲生れり陰に麥及び大小豆生れり。」というように食料の神である保食神の遺体から蚕が生まれたとする古代人の思考も、食料と並ぶ蚕の重要な位

第4章 若干の考察及びまとめ

置を知る事例と評価できる。それらは、律令の規定にみられる里長の任務「掌檢校戸口、課殖農桑」、国遣行条の「勸人農桑」にかかわる義解、朱説、跡説にみる「勸人農桑」、「令勸勤百姓能桑」「勸務農桑」の説明等で理解できる「桑」勸農の熱意と一体化したものであろう。以上の諸点を考慮し、祈年祭が民衆社会の予祝行事を収斂したものであることを認識すると、古代農村においても本質的には同質の養蚕予祝儀礼がなされていたと考えて大過あるまい。

では、そのような予祝儀礼と石製紡錘車刻書とはいかに係わっていたのであろうか。紡錘車を含む機織関係の機器については『肥前国風土記』基肄郡姫社郷条の記載が参考になる。それによれば夢の中に「臥機（くつびき）（織機）、「絡塚（たたり）」（糸繰機）が出てきたので神が女神であることがわかったという内容である。「海の正倉院」として著名な沖ノ島の岩陰遺跡からは宗像三女神に奉納されたと考えられる金銅製雛形製品（かせ・たたり・紡錘車等）が出土しており、別稿で論じたように紡錘車が「幣帛」「祭具」として使用されていたこと、また姫社伝承と考え合わせると「女」に関係深いことが理解できる。⁽¹⁰⁾そこで確認された二点の事実は、当然のこととして「石製」紡錘車も共有する性格として理解できるものである。

古代の養蚕・製糸・織物労働の担い手は「其の女子、桑に登りて葉を揃く（『日本霊異記』中巻四十一）」「妻一人多ノ糸ヲ繰居タリ（『今昔物語集』巻二十六第十一）」「二人の女、夜、麻を打つ（『播磨国風土記』揖保郡）」とあるようにその中心は女子の労働によるものであった。それは『続日本紀』靈龜元年十月の詔の「男勤耕耘。女脩紵織。家有衣食之饒。」にみえる「女脩紵織」という奨励政策と不可分のものである。そのように古代の「紡錘」労働の主体が女性であることを押えるとき、矢田遺跡の石製紡錘車「物部郷長」刻書、すなわち「男性」名称には違和感を覚えざるをえない。

そういう点に関して『今昔物語集』巻二十六第十一の「参河国始犬頭糸」伝承は極めて貴重な情報を提供している。それによれば参河国のある郡に一人の郡司がいたが、彼は妻を二人擁しており、その妻に養蚕をさせ糸を大量に生産していたというのである。伝承では個人の私腹を肥やす形で「養蚕」が登場するが、有力者が女性労働の上に立ち、その女性らの生活を左右している様子を垣間見ることができる。服藤早苗氏は古代の女性労働に言及し、「いくつかの集落で生産活動を行う共同体成員は、小規模単位に生産された原料糸を貢納し、共同体成員から簡取された織成者が、里長クラスの小首長の管理する大型織機を備えた機殿作業場で織成作業を行った」と想定されている。⁽¹¹⁾『今昔物語集』では養蚕個別経営が郡司とされているが、一般的には服藤氏が説くように里長層を想定するのが妥当ではなかろうか。

今日まで群馬県で出土した石製紡錘車刻書をみると、郷名（八田郷・家郷）、人名（大田刀譚□子、田口、有馬、物部、馬手、矢田家人・矢田公子家守）が比較的多い。これらは単に所属、所有を示すものではなく、生産向上を願う共同体、あるいは成員個人の名を示したものでなかろうか。前橋市二之宮町の天ノ宮遺跡の石製紡錘車刻書「八十」は「郷名、人名」ではないが注目されるものである。角山幸洋氏の研究によれば、「一説〔算〕というのは、四十本のことである。もし経糸を箴に通すときには、箴目に二本ずつ通すので八十本となる」のであり、「八の単位は、撚糸にする撚糸八丁車、織機における八歯などがあり」、「八」を単位とする「数概念」があったことを明らかにしている。⁽¹²⁾確かに、小正月の飾りの繭玉は「十六」でありそのような「数概念」があったことは認められるであろう。一例では明確ではないが「八十」の刻書はそういう「数概念」の表現と見なすことが可能であり、その「八十」という「聖数」を刻書することで生産の向上を願ったのであろう。八田郷在住の「物部郷長」の某は郷全体の養蚕（養蚕・紡錘・機織を含めて）での生産向上を願う祭祀に際し、刻書したのであろう。

4 「物部郷長」と郷家

ここでは、「物部郷長」刻書を出土した遺跡に目を向けてみたい。「物部郷長」刻書を出土した12号竪穴建物はいかなる性格をもっていたのであろうか。まず考えられるのはその「建物」に郷長が住んでいた、あるいは郷長が何らかの係わりをもっていたということであろう。本報告書は「規模等の点では何等見るべきもののないこうした住居跡で比較的顕著な遺物が検出された事は、今後の検討課題であろう」としている。全くその通りであり、遺跡と遺物のバランスが取れない「住居」は今後も増えるであろう。しかし、その指摘こそ12号「住居」の性格を語っていると考える。筆者は既に別稿でそういう点に言及し、村落「官衙」としての郷家の条件として、①掘立柱建物の存在、また規格性のある建物配置、②円面硯・転用硯の出土、③墨書土器・木簡（館、家、郷長の墨書・刻書）の3点を指摘したが、その3点が満足されねばならないわけではなく、また3点を満足すれば郷家というわけでもない。1点でも充足すれば郷家の可能性があるとして慎重に検討すべきという提案である。その条件からいえば、12号「住居」も遺物から郷家として検討する必要がある⁽¹³⁾のである。まずは12号「住居」から出土した帯金具も注目を要する。本来帯金具は、官人にのみ着用が認められたものであり、その金具が同「住居」から出土したという事実は、何らかの関係で官人と結びついていたことを暗示しているといえる。しかし、9世紀段階ではその制度も崩れ、村落内の有力者でも所有する事態が出現していた可能性が大である。次に土器に関してはa量的には少なくない、b細片が多い、c煮沸具には見るべきものがない、d羽釜はない、の4点が指摘されている。cdを参考にすればこの「住居」単独では消費生活の場としては完全とは言えないようである。遺物から言えば「物部郷長」刻書、帯金具の存在から郷長関係の竪穴「住居」と考えられるが、郷長の私生活の場としての側面は弱いようでもある。しかし、問題はそうした「規模等の点では何等見るべきもののないこうした住居跡」から出土している点であり、果してそのような「住居」が郷長関係の竪穴「住居」と言えるかという点である。例えば、鳥取県気高町の戸島遺跡ではその当否は別として整然と配置された掘立柱建物が確認され、郷家正庁と推定されている。それに比すれば12号「住居」は足元にも及ばないと言えよう。しかし、すでに別稿で論じたように郷家というのは「郷家（里家）は郷長（里長）の私宅に付随する形で建造された」と考えられるので、その建造物は多様であったとも考えられる。

ここで『令集解』の「国郡司」条に目を向けてみたい。

凡国郡司。須向所部檢校者。不得受百姓迎送。妨廢産業。及受供給。致令煩擾。

内容は国司・郡司が領内を視察する際に農民の仕事に差し障りがあるので、その出迎え、供給は受けてはならないというものである。それに関して「積」は「国司巡所部者。郡司候當郡院。」「郡司巡部内者。里長候當里。」「令積」も「国司巡者。郡司候當郡院。」「郡司巡省・里長候當里不得向境。」、また「古記」も「国司巡部内者。郡司待當郡院。」「郡司巡部内。里長待當里内。」と解釈している。ここで注目したいのは国司に対する郡司、郡司に対する里長の送迎待機場所の相違である。郡司は「候當郡院」、「待當郡院」とあるように役所である「郡院」で待機するのであるが、里長は「候當里。不得向境」、「待當里内」とあり、単に「里内」とあるようにその待機場所は不明であり、それも「不得向境」とあることから「特に」出迎えに行く必要がなかったであろう。それは「不得受百姓迎送」の主旨と同じであろう。そこで注目したいのは郡司の場合は明確に役所としての「郡院」と指示しているのに対し、里長の場合は不明確という点である。その表現の差は「郡院」に比し、「郷家」が完全な形で「官衙」的ではなかった反映と考えられないだろうか。12号竪穴

第4章 若干の考察及びまとめ

「住居」は到底その規模からして「官衙」的ではないが、その出土遺物から見て、郷長の居宅を構成する一棟である可能性が大であろう。「一棟」としたのは12号竪穴「住居」は建物であり、別に先に示したc dを伴う「消費生活の場として」完全な竪穴住居が存在する可能性もあるからである。果してその一群の居宅が郷家を兼ねていたのか、それとも別に居宅と異なる「郷家」を付随していたかは重要な問題であるが、資料上の制約により明らかにはしえない。

以上、石製紡錘車「物部郷長」刻書の一例から推測を重ねて来た。本稿が取り上げた「機織」祭祀、「郷家」は未だ十分に議論されていない分野である。矢田遺跡から想定した「物部郷長」をめぐる世界が今後の研究の深化につながれば幸いである。別の遺跡で同様のケースが幾つか確認出来れば、更に論議が深まり、より具体的様相が明らかになるであろう。

注(1) 筆者は「山村と漁村」(『日本村落史講座2・景観1・原始・古代・中世』所収)で竪穴「住居」という用語の非歴史性を指摘し竪穴「建物」の使用を提唱した。

(2) 「郷長」資料に関しては「山梨文化財研究所報」第7号(玉井郷長)、『丹生郷遺跡調査概要』(丹生郷長)、『山垣遺跡』(春部郷長)、『茨城県史』(郷長由)、『市原市門脇遺跡』(□郷長)、『伊場遺跡』(竹田郷長)、『神奈川地域史研究』9号(郷長丸子)、『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』(大郷長)を参考にした。玉井郷長については加藤信夫氏から資料の提供を受けた。記して謝意をしたい。尚、大郷長の「大」に関しては郷長名か、郷名か、それとも他の意味か不明としておく。

(3) 拙稿「古代村落「官衙」研究への提言」(『研究論集』12、共立女子第二高等学校)。

(4) 中沢悟・春山秀幸・関口功一「『矢田遺跡』とその周辺」(『信濃』41-3)。

(5) 『季刊・考古学』18。

(6) 井上唯雄「芳賀東部団地遺跡出土の線刻紡錘車について」(『芳賀東部団地遺跡II』所収)。

(7) 玉口時雄「墨書土器」注(5)所収。

(8) 井上唯雄「線刻をもつ紡錘車について」(『古代学研究』115)。

(9) 板橋春雄「養蚕習俗の研究」(『群馬文化』196)。

(10) 拙稿「『風土記』社会の諸様相-3」(『風土記研究』8)。

(11) 服藤早苗「古代の女性労働」(『日本女性史1・原始・古代』所収)。

(12) 角山幸洋「古代の染織」(『講座・日本技術の社会史3・紡織』所収)。

(13) 拙稿注(3)に同じ。

(追記) 『木簡研究』12で紹介された長岡京跡出土の木簡に「田辺郷長里正」が見える。

第3節 鐮川流域の集落遺跡と

貫前（抜鋒）・宇藝神社

立教大学 矢野建一

はじめに

関東山塊に源を発する鐮川は、甘楽郡南牧村・下仁田町・富岡市・甘楽町・多野郡吉井町を東流し、右岸域には典型的な河岸段丘を発達させている。一方、その左岸域では河岸段丘の発達がほとんど見られず、富岡丘陵の南辺を浸食して各所に急峻な崖線を形成する。これらの地形的条件によって、鐮川流域は、今日でも政治的にも経済的にも非常にコンパクトなまとまりを示す地域となっている。

こうした鐮川流域は、古代史研究を志すものにとっては一度は訪れてみたい場所のひとつになっている。なぜなら、古代東国地域への仏教の伝播を示す「山ノ上碑」・「金井沢碑」、そして律令制成立期の地域編成を物語るとともに、矢田遺跡とも密接に関係する「多胡建郡碑」、さらには古代鐮川流域に生きた人々の信仰に計り知れない影響をもたらした、上野国一ノ宮でもある貫前神社の存在など、古代国家成立史の諸問題を極めて具体的に提起していると考えられるからである。もとよりこの小論でこうした問題の全てを論ずる余裕はないが、貫前・宇藝神社と鐮川流域の集落史の関連を検討することによって、矢田遺跡に生きた人々の生活の一端でも明らかにできれば望外の幸いである。

1 上野国の官社と貫前・宇藝神社

『延喜式』巻九の神名式によれば、上野国の式内社は大三座小九座の計十二座であったとされている。

上野国十二座大三座

片岡郡一座

小祝神社

甘楽郡二座

貫前神社名神大

宇藝神社

群馬郡三座

伊加保神社名神大

榛名神社

甲波宿禰神社

勢多郡一座大

赤城神社大

山田郡並大

賀茂神社

美和神社

那波郡二座並小

火雷神社

倭文神社

佐位郡一座小

大国玉神社

第4章 若干の考察及びまとめ

ところで、このように大小通計十二座からなる神名式の上野国の項は、何時このような状況を示すに到ったのであろうか。神名式には全国三千百三十二座（二千八百六十一社）の神社が記載されているが、官社制度の成立した八世紀の初めからこれだけの数の神社が登録されていたわけではなく、官社制度の整備・拡大とともに増加していったと考えられる。事実、『続日本紀』以下の五国史には計九十八回、百八十七所の列官社（新たに官社に列した神社）が認められるが、上野国においても次の五所が平安時代にはいり官社に預かっていたことが知られる。

- ・上野国山田郡賀茂神、美和神、那波郡火雷神並為_二官社_一（『日本後紀』延暦十五年八月甲戌条）
- ・詔以_二上野国甲波宿禰神_一列於官社（『日本文徳天皇実録』嘉祥三年十二月庚戌条）
- ・上野国正六位上倭文神列於官社（『日本三代実録』貞観元年八月庚子条）

すなわち、延暦十五（七九六）年以前の上野国の官社は、上記五社を除く片岡郡の小祝社、甘楽郡の貫前・宇藝社、群馬郡の伊加保・榛名社、勢多郡の赤城社、佐位郡の大国玉社の僅か七社にすぎなかったと考えられるのである。しかも、これらのうち佐位郡の大国玉社については、奈良時代後半の神護景雲二（七六八）年、同郡出身の采女で称徳天皇の掌膳を務めた上野佐位朝臣老刀自が「本（上野）国々造」に任命されたのを機に創祀されたのではないかと推定がなされている⁽¹⁾。たしかに隣の武蔵国でも、神護景雲元年に武蔵宿禰不破麻呂が「武蔵国々造」に任命され、それと時を同じくして氷川神社が特段の取扱をうけるに到っているが、これも同郡出身の采女で不破麻呂と同族の家刀自が、称徳天皇の「掌侍兼典掃」に任じられたことによるものと考えられる。こうしたことから、佐位（財）郡の大国玉神社が官社に列したのも神護景雲年中を遡る可能性は低いと思われる。

また、片岡郡の小祝社の場合は、国府域の国分寺を中心とした一町方眼の升目（条里）内に推定されているが、その所在地から国府の守護神としての性格を持っていたと考えるのが自然であろう。しかし、このような官衙神が官社に預かるようになるのは、中央の官衙の場合でも貞観期以降のことであり、小祝社のみが例外であったとは考えがたい。

以上のような理由から神護景雲二年以前、すなわち八世紀前半の上野国の官社は、甘楽郡の貫前・宇藝社、群馬郡の伊加保・榛名社、勢多郡の赤城社の五社に過ぎなかったと考えられるのである。

ところで、これらの五社はその形成の特質によって大きく二つのグループに分けられるように思われる。
すなわち

- ①群馬郡の伊加保・榛名社、勢多郡の赤城社
- ②甘楽郡の貫前・宇藝社

このうち①はその社名からも明らかなように、山嶽信仰（自然崇拜）との関連が想定される。また、②についても向背の荒船山との関係や、両社が甘楽郡の「貫前」郷に所在したことから、やはり山嶽信仰との関連を指摘する見方が有力である⁽²⁾。

しかし同じ郷内に二つの官社が存在した例は他になく、貫前社の祭神も経津主神と伝えられるなど、①のグループとは異なる特徴が窺われ、鑄川流域の集落変遷史を考えるうえでも看過できない問題を含んでいると言えよう。

2 貫前・宇藝社の祭祀と「物部」氏

『延喜式』の諸本によれば、「貫前社」は「ヌキノサキ」（吉田家本）、「ヌキノサキノ」（内閣文庫本・享保板本・雲州本）、「ヌキサキ」（九條家本）との訓みがなされている。しかし、同じ『延喜式』の臨時祭式の名神の項は「貫前」を別に「抜鉾」と記しており、これ以外に「貫前」を「抜鉾」と記した例として「上野国交替実録帳」・「神道集」等がある。時代は下るものの、「上野国神名帳」も「抜鉾太神」（一宮本）・「抜鉾大明神」（總社本）と記して、それぞれ「ヌキサキ」・「ヌキサキノ」と訓じている。こうしたことから、「貫前」と「抜鉾」は貫前郷の成立とともに「貫前」が古く、本来別の神であったが、古代末の「抜鉾」の台頭によつて混同されるに至ったとの解釈がなされている。しかし「新抄格勅符抄」神封部所収大同元（八〇六）年牒には上野抜鉾神二戸上野とあって、九世紀の初めから「抜鉾」と記され、神封二戸に預かっていたことが知られる。しかもここで注意されるのは、この大同元年牒は全国百七十一の封戸に預かる神社を収載しているが、その表記には大別二つのタイプがあり、一つは肝心の抜鉾社のタイプで、神名・封戸の数及び所在地のみを記したものの百十六社、もう一つは、「飯道神 一戸 宝龜二年奉充」などのように、神名・封戸数・所在地とともに、その封戸が寄せられた年が明記されているタイプの五十五社である。

このうち問題の前者タイプは、天平二（七三〇）年の「大倭國正税帳」によれば、全て天平初年以前に遡ることが知られている。⁽⁴⁾すなわち「抜鉾」という神名表記も「貫前」とともに「ヌキサキ」と訓み、おなじ神社の異なる表記として、八世紀の初頭には成立していたと考えられるのである。

もつとも、字義のうえで「抜」と「貫」はちょうど反対の意味に当たり、この問題をどう処理するかが一つの課題といえよう。ただ、「前」・「鉾」（サキ）は、矛の鉾を意味するところから、「抜」・「貫」も矛の鉾を抜いたり撞いたりする一連の動作を示す言葉であったと考えられる。

しかもここで注意されるのは、この貫前（抜鉾）社の西4キロメートルという近い位置に宇藝神社が存在することである。この宇藝社については、「宇藝ハ食ニテ神社御饌津ノ神ニマスベケレ」（「上野名跡志」）として、「貫前」社の御饌津神、すなわち伊勢の内宮に対する外宮（豊受神）の關係に当たるとする見方が支配的となっている。しかし、「貫前」社が鉾を撞いたり抜いたりする行為と関わる名前であったとするなら、この「宇藝」は所謂鎮魂（タマシズメ）の呪法に用いられる「宇氣槽」（ウケフネ）との関連を想定してみる必要があろう。⁽⁵⁾

古代の鎮魂祭は天皇の衰弱した靈魂を振り起こすために、十一月に宮中奥深く執行される祭祀として知られている。その祭式は「貞觀式」・『延喜式』をはじめ、『北山抄』・『江家次第』等に見られるが、その概略を述べれば、十一月中の寅日の酉二點に、大臣以下諸司が齋院の所定の座に就き、神祇伯が琴師・笛師・御巫・神部・ト部等を率いて参入する。やがて幣帛を供え、笛師・琴師が笛・琴を奏し、神部及び雅楽の歌人が相和して歌い、神部の拍子に隋って御巫の歌舞がおこなわれる。また、時を同じくして、宇氣槽（ウケフネ）を伏せて、その上に御巫が立ち杵をもって十度にわたり槽の底を撞く。撞くたびに、中臣は御魂緒の木綿を一つずつ結び、御巫は拍手に応じて、案上の御衣宮を振り動かすのである。

このような鎮魂呪法において、杵と宇氣槽がきわめて重要な役割を果たし、杵によって槽を繰り返して撞く（抜く）ことによって鎮魂が達成されると觀念されていた点が注目される。なお、このような鎮魂の呪法は、天皇以外にも中宮や東宮、さらには八十嶋祭において行われるなど、古代社会においてはかなり広範囲に実修されていたことが知られる。おそらく貫前（抜鉾）・宇氣の両社の名称も、こうした鎮魂の呪法に由来するとともに、上野地域の荒御魂を鎮める役割を果たしていたと考えられるのである。慎重な検討を要するが、貫前社の生弓矢生太刀の神事（巫射行事）や宇氣社の神宝が「小なる船型」とされているのも、あるいは両社のかかる性格を今日に伝えているものと見ることもできる。⁽⁶⁾

第4章 若干の考察及びまとめ

第85表 群馬県下の「物部」氏の分布

郡名	郷名	里名	氏名	備考
碓氷				※石上部君氏居住
片岡				
甘楽			物部公鱈淵	続日本紀天平神護元・十一・一条 (←物部改姓)
			物部公牛麻呂	続日本紀天平神護二・五・二十条 (←磯部改姓)
			物部	仁治四年板碑 (複数あり) ※貫前神社の祭神は経津主命
多胡	山(字)		物部子□□	上野国国分寺出土瓦銘 (複数あり)
	八田		(物部郷長)	矢田遺跡出土石製紡錘車刻字
	八田		(物部 六)	矢田遺跡出土石製紡錘車刻字
			物部神社	上野国神名帳 ※穂積神社あり
緑野	小野		物部鳥麻呂	平城宮出土木簡・戸主
那波				※穂積神社あり
群馬	下贄	高田	物部君午足	金井沢碑銘
			(「物部私印」)	矢中村東遺跡出土銅印銘
吾妻				※上毛野坂本朝臣 (←石上部君) 氏居住
利根				
勢多				
佐位				
新田				※矢田氏居住
山田				
邑楽				※八田郷あり

ところで、このような貫前・宇藝社、あるいはその鎮魂の呪法は、どのような人々によって、如何なる目的で導入されるに到ったのであろうか。古代宮廷の鎮魂呪法には、猿女系と阿曇系、そして石上系があったといわれている。このうち貫前社の祭神が経津御魂とされていること、また第85表にも見るように、上野国に物部系氏族が数多く分布することから、石上系の呪法との関連が注目されよう。

なお、石上氏は物部系の氏族で著名な石上神宮の管掌者として知られているが、この『物部』を所謂大化改新以前の物部大連と同一視するのは問題があろう。むしろ壬申の乱以降、石上(布瑠)の鎮魂呪法をもって王権祭祀に供奉し、天武王統に地歩を築いた石上系物部氏とする説を妥当とするべきであろう。⁽⁷⁾

また、石上神宮の役割についても、物部大連が軍事氏族であったことから、大和朝廷の武器庫とする見方が支配的である。しかし、『日本書紀』天武天皇三(六七四)年条には、

遣=忍壁皇子於石上神宮-、以=膏油-瑩=神寶-、即日、勅曰、元來諸家貯=於神府-寶物、今皆還=其子孫-

とあって、石上神宮に収納されていたのは武器というより、大和各地の豪族から接收された「神寶=レガリア」であったと考えられる。こうした「神寶」も、王権に接收される以前は大和各地の首長層の祭祀権・統

治権のシンボルであり、王権の側からすれば、荒御魂として観念される存在であった。おそらく石上神宮は、こうした荒御魂を石上の地に封じ込め、荒御魂を鎮魂の呪法によって和魂にかえるとともに、氏の大小によって大刀・小刀を、伴造系の氏上には干楯弓矢を賜給することによって、天皇に対する諸氏の服属を明らかにする場としての役割を果たしていたと考えられるのである。

勿論、これはあくまで大和における石上神宮の場合であり、それと貫前・宇藝社を同一に取り扱うことに問題があろう。しかし、貫前・宇藝社において鎮魂の呪法が実修され、それが石上系物部氏によって担われていたと見られることなどから、両社も石上神宮に極めて近い役割を果たしていたと考えられる。すなわち、令制以前の上毛野は、在地首長の支配する極めて自立性の高い地域であり、大和から見れば荒御魂（国魂）の居ます国と観念されていたとしても不思議はない。おそらく貫前・宇藝社は、こうした荒御魂のレガリアを収公し、鎮魂の呪法によって齋き鎮めることを目的として創祀されたと考えられるのである。

3 鎬川流域の集落と祭祀遺物の諸相

このような「貫前」社の成立は鎬川流域、とくに矢田遺跡とその周辺の人々にどのような影響をもたらしたのであろうか。もとより文献史料によつてそれを明らかにすることはできないが、さいわい鎬川流域の集落の住居跡からは多くの石製模造祭祀品が発見されており、その変遷と位相関係を検討することによって、この問題の一端を明らかにすることができると考えられる。

矢田遺跡は、古墳時代以降平安時代に到るまで、およそ七百五十軒の竪穴住居跡が確認されているが、そのうち、百五十軒以上から石製品が発見されている。しかし、同じ石製品でも古墳時代後期以前のそれは有孔円板・白玉・曲玉など祭祀遺物（模造品）が中心であるのに対して、奈良・平安時代には「物部郷長」等の線刻の銘をもつ紡錘車や砥石などの実用品が主流となっている（付編2参照）。こうした傾向は、石製品の「工房」跡を含むと見られる、同じ鎬川流域の長根羽田倉遺跡にも認められる⁽⁸⁾。

第86表によれば、長根羽田倉遺跡における滑石製模造品の製造は、古墳時代の後期に数量的なピークが見られ、種類のにもこの時期に多様化の傾向が窺われる。しかし飛鳥・奈良時代に入るとともに石製品の製造は線刻のある紡錘車などの実用品に限定されるようになり、再び石製模造祭祀品が作られることはない。なお表中の飛鳥・奈良時代の住居跡と見られる54・62・113・131号住居遺構出土の有孔円板・剣形・チップなどは、いずれも報告書の指摘するように流れ込みによるものであろう。

このように、古墳時代後半期を画期とする石製品の激増は、同じ鎬川流域でも笹遺跡（鎬川右岸）・甘楽条里遺跡（同）においても認められ、隣接する鮎川流域の竹沼遺跡などでも知られている⁽⁹⁾。特に富岡市久保遺跡では、近接しては集落遺跡の報告がなされていないにもかかわらず、六世紀中葉に単独的に突如現れ、非常に膨大な遺物量（総数7617点以上）で、顕著な祭祀遺物・遺構を検出されながらも、短期間のうちに終息してしまうという特徴を持っている⁽¹⁰⁾。これらのことは、鎬川流域の人々の生活を考えるうえで、注意しなければならない特徴の一つであるといえよう。

ところで、矢田遺跡をはじめとする鎬川流域の遺跡の、古墳時代後期の遺構から出土する曲玉・有孔円板・白玉・剣形などは、前期古墳の副葬品に系譜をもつとともに、豪族居館と見られる三ツ寺I遺跡や「貫前」神社の北側に近接して確認されている山下遺跡周辺などでも確認されているようである。すなわち、古墳祭祀にはじまる在地首長層のイデオロギーこそ、これら祭祀品を重要視させる背景となっていたと考えられるのである。

もっとも、鎬川流域において確認されている石製祭祀品は、あくまでも模造品であり、しかも古墳時代後期

第4章 若干の考察及びまとめ

第86表 長根羽田倉遺跡出土滑石製模造品 (同左報告書より転載)

時期	器種 遺構	勾玉	円板		方板		剣形	白玉	馬形	紡錘車	未成品 チップ	石核	合計点数	
			有孔	無孔	有孔	無孔								
古墳時代後期	6号住		1▼										1	
	12号住				1			6▼			2▼	1▼	10	
	17号住						1▼						1	
	22号住										1▼	6	7	
	23号住						1▼						1	
	24号住												1▼	1
	27号住											2	2	
	31号住					1▼	2▼				1▼			4
	32号住						1							1
	33号住						1							1
	34号住												1	1
	35号住						1▼	1▼						2
	39号住												1▼	1
	41号住			1▼								3▼		4
	42号住								1		1			2
	44号住						4▼					1▼		5
	56号住			1▼					1▼					2
	57号住	1										3▼		4
	58号住			1▼										1
	74号住										1▼			1
	78号住								1					1
	82号住											1▼		1
	91号住							1▼	5				1▼	7
	106号住								1					1
	123号住								1▼					1
	2号土器集積			12				6	1	12		115		146
	3号土器集積		6	53				17	1			142		219
飛鳥	9号住									1			1	
	21号住										1▼		1	
	30号住										1▼		1	
	54号住			1▼			1▼						2	
奈良時代	62号住		1▼										1	
	113号住						1▼				1		2	
	118号住									4			4	
	122号住									3	9▼		12	
	129号住										2▼		2	
	131号住		2								9▼		11	
平安時代	134号住									1▼			1	
	38号住											1▼	1	
	69号住									4			4	
	90号住						1▼	2▼			1▼		4	
	98号住									1▼			1	
	108号住							2▼					2	
	111号住										1		1	
	112号住							1▼					1	
	117号住									1			1	
128号住									1▼			1		
	2号溝									1▼			1	
	1区グリッド						1▼	1▼			2▼	1▼	5	
	2区グリッド	3▼	5▼				5▼	5▼	2▼	6▼	21▼	4▼	51	

にピークをもっている点を忘れてはならない。こうした古墳時代後期の石製模造祭器の激増は、明らかに古墳祭祀に代表されるイデオロギーが行き詰まり、本来在地首長層の独占物であった鏡・剣・玉類の模造品を鎭川流域の集落に分与し、その支配を祭祀の面から再編成しなければならない段階にいたっていたことを示しているのではなかろうか。

こうした事態の背景には、『常陸国風土記』行方郡条の箭括氏麻多智伝承に見られるような、村落首長による谷戸を中心とした小開発の存在が想定されているが、鎭川支流にあたる天引川・大沢川・土合川、あるいは鮎川の谷戸においても、同様な開発が行われていた可能性がある。古墳時代後期に夥しい石製模造祭器を出土する長根羽田倉・笹・甘楽条里、あるいは竹沼といった諸遺跡も、こうした支流によって形成された谷戸を眼下に望む台地上に営まれており、石製模造祭器の出土の稀な利根川以北にくらべれば、比較的早く在地首長のイデオロギーの呪縛から脱する条件を獲得していたと考えられる。

しかし、たとえ模造品であれ、その授受が行われるかぎり、その関係は不断に再生産される性格のものであった。鎭川流域を覆っていたその呪縛＝石製模造祭品が、一斉に姿を消す時期が七世紀に訪れたのである。これまでの経緯から、その原因が、鎭川流域の集落内部にあったとは考えがたい。おそらく外的な力、切言すれば「貫前」社の成立によるものと考えられる。すなわち「貫前」社の成立は、一方で鎮魂の呪法によって鎭川流域の人々を国造に代表される在地首長の呪縛から解き放つとともに、もう一方では新たに古代国家のもとに人々を呪縛し、同地域を再編成するうえでも欠くべからざる役割を果たしたと考えられるのである。

まとめにかえて—奈良・平安時代の「貫前」社と矢田遺跡

鎭川流域の国家的再編成と、そこに生きた人々の精神史に計り知れない影響を与えた「貫前」社も、八世紀にはいるとともに大きな転機をむかえた。すなわち、

- ①大宝令によって、地方の有力な神社は神祇官の下に再編成され、村落レベルの祭祀との関係が希薄になったこと。
- ②鎭川流域の村落も、大宝令による国郡里制の再編成によって、幾つかに区分され直すに至ったこと。

特に②について、この地域の場合には和銅四（七一一）年の多胡建郡に際して、貫前社のある甘楽郡から「織裳・辛科・八田・大家」の四郷が分離され、多胡郡に編入されたことによって、その影響力は急速に低下していったと考えられる。

しかし、奈良・平安時代の貫前社を、単に前世紀のモニュメントとのみ捉えることは、古代社会における宗教の役割を矮小化する恐れがある。わけても注意されるのは、中世の成立ながら『神道集』が拔鋒神を「南天竺狗留吠国」の長者玉芳大臣の第五の娘好美女とし、赤城の神が好美女から絹筋を借りた話を載せるなど、機織神としての性格を見せていることである。古墳～平安時代の矢田遺跡では、九十個体以上の石・鉄製紡錘車等の機織関係遺物とともに、平安時代に属する121号住居跡からは、この時期としてはきわめて珍しい平絹と真綿状の繊維製品が炭化して出土し、あたかも織物のムラとしての様相を見せている。郡域こそ異にすることになったとはいえ、こうした矢田遺跡の性格と貫前社の変貌が無関係であったとは考え難い。⁽¹¹⁾ 鎭川流域に生きた人々と貫前社の関係も、新しい段階を迎えようとしていたのである。

注(1) 『式内社調査報告』第13巻 東山道編貫前の項（坂井久能氏執筆）。

(2) 尾崎喜左雄 「貫前拔鋒両神社の研究」（『上野国の信仰と文化』所収）。

第4章 若干の考察及びまとめ

- (3) 注(2)参照。
- (4) 拙稿「信濃国小縣郡の生嶋足嶋神社について」(『古代史研究』4号)。
- (5) 注(1)坂井氏も宇藝神社を御食津神としながらも、「宇藝」が「宇氣槽」に通じる可能性を示唆する。
- (6) 『群馬縣北甘樂吉田村郷土誌』参照。
- (7) 野田嶺志「物部氏の基礎的考察」(『史林』51巻2号)。
- (8) 『長根羽田倉遺跡』本文編。
- (9) 『F1竹沼遺跡』(昭和52年度発掘調査概報)・『笹遺跡—鍋川流域における滑石製品出土遺跡の研究』他参照。
- (10) 『富岡市史』原始・古代・中世編参照。
- (11) 中沢悟・春山秀幸・関口功一「古代布生産と在地社会」(『群馬の考古学』所収)参照。

第4節 物部と石上

— その地域的展開に関するノート —

関口博幸・関口功一

第87表 群馬県下の「物部」氏関係地名

郡名	旧村名	小字名
吾妻郡	原町	城口(風呂屋、植松、平瀬)
碓氷郡	下後閑村	石神
	原市村	石神
	横川村	中道下(久保田、陳手、中田、石神)
邑楽郡	館林町	並木町(風呂小路)×
北甘楽郡	一宮町	南平(道山、下清水、矢田、千日) 引土(下矢田、入道屋敷)
	宮崎村	御風呂(谷)、本城(千才屋、古賀井戸)
	宇田村	矢田
	下仁田町	石神
佐位郡	下植木村	上飯玉(八田女)
	野村	谷田?
多胡郡	矢田村	
	石神村	宿地(石上郷)
利根郡	井戸上村	石神(荘田)
那波郡	阿弥大寺	矢田
	下道寺	矢田
西群馬郡	三ノ倉村	石神(新寺)
	楽間村	石神
	棟高村	谷田?
	東明屋村	石上寺西
	井出村	下布留
東群馬郡	前代田村	矢田
	市之坪村	石神井×
	天川村	矢田町
	天川原村	矢田
緑埜郡	矢場村	道上(腰巻、風呂ノ井戸)、石上(油井戸)
南甘楽郡	乙父村	石神
南勢多郡	西片貝村	石神井×
	上田沢村	上石神×
	小屋原	石神井×
	東片貝	石神井×
	石井	前山(小風呂)
山田郡	毛里田村	只上…矢部、向矢部、矢田堀下
		矢田堀

※①多胡郡と邑楽郡には『和名抄』郷名に「八田」がある。

②多胡郡に「物部明神」、多胡郡と佐位郡に「穂積明神」、群馬郡に矢田部明神・佐位郡に八田女明神・邑楽郡に八田明神がある。

③佐位郡と新田郡に「矢田部」氏がいる。

④太田市清水田遺跡出土の土器に「矢田」と墨書する例が2例、新田郡尾島工業団地遺跡出土の石製紡錘車に「矢田…」と線刻する例がある。

八世紀代の上野国で、石上部君氏は碓氷川流域を中心とした地域に、物部君氏は鐮川流域を中心とした地域にそれぞれ勢力をもった郡領級の在地豪族であり、史料上で知られる限り西上野地域を二分する勢力であったことは、誰しも認めるところであろう。

ところで筆者等は、これまで石上部君氏について、仁賢天皇(ないし安康天皇)の名代である「石上部」の、伴造的な性格を持つ氏族であるという一般的理解⁽¹⁾に何等の疑問も持たずに過ごしてきた。

一方群馬県下では、尾崎喜左雄氏の一連の研究が既⁽²⁾にあり、石上部君氏は中央の物部朝臣氏が石上朝臣を改賜姓されるのに伴って、石上部君となったもので、本来隣接して居住する物部君氏と親近な関係を持っていたと理解された。恐らく後者は、地域に接近し過ぎる余り発生した、単純な誤りであったと思われる。

しかし、最近矢田遺跡の調査に従事し、その調査報告書の一部をまとめる機会を得るに至り、上記のような一般的理解では説明出来ない事柄が幾つかあることに気付かされた。一方、尾崎説を全く間違いと斥けられないようにも思われる部分もあるので、当面の問題点を整理して、現在迄の知見の一端を述べてみたい。

現存する小字名などの地名は、かなり慎重な操作を経なければ歴史的な資料としての使用に耐えないことは、改めて述べる迄も無い⁽³⁾。しかし、そうであるからといって、この部分を捨て去ってしまえば、重要なヒントを失う恐れがある。

筆者等はそのような関心から、これまで群馬県内の小字を中心とした地名「マルコ」や「ヤタ」についての整理を行い、若干の考えを述べてきているが、⁽⁴⁾これらのなかには歴史的な名辞と無関係なものもかなり含まれているであろう。しかし、それらはある種

第4章 若干の考察及びまとめ

の偏りを示して分布し、それらが全く無意味に存在するのではないことを示唆するとともに、一定の限界はあるものの、そういった作業がそれなりに有効であることを教えてくれる。

第87表は、県内の「物部」と「石上」とに関係すると見られる地名を、可能性を含むものまで入れ、関連資・史料とともに整理してみたものである。小字名は、「明治十二年小字名調書」などによるという角川書店『日本地名大辞典』十群馬県の「小字一覧」によった（以下「大辞典」と略す）。

当面問題になる多胡郡には、「石上郷」なる地名が知られているが、現在では大字石神のみになっている。このことから「石神」のなかには「石上」の転訛したものがあつたと思われる。尤も「石神」には、一般的地名として「しゃくじ」などという例も含まれる⁽⁵⁾。第87表の中の、利根郡井戸上村・南勢多郡小屋原村などの例は恐らくそうであろう。しかし、全てがそうであるという訳でもない。地域的な広がりの中で、キーワードを共通にする場合がしばしば認められるからである。

先ず、①碓氷郡の「石神」は三例にも上る。石上部君氏の存在とも併せ、「石上」の転訛したものである可能性は高いだろう。また、②西群馬郡には「せきじょうじ」の読みになるが「石上寺」がある。こうした傾向は、④北甘楽郡についても同様である。③西群馬郡三ノ倉村などの例に見るように、神社が対応する場合もある。

一方、「物部」という地名の、直接的な残存こそ認められないが、「物部」氏と深く関係する「布留（フル）」の転訛したと考えられる「風呂」などという地名の残存もそれなりにある。右に見た①碓氷・②③西群馬・④北甘楽の各郡の「フル（口）」地名は、いずれも近接した地点で「石神（上）」が認められる他、⑤緑埜郡でも類例がある。

畿内の氏族としてのヤタ氏は、「物部」集団の一部を形成し、地域でもしばしば組み合わされて見られることは前稿で既に述べたが、北甘楽・多胡両郡については地名（乃至寺社）レベルで併存する。山田郡周辺のヤタについては、少なくとも二系統あるヤタ関連氏族のうち、カモ県主系のものである可能性があるが、組み合わせとしては多少の出入りがあり、地域によっては混淆している場合もあるのかもしれない。

これらを、具体的な氏族の動向と重ね合わせてみると、②・④・⑤の各地域にはいずれも「物部」氏が存在し、これらの地域以外で「物部」氏の存在が知られているのは、それらに挟まれる片岡・多胡両郡のみである。これらは、本来連続する分布を示していたと考えるべきであろう。この地名と氏族分布との一致を、単なる偶然の一致という形で排除することにためらいを感じる。

そうして見てくると、既に消失していた「和名抄」郷名などの地名を、復古的に付けている場合もあるだろう⁽⁷⁾し、単に地形などに起因する場合もかなり含まれるのだろうが、明治十二年段階の小字名には、資料としてはかなりの操作を必要とするものの、案外古い要素が持続されていた場合もあると考えられるのではなからうか。

無論その水準は、畿内地域などとは較べるべくもないが、分布の密度や残り方に地域的個性を示していると考えられるのではなからうか。

次に、「物部」と「石上部」との全国的な動向のなかでの、上野国の位置について考えてみたい。分布の頻度から言えば、圧倒的に「物部」が主であり、「石上部」は従である。このことに注意すれば、ある時期以降「石上部」は「物部」のある部分に過ぎない可能性がある。但し、『新撰姓氏録』（以下「姓氏録」と略す）によれば、物部関係氏族集団のトップに石上朝臣氏があり、以下「石上（朝臣）同祖」とする氏族集団があつて、石上朝臣氏が物部関係氏族の頂点に位置している。

既に指摘されていることではあるが、一口に「物部」関係氏族とは言っても、「姓氏録」のなかの「物部」

氏のうち、カバネ朝臣（それ以前は連姓であった）の氏族と首の氏族とは、本来は同一氏族ではなく、石上神宮祭祀が変質する過程で吸収または併合されたもので、その例に追随する形で穂積朝臣氏・采女朝臣氏などの氏族が加わっている。少なくとも「姓氏録」の成立した平安時代には、こうした形での同族意識の存在があったのだろう。

「物部」氏に関する研究成果は、量的にも既にかかなりのものが知られているので、今更の観もなくはないが、その同化ないし変容過程の可能性を探るという意味で、本稿では特に「石上部」氏の実態とそれらの「物部」氏との関わり方に先ず注意してみたい。

知られる史料上での地域的分布は、先ず畿内地域の事例として都城の左京四条二坊から、天平年中に十余才で優婆塞として貢進された石上部君嶋君と、その戸主鷹養とがある。彼らは上野国碓氷郡出身の石上部君氏であった可能性がある。『続日本紀』に何度か名前がみえる男嶋とは、世代的にはかなり近接して、鷹養・嶋君の内の、恐らくどちらかが同世代であったのではないか。その上毛野坂本君改賜姓に当たって、畿内在住の一族の代表として申請を行った男嶋は、氏上級の人物を想像させ、年齢的には男嶋がやや嶋君よりも年長であったと思われる。嶋君はそのまま仏門に入った可能性があるから、もし兄弟であるにしても男嶋が優位な序列にあったであろう。

大和国山辺郡にある「石上」郷は、「石上部」の根本になる場所である。周辺地域に、参照すべき氏族結合の痕跡を残す可能性があるが、明瞭に史料が残存する時期以前のことで、古代の範疇に属する時期でさえ曖昧な要素が発生している。例えば、同郡内に「穂積」郷も存在していたようだが、「和名抄」郷名段階では残存しない。「石上村」という表記も知られる一方、フルについては「姓氏録」段階に「布留村」が知られるに留まる。

山城国乙訓郡には「石上」村があるようだが、これも「和名抄」郷名レベルの地名ではないようである。

次に、畿外諸地域を地域順に見て行くと、上総国では天平六年七月二七日に天羽郡讚岐郷磐井里から優婆塞として貢進された忍山とその戸主大島とが知られる。一方、上総国での「物部」は山辺・周准両郡に所在が知られているが、これらのうち後者は天羽郡と隣接しており、関わりがあったかもしれない。前者については、後に「物部匠瑳連」に改賜姓されるウジに関係するもので、氏族の系統的・血縁的には恐らく別になるのだろう。

常陸国では、「和名抄」郷名で那珂郡に「石上」郷がある。「物部」関連史料は、信太郡に集中しており、他の地域には目下のところ知られていない。これら相互には直接の関係はなさそうである。但し、那珂郡内部には「和名抄」郷名段階で「八（田）部」郷があり、そうした意味では「石上」が孤立している訳ではない。

「石上部」が、現在知られる史料上で最も集中する地域は美濃国である。大宝二年「御野国戸籍」の加毛郡半布里分に八人の「石上部」の人々が知られている（第188図参照）。

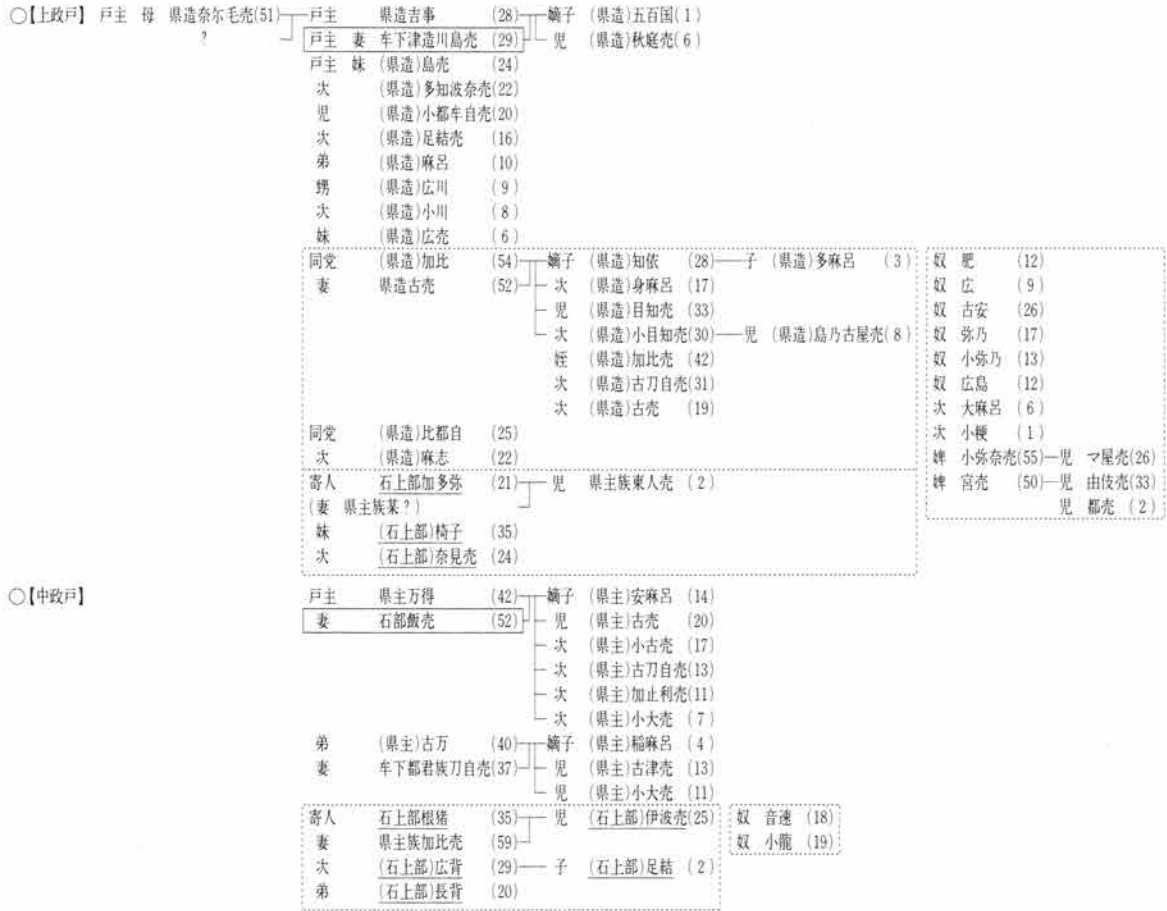
二戸分に分散しているが、

①上政戸（中下戸主） 県造吉事

②中政戸（下下戸主） 県主万得

の戸のいずれも「寄人」⁽¹⁰⁾として見え、三房戸以上で構成されるやや優勢な①の戸の石上部加多弥とその姉妹二人、やや小規模な②の戸の石上部根猪とその兄弟二人及び子供一人・甥一人である。これらの人々はいずれも「寄人」に留まっており、郷戸主クラスではなく、いずれもその下層のやや隷属的な身分に属する模様である。なお、「和名抄」郷名段階では席田郡に「磯上」郷がある。

第4章 若干の考察及びまとめ



第188図 大宝2年御野国加毛郡半布里戸籍に見える「石上部」

これらに対応する「物部」は、かなり多く認められる。人名では各務・賀茂・方県・厚見・多芸の各郡に知られ、美濃国に隣接する尾張国にも連続してかなり濃密な分布を示していた。地名では、多芸・安八・本巢の各郡に「物部」郷があり、厚見郡には「物部」神社もあった。この周辺では、残存史料の多さと相俟って、「石上部」と「物部」とがかなり入り組んだ分布を示していたと思われる。

なお前述の「御野国戸籍」には、同里内や近隣に「石部」姓を負う人々がかなりいるが、「いそべ」で良ければ、上野国地域の碓氷郡・甘楽郡などとやや類似した状況があったかもしれない。

下野国では、「和名抄」郷名で那須郡に「石上」郷が知られるのみである。これと同様に「物部」の分布も薄く、芳賀郡に「物部」郷が知られるほかは、所属郡不明の個人が知られるに留まる。

備前国では、「和名抄」郷名で邑久郡に「石上」郷がある。「物部」の方は、御野郡に人名が知られ、磐梨郡に「物部」郷が知られるが、全体に分布が散漫である。

「石上部」は、通常の名代としてみるならば、畿内以東に分布の中心を持ち、白髪部・長谷部などと類似した分布を示す。但し、畿内近国の分布が極めて薄く、西日本には殆ど認められないという点では、起源が比較的新しいとされる部民に類似している。特に、美濃国などのように、分布密度の濃い地域では、単独というよりも「物部」との組み合わせで現れる傾向があり、そうした組み合わせが当初からあった訳ではないだろうが、ある時期以降、意味のあるものとなったように思われる。

こうして見てくると、やはり問題になるのは、天武八姓制定以後、何故物部朝臣が石上朝臣に改賜姓されたのか、そしてその影響はどのようなものであったかということであろう。改めて「姓氏録」によって知られる畿内地域の「物部」関連氏族を整理すれば第88表のようになる。

やや混乱が見られるものの、「姓氏録」の文脈から「神饒速日命」の後裔と主張すると見られる「物部」関連氏族は、かなりの大きさを持っており、「神別」で「天神」に分類される中では最大の勢力になるだろう。しかし、都城を含む大和国を除外してしまうと「物部」関連氏族ではあっても、石上朝臣氏と直接関係していると見られる氏族はかなり限られたもののみで、中央官人などで直接利害の無い場合には、より古い結び付きだけが残るようである。しかもそこには若干の前後関係が認められる。

一連の氏族集団の中には、複姓も含め「物部」を冠する氏族も散在しているが、社会的地位に関する見られる順序では、いずれも低い序列に甘んじている。このことは、地域の「物部」について考える場合にも参考になる。

詳細は別稿に譲らざるを得ないが、各地域に在住の「石上部」は独自に設定され、「天孫本紀」に言うような天武年間の物部朝臣氏の石上朝臣改賜姓に伴って、一斉に「物部」から改められたというような事実はなく、少なくとも「石上部」であり続けたものと思われる。そうした経過を踏まえながら、物部朝臣氏の石上朝臣改賜姓が行われたのに伴い、関連氏族を主張するようになっていった例もかなり多い様に思われる。但し各地域では、集団としての「物部」の地域的展開のなかで、若干の時期差を含みながら、中央の物部連氏が勢力を拡大してゆくのに対応して、相互に関係を深めていった事は当然想定出来るだろう。

石上神宮の祭祀権に関する「物部首」氏の後退に伴い、「物部朝臣」氏がそれに成り代わって執行者になったという部分もあるだろうが、「物部」を冠する氏族ないし関連を主張する氏族が多種多様になるに伴い、その中心氏族は律令制下での位置の明確化を図った可能性がある。そうした事情が「連→朝臣」というカバネの変更だけでなく、ウジの変更に伴う事になったと考える。

上野国内の「物部君」氏は、金井沢碑等によって知られるように、ミヤケと密接に関係していた。上野国内のミヤケについては、『日本書紀』に見える「緑野屯倉」、山ノ上碑の「佐野三家」が良く知られている。しかし、それらでさえ名称が判明しているという以上の内容は不詳で、それ以外のかつてあったかもしれない部分については、名称さえ知られていない。

周辺地域も含めて比較的可能性のあるものでは、下野国との境界付近の足利・梁田両郡に分割されたと考えられるミヤケがあったと思われる⁽¹¹⁾。また、多胡郡には「大家」郷が存在し、地理的条件から「緑野屯倉」または「佐野三家」との関わりが注意される。

さらに最近、前橋市の柳久保遺跡群中鶴谷遺跡から「田部」と墨書された土器が多数発見され、勢多郡地域での設置の可能性も注意されるようになってきている⁽¹²⁾。やや時期が異なるものの、同様な「田部」の墨書土器の例は、上越線関連の長根羽田倉遺跡でも発見されている⁽¹³⁾。時期がかなり下る（十世紀の所産）ため、あくまで可能性の問題ではあるが、これは多胡郡にかつてミヤケがあった事を裏付けるかもしれない。

ところで、黛弘道氏の「犬養氏および犬養部の研究」⁽¹⁴⁾によれば、犬養部はミヤケ、大蔵・内蔵、宮城門、神社などの守衛としての機能を持つとされている。群馬県富岡市出身でもあり、地域の事情にも通じていると思われる同氏の文章の一部を、原文のまま引用すれば次のようになる。

…群馬県富岡市一ノ宮の貫前神社の裏手を流れる高田川に犬飼橋があり、今でもそこで川瀬神事が執り行われる由であるが、これもまた犬飼と神社との関係を暗示している。とくに犬飼の名が地名としては

第4章 若干の考察及びまとめ

第88表 『新撰姓氏録』の中の「物部」関連氏族

- 【左京神別上】(天神) 石上朝臣・穂積朝臣・阿刀宿祢・若湯坐宿祢・春米宿祢・小治田宿祢・弓削宿祢・水宿祢・穂積臣・矢田部連・矢集連・物部肩野連・柏原連・依羅連・柴垣連・佐為連・葛野連・登美連・水取連・大貞連・曾祢連・越智直・衣縫造・輕部造・物部・真神田曾祢連・大宅首・猪名部造
- 【右京神別上】(天神) 采女朝臣／(中臣習宜朝臣)・(中臣熊凝朝臣)・巫部宿祢・箭集宿祢・内田臣・長谷置始連・高橋連・水取連・小治田連・依羅連・曾祢連・肩野連・若桜部造・大宅首
- 【山城国神別】(天神) 阿刀宿祢・阿刀連・熊野連・宇治宿祢・佐為宿祢・佐為連・(中臣葛野連)・巫部連・高橋連・宇治山守連・奈突私造・真髮部造・今木連・奈突勝・額田臣・筑紫連・秦忌寸・錦部首・鳥取連・今木連・巨椋連・額田部宿祢・賀茂県主・鴨県主・矢田部・丈部・西泥土部・祝部・税部・具公
- 【大和国神別】(天神) 佐為連・志貴連・真神田首・長谷山直・矢田部・県使首・長谷部造・委文宿祢・田辺宿祢・多米宿祢
- 【摂津国神別】(天神) 若湯坐宿祢・巫部宿祢・田々内臣・阿刀宿祢連・物部韓国連・矢田部造・佐夜部首・小山連・多米連・犬養・目色部真時
- 【河内国神別】(天神) 水連・鳥見連・高屋連・高橋連・宇治部連・物部依羅連・矢田部首・物部・物部飛鳥・積組造・日下部・栗栖連・若湯坐宿祢・勇山連・物部首・津門首
- 【和泉国神別】(天神) 采女臣・韓国連・阿刀連・宇遲部連・巫部連・曾祢連・志貴県主・若桜部造・榎井部・物部・網部・衣縫・高岳首・安幕首／(大伴山前連)／(爪工連)／(掃守首)／物部連・和山守首・和田首・高家首・大庭造・神直・紀直・大村直・川瀬直・直尻家・高野

※下線は「石上(朝臣)同祖」とするもの。[]は「物部」を冠するもの。

残らず、橋の名のみに残っているというのは、橋の機能を考えても、かつて犬飼がそこを守ったという事実のあったことを物語るように思われる…

この部分は「犬養部」と神社との関わりを述べており、上野国一ノ宮である貫前神社が犬養部と関係があったとする。非常に重要な指摘ではあるが、ここには若干の事実誤認があるように思われる。

「大辞典」によれば、北甘楽郡一宮町の小字名に「山下(犬飼、一本松、御田ノ頭、花立)(下線筆者)」という例があり、イヌカイの地名はかつて存在した。のみならず、その実態はやや明瞭さを欠くものの、極近接した位置にミタも存在したのである。

現在地に比定してみると、字「山下」の位置は貫前神社の北東で、高田川によって東側を限られ、神社の丘陵とその北側の舌状台地によって挟まれた、狭い谷地状の地形を呈している(第189図参照)。恐らく、この狭い谷地田がミタになるのであろう。小字「矢田」も、甘楽郡には他にも幾つか認められるが、「山下」の北西に隣接して所在して興味深い。この種のミタは、住吉神社の「御田植え神事」などの例にみるように、本来純粹に神社に付属した水田なのだろうが、しばしばミヤケの耕作地として存在するミタであった可能性も絶無とは言えないのではないかと⁽¹⁵⁾。

そうであれば、ここに確認される「犬飼」もまたミヤケと関係したものという視点で考え直してみる必要がある。今日的に見れば、上野国内でも偏って位置しているように思われる上野一ノ宮は、そのような前提に基づいて設定されたのかもしれない。

更に、参考事例に留まるが、貫前神社を挟んで南側の平地には、富岡市によって調査された大規模な集落遺跡である本宿・郷土遺跡⁽¹⁶⁾が所在する。ここでは、その性格についてなお検討を要するが、石垣積みの周壕に圍繞された古墳時代の豪族館跡が検出されている。従ってこの近辺は、少なくとも古代の鎭川流域地域でも、最も早い段階に組織的で本格的な開発が及んだ地域と理解する事が出来るだろう。

上記のように考えられるならば、鎭川流域では平野部分が展開し始める地点と、谷の出口に当たる地点との、少なくとも二箇所のミヤケが存在していた可能性があることになる。そして、それら結び付ける氏族としての「物部(君)」氏(あるいはその関連氏族)が共に存在した。少なくともこれらの「物部」氏は、「石上」「穂積」などの氏族的な結び付きの存在を意識しながら、中央の「物部」氏との関わりを持っていたように思われるのである。

一方、『播磨国風土記』や中鶴谷遺跡の例に知られるように、田部とオホタとが併存する例がある。これは、現状では幾つかの欠落した要素が存在するが、ミヤケに付属する耕作地がミタであるのに対応して、オホヤケに対応した耕作地がオホタであった。そしてその耕作者が田部という関係である。

上毛野地域で同様な例（ミヤケーミタ・オホヤケーオホタ・タベ等を指標とする）を整理してみると第89表のようになる。

地名としてのオホタには、時期的に後出すると見られる

①「小田」「半田」に対応する「大田」（ダイタ）で面積に關係（1反の3分の2）する場合。

②「他田」がタダと転訛するのに対応する「太田」に關係する場合。

等が認められるようだが、柳久保遺跡や「和名抄」等の例はそうしたものは無関係であろう。①であれば、県内にしばしば見られる「～反田」というような地名の類例に過ぎない事になる。②であれば、知られる史料上での新田郡の郡司が、「他田部君」氏である事に意味が出てくるように思われるが、更に検討を要する。そのような事情によって、一般的な印象の強い地名で比較的広い分布が知られるが、上野国ではやや東部地域に偏る傾向にある。

一方、鎭川流域以外でミタが存在するのは、南勢多郡二之宮村の「見田」である。ここは中鶴谷遺跡の南方2キロメートル程で比較的近接し、「田部井」とも著しく距離を隔てている訳ではない位置になる。やはり赤城神社の神事に関するミタである可能性もあるが、貫前神社・赤城神社のような「官社」の設定は、ミヤケの存在を前提（ある部分を継承）とするような政治的位置と密接に關係していたのかもしれない。

そのように考えることが許されるなら、それが単独なのか複数なのかはなお慎重を期すべきだが、勢多郡地域付近でもミヤケとの関連を窺わせるような地名が、比較的集中して残存していたことが判明すると言えらう。

現存地名が、直接古代の地名に關係しているのかどうかの問題はなお残されているが、可能性のある

という程度で述べるなら次のようになるだろう。オホタとミタとは、概念的には相反するものではないだろうが、実態としては差異があった可能性がある。オホヤケとミヤケとの違いに通じるものがある⁽¹⁸⁾とすれば、この点でも上野国地域内部の東と西との微妙な違いが反映していると思われる。

強いて言えばそれは

①ミヤケーミタ（中央直結）…西部地域≒「物部」關係氏族

②オホヤケーオホタ（在地介在）…東部地域＝？

のように整理出来るかもしれないが、その境界線は他の要素よりも、更に複雑に入り組んでいるものと思われる。関東地方全般では、①よりも②が卓越しているようだが、その意味も各地域の実態に即して考えてみなければならないだろう。

第89表 群馬県下のミヤケ關係地名

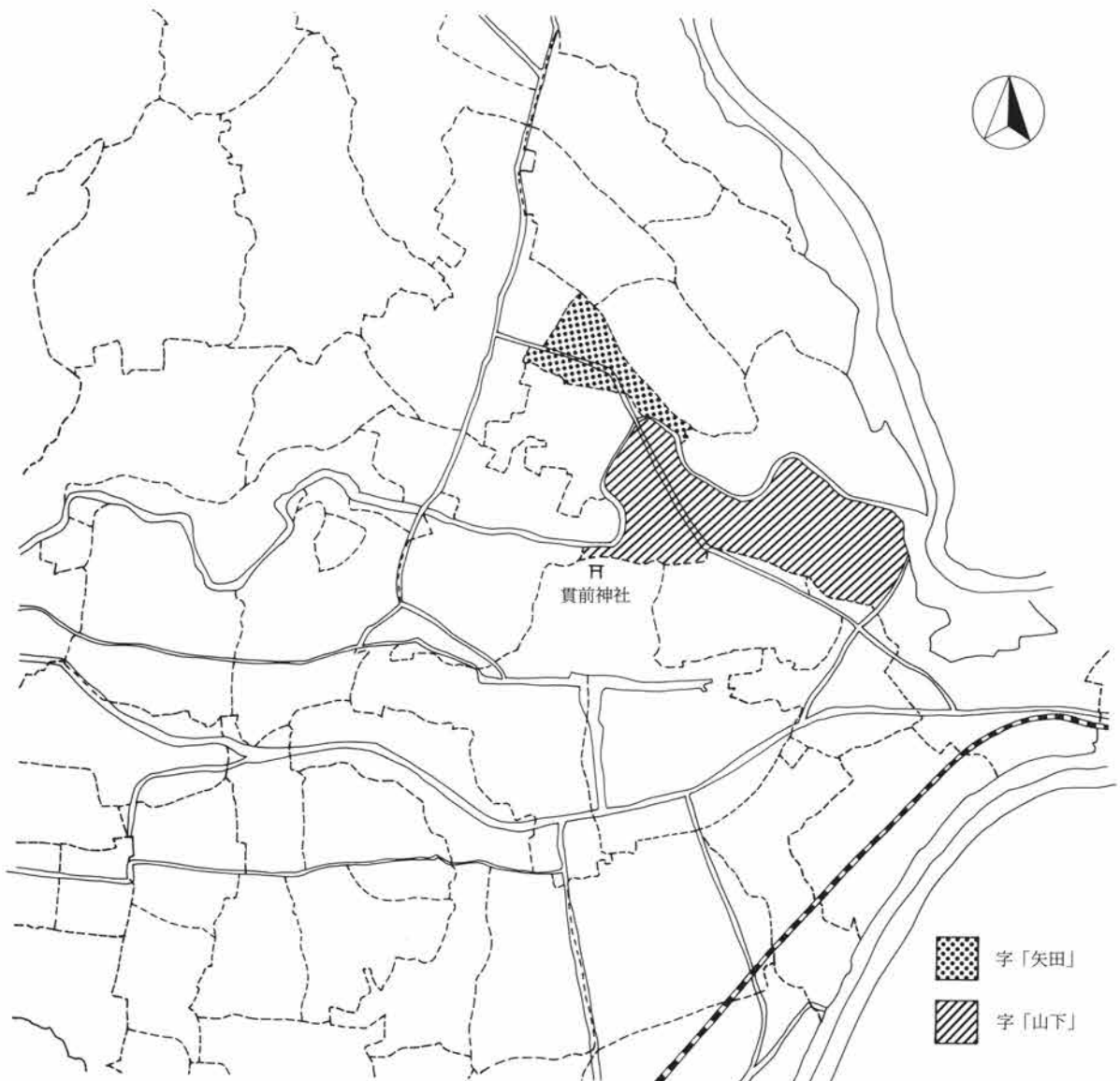
郡名	郷名	旧村名	小字名
吾妻郡	太田		
		厚田村	太田
邑楽郡		岡野村	山神裏（大田）
		川俣村	大田
北勢多郡		生越村	大田発知
北甘楽郡		一宮町	山下（犬飼、一本松、御田ノ頭、花立）
佐位郡		安堀村	西太田上、西太田中、西太田下
		田部井村	
		東小保方村	赤坂（田部井境、車坂）
		太田村	三ツ家
利根郡		太田川村	太田川
多胡郡	大家		
南勢多郡		二之宮村	見田
		小坂子村	大田（大谷地）
山田郡		韭川村	太田…入太田口

※郷名は「和名抄」郷名の略。また、群馬郡群馬町菅谷遺跡で「大宅」の墨書土器が、赤堀村北通遺跡・前橋市中鶴谷遺跡等で「太（大）田」の墨書土器が出土している。

第4章 若干の考察及びまとめ

ともあれ、かつて上毛野地域に設定されていたミヤケは、経営実態の把握はおろか、その実数すら掴みきれないのであるが、様々な情報について常に注意を払っていれば、もう少しその空白が埋められるかもしれない。屢々言われるように、ミヤケがコホリノミヤケ(≒郡家)に改編されてゆくようなものであれば、郡の数に対応する程度には設定されていた可能性もあり、ある種の予断に左右されてこの地域に限っては希少なものであったと考えるべきではないだろう。

古代上野国地域の西半部を規定するふたつの氏族である「物部君」氏と「石上部君」氏について素描を試み、それに関わると考えられる、地域のミヤケについての可能性を探ってみた。特に、様々な面を併せ持つと考えられるミヤケについて、絶対的な情報不足はあるが、十分に論述出来たとは言い難い。「ミヤケとは何か」という研究史に対する基本的理解をさえ欠いたまま行論されがちな、最近の県内の一部の動向を見る度毎に、このことは或る種の危機感を伴ってくる。少なくともこの地域に関しては、遺構・遺物によって得られる情報の具体性に見合うような史料の残存状況をみる事が出来ない。地域の歴史の再構成が、そのこ



第189図 富岡市一宮地区の字名

とを確認した上で出発出来れば、より真実に近い姿として描き出すことが出来るようになるだろう。

現存する地名のようなものを、普遍性のある歴史的資料として位置付けるにはまだまだ距離があり、十分な資料批判の理念なり方法なりが確立しているわけではない。諸賢の懇切なご教示を、切にお願いしたい。

- 注(1) 例えば太田亮『日本上代における社会組織の研究』(磯部甲陽堂、1929年)。また、黛弘道『上毛野国と大和政権』(上毛文庫③、1985年)もこうした理解を示している。
- (2) 『山ノ上碑及び金井沢碑の研究』(『群馬大学教育学部紀要』人文社会科学篇第17-6、1967年。後、『上野三碑の研究』1980年、再取)。また、石川正之助『物部君・磯部君・石上部君—解説の手引書』に関連して—(『群馬県立歴史博物館紀要』9、1988年)も類似した理解を示す。
- (3) 例えば、小山靖憲『東国における領主制と村落—平安〜鎌倉期の上野国新田庄を中心に』(『史潮』94、1966年。後、『中世村落と荘園絵図』東大出版会、1987年に再取)が指摘したように、上野国(新田郡)では「和名抄」郷名の残存率が極めて低く、古代から中世への過渡段階で地域名称の断絶があった。多少の地域差もあるであろうが、一般的にこの地域では、11世紀の地名さえそのような状況であるのに、それ以前の地名がより良好に残存しているなどということは、殆どあり得ないといって差し支えないだろう。
- (4) 『マルコ小考』(群馬県埋蔵文化財調査事業団『埋文月報』103、1989年)、『ヤタおよびヤタ部について』(同事業団『矢田遺跡』1990年、所収)。
- (5) いちいち例示しないが、都丸九十九『(正・統)地名のはなし』(煥乎堂、1987・1989年)に多くの示唆を受けたことを明記しておく。
- (6) 前掲注(4)『ヤタおよびヤタ部について』では、カモ県主系のヤタ氏の起源をかなり新しく考えたが、地名段階の組み合わせだけでさえ伊豆国賀茂郡・佐渡国加茂郡・讃岐国寒川郡などに見られ、精度によってはより多くを確認することが出来そうである。上野国山田郡などの場合もこれに合致するのであろう。この場を借りて訂正しておきたい。
- (7) 上武自動車道関連二之宮洗橋遺跡出土の「芳郷」の墨書土器は、「和名抄」に見える「芳賀」郷の位置が、必ずしも現在の前橋市芳賀町と一致しない可能性を再認識させてくれた。
- (8) 例えば、野田嶺志『物部氏に関する基礎的考察』(『史林』51-2、1968年)。
- (9) 後掲、(参考)参照。
- (10) 寄人については、石母田正『古代家族の形成過程』(『社会経済史学』12-6、1942年)。原島礼二『寄人の史的意義』(『日本古代社会の基礎構造』未来社、1968年、所収)、吉田晶『寄人の歴史的性格』(『日本古代社会構成史論』塙書房、1968年)等。
- (11) 「和名抄」郷名に、「足利郡田部」「梁田郡大田」が見られる。
- (12) 前原豊・関口功一「前橋市中鶴谷遺跡出土の『田部』の墨書のある土器」(『古代文化』42-2)。なお原島礼二氏は、他に群馬郡南部、片岡郡若田郷などについてミヤケ設定の可能性のあることを示唆している(『屯倉の設置時期』『日本古代王権の成立』校倉書房、1977年、所収)。
- (13) 鹿沼栄輔「文字資料について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『長根羽田倉遺跡』1990年)。
- (14) 同氏『律令国家成立史の研究』(吉川弘文館、1982年、所収)。
- (15) かつて、ミヤケが設定されていた時期での祭政の未分化は、当然予想されるところである。例えば、岡田精司『律令的祭祀形態の成立』(『古代王権の祭祀と神話』塙書房、1970年、所収)。
- (16) 富岡市文化財保護協会『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』(1981年)。
- (17) 池田末則「大田・小田・半田・北(段)中」(『奈良県史』14地名、名著出版、1985年)。
- (18) 例えば、吉田孝「ヤケに関する基礎的考察」(『古代史論叢』中、吉川弘文館、1984年、所収)。
- (19) 例えば、蘭田香融「国衙と土豪との政治関係」(『古代の日本』9、角川書店、1971年、後改題して『日本古代財政史の研究』塙書房、1981年、所収)。

(参考)「物部」氏関係研究論文目録抄

- ・川住鎭三郎「伊香色雄命の世数考」(『歴史地理』8-3 1906)
- ・境野黄洋「物部・蘇我二氏及び上宮王家」(『東洋哲学』27-9 1920)
- ・直木孝次郎「石上と榎井」(『続日本紀研究』1-12 1954)
- ・黒田源次「物部氏神攷(上)(中)(下)」(『神道史研究』2-1・2・3 1955)
- ・日野昭「蘇我氏と物部氏との抗争について—日本書紀記載の検討」(『竜谷大学論集』357 1957、後『日本古代氏族の研究』永田昌文堂、1986所収)
- ・鎌田純一「大化以前の物部氏」(『歴史教育』9-4 1961)
- ・笹谷良造「石上考」(『國學院雑誌』62-5 1961)
- ・笹谷良造「物部(もののふ)呪術」(1)~(4)(『大和文化研究』6-7・11、7-8・10 1961~2)
- ・今井啓一「近江国における物部氏族と二つの兵主神社」(『史迹と美術』319 1961)
- ・鎌田純一「古代物部氏とその職掌」(『先代旧事本紀の研究』研究の部 吉川弘文館 1962)
- ・松田章一「古事記における物部伝承の考察」(『金沢大学法文学部論集』文学篇10 1963)
- ・本位田菊士「先代旧事本紀の成立—物部氏研究序説」(『神道史研究』13-2・3 1965)
- ・直木孝次郎「物部連に関する二・三の考察」(『日本書紀研究』第2冊 1966、後『日本古代兵制史の研究』吉川弘文館 1968 所収)
- ・志田諄一「物部氏伝承の成立」(『茨城キリスト教大学紀要』1 1967、後『古代氏族の性格と伝承』雄山閣 1971 所収)
- ・野田嶺志「物部氏に関する基礎的考察—物部氏の成立・展開過程の一試論」(『史林』51-2 1968)
- ・安井良三「物部氏と仏教」(『日本書紀研究』第3冊 1968)
- ・宇野幸雄「物部氏について—ニギハヤヒノミコト降臨説話を中心に—」(『日本民俗社会研究』弘文堂 1969)
- ・池田源太「物部・中臣二氏の居地に依る交友関係の可能性」(『日本書紀研究』第8冊 1975)
- ・横田健一「物部氏始祖伝承の一考察」(『日本書紀研究』第8冊 1975、後『日本古代氏族伝承の研究』塙書房 所収)

第4章 若干の考察及びまとめ

- ・亀井輝一郎「大和川と物部氏」(『日本書紀研究』第9冊 1976)
 - ・本位田菊士「物部氏・物部の基盤についての試論」(『ヒストリア』71、1976、後『日本古代国家形成過程の研究』名著出版 1978 所収)
 - ・畑井弘「物部氏の伝承」吉川弘文館 1977
 - ・古代を考える會「天理市布留遺跡の検討」(『古代を考える』32、1983)
 - ・泉谷康夫「物部氏と宗教」(『日本書紀研究』第16冊 1987)
 - ・亀井輝一郎「祭祀服属儀礼と物部氏」(『古代史論集』上、塙書房、1988)
 - ・榎村寛之「物部の桶を巡って」(『日本書紀研究』第17冊 1990)
- ※「物部」氏について、通史的叙述の中で言及する程度のもは非常に多いので、戦後の専論を中心にリスト・アップした。従って、かなり偏りのあるものであることを予めお断りしておく。

第5節 出土した文字資料（承前）

前報告に引き続き、出土した文字資料を整理してみる。

矢田遺跡で出土した文字資料は、幾つかの非常に重要な事例が目立つために、多量の出土をみているかのような印象を与えているのではないかと思われるが、調査規模などを勘案すればその実数は平均的な集落遺跡の事例を越えるものではなく、集落の生活のなかで成立したものに限定すれば、むしろやや少なめ⁽¹⁾であり、それらについても特定の地点にやや集中して存在する傾向にある。

今回報告に及んだ地点は、そうした意味では文字資料の出土が希薄な場合であり、後世の耕作などの諸要素によって失われたと考えるよりも、本来文字資料を残すような集団によって残された住居跡ではなかったものが大半と考えるべきであろう。その内訳は次のようなものである。

- (1) 墨書土器…………… 3点
- (2) 文字瓦…………… 2点
- (3) 線刻・石製紡錘車… 1点

(1)の3点は、いずれも特異な出土状況は示さなかったが、③を除き遺物取り上げの段階で存在が知られるほど明瞭な墨痕を残していた。①は「加寿」と考えられる文字が体部外面に、②は「成」が体部外面と底部内面とに書かれていた。③については、②と同様体部外面と底部内面とに墨痕が認められ、いずれも同じ文字が記されていると思われるが、残存状況が不良である上に、本来かなり滲んでいたらしく、文字を特定することが出来ない。

これらのうち、体部外面に書かれたものについては、土器の口縁付近を左手に持って、体部の曲面を平らに保ちながら、右手に筆を持って書いた筆者の状態を想像させるものである。

(2)のうち、④は平瓦の凸面にやや大きく窺書きされたもので、「□浄麻□」と読める。本来は、「某浄麻呂」という人名が刻まれていたと思われる。そのように考えて良ければ、古代ではありがちな人名である。また、⑤は丸瓦凸面の広端付近の右側端よりの下部に窺書きされたもので、破損により半分しか残っていないが、残画などから「大」であろう。矢田遺跡の背後の丘陵には、上野国分寺修造に関係した瓦窯跡群が展開しているが、いずれもそこから竈の芯材などに利用する目的で運び込まれたものであろう。記号的な「大」は、上野国分寺などでもしばしば確認されるものであるが、現段階では地名になるか人名になるかは結論を見ていない。⁽²⁾⑤については、広端方向から狭端方向を向いて書かれたもので、下端に近いことから、広端を下にして直立させていたとは考えにくく、乾燥までの工程に製品を凹面を下に伏せた状態で、広端側で作業を行う場合があったことを想像させる。

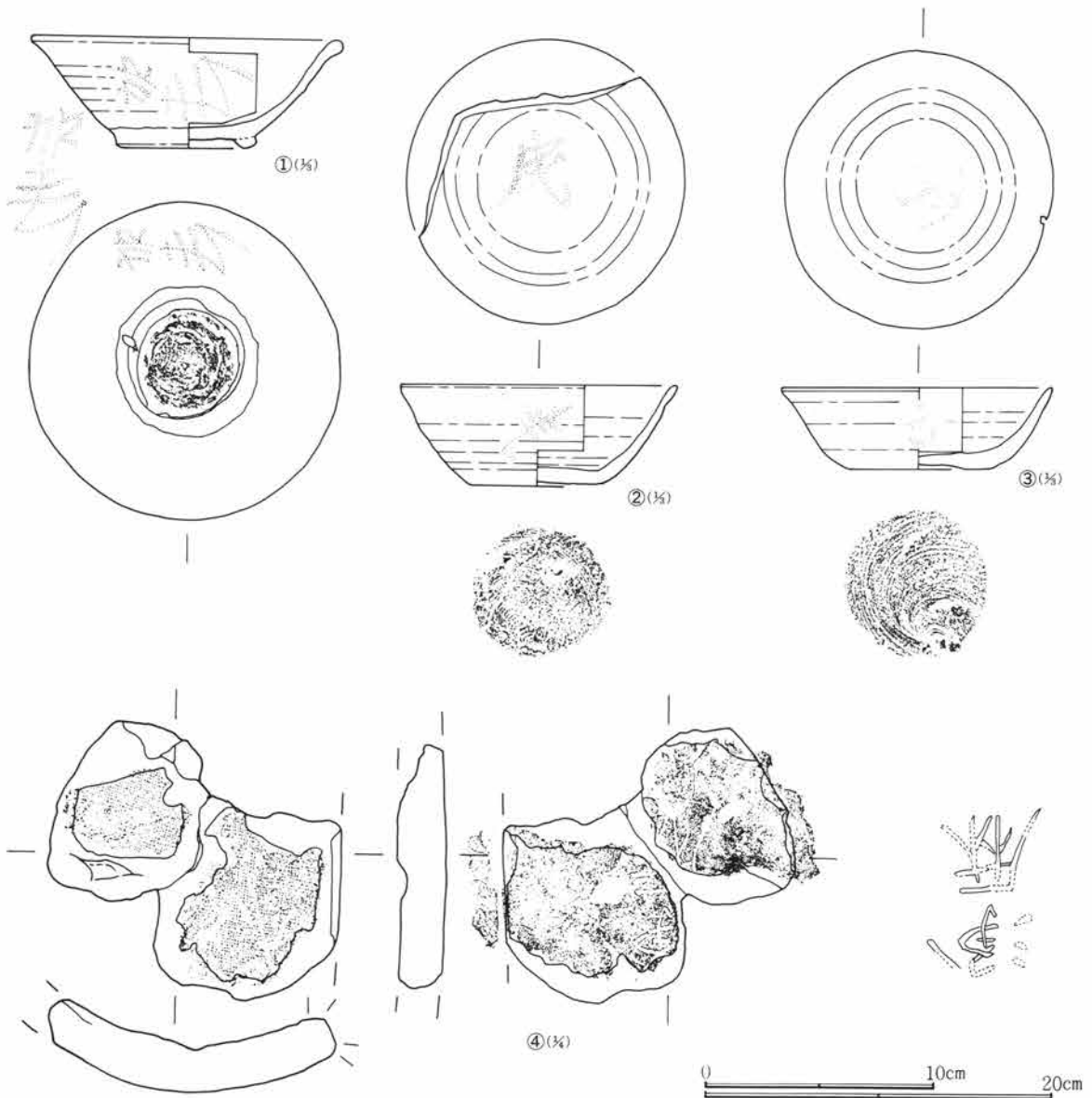
(3)は、これまでも紹介されている「物部郷長」と刻まれたものである。⁽³⁾その歴史的意義などの詳細は、第4章第2節を参照されたい。遺物として見ると、上面・下面とも製作に伴うと見られる擦痕があるが、使用面である上面の使用痕はやや不明瞭である。文字の刻まれた横面にも、斜め方向の製作時の擦痕が数単位あるが、文字の記された部分についてはそうしたものが途切れており、文字が製品の完成以前に刻まれていた可能性がある。

文字は一部破損により欠けているが、「八田郷」の線刻のある石製紡錘車などの例に比較すると、明瞭に深く刻まれており、石材の硬度にもよるが、丈夫な金属器で力強く刻んだと思われる。実験的に、類似した石材に金属器（千枚通し）で文字を刻んでみたが、とても近い状態の文字は出来なかった。また、素材の制約もあるのだろうが、文字は正字とは異なり、それぞれ手慣れた省略が施されて一気に刻まれている。日頃か

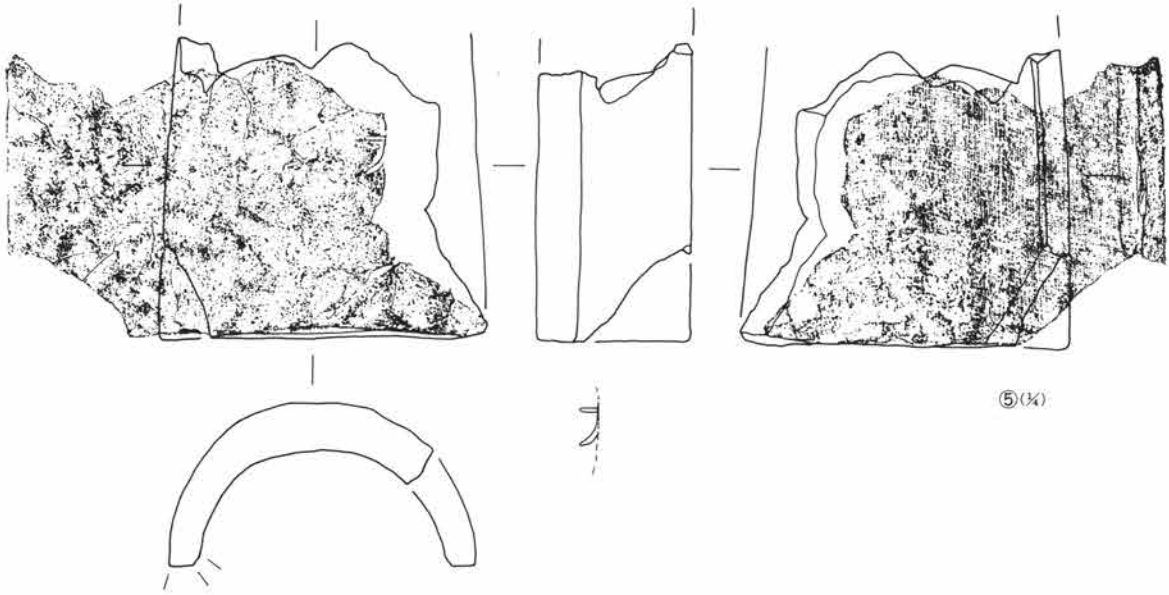
第4章 若干の考察及びまとめ

ら文字に接し、文字に精通したものでなければこのようには出来ないと思われる。横面に刻まれていることについては、墨書土器②・③の場合と同様、左手に持って右手で字を刻む場合、比較的安定した位置を保つことが出来る。

- 注(1) 遺跡単位の偏りだけでなく、地域単位の偏りが認められることは、群馬県史編纂室『群馬県出土の墨書・刻書土器集成』（平成元年3月）の整理によっても明らかであろう。
 (2) 上野国分寺の文字瓦については、前沢和之「史跡上野国分寺出土の文字瓦について」（『日本歴史』454、昭和61年）。
 (3) 例えば、内木真琴・中沢悟・鬼形芳夫「吉井町矢田遺跡出土の文字資料について」（『群馬文化』209、昭和62年1月）。

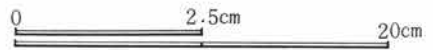


第190図 出土文字資料(1)



物部
長

6 (14)



第191図 出土文字資料(2)

第6節 小 結

昨年度は、報告書作成段階ではなお調査継続中で、不確定な要素を非常に多く抱えたまま論述せざるを得なかったが、今年度は幸いにも本報告書作成中に、遺構の検出があまり期待出来ない一部の未買収地を除いて調査がほぼ終了し、昨年度よりは幾らか恵まれた条件の下で整理作業に従事する事が出来た。但し、整理作業に先立つ基本整理については、遺構・遺物の総量が膨大なものになるため、平安時代の矢田遺跡の集落に限っても、その全体について語ることは困難なものがある。その意味で本報告は、今後多年に亘ると思われる矢田遺跡についての整理事業の中継ぎの一年の成果である以上の何物でもない。

そうした段階では、事実報告の部分は別にして、多くの考察を重ねる条件に恵まれたとは言えないが、これまで地域内部では専門の研究者を欠いて、充分論述される事がなかった古代村落史に関する予察的なものも含め、幾つかの論考を収める事が出来た。御多忙のなかを玉稿をお寄せ頂いた諸先生方に先ず深謝したい。

本報告の最大の目玉は、改めて述べるまでもなく「物部郷長」の線刻のある石製紡錘車であろう。この鎭川流域地域を中心に濃密に分布する奈良・平安時代の「物部」に関する確実な史料を、更に積み重ねる事が出来た。この地域に関しては、「渡来人」が勢力を持っていたという説が、殆ど検討も加えられないままに通用している。学説史という意味で重視しなければならないのは言うまでもないが、そのような説に対して批判的継承の立場を欠いたまま、金科玉条のように信奉するというのは、単なる「権威主義者」と言うべきで、少なくとも科学者の採るべき態度ではないだろう。

整理途上で、遺構・遺物について気付いた事も幾つかある。二・三掲出してみよう。

◎遺構について

①竈の取り付く側の壁が、明らかに一直線に揃わない例がある（198・300・306号住居跡…昨年報告分・337号住居跡等）が、棚状の施設の下部である可能性を示す場合がある（296・357号住居跡参照）。

②二辺を壁に接する貯蔵穴で、もう一方に壁の地山を掘り残す例があり、竈周りの施設の構造が単純ではない事を示している。

③平安期の住居跡は、保存状態や上屋構造も問題だが、一般に煙道が住居外へ長く張り出す傾向にあり、燃焼部も住居の壁の外にある。「袖」も壁に直接付くような形状になっているものが目立つ。稀に住居内部に竈の構造物が所在する場合もあるようだが、注意を要する。

◎遺物について

①10世紀段階になると、羽釜を出土する住居跡はかなり多いが、明らかな使用状態を示す例は稀で、多くは竈を補強する芯材として転用された物である。そうであれば、同一住居跡に帰属する遺物の組み合わせについて、より慎重な操作が必要になるだろう。

②①に関連するが、特に残存状況のやや良好な住居跡について、明らかな床面直上の遺物はともかく、浮いた状態で検出されている遺物や、時期的に不整合のある遺物・転用されている事が明らかな遺物については別途その意味を考える必要がある。

これらの事は、本報告での見落としも多く、既に指摘されている事ばかりだとは思いますが、遺物出土量の多寡等と共に「住居跡」の性格を規定する可能性もあり、考察が加えられるに当たっては充分考慮の上資料の操作を行う必要がある。

幸か不幸か、関越道上越線関連の調査は鎭川流域を縦断して行われており、こうした機会は今後二度とあるとは思われない千載一遇の好機であると思われるので、これら一連の整理に当たっても予断を極力排除し

た形で考察が重ねられるべきである。

注

- (1) 例えば、早川庄八『律令国家』（小学館、1977年）など。
- (2) 関和彦「山村と漁村」（『日本村落史講座』2、雄山閣、1990年所収）の提言はもっと注意されなければならないだろう。

付篇1 矢田遺跡出土土器類の胎土分析

— X線回析試験及び電子顕微鏡観察 —

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は、第90表胎土性状表に示す通りである。

X線回析試験に供する遺物試料は、洗浄し乾燥した後にメノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は、断面を観察出来るように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペー
ストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX
— 8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu、Filter : Ni、Voltage : 40Kv、Current : 30mA、ステップ角度 : 0.02° 、
計数時間 : 0.5SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の割合についての観察は、電子顕微鏡によって行った。
観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真撮影をした。
35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は、第90表胎土性状表に示す通りである。

第90表右側には、X線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には各胎土に対
する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字は、チャートの中に現れる各鉱
物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量と、X線回析試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライ
ト(Cristobalite)等の組成上の組合わせと焼成上の組み合わせによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo—Mo—Hb 三角ダイヤグラム

第192(A)図に示すように、三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎
土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hb、の三成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイヤグラム
はモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回析試験におけるチャートのピーク高
を、パーセント(%)で表示する。

第90表 胎土性状表

*90. 矢田遺跡 (群馬県上越道)

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物										ガラス	備考					
			MO-Mi-Hb	MO-Ch-Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Pyrite	K-fels	Albite	Qt	Pl			Mu	Cr			
矢田-1	B	III	6	10			230	240	197							2462	945		146	中粒	細粒砂、碎屑性粘土
2	D	III	7	11			337	307	455							2110	1184			中粒	細粒砂、碎屑性粘土
3	C	II	6	20			209	348								2118	1081			中～粗粒	粗粒砂、碎屑性粘土
4	E	III	7	20			103	71						198		2235	463			中粒	中粒砂、碎屑性粘土
5	G	II~III	14	20												2646	452	159		中～粗粒	細粒砂、碎屑性粘土
6	F	II~III	8	20			75									1786	525		138	中粒	粗粒砂、碎屑性粘土
7	G	I~II	14	20												2500	299	62	183	粗粒	細粒砂、碎屑性粘土
8	G	I~II	14	20									194	117		2462	106	198	877	粗粒	粗粒砂、碎屑性粘土
9	F	III	8	20			108									1818	630		196	中粒	中粒砂、碎屑性粘土
10	G	I~II	14	20												2364	302	55	141	粗粒	中粒砂、碎屑性粘土
11	F	III	8	20			116									3183	754		121	中粒	細粒砂、碎屑性粘土
12	E	III	7	20			131	81								1961	613		171	中粒	粗粒砂、碎屑性粘土
13	D	III	7	11			131	91	165					246		2393	402		164	中粒	中粒砂、碎屑性粘土
14	F	III	8	20			106									2079	654		143	中粒	細粒砂、碎屑性粘土
15	E	III	7	20			108	79								2294	534		163	中粒	中粒砂、碎屑性粘土
16	A	III	4	20	204		110	74								2333	784			中粒	細粒砂、碎屑性粘土
17	E	III	7	20			114	79								2400	642			中粒	細粒砂、碎屑性粘土
18	D	III	7	11			166	113	226					241		3307	926			中粒	粗粒砂、碎屑性粘土
19	D	III	7	11			425	342	233	98						1630	1926			中粒	粗粒砂、碎屑性粘土
20	E	III	7	20			144	76								2209	841			中粒	粗粒砂、碎屑性粘土

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土:
 Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カ
 Hy: 紫蘇輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリストバーライト Mu: ムライト

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様に $Mi \cdot Hb$ も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo、Mi、Hb、の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分によりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は、第192図(A)に示す通りである。

2) Mo-ch、Mi-Hb菱型ダイアグラム

第192(B)図に示すように、菱型ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥岩(Ch)の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Ch、の2成分が含まれない、c) Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

菱型ダイアグラムは、Mont-Ch・Mica-Hbの組み合わせを表示するものである。Mont-Ch・Mica-Hb、のそれぞれのX線回析試験のチャートの高さを、各々の組み合わせ毎のパーセントで表すもので、例えば $Mo / (Mo + Ch) * 100$ と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し、記載する。

菱型ダイアグラム内にある1~7は、Mo、Mi、Hb、Ch、の4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Ch、のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は、第192図(B)に示す通りである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分は、X線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト(Mullite)は、磁器・陶器などの高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの

5段階に区分した。

- a) 焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストパーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストパーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をしてガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、即ち粘土の良悪によってガラスの生成料は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このためムライト・クリストパーライトなどの組合せと幾分異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第91表の右端の備考に理由を記した。

2-3

タイプ分類は、各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム・菱形ダイヤグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じ筈である。

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大きい文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用して表現した。

例えば、三角ダイヤグラムの1と菱形ダイヤグラムの1の組合せはA、三角ダイヤグラムの2と菱形ダイヤグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3-1 タイプ分類

矢田遺跡出土土器は、第90表胎土性状表に示すように、第193図ダイヤグラム・同菱形ダイヤグラムの位置分類・焼成ランクに基づいてA～Gの7タイプに分類された。最も多く検出されたのはEタイプで、個体数は5個である。これに続くタイプはD・F・Gの3タイプで、いずれも4個体となっている。D～Gの4タイプは個体数に大きな差が無く、平均化しているように見受けられる。このような傾向は、土器を造る胎土が分散傾向にあることを意味し、統一的な原土を採取出来なかったのか、混入した砂の成分に差があったのか、どちらかの影響と推察されるがはっきりしない。雲母類と角閃石とが共存するタイプは結晶片岩系の影響を受けているもので、FとGタイプを除く5タイプはこのタイプである。Gタイプは須恵器を分析したものであり、高温で焼成ランクされた際に、鉱物が分解してガラスに変化したもので、本来の鉱物組成とは異なっている。

電子顕微鏡分析によると、須恵器は粗粒のガラスが生成し、ムライト・クリストパーライトなどの高温で生成した鉱物が検出されており、高温で焼成されていることがわかる。焼成ランクはⅠ～Ⅱと高いのが特徴である。これに対して土師器のガラスは中粒のものが主体となり、焼成ランクはⅢのものが主流である。このように見て来ると、須恵器と土師器においては明らかな焼成温度の差が認められる。

次に各タイプについての特徴を述べる。

Aタイプ…矢田-16

Mont、Mica、Hb の3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。個体数は1個と少ない。このタイプは雲母類と角閃石を含む他のタイプに近いもので、結晶片岩系である。

Bタイプ…矢田-1

Mica、Hb、Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。組成的にはDタイプと同じ傾向を示すが、各鉱物の強度が異なるために位置分類が違っているものである。本来の結晶片岩系のものである。

Cタイプ…矢田-3

Mica、Hb の2成分を含み、Mont、Ch の2成分に欠ける。組成的にはEタイプと類似するが、鉱物の強度に差があり、位置分類が異なっている。このタイプは結晶片岩系の碎屑性粘土としてのタイプと推察される。

Dタイプ…矢田-2、13、18、19

Mica、Hb、Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。個体数は4個と多い。先にも述べたように、Bタイプと類似するので、Dタイプがこの組成では主流となるものである。

Eタイプ…矢田-4、12、15、17、20

Mica、Hb の2成分を含み、Mont、Ch の2成分に欠ける。個体数は5個と最も多い。Bタイプはこのタイプに類似するものである。

Fタイプ…矢田-6、9、11、14

第91表 胎土分析資料一覧

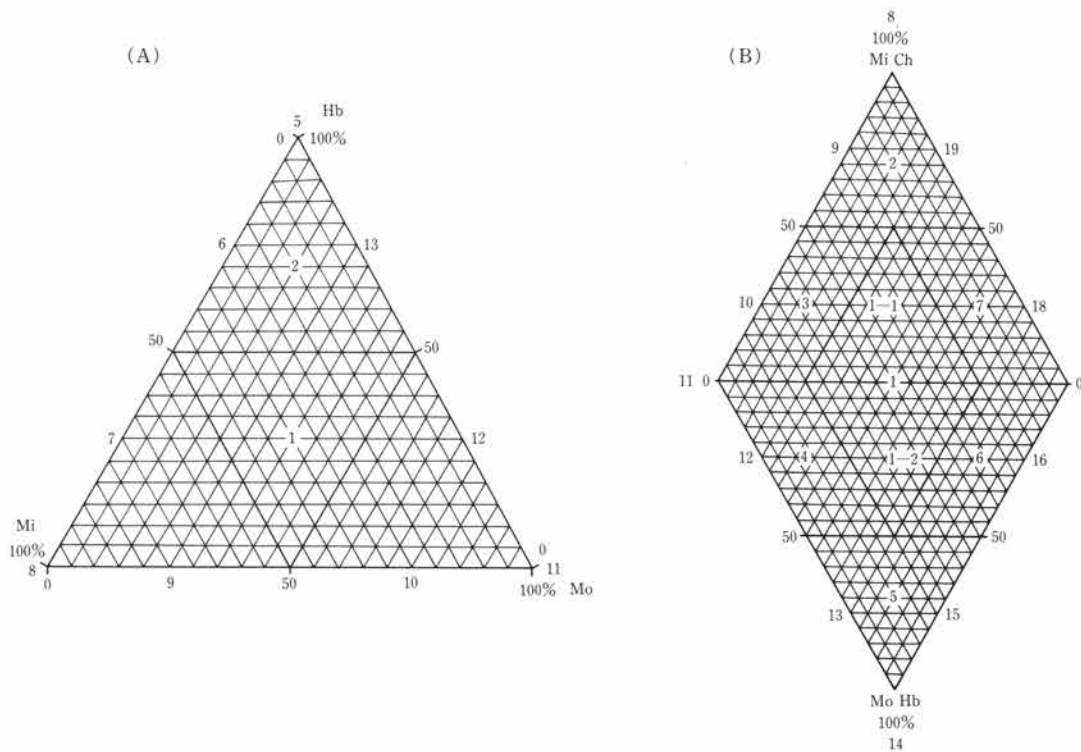
№	器種	出土地点	所属時期	備考
1	土師器甕	287号住居跡	平安(9C後半)	コ字状口縁
2	土師器甕	297号住居跡	平安(9C後半)	〃
3	土師器坏	406号住居跡	平安(9C後半)	手持ちヘラ削り
4	須恵器(酸化焰)埴	130号住居跡	平安(10C前半)	内面黒色処理
5	須恵器甕	4号住居跡	平安(10C前半)	
6	須恵器羽釜	407号住居跡	平安(10C前半)	
7	須恵器埴	3号住居跡	平安(9C後半)	
8	須恵器蓋	355号住居跡	平安(9C前半)	
9	平瓦	240号住居跡	平安(10C前半)	竈構築材カ
10	平瓦	3号住居跡	平安(9C後半)	〃
11	須恵器(酸化焰)小皿	130号住居跡	平安(10C前半)	試料4と同じ住居跡出土
12	〃	〃	〃	〃
13	〃	〃	〃	〃
14	〃	〃	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃
16	須恵器(酸化焰)埴	〃	〃	〃
17	〃	〃	〃	〃
18	〃	85号住居跡	〃	〃
19	〃	211号住居跡	平安(10C後半)	内面磨き
20	〃	296号住居跡	平安(9C後半)	内面黒色処理・磨き

Mica 1成分を含み、Mont、Hb、Ch の3成分に欠ける。個体数は4個である。この組成は結晶片岩系の影響をあまり受けていないタイプのものであり、矢田遺跡においては特殊な組成をしているように見受けられる。

Gタイプ…矢田-5、7、8、10 Mont、Mica、Hb、Ch の4成分に欠ける。個体数は4個である。矢田-5、7、8は須恵器であり、10は平瓦である。こ

れらは高温で焼成されているため、各鉱物が分解してガラスに変化したもので、本来の組成を示しているものではない。

分析結果によれば、A～Eの5タイプは雲母類と角閃石を含む結晶片岩系であるが、Fタイプはこれらの



第192図 三角 (A)・菱形 (B) ダイアグラム位置図

タイプとは異なるものである。Gタイプは、本来の組成鉱物が高温焼成によって分解し、ガラスに変化したものである。この様に見てくると、矢田遺跡出土土器の胎土は結晶片岩系の影響を受けていることが特徴と言えよう。

3-2 石英 (Q t) - 斜長石 (P I) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の、粘土に対する混合比は、粘土の材質・土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは、個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は、個々の石英と斜長石の比を有している。この比は、後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば各地域における砂は、各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂を、どの程度粘土中に混入するかは、前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

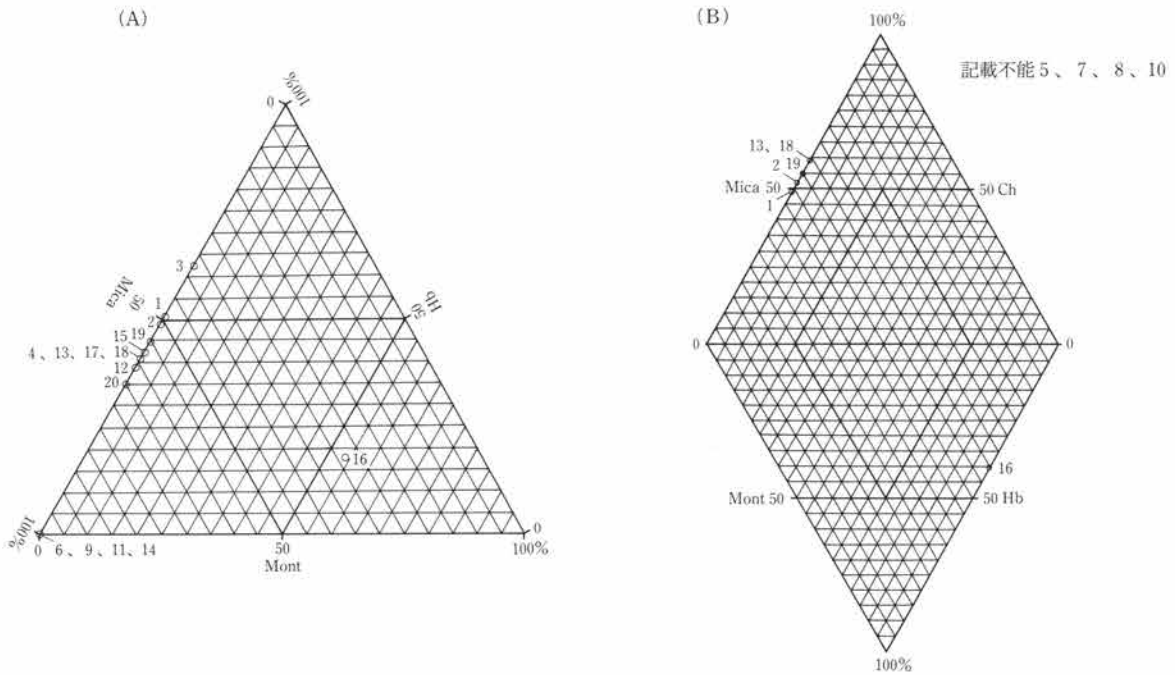
矢田遺跡出土土器は、第194図Q t - P I相関図 (石英-斜長石相関図) に示すように、I~Vの5つのグループと“その他”に分類された。

Iグループ…矢田-2、3

石英は1600~2600、斜長石は1050~1200の範囲にあり、個体数は2個である。斜長石の強度が高いのが特徴である。この2個は、土師器の甕と坏で構成される。

IIグループ…矢田-1、16、20

石英は2000~3000、斜長石は800~950の範囲にあり、個体数は3個である。土師器の甕と須恵器 (酸化焰焼成…以下酸化焰と略す) 碗2個が共存している。



第193図 (A)Mo、Mi、Hb 三角ダイヤグラム・(B)Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

IIIグループ…矢田-6、9、12、14、15、17

石英は1600~2600、斜長石は550~700の範囲にあり、個体数は6個と最も多い。矢田-6と15は、このグループに入るのかIVグループに入るのか微妙なところであるが、土器胎土のタイプ分類でE・Fに分類されたものがIIIグループに集まることから判断してこのグループに入れた。このグループに属する土器は、E・Fタイプの2タイプで構成され、須恵器（酸化焰）4個と羽釜と平瓦とが共存している。

IVグループ…矢田-4、5、13

石英は1800~2900、斜長石は400~550の範囲にあり、個体数は3個である。須恵器（酸化焰）と須恵器が共存する。矢田-5は、焼成ランクがII~IIIと須恵器としては低く、斜長石の分会に迄至っていないものと推察され、このため斜長石の高い強度が検出されたものではなかろうか。

Vグループ…矢田-7、10

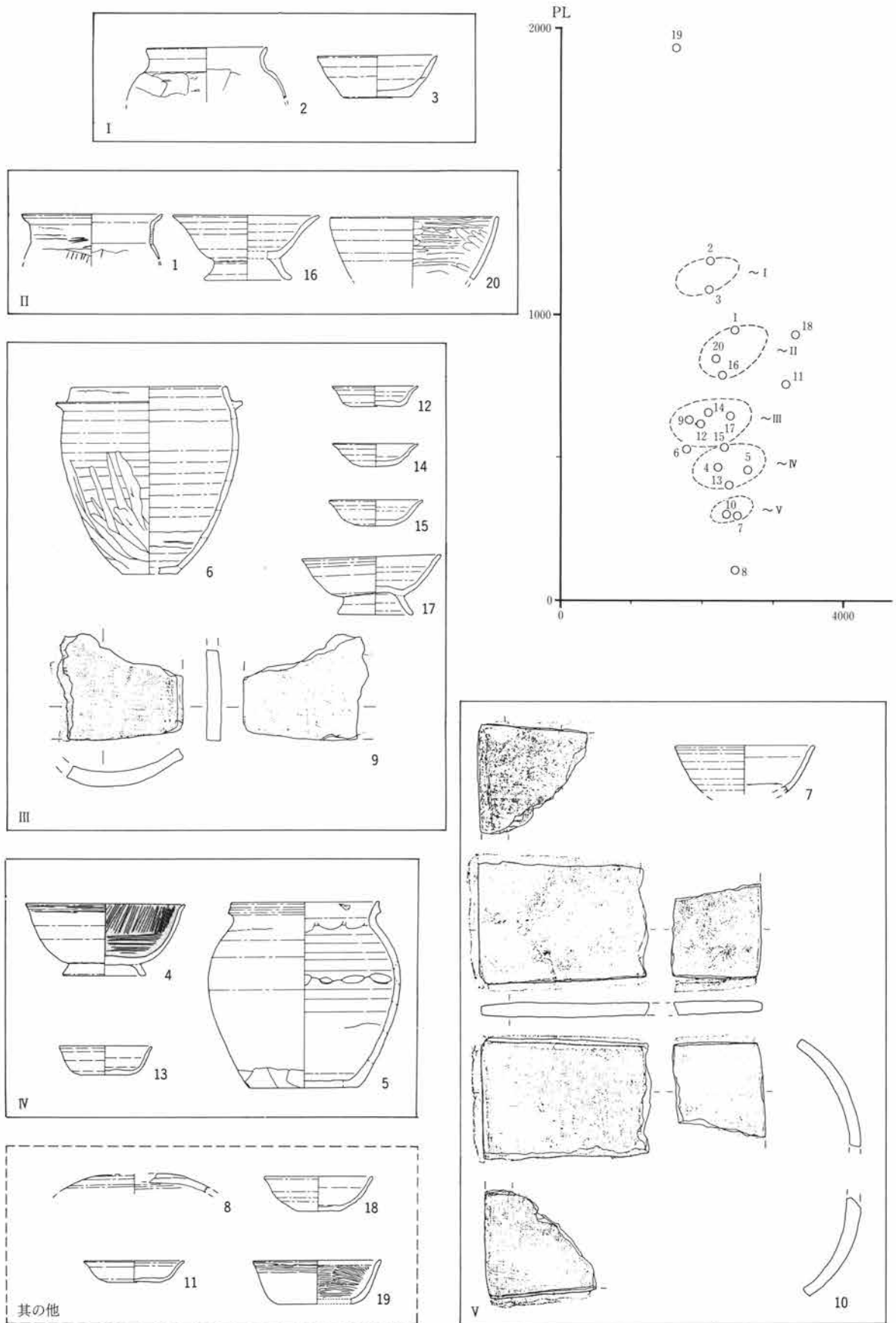
石英は2200~2600、斜長石は250~350の範囲にあり、個体数は2個である。須恵器の塊と平瓦で構成されるグループで、共にGタイプ、焼成ランクはI~IIと高く、共通性がある。

その他、…矢田-8、11、18、19

矢田-8は須恵器の坏で、ムライト・クリストバーライトの強度が高く、斜長石が分解しているため、矢田-7の下にきている。この様に見てくると、矢田-7と8は類似性が高いと推察される。矢田-11と18は須恵器（酸化焰）で、石英の強度は類似し、比較的近い所に位置することから判断して、一つのグループをつくる可能性がある。矢田-19は斜長石の強度が他と比較して異常に高く、異質である。

以上の結果より判断すれば次のようになる。

付篇1 矢田遺跡出土土器類の胎土分析



第194図 Qt-PI 相関図

矢田-5、7、8の3個は須恵器である。石英の強度は同じであるが、斜長石の強度が順次下がっている。この下がりの傾向には特徴がある。高いものから並べると、矢田-5は甕・7は壺・8は坏となり、器種が小型になるほど斜長石の強度が下がってくるのがわかる。同じ窯において焼成した場合には、温度が同一条件としたならば、薄い物ほど火の通りが良く、ガラス化が進むものと推察され、斜長石の減少傾向と一致するように思える。

矢田-9、10の2個は平瓦であるが、矢田-9は焼成温度が低く、須恵器（酸化焰）と共存しているが、10は焼成温度が高く、須恵器と共存し、タイプが異なっているように思える。

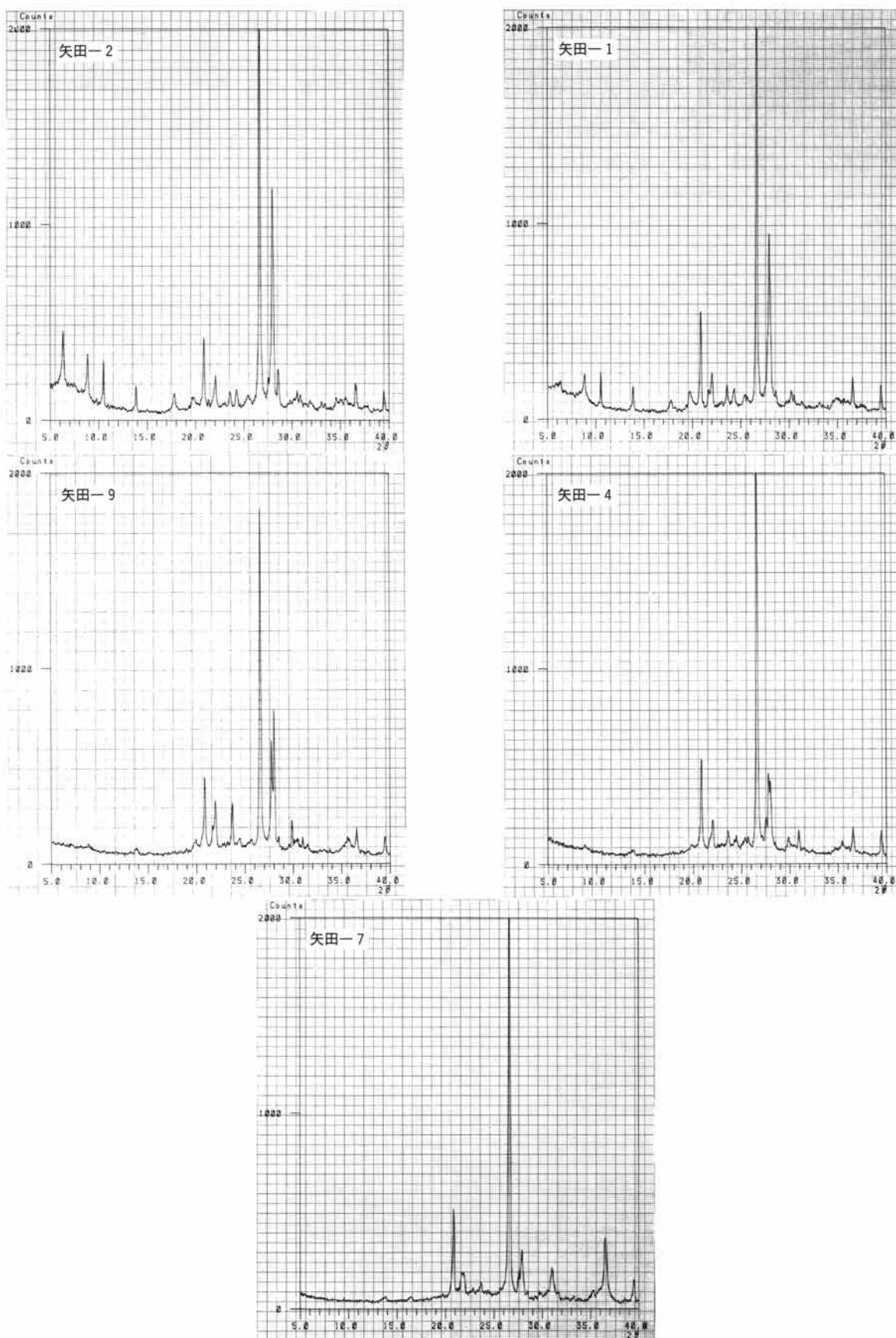
土師器と須恵器（酸化焰）は4つのグループに分かれて分布し、石英の強度は似ているが、斜長石の強度に差がある。斜長石は、本来風化に弱く、上流より下流に行くに従って、また時代が古くなるに従って減少する傾向にあり、このことから推察すれば、斜長石の強度が高いグループは、低いグループと比較して上流にあるのではなかろうか。

“その他”の内、矢田-11と18は須恵器（酸化焰）であり、一つのグループを作るものかもしれないがはっきりしない。矢田-19は斜長石の強度が異常に高く、他のものと比較して異質である。

4 まとめ

- I) 土器胎土の分析では、胎土はA～Gの7タイプに分類された。雲母類と角閃石を含むA～Eの5タイプは結晶片岩系との関わりが深いと推察された。Fタイプは雲母類だけで構成されるもので、前記のものと比較して異質である。Gタイプは須恵器（酸化焰）の胎土で、高温で焼成されたために4成分(Mont、Hb、Mica、Ch)は分解し、ガラス化しているものである。
- II) 電子顕微鏡による分類では須恵器は粗粒のガラスが生成し、焼成ランクはI～IIと高い。土師器及び須恵器（酸化焰）は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはII～IIIあるいはIIIと幾分低い。
- III) 石英と斜長石の相関では、I～Vの5グループと“その他”に分類された。須恵器は器種の大きいものほど斜長石の強度が高くなる傾向が認められた。土師器及び須恵器（酸化焰）はI～IVの4つのグループに分かれ、石英の強度は類似するが、斜長石の強度は高いものから低いものへと変化している。斜長石は風化に対する抵抗力が幾分低く、上流から下流に向かって減少する傾向がある。このことから推察して、斜長石の強度が高いものほど上流で作られている可能性があるかと推察された。“その他”のものの中で、矢田-19は斜長石の強度が異常に高く、他のものと比較して異質である。

付篇1 矢田遺跡出土土器類の胎土分析



第195図 X線回析図型

付篇2 矢田遺跡出土の石材の鑑定結果について

陣内主一・菊池 実・関口功一

1 矢田遺跡出土の石器類とその石材

今回報告に及んだ石器類について、一部の混入品を除いては、その所属が平安時代という事で、種類が限られている上に、明らかな加工痕・使用痕を残す物の比率も低い(約15パーセント)。その大半が薦編石状の片岩類(78パーセント)で、自然石との分別はかなり難しい。殆ど自然石のものでも住居跡から出土している事が、唯一居住者の使用の可能性を残す根拠である。

薦編石状の石材を除いた石器類の中で最も多いのは砥石だが、定形化したものは少なく、砂岩で明瞭な使用痕を残すものの、自然面も多く残ったゴツゴツした感じの物も半数以上を占める。定形化した物は、かなり摩滅する迄使用しており、軟弱な石材で刃試しに傷を付けた物の存在と相俟って、金属製品の普及と使用を想像させる。材質では火成岩・堆積岩に偏り、主として前者は中砥、後者は荒砥として利用されたと思われる。

次いで紡錘車(未製品を含む)が多く、今回対象範囲ではほぼ10軒に1個の割合で出土している。近隣で採集可能な石材を使用した未製品が数点ある事により、工作途上の石屑等は明瞭に確認されていないが、少なくとも平安時代には、独占的に工房を所有する村落から供給を受けていると見るよりも、村落内部で自給する方向にあったと考える方が良いでしょう。周知の事であろうが、材質では滑石片岩に強い偏りがあり、例外的に砂岩等の物もある。

以上の他に、縄文時代の敲石・凹石・石斧、古墳時代の石製模造品等の、住居跡の時期に合致しない混入品と見られる物が数点ずつある。

2 石材の特徴とその産地・採取地

上記の石材を成因別に分類すると、I火成岩・II堆積岩・III変成岩のように大別出来る。以下この順序に従って産地・採取地について説明してみたい。

I 火成岩

閃緑岩(標本1)…深成岩で、黒味の多い角閃石の細かい結晶が見える暗緑色の岩石である。野上川及び下仁田付近に分布する。鑄川の転石を採取したものと思われる。

流紋岩(標本2)…虎のような斑がある物は虎砥とも言われ、砥石(中砥)として刃物の研磨にとっては貴重な石材である。南牧川の上流に分布する。交易による流入が想定出来るかもしれない。

安山岩(標本3)…輝石安山岩・両輝石安山岩等種類が多く、鑄川の散在する灰色石基の目立つものがある。鑄川・南牧川上流の火成岩地帯に分布する。鑄川の転石を採取したものと思われる。

石英粗面岩…安山岩と同じ火山岩であるが、石英・長石を多く含有し、全体に白っぽく見える物である。産地・採取地は前者と同様である。

軽石…榛名山二ツ岳を供給源とする降下軽石とみられる。鑄川流域には分布せず、他地域からの搬入品と考えられる。

II 堆積岩

砂岩(標本4)…新生代第三紀層の産で種類も多いが、花崗質の牛伏砂岩(俗に多胡石)が該当する。

付篇2 矢田遺跡出土の石材の鑑定結果について

牛伏山付近からの西谷川・矢田川等によって流出した転石を採集したものと思われる。

凝灰岩（標本5）…第三紀層の堆積岩類で、火山灰の堆積したものである。鑄川中流域に露頭が所々見られる。

泥岩（標本6）…第三紀層のもので、粘土の固結した物である。採集地は前者と同様である。

チャート（標本7）…古生代の堆積岩類で、灰色・赤色・白色を呈し、非常に硬質である。鑄川の河岸段丘礫層中にもしばしば見いだされる。採集地は前者と同様である。

硬砂岩（標本8）…古生代の堆積岩で、非常に堅緻である。風化が進行していると、外見が安山岩に似ている。但し、安山岩の造岩鉱物は結晶形であるが、硬砂岩のものは細円形粒状であるところが異なる点である。採集地は前者と同様である。

放散虫板岩（標本9）…放散虫等を多く混在する放散虫軟泥等が固結した板状の岩石で、赤紫色を呈するが、肉眼では化石の様子はわからない。採集地は前者と同様である。

III 変成岩

熱変成岩（標本10）…当地域では、中世代の地層に花崗岩・閃緑岩等の岩漿が貫入してホルンヘルス化したもので、珪質化して硬度を加えている。周辺の中世代の地層としては南蛇井層がある。下仁田町東部・川井山南西麓等に分布し、矢田遺跡付近では鑄川の転石を採集したものと思われる。

千枚岩（標本11）…粘板岩と結晶片岩の中間的な低変成度変成のもので、板状の片理構造がよく発達している。産地・採集地は前者と同様である。

輝岩（標本12）…火成岩を源岩とする変成度の低い緑色変成岩で、片理の発達がそれほど顕著でない岩石である。産地・採集地は前者と同様である。

石墨絹雲母片岩（標本13）…絹雲母片岩に石墨が僅かに混入する。鑄川流域では雄川中流域・下川上流域に分布し、矢田遺跡付近では牛伏山の南方に分布が見られる。鑄川の転石の他、矢田川・西谷川などの小川からも採集してきている可能性がある。

絹雲母石墨片岩（標本14）…石墨片岩に絹雲母の混入が見られる。産地・採集地は前者と同様である。

点紋絹雲母石墨片岩（標本15）…絹雲母石墨片岩に曹長石の点紋を持つ。産地・採集地は前者と同様である。

脆雲母石墨片岩（標本16）…石墨片岩に僅かに脆雲母を含む。産地・採集地は前者と同様である。

紅簾絹雲母石墨片岩（標本17）…絹雲母石墨片岩に紅簾石を僅かに含む。産地・採集地は前者と同様である。

緑泥片岩（標本18）…凝灰質岩で中程度の変成作用を受けた岩石である。緑泥石が石英の石基に混在する緑色で片理構造が良く発達し、板状を呈するのでしばしば板石塔婆等に活用される。産地・採集地は前者と同様である。

点紋緑泥片岩（標本19）…緑泥片岩に曹長石の点紋を混在する。産地・採集地は前者と同様である。

絹雲母緑泥片岩（標本20）…緑泥片岩に僅かに絹絲光沢の絹雲母を含む。産地・採集地は前者と同様である。

石墨緑泥片岩（標本21）…緑泥片岩に僅かに石墨を混入する。産地・採集地は前者と同様である。

緑簾緑泥片岩（標本22）…緑泥片岩に緑簾石が混在する。産地・採集地は前者と同様である。

絹雲母石墨緑泥片岩（標本23）…石墨緑泥片岩に絹雲母を僅かに含む。産地・採集地は前者と同様である。

滑石片岩（標本24）…蛇紋岩が中程度変成作用を受けたもので、片理構造を持つ。非常に柔らかく、爪でも傷が付く最も硬度の低い岩石である。白色ないし淡褐色で、蠟のような脂感があり真珠光沢がある。甘楽町河振付近に産地があった。

集落内部への石材の搬入は、特定器種の特定石材への偏り等を考慮すれば、工人集団の存在を前提とし、

特定の流通経路に則って、ある程度組織立って行われた可能性もある。しかし、今回取り上げた石器類の内、一部の砥石・紡錘車を除いた、小型・軽量で造作を伴わないような物は、手近な場所で必要に応じて採集・加工され、随時持ち込まれたと考えるべきであろう。

なお、以上については陣内主一「田篠中原遺跡でみられる石材の種類と地質的関連」(〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団『田篠中原遺跡』1990年)の記述に準拠している。

第92表 石器類一覧

石材の名称	総数	内 訳
火成岩	17	
閃緑岩	2	367住1個、377住1個
安山岩	7	4住1個、211住1個、293住擦石1個・293住2個、372住砥石1個、386住砥石1個
流紋岩	5	1住砥石1個、124住紡錘車1個、218住砥石1個、364住砥石1個、410住砥石1個
石英粗面岩	1	125住敲石1個
(降下)軽石	2	293住擦石1個、355住敲石1個
堆積岩	19	
硬砂岩	1	3住1個
砂岩	12	1住砥石1個、4住砥石1個、21住1個、23住砥石1個、125住砥石1個、163住凹石1個、292住紡錘車1個、320住1個、354住砥石1個、355住敲石1個、356住紡錘車1個、372住敲石1個
凝灰岩	3	211住1個、219住1個、339住砥石1個
放射虫板岩	1	294住1個
チャート	1	163住1個
(凝灰質)泥岩	1	21住砥石1個
変成岩	173	
B. 石墨片岩類	92	
絹雲母石墨片岩	52	3住2個、12住2個、16住1個、21住5個、23住1個、109住2個、118住3個、124住2個、125住1個、132住1個、158住1個、163住1個、211住1個、216住1個、218住1個、219住6個、240住1個、249住1個、292住1個、297住1個、320住1個、337住1個、340住1個、355住1個、367住1個、372住3個、386住4個、406住1個、410住1個、418住4個
点紋絹雲母石墨片岩	36	12住2個、21住3個、23住1個、109住1個、118住1個、124住2個、126住1個、158住2個、184住2個、209住1個、211住1個、212住1個、296住1個、337住2個、354住1個、364住1個、372住4個、377住4個、391住2個、410住1個、418住1個
脆雲母石墨片岩	2	3住1個、212住1個
紅簾絹雲母石墨片岩	2	130住1個、184住1個
A. 緑泥片岩類	64	
緑泥片岩	15	23住1個、124住1個、126住1個、219住2個、296住1個、354住5個、355住1個、364住紡錘車(末)1個、372住2個
点紋緑泥片岩	17	3住2個、16住1個、21住1個、115住1個、163住2個、209住1個、211住1個、216住1個、297住1個、356住1個、372住3個、386住1個、418住1個
絹雲母緑泥片岩	3	130住1個、158住1個、337住1個
石墨緑泥片岩	15	21住1個、23住1個、130住1個、218住1個、297住2個、298住1個、355住1個、367住1個、372住2個、374住1個、406住1個、410住1個、415住1個
緑簾緑泥片岩	13	16住1個、125住1個、211住2個、292住1個、296住1個、297住1個、354住1個、355住1個、356住1個、372住1個、377住1個、386住1個
絹雲母石墨緑泥片岩	1	297住1個
C. その他の片岩類	11	
石墨絹雲母片岩	5	12住1個、16住1個、354住2個、372住1個
滑石片岩	6	12住紡錘車1個、23住紡錘車1個、158住紡錘車1個、293住紡錘車1個、297住1個、355住石製製造品1個
千枚岩	1	12住紡錘車(末)1個
輝(緑)岩	5	16住石製品1個、132住1個、339住1個、372住1個、379住敲石1個
熱変成岩	5	1住石斧1個、21住砥石1個、355住1個、410住1個、415住1個
総 計	214	

※下線は明らかな製品を示し、種別を明示しない物は薦編石状の石材を表す。



標本1



標本2



標本3



標本4



標本5



標本6



標本7



標本8



標本9



標本10



標本11



標本12



標本13



標本14



標本15



標本16



標本17



標本18



標本19



標本20



標本21



標本22



標本23

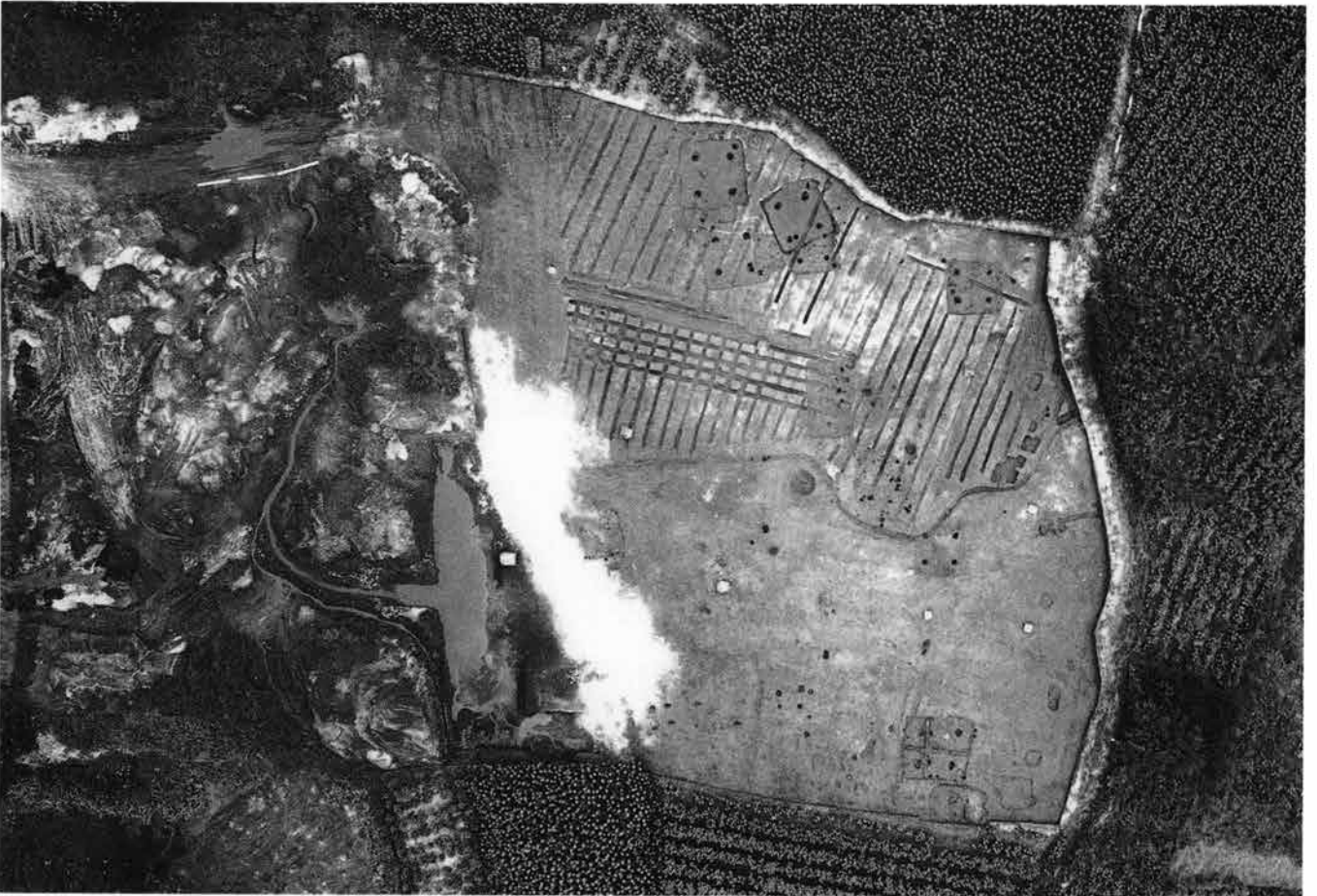


標本24

写 真 图 版



第1次調査区空中写真



第2次調査区空中写真



第3次調査区空中写真



1号住居跡全景 (西から)



1号住居跡掘り方全景 (西から)



1号住居跡床下土壌 (南から)



1号住居跡竈掘り方 (西から)



3号住居跡全景（西から）



3号住居跡遺物出土状況（南から）



4号住居跡遺物出土状況全景（西から）



4号住居跡竈（西から）



4号住居跡竈（南から）



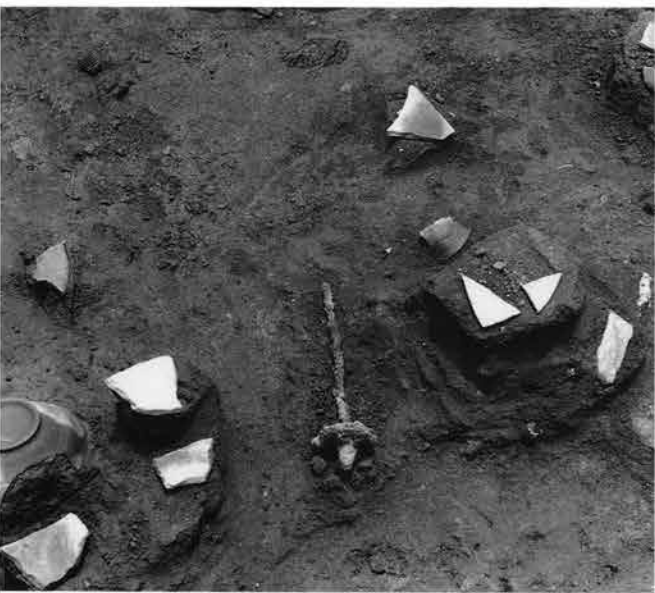
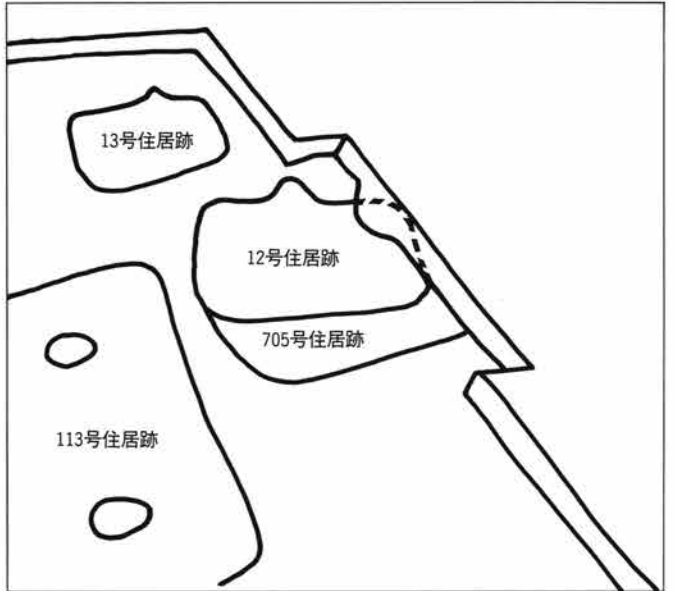
4号住居跡竈支脚検出状況（西から）



4号住居跡遺物出土状況（西から）



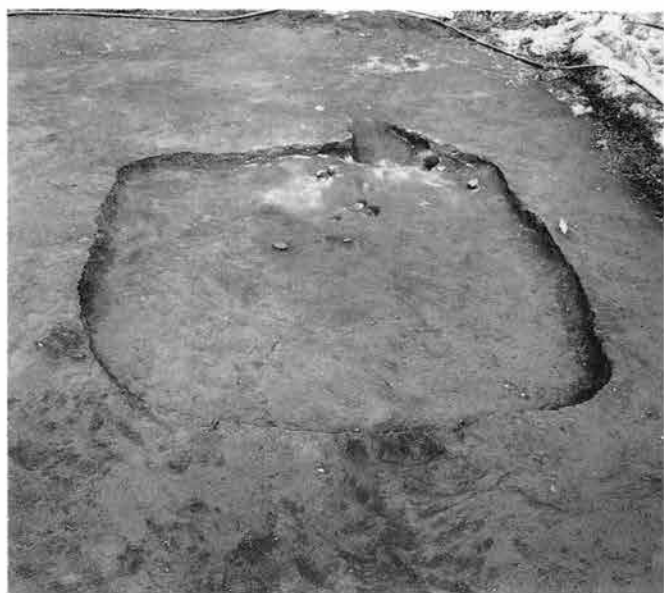
12号住居跡全景（西から）



12号住居跡遺物出土状況（西から）



12号住居跡「物部郷長」紡錘車出土状況



13号住居跡全景（西から）



16号住居跡全景（西から）



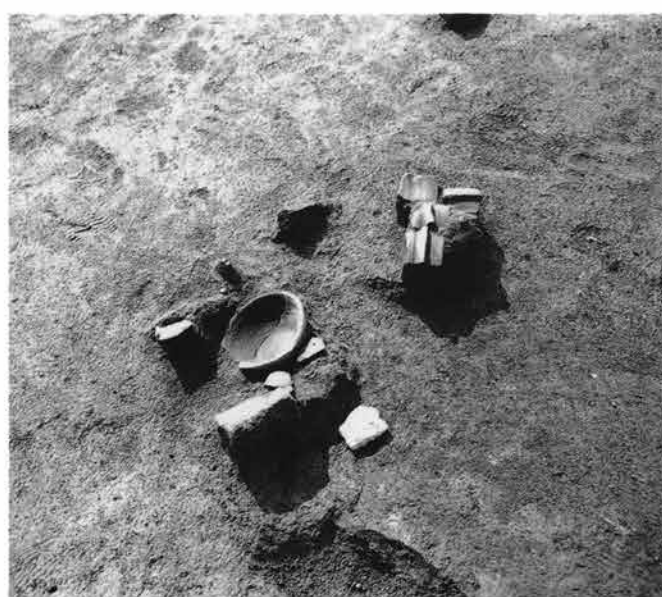
16号住居跡竈（西から）



16号住居跡掘り方全景（西から）



21号住居跡全景（西から）



21号住居跡遺物出土状況（北から）



23号住居跡全景（西から）



23号住居跡竈付近（西から）



85号住居跡全景（西から）



85号住居跡竈（西から）



99号住居跡全景（西から）



99号住居跡掘り方全景（西から）



109号住居跡全景（西から）



109号住居跡竈（西から）



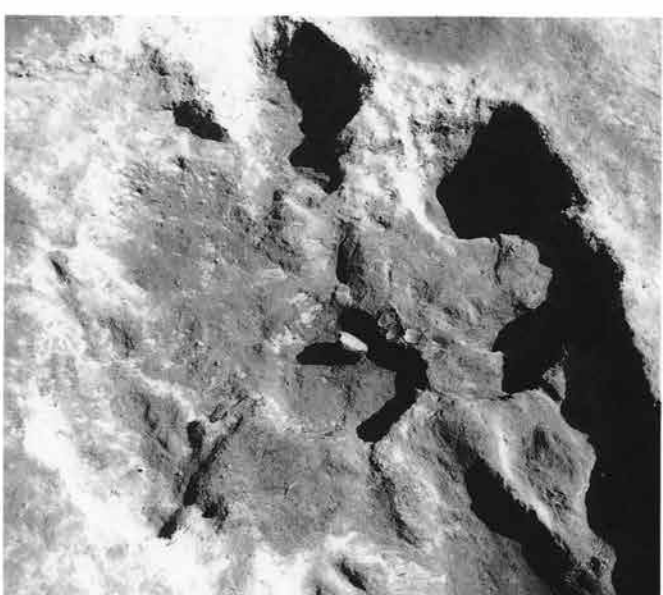
109号住居跡掘り方全景（西から）



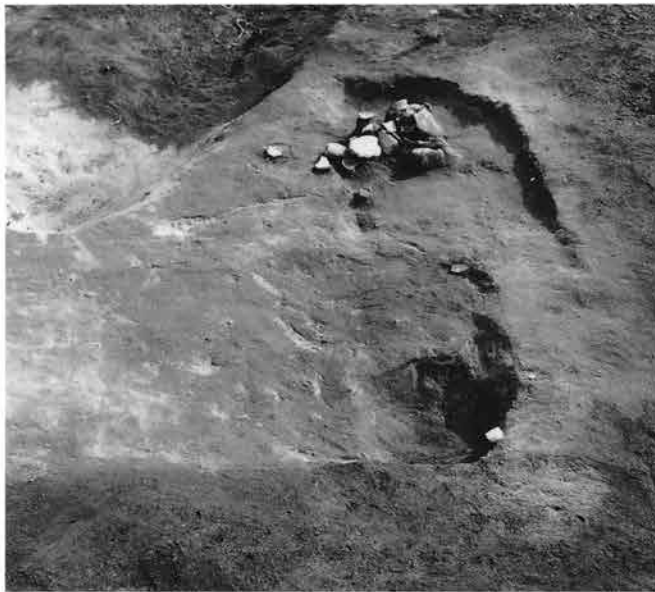
113号住居跡全景（西から）



113号住居跡竈（西から）



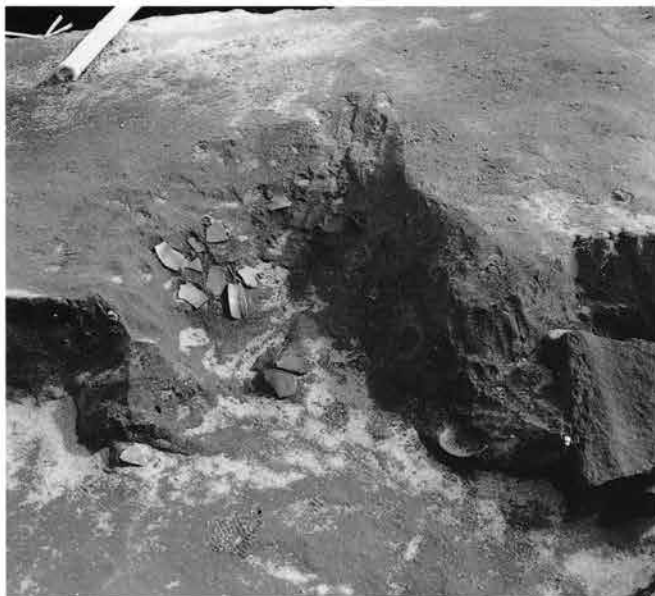
113号住居跡掘り方全景（西から）



115号住居跡全景（西から）



118号住居跡全景（西から）



118号住居跡竈（西から）



118号住居跡貯蔵穴付近（西から）



118号住居跡掘り方全景（西から）



124号住居跡（西から）



125号住居跡全景（西から）



125号住居跡竈（西から）



125号住居跡貯蔵穴セクション（北から）



125号住居跡掘り方全景（西から）



126号住居跡全景（西から）



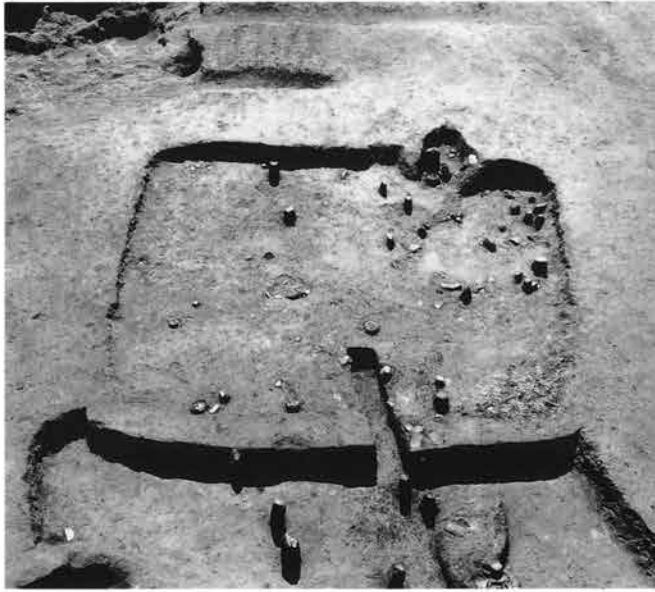
126号住居跡竈（西から）



126号住居跡貯蔵穴（東から）



126号住居跡掘り方全景（西から）



130号住居跡全景（西から）



130号住居跡竈（西から）



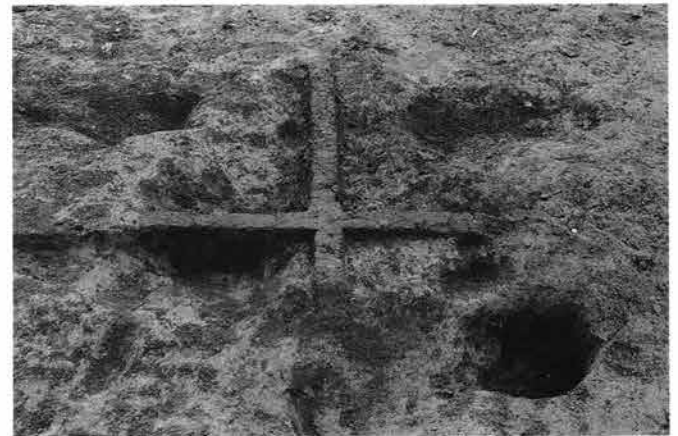
130号住居跡貯蔵穴（西から）



130号住居跡掘り方全景（西から）



132号住居跡セクション（南から）



132号住居跡竈セクション（西から）



132号住居跡掘り方全景（西から）



146号住居跡全景（南から）



146号住居跡竈（南から）



146号住居跡掘り方全景（南から）



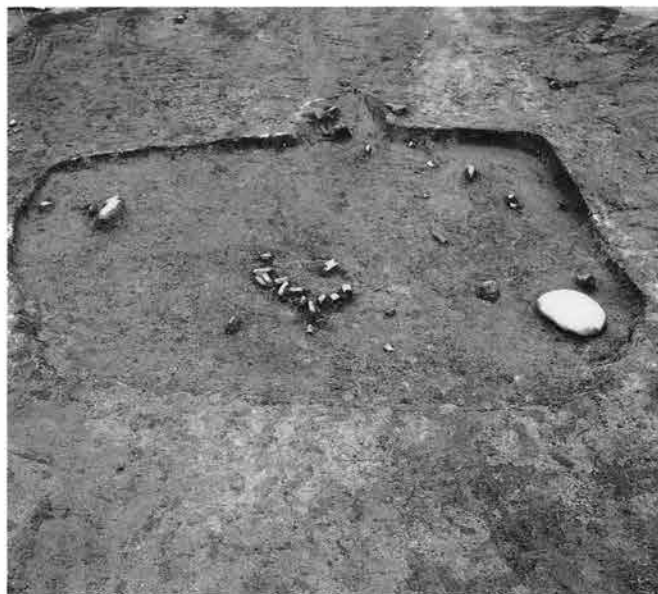
158号住居跡全景（西から）



158号住居跡竈（西から）



158号住居跡掘り方全景（西から）



163号住居跡全景（西から）



163号住居跡竈セクション（南から）



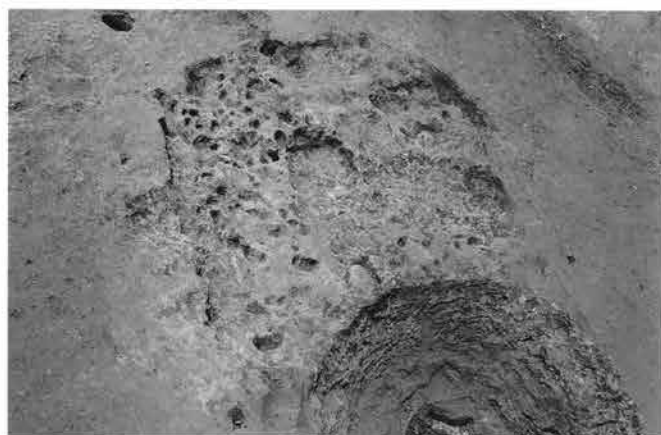
163号住居跡掘り方全景（西から）



184号住居跡全景（西から）



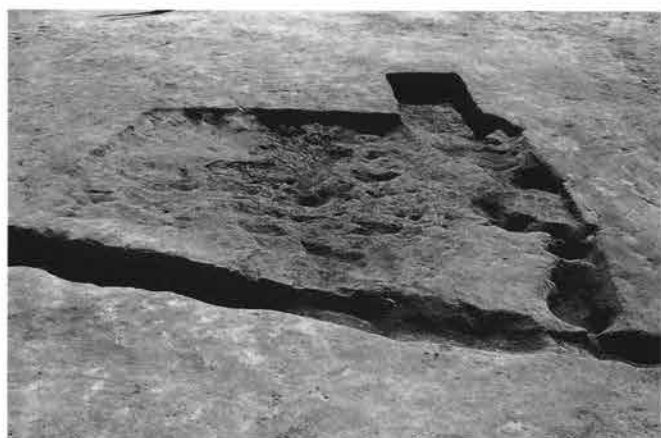
184号住居跡竈（西から）



184号住居跡掘り方全景（北から）



203号住居跡全景（西から）



203号住居跡掘り方全景（西から）



209号住居跡（西から）



209号住居跡竈（西から）



209号住居跡掘り方全景（西から）



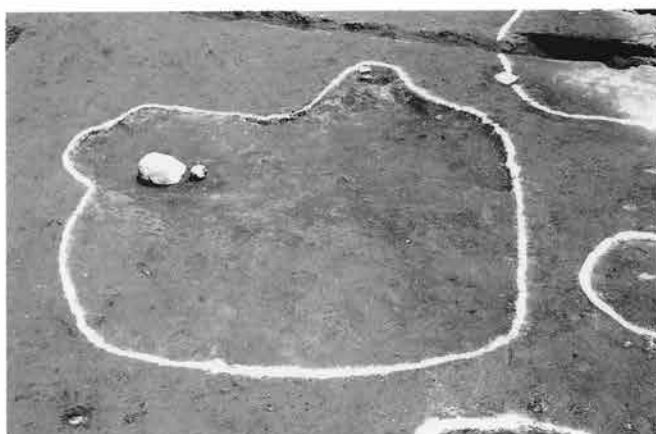
211号住居跡全景（西から）



211号住居跡竈（西から）



211号住居跡掘り方全景（西から）



212号住居跡全景（西から）



212号住居跡竈（西から）



212号住居跡掘り方全景（西から）



216号住居跡全景（西から）



216号住居跡竈（西から）



216号住居跡竈（南から）



216号住居跡掘り方全景（西から）



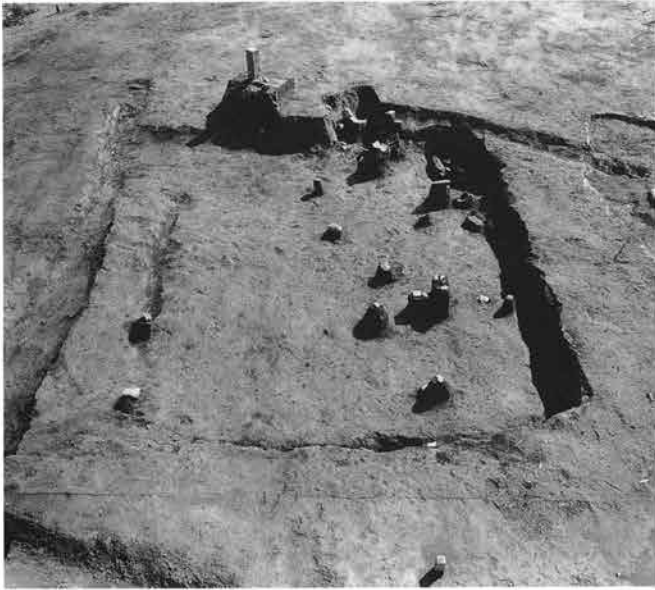
218号住居跡全景（西から）



218号住居跡竈（西から）



218号住居跡掘り方全景（西から）



219号住居跡全景（西から）



219号住居跡竈（西から）



219号住居跡貯蔵穴（西から）



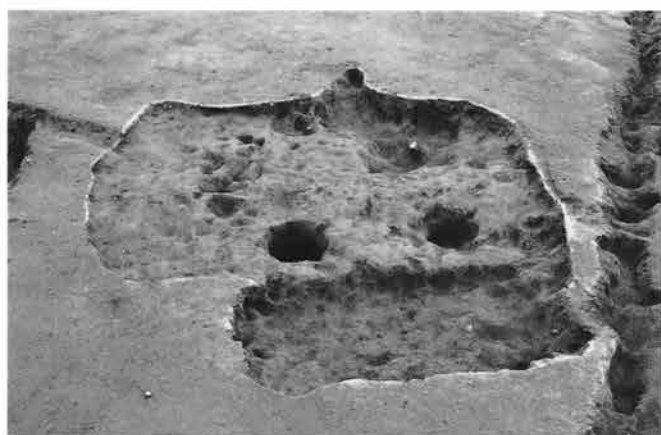
219号住居跡掘り方全景（西から）



240号住居跡全景（西から）



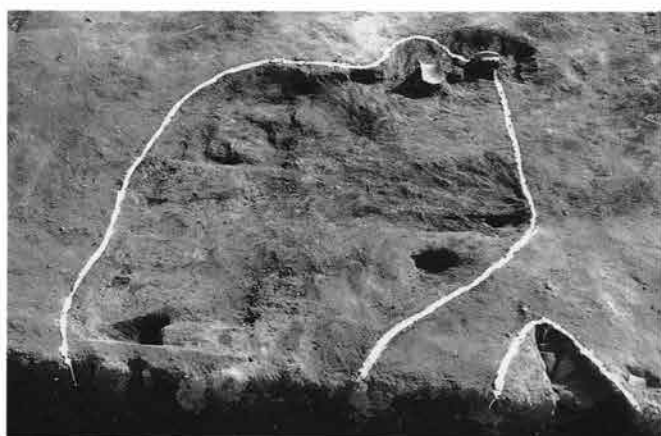
240号住居跡竈（西から）



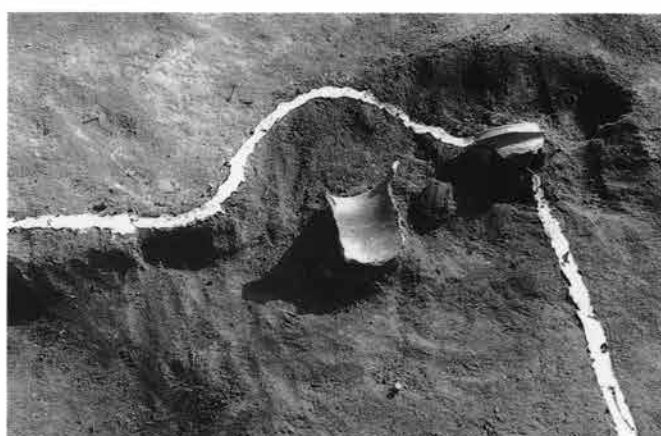
240号住居跡掘り方全景 (西から)



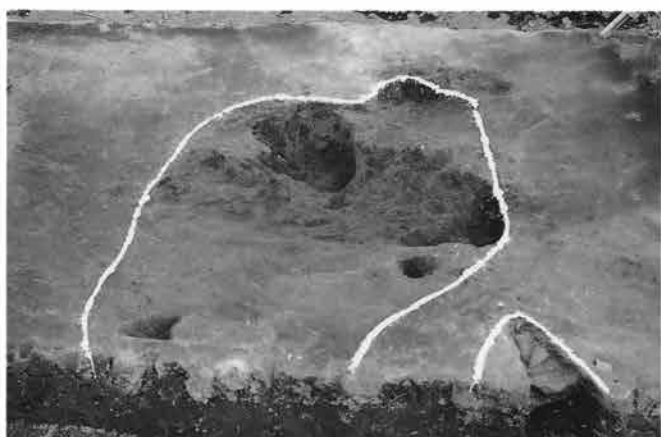
249号住居跡竈 (西から)



257号住居跡全景 (西から)



257号住居跡竈 (西から)



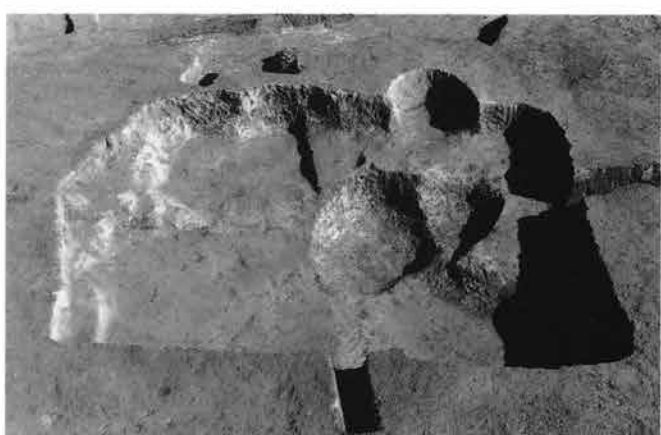
257号住居跡掘り方全景 (西から)



287号住居跡全景 (西から)



287号住居跡竈セクション (西から)



287号住居跡掘り方全景 (西から)



288号住居跡全景（西から）



288号住居跡竈（西から）



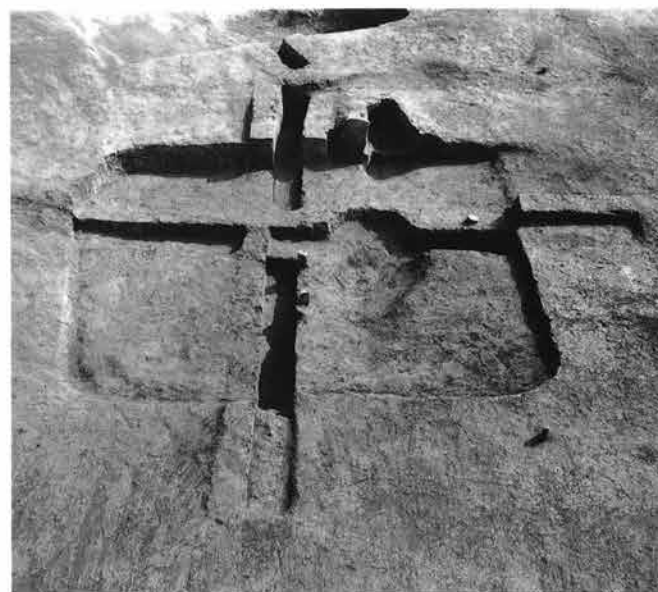
289号住居跡全景（西から）



289号住居跡竈セクション（南から）



289号住居跡竈（西から）



289号住居跡掘り方全景（西から）



290号住居跡全景（西から）



290号住居跡竈（西から）



290号住居跡竈（上から）



290号住居跡竈（上から）



290号住居跡竈セクション（西から）



292号住居跡全景（西から）



292号住居跡遺物出土状況（南から）



292号住居跡竈（西から）



294号住居跡全景（西から）



294号住居跡竈（西から）



294号住居跡掘り方全景（西から）



296号住居跡全景 (西から)



296号住居跡竈 (西から)



296号住居跡掘り方全景 (西から)



297号住居跡全景 (西から)



297号住居跡掘り方全景 (西から)



298号住居跡周辺遺構重複状況（西から）



298号住居跡全景（西から）



298号住居跡竈（西から）



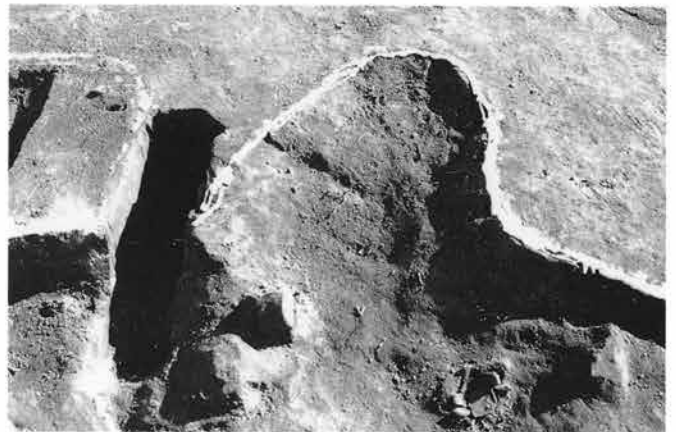
318号住居跡全景（西から）



318号住居跡竈（西から）



320号住居跡全景（西から）



320号住居跡竈（西から）



320号住居跡掘り方全景（西から）



324号住居跡全景（西から）



324号住居跡掘り方全景（西から）



334号住居跡全景（西から）



334号住居跡竈（西から）



334号住居跡掘り方全景（西から）



337号住居跡全景（西から）



337号住居跡竈（西から）



337号住居跡掘り方全景（西から）



339号住居跡全景（西から）



339号住居跡竈（西から）



339号住居跡掘り方全景（西から）



340号住居跡全景（西から）



340号住居跡竈（西から）



340号住居跡掘り方全景（西から）



343号住居跡竈（西から）



353号住居跡全景（西から）



353号住居跡竈（西から）



353号住居跡掘り方セクション（西から）



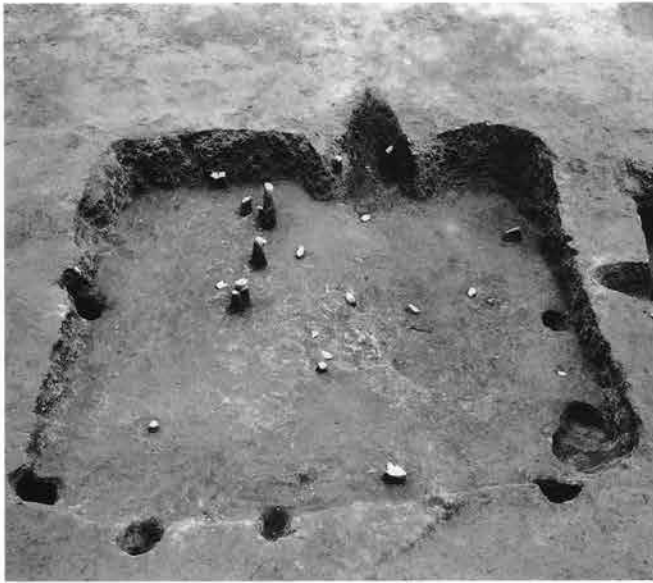
354号住居跡全景（南から）



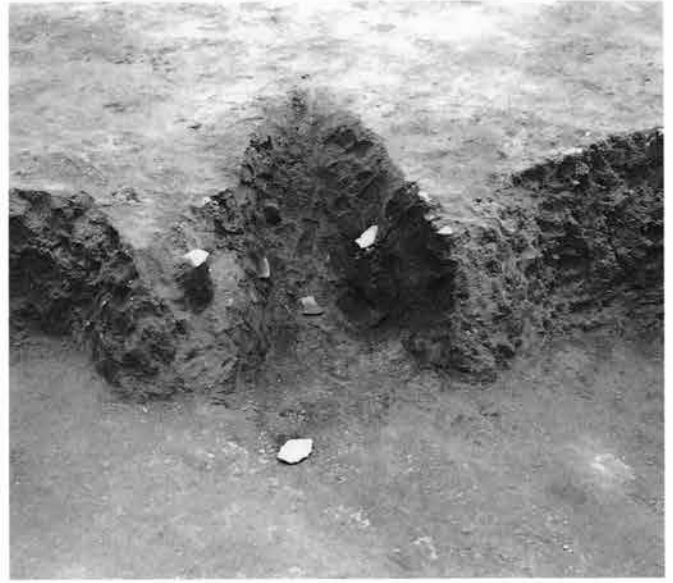
354号住居跡竈（南から）



354号住居跡掘り方全景（南から）



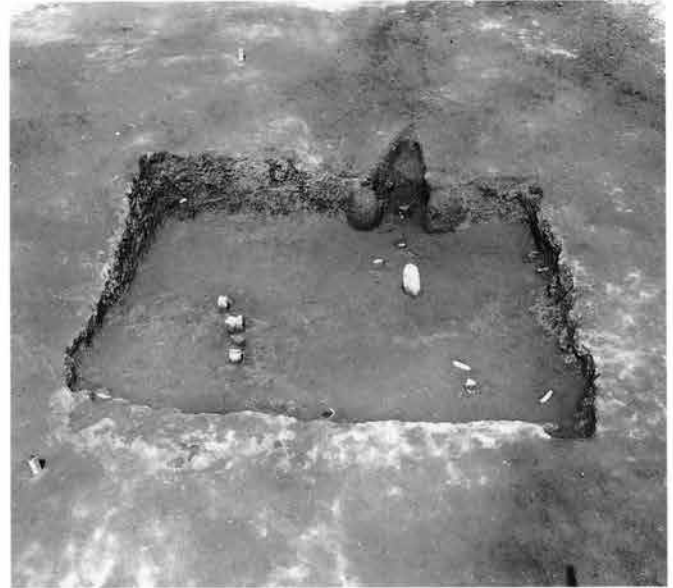
355号住居跡全景（西から）



355号住居跡竈（西から）



355号住居跡掘り方全景（西から）



356号住居跡全景（西から）



356号住居跡竈（西から）



356号住居跡掘り方全景（西から）



357号住居跡全景（西から）



357号住居跡竈（西から）



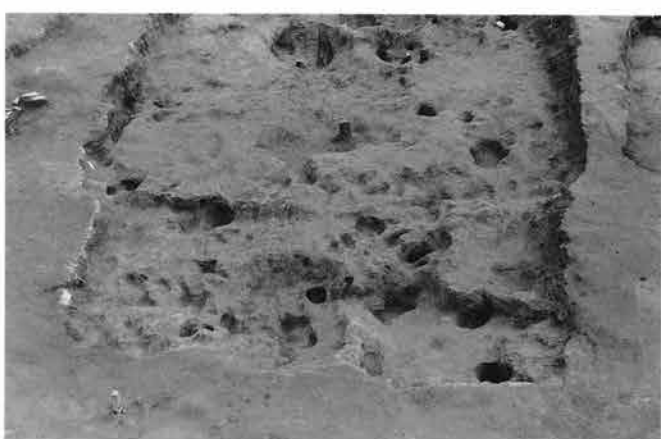
357号住居跡掘り方全景（西から）



358号住居跡全景（西から）



358号住居跡竈（西から）



358号住居跡掘り方全景（西から）



364号住居跡全景（西から）



364号住居跡遺物出土状況（北から）



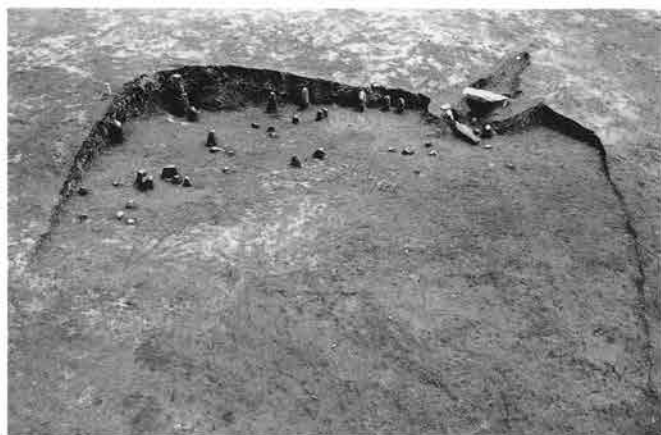
364号住居跡遺物出土状況（西から）



364号住居跡竈（西から）



364号住居跡掘り方全景（西から）



367号住居跡全景（西から）



367号住居跡竈（西から）



367号住居跡竈掘り方（西から）



372号住居跡全景（西から）



372号住居跡竈（西から）



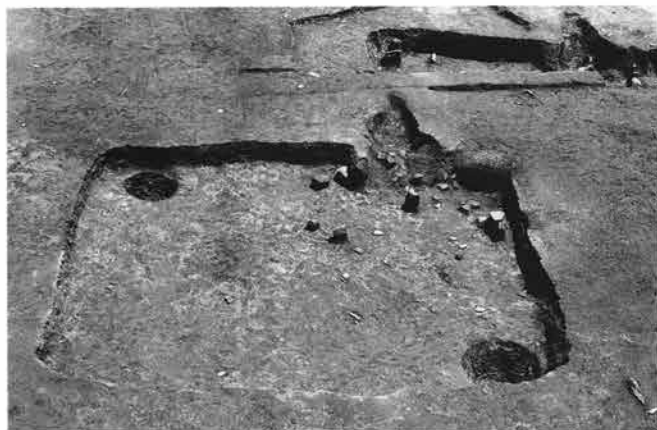
372号住居跡遺物出土状況（南から）



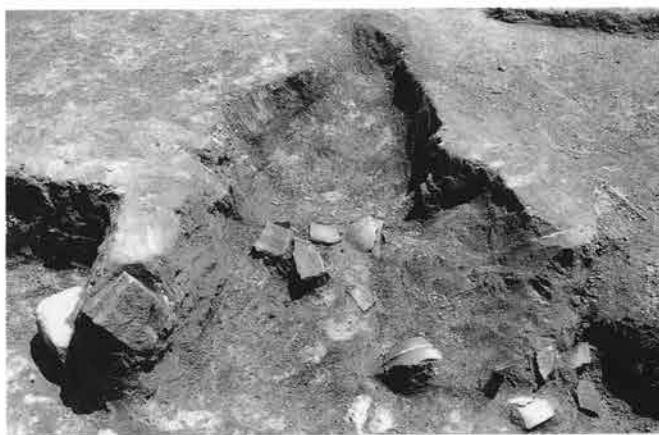
372号住居跡竈セクション（西から）



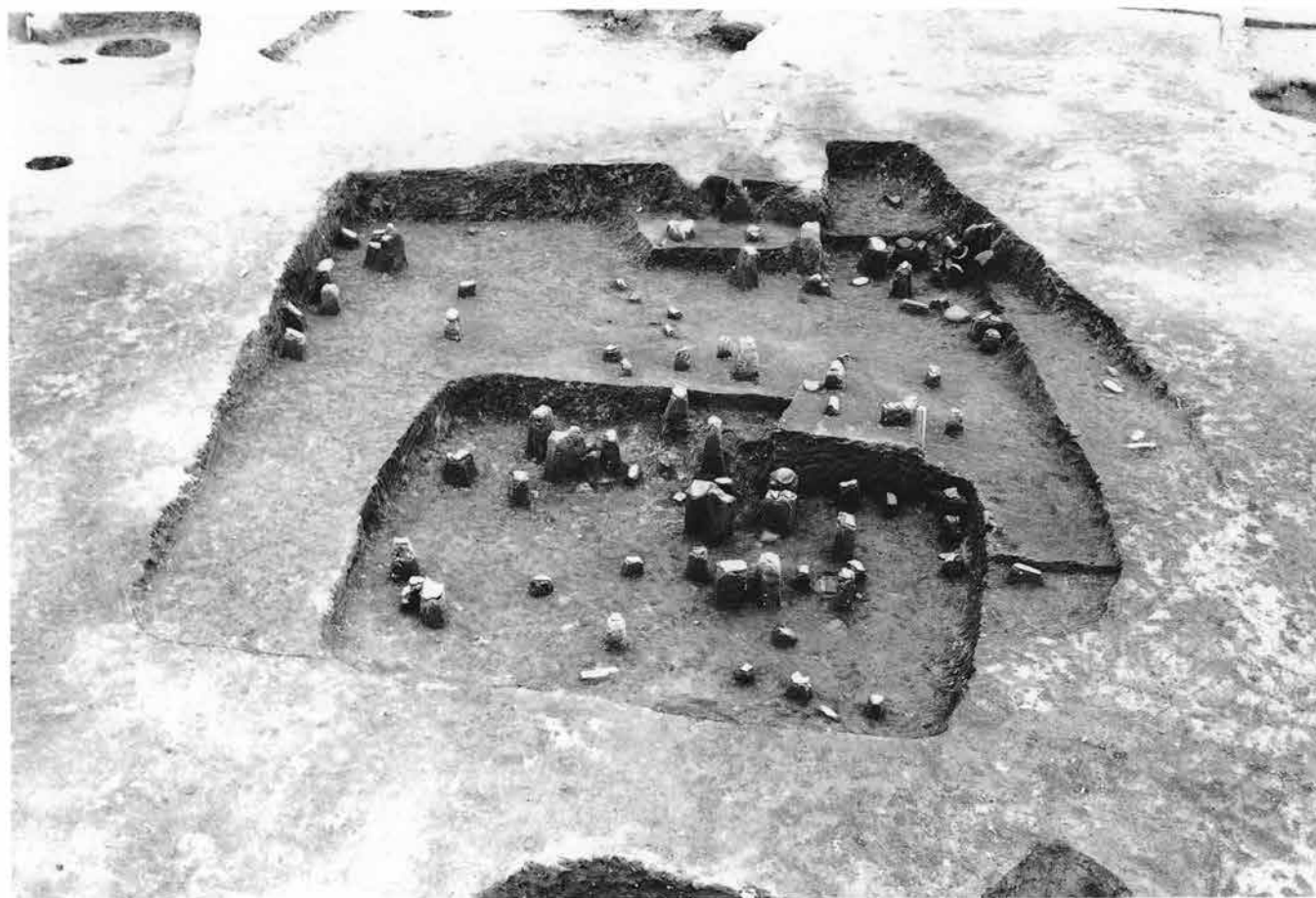
372号住居跡掘り方全景（西から）



374号住居跡全景（西から）



374号住居跡竈（西から）



377号住居跡全景（381・385号住居跡と重複、西から）



377号住居跡竈（西から）



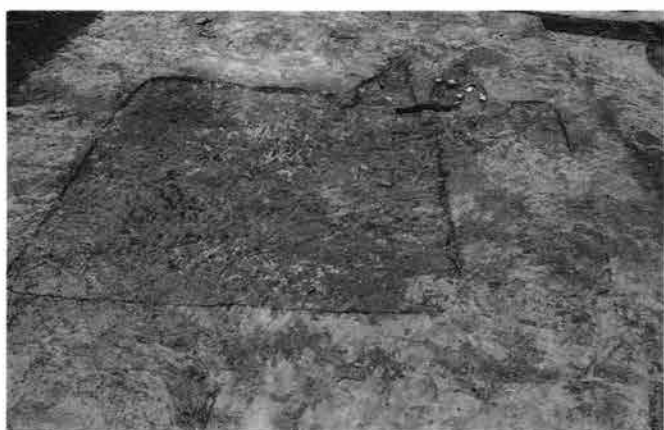
377号住居跡掘り方全景（西から）



379号住居跡全景（西から）



379号住居跡竈（西から）



383・384号住居跡全景（西から）



383・384号住居跡竈（西から）



386号住居跡全景（西から）



386号住居跡遺物出土状況（北から）



386号住居跡竈（西から）



386号住居跡竈掘り方（西から）



391号住居跡全景（西から）



391号住居跡竈（西から）



391号住居跡掘り方全景（西から）



400号住居跡全景（西から）



400号住居跡掘り方全景（西から）



402号住居跡竈（西から）



406号住居跡全景（西から）



406号住居跡竈（西から）



406号住居跡掘り方全景（西から）



408号住居跡竈（西から）



408号住居跡掘り方全景（西から）



410号住居跡竈（西から）



410号住居跡竈セクション（西から）



410号住居跡全景（西から）



410号住居跡竈掘り方（西から）



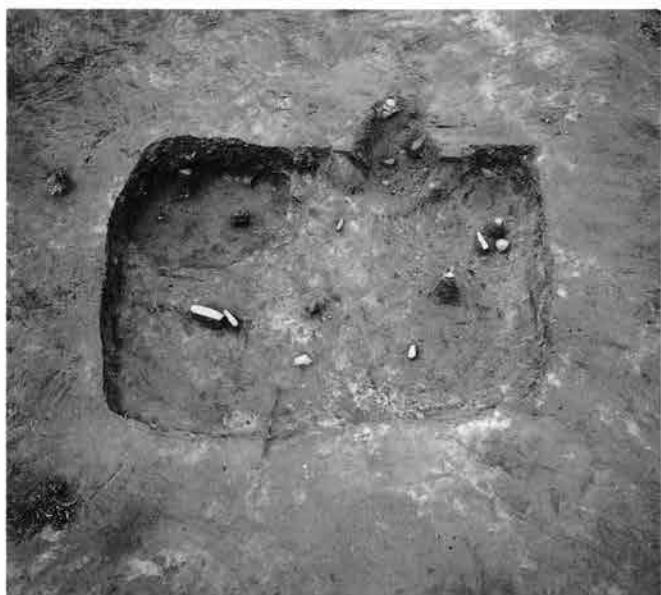
410号住居跡掘り方全景（西から）



415号住居跡全景（西から）



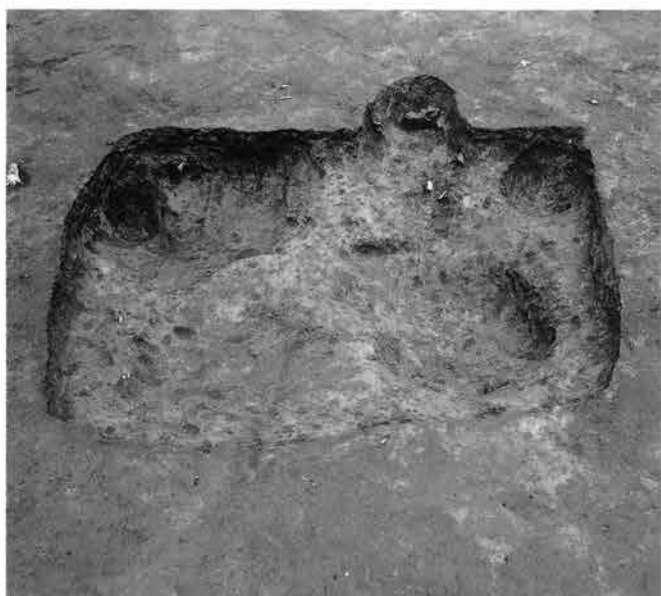
415号住居跡竈（西から）



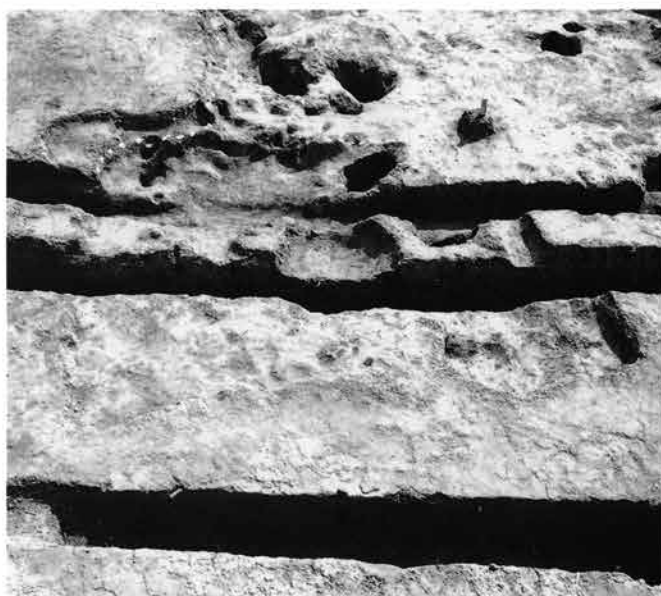
418号住居跡全景（西から）



418号住居跡竈（西から）



418号住居跡掘り方全景（西から）



421号住居跡掘り方全景（西から）



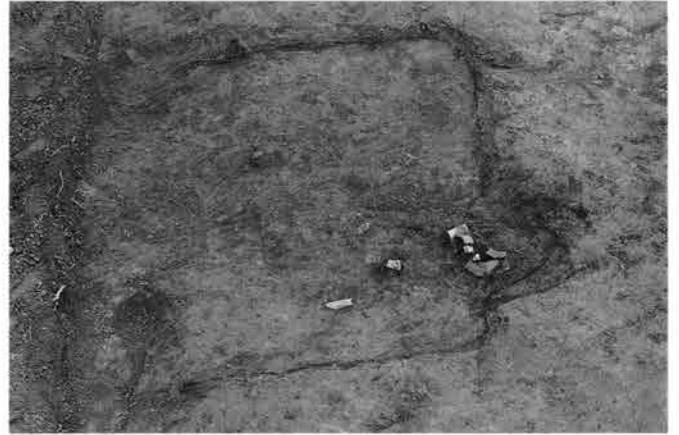
424号住居跡全景（西から）



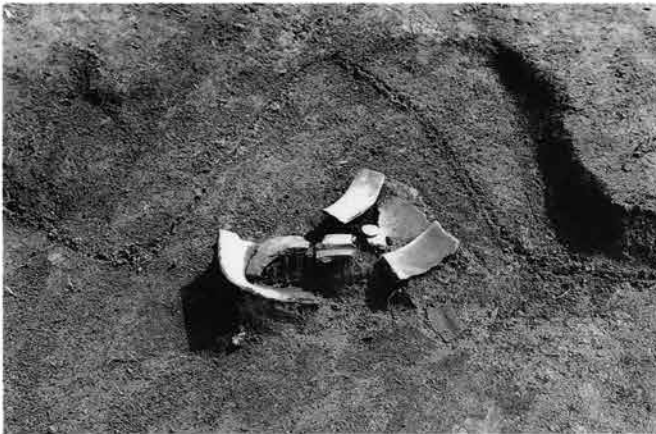
424号住居跡竈（西から）



425号住居跡掘り方全景（西から）



426号住居跡全景（南から）



426号住居跡竈（西から）



426号住居跡掘り方全景（南から）



434号住居跡全景（西から）



434号住居跡竈（西から）



434号住居跡竈掘り方（西から）



709号住居跡竈（西から）







12住-12



16住-3



12住-5



16住-1



16住-2



16住-5



16住-4



16住-6



21住-3



23住-1



23住-2



85住-4



99住-1



99住-7



85住-3



99住-9



99住-6





126住-1



126住-2



130住-6



130住-8



130住-15



130住-11



130住-26



130住-1



130住-23



130住-12



130住-21



130住-2



130住-29



130住-16



130住-33



130住-10



130住-27



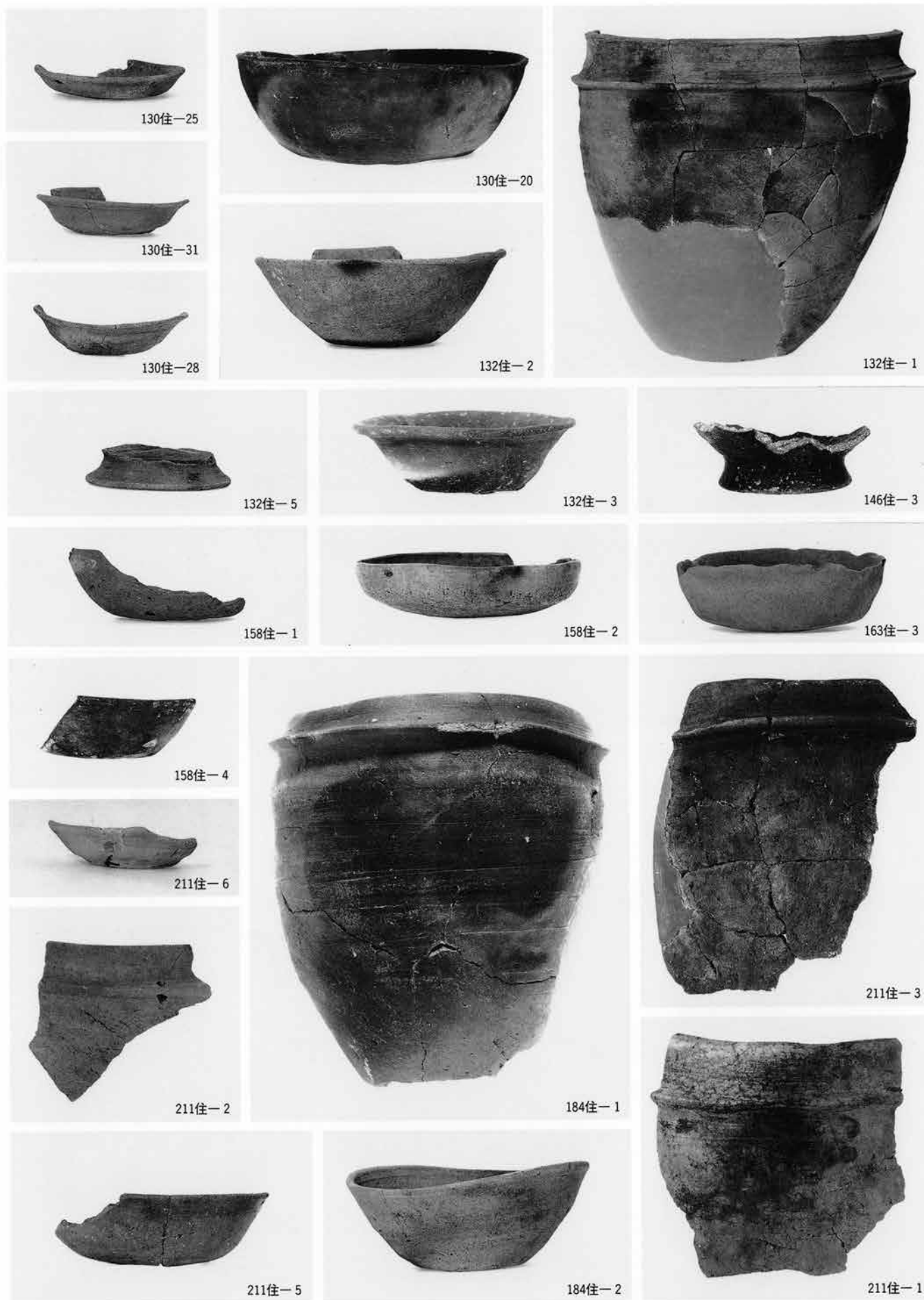
130住-13



130住-14



130住-19





216住-2



216住-10



216住-8



216住-11



216住-12



216住-6



216住-13



216住-3



218住-3



216住-4



218住-6



218住-5



218住-7



218住-1





290住-2



292住-1



290住-4



290住-3



293住-2



293住-3



293住-6



293住-5



293住-11



294住-4



294住-1



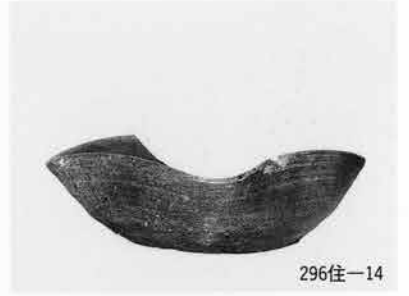
293住-10



294住-7



294住-3









357住-1



357住-12



357住-9



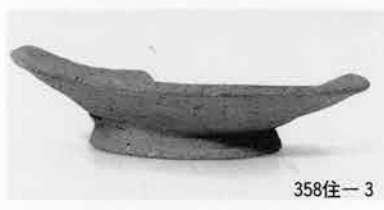
358住-5



357住-11



358住-2



358住-3



357住-17



358住-6



364住-11



364住-6



364住-7



364住-8



364住-1



367住-1



364住-4



364住-12



372住-6



372住-8



372住-2



372住-5



372住-7



374住-1



377住-1



374住-3



377住-14



377住-4



377住-17



377住-2



386住-9



379住-4



377住-3



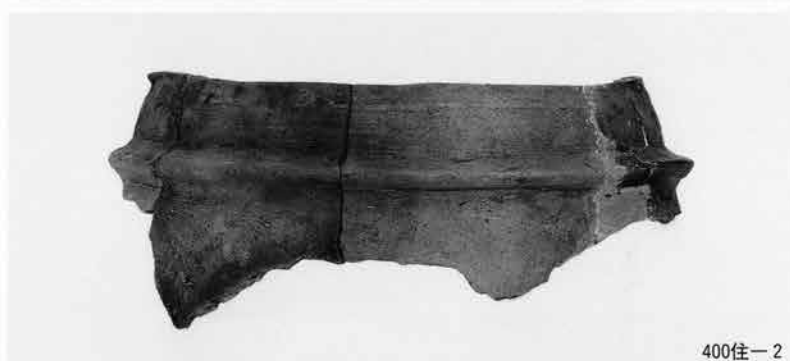
386住-4



386住-1



391住-1



400住-2



386住-6



402住-1



403住-1



406住-1



406住-9



406住-8



406住-7



406住-6



406住-2



407住-5





407住-2



407住-3



407住-1



407住-4



408住-2



410住-1



410住-3



410住-10



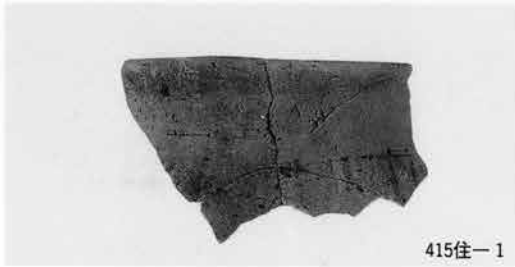
410住-11



410住-9



410住-8



415住-1



415住-3



418住-5



418住-1



421住-3



418住-4



421住-1



421住-9



421住-7



424住-1



424住-2



421住-8



424住-4



424住-9



421住-2



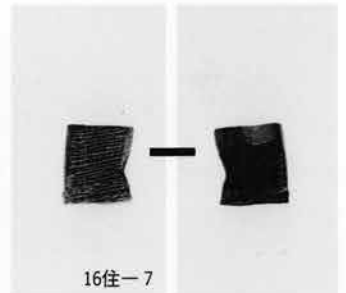
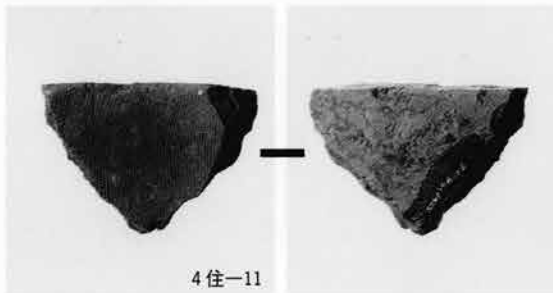
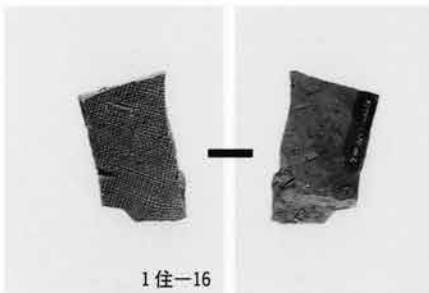
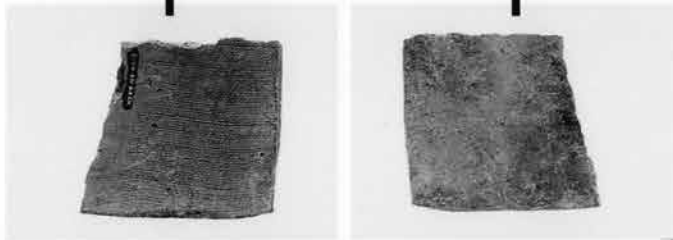
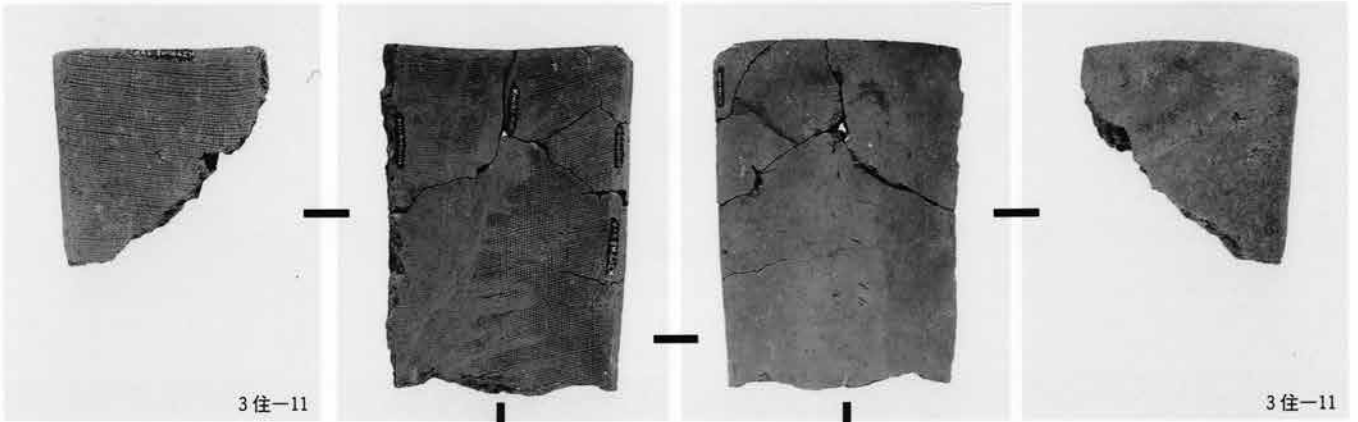
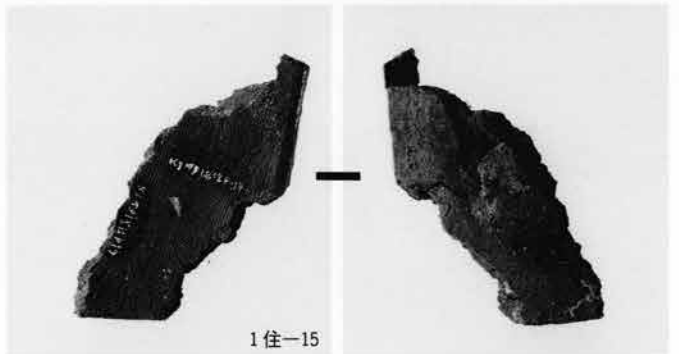
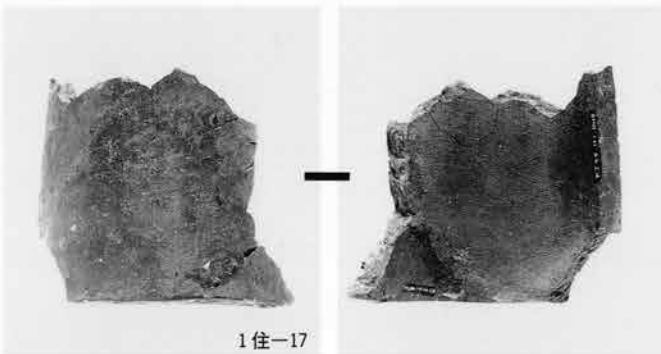
434住-1

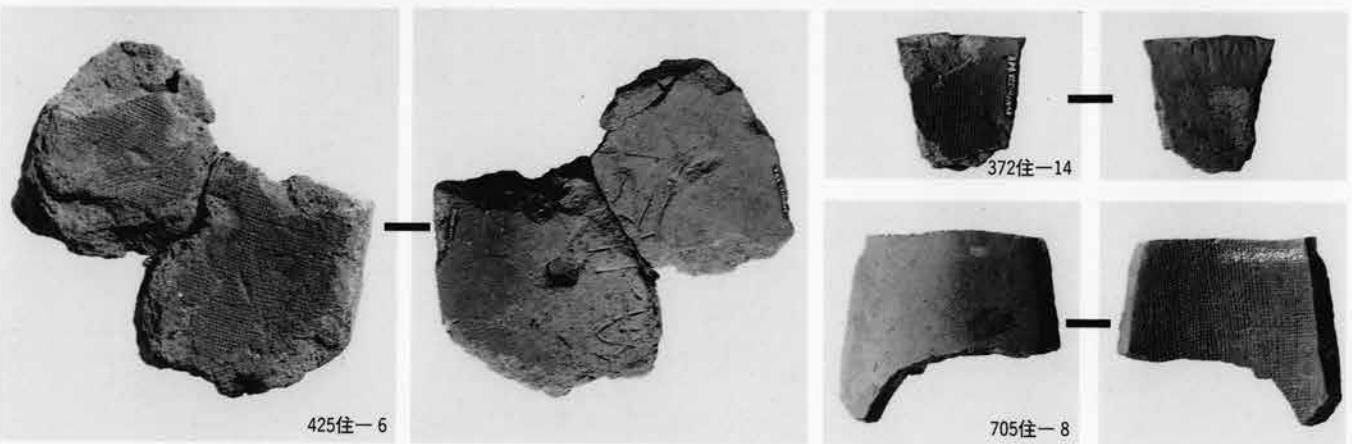
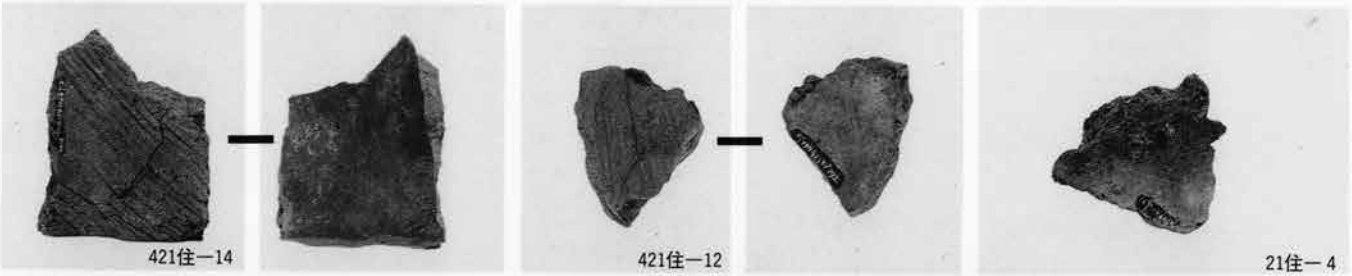
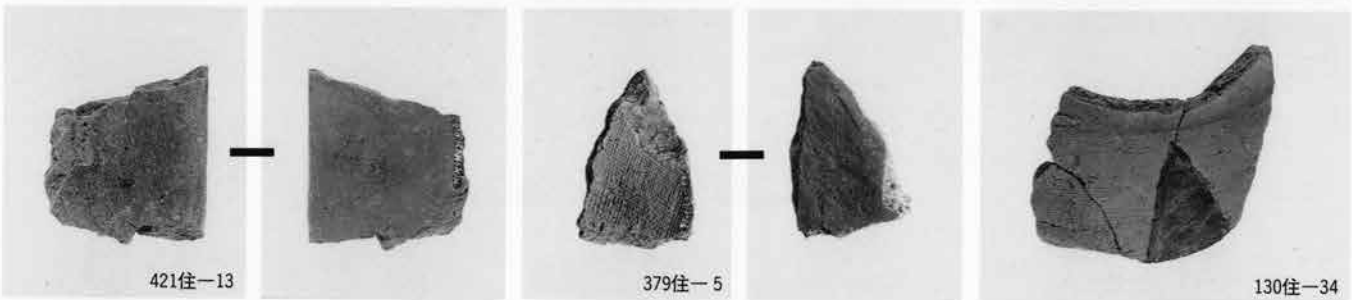
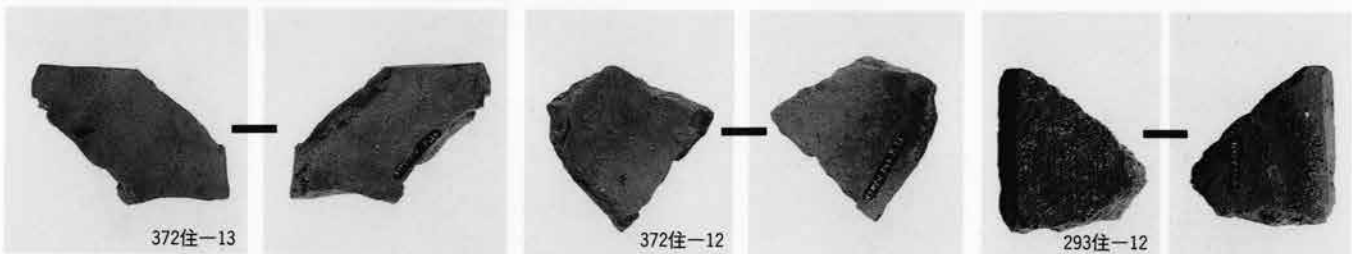
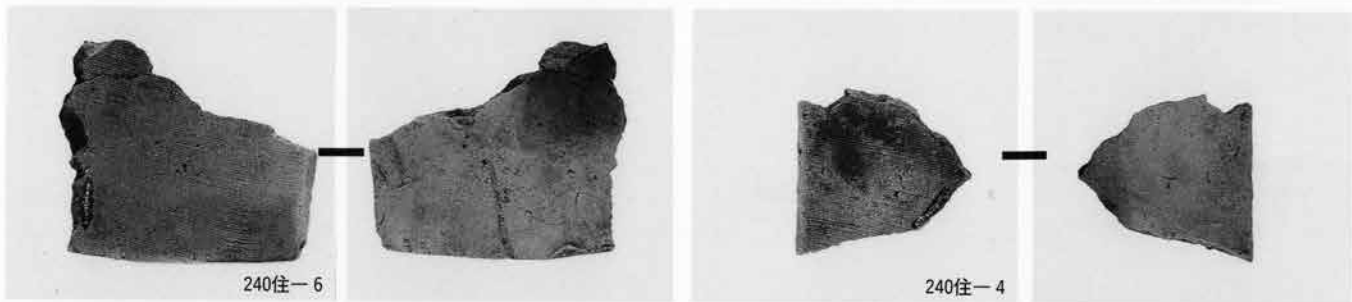
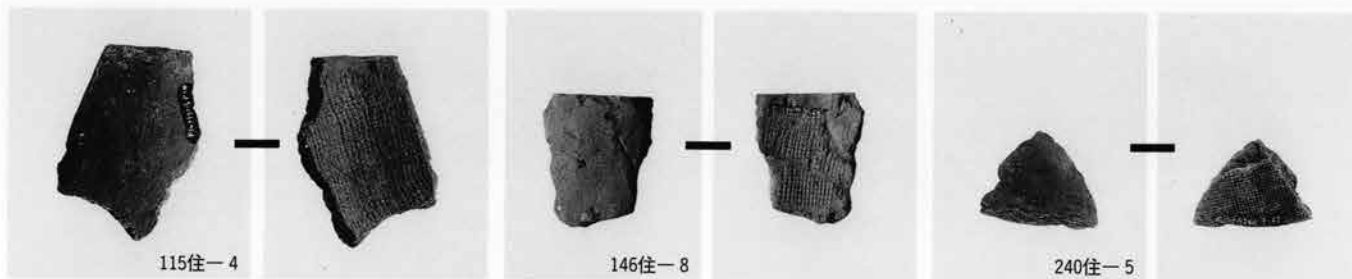


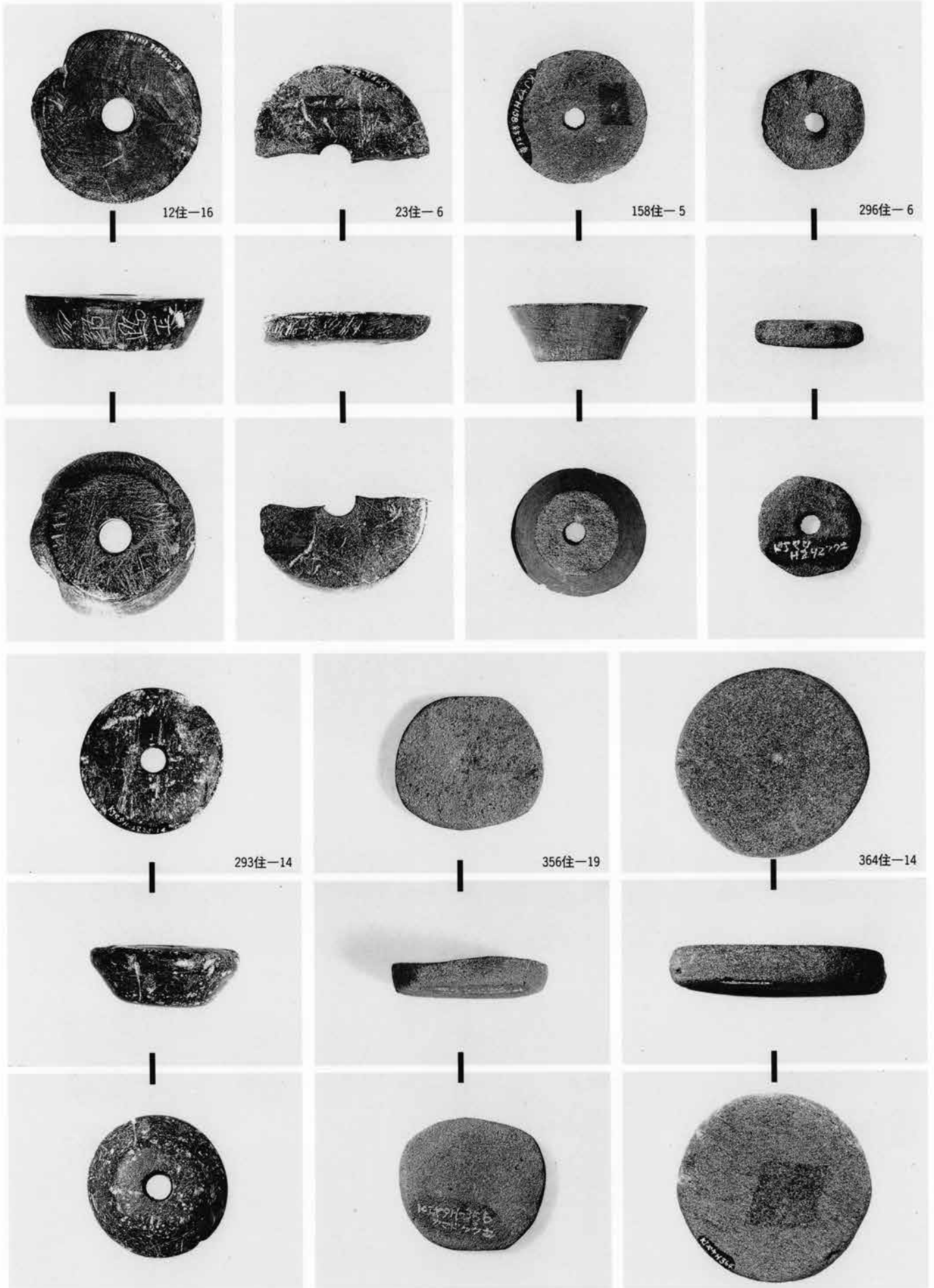
424住-11



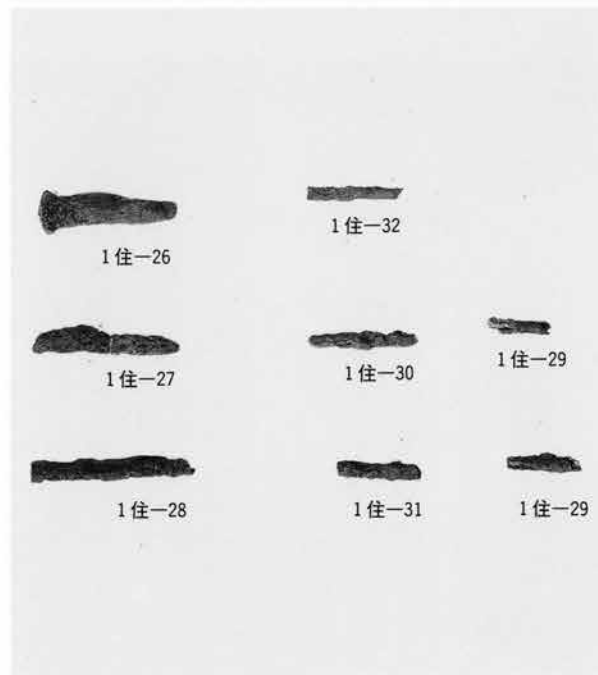
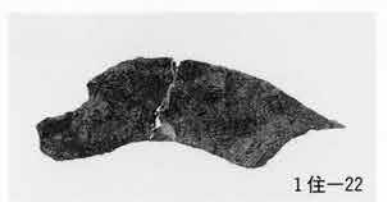
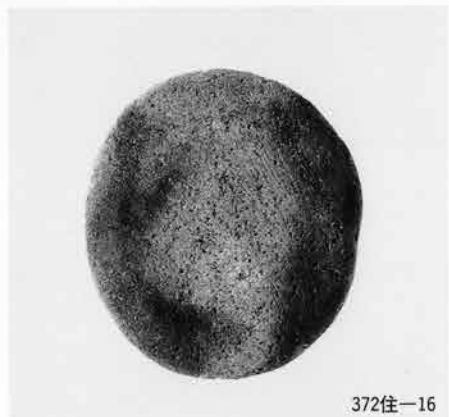
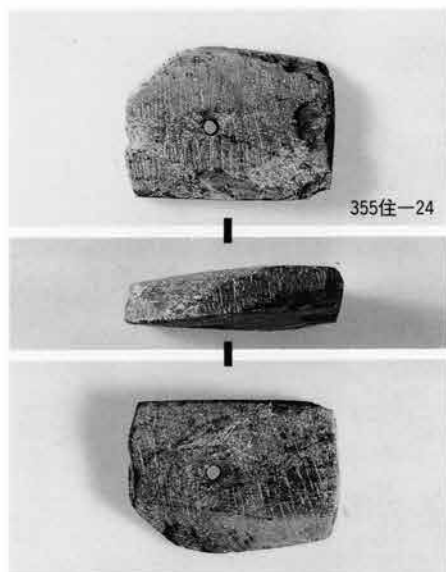
425住-5

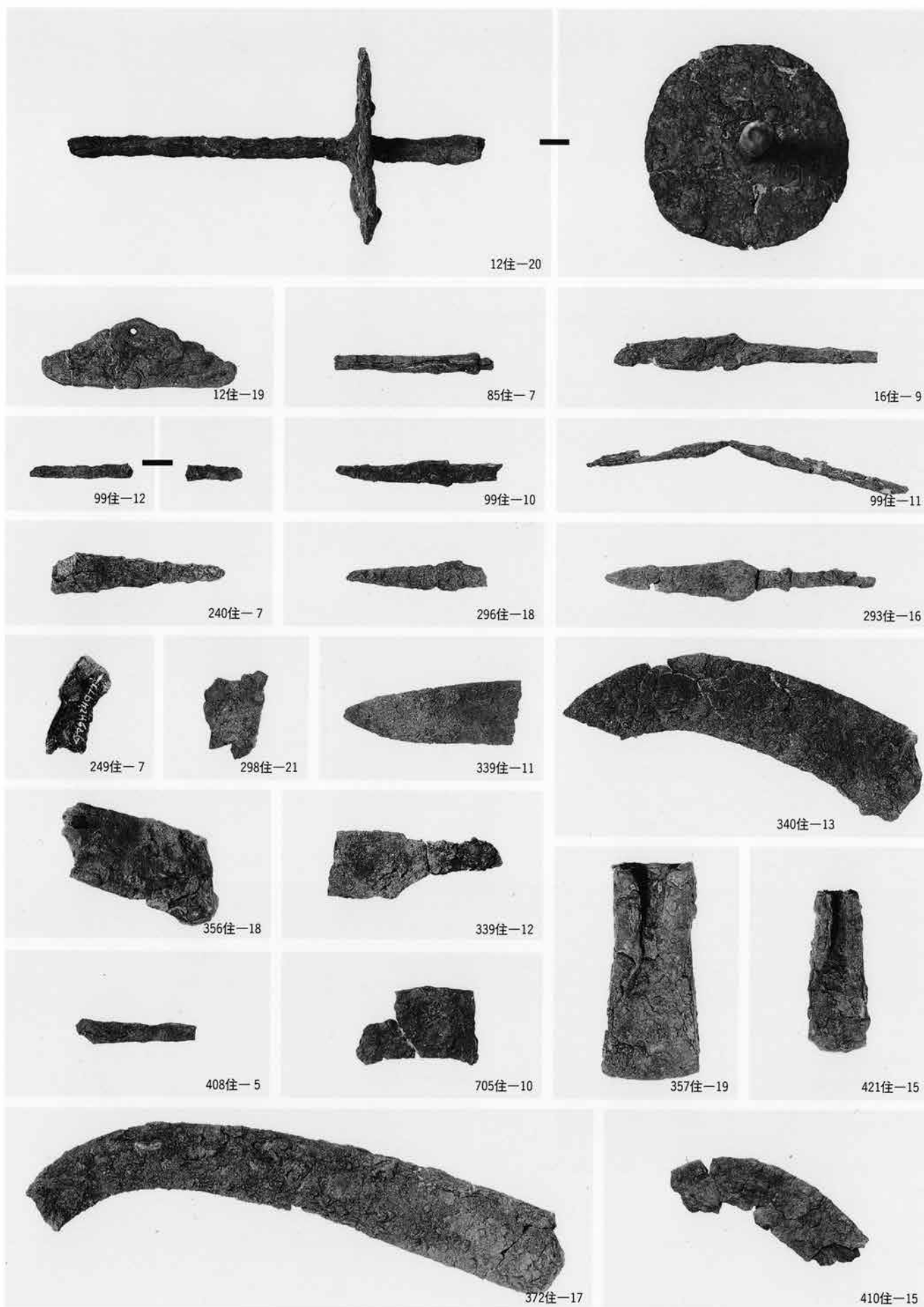














12住-16



4住-9



1住-17



418住-4



425住-6



助群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第115集

矢田遺跡Ⅱ

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第6集

平成3年3月15日 印刷

平成3年3月20日 発行

編集・発行／助群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



矢田遺跡遺構分布図(1/1000)平成2年12月末現在